

四国横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

第四十五冊

天王谷遺跡

2003. 3

香 川 県 教 育 委 員 会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日 本 道 路 公 団

四国横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

第四十五冊

天王谷遺跡

2003. 3

香 川 県 教 育 委 員 会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日 本 道 路 公 団



遺跡出土の土師器



遺跡出土の瓦

序 文

香川県教育委員会では四国横断自動車道や高松東道路の建設、高松駅付近の再開発など大規模開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査事業および出土した文化財の整理、研究業務を財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託して実施いたしております。

四国横断自動車道建設事業（津田～引田）につきましても平成8年度から埋蔵文化財の発掘調査を、また平成11年度からは発掘調査と並行して出土品の整理業務を行っております。

このたび、「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第四十五冊」として刊行いたしますのは大川郡引田町に所在する天王谷遺跡についてであります。天王谷遺跡の調査では中世全般に及ぶ時期の遺構、遺物が確認されております。中でも室町時代初期の瓦窯2基とこれに関連すると考えられる掘立柱建物が見つかったことはこの時期の瓦生産と集落の関係を考える上で興味深い資料となりました。

本報告書が香川県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告に至るまでの間、日本道路公団及び関係諸機関並びに地元関係者各位には多大なご援助とご協力をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成15年3月

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

所長 小原克己

例 言

1. 本報告書は四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第四十五冊で、香川県大川郡引田町引田に所在する天王谷遺跡（てんのうだにいせき）の報告を収録した。
2. 発掘調査は香川県教育委員会が日本道路公団から委託され、香川県教育委員会が調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
3. 発掘調査の期間及び担当は以下のとおりである。

試掘調査	期間	平成10年10月12日
	担当	塩崎誠司（香川県教育委員会）
本調査	期間	平成11年1月22日～3月24日、11年7月1日～8月31日
	担当	溝渕大輔、長井博志、多田 歩（財団法人香川県埋蔵文化財調査センター）
4. 調査にあたって、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）
香川県土木部横断自動車道対策総室、同長尾土木事務所横断道対策課、引田町横断道対策室、引田町教育委員会、引田町歴史民俗資料館、地元対策協議会、地元自治会
5. 報告書の作成にあたっては下記の方々のご教示を得た。記して謝意を表したい。
奈良文化財研究所 山崎信二、株式会社瓦宇工業所 小林章男、吹田市立博物館 藤原学、財団法人高知県文化財埋蔵文化財センター 松村信博、国分寺町教育委員会 松本忠幸
6. 本報告書の作成は財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。
本報告書の執筆・編集は長井博志が担当した。
7. 本報告書で用いる方位の北は、国土座標系第IV系の北であり、標高はT. P. を基準としている。
また、遺構は下記の略号により表示している。

SH…竪穴住居	SB…掘立柱建物	SE…井戸	SF…窯
ST…土壙墓	SK…土坑	SD…溝状遺構	SR…自然流路
SX…不明遺構	SP…柱穴		
8. 石器実測図中、現代の欠損は濃く黒で潰している。
9. 挿図の一部に国土地理院地形図 三本松及び引田（1/25,000）を使用した。

10. 本遺跡の報告にあたっては下記の機関に分析を委託した。

胎土分析 株式会社京都フィッション・トラック 檀原徹氏

11. 遺構断面図の水平線上の数値は、水平線の標高値（単位m）である。

12. 土器観察表の中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖 1992年度版』を使用して表す。また、残存率は遺物の図下部分に占める割合であり、完形品に対する割合ではない。

目 次

序文

例言

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査にいたる経過	1
第2節 調査の経過と体制	5
1 調査の経過	5
2 発掘調査及び整理作業の体制	5
第2章 立地と環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7
第3節 試掘調査	13
第4節 調査の方法	13
第3章 調査の成果	15
1 土層序	15
2 遺構、遺物	16
I 区の調査	16
(1) 建物	16
(2) 土坑	33
(3) 溝	43
(4) 性格不明遺構	45
(5) 旧河道	48
(6) 柱穴	48
(7) 柱穴出土遺物	49
(8) 遺構外出土遺物	51
II 区の調査	51
(1) 建物	51
(2) 柵列	55
(3) 窯	55
SF01	56
SF02	72
(4) 土坑	91
(5) 溝	136
(6) 旧河道	137

(7) 北西部包含層	148
(8) 北西隅流入土	148
(9) 性格不明遺構	175
(10) 遺構外出土遺物	185
第4章 自然科学的分析	188
第1節 天王谷遺跡出土瓦の胎土分析	188
1 試料	188
2 分析方法	188
2-1 胎土分析	188
2-2 粘土試料の焼成（結）実験	189
2-3 火山ガラスの屈折率測定	189
3 分析結果と考察	190
3-1 土器の胎土分析	190
3-2 粘土試料の焼成（結）実験	191
4 胎土分析に対するコメント	217
第5章 まとめ	
第1節 東讃地域の土師器の変遷	218
1 はじめに	218
2 杯、小皿の形式分類	218
3 資料紹介	219
4 類型の時期比定	225
5 最後に	229
第2節 出土瓦の検討	230
1 瓦の器種と類型	230
2 瓦の属性、遺構内の共伴状況から見た製作期間	232
3 瓦の組み合わせ	234
4 製作時期	234
5 瓦の供給先について	234
第3節 遺構の変遷	235
第4節 瓦の生産形態と集落	240
1 はじめに	240
2 遺跡紹介	240
3 天王谷遺跡における瓦生産形態	245
第5節 瓦製作と工房	251
1 はじめに	251
2 事例紹介	251

3 II区SB01~03の機能	259
遺構番号変更一覧表	263
土器観察表	267~278
軒平瓦観察表	279~281
軒丸瓦観察表	282
平瓦観察表	283~289
丸瓦観察表	290~294
中世布目(平瓦)観察表	295
鬼瓦観察表	295
雁振瓦観察表	295~296
古代平瓦観察表	296
近世軒丸瓦観察表	296~297
近世軒丸瓦観察表	297~298
近世平瓦観察表	298
近世丸瓦観察表	298
石器観察表	299
金属製品観察表	299
写真図版	
報告書抄録	
付図 1枚	

挿図目次

第1章

第1図	四国横断自動車道（津田～引田間）埋蔵文化財包蔵地（遺跡名番号）	2
-----	---------------------------------	---

第2章

第2図	天王谷遺跡 位置図（1/600,000）	9	第4図	天王谷遺跡・川北遺跡 位置図（1/5,000）	11
第3図	天王谷遺跡及び周辺の遺跡 位置図（1/25,000）	10	第5図	遺跡周辺地形分類図	12

第3章

第6図	試掘調査トレンチ位置図（1/2,000）	14	第29図	I区SK08平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4・1/3）	39
第7図	I区南壁土層図（1/60）	17～18	第30図	I区SK10平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4・1/3）	39
第8図	I・II区西壁土層図（1/60）	19～20	第31図	I区SK11平・断面図（1/40）、出土遺物1（1/4）	40
第9図	I区SB01、02平・断面図（1/80）	21	第32図	I区SK11出土遺物2（1/3）	41
第10図	I区SB03平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）	22	第33図	I区SK14平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4・1/3）	42
第11図	I区SB04平・断面図（1/80）	23	第34図	I区SK15平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4・1/3）	42
第12図	I区SB05平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）	24	第35図	I区SD01、02、05、07断面図（1/40）、出土遺物（1/4）	43
第13図	I区SB06平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）	25	第36図	I区SD03断面図（1/40）	44
第14図	I区SB07平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）	26	第37図	I区SD03出土遺物（1/4・1/3）	44
第15図	I区SB08平・断面図（1/80）	27	第38図	I区SD06断面図（1/40）、出土遺物（1/4）	45
第16図	I区SB09平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）	28	第39図	I区SX01平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）	46
第17図	I区SB10平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）	29	第40図	I区SX02平・断面図（1/40）	47
第18図	I区SB12平・断面図（1/80）	29	第41図	I区SR01平・断面図（1/60）	47
第19図	I区SB11平・断面図（1/80）	30	第42図	I区SP128、486平・断面図、出土遺物（1/4）	48
第20図	I区SB13平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4・1/3）	31	第43図	I区柱穴出土遺物1（土器1/4、瓦<81・87>、鉄器<80>1/3、石器<77・93>1/2）	50
第21図	I区SB14平・断面図（1/80）	32	第44図	I区柱穴出土遺物2（土器1/4、瓦<114>1/3）	51
第22図	I区SB15平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）	32	第45図	I区遺構外出土遺物（1/4・1/3）	52
第23図	I区SB16平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）	33	第46図	II区SB01平・断面図（1/80）	53
第24図	I区SB17～20平・断面図（1/80）	34	第47図	II区SB02平・断面図（1/80）	54
第25図	I区SK01、SK03、SK04・SD04、SK05平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）	35	第48図	II区SB03平・断面図（1/80）、出土遺物（1/3）	54
第26図	I区SK02平・断面図（1/40）	36	第49図	II区SB04平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）	55
第27図	I区SK02出土遺物（1/3）	36	第50図	II区SA01平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）	56
第28図	I区SK06、07、09、13平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）	38			

第51図	Ⅱ区SF01、02周辺遺構コンター図(1/100).....	57	第91図	Ⅱ区SK04出土遺物10(1/3).....	105
第52図	Ⅱ区SF01平・断面図及び遺物出土状況平面図(1/20)	59~60	第92図	Ⅱ区SK04出土遺物11(1/3).....	106
第53図	Ⅱ区SF01完掘状況平面図、隔壁立・断面図(1/20)	61	第93図	Ⅱ区SK04出土遺物12(1/3).....	107
第54図	Ⅱ区SF01隔壁被熱状況図(1/20).....	63~64	第94図	Ⅱ区SK04出土遺物13(1/3).....	108
第55図	Ⅱ区SF01出土遺物1(1/4・1/3).....	65	第95図	Ⅱ区SK04出土遺物14(1/3).....	109
第56図	Ⅱ区SF01出土遺物2(1/3).....	66	第96図	Ⅱ区SK04出土遺物15(1/3).....	110
第57図	Ⅱ区SF01出土遺物3(1/3).....	67	第97図	Ⅱ区SK04出土遺物16(1/3).....	111
第58図	Ⅱ区SF01出土遺物4(1/3).....	68	第98図	Ⅱ区SK04出土遺物17(1/3).....	112
第59図	Ⅱ区SF01出土遺物5(1/3).....	69	第99図	Ⅱ区SK04出土遺物18(1/3).....	113
第60図	Ⅱ区SF01出土遺物6(1/3).....	70	第100図	Ⅱ区SK04出土遺物19(1/3).....	114
第61図	Ⅱ区SF01出土遺物7(1/3).....	71	第101図	Ⅱ区SK04出土遺物20(1/3).....	115
第62図	Ⅱ区SF02平・断面図及び隔壁断面図(1/20)	73~74	第102図	Ⅱ区SK04出土遺物21(1/3).....	116
第63図	Ⅱ区SF02遺物出土状況平面図及び床面付近立面図 (1/20).....	76	第103図	Ⅱ区SK04出土遺物22(1/3).....	117
第64図	Ⅱ区SF02出土遺物1(1/4・1/3).....	77	第104図	Ⅱ区SK05、06遺物出土状況平・断面図(1/30)	119
第65図	Ⅱ区SF02出土遺物2(1/3).....	78	第105図	Ⅱ区SK05出土遺物1(1/4・1/3).....	120
第66図	Ⅱ区SF02出土遺物3(1/3).....	79	第106図	Ⅱ区SK05出土遺物2(1/3).....	121
第67図	Ⅱ区SF02出土遺物4(1/3).....	80	第107図	Ⅱ区SK05出土遺物3(1/3).....	122
第68図	Ⅱ区SF02出土遺物5(1/3).....	81	第108図	Ⅱ区SK05出土遺物4(1/3)(272はSK06出土).....	123
第69図	Ⅱ区SF02出土遺物6(1/3).....	82	第109図	Ⅱ区SK05出土遺物5(1/4).....	124
第70図	Ⅱ区SF02出土遺物7(1/3).....	83	第110図	Ⅱ区SK05出土遺物6(1/3).....	125
第71図	Ⅱ区SF02出土遺物8(1/3).....	84	第111図	Ⅱ区SK07石組み検出状況平・断面図(1/30).....	126
第72図	Ⅱ区SF02出土遺物9(1/3).....	85	第112図	Ⅱ区SK08平・断面図(1/20).....	128
第73図	Ⅱ区SF02出土遺物10(1/3).....	86	第113図	Ⅰ・Ⅱ区SK12遺物出土状況平・断面図(1/30).....	129
第74図	Ⅱ区SF02出土遺物11(1/3).....	87	第114図	Ⅰ・Ⅱ区SK12出土遺物1(1/4・1/3).....	130
第75図	Ⅱ区SF02出土遺物12(1/3).....	88	第115図	Ⅰ・Ⅱ区SK12出土遺物2(1/3).....	131
第76図	Ⅱ区SF02出土遺物13(1/3).....	89	第116図	Ⅰ・Ⅱ区SK12出土遺物3(1/3).....	132
第77図	Ⅱ区SF02出土遺物14(1/3).....	90	第117図	Ⅰ・Ⅱ区SK12出土遺物4(1/3).....	133
第78図	Ⅱ区SK01遺物出土状況平・断面図(1/20)、出土遺物 (1/4)、SK03平・断面図(1/20).....	92	第118図	Ⅰ・Ⅱ区SK12出土遺物5(1/3).....	134
第79図	Ⅱ区SK02遺物出土状況平・断面図(1/20).....	93	第119図	Ⅰ・Ⅱ区SK12出土遺物6(1/3).....	135
第80図	Ⅱ区SK02出土遺物(1/4・1/3).....	94	第120図	Ⅰ・Ⅱ区SK12出土遺物7(1/3).....	136
第81図	Ⅱ区SK04遺物出土状況平・断面図(1/40).....	95	第121図	Ⅱ区SD01断面図(1/40).....	136
第82図	Ⅱ区SK04出土遺物1(1/4・1/3).....	96	第122図	Ⅰ・Ⅱ区SR01出土遺物1(1/4).....	138
第83図	Ⅱ区SK04出土遺物2(1/3).....	97	第123図	Ⅰ・Ⅱ区SR01出土遺物2(1/4・1/3).....	139
第84図	Ⅱ区SK04出土遺物3(1/3).....	98	第124図	Ⅰ・Ⅱ区SR01出土遺物3(1/3).....	140
第85図	Ⅱ区SK04出土遺物4(1/3).....	99	第125図	Ⅰ・Ⅱ区SR01出土遺物4(1/3).....	141
第86図	Ⅱ区SK04出土遺物5(1/3).....	100	第126図	Ⅰ・Ⅱ区SR01出土遺物5(1/3).....	142
第87図	Ⅱ区SK04出土遺物6(1/3).....	101	第127図	Ⅰ・Ⅱ区SR01出土遺物6(1/3).....	143
第88図	Ⅱ区SK04出土遺物7(1/3).....	102	第128図	Ⅰ・Ⅱ区SR01出土遺物7(1/3).....	144
第89図	Ⅱ区SK04出土遺物8(1/3).....	103	第129図	Ⅰ・Ⅱ区SR01出土遺物8(1/3).....	145
第90図	Ⅱ区SK04出土遺物9(1/3).....	104	第130図	Ⅰ・Ⅱ区SR01出土遺物9(1/3).....	146
			第131図	Ⅰ・Ⅱ区SR01出土遺物10(1/3).....	147
			第132図	Ⅱ区北西部包含層出土遺物1(1/4・1/3).....	149
			第133図	Ⅱ区北西部包含層出土遺物2(1/3).....	150
			第134図	Ⅱ区北西部包含層出土遺物3(1/3).....	151

第135図	Ⅱ区北西部包含層出土遺物 4 (1/3)……………	152	第154図	Ⅱ区北西隅流入土出土遺物12 (1/3)……………	171
第136図	Ⅱ区北西部包含層出土遺物 5 (1/3)……………	153	第155図	Ⅱ区北西隅流入土出土遺物13 (1/3)……………	172
第137図	Ⅱ区北西部包含層出土遺物 6 (1/3)……………	154	第156図	Ⅱ区北西隅流入土出土遺物14 (1/3)……………	173
第138図	Ⅱ区北西部包含層出土遺物 7 (1/3)……………	155	第157図	Ⅱ区北西隅流入土出土遺物15 (1/3)……………	174
第139図	Ⅱ区北西部包含層出土遺物 8 (1/3)……………	156	第158図	Ⅱ区北西隅流入土出土遺物16 (1/3)……………	175
第140図	Ⅱ区北西部包含層出土遺物 9 (1/3)……………	157	第159図	Ⅱ区SX01平・断面図 (1/40)……………	175
第141図	Ⅱ区北西部包含層出土遺物10 (1/3)……………	158	第160図	Ⅱ区SX02平・断面図 (1/60)、SX02内SP01遺物出土状況平・断面図 (1/10)、SX02内SD01土層断面図 (1/20)……………	177
第142図	Ⅱ区北西部包含層出土遺物11 (1/3)……………	159	第161図	Ⅱ区SX02瓦溜まり検出状況平・立面図 (1/30)……………	178
第143図	Ⅱ区北西隅流入土出土遺物 1 (1/4・1/3)……………	160	第162図	Ⅱ区SX02出土遺物 1 (1/4)……………	179
第144図	Ⅱ区北西隅流入土出土遺物 2 (1/3)……………	161	第163図	Ⅱ区SX02出土遺物 2 (1/4)……………	180
第145図	Ⅱ区北西隅流入土出土遺物 3 (1/3)……………	162	第164図	Ⅱ区SX02出土遺物 3 (1/4)……………	181
第146図	Ⅱ区北西隅流入土出土遺物 4 (1/3)……………	163	第165図	Ⅱ区SX02出土遺物 4 (1/4)……………	182
第147図	Ⅱ区北西隅流入土出土遺物 5 (1/3)……………	164	第166図	Ⅱ区SX02出土遺物 5 (1/4・1/3)……………	183
第148図	Ⅱ区北西隅流入土出土遺物 6 (1/3)……………	165	第167図	Ⅱ区SX02出土遺物 6 (1/3・1/2)……………	184
第149図	Ⅱ区北西隅流入土出土遺物 7 (1/3)……………	166	第168図	Ⅱ区SX03断面図 (1/40)……………	185
第150図	Ⅱ区北西隅流入土出土遺物 8 (1/3)……………	167	第169図	Ⅱ区遺構外出土遺物 (1/4・1/2・1/3)……………	186
第151図	Ⅱ区北西隅流入土出土遺物 9 (1/3)……………	168			
第152図	Ⅱ区北西隅流入土出土遺物10 (1/3)……………	169			
第153図	Ⅱ区北西隅流入土出土遺物11 (1/3)……………	170			

第4章 胎土分析遺物

第170図	胎土分析遺物 1 (1/6)……………	194	第172図	胎土分析遺物 3 (1/6)……………	196
第171図	胎土分析遺物 2 (1/6)……………	195			

第5章 まとめ

第173図	土師器杯・小皿分類図 (1/4)……………	220	第185図	丸山窯跡 I区SF01平・断面図 (1/30)、I区SX01出土遺物 (1/4)……………	243
第174図	鹿庭遺跡 B区SX01出土遺物 (引田町) (1/4)……………	220	第186図	三谷瓦窯平・断面図……………	244
第175図	成重・善門池西・谷遺跡 出土遺物 (白鳥町〔1〕) (1/4)……………	222	第187図	大水上神社瓦窯跡平・断面図、出土遺物 (1/4)……………	246
第176図	善門池西遺跡 Ⅷ区SX01出土遺物 (白鳥町〔2〕) (1/4)……………	223	第188図	法蓮寺窯跡平・断面図 (1/50)、出土遺物 (1/5)……………	247
第177図	坪井・三殿出口・金毘羅山遺跡 出土遺物 (大内町〔1〕) (1/4)……………	224	第189図	神宮寺遺跡 中央部 (A~D、F、J、L、M区) 遺構配置図 (1/900)……………	249
第178図	金毘羅山遺跡 出土遺物 (大内町〔2〕) (1/4)……………	226	第190図	SOI001平・断面図 (1/30)、出土遺物、物原出土遺物 (1/4)……………	249
第179図	金毘羅山遺跡 Ⅱ区SX11出土遺物 (大内町〔3〕) (1/4)……………	227	第191図	南ノ庄田瓦窯跡遺構配置図 (1/200)、瓦窯平・立面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)……………	252
第180図	古城・神宮寺・前田東・中村遺跡 出土遺物 (1/4)……………	228	第192図	小部遺跡 瓦器椀窯、周辺遺構図 (1/400)……………	253
第181図	天王谷遺跡遺構変遷図 (1/400)……………	237~238	第193図	小部遺跡 瓦器椀窯平・断面図 (1/30)、出土遺物 (1/6)……………	253
第182図	片山池瓦窯跡平・断面図 (1/40)……………	241	第194図	平井遺跡 遺構配置図 (1/1250)、瓦器椀窯平・断面図 (1/30)、出土遺物 (1/6)……………	255
第183図	西村遺跡 山原地区遺構配置図 (1/900)……………	242	第195図	錦織遺跡 土師器窯、周辺遺構図 (1/300)……………	256
第184図	西村遺跡 第3号窯跡平・断面図 (1/50)、出土遺物 (1/6、1/4)……………	242	第196図	錦織遺跡 土師器窯 (1/30)、出土遺物 (1/6)……………	256

第197図	国分寺楠井遺跡 遺構配置図 (1/800)、1~3号窯跡 平・断面図 (1/50)、出土遺物 (1/8).....	258
第198図	内ヶ磯遺跡 炭窯付近コンター図 (1/300).....	261

第199図	内ヶ磯遺跡 炭窯平・立面図 1 (1/80).....	261
第200図	内ヶ磯遺跡 炭窯平・立面図 2 (1/80).....	262

表 目 次

第1表	四国横断自動車道 (津田~引田) 建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧①.....	3	第21表	火山ガラスの屈折率測定結果一覧表 (2).....	213
第2表	四国横断自動車道 (津田~引田) 建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧②.....	4	第22表	火山ガラスの屈折率測定結果一覧表 (3).....	214
第3表	調査の体制.....	6	第23表	火山ガラスの屈折率測定結果一覧表 (4).....	215
第4表	引田町内の遺跡一覧表.....	9	第24表	火山ガラスの屈折率測定結果一覧表 (5).....	216
第5表	試掘調査の概要.....	13	第25表	出土瓦器種組成表.....	233
第6表	分析試料一覧表 (1).....	192	第26表	遺構番号変更一覧表.....	263
第7表	分析試料一覧表 (2).....	193	第27表	土器観察表.....	267~278
第8表	鉦物組成表 (1).....	199	第28表	軒平瓦観察表.....	279~281
第9表	鉦物組成表 (2).....	200	第29表	軒丸瓦観察表.....	282
第10表	全鉦物組成分析結果一覧表 (1).....	201	第30表	平瓦観察表.....	283~289
第11表	全鉦物組成分析結果一覧表 (2).....	202	第31表	丸瓦観察表.....	290~294
第12表	全鉦物組成分析結果一覧表 (3).....	203	第32表	中世布目 (平瓦) 観察表.....	295
第13表	全鉦物組成分析結果一覧表 (4).....	204	第33表	鬼瓦観察表.....	295
第14表	全鉦物組成分析結果一覧表 (5).....	205	第34表	雁振瓦観察表.....	295~296
第15表	重鉦物組成分析結果一覧表 (1).....	206	第35表	古代平瓦観察表.....	296
第16表	重鉦物組成分析結果一覧表 (2).....	207	第36表	近世軒平瓦観察表.....	296~297
第17表	重鉦物組成分析結果一覧表 (3).....	208	第37表	近世軒丸瓦観察表.....	297~298
第18表	重鉦物組成分析結果一覧表 (4).....	209	第38表	近世平瓦観察表.....	298
第19表	重鉦物組成分析結果一覧表 (5).....	210	第39表	近世丸瓦観察表.....	298
第20表	火山ガラスの屈折率測定結果一覧表 (1).....	212	第40表	石器観察表.....	299
			第41表	金属製品観察表.....	299

巻頭図版目次

図版 1 遺跡出土の土師器

図版 2 遺跡出土の瓦

図版目次

図版 1 II区全景 北から

II区SF01・02検出状況 東から

図版 2 II区SF01焼成室完掘状況 北から

II区SF01あぜ上カーボン付着状況 西から

II区SF01焼成室南側壁被熱状況 北から

図版 3 II区SF01焼成室奥壁被熱状況 東から

II区SF01焼成室北側壁被熱状況 南から

II区SF01隔壁 (焼成室側) 被熱状況 西から

図版 4 II区SF01焼成室南側壁被熱状況 北から

II区SF01焼成室北側壁被熱状況 南から

II区SF01焼成室床面被熱状況 東から

図版 5 II区SF02焼成室南北土層断面 東から

II区SF02焼成室遺物出土状況 南から

図版 6 II区SF02隔壁断ち割り土層断面 南から

II区SF02焼成室完掘状況 北から

図版 7 II区SF02焼成室断ち割り状況 南から

- II区SF02燃焼室断ち割り状況 南から
II区SF02燃焼室床面被熱状況 東から
- 図版8 遺跡遠景 北から
遺跡遠景 南から
- 図版9 I区全景 真上から
- 図版10 II区全景 真上から
- 図版11 I区南壁土層断面 北から
I区南壁沿い谷地形確認トレンチ土層断面 北から
- 図版12 I区柱穴群検出状況 南から
I区SB07-SP165遺物出土状況 東から
- 図版13 I区SB15-SP375柱材出土状況 北から
I区SB15-SP375遺物出土状況 北から
- 図版14 I区SK02遺物出土状況 北から
I区SK08礫出土状況 東から
- 図版15 I区SK10遺物出土状況 北から
I区SP280焼粘土塊出土状況 東から
I区調査風景 東から
- 図版16 II区SF01・02検出状況 北から
II区SF01・02検出状況 東から
- 図版17 II区SF01検出状況 東から
II区SF01隔壁断ち割り土層断面 南から
- 図版18 II区SF01焼成室完掘状況 西から
II区SF01隔壁除去状況 西から
- 図版19 II区SF01隔壁構築礫出土状況 東から
II区SF01断ち割り状況 西から
- 図版20 II区SF02検出状況 東から
II区SF02焼成室遺物出土状況1 南から
- 図版21 II区SF02焼成室遺物出土状況2 南から
II区SF02焼成室遺物出土状況3 南から
- 図版22 II区SF02隔壁検出状況 東から
II区SF02断ち割り状況 西から
II区SF01・02調査終了風景 東から
- 図版23 II区SK04・12遺物出土状況 南から
II区SK04遺物出土状況<軒平瓦> 南から
II区SK04遺物出土状況<土師器杯> 南から
- 図版24 II区SK05遺物出土状況 西から
II区SK05遺物出土状況1 東から
II区SK05遺物出土状況2 東から
- 図版25 II区SK07石組検出状況 西から
II区SK07石組検出状況 南から
- 図版26 II区SK07石組検出状況 北から
II区SK07石組検出状況 東から
- 図版27 II区SK12遺物出土状況 南から
I区SK12遺物出土状況 西から
- 図版28 II区SX02遺物出土状況 南から
- II区SX02遺物出土状況 西から
- 図版29 II区SX02瓦溜まり検出状況 南から
II区SX02西壁土層断面 南から
- 図版30 II区SX02内SP01遺物出土状況 西から
II区SX02完掘状況 南から
- 図版31 I区SB06・07・16出土遺物
- 図版32 I区SB06・15出土遺物
- 図版33 I区SK02・08・10出土遺物
- 図版34 I区SK10・11・14・SD06出土遺物
- 図版35 I区SD06・柱穴出土遺物
- 図版36 I区柱穴出土遺物
- 図版37 I区SX01・遺構外出土遺物
- 図版38 II区SF01出土遺物(1)
- 図版39 II区SF01出土遺物(2)
- 図版40 II区SF01・02出土遺物
- 図版41 II区SF02出土遺物(1)
- 図版42 II区SF02出土遺物(2)
- 図版43 II区SF02・SK02出土遺物
- 図版44 II区SK01・02・04出土遺物
- 図版45 II区SK04出土遺物(1)
- 図版46 II区SK04出土遺物(2)
- 図版47 II区SK04出土遺物(3)
- 図版48 II区SK04出土遺物(4)
- 図版49 II区SK04出土遺物(5)
- 図版50 II区SK05出土遺物
- 図版51 II区SK05・12出土遺物
- 図版52 II区SK12出土遺物(1)
- 図版53 II区SK12出土遺物(2)
- 図版54 II区SK12出土遺物(3)
- 図版55 I・II区SR01出土遺物(1)
- 図版56 I・II区SR01出土遺物(2)
- 図版57 I・II区SR01出土遺物(3)
- 図版58 II区北西部包含層出土遺物(1)
- 図版59 II区北西部包含層出土遺物(2)
- 図版60 II区北西隅流入出土遺物(1)
- 図版61 II区北西隅流入出土遺物(2)
- 図版62 II区北西隅流入出土遺物(3)
- 図版63 II区北西隅流入出土遺物(4)
- 図版64 II区北西隅流入出土遺物(5)
- 図版65 II区北西隅流入出土遺物(6)
- 図版66 II区北西隅流入出土遺物(7)
- 図版67 II区SX02出土遺物(1)
- 図版68 II区SX02出土遺物(2)
- 図版69 II区SX02出土遺物(3)
- 図版70 II区SX02出土遺物(4)

图版71 II区SX02出土遗物(5)

图版72 II区遺構外出土遺物(1)

图版73 II区遺構外出土遺物(2)

I区柱穴·II区SF02·SK05出土遺物

第 1 章 調査の経緯

第 1 節 調査にいたる経過

四国横断自動車道津田～引田間の建設については、平成 5 年度に建設大臣から日本道路公団総裁に対して建設の施工命令が下され、平成 6 年度に路線の中心杭の打設が行われた。

これに伴う埋蔵文化財保護については、平成 4 年度から県教育委員会と日本道路公団高松建設局とで事前協議が開始された。平成 7 年 6・7 月には県教育委員会が国庫補助事業として分布調査を行い、津田～引田間については 22 地区について埋蔵文化財の保護に配慮する必要があることを日本道路公団に通知した。日本道路公団は県教育委員会の意見を踏まえ、平成 7 年 10 月文化庁と協議を行い、平成 8 年 1 月文化庁から「工事の施工に先だて発掘調査を実施すること」等の回答がなされた。これにより、平成 4 年度からの事前協議は終了し、平成 8 年 4 月、県教育委員会と日本道路公団とで埋蔵文化財発掘調査についての委託契約が締結され、さらに県教育委員会と財団法人香川県埋蔵文化財センターとで発掘調査の委託契約が締結された。

一方、県教育委員会では明石大橋開通にあわせた津田～引田間の高速道路の整備は香川県の緊急かつ重要な課題であることから、平成 8 年度及び 9 年度に文化財専門職員を新規採用し、調査体制の充実を図ることで対応した。

津田～引田間 22 地区の調査対象地区のうち、引田町内には 4 地区がある。平成 8 年度からは、この調査対象地区の具体的な遺跡の内容を把握するため、用地買収の進捗にあわせて、予備調査を実施し、随時本調査の範囲を確定した。

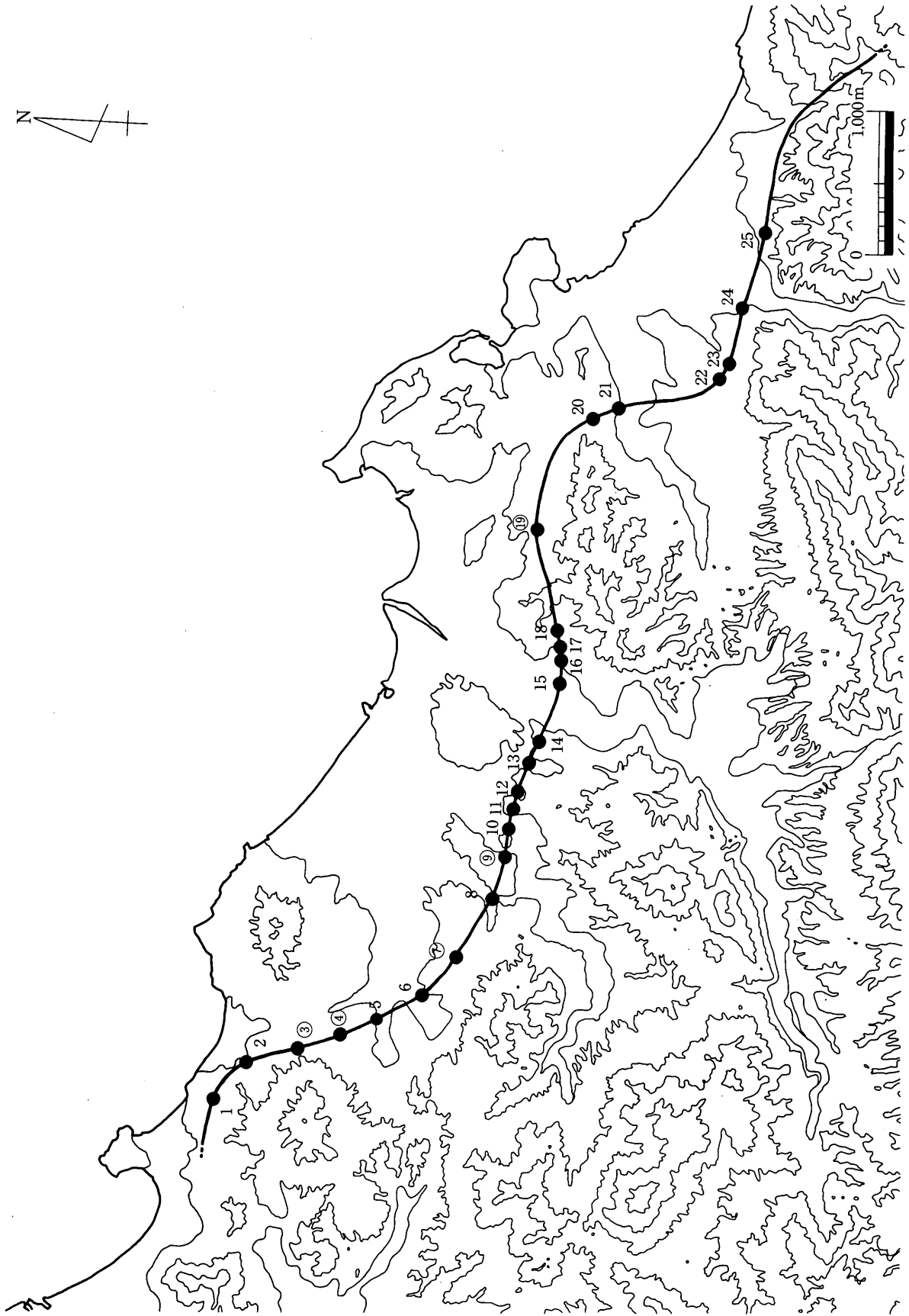
遺跡位置及び遺跡内容は第 1 図及び第 1・2 表のとおりである。

天王谷遺跡は、前記の平成 7 年度の県教育委員会による 22 地区のうち引田地区塩屋地区にあたり、平成 10 年度に試掘調査が行われた。

なお整理作業については、平成 14 年 4 月より開始し、同 9 月に終了した。

参考文献

- 『埋蔵文化財試掘調査報告Ⅸ 国道バイパス等事業予定地内の調査』香川県教育委員会 1996
- 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成 8 年度』香川県教育委員会他 1997
- 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成 9 年度』香川県教育委員会他 1998
- 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成 10 年度』香川県教育委員会他 1999
- 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第三十六冊 金毘羅山遺跡・塔の山南遺跡・庵の谷遺跡』香川県教育委員会、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター他 2000



第1図 四国横断自動車道（津田～引田）埋蔵文化財包蔵地（遺跡名番号）

遺跡名	地区名	所在地	調査面積(m ²)	調査期間	遺構	遺物	備考
1	中谷遺跡	大川郡津田町鶴羽	518	8.10.1～9.1.31	中世：柱穴	瓦器、土師器	
2	大山遺跡	大川郡津田町鶴羽	2,113	8.10.1～9.1.31	弥生：溝、中世：柱穴・土坑・溝・土壙墓	弥生土器、瓦器、土師器	
③		大川郡大内町馬篠A～D	620	9.7.1～9.8.31	(予備調査)		平成9年度概報で報告完了
④		大川郡大内町小砂	100	9.6.1～9.6.30	(予備調査)		平成9年度概報で報告完了
5	坪井遺跡	大川郡大内町中山	6,566	10.9.1～11.3.31	奈良：掘立柱建物跡	刻印付き須恵器、土師器、黒色土器	平成13年度「坪井遺跡」として報告書刊行
6	三殿出口遺跡	大川郡大内町三殿	135	11.7.1～11.7.31	(予備調査)		
			6,370	11.4.1～11.6.30 11.11.1～11.11.30	近世：砂糖竈	弥生土器、土師器、須恵器	
⑦		大川郡大内町町田	69	10.9.1～10.9.30	(予備調査)		平成10年度概報で報告完了
8	楠谷遺跡	大川郡大内町水主楠谷	1,000	11.3.1～11.3.31	(予備調査)		平成11年度概報で報告完了
			1,578	9.7.1～10.3.31	弥生：掘立柱建物跡・溝・川		
			460	8.12.1～8.12.31	(予備調査)	弥生土器	
⑨		大川郡大内町高原	11	9.9.1～9.9.30	(予備調査)		平成9年度概報で報告完了
10	金毘羅山遺跡	大川郡大内町下屋敷	446	8.11.1～8.11.30	(予備調査)		平成12年度「金毘羅山遺跡Ⅰ」として報告書刊行
			100	10.3.1～10.3.31	(予備調査)		
			3,600	10.4.1～10.8.31	弥生：竪穴住居跡、土器棺 古墳：竪穴住居跡	縄文土器、弥生土器、土師器、珠状耳飾	
			1,300	11.12.1～11.12.31	弥生：土器棺、竪穴式石室	弥生土器、青銅鏡	
			15	9.9.1～9.9.30	(予備調査)		
11	塔の山南遺跡	大川郡大内町川東杖の端	1,300	11.1.1～11.3.26	弥生：墳墓群	土師器	平成12年度「塔の山南遺跡」として報告書刊行
12	西谷遺跡	大川郡大内町川東西谷	2,092	9.6.1～10.3.31	弥生：溝、中世：掘立柱建物	弥生土器、土師器	平成9年度概報で報告完了
13	原間遺跡	大川郡大内町川東原間	500	9.2.1～9.2.28	(予備調査)		平成13・14年度「原間遺跡Ⅰ・Ⅱ」として報告書刊行
			19,254	9.4.1～10.3.31	弥生：竪穴住居跡、掘立柱建物跡、古墳：古墳	弥生土器、須恵器、土師器	
			24,243	10.4.1～11.3.31			

第1表 四国横断自動車道(津田～引田)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧①

遺跡名	地区名	所在地	調査面積(m ²)	調査期間	遺構	遺物	備考
14 樋端遺跡	樋端	大川郡白鳥町西藤井	3,590 1,647	10.12.1～11.3.31 11.9.1～11.10.31	弥生：墳墓、古墳；古墳 (予備調査)	弥生土器、須恵器、耳環、鉄鏃、青銅鏡	平成14年度「樋端遺跡」として報告書刊行
15 成重遺跡	成重	大川郡白鳥町白鳥成重	1,500 14,650 6,543 4,192	9.2.1～9.2.28 9.4.1～10.3.31 10.4.1～11.3.31 11.6.1～12.3.31	弥生：集石・方形周溝墓・竪穴住居跡・壺棺古墳；竪穴住居跡・古墳、奈良：掘立柱建物跡・土坑 (予備調査)	弥生土器、石器、土師器、陶磁器、銅銭	
16 谷遺跡	谷	大川郡白鳥町白鳥谷	111 2,741 900	10.7.1～10.7.31 11.9.1～12.3.31 12.4.1～12.8.31	(予備調査) 中世：掘立柱建物跡 近世：陶器窯	陶磁器	
17 善門池西遺跡	池の奥	大川郡白鳥町白鳥谷	3,566 2,500 1,050	9.11.17～10.3.31 10.4.1～11.3.31 11.7.1～11.8.31	弥生：竪穴住居跡 古墳：竪穴住居跡 中世：掘立柱建物跡	弥生土器、石器、土師器、須恵器、備前焼、銅銭	
18 池の奥遺跡	池の奥	大川郡白鳥町白鳥谷	8,700	10.6.1～11.3.26	弥生：竪穴住居跡・土坑 (予備調査)	弥生土器、磨製石剣	
⑲ 法月		大川郡白鳥町帰来	510	10.1.1～10.1.31	(予備調査)		平成9年度概報で報告完了
20 天王谷遺跡	塩屋	大川郡引田町引田中山	1,200 1,475	11.2.1～11.3.31 11.7.1～11.8.31	中世：掘立柱建物跡・瓦窯	土師器、瓦	
21 川北遺跡	塩屋	大川郡引田町小海	6,038	10.8.1～11.3.31	奈良：掘立柱建物跡 (予備調査)	土師器、須恵器	
22 辻田石垣遺跡	辻田	大川郡引田町引田辻田	554 2,300	10.4.1～10.5.31 11.4.1～11.6.30	中世：掘立柱建物跡	土師器、陶磁器	平成14年度「辻田石垣遺跡・辻田谷川下池遺跡・鹿庭遺跡」として報告書刊行
23 辻田谷川下池遺跡	辻田	大川郡引田町引田辻田	1,450	10.12.1～10.1.29	弥生：竪穴住居跡	弥生土器、石器	同上
24 鹿庭遺跡	鹿庭	大川郡引田町吉田	310 3,800	9.7.1～9.10.31 10.4.6～10.8.31	(予備調査) 弥生：土坑、中世：掘立柱建物跡	弥生土器、石器、須恵器、土師器	同上
25 庵の谷遺跡	黒羽	大川郡引田町黒羽下内	3,978	9.10.1～10.3.31	弥生：竪穴住居跡・土坑	弥生土器、石器	平成12年「庵の谷遺跡」として報告書刊行
合計			145,724				

第2表 四国横断自動車道(津田～引田)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧②

第 2 節 調査の経過と体制

1 調査の経過

天王谷遺跡は平成10年に試掘調査が行われ、翌年1月から本調査を開始した。調査期間は平成11年2月1日から平成11年3月31日および同年7月1日から8月31日である。発掘調査は調査員3名で、直営方式により実施した。またその概要は既に概報および年報（註）で報告している。調査面積は2,675㎡である。整理作業は平成14年4月から9月にかけて調査員1人、整理作業員8名の体制で行った。

2 発掘調査及び整理作業の体制

発掘調査及び整理作業の体制は第3表のとおりである。

その他、日々雇用職員として発掘調査に携わった方々は以下のとおりである。

現場整理作業員 三谷百合絵

普通作業員

木村由貴夫、中山秀夫、西川昭彦、新田 勝、根ヶ山岩太郎、橋本 修、橋本正利、濱田 博、水口雅彦

軽作業員

石原雅子、大久保尚子、大森禎子、吉川喜美子、桑島糸枝、下地秋子、永峰幸子、中山耀子、橋本希代美、福島保子、丸山智子、水田サダコ、水口恵美子、水谷優美、三谷登志子、三谷房子、榎本梅子、森高三智代

整理作業に携わった方々は以下のとおりである。

整理員 西桶右子

整理補助員 岡野雅子、前田好美

整理作業員 山田昌代、磯崎福子、西野裕子、中村文枝、柴垣智美

（註）『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成11年度』2000 香川県埋蔵文化財調査センター他
『財団法人香川県埋蔵文化財発掘調査センター年報 平成11年度』2000 香川県埋蔵文化財調査センター

香川県教育委員会 文化行政課												
		平成10年度				平成11年度				平成14年度		
総括	課長	小原	克己	課長	小原	克己	課長	北原	和利	課長	北原	和利
	課長補佐	北原	和利	課長補佐	小国	史郎	課長補佐	渡邊	勇人	課長補佐	渡邊	勇人
総務	副主幹兼係長	西村	隆史	係長	中村	禎伸	主任	香川	浩章	主任	香川	浩章
	係長	中村	禎伸	主査	三宅	陽子	主査	須崎	陽子	主任主事	龜田	幸一
埋蔵文化財	主査	三宅	陽子		松村	崇史						
	副主幹	渡部	明夫	副主幹	廣瀬	常雄	副主幹	大山	眞充	副主幹	大山	眞充
	係長	西村	尋文	係長	西村	尋文	主任	片桐	孝浩	主任	片桐	孝浩
	主任技師	塩崎	誠司	文化財専門員	森	格也	文化財専門員	古野	徳久	文化財専門員	佐藤	竜馬
	主任技師			主任技師	塩崎	誠司	文化財専門員	佐藤	竜馬			
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター												
総括	所長	菅原	良弘	所長	菅原	良弘	所長	小原	克己	所長	小原	克己
	次長	小野	善範	次長	川原	裕章	次長	渡部	明夫	次長	渡部	明夫
総務	副主幹兼係長	田中	秀文	副主幹兼係長	田中	秀文	副主幹	野保	昌弘	副主幹	野保	昌弘
	係長	新	一郎	係長	新	一郎						
調査		(6.1～)			(6.1～)							
	主任主事	西川	大	主任主事	西川	大	主任主事	西川	大	主任主事	西川	大
	主任文化財専門員			主任文化財専門員			主任文化財専門員			主任文化財専門員		
		大山	眞充		大山	眞充		眞鍋	昌宏		眞鍋	昌宏
	文化財専門員	濱松	春水	主任技師	溝渕	大輔	主任技師	長井	博志	主任技師	長井	博志
	技師	長井	博志	技師	長井	博志	技師	長井	博志	技師	長井	博志
	調査技術員	多田	歩	調査技術員	多田	歩	調査技術員	多田	歩	調査技術員	多田	歩

第3表 調査の体制

第2章 立地と環境

第1節 地理的環境（第2～4図）

天王谷遺跡は大川郡引田町に所在する。引田町は香川県の東端部に位置する。町の北側に広がる引田平野は北東部で瀬戸内海に面し、他の三方はピク山、鳴嶽、翼山、与治山といった阿讃山脈を形成する標高150～450mの山塊に囲まれている。主要河川としては小海川、馬宿川がある。小海川は直線状の河道で、相対的に標高が高い丘陵際を東流している。これは引田城下町の形成に伴って人為的に流路固定が行われたためであるとされている⁽¹⁾。

遺跡は川北1号墳が所在する竜王山から東に延びる丘陵によって画される狭小な谷地形に位置する。遺跡の西、北東、南側に丘陵が迫っており、丘陵の間が谷地形となっている。このうち東に向かって延びる谷地形と南に向かって延びる谷地形の合流部に遺跡が広がる。この部分は遺構配置図の等高線やI区南壁土層図（第7図）で示されるとおり、なだらかな斜面となっており、西から東へ下る。

この地形を遺跡内で行われた中世期の瓦生産と関連づけて見ると、東側の谷地形では中世～近世の旧河道が検出され、周囲は丘陵に囲まれている。なお、南側に丘陵1つ越えた小海平野には引田頁岩が風化沖積した粘土が広く堆積しており、20世紀初頭から第2次世界大戦後までこの粘土を利用して瓦製作が行われていた⁽²⁾。このように水、燃料、粘土を付近で入手することが可能であり、窯を形成するには好適な条件を有していたと言える。

第2節 歴史的環境（第3～5図、第4表）

町内では発掘調査された遺跡は少なく、表面採集された資料が多い状況にある。これらについては「迹田石垣遺跡 迹田谷川下池遺跡 鹿庭遺跡」⁽³⁾で触れているので参照されたい。ここでは天王谷遺跡で中心となる中世のみを取り上げる。

中世

まず当該期の引田の状況について紹介、検討した研究⁽⁴⁾があるので触れる。木下氏は引田城下町に関する研究の中で当時の引田は陸上交通および海上交通の要地として栄えていたとしている。陸上交通については四国北部を通る古代南海道が徳島県板野町以東と県内の白鳥町以西を結んでいたこと、推定ルートは天王谷遺跡のすぐ東側（第4図にある遺跡至近部では現在の国道11号線部分）を通過しており、このルートは中世にも引き継がれていることを挙げる。海上交通については『兵庫北関入船納帳⁽⁵⁾』に記載される船籍地に引田があり、塩を中心とした積み荷が出荷されていたことを述べている。その入

（註1）『研究紀要Ⅶ』「引田城下町の歴史地理学的検討」（財香川県埋蔵文化財調査センター他 1999）

（註2）『引田町史 自然・原始～近世・文化財』引田町 1995

（註3）『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第四十四冊 迹田石垣遺跡 迹田谷川下池遺跡 鹿庭遺跡』2002（財香川県埋蔵文化財調査センター他）

（註4）（註1）に同じ。

（註5）1445年に兵庫県の「北関」へ運び込まれた船の積み荷を記録した資料。中世の瀬戸内海における物資の流通状況を示す。

港船数は宇多津、塩飽、小豆島に次ぎ県内4位である。当時の引田港の位置は不明であるが、城山南麓付近に存在した可能性が示されている。

また当時の旧地形についても検討を行っている。遺跡より1kmほど東側までは埋積した潟が広がる(第5図)。その東方と西南方には方向を異にし、小範囲に広がる条里型地割が認められ、条里施工時に潟の部分は可耕地でなかったと考えられること、潟の西方を中心とする地名に「塩屋」や「小海」があることから埋没時期は不明ながら古代ないし中世段階では海水が流入していたことを推定している。

次いで発掘調査された遺跡について述べる。天王谷遺跡以外では辻田石垣⁽⁶⁾、辻田谷川下池⁽⁷⁾、鹿庭⁽⁸⁾、川北⁽⁹⁾、庵の谷遺跡⁽¹⁰⁾で掘立柱建物を中心とした集落が検出されている。このうち天王谷遺跡との関連が想定できる遺跡として川北遺跡、辻田石垣遺跡がある。川北遺跡は天王谷遺跡との間に標高約65mの丘陵を挟み、東に約300m離れて小海平野に位置する。奈良時代には大型掘立柱建物群が形成され、その主軸方向と一致する条里型地割が小海川を挟んだ南側に見られる。この建物群が廃絶した後12世紀後半には再び集落が出現する。13世紀には集落を囲隔するL字形の区画溝をもち、14世紀代まで存続する。また遺跡内で検出された掘立柱建物、溝、鋤溝は条里型地割の方向と一致する。時期は不明ながら鋤溝も見られ、付近の平野部は生産域として利用されたと考えられる。天王谷遺跡とは位置の近接、存続期間の重複から有機的な関係にあったと考えられる。

辻田石垣遺跡は12世紀代～16世紀代にかけて存続した集落である。遺構内および包含層から天王谷遺跡の瓦窯で製作された軒平瓦、平瓦が1点ずつ出土している。ただし、辻田石垣遺跡は一般的な集落であり、瓦の供給先となる寺院などの遺構は確認されていない。

(註6)、(註7)、(註8)(註3)に同じ

(註9)『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成10年度』1999 (財)香川県埋蔵文化財調査センター他

『県道関係埋蔵文化財発掘調査概報 平成10年度』1999 (財)香川県埋蔵文化財調査センター他

(註10)『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第三十六冊 金毘羅山遺跡 塔の山南遺跡 庵の谷遺跡』2000 (財)香川県埋蔵文化財調査センター他

遺跡地図関連参考文献

『引田町史 自然・原始～近世・文化財』引田町 1995

『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第三十六冊 金毘羅山遺跡 塔の山南遺跡 庵の谷遺跡』2000 (財)香川県埋蔵文化財調査センター他

『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成10年度』1999 (財)香川県埋蔵文化財調査センター他

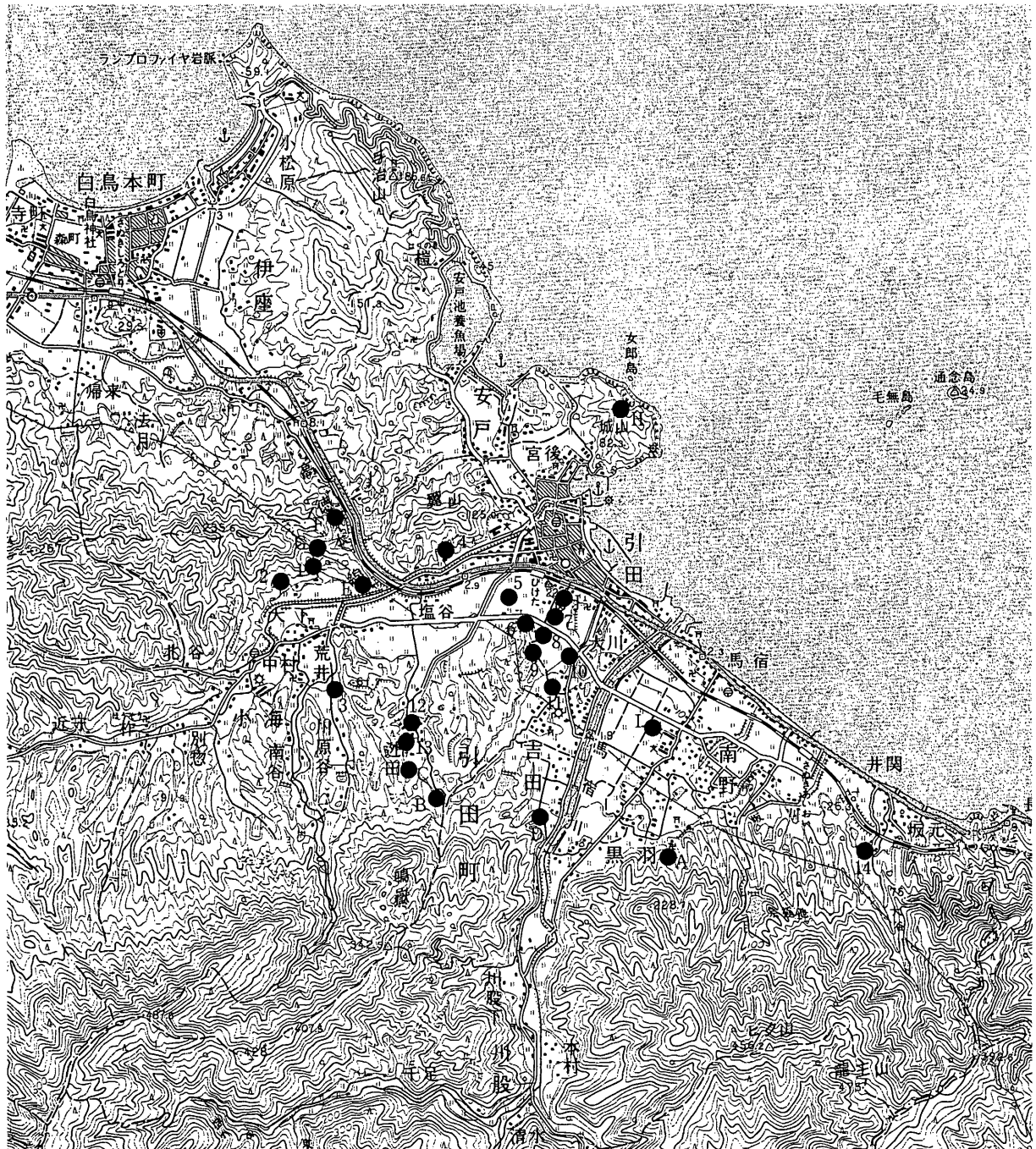
『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成11年度』2000 (財)香川県埋蔵文化財調査センター他



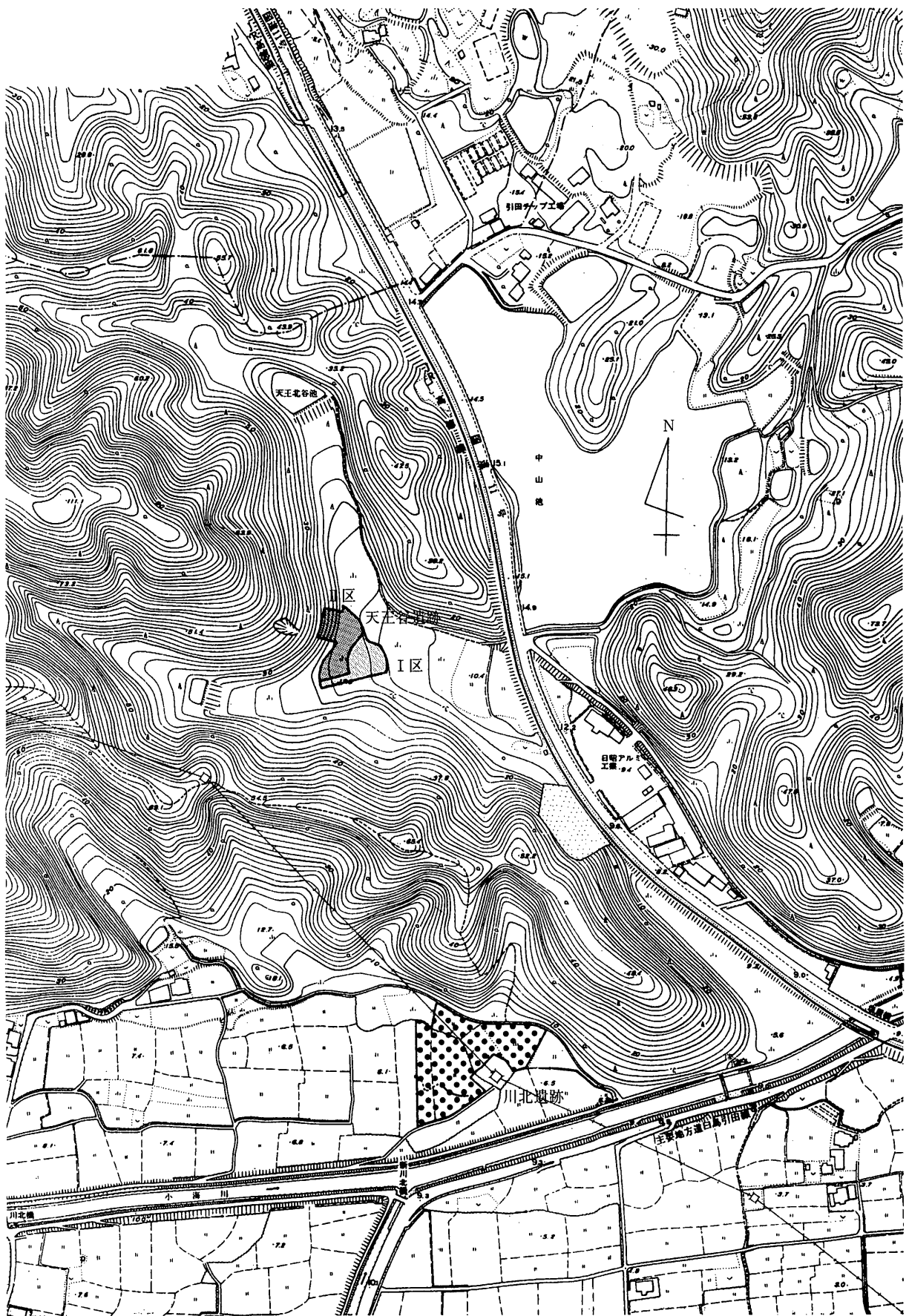
第2図 天王谷遺跡 位置図 (1/600,000)

番号	遺跡名	所在地	時代	主な遺構	主な遺跡
A	辻田石垣遺跡	引田町引田	第2表参照		
B	辻田谷川下池遺跡	引田町引田			
C	鹿庭遺跡	引田町吉田			
D	庵の谷遺跡	引田町黒羽			
E	川北遺跡	引田町小海			
F	天王谷遺跡	引田町引田			
G	川北1号墳	引田町小海	古墳	円墳 (横穴式石室)	須恵器
H	引田城跡	引田町川向	近世	城	瓦
I	馬宿畑方遺跡	引田町馬宿	奈良~平安		製塩土器
J	沖代水田遺跡	引田町沖代	奈良以前	水田	
1		引田町川北	平安		土器片
2	千葬古墳	引田町川北	古墳	古墳	
3		引田町川原谷	中世		備前焼、納骨壺
4		引田町塩屋	弥生		土器片
5		引田町沖代赤坂	古墳		土器片
6		引田町沖代丸山	弥生~古代		
7		引田町沖代蟹安	弥生		土器片、石斧、石臼
8	栄町遺跡	引田町栄町			
9		引田町外源蔵	奈良		土器片
10		引田町刈畑	奈良		土器片
11		引田町内源蔵	奈良		土器片
12		引田町天王谷	縄文		黒曜石製石鏃
13		引田町辻田	弥生		サヌカイト製石鏃
14		引田町坂元大谷	平安		土器片

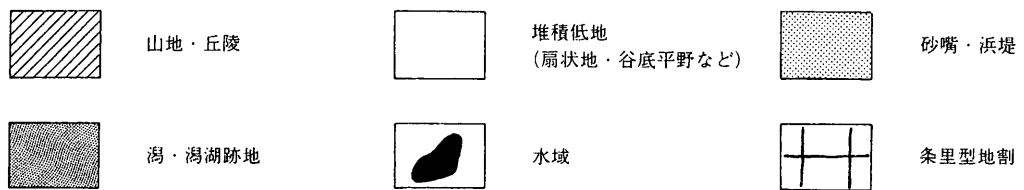
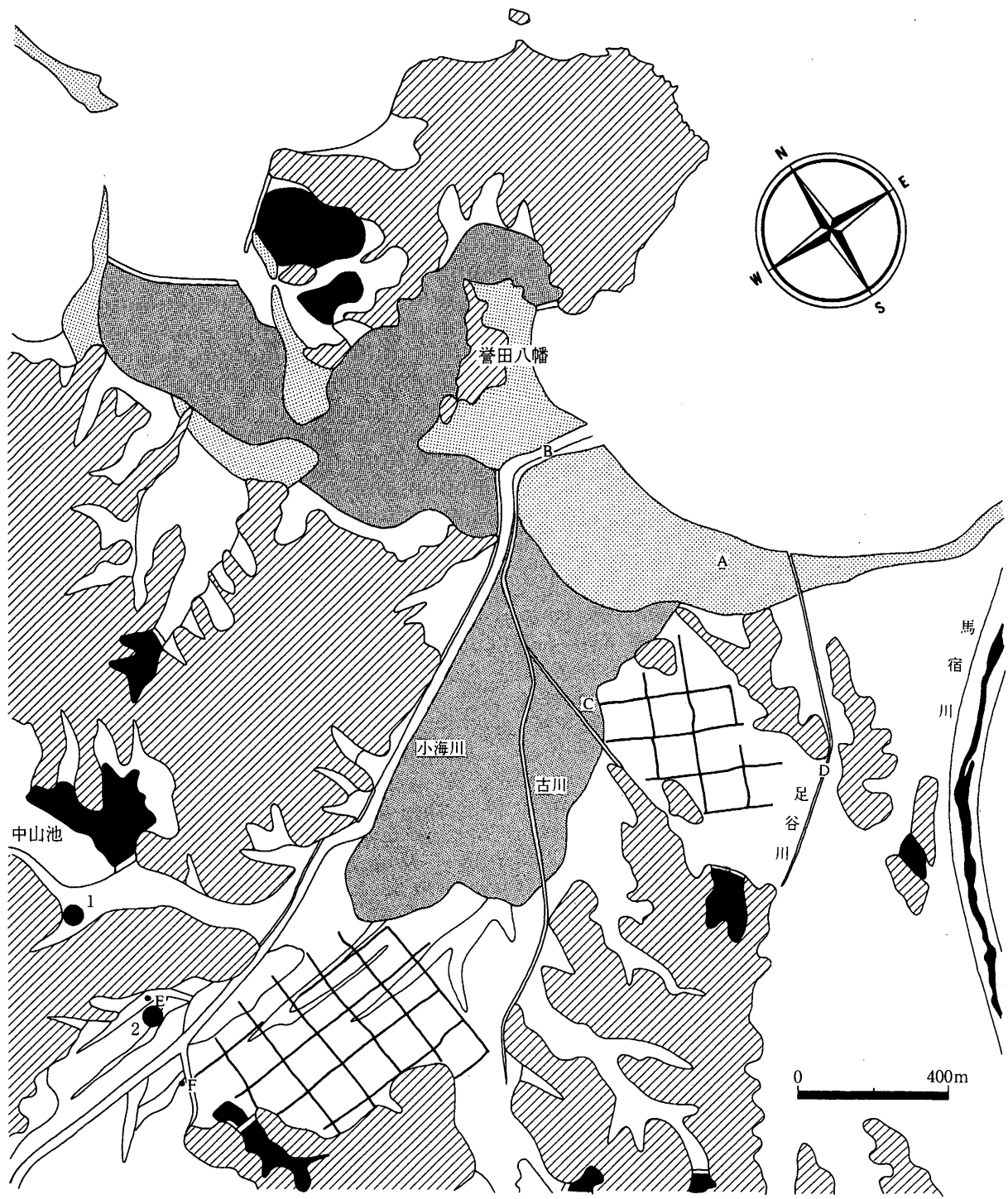
第4表 引田町内の遺跡一覧表 (遺跡名がないものは遺物採集地)



第3図 天王谷遺跡及び周辺の遺跡 位置図 (1/25,000)



第4図 天王谷遺跡・川北遺跡 位置図 (1/5,000)



1 天王谷遺跡 2 川北遺跡

第5図 遺跡周辺地形分類図 (註1文献に一部加筆)

第3節 試掘調査（第6図）

引田町塩屋地区における試掘調査の結果、天王谷遺跡について本調査が行われることになった。ここでは試掘調査の結果を報告する。試掘調査は平成10年10月12日に実施し、トレンチを5本設定した。このうち西側の丘陵に近接する1～3トレンチで溝、土坑、柱穴などの中世遺構が検出され、中、近世土器が出土した。4トレンチでは南に開口する谷筋を流下する旧河道を確認した。地山まで約1mを測り、表土下にグライ化した砂質土が堆積している。遺物は少量の土器細片が出土している。時期は不明であるが、現状でも湿地状態であることから中世段階でも低湿地状を呈していたことが推測された。南側の丘陵に接する5トレンチでは遺構、遺物とも確認されなかった。

以上から西側を丘陵に、北、東側を低湿地（旧河道）と丘陵に、南側を谷筋と丘陵に囲まれた西側丘陵から延びる緩斜面に小規模な集落が展開していたことが推察された。

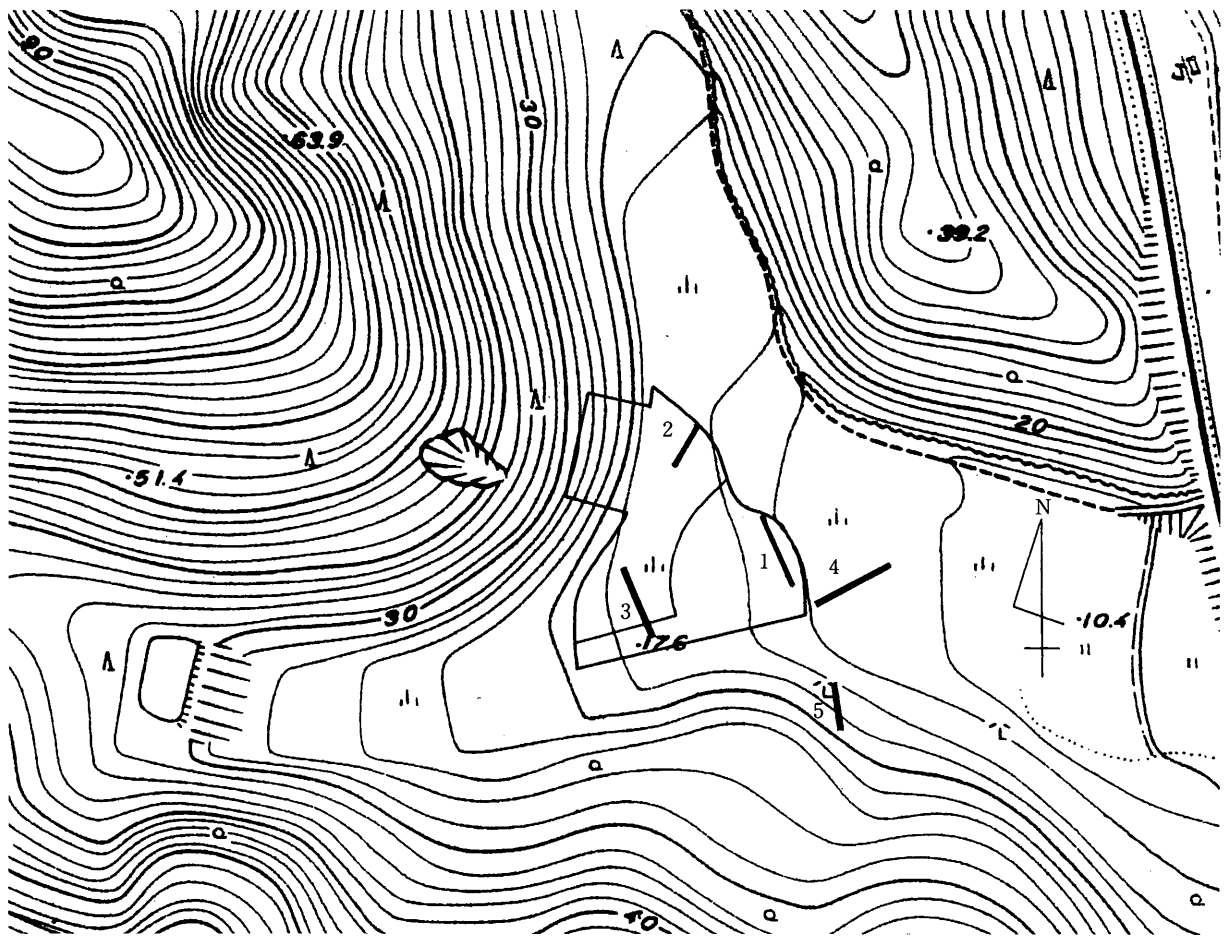
また丘陵の斜面部についても地元住民から明治時代の地籍図で神社が記載されていること、近世土器、瓦などが採取されたことなどの通報があったため調査対象地に加えた。

番号	規模	遺構	遺物	特記事項
1	1.2×18.5	溝1条 土坑1	中世土器片	遺構面は現地表下約50cmに所在する。出土遺物から中世後半の所産であろう。
2	1.2×13.6	土坑	中世土器片 近世土器片 瓦片	現地表下70cm程度に中世後半～近世に至る土器片が出土している。近世瓦片の出土が多いため小規模な屋敷地が所在か？
3	1.2×18.5	柱穴跡多数 溝	中世土器片 瓦片	現地表下40cm下に中世土器片を含む遺物包含層が所在し、直下に遺構が所在する。15世紀～16世紀の所産であろう。
4	1.2×21.5	なし	土器細片 少量	現地表下約1mで地山層（黄褐色砂質礫層）に達する。遺物は流れ込みによるもの。
5	1.2×12.8	なし	なし	現地表下40cmで地山層に達する。

第5表 試掘調査の概要

第4節 調査の方法

調査区を第4図のようにⅠ、Ⅱ区と設定した。Ⅱ区は谷地形内の平地部と丘陵斜面部の2ヶ所からなる。調査時の遺構番号は調査区ごとに1から始まる連番を使用しており、Ⅰ区SK01、Ⅱ区SK01というように遺構名を付けている。当報告でもこれを使用している。遺構平面図は主に航空測量により作成した。主要な遺構については1/20ないし1/10の縮尺で手書きの平、断面図を作成した。



第6図 試掘調査トレンチ位置図 (1/2,000)

第3章 調査の成果

1. 土層序 (第7、8図)

調査区の地形的条件を示す調査区壁土層図はI区南部、I・II区西部の2ヶ所について作成した。以下ではこれらと付図を用いて調査対象地の地形、土層堆積状況などについて説明する。なお、調査対象地は調査前には南北方向に幅広い階段状の耕地となっていた。このため遺構面が削平を受け、平坦地化している部分がある。また、土層図の作成位置は付図に表記している。

I区南壁土層図は調査区南部を西から東に延びる谷地形を対象とする。基本層序は上から表土、旧耕作土、旧床土、谷地形堆積土があり、中世包含層(34層の黒褐色粘性シルト)を経て、地山である黄灰色砂礫混粘土に至る。この面に中世遺構が掘削されている。包含層からは中世土器、瓦などが出土しており、層厚は最大35cmを測る。ただし、土層図作製部付近において包含層は南部の谷地形にさしかかるあたりで途切れる。

この谷の中世期の状況について、また本来の深さを確認するため南壁に沿って長さ3m弱のトレンチを入れた。その結果、近接する部分の遺構面レベルから1、2m下位で中世の土師器杯、小皿ごく少量出土した。土層断面の観察では土師器出土層は斜面の傾斜に沿って東に緩やかに下り、ほぼ同程度の層厚で堆積している。こうした堆積状況は谷地形全体に及ぶと推測され、この時期には谷地形が埋没しきっていないと考えられる。また遺構面より3mほど下位まで重機で下げたが、グライ化した粘土が続く、底は確認できなかった。

次いでI・II区西壁土層図であるが、複数の地形を図化している。北端ではI、II区SR01がある。北部ではII区SF01、02、SK05、07などが検出された丘陵先端部、南部ではII区SB04、SK01、03、08が展開する緩斜面があり、その間には小さな窪地(谷地形)が見られる。明確なプランは把握できていないが、機械掘削時の観察ではII区SK04まで延びない。上記の地形はいずれも西から東に延びていく。I区はII区から続く緩斜面がほぼ全面に広がる。北端ではSR01が続き、南端で谷地形がある。

地形ごとに基本層序を述べると窪地では表土、旧耕作土、旧床土といった旧耕作関係土があり、2層の中世包含層(5層の褐灰色粘質土、8層の灰褐色粘質土)を経て、地山である黄灰色砂礫混粘土(遺構面ベース)に至る。この部分では北寄りでは小規模な土石流(9~11層)も見られる。埋土は砂礫、砂質土であり、近世の備前焼小壺(495)が出土している。一方レベル的に高い丘陵先端部、緩斜面では中世包含層が削平されており、旧耕作土直下が地山となる。堆積土の内、丘陵先端部上位に見られる灰黄褐色土(2層の耕作地造成土)では多量の中世瓦などを含む部分があり、調査時には「北西部包含層」として遺物を取り上げた。詳細はP148で述べる。

北端に位置するSR01付近の層序は上から旧耕作関係土、黄褐色系微砂質土(13~15層)があり、遺構面ベース(明黄褐色粘質土)とSR01に至る。黄褐色系微砂質土からは瓦を中心とする多量の中世遺物及び少量の近世遺物出土している。この層は西側の丘陵斜面に堆積する土壤に酷似しており、この部分から流入したと考えられる。また斜面堆積した灰黄褐色粘質土(16層)からも中世瓦が出土している。以上の堆積土(13~16層)を調査時に「北西隅流入土」として遺物を取り上げた。詳細はP148で述べる。

最後に呈示した2つの土層断面図ではカバーできない調査区全体の土層堆積状況及び遺構面の削平状

況について触れ、検出遺構の分布に対する影響の有無を調査区ごとに確認しておく。I区においては南側の谷地形付近と東端部（遺構が希薄になり検出遺構面の傾斜もきつくなる部分）および北端部（SR01付近）以外では概ね包含層が残存し、遺構の残りも良い。よって遺構分布はさほど影響を受けていないと考えられる。

II区南部（SK04以南）については調査区西壁際に相当するSK01、03、08付近以西と試掘調査の3トレンチからI区との境界付近にかけては調査前の耕地化により遺構面がある程度削平されている。ただしI区と比較して等高線に大きな乱れはなく、程度は小さいと考えられる。これ以外の部分では中世包含層が残存していた。よってこの部分の遺構が希薄であるのは本来の状況をほぼ反映していると判断される。

II区北部についてはSF01、02が築かれた丘陵斜面は上部（特にSK02以北）が平坦地化しており、大きく削平されている。またその他の部分についてもSR01埋没後に北の谷筋から供給された灰白色系砂質土や調査区西壁で見られた土石流埋土が遺構面を覆っている。この部分は本来南部に堆積した中世包含層が堆積していたことが推定される箇所（地形的に北東へ向かって下る。）であり、付近の遺構埋土は包含層に類似する。よって程度は不明ながら削平を受けていると考えられる。

2. 遺構、遺物

調査の概要

本遺跡においては多数の中世遺構とごく少数の近世遺構などを確認した。中世遺構としては掘立柱建物24棟、瓦を焼成した半地下式有牀式平窯2基、土坑23基、性格不明遺構5基、柱穴約600基および谷地形、旧流路を検出した。出土遺物は土器が28リットル入りコンテナで約10箱、瓦が約50箱である。遺構、遺物の時期は12世紀後半から16世紀代に至る。このうち2基の瓦窯と焼成された瓦は14世紀後半に位置づけられる。谷地形はI区南端部で、旧流路はI、II区北端部で確認され、この時期には流下している。旧流路を除く遺構埋土には付近の包含層に由来する褐灰色系、黒褐色系、暗灰（黄）色系の粘土、砂質土が見られるが、いずれの埋土からも時期幅を持つ中世土器が出土しており、細かい時期差は見られない。

近世遺構としてはII区北西部にあたる丘陵斜面部で神社跡と考えられる平坦面を検出した。また上記の旧流路はこの時期にも流下している。出土遺物は土器、陶磁器が28リットル入りコンテナで約5箱、瓦が約50箱である。土器、陶磁器の時期は18世紀後半から明治期に及ぶ。

その他の時期の遺構は確認されなかったが、ごく少量の弥生土器片、サヌカイト製石器、チップおよび古代に属する平瓦が47点出土している。

I区の調査

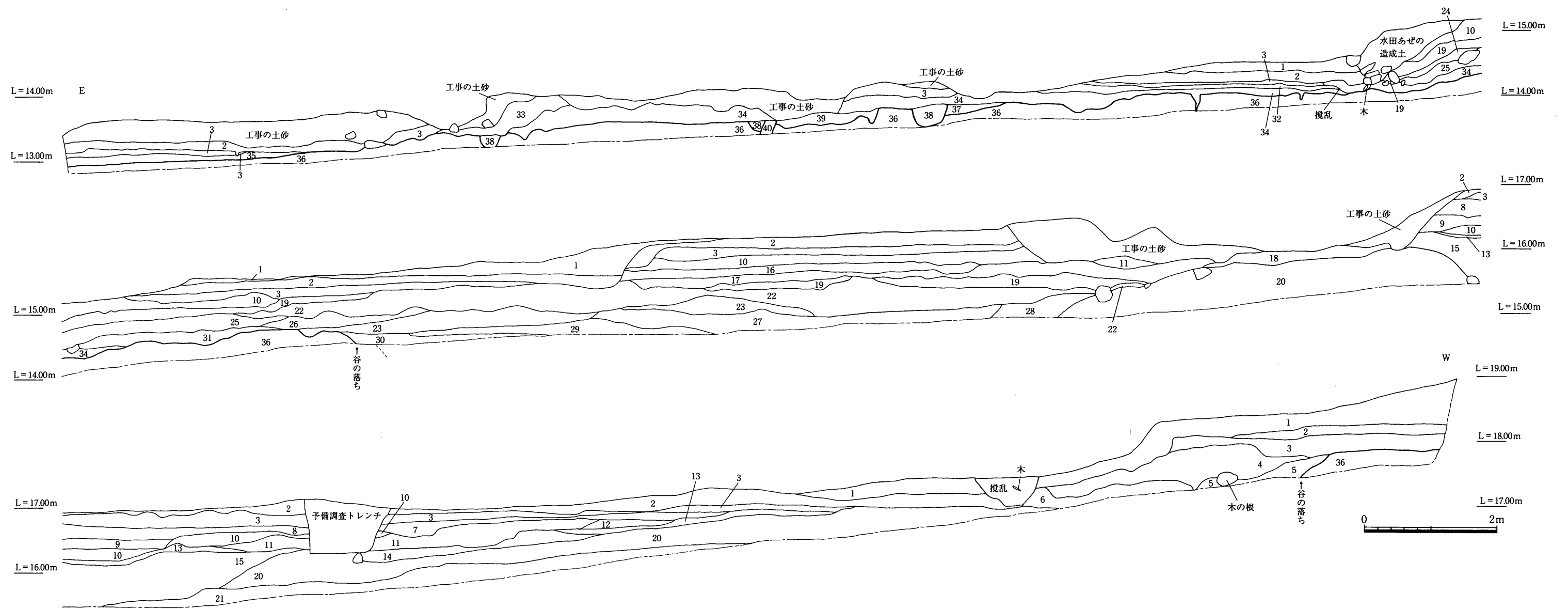
中世の遺構、遺物

以下のI区の報告において遺構名称の前にII区と付けていないものはすべてI区の遺構である。

(1) 建物

柱穴の分布状況

柱穴は調査区南部から中央部にかけて集中して検出され、掘立柱建物が20棟復元できた。だが、北部では急激に希薄になる。こうした状況は谷地形、旧河道、丘陵に規制される狭小な緩斜面内で柱穴

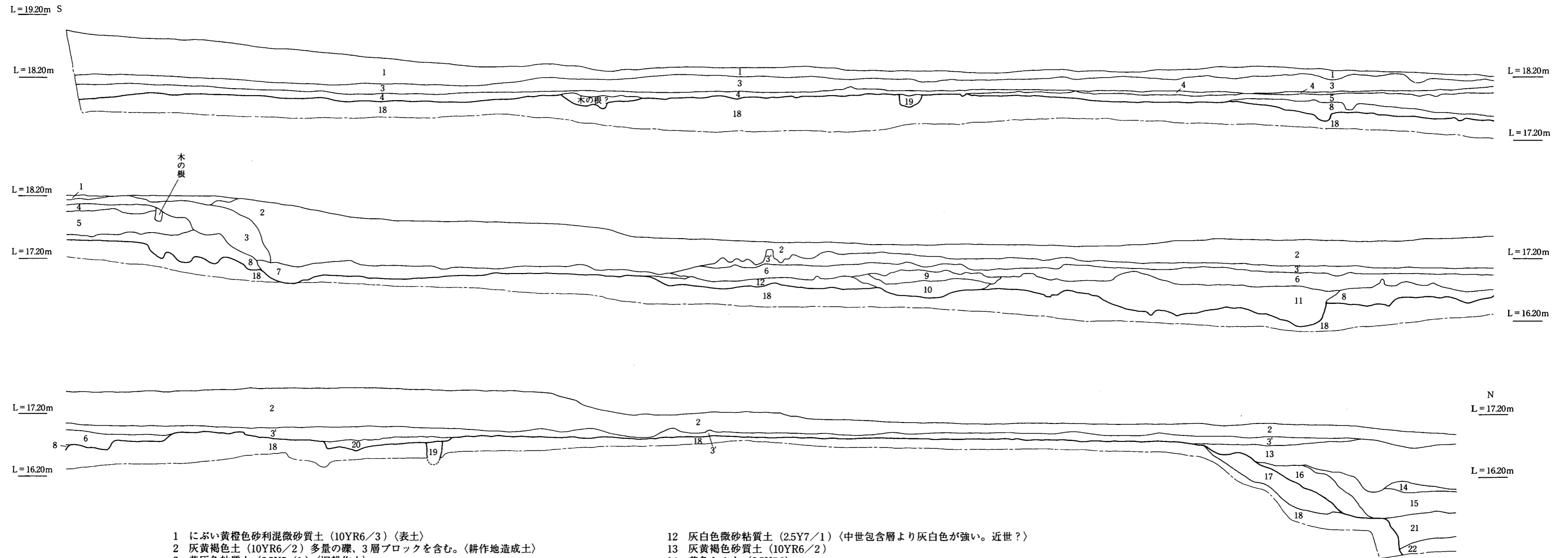


- 1 におい黄橙色砂利混砂質土 (10YR6/3) 〈表土〉
- 2 黄灰色粘性シルト (2.5Y5/1) 〈旧耕作土〉 〈I・II区西壁の3層〉
- 3 灰黄色マンガン沈着微砂混粘土 (2.5Y6/2) 〈旧床土〉 〈I・II区西壁の4層〉
- 4 明褐色粘質土 (7.5YR7/1)
- 5 灰色粘質土 (N4/0)
- 6 黄灰色粘質土 (2.5Y6/1)
- 7 褐色マンガン沈着微砂混粘土 (10YR6/1)
- 8 褐色粘性シルト (7.5YR6/1)
- 9 褐色粘質土 (7.5YR5/1)
- 10 におい黄橙色微砂 (10YR7/4)
- 11 灰白色マンガン沈着微砂混粘土 (10YR7/1)
- 12 灰白色マンガン沈着微砂 (5Y7/2)
- 13 褐色マンガン沈着微砂混粘土 (10YR5/1)
- 14 明赤褐色マンガン沈着粘土 (5YR5/6)
- 15 黄灰色砂礫混粘土 (2.5Y6/1) 遺構面形成土が流れ込んだ土。20層を切り込んでいる。

- 16 灰白色粘性シルト (2.5Y7/1)
- 17 灰白色マンガン沈着粘性シルト (10YR7/1)
- 18 褐色粘性シルト (7.5YR5/1) 20層とよく似るが紫がかかる。
- 19 17と同じ色調だが極細砂 (10YR7/1)
- 20 灰色粘土 (N6/0) 暗灰色粘土を帯状に含む。
- 21 灰色微砂 (N5/0)
- 22 灰白色礫混粘土 (10YR7/1) 礫は密集する。
- 23 褐色マンガン沈着粘性シルト (10YR6/1)
- 24 黄灰色微砂混粘土 (2.5Y6/1)
- 25 褐色粘質土 (10YR6/1)
- 26 灰白色マンガン沈着微砂 (2.5Y7/1)
- 27 灰色微砂 (N6/0)
- 28 灰色微砂 (N5/0)
- 29 灰白色砂 (2.5Y7/1)
- 30 黒色粘土 (N2/0) 小土器片を含む。

- 31 黄灰色粘土 (2.5Y5/1) やや紫がかかる。(34層中世包含層とは異質の土)
- 32 褐色マンガン沈着シルト (10YR6/1)
- 33 褐色マンガン沈着粘土 (7.5YR4/1) バイランの入り方、やや紫がかかる色調はI区SK01やI・II区SK12の埋土と類似する。またI区SK02の埋土に酷似する。
- 34 黒褐色粘性シルト (10YR3/1) 小土器片を多く含む。〈中世包含層〉
- 35 灰白色マンガン沈着粘性シルト (2.5Y7/1)
- 36 黄灰色砂礫混粘土 (2.5Y6/1) 5~10cm大の垂角礫を極めて密に含む。〈遺構面ベース〉
- 37 黒褐色微砂混粘性シルト (10YR3/1) 地山ブロックを含む。〈遺構埋土〉
- 38 黒褐色微砂混粘性シルト (10YR3/1) 小土器片を多く含む。〈ピット〉
- 39 褐色マンガン沈着微砂混粘土 (7.5YR4/1) 〈I区SD07〉
- 40 黒褐色微砂混粘性シルト (10YR3/1) カーボンを含む。〈ピット〉

第7図 I区南壁土層図 (1/60)



- 1 におい黄橙色砂利混微砂質土 (10YR6/3) 〈表土〉
- 2 灰黄褐色土 (10YR6/2) 多量の礫、3層ブロックを含む。〈耕作地造成土〉
- 3 黄灰色粘質土 (2.5Y5/1) 〈旧耕作土〉
- 3' 褐色砂利を含む。
- 4 灰黄色マンガン沈着微砂混粘土 (2.5Y6/2) 〈旧床土〉
- 5 褐灰色粘質土 (7.5YR4/1) 〈中世包含層〉
- 6 灰黄色微砂混粘土 (2.5Y7/2) 〈旧耕作関係土〉
- 7 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2) 下部がグライ化する。〈旧耕作土〉
- 8 灰褐色粘質土 (7.5YR4/2) 〈中世包含層〉
- 9 褐灰色微砂質土 (10YR6/1) 〈土石流〉
- 10 緑灰色砂利 (7.5GY6/1) グライ化する。〈土石流〉
- 11 明褐色砂礫土 (7.5YR5/6) 10cm前後の礫を多く含む。グライ化する。〈土石流〉

- 12 灰白色微砂粘質土 (2.5Y7/1) 〈中世包含層より灰白色が強い。近世?〉
- 13 灰黄褐色砂質土 (10YR6/2)
- 14 黄色シルト (2.5Y7.8)
- 15 浅黄色砂 (2.5Y7/4) 多量の瓦、近世土器を含む。
- 16 灰黄褐色粘質土 (10YR6/2) 瓦片を含む。
- 17 明黄褐色粘質土 (2.5Y7/6) 窯の掘り込み面。〈遺構面ベース〉
- 18 黄灰色砂礫混粘土 (2.5Y6/1) 5~10cm大の亜角礫を密に含む。〈遺構面ベース〉
- 19 褐灰色粘質土 (7.5YR5/1) 〈ピット〉
- 20 褐灰色粗砂混粘質土 (7.5YR6/1) 少量の瓦片を含む。〈II区SK02〉
- 21 灰白色砂質土 (2.5Y7/1) グライ化した青灰色土ブロックを含む。〈SR01〉
- 22 灰白色粘質土 (10Y7/1) グライ化している。〈SR01〉

第8図 I、II区西壁土層図 (1/60)

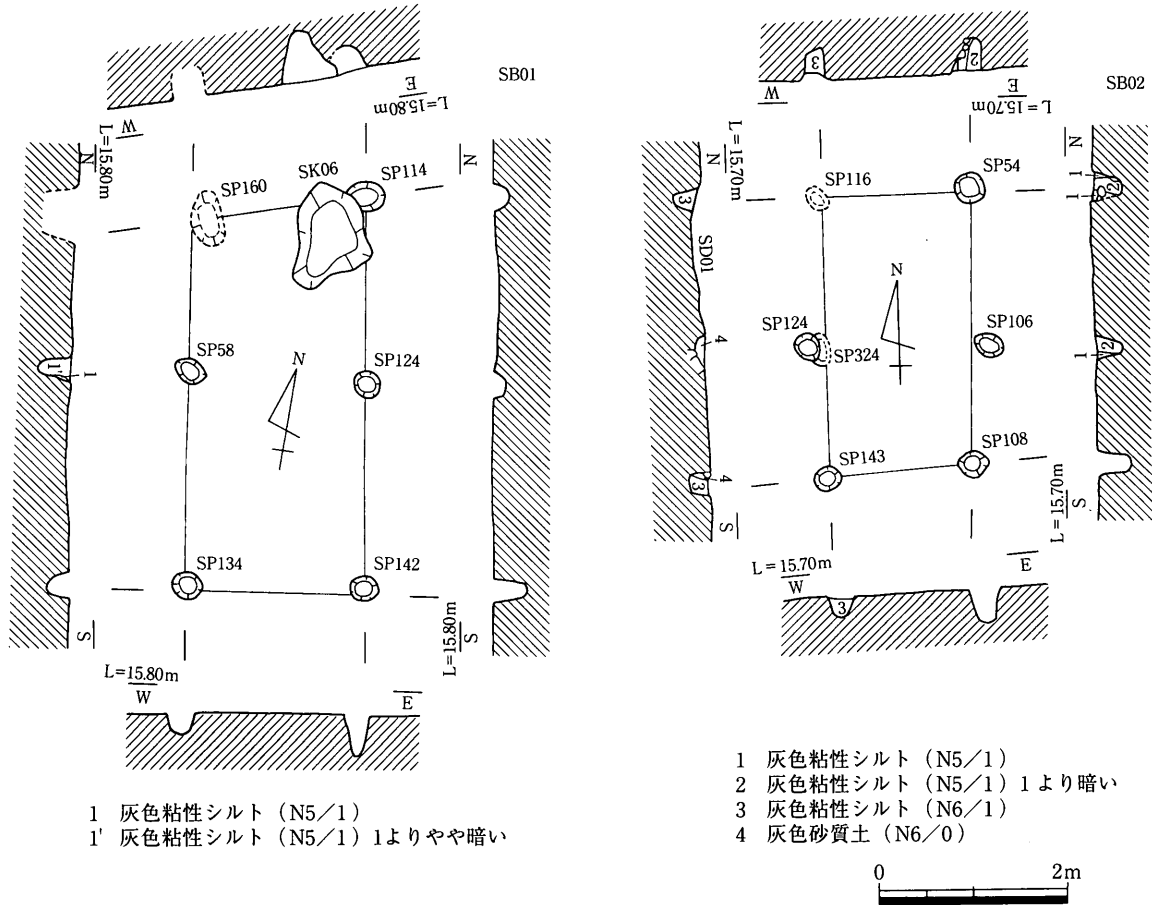
集中部の緩斜面が最も開けていること、道路（南海道）に近接することが一因であろう。

SB01（第9図）

調査区の南部中央で検出した側柱建物である。東桁行中央のSP124がSB02（SP324）を切り、北東隅のSP114がSK06（15世紀後半～16世紀前半）に切られ、SB02→SB01→SK06という前後関係が想定できる。またSB19と重複する。規模は梁間1間×桁行2間（1.90×4.22m）である。主軸方向はN-8°-Wである。柱穴の平面形はほぼ円～楕円形であり、深さ12～44cmを測る。出土遺物は土師器の小皿、杯、土師質土器土鍋がある。いずれも小片であるため時期比定に耐える資料でないが、15世紀後半から16世紀前半のSK06に切られることより15世紀後半以前と考えられる。

SB02（第9図）

調査区の南部中央で検出した側柱建物である。SB01、SD01（14世紀後半）に切られ、SB19と重複する。SB02→SD01→SB01という前後関係が想定できる。規模は梁間1間×桁行2間（1.56×2.96m）である。主軸方向はN-0.5°-Wである。柱穴の平面形はほぼ円形であり、深さ12～38cmを測る。出土遺物は土師器の小皿、杯がある。いずれも小片であるため時期比定に耐える資料でないが、14世紀後半のSD01に切られることより建物の時期は14世紀後半以前と考えられる。

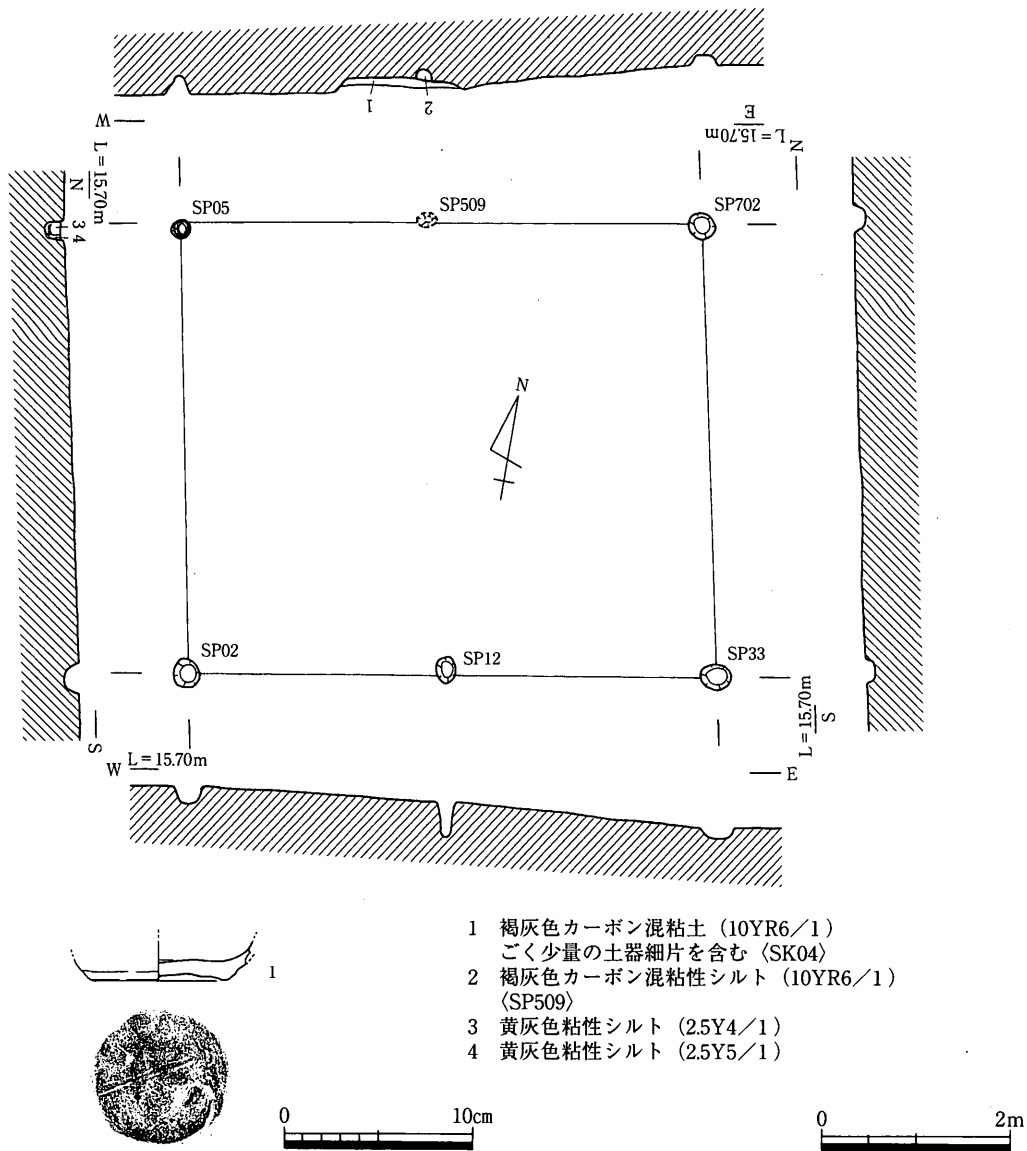


第9図 I区SB01、02 平・断面図（1/80）

SB03（第10図）

調査区の西部中央で検出した側柱建物である。北桁行中央のSP509がSK04に切られるのでSB03→SK04という前後関係が想定できる。またSB18と重複する。規模は梁間1間×桁行2間（4.64×5.60m）である。主軸方向はN-80°-Eである。柱穴の平面形はほぼ円形であり、深さ12～38cmを測る。

SP05柱痕より土師器の杯 (1)、瓦小片などが出土している。1は柱痕の下位で正位の状態出土した。1は口縁部を欠くが、直立気味である。その他の遺物には土師器の小皿などがある。1と瓦小片より建物の時期は14世紀後半と考えられる。



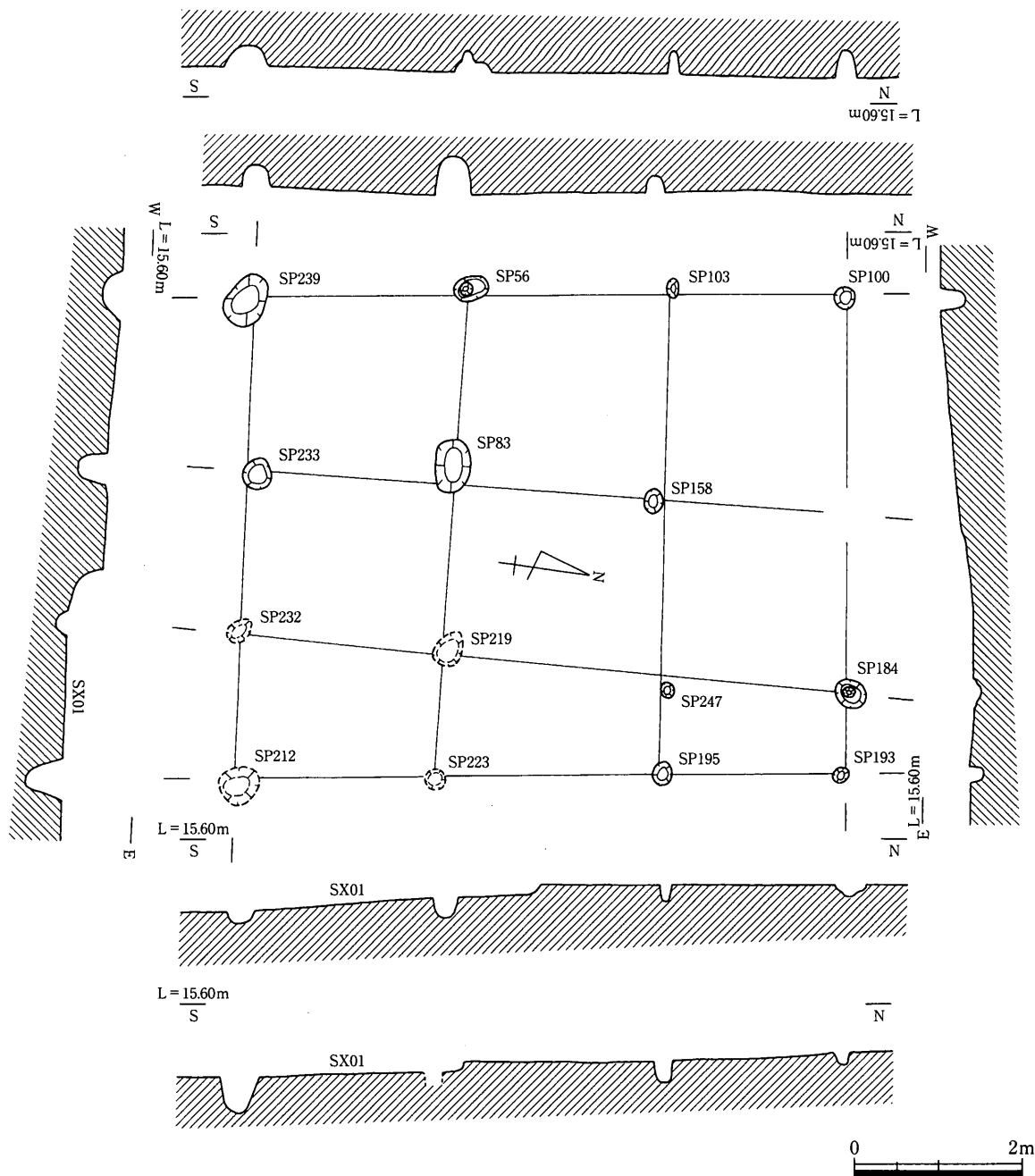
第10図 I区SB03 平・断面図 (1/80)、出土遺物 (1/4)

SB04 (第11図)

調査区の南部中央で検出した総柱建物である。東柱のSP158がSD06 (13世紀後半～14世紀前半)を切り、南東部の4穴がSX01 (16世紀代)に切られるのでSD06→SB04→SX01という前後関係が想定できる。SB05と重複する。規模は梁間3間×桁行3間 (5.64m×7.24m)である。主軸方向はN-8°-Wである。柱穴の平面形は円～楕円形であり、深さ10～44cmを測る。出土遺物は土師器の小皿、杯、土師質土器土鍋がある。いずれも小片であるため時期比定に耐える資料でないが、遺構の切り合いより建物の時期は13世紀後半～16世紀代と考えられる。

SB05 (第12図)

調査区中央部で検出した側柱建物である。南東隅のSP431がSP437 (16世紀代)を切り、SB04と重

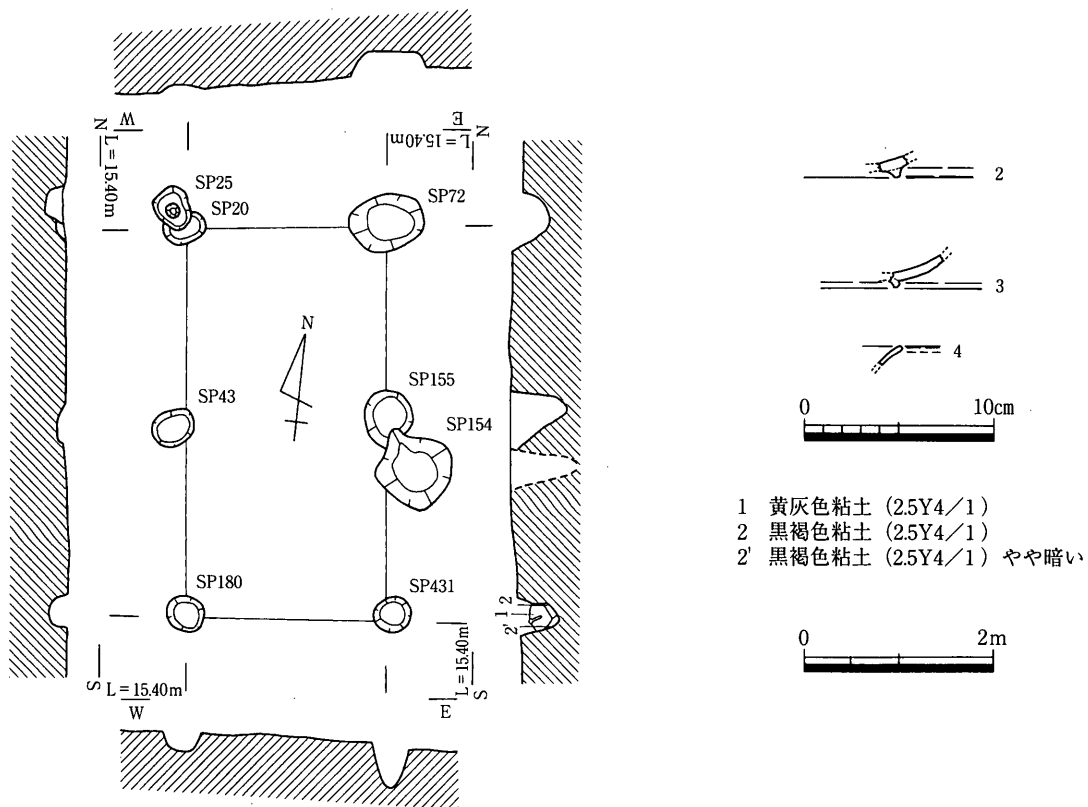


第11図 I区SB04 平・断面図 (1/80)

複する。規模は梁間1間×桁行2間 (2.12m×4.0m) である。主軸方向はN-6°-Wである。柱穴の平面形はほぼ円形である。大きさは36~80cmと規模の割に大きい。深さは8~60cmを測る。出土遺物には土師器小皿、杯、瓦器、須恵器椀 (3)、土師質土器土釜脚、土鍋などがある。3は非西村産で内面に板ナデを施し、小さい高台を持つ。建物の時期は遺構の切り合いから16世紀代と考えられる。

SB06 (第13図)

調査区南部中央で検出した側柱建物である。SB05と重複する。規模は梁間1間×桁行3間 (1.56m×4.48m) である。主軸方向はN-11°-Wである。柱穴の平面形はほぼ円~楕円形であり、深さ12~48cmを測る。出土遺物には土師器小皿 (5~7)、杯 (8)、土師質土器土鍋 (9) などがある。5、6は口縁部がやや外傾し、共に底部を糸切りする。8はほぼ直立する箱形の器形を持つ。9は内面の頸部と体部の間が明瞭に屈曲する。5~8より建物の時期は13世紀後半~14世紀代と考えられる。



第12図 I区SB05 平・断面図 (1/80)、出土遺物 (1/4)

SB07 (第14図)

調査区南東部で検出した側柱建物である。北西隅のSP307がSB08 (SP306) に切られ、西桁行のSP263、238がSD02、03に切られるのでSB07→SB08、SD03→SD02という前後関係が想定できる。またSP167はSB11を構成する柱穴でもあり、SB09、13、14、17と重複する。規模は梁間1間×桁行3間 (3.32m×5.72m) である。主軸方向はN-84°-Eである。柱穴の平面形はほぼ円～楕円形であり、深さ16～52cmを測る。

出土遺物には土師器小皿 (10)、杯 (11) などがある。10は口縁部が弱く外反し、底部を糸切りする。11は浅い皿形であり、底部をヘラ切りする。10、11より建物の時期は13世紀前半～14世紀前半と考えられる。

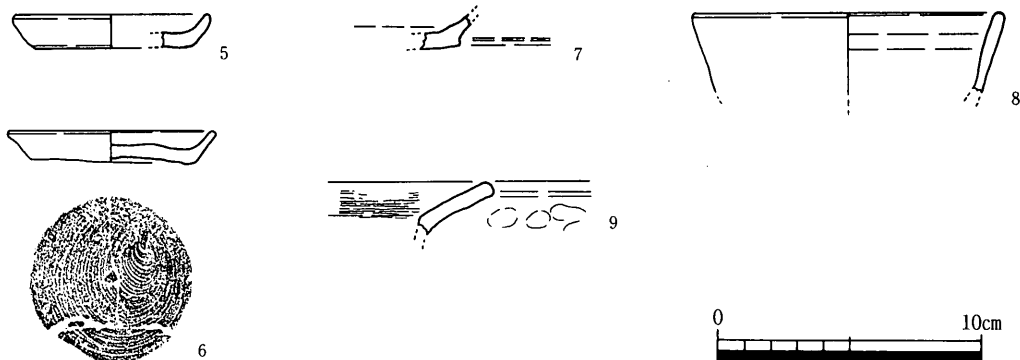
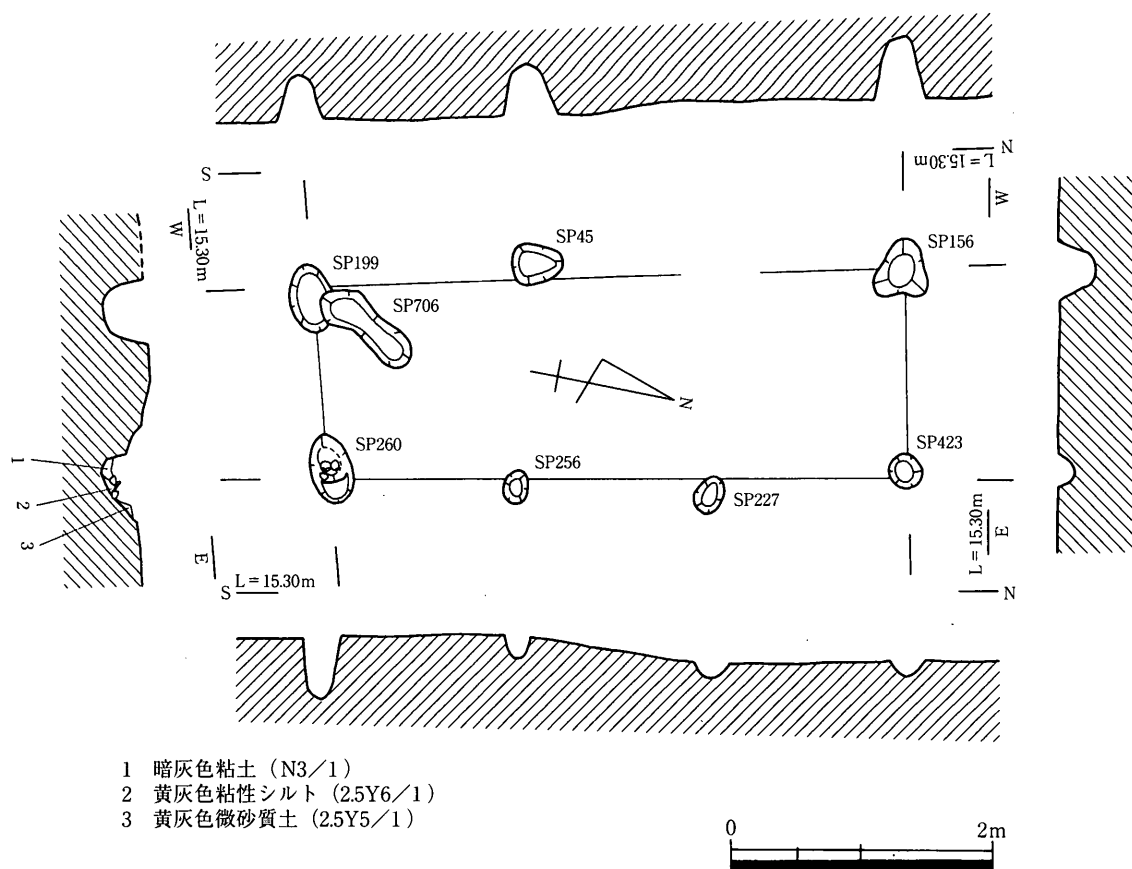
SB08 (第15図)

調査区南東部で検出した1面庇建物である。SB07を切り、南東隅のSP360がSD02に切られる。またSB09、11、13と重複する。規模は梁間2間×桁行2間 (2.96m×5.08m) である。主軸方向はN-84°-Eである。柱穴の平面形はほぼ円形であり、深さ6～42cmを測る。

出土遺物は土師器の小皿、杯、土師質土器土釜脚、土鍋がある。いずれも小片であるため時期比定に耐える資料でないが、SB07を切ることから建物の時期は13世紀代以降と考えられる。

SB09 (第16図)

調査区南東部で検出した2面庇建物である。南部のSP378、516がSD03に切られるのでSB09→SD03という前後関係が想定できる。またSB07、08、10、11、13、15と重複する。規模は梁間2間×桁行3間 (3.59m×5.0m) である。主軸方向はN-13°-Wである。柱穴の平面形はほぼ円形であり、深さ14～44cmを測る。



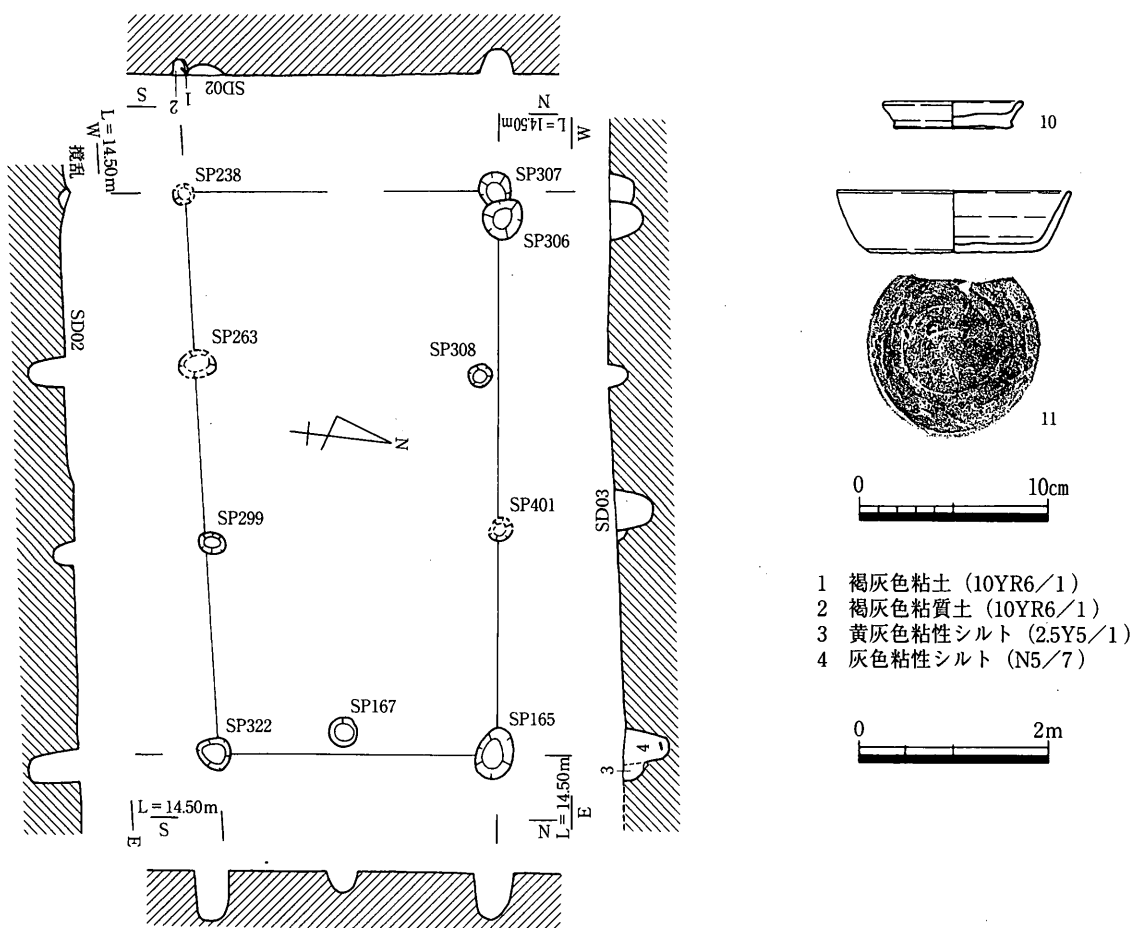
第13図 I区SB06 平・断面図 (1/80)、出土遺物 (1/4)

出土遺物には土師器小皿、杯 (12)、土師質土器土鍋、亀山焼甕、柱材がある。12は口縁部が弱く外反する。12より建物の時期は14世紀代と考えられる。

SB10 (第17図)

調査区南東部で検出した総柱建物である。南東隅のSP512はSD07を切り、SB20 (SP511) に切られる。また中央柱列のSP337、284がSD03に切られるのでSD07→SB10→SB20、SD03という前後関係が想定できる。なお、SP283はSB20を構成する柱穴でもあり、SB09、15と重複する。規模は梁間2間×桁行2間 (4.18m×4.20m) である。主軸方向はN-7°-Wである。柱穴の平面形はほぼ円形であり、深さ14~56cmを測る。

出土遺物には土師器杯 (13)、瀬戸などがある。13は薄作りで浅い皿形を呈する。13より建物の時期は12世紀後半~13世紀前半と考えられる。



第14図 I区SB07 平・断面図 (1/80)、 出土遺物 (1/4)

SB11 (第19図)

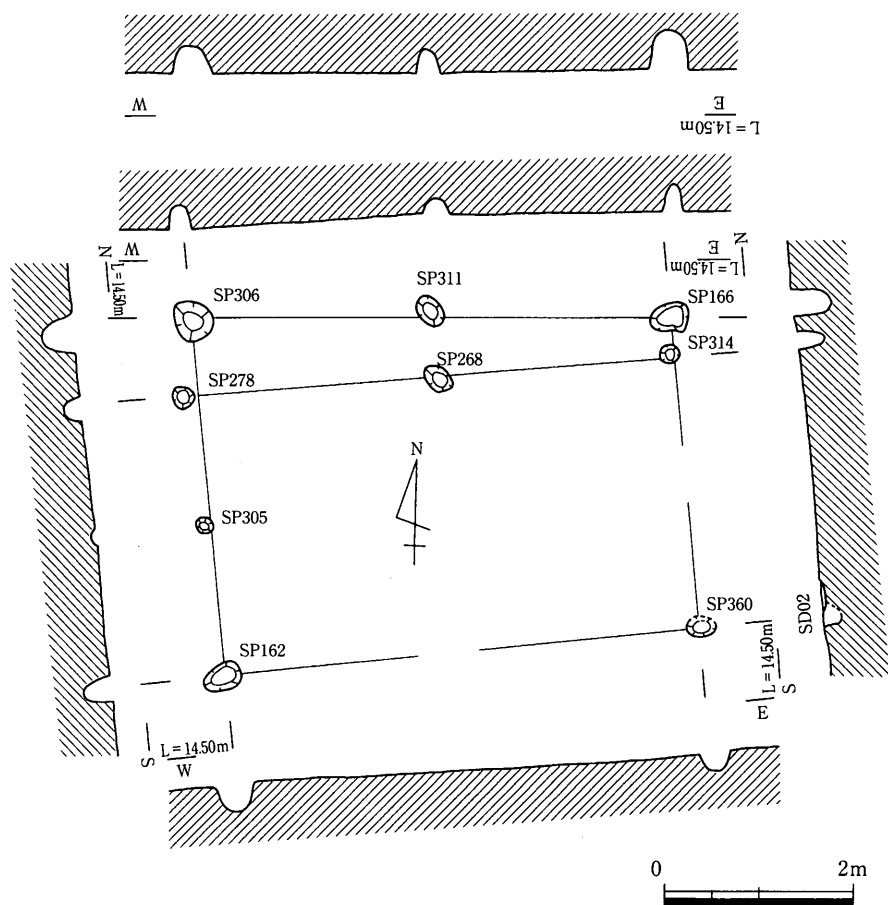
調査区南東部で検出した1面庇の総柱建物である。西梁行中央のSP475はSD03に切られるのでSB11→SD03という前後関係が想定できる。またSP167はSB07を、SP701はSB12、14を、SP313、336、480もSB14を構成する柱穴であり、SB08、09と重複する。規模は梁間2間×桁行2間(4.0m×5.04m)である。主軸方向はN-85°-Eである。柱穴の平面形はほぼ円形であり、深さ12~32cmを測る。出土遺物は土師器杯、土師質土器土鍋などがある。詳細な時期比定しうる遺物はないが、これらより建物の時期は中世と考えられる。

SB12 (第18図)

調査区南東部で検出した側柱建物である。SP701はSB11、14を構成する柱穴でもある。規模は梁間1間×桁行2間(2.40m×3.44m)である。主軸方向はN-83°-Eである。柱穴の平面形はほぼ円形であり、深さ12~52cmを測る。出土遺物は土師器小皿、杯、土師質土器土釜脚、土鍋などがある。詳細な時期比定しうる遺物はないが、これらより建物の時期は中世と考えられる。

SB13 (第20図)

調査区南東部で検出した総柱建物である。北西隅のSP269はSD03に切られるのでSB13→SD03という前後関係が想定できる。SB07、08、09、11、14、17と重複する。規模は梁間2間×桁行2間(3.52m×4.48m)である。主軸方向はN-88°-Eである。柱穴の平面形は円形であり、深さ12~42cmを測る。出土遺物には土師器小皿、杯(14)、土師質土器土鍋、丸瓦I類(15)がある。14は底部を糸切りする。15は凸面に縄目叩き、凹面に布目が残存する。15より建物の時期は14世紀後半と考えられる。



第15図 I区SB08 平・断面図 (1/80)

SB14 (第21図)

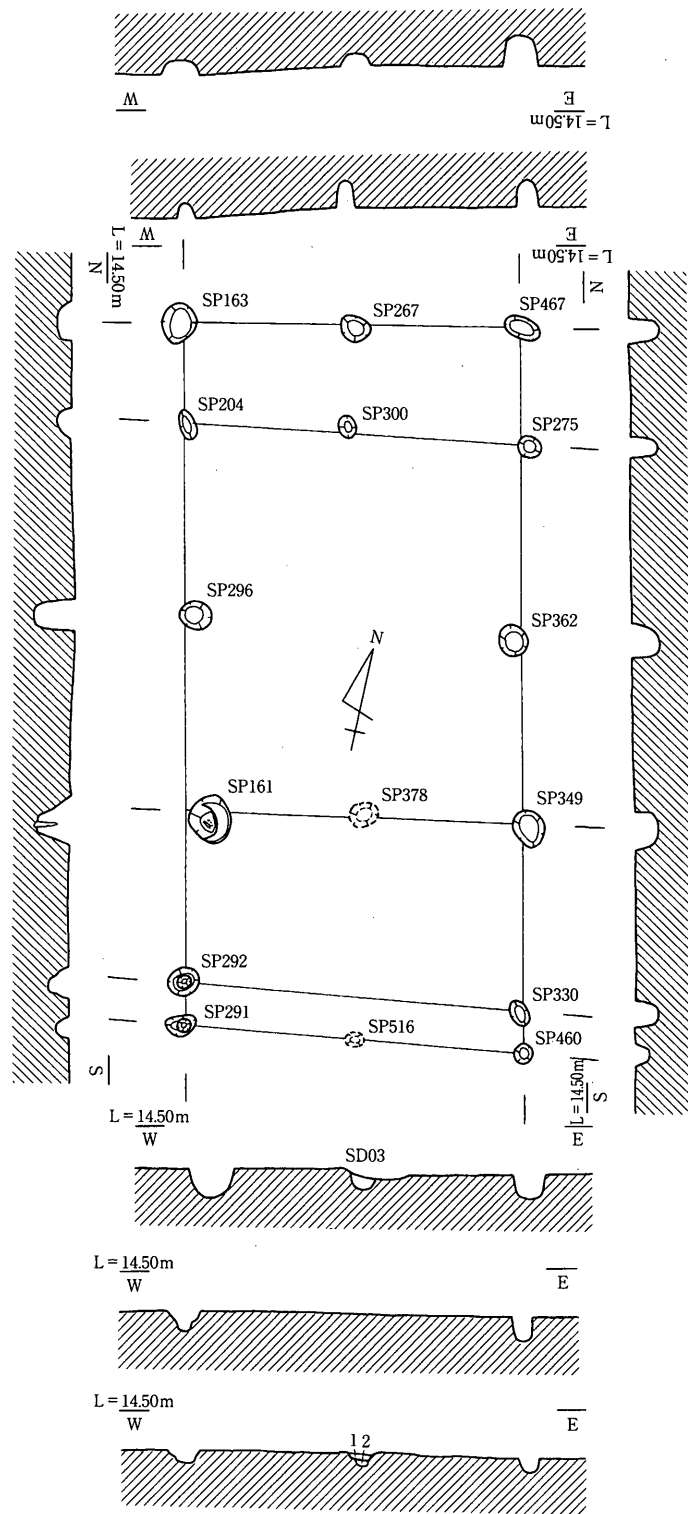
調査区南東部で検出した側柱建物である。南西隅のSP351はSB17 (SP350) を切るののでSB17→SB14という前後関係が想定できる。またSP701はSB11、12を、SP313、336、480もSB11を構成する柱穴である。規模は梁間1間×梁行3間 (2.48m×7.12m) である。主軸方向はN-4°-Wである。柱穴の平面形は円～楕円形であり、深さ16～44cmを測る。

出土遺物には土師器杯がある。詳細な時期比定できる資料ではないが、これより建物の時期は中世と考えられる。

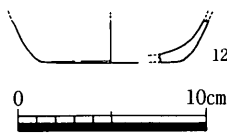
SB15 (第22図)

調査区南東部で検出した側柱建物である。南桁のSP375はSD07を切り、北西隅のSP704はSD03に切られるのでSD07→SB15→SD03という前後関係が想定できる。またSB09、10、16、20と重複する。規模は梁間1間×桁行3間 (2.92m×6.12m) である。主軸方向はN-82°-Eである。柱穴の平面形はほぼ円形であり、深さ12～42cmを測る。SP375では柱材が確認され、さらにその直下で口縁部を上位に向けた杯 (17) が出土した。17は一部欠損していたが、地鎮を目的とした埋納と考えられる。

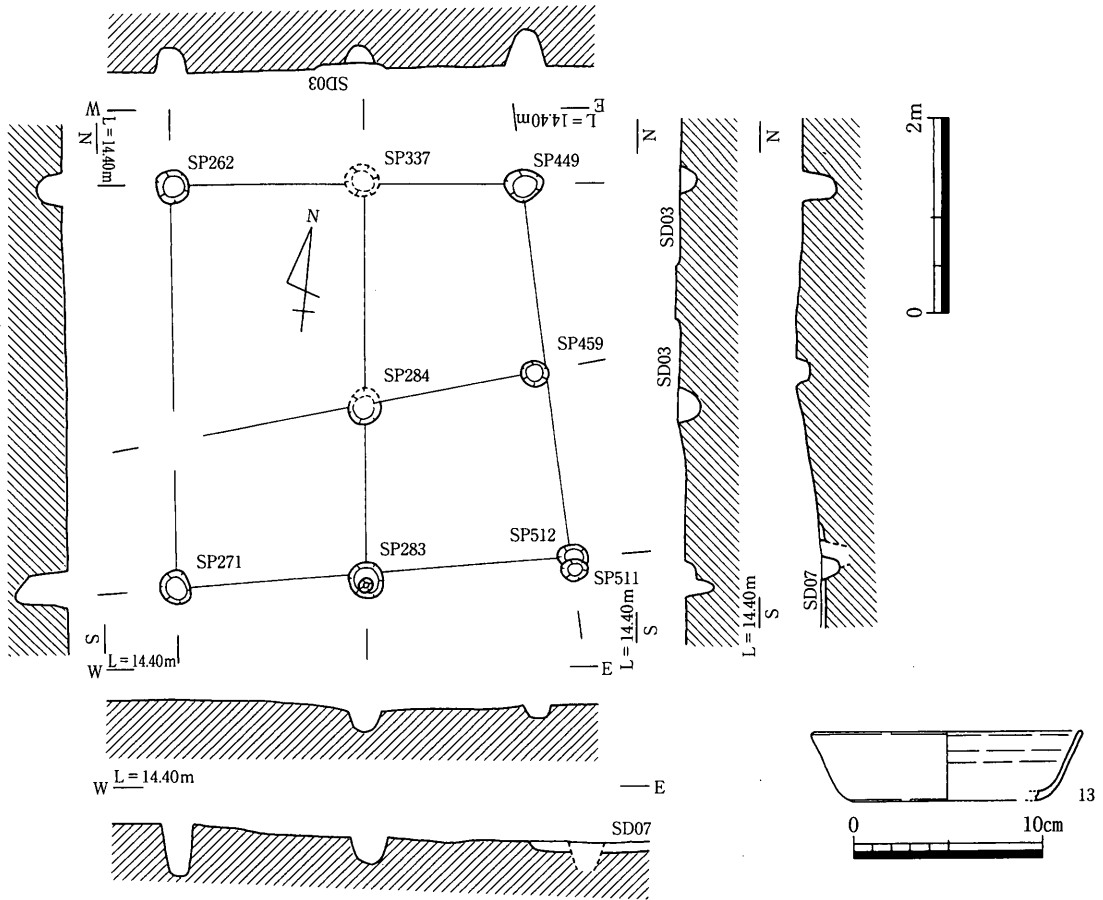
出土遺物には土師器小皿 (16)、杯 (17)、東播系コネ鉢 (18、19) などがある。16は底径の割に口縁部が短く、直立気味である。17はやや分厚い作りで、器高が高い。底部を糸切りする。18、19は口縁部を大きく肥厚させる。山沖編年⁽¹⁾ D1類に属し、14世紀前半と考えられる。18、19より建物の時期は14世紀前半と考えられる。



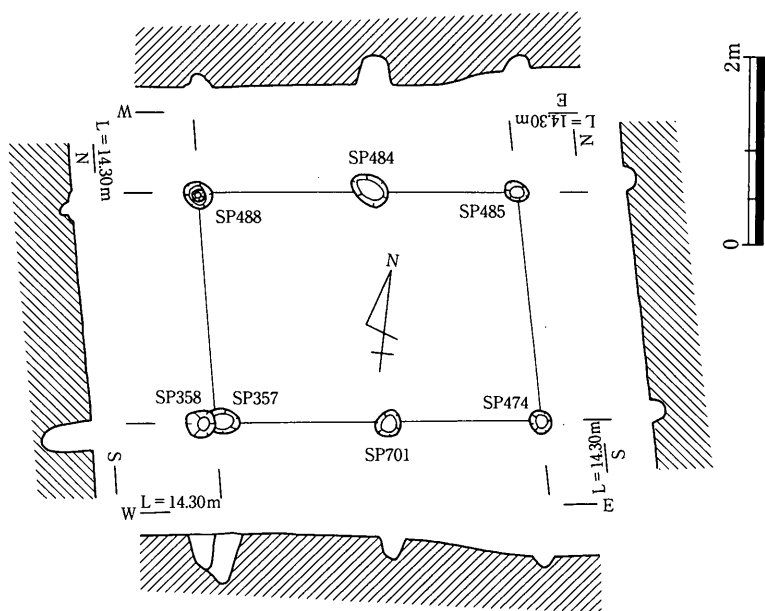
- 1 褐灰色粘土 (10YR5/1) (SD03)
- 2 褐灰色粘質土 (10YR5/1) カーボン含む
- 3 褐灰色微砂質土 (10YR5/1)



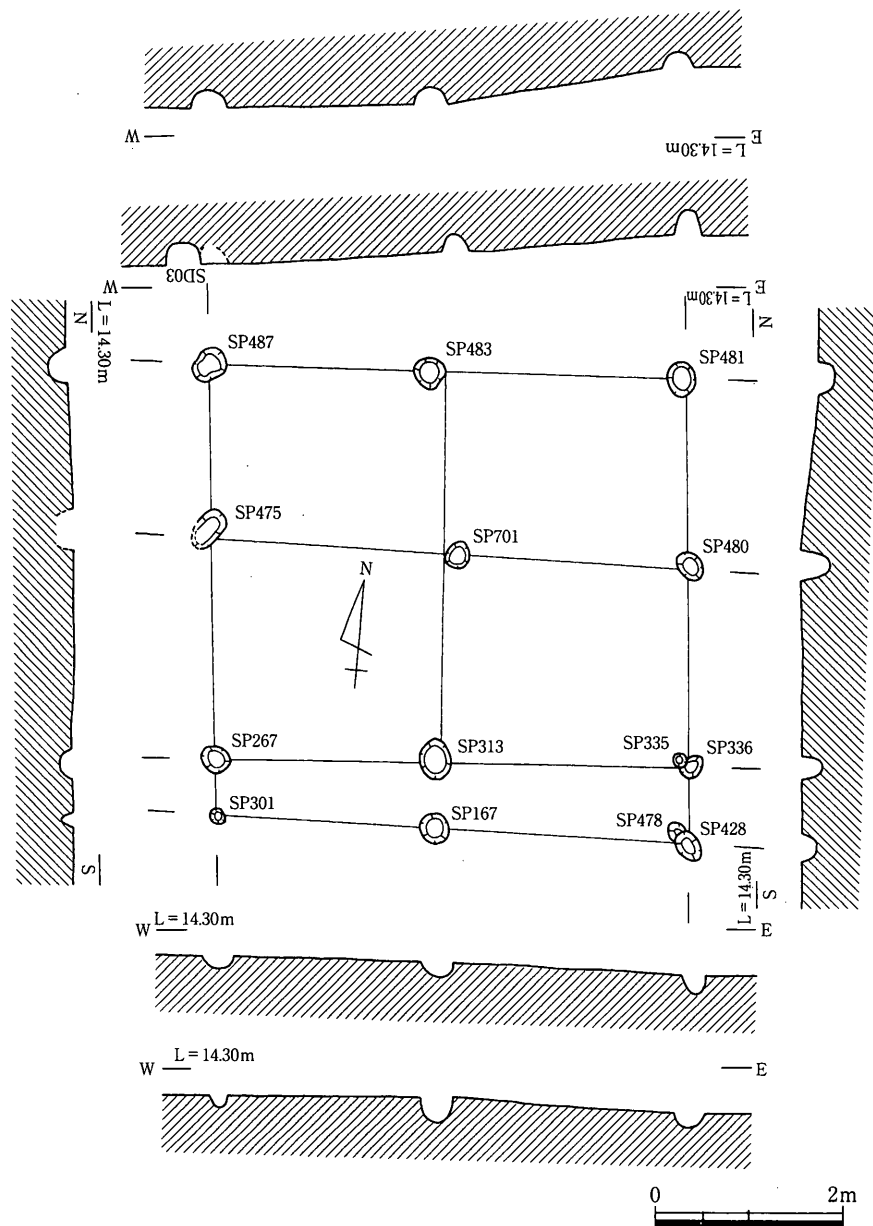
第16図 I区SB09 平・断面図 (1/80)、出土遺物 (1/4)



第17图 I区SB10 平·断面图 (1/80)、出土遗物 (1/4)



第18图 I区SB12 平·断面图 (1/80)



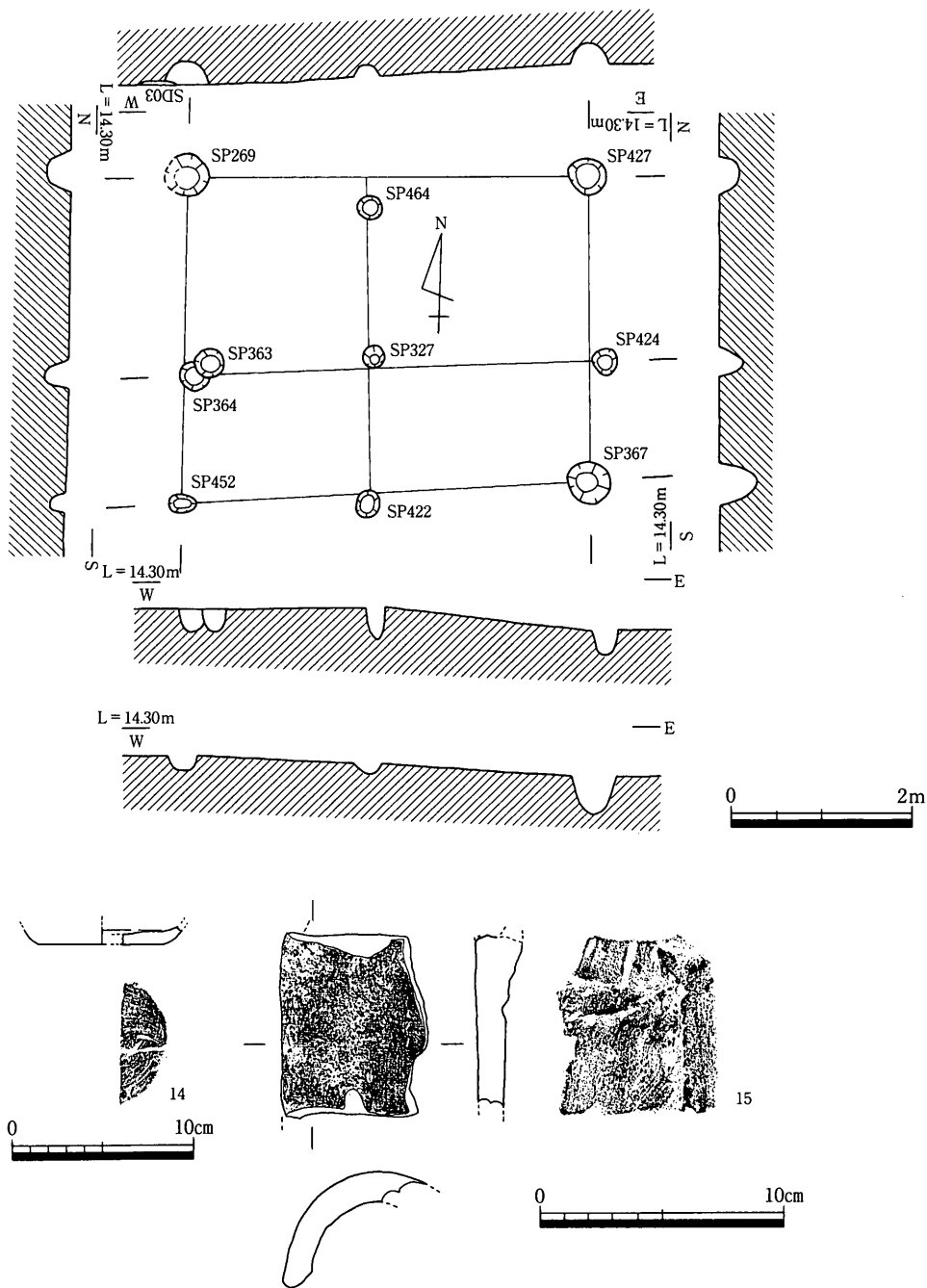
第19図 I区SB11 平・断面図 (1/80)

SB16 (第23図)

調査区南東部で検出した側柱建物である。SB14、15、17と重複する。規模は梁間1間×桁行3間(1.60m×4.90m)である。主軸方向はN-7°-Wである。柱穴の平面形はほぼ円形であり、深さ14~36cmを測る。出土遺物には土師器小皿(20、21)、杯、瓦器、東播系コネ鉢(22)、亀山焼甕(23)がある。20は底部をヘラ切りする。21は強いナデにより口縁部が外反する。23は外面に格子目叩き、内面に青海波文が見られる。20、21より建物の時期は13世紀後半~14世紀代と考えられる。

SB17 (第24図)

調査区の南東部で検出した側柱建物である。SB14(SP351)に切られ、SB13と重複する。SP361はSB14を構成する柱穴ともなっている。規模は梁間1間×桁行3間(1.58m×3.92m)である。主軸方向はN-7°-Wである。柱穴の平面形は円~楕円形であり、深さ14~36cmを測る。出土遺物は土師器小皿、杯がある。詳細な時期比定しうる資料ではないが、これらより建物の時期は中世と考えられる。



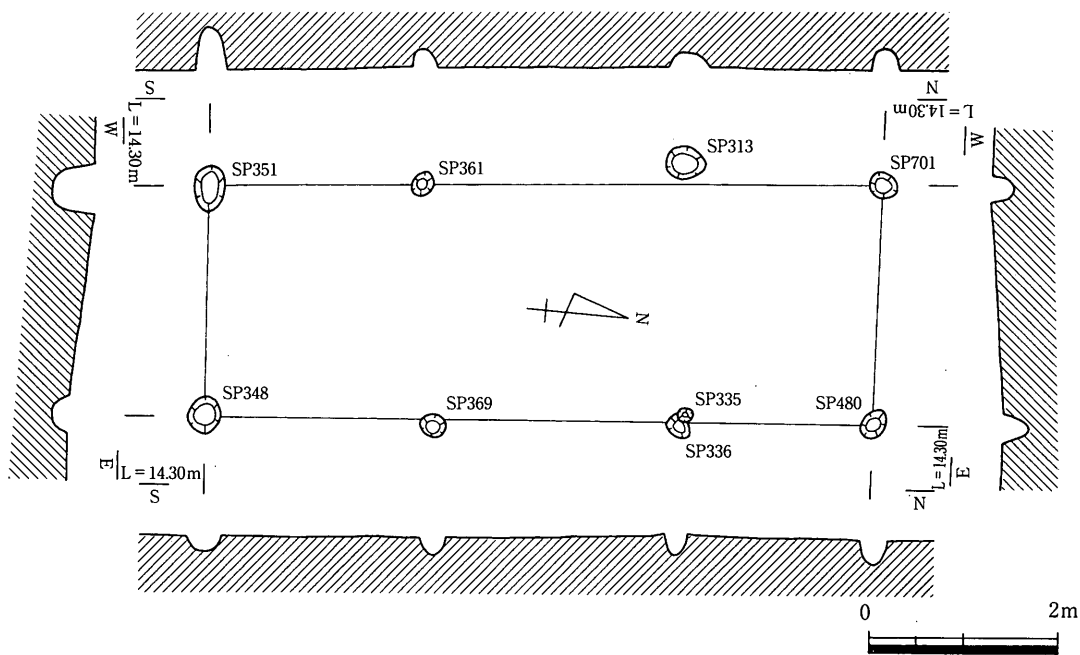
第20図 I区SB13 平・断面図 (1/80)、出土遺物 (1/4・1/3)

SB18 (第24図)

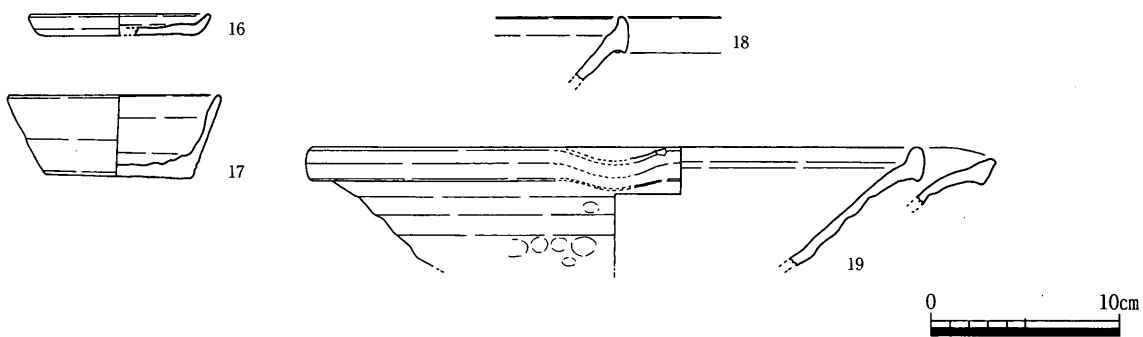
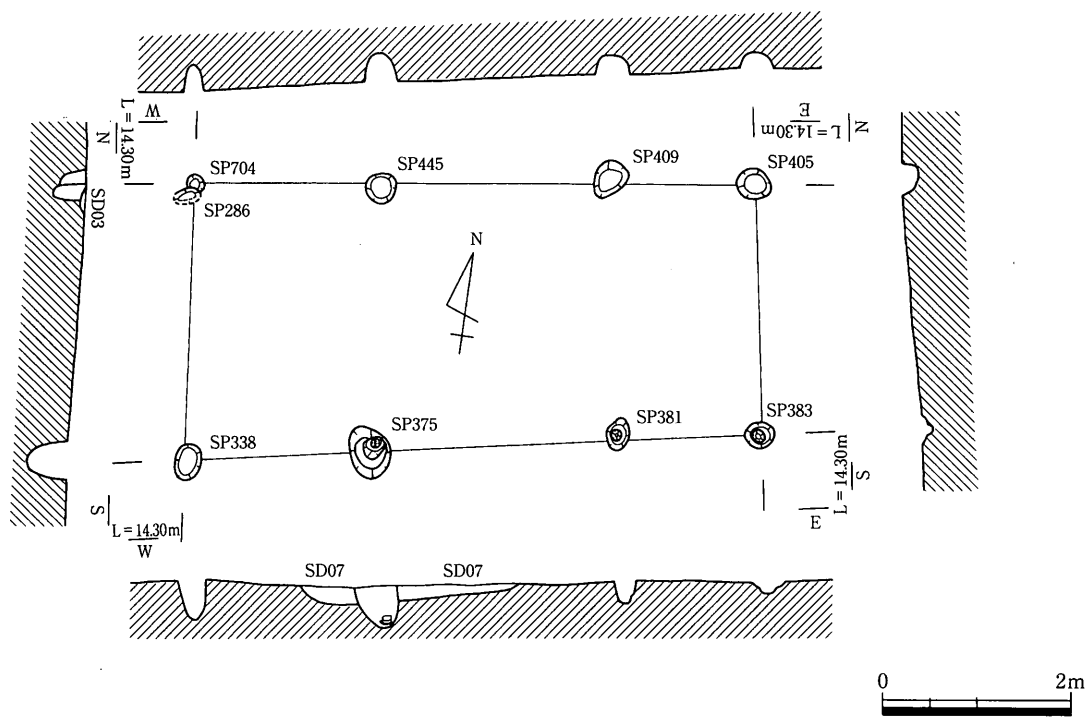
調査区の西部中央で検出した側柱建物である。SB03と重複する。規模は梁間1間×桁行2間 (2.68m×3.64m) である。主軸方向はN-78°-Eである。柱穴の平面形は楕円形であり、深さ12~26cmを測る。出土遺物は土師器細片がある。詳細な時期比定できる資料でないが、これらより建物の時期は中世と考えられる。

SB19 (第24図)

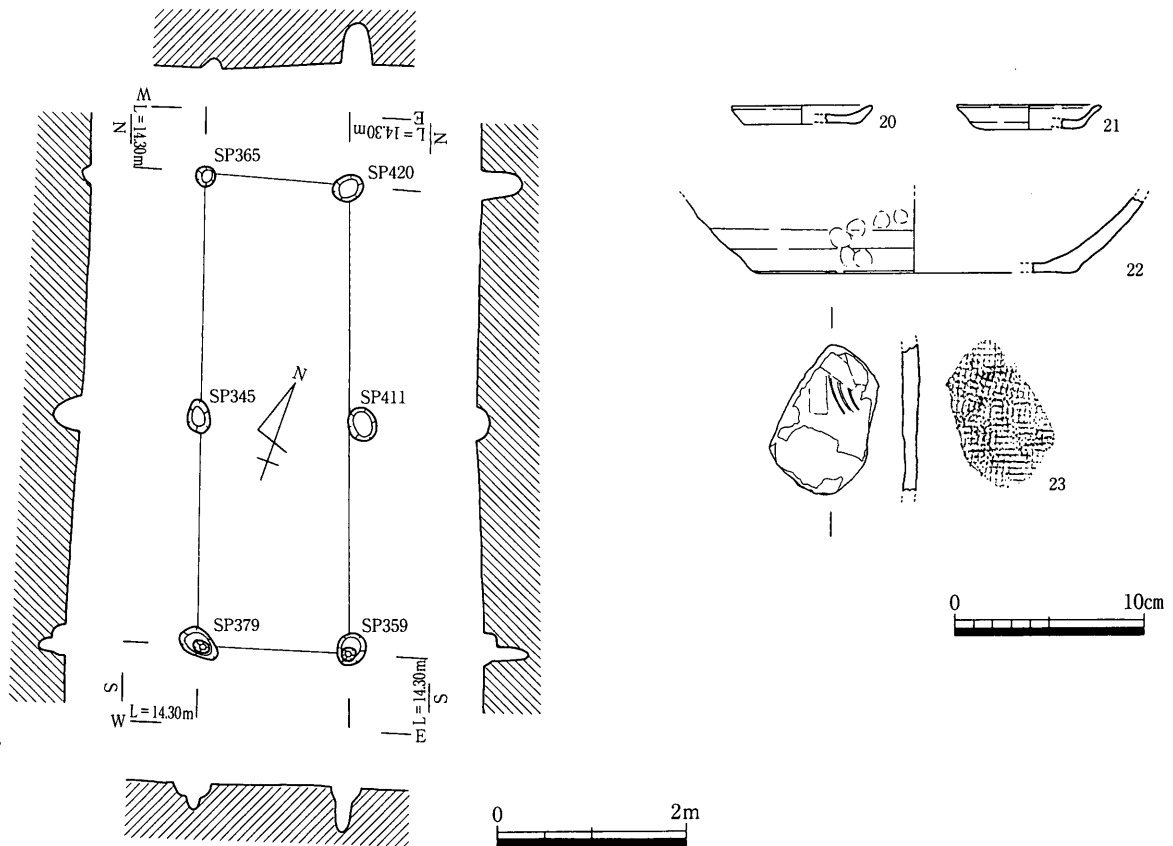
調査区南部中央で検出した側柱建物である。SD01 (14世紀後半) を切り、SD01→SB19という前後関係が想定できる。SB01、02と重複する。規模は梁間1間×桁行2間 (1.36m×3.38m) である。主軸方向はN-10°-Wである。柱穴の平面形はほぼ円形であり、深さ10~38mを測る。出土遺物は土



第21图 I区SB14 平·断面图 (1/80)



第22图 I区SB15 平·断面图 (1/80)、出土遗物 (1/4)



第23図 I区SB16 平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）

師器杯細片がある。建物の時期は遺構の切り合いから14世紀後半以降と考えられる。

SB20（第24図）

調査区南東部で検出した側柱建物である。SB10（12世紀後半～13世紀前半）、SD07を切り、SB20に切れ、SB10、SD07→SB20→SD03という前後関係が想定できる。またSB09、15と重複する。規模は梁間1間×桁行2間（2.44m×3.54m）である。主軸方向はN-77°-Eである。柱穴の平面形は円形であり、深さ10～28cmを測る。出土遺物は土師器杯細片がある。建物の時期は遺構の切り合いから12世紀後半以降と考えられる。

(2) 土坑

分布状況

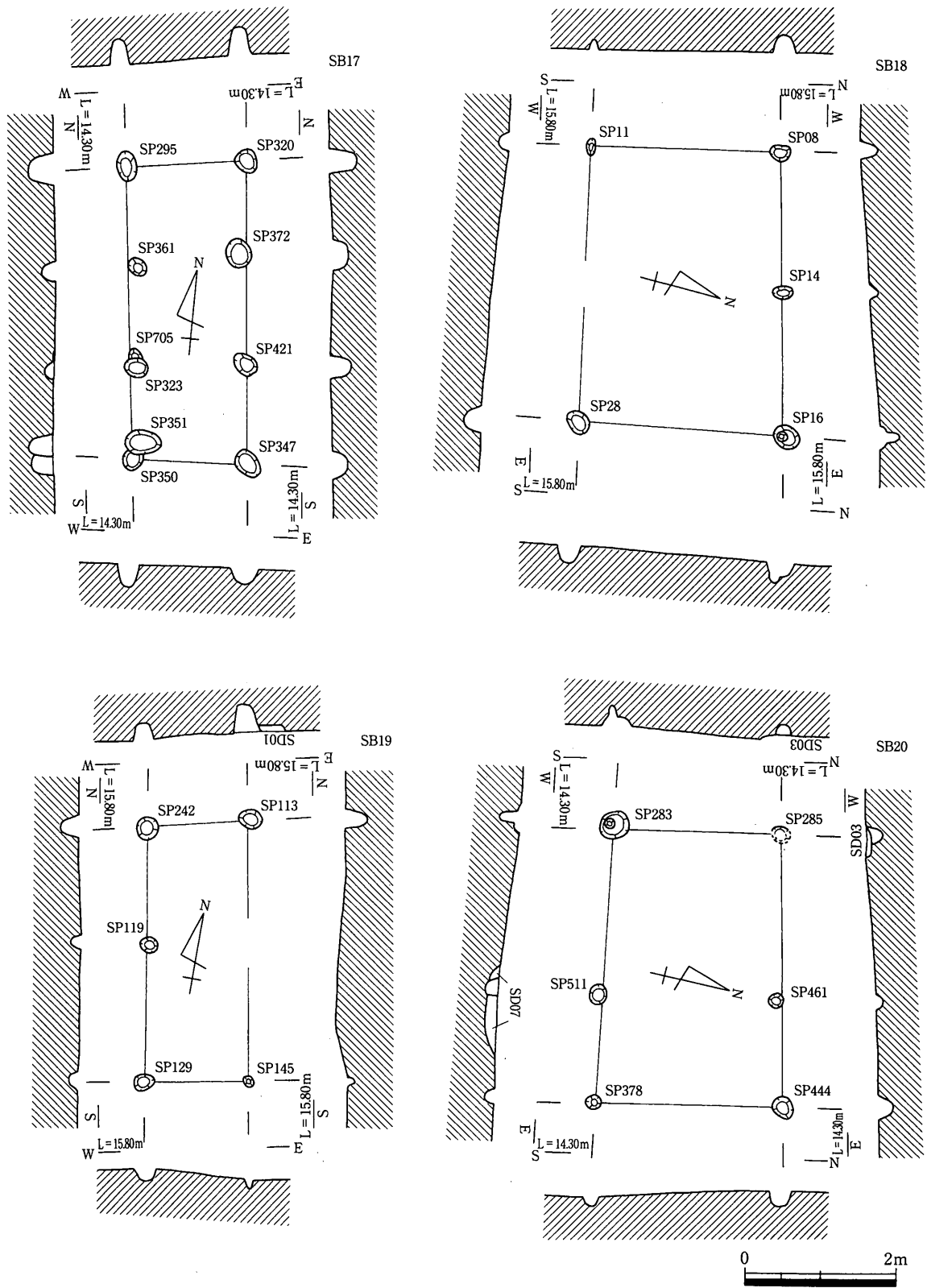
調査区北部など柱穴群がまばらになる部分で1～数基がかたまって検出される傾向がある。ただし、出土遺物が乏しいものが多く、その性格については明らかにできない。

SK01（第25図）

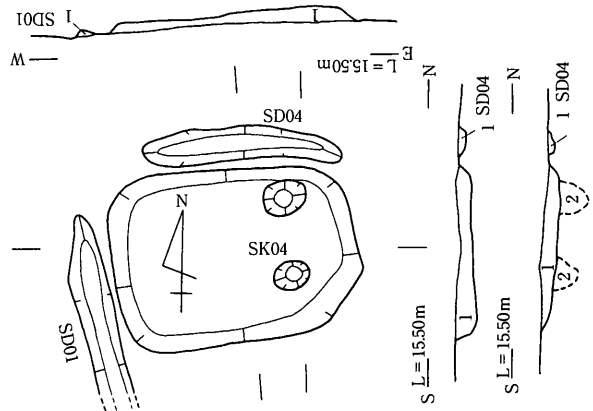
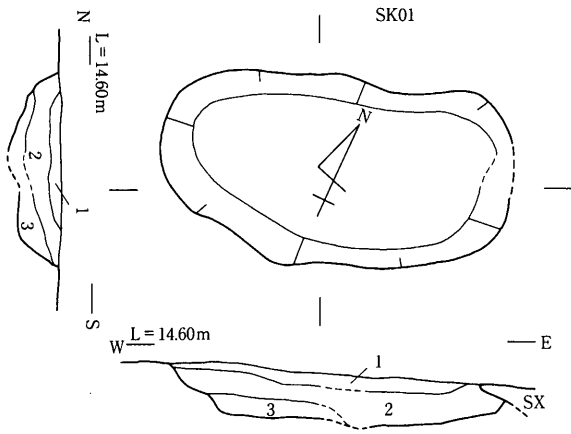
調査区北部で検出した土坑である。近接してSK02、03、05、07が位置する。平面形は隅丸方形で東部をSK02に切られる。断面形は浅い皿状を呈する。規模は長径1.88m、短径1.0m、深さ28cmを測る。主軸方向はN-81°-Eである。出土遺物は土師器杯などがごく少量出土している。土師器杯より中世の遺構であると考えられる。

SK02（第26、27図）

調査区北部で検出した土坑である。平面形はややいびつな長方形で、SK01を切り、東側は攪乱に

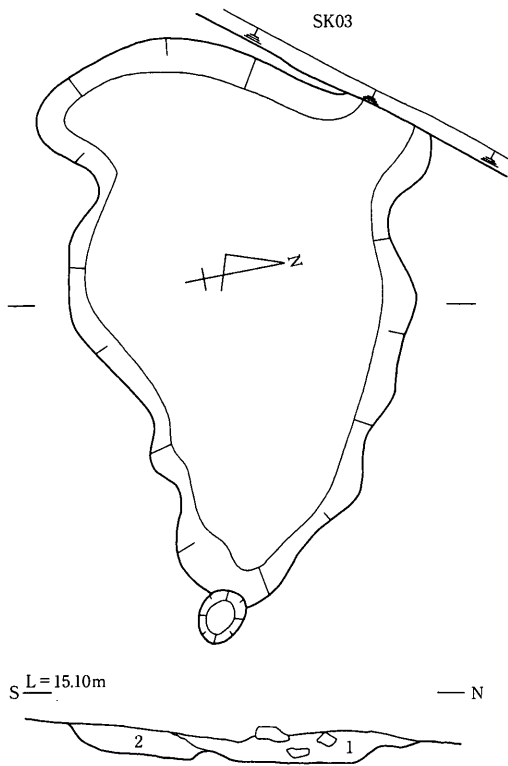


第24图 I区SB17~20 平·断面图 (1/80)

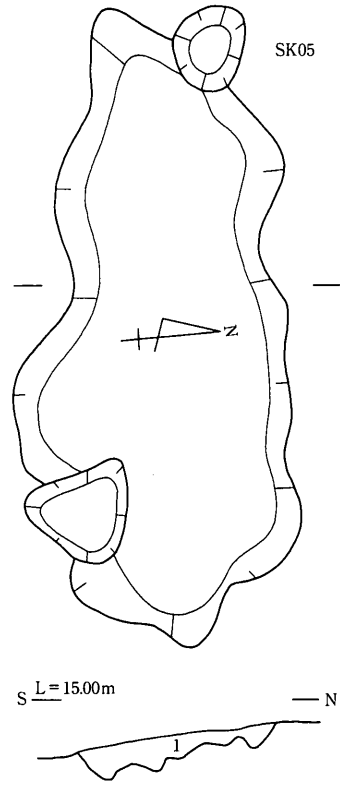


- 1 黄灰色マンガン沈着粘土 (2.5Y6/1)
- 2 灰色マンガン沈着粘性粗砂質土 (2.5Y6/1)
- 3 灰色微砂質土 (2.5Y6/1)

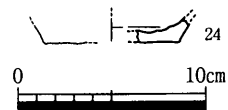
- 1 褐灰色カーボン混粘土 (10YR6/1)
ごく少量の土器細片を含む
- 2 褐灰色カーボン混粘性シルト (10YR6/1)
小土器片を含む



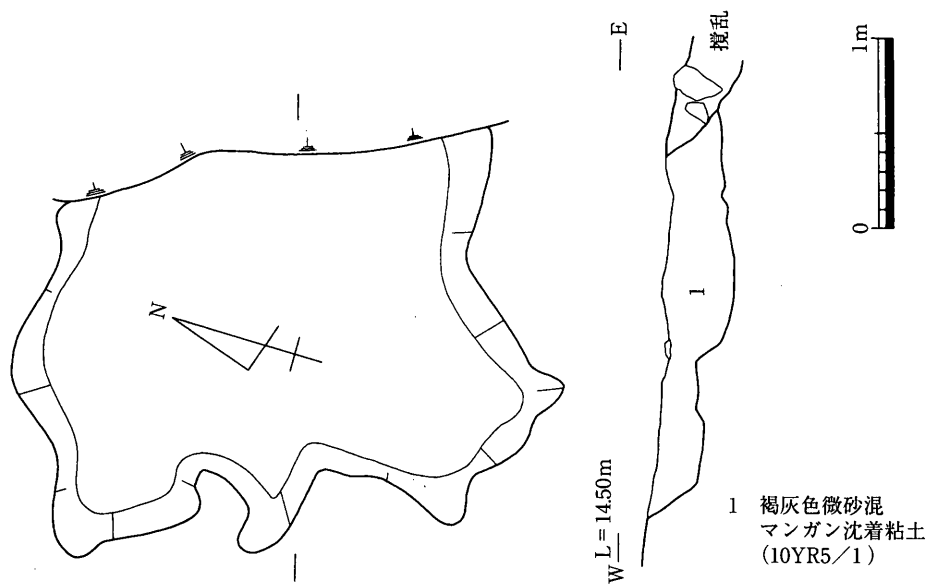
- 1 黄灰色小礫混粘土 (2.5Y5/1)
- 2 灰白色微砂混粘土 (2.5Y7/1)
1 cm大の風化礫片を多く含む



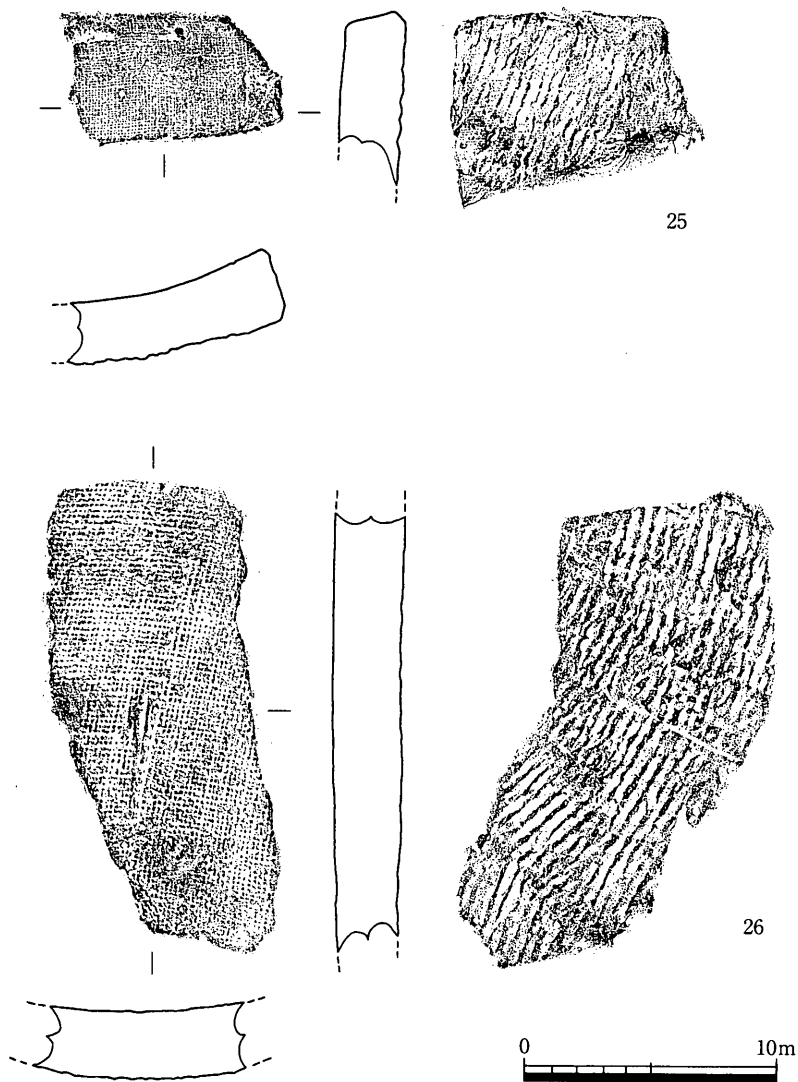
- 1 黄灰色小礫混粘土 (2.5Y5/1)



第25図 I区 SK01、SK03、SK04・SD04、SK05 平・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)



第26図 I区SK02 平・断面図 (1/40)



第27図 I区SK02 出土遺跡 (1/3)

より破壊される。断面形は逆台形を呈する。規模は長径2.92m、短径2.06m以上、深さ46cmを測る。北部と中央部で拳大～人頭大の和泉系砂岩がややまとまって出土し、これに混じって中世の土釜脚や古代の平瓦片が見られる。出土遺物は土師器杯、瓦器椀、土師質土器土釜の脚、古代の平瓦（25、26）などがある。25、26は凹面に布目、凸面に粗い縄目叩きが見られる。土坑の時期はこれらから中世と考えられる。

SK03（第25図）

調査区北部で検出した土坑である。平面形はややいびつな三角形で、Ⅱ区との境界にある側溝により東側を破壊される。断面形は浅い皿形を呈する。規模は長径3.0m、短径1.84m、深さ19cmを測る。出土遺物はないが、埋土より中世と考えられる。

SK04（第25図）

調査区北部で検出した土坑である。平面形は長方形で、断面形は浅い皿形を呈する。規模は長径1.30m、短径0.93m、深さ13cmを測る。主軸方向はN-81°-Eである。北側にSD04、西側にSD01がそれぞれ沿うように位置する。またSB03を切る。出土遺物は土師器小皿、杯細片がある。14世紀後半と考えられるSB03を切ることから土坑の時期は14世紀後半以降と考えられる。

SK05（第25図）

調査区北部で検出した土坑である。平面形はややいびつな長方形である。断面形は浅い皿形を呈するが、部分的に落ち込みがある。規模は長径3.40m、短径1.46m、深さ20cmを測る。主軸方向はN-89°-Wである。出土遺物は土師器小皿、杯（24）、丸瓦細片、古代の平瓦がある。24は口縁部を欠くが、口径11cm以下であると判断され、体部の立ち上がりやや弱いので13世紀後半～14世紀代と考えられる。丸瓦より土坑の時期は14世紀後半と考えられる。

SK06（第28図）

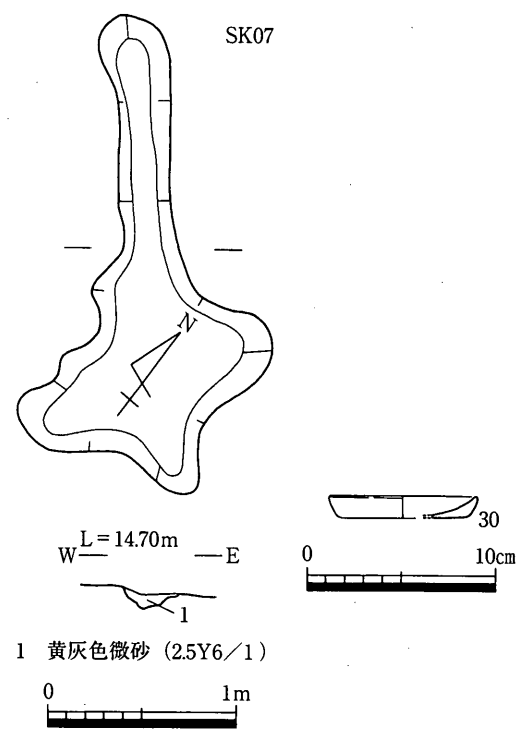
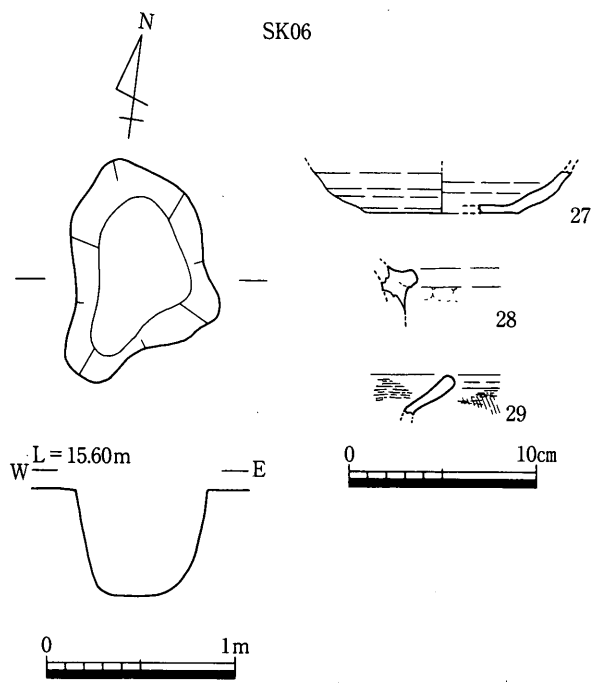
調査区南部中央で検出した土坑である。平面形はややいびつな方形で、断面形はU字形を呈する。規模は長径1.10m、短径0.78m、深さ55cmを測る。SB01を切る。出土遺物は土師器杯（27）、土師質土器土釜（28）、土鍋（29）などがある。27は体部が強く外傾し、分厚い作りである。28は断面方形の矮小な罫をもつ。15世紀後半～16世紀前半と考えられる。29は口縁部内外面にハケ目を施し、頸部で強く屈曲する。28より土坑の時期は15世紀後半～16世紀前半と考えられる。

SK07（第28図）

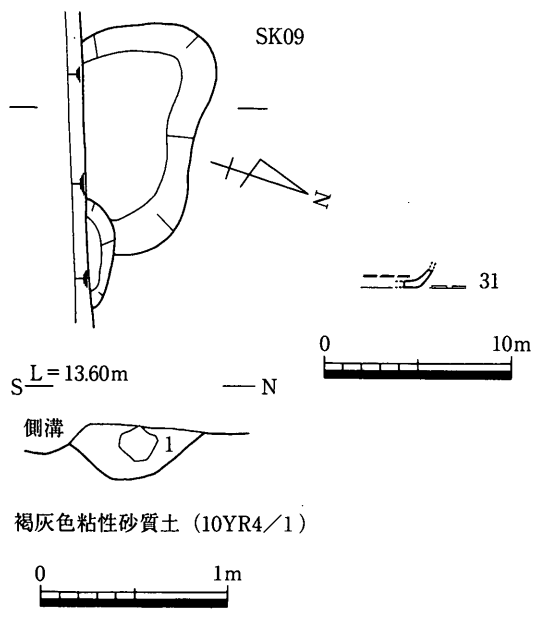
調査区北部で検出した土坑である。平面形はややいびつな方形で、北西部に溝状の部分を取り付く。断面形は浅い皿形を呈する。規模は全長2.46m、膨らんだ部分が幅1.40m、溝状部分が幅0.3m、深さ12cmを測る。出土遺物は土師器小皿（30）がある。30は口縁部と体部の境界が分厚く、短い口縁部がほぼ直立する。30より土坑の時期は13世紀後半～14世紀代と考えられる。

SK08（第29図）

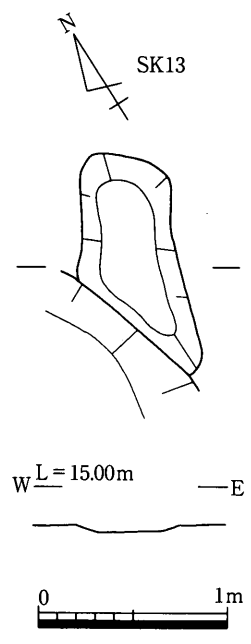
調査区南部中央で検出した土坑である。近接してSK11、13、14、SX01が分布する。これらは東側と西側の掘立柱建物群が途切れる空白部に位置する。平面形はやや東側が膨らむ楕円形で、断面形は浅い皿形を呈する。規模は長径2.60m、短径1.16m、深さ40cmを測る。主軸方向はN-76°-Eである。土坑東部から中央部にかけて拳大から人頭大の和泉系砂岩礫が密集して出土した。また土師質土器土釜脚、古代の平瓦などがこれに混じって出土した。出土遺物は上記以外に土師器小皿、杯、瓦器椀、土師質土器土釜（32）、土鍋（33）、平瓦Ⅰ、Ⅱ類（34）がある。32は口縁部の長さが罫よりやや長い



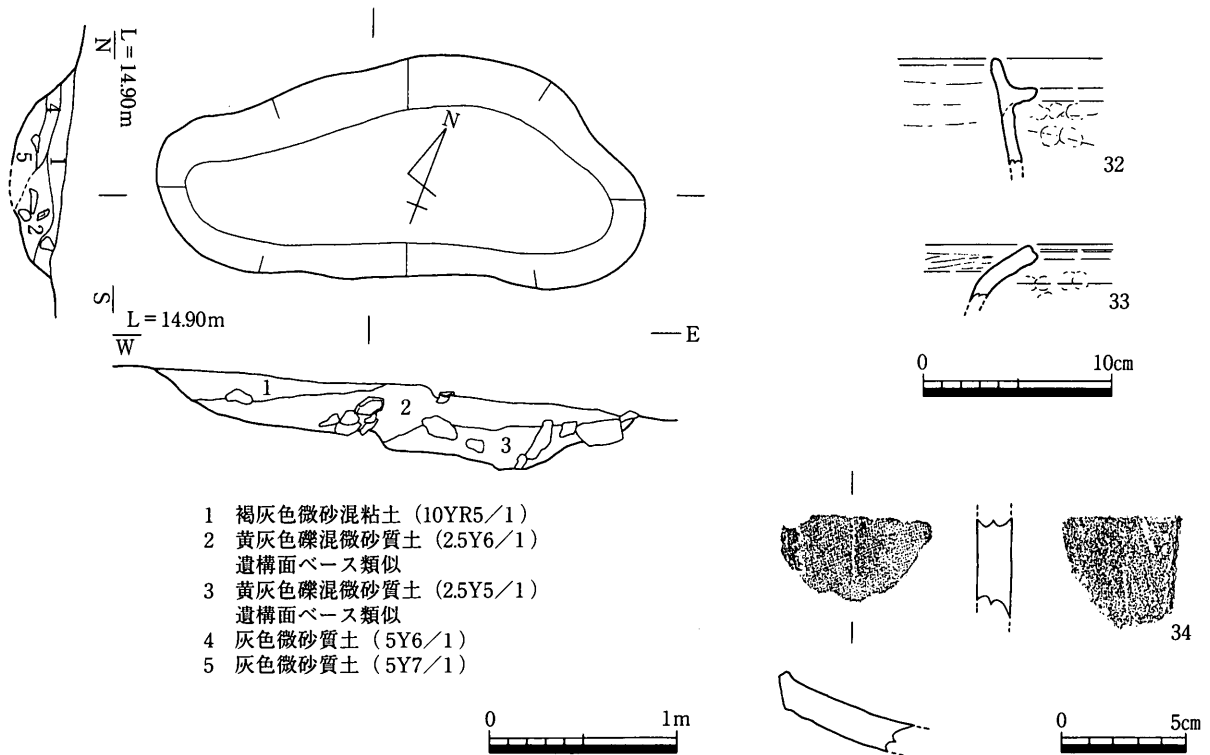
1 黄灰色微砂 (25Y6/1)



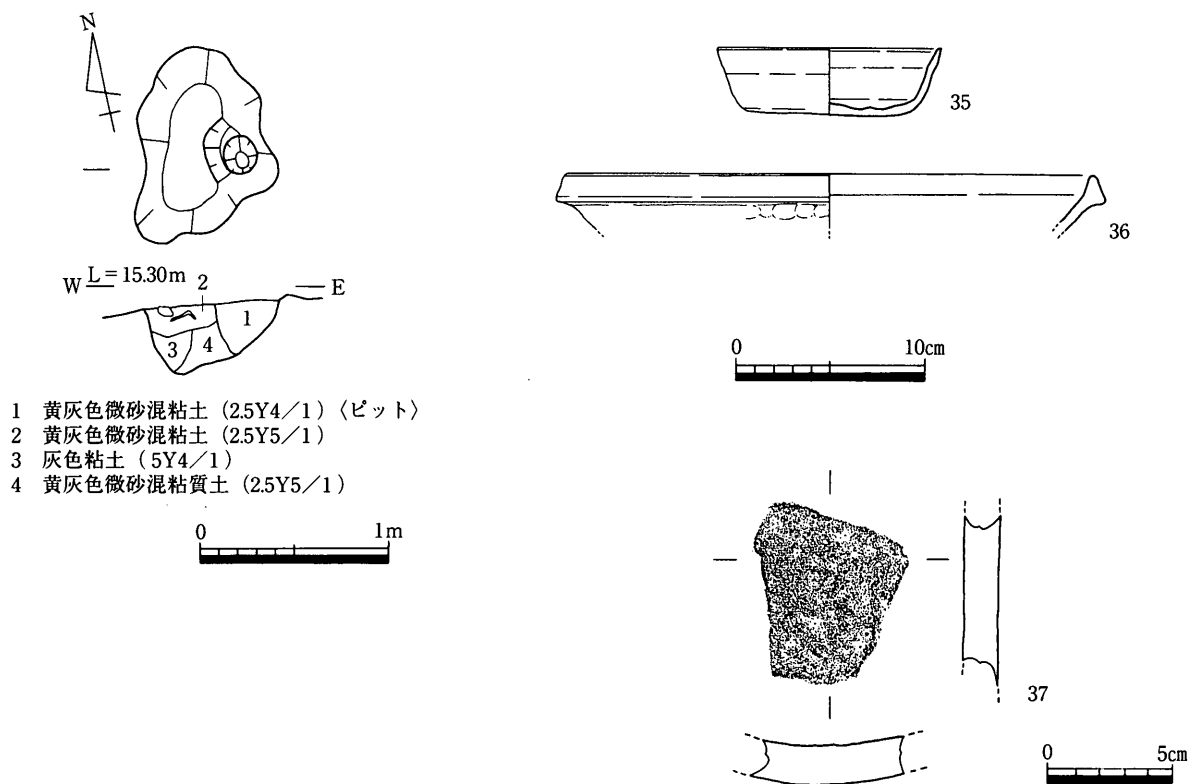
1 褐灰色粘性砂质土 (10YR4/1)



第28图 I区SK06、07、09、13 平·断面图 (1/40)、出土遗物 (1/4)



第29図 I区SK08 平・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4・1/3)



第30図 I区SK10 平・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4・1/3)

程度であるが、鏝はしっかりしている。14世紀後半と考えられる。33は内面に板ナデを施し、頸部内面の屈曲はなだらかである。34は凹面に布目を残す。14世紀後半と考えられる。32、34より土坑の時期は14世紀後半と考えられる。

SK09 (第28図)

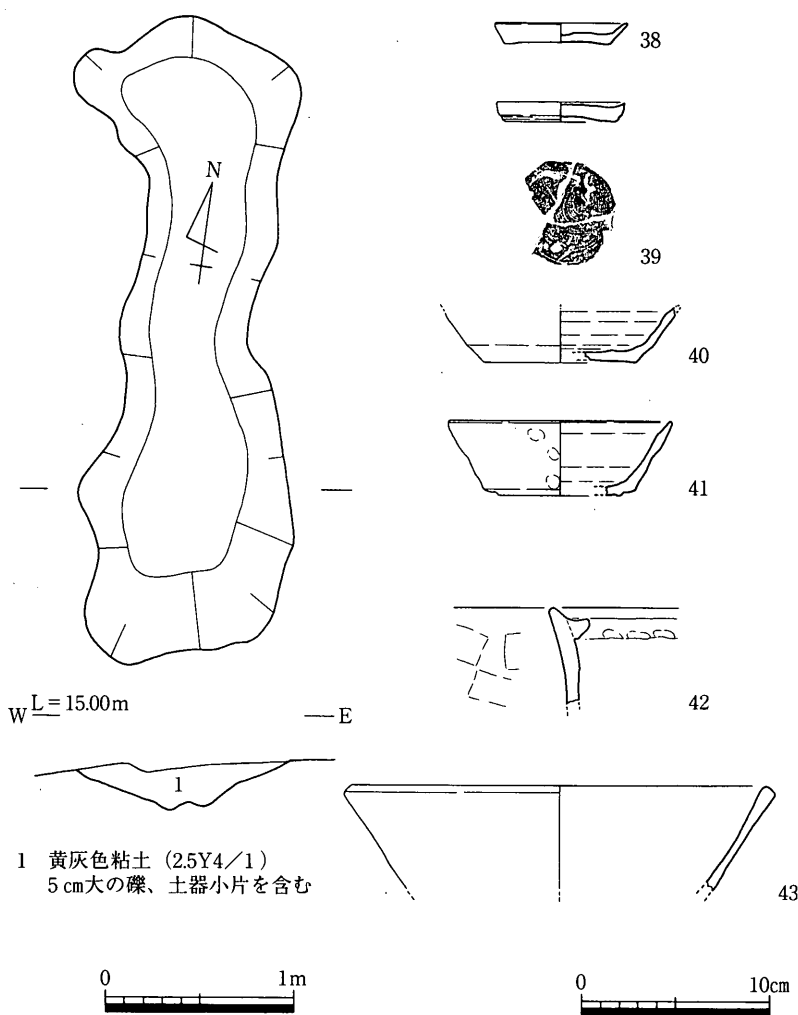
調査区南東部で検出した土坑である。平面形は南側が調査区外になるため不明だが、隅丸方形であると考えられる。断面形はU字形を呈する。規模は長径1.24m、短径0.74m以上、深さ29cmを測る。主軸方向はN-76°-Eである。土坑中央部で拳大の和泉系砂岩が1つ出土した。出土遺物は土師器小皿(31)、杯、土師質土器土釜脚がある。小片であるため詳細な時期比定はできないが、これらより土坑の時期は中世と考えられる。

SK10 (第30図)

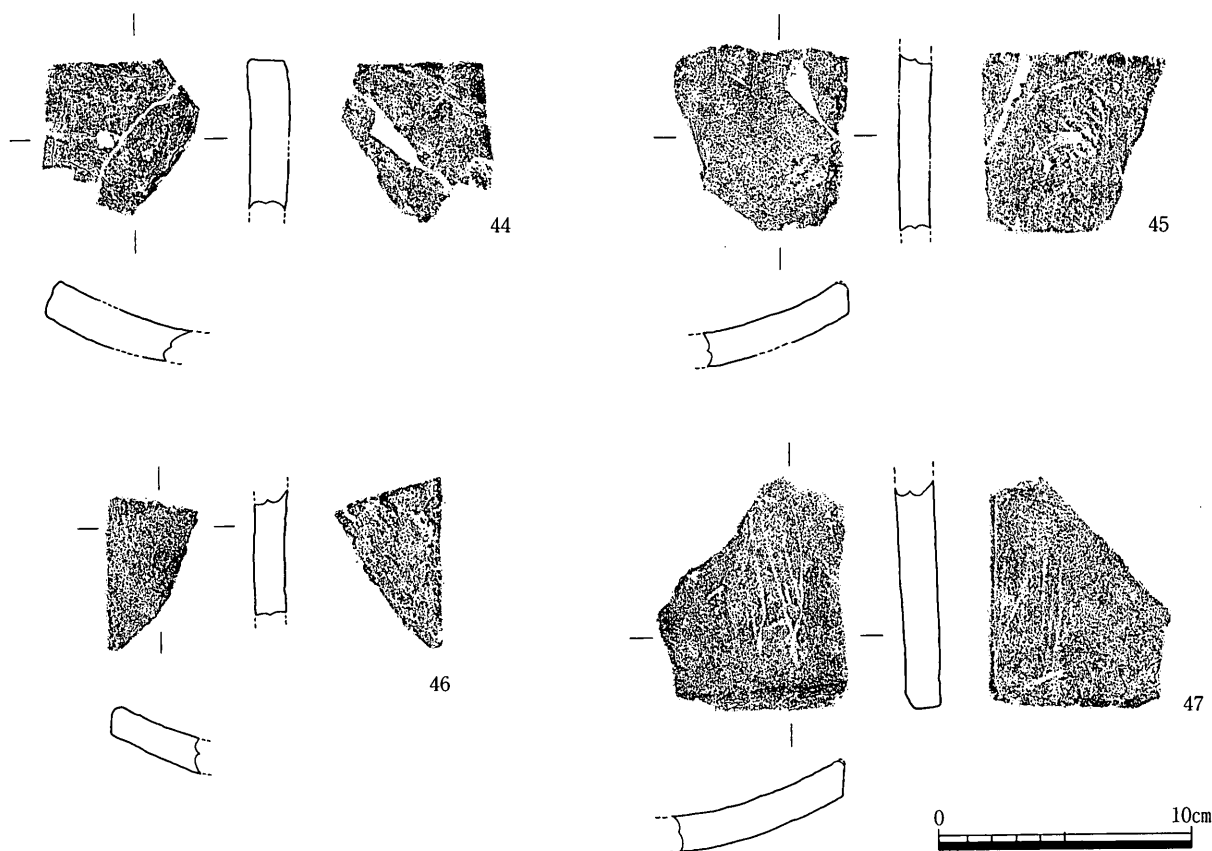
調査区南部中央で検出した土坑である。平面形はややいびつな方形であり、東側を柱穴に切られる。断面形はU字形を呈する。規模は長径1.40m、短径0.98m以上、深さ42cmを測る。出土遺物は土師器杯(35)、瓦器椀、東播系コネ鉢(36)、平瓦I類(37)などがある。35は37と共に2層より出土した。体部は直立気味で箱形の器形を呈する。14世紀代と考えられる。36は器壁に直交し、上下に肥厚する口縁部をもつ。13世紀後半と考えられる。35、37より土坑の時期は14世紀後半と考えられる。

SK11 (第31、32図)

調査区南部中央で検出した土坑である。平面形は細長い隅丸方形であり、南東部でSK13を切る。断面形は浅い皿状を呈する。規模は長径3.32m、短径1.12m、深さ25cmを測る。出土遺物は土師器小皿(38、39)、杯(40、41)、土師質土器土釜(42)、土鍋、鉢(43)、東播系コネ鉢、平瓦I類(44~47)、鉄釘、壁土がある。38は口縁部が短く、外傾する。39はごく短い直立気味の口縁部を持ち、コースター状を呈する。40、41はともに口縁部が外反し、傾きも大きい。器高の高低はあるが、約12cmと類似した法量をもつ。40は底部をヘラ切りする。42は鏝と同程度の短い口縁部を持ち、内面に板ナデを施す。15世紀前半と考えられる。43は口縁端部がわずかに肥厚し、やや角



第31図 I区SK11 平・断面図(1/40)、出土遺物1(1/4)



第32図 I区SK11 出土遺物2 (1/3)

張る。42より土坑の時期は15世紀前半と考えられる。

SK12 (第113図)

II区SK12 (P128~136) で報告。

SK13 (第28図)

調査区南部中央で検出した土坑である。南西部がSK11に切られるため平面形は不明であるが、南に広がる方形であると推測される。断面形は浅い皿状を呈する。規模は長径1.26m以上、短径0.54m以上、深さ4cmを測る。出土遺物は土師器小皿、杯、土師質土器土鍋、亀山焼甕、備前焼、平瓦II類がある。平瓦II類より土坑の時期は14世紀後半と考えられる。

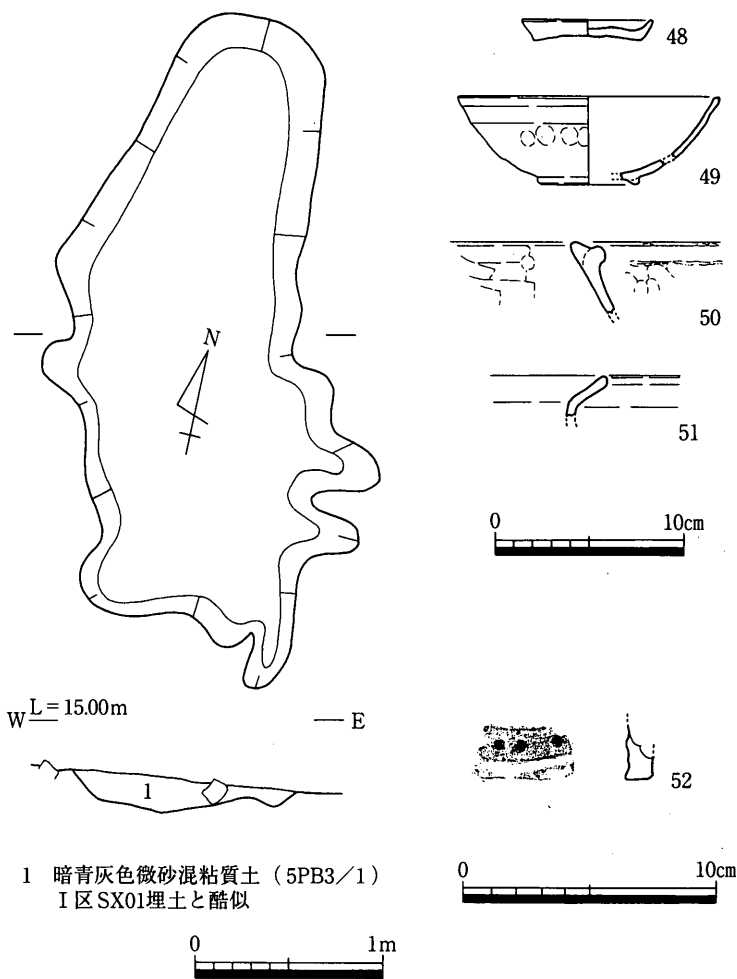
SK14 (第33図)

調査区南部中央で検出した土坑である。平面形は不整な楕円形であり、断面形は浅い皿状を呈する。規模は長径3.12m、短径1.60m、深さ20cmを測る。主軸方向はN-1°-Eである。埋土は西側に隣接するSX01 (16世紀代) と酷似する。出土遺物は土師器小皿 (48)、杯、瓦器椀 (49)、土師質土器土釜 (50)、土鍋 (51)、備前焼甕、軒平瓦I or IV類 (52)、平瓦I~III類、丸瓦I類、古代平瓦がある。48は外傾する短い口縁部をもつ。49は断面形の半円形の小さい高台を持つ。尾上編年⁽²⁾ III-1~2類に該当し、12世紀後半から13世紀初頭と考えられる。50はきわめて小さい口縁部と鋳をもつ。16世紀代と考えられる。52は瓦当片である。50より土坑の時期は16世紀代と考えられる。これはSX01の時期とも合致する。

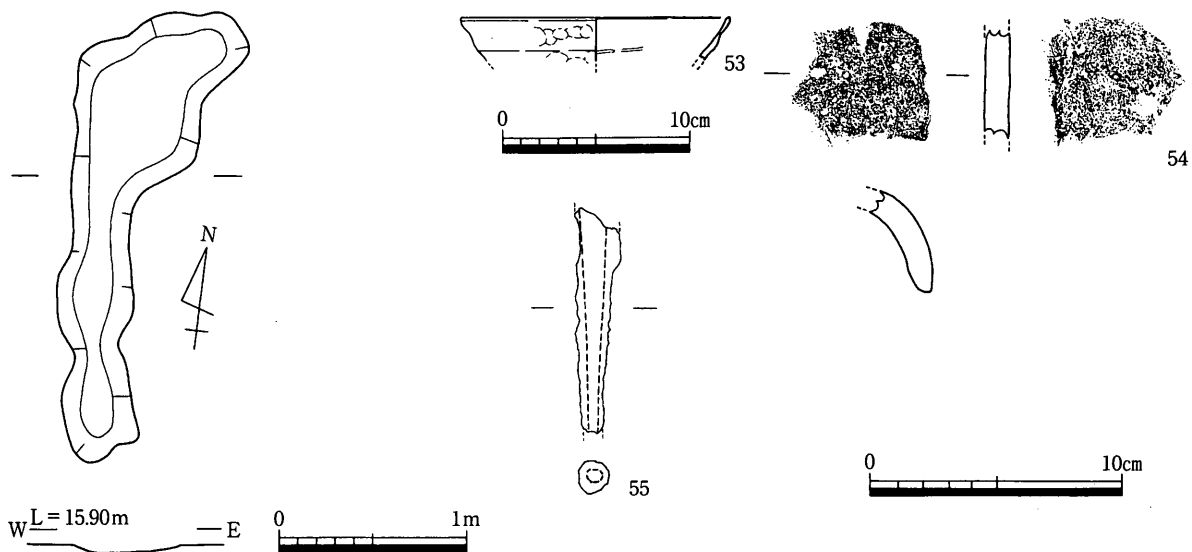
SK15 (第34図)

調査区西部中央で検出した土坑である。平面形は溝状であり、北端部に東に振る。断面形は浅い皿

状を呈する。規模は長径2.46m、幅0.40~0.68m、深さ20cmを測る。出土遺物は土師器杯、瓦器碗(53)、平瓦I類、丸瓦I類(54)、鉄釘(55)がある。53は内面に横方向のヘラミがきが見られる。尾上編年Ⅲ-1~2類に該当し、12世紀後半から13世紀初頭と考えられる。54は胴部片である。14世紀後半と考えられる。54より土坑の時期は14世紀後半と考えられる。



第33図 I区SK14 平・断面図(1/40)、出土遺物(1/4・1/3)



第34図 I区SK15 平・断面図(1/40)、出土遺物(1/4・1/3)

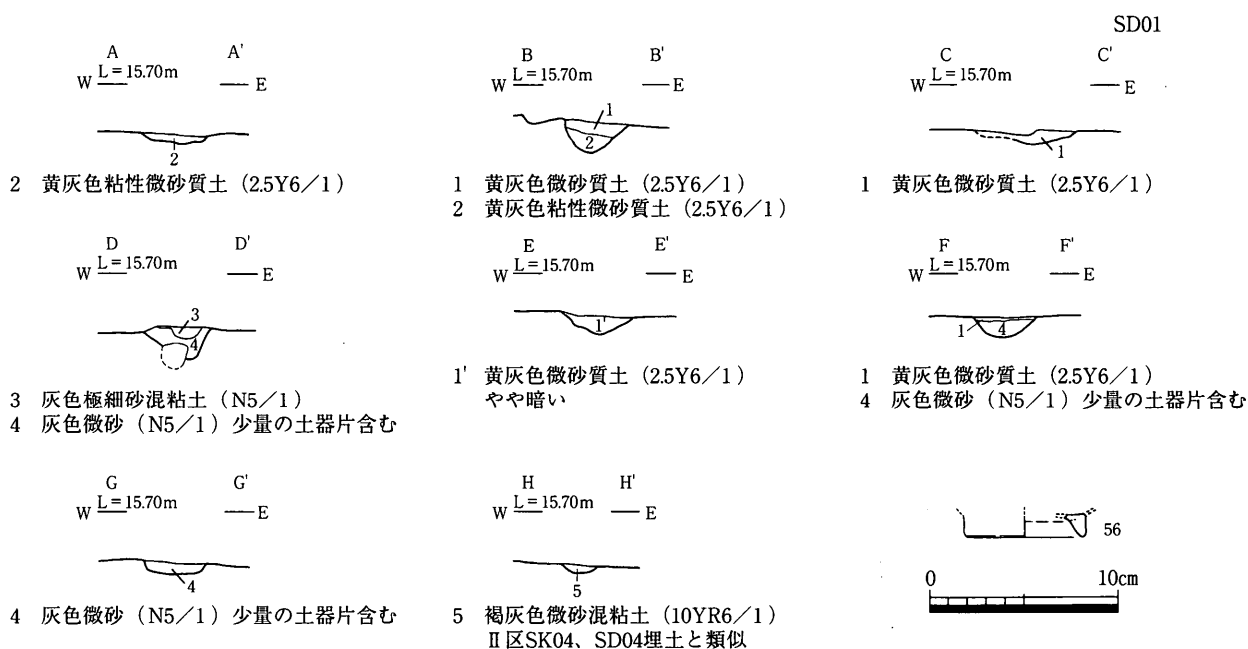
(3) 溝

SD01 (第35図)

調査区南部中央で検出した溝である。I区南部に密集する柱穴群の西端部に位置する。SB01に切られ、SB02を切る。断面形は浅い皿状ないしU字状を呈する。幅0.15~0.40m、深さ5~19cmを測る。主軸方向はN-4°-Wである。出土遺物は土師器杯、椀(56)、土師質土器土鍋、管状土錘、平瓦I類、丸瓦I類、古代平瓦がある。56は張り付け高台である。13世紀代と考えられる。瓦より溝の時期は14世紀後半と考えられる。

SD02 (第35図)

調査区南東部で検出した溝である。SB07、08、SD03(14世紀後半以降)を切る。断面形は浅い皿状を呈する。幅0.20~0.40m、深さ4~12cmを測る。主軸方向はN-86°-Eである。出土遺物はないが、SD03を切るので溝の時期は14世紀後半以降と考えられる。



第35図 I区SD01、02、05、07 断面図(1/40)、出土遺物(1/4)

SD03 (第36、37図)

調査区南東部で検出した溝である。SB07、09、10、11、13、15、20を切り、SD02に切られる。断面形は浅い皿状ないしU字状を呈する。幅0.25~0.60m、深さ7~15cmを測る。主軸方向はN-12°-Wである。出土遺物は土師器小皿(57)、杯、瓦器椀(58)、東播系コネ鉢、平瓦(59)がある。58は尾上編年Ⅲ-1~2類に該当し、12世紀後半から13世紀初頭と考えられる。59は凹面に布目、凸面に縄目叩きが見られ、古代に位置づけられる。14世紀後半のSB13を切るため溝の時期は14世紀後半以降と考えられる。

SD04 (第25図)

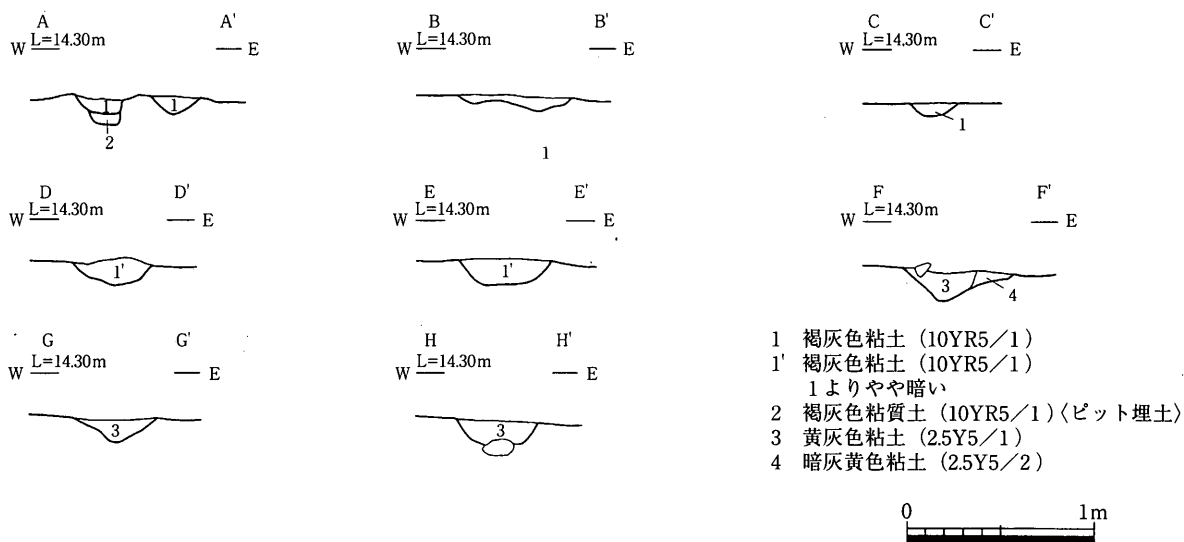
調査区西部中央で検出した溝である。SK04の北側に主軸方向を揃え、近接して位置する。断面形は浅い皿状を呈する。幅0.20m、深さ4cmを測る。主軸方向はN-89°-Eである。出土遺物はないが、埋土より中世と考えられる。

SD05 (第35図)

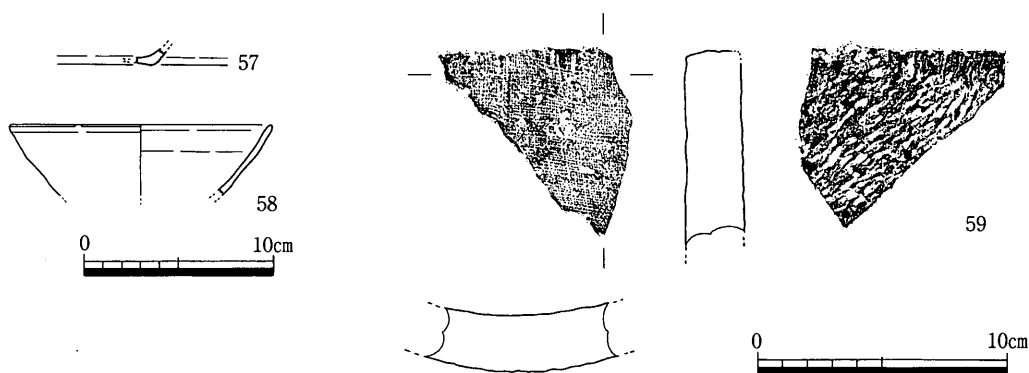
調査区南東部で検出した溝である。断面形は浅い皿状を呈する。幅約0.30m、深さ約10cmを測る。主軸方向はN-88°-Wである。出土遺物はないが埋土より中世と考えられる。

SD06 (第38図)

調査区南部中央で検出した溝である。断面形は浅い皿状を呈するが、底部に起伏がある。最大幅

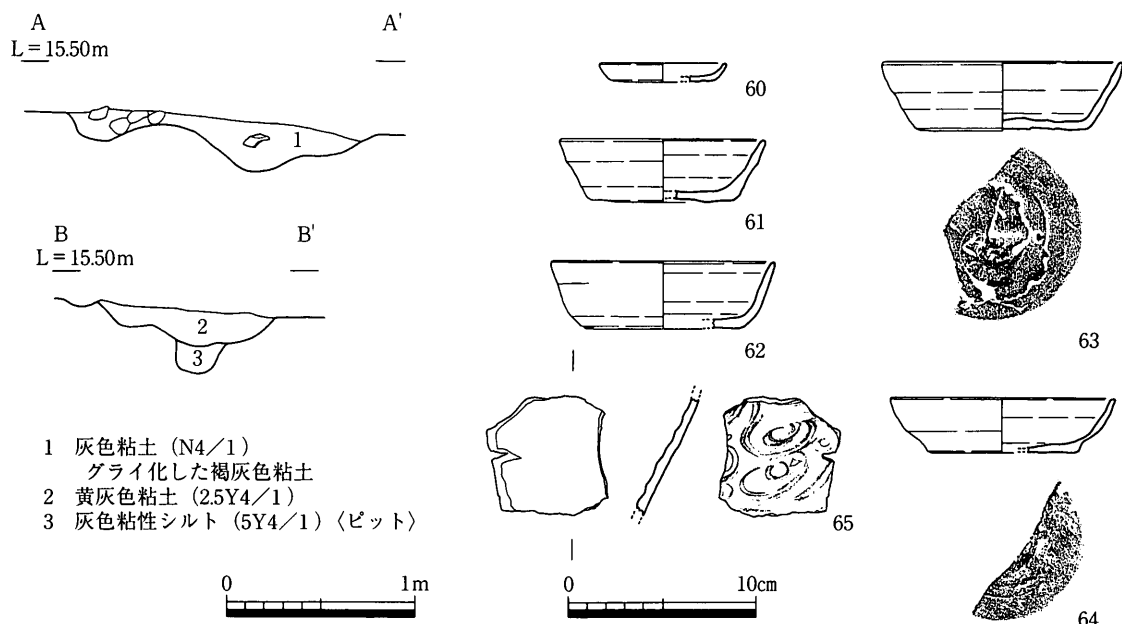


第36図 I区SD03 断面図 (1/40)



第37図 I区SD03 出土遺物 (1/4・1/3)

1.60m、深さ20~30cmを測る。主軸方向はN-3°-Wである。土師器小皿(60)、杯(61~64)、土師質土器土釜、土鍋、青白磁梅瓶(65)がある。60は口縁部が直立気味で底部をヘラ切りする。61は体部が分厚い作りである。13世紀後半~14世紀前半と考えられる。62は体部の立ち上がりがきつい。13世紀後半~14世紀後半と考えられる。63は底部をヘラ切りする。64は体部の下部を強く横ナデし、くぼむ。13世紀前半~14世紀前半と考えられる。65は外面に渦巻き文を施す。61、62、64より溝の時期は13世紀後半~14世紀前半と考えられる。



- 1 灰色粘土 (N4/1)
グライ化した褐灰色粘土
- 2 黄灰色粘土 (2.5Y4/1)
- 3 灰色粘性シルト (5Y4/1) (ピット)

第38図 I区SD06 断面図(1/40)、出土遺物(1/4)

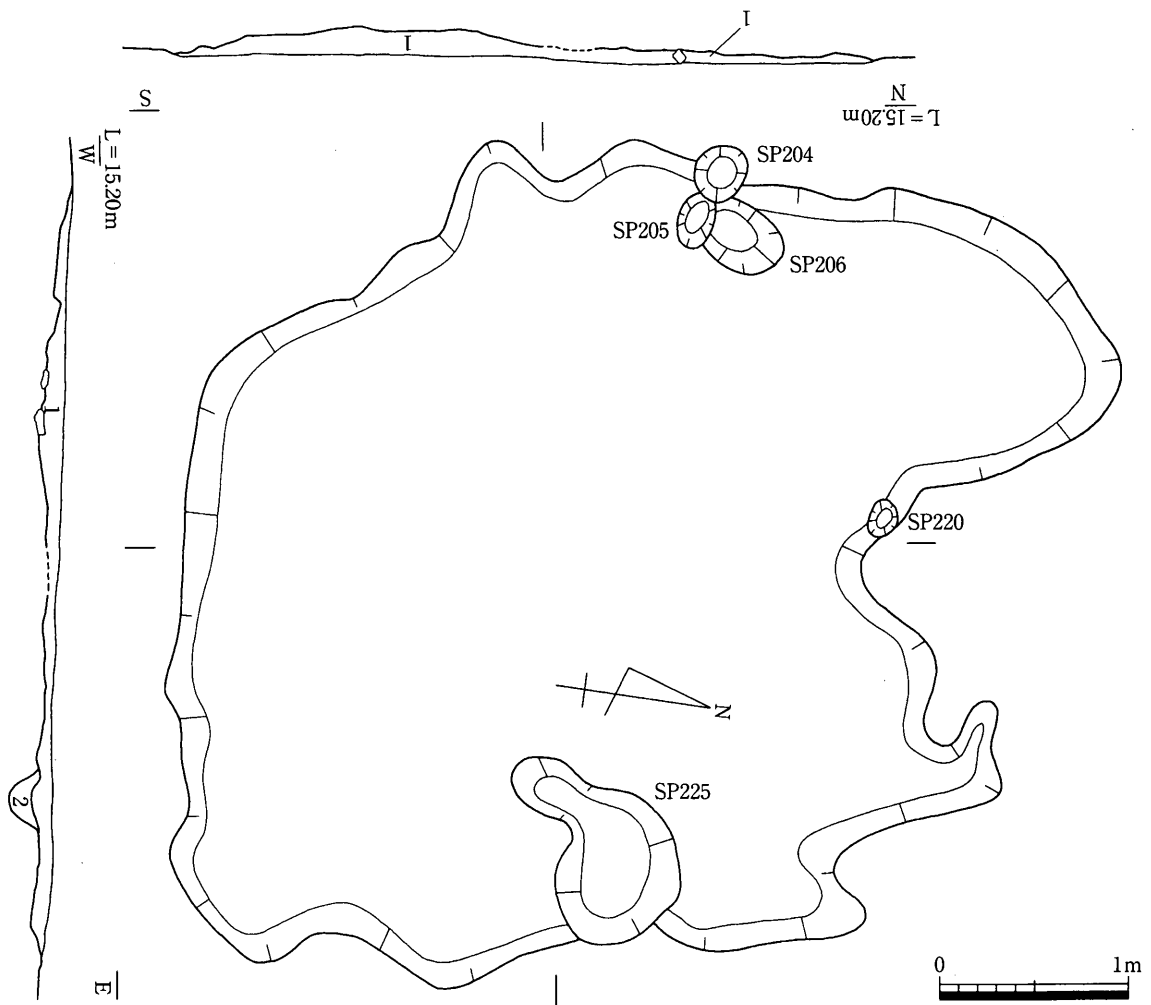
SD07 (第35図)

調査区南東部で検出した溝である。南部は調査区外に延びる。SB10、15、20に切られる。断面形は浅い皿状を呈する。最大幅1.20m、深さ約10cmを測る。主軸方向はN-72°-Wである。出土遺物は土師器杯がある。12世紀後半~13世紀前半のSB10に切られるので溝の時期は13世紀前半以前と考えられる。

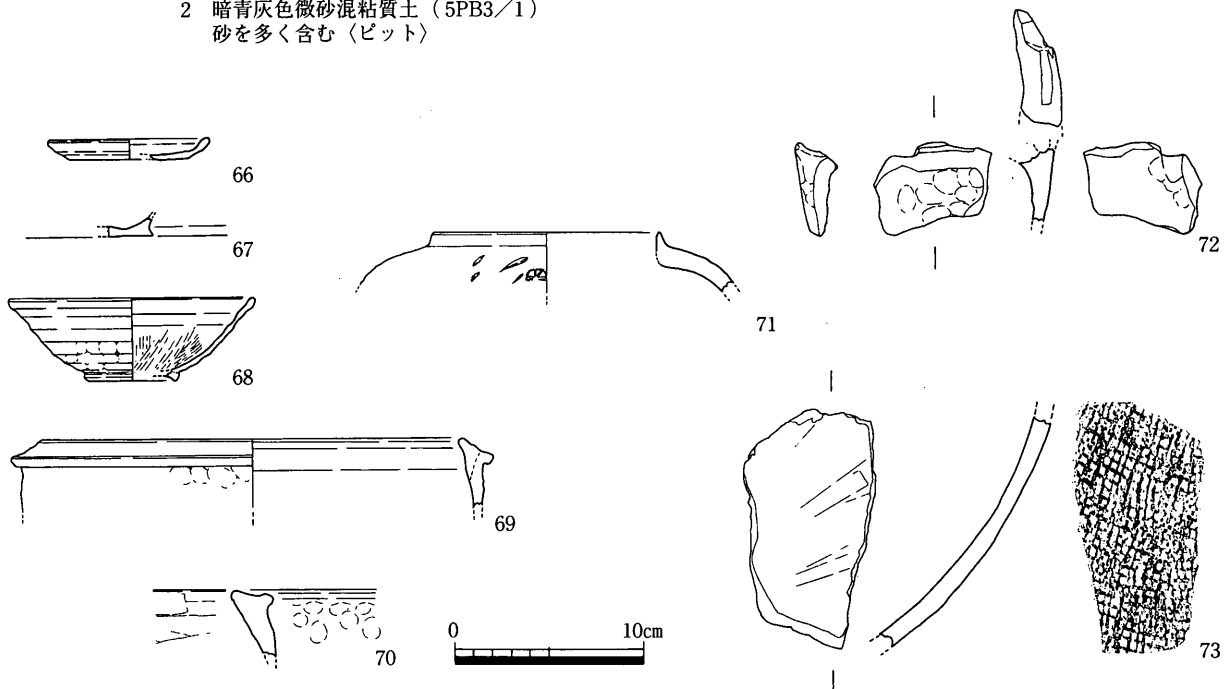
(4) 性格不明遺構

SX01 (第39図)

調査区南部中央で検出した性格不明遺構である。平面形はややいびつな方形であり、北西部が丸く突出する。断面形は緩やかな掘り込みで浅い皿状を呈する。底場は小さな起伏がある。北西部でSB04を切る。規模は長径4.86m、短径4.08m、深さ20cmを測る。出土遺物は土師器小皿(66、67)、杯、須恵器椀(68)、土師質土器土釜(69、70)、土鍋、茶釜(71)、把手付鍋(72)、瓦質土器すり鉢、亀山焼甕(73)、平瓦I~Ⅲ類がある。66は外傾する短い口縁部をもち、端部が丸く膨らむ。68は内面に板ナデを施し、断面三角形の小さい高台を持つ。69は鋳とほぼ一体化した口縁部をもつ。15世紀後半~16世紀前半と考えられる。70は69以上に短い口縁部と痕跡的な鋳をもつ。16世紀代と考えられる。71は口縁端部が細く尖る。72は把手の端面に面取りを施す。73は外面に格子目叩きを施す。遺構の時期は69~72より16世紀代と考えられる。



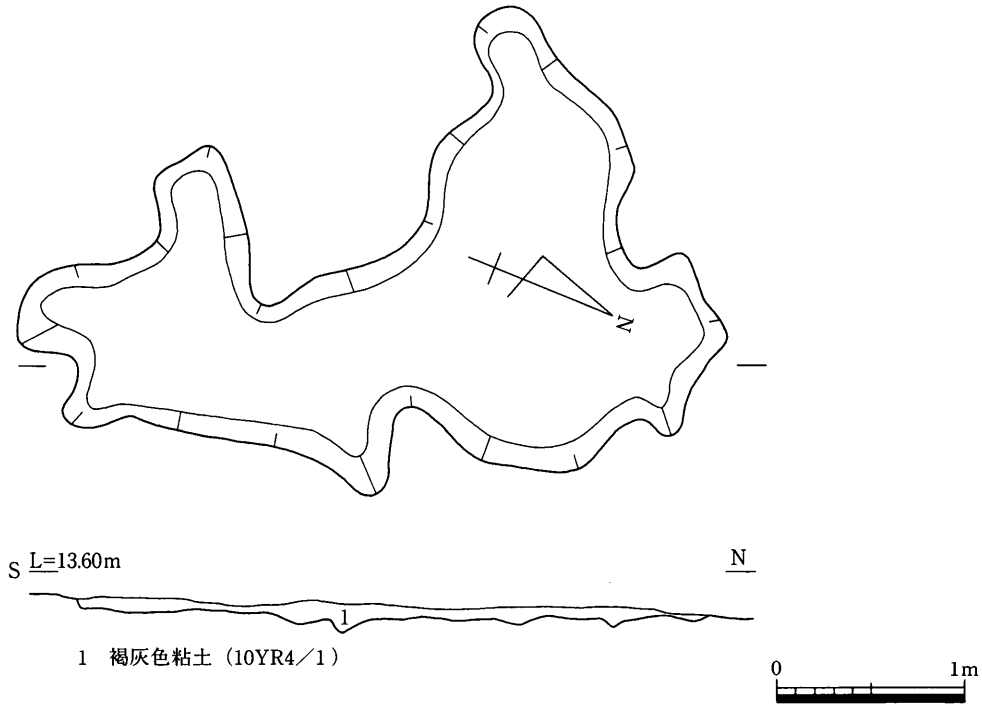
- 1 暗青灰色微砂混粘質土 (5PB3/1)
土器小片を多く含む
- 2 暗青灰色微砂混粘質土 (5PB3/1)
砂を多く含む〈ピット〉



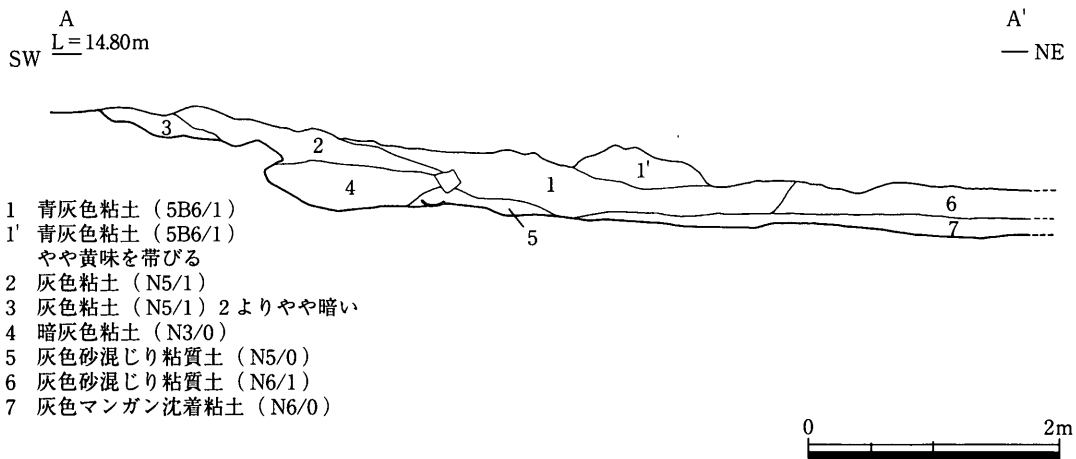
第39図 I区SX01 平・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)

SX02 (第40図)

調査区南東部で検出した性格不明遺構である。柱穴群が希薄になった部分に位置する。平面形はかなりいびつな「コ」の字形であり、南端と北端で西に折れる。断面形は浅い皿状を呈し、底場は細かい起伏がある。規模は長径3.80m、短径は最大2.40m、深さ18cmを測る。出土遺物は土師器小皿、杯、土師質土器土鍋がある。詳細な時期比定に耐える資料はないが、これらから遺構の時期は中世と考えられる。



第40図 I区SX02 平・断面図 (1/40)



- 1 青灰色粘土 (5B6/1)
- 1' 青灰色粘土 (5B6/1)
やや黄味を帯びる
- 2 灰色粘土 (N5/1)
- 3 灰色粘土 (N5/1) 2よりやや暗い
- 4 暗灰色粘土 (N3/0)
- 5 灰色砂混じり粘質土 (N5/0)
- 6 灰色砂混じり粘質土 (N6/1)
- 7 灰色マンガン沈着粘土 (N6/0)

第41図 I区SR01 断面図 (1/60)

(5) 旧河道

SR01 (第41図)

II区SR01 (P137~147) でまとめて報告する。

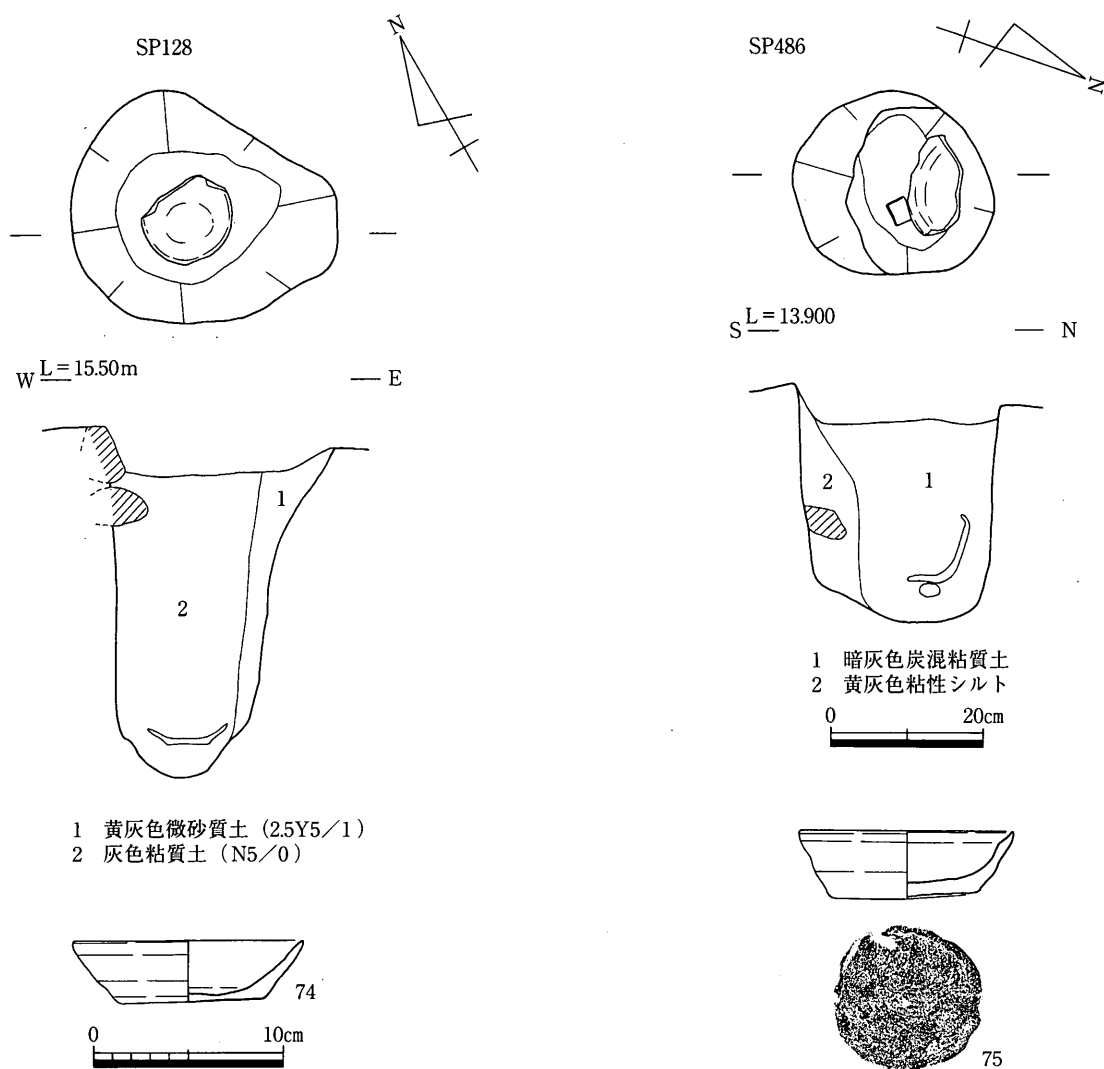
(6) 柱穴

SP128 (第42図)

調査区南西部で検出した柱穴である。平面形はややいびつな円形である。断面形はU字形を呈する。規模は径約35cmで、深さ46cmを測る。底付近で土師器杯(74)が口縁部を上に向けた状態で出土した。74は体部の外傾が強く、分厚い作りである。

SP486 (第42図)

調査区東部で検出した柱穴である。平面形は円形である。断面形はU字形を呈する。規模は径約25cmで、深さ31cmを測る。底付近で土師器杯(75)がななめに傾いた状態で出土した。75は口縁端部内面に強いナデを施し、底部をヘラ切りする。

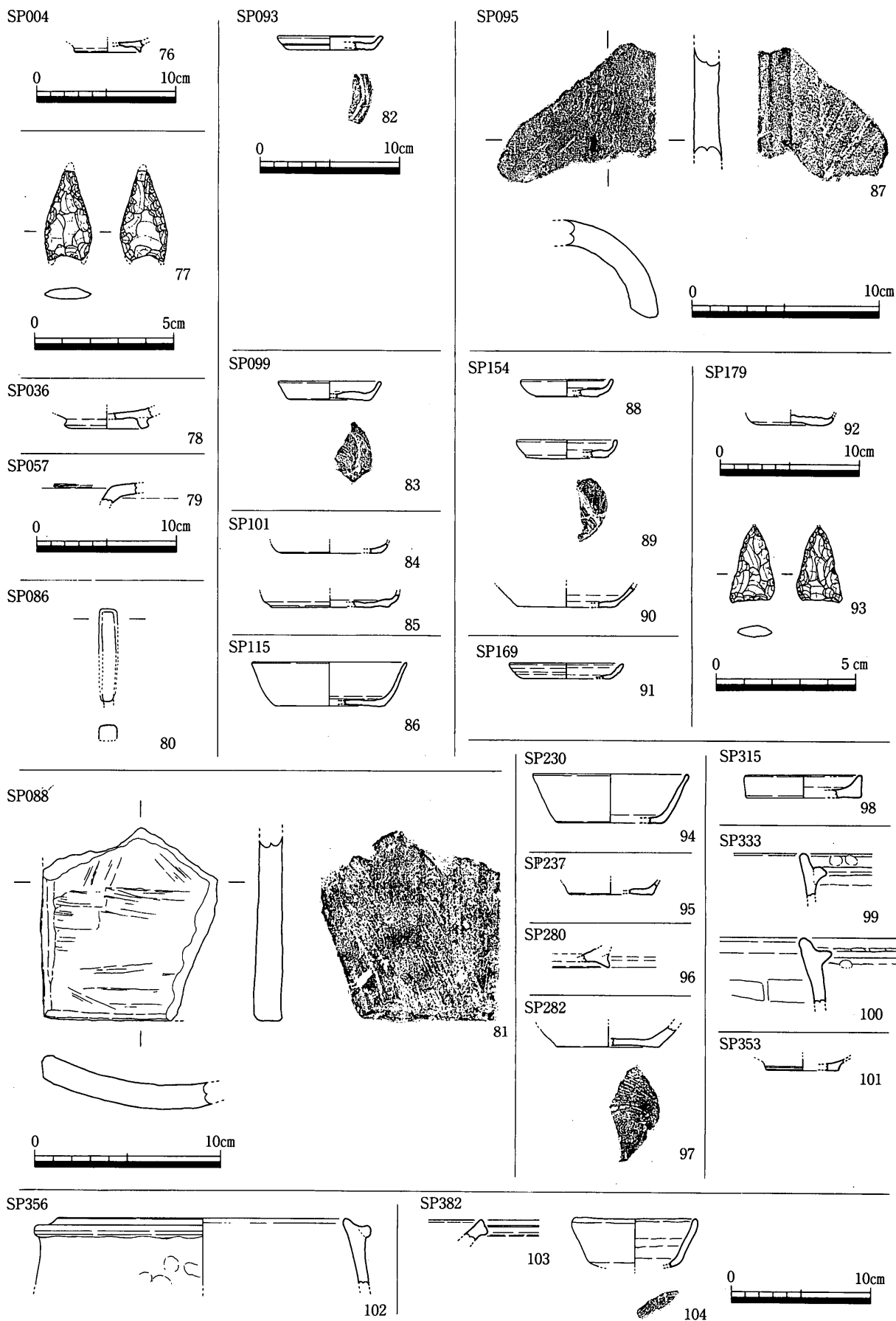


第42図 I区SP128、486 平・断面図(1/40)、出土遺物(1/4)

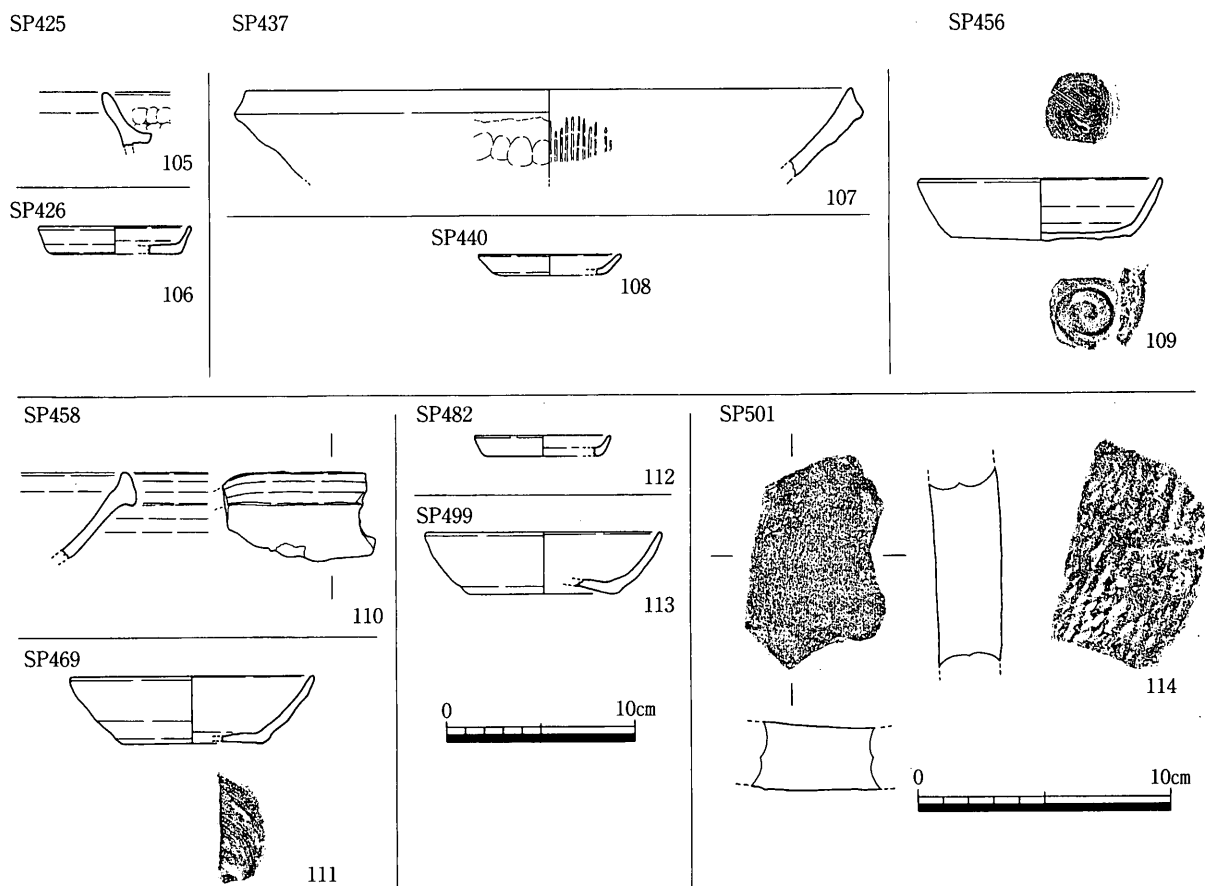
(7) 柱穴出土遺物 (第43、44図)

I区で検出した掘立柱建物、柵列を構成しない柱穴出土遺物を図化した。76は土師器の椀である。三角形の小さな張り付け高台をもつ。13世紀代と考えられる。77は凹基式の石鏝である。両側縁に丁寧な調整を施す。78は非西村産の須恵器椀である。断面方形の高台を持つ。79は土師質土器の土鍋である。内面にハケ目を施し、頸部内面で強く屈曲する。80は鉄釘である。先端部を欠損する。81は平瓦Ⅱ類である。凸面に糸切り痕が残る。14世紀後半と考えられる。82～84は土師器の小皿である。82は外傾する短い口縁部を持ち、底部をヘラ切りする。83は口縁部が直立気味でやや長い。共に13世紀後半～14世紀代と考えられる。85、86は土師器の杯である。共に薄作りであり、底部をヘラ切りする。86は13世紀後半～14世紀前半と考えられる。87は丸瓦Ⅱ類である。凸面に縄目叩き、凹面に糸切りが見られる。14世紀後半と考えられる。88、89は土師器小皿である。類似した法量をもち、共に口縁部先端が内湾する。88は底部ヘラ切りする。90は土師器の杯である。薄作りで外傾度が強い口縁部を持つ。14世紀代と考えられる。91、92は土師器の小皿である。口縁部が強く外傾する。93は平基式の石鏝である。全体的に粗い作りである。94、95は土師器杯である。94は底部をヘラ切りする。14世紀代と考えられる。96は土師器の椀である。断面三角形の小さい高台をもつ。13世紀代と考えられる。97は土師器の杯である。分厚い作りであり、底部を糸切りする。98は土師器の小皿である。直立する短い口縁部をもち、底部を糸切りする。99、100は土師質土器の土釜である。矮小な罌を持ち、口縁部は罌より少し長い。15世紀代と考えられる。101は弥生土器の底部である。102は土師質土器の土釜である。ごく小さい罌と短い口縁部をもつ。16世紀代と考えられる。103は弥生土器の甕である。口縁部を下位にわずかに肥厚させる。104は土師器の杯である。口径が小さいが、小片でゆがみもあるため本当はやや大きいかもしれない。105は土師質土器の土釜である。長い口縁部とやや丸味を帯びる断面方形の罌を持つ。14世紀後半と考えられる。106は土師器の小皿である。口縁部はほぼ直立し、底部を糸切りする。107は土師器のすり鉢である。口縁部を上方に細くつまみ出し、下方にもわずかに肥厚させる。9条の卸目をもつ。片桐編年⁽³⁾Ⅲ-⑥～⑦期に相当し、15世紀後葉～16世紀前葉と考えられる。108は土師器の小皿である。外傾する口縁部が先端でさらに外反する。109は土師器の杯である。浅い皿状の器形を呈し、底部をヘラ切りする。注目すべき点として内面にもヘラ切り痕が見られることがある。これは粘土円柱から連続的に杯を作り出した円柱作りであることを示すと考えられる。また内面ヘラ切り痕を木目痕が切っているのは109を製作以前に、粘土円柱を逆さにしたためであると考えられる。13世紀前半～14世紀前半と考えられる。110は東播系コネ鉢である。口縁端部を上下に大きく拡張させる。山仲編年D1類に該当し、14世紀前半と考えられる。111は土師器の杯である。体部が強く外傾し、底部を糸切りする。112は土師器の小皿である。口縁部は薄く、直立気味である。113は土師器の杯である。114は古代平瓦である。内面に布目が残し、外面に粗い縄目叩きを施す。

以上の遺物は概ねI区南部で検出された中世の掘立柱建物群に伴うものである。時期は12世紀後半～16世紀代におよぶが、13、14世紀代の遺物が多い。その中にはII区SF01、02で製作された瓦も含む。こうした状況は建物群の存続期間および集落の盛衰と対応する。



第43图 I区 柱穴出土遗物1 (土器 1/4、瓦 <81·87>、鉄器 <80> 1/3、石器 <77·93> 1/2)



第44図 I区 柱穴出土遺物2 (土器 1/4、瓦 <114> 1/3)

(8) 遺構外出土遺物 (第45図)

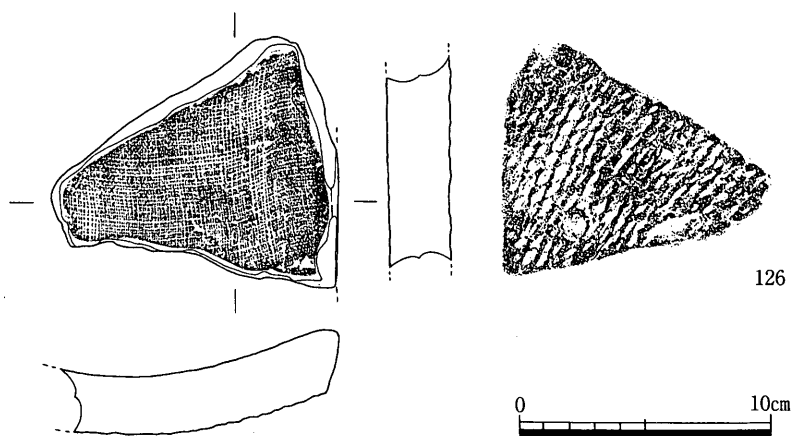
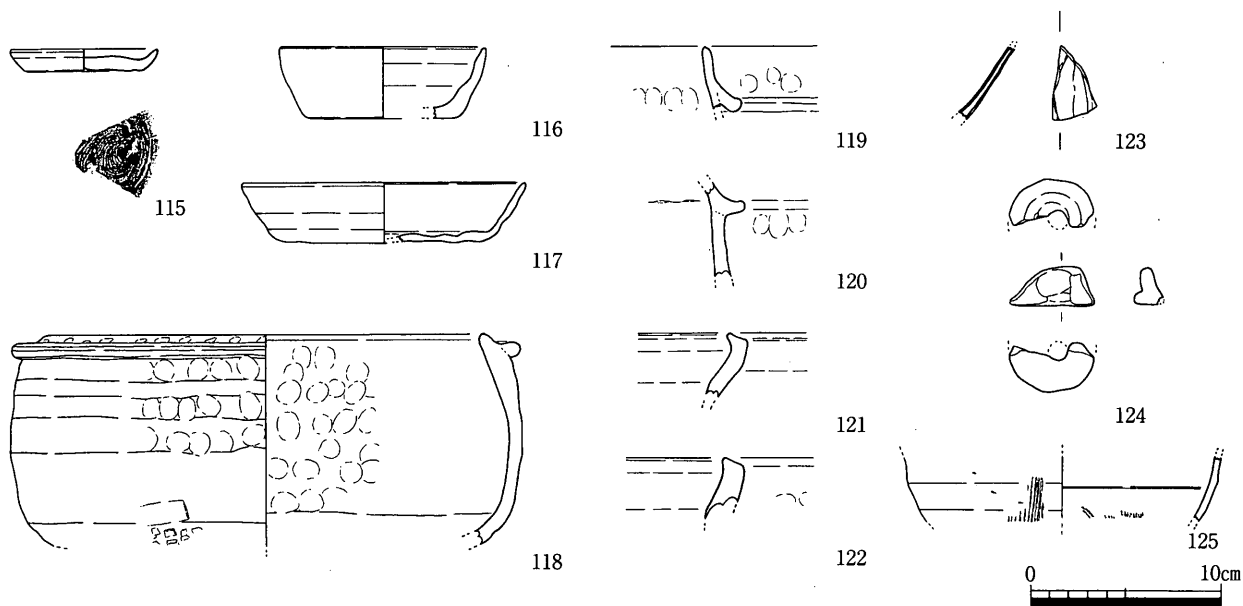
115~126はI区の遺構外で出土した遺物である。115は土師器の小皿である。口縁部は緩く外傾し、分厚い作りである。底部を糸切りする。116、117は土師器の杯である。116は器高が高く、分厚い作りである。底部を糸切りする。117は浅い皿状の器形であり、薄作りである。12世紀後半~13世紀前半と考えられる。118~120は土師質土器の土釜である。118は罽、口縁部は共に矮小である。体部外面に粗い格子目状の叩きを施す。16世紀代と考えられる。119は長い口縁部下に垂下気味の罽を張り付ける。14世紀後半と考えられる。121、122は土師質土器の土鍋である。共に口縁部先端を内面につまみ出す。123は青磁の椀である。外面に鎬蓮弁文をもつ。上田編年⁽⁴⁾ B-I類に該当し、13世紀後半と考えられる。124は土製品である。上面の平面形は円形、下面は多角形、断面が台形状を呈する。中央には上部から下位にかけて径約3cmの孔を、下端では径約1cmの孔をあける。用途は不明である。125は同安窯系の青磁である。12世紀後半~13世紀代と考えられる。126は古代の平瓦である。凹面に布目があり、凸面に粗い縄目叩きを施す。

II区の調査

以下のII区の報告において遺構名称の前にI区と付けていないものはすべてII区の遺構である。

(1) 建物

柱穴の分布状況



第45図 I区 遺構外出土遺物 (1/4・1/3)

柱穴群は埋土より中世に属すると考えられ、調査区北部では約60基が集中して検出された。3棟の掘立柱建物、1棟の柵列を復元した。3棟の建物は窯が形成された丘陵斜面東側に広がる緩斜面上に位置する。また南部でも約30基がまばらに分布し、1棟の掘立柱建物を復元した。

建物群の状況についてはいくつか留意すべきことがあるので触れておく。1つは北部の建物の切り合いについてである。建物復元は主軸方向、柱穴間距離、柱穴の並び、柱穴規模、形状、底場のレベル、埋土、出土遺物などを考慮してSB01をSB02、03が切ると考えた。だが、SB01～03において切り合う柱穴をどの建物に属すると見るかは、上記した底場レベル以前の基準では微妙な判断となる。また、埋土は同じで出土遺物にも乏しい。

後述するとおりSB01を工房と捉えた場合、SB02、03が後出するならその機能は建て替えられた工房であるとの解釈も不可能ではない。このように工房の存続期間と関連させる見方もあるので上記のような問題を内包していることを断っておく。

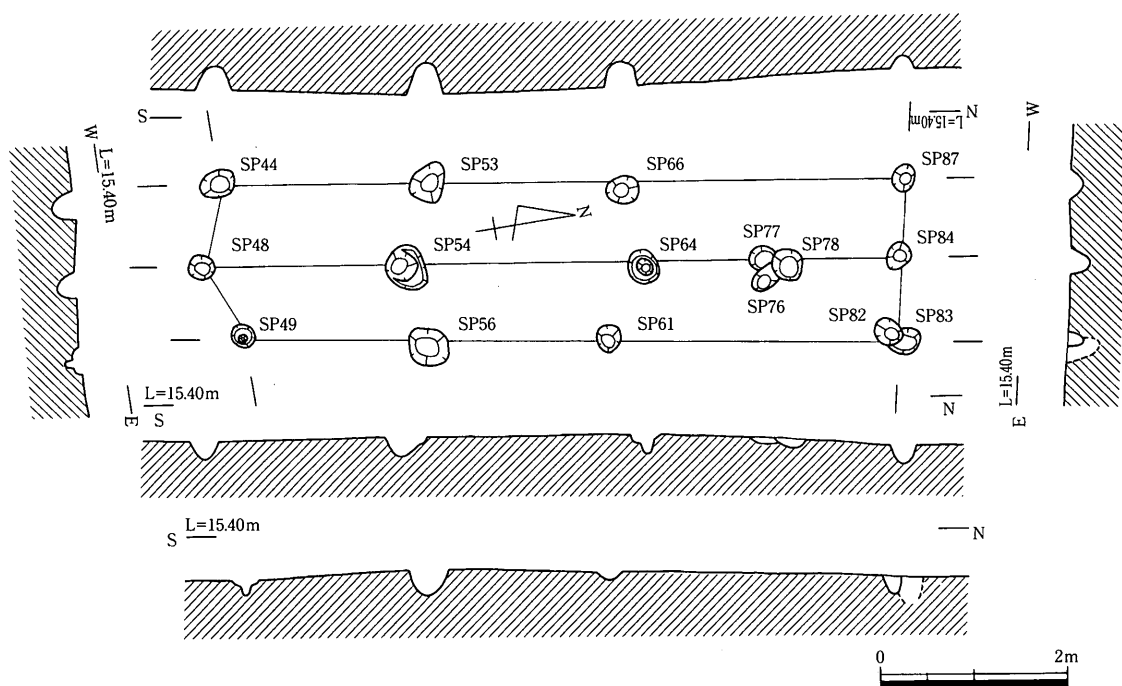
もう1つはSR01と建物群の位置関係についてである。中世～近世にかけて存続するSR01は緩斜面上の柱穴群から最短で約30cmの位置にあり、窯についても約2mしか離れてない場所まで広がって

る。よって建物の配置場所として、また窯付近を操業に伴う作業ヤードとして利用する上でSR01と近接しすぎる状況にある。ただ、SR01は第4図にある調査区東側の谷筋を南に流下していたが、地形的に窯が構築された丘陵付近で東に振る。このため谷の西側を流下すれば、調査区内の丘陵および東側の緩斜面は浸食される位置にある。実際にⅡ区SR01中央部では深さが20cm内外であるのに対し、西端部では約1mとかなり深くなっているのはこうした浸食作用によると考えられる。この2つを合わせて考えるとSR01は建物、窯の利用期間中にはより北側で東に振り、空間的に余裕があったのが、継続して近世以降も流下するうちに浸食が進み、南側に広がったと推定される。

SB01 (第46、51図)

調査区北部で検出した南北に細長い総柱建物である。SF01、02からは至近部で5mと近接する。SP83をSB03 (SP82) が切り、SB01→SB03と言える。東桁行柱列の東側には梁間の柱穴群は延びない。SP54はSB02を構成する柱穴でもあり、SP64はSB03を構成する柱穴でもある。この2基の柱穴をSB01の構成柱穴ではないと考え、SP77も除き、側柱建物と判断することも可能である。あるいはこの3穴以外にSP84、48を加えた5穴を別の柵列と見ることも不可能ではない。だが、前者については梁間の柱穴間距離は1m以下ときわめて短く、特殊⁽⁵⁾なものであるが、梁間中央の柱穴 (SP48、84) を結ぶライン上で上記の3基の柱穴 (SP54、64、77) が並ぶため総柱と考えた。後者についてはSP84、48が梁間の中央に位置し、柱列も揃うこと、この2穴の南北に柱穴群が延びないことからSB01を構成すると考えた。

規模は梁間2間×桁行3間 (1.72m×7.26m) である。柱穴間距離は梁間が80~92cmと狭い。桁行は南側の2間が2~2.6m、北側の1間が3mと長短がある。主軸方向はN-9°-Eである。この主軸は西側の丘陵斜面のそれと一致しており、地形に規制されたためであると考えられる。SB01から斜面までの平坦面の距離は約3.5mを測る。柱穴の平面形はほぼ円形であり、径26~44cm、深さ9~33cmを測る。深さにはやや幅があるが、底場レベルは東柱と考えられるSP54、64、77も含めて概ね

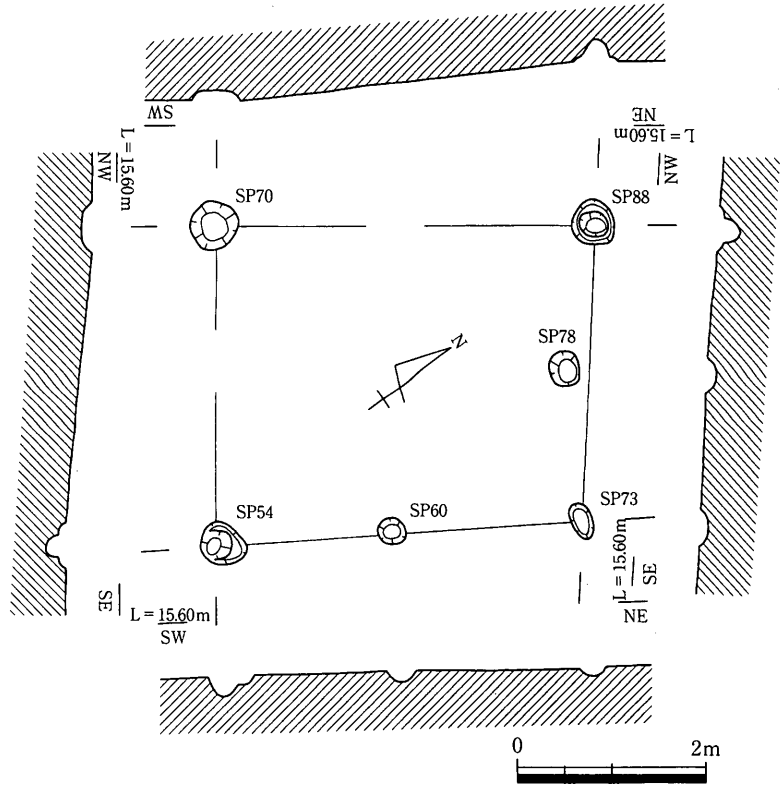


第46図 Ⅱ区SB01 平・断面図 (1/80)

14.8~14.9mと一定である。出土した土師器杯小片より建物の時期は中世と考えられる

SB02 (第47図)

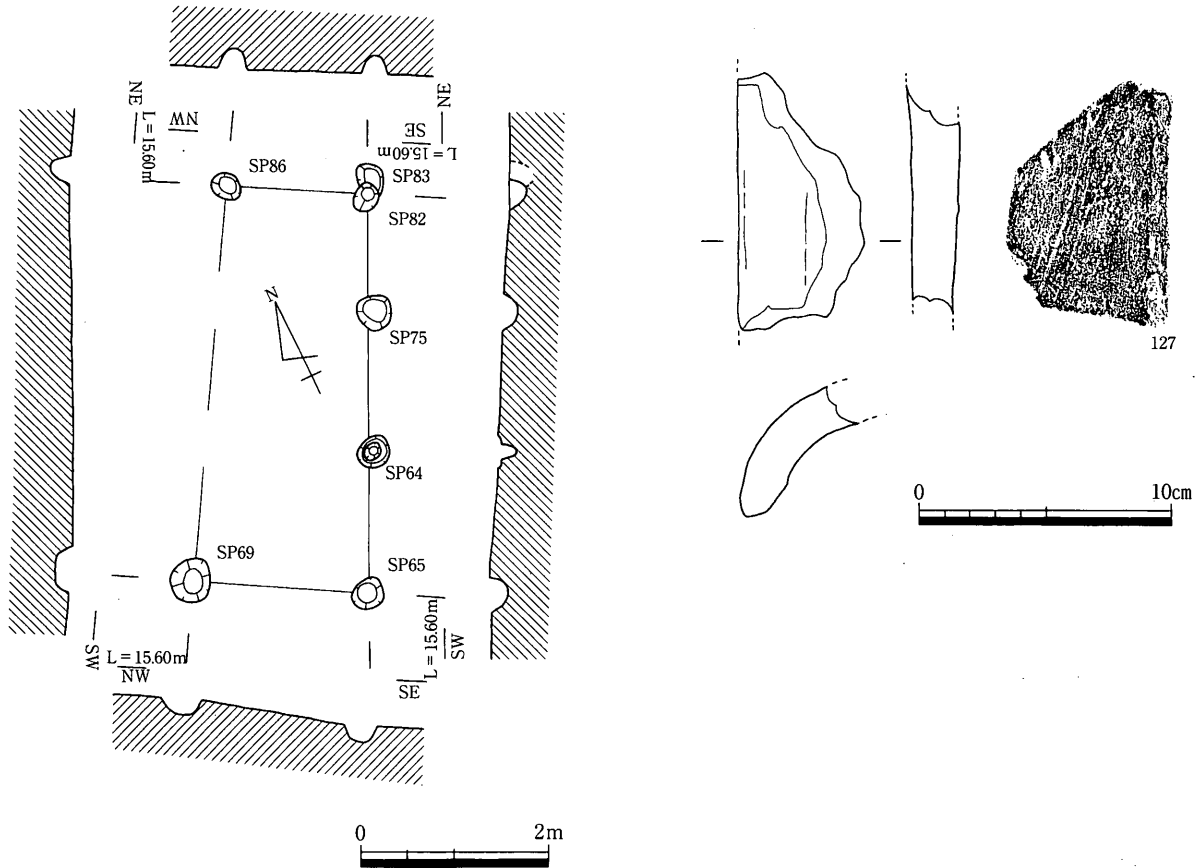
調査区の北部で検出した側柱建物である。SP54はSB01を構成する柱穴でもあり、SB03と重複する。規模は梁間2間×桁行2間(3.22m×4.0m)である。主軸方向はN-34°-Eである。柱穴の平面形は円形であり、深さ10~24cmを測る。出土遺物はないが、埋土より建物の時期は中世と考えられる。



第47図 II区SB02 平・断面図(1/80)

SB03 (第48図)

調査区の北部で検出した側柱建物である。SB01を切る。SP64はSB01を構成する柱穴でもあり、SB02と重複する。規

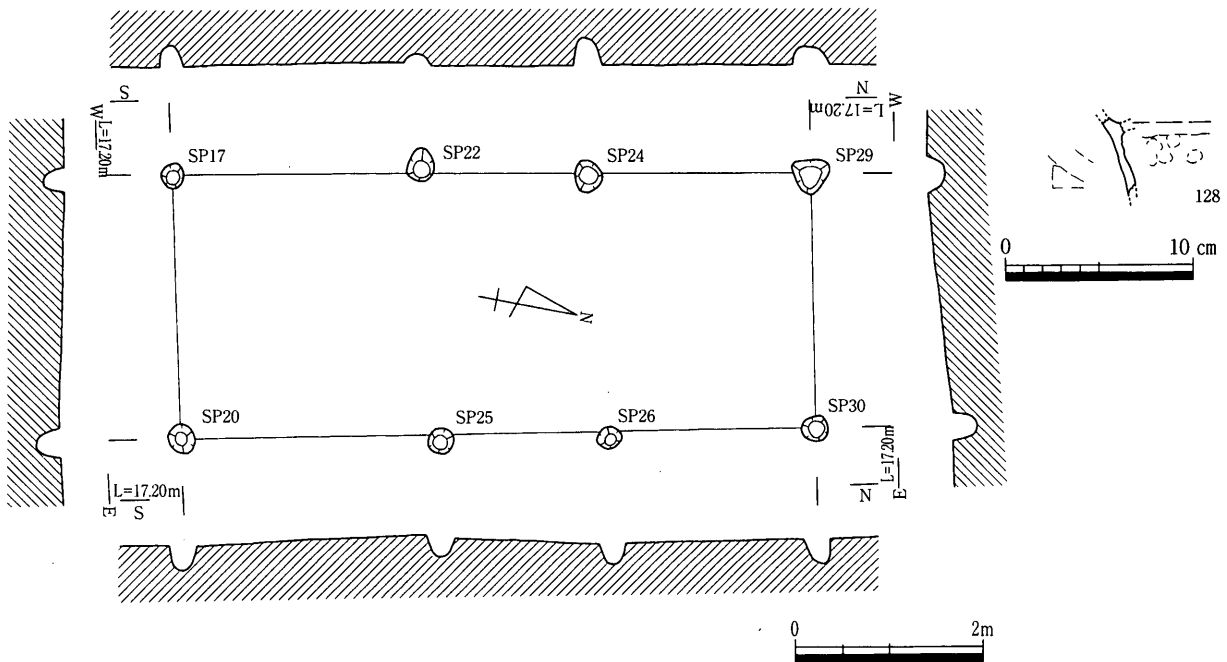


第48図 II区SB03 平・断面図(1/80)、出土遺物(1/3)

模は梁間1間×桁行3間（1.88m×4.18m）である。主軸方向はN-31°-Eである。柱穴の平面形は円形であり、深さ16~22cmを測る。出土遺物は土師器細片、瓦器椀細片、平瓦I類、丸瓦II類（127）がある。127は凹面に糸切りが見られる。14世紀後半と考えられる。窯に伴う工房でないと考えるので瓦より建物の時期は14世紀後半以降である。

SB04（第49図）

調査区の南部で検出した側柱建物である。規模は梁間1間×桁行3間（2.76m×6.76m）である。主軸方向はN-11°-Wである。柱穴の平面形はほぼ円形であり、深さ12~29cmを測る。出土遺物は土師器細片、土師質土器土釜（128）がある。これらより建物の時期は中世と考えられる。



第49図 II区SB04 平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）

(2) 柵列

SA01（第50図）

調査区の北西部で検出した柵列である。規模は3間（3.40m）である。主軸方向はN-7°-Eである。柱穴の平面形は円形であり、深さ12~22cmを測る。出土遺物は土師質土器土釜（129）、平瓦I類がある。129は口縁部、鏝ともにかなり短い。15世紀後半から16世紀前半と考えられる。129から柵列の時期は15世紀後半~16世紀前半と考えられる。

(3) 窯

調査区北西部にある丘陵斜面において南北に隣接して並ぶ2基の瓦窯（SF01、02）を検出した。標高は約15.5~16.6mを測る。窯の主軸は等高線と直交する方向であり、北側のSF01がN-78°-E、南側のSF02がN-66°-Eを測る。共に灰原と焚口付近が削平を受けている⁽⁶⁾が、東に開口する。またSB01~03が検出された緩斜面と焚口付近の比高差は検出面で約50cmを測る。

2基の窯は半地下式有牀平窯であり、焼成室、燃焼室の規模・形状やあぜの本数・配置・規模・形状といった構造において酷似する。また窯の配置や遺構間接合資料（報文番号141。それぞれの焼成

室出土平瓦が接合。)の存在、焼成室のあぜ直上出土瓦にどちらも平瓦Ⅰ、Ⅱ類を含むことを合わせて考えると同時期に操業されたと想定される。

SF01 (第51～61図)

① 規模、構造

焚口付近までで推定全長1.70mを測る。

〈焼成室〉焼成室の北西部には径約60cmの土坑状の落ち込みがある。だが土層断面を見ると窯体廃絶後ある程度埋没してから土層が堆積しており、窯とは無関係である。よって焼成室の平面形は整った方形で、東西0.96m、南北0.80mを測る。窯壁は南北ではほぼ直立し、東西では上部にやや開く。後世の削平を受けているため本来の高さ、天井部の状況は不明であるが、検出面からあぜ上面までの深さは50～60cmを測る。あぜ

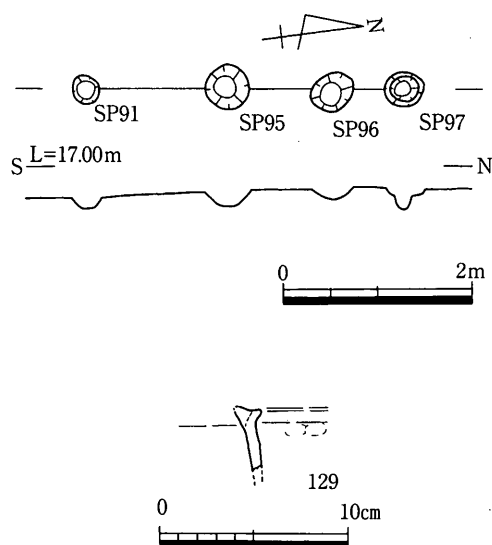
は地山削りだしにより3本が作られており、上面の幅は9～14cm、棧道からの高さは6～15cmである。あぜと棧道は燃烧室の方に傾斜しており、角度は約6°を測る。

〈隔壁、通炎孔〉隔壁は地山削りだしでなく、粘土を貼って構築している。上層(第53図1、2層)、下層(同3、4層)に区分できる。上層は砂混粘土で、遺物を含まないが、燃烧室天井部(第52図9層)と類似する。下層は粘土で、平瓦を含む。瓦の直下では幅12cm×24cm、長さ45cmの和泉系砂岩が床面に接し、直立した状態で出土した。礫は黒ずんでいるものの直接炎があたったことによる赤化は見られない。また中央あぜの東側で、棧道に続く通炎孔を塞がない位置にあることから、本来は粘土で被覆され隔壁構築用の芯材としたことが想定できる。なお、礫のすぐ南側にはほぼ同レベルで完形に近い平瓦2枚がほぼ直立し、重なって出土した。これらも隔壁構築材であろう。

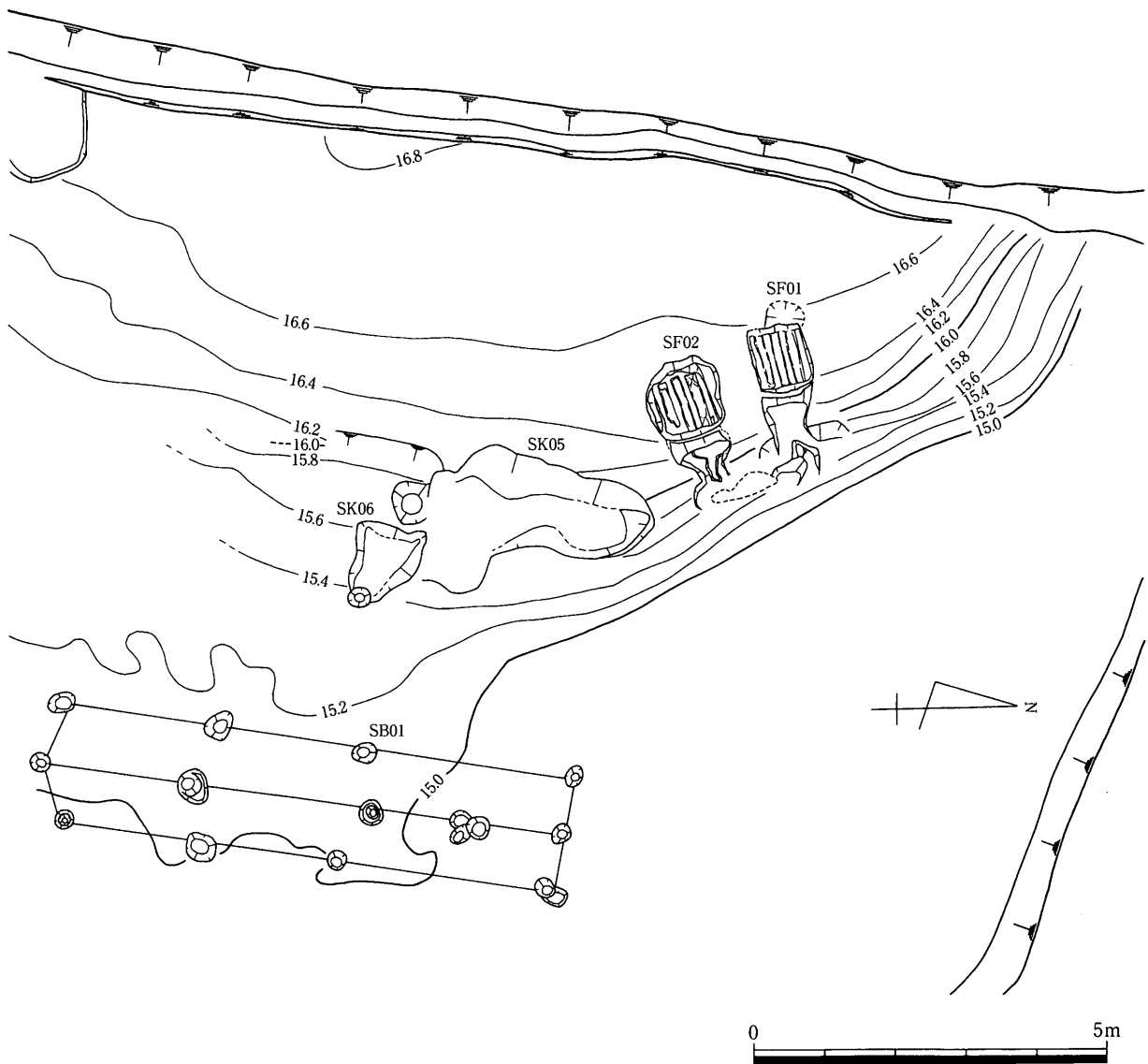
通炎孔は崩壊し、旧状を留めていない。この部分は燃烧室と焼成室棧道の床面とのレベル差約20cmをつなぎ、ななめに立ち上がる。なお、平面図で図化した隔壁は本来の隔壁を残したものでなく、便宜的なものである。(調査時に燃烧室天井を除去する過程で焼成室側の隔壁を図面作製の都合で残した。この際残した被熱により固結した部分が平面図の図化範囲。焼成室規模、形状を示すため本報告でも使用。SF02についても同様。)

〈燃烧室〉燃烧室は床面の平面形が中央でくびれる方形であり、焚口、焼成室付近で広がる。規模は南北0.80m、東西は床面長で焼成室際、焚口付近がともに0.60mを測る。床面は焚口に向かって緩やかに下る。検出時には天井部が残存していた。天井形成土(第52図9層)には土器、瓦片が含まれ、最終操業時には構築された天井であったことが窺える。

〈焚口〉既に述べたとおり、明確に焚口と判断できる部分はないが、その位置は被熱の有無の境界部付近(第52図の平面図で燃烧室に記載した破線が被熱の有無の境界。これより西側が被熱。)と概ね推定できる。前面には不整形の落ち込みがある。埋土は黒色粘質土であり、燃烧室から掻き出された炭、灰を含む。このため窯に関連する施設と判断されるが、焚口前面という位置とこの部分が斜面になっているという状況を考えると、焚口での作業用の足場かもしれない。SF02の前面でもこうした平坦面がある。なお焚口を挟んだ南北部は地山が削られている。目的は不明だが、焚口付近での作



第50図 II区SA01 平・断面図(1/80)
出土遺物(1/4)



第51図 II区SF01・02 周辺遺構コンター図 (1/100)

業ヤードを広げるためカットしている可能性もあろう。

② 瓦の焼成（窯詰め痕跡と遺物出土状況）

焼成室のあぜ東半部では上面にカーボンが面的に付着している。3本のあぜのいずれでも認められるが、中央あぜでとくに顕著である。付着していない部分は幅約2cmを測る紡錘形の帯状であり、中央あぜではこれが連なっている。両端の2本でも部分的に帯の半分が認められる。なお、図化できていないが、写真を見ると北側あぜの上ではカーボンがうすくさらに北へ延び、本来帯となっていたらしい部分がある。中央あぜではこの帯は相互に2cm程度ずつとほぼ等間隔を開けて平行に並び、あぜの向きに直交する。中には弧状を呈するものもある。

これらは最終操業時の還元焼成終了後、いぶしを行った際に焼成室へ入った炭素が窯詰めした瓦と瓦の間に入り込んだ痕跡であると想定する。（瓦を置いていた部分は露出していないためカーボンが付着しない。）

痕跡を残した瓦の器種については帯の形状から平瓦か、軒平瓦の狭端面であると考えられる。幅については出土した平瓦、軒平瓦狭端面は幅1.5～2cmを測る。これらの焼けしまりを考えると焼成前は約1.2倍⁽⁷⁾あるので1.8～2.4cmとなり、合致する。

これは遺物出土状況とも関係する。焼成室ではあぜ直上および棧道内から少量の平瓦Ⅰ、Ⅱ、ⅡorⅢ類（145）が、燃焼室でも床面直上堆積土（第52図15、16層）より7枚の平瓦Ⅰ（133、134）、Ⅱ類（136～138、143、144）が出土している。これらの床面付近瓦群のうち燃焼室出土資料には完形に近いものもある。だが、いずれもカーボンは部分的にしか付着していない。また、出土レベルから最終操業後、窯出しされなかった焼成不良品である可能性が高い。このように床面付近で出土した瓦が全て平瓦であり、完形に近いものを含むことから最終操業の焼成瓦にⅠ、Ⅱ類の平瓦を含むと考えられる。

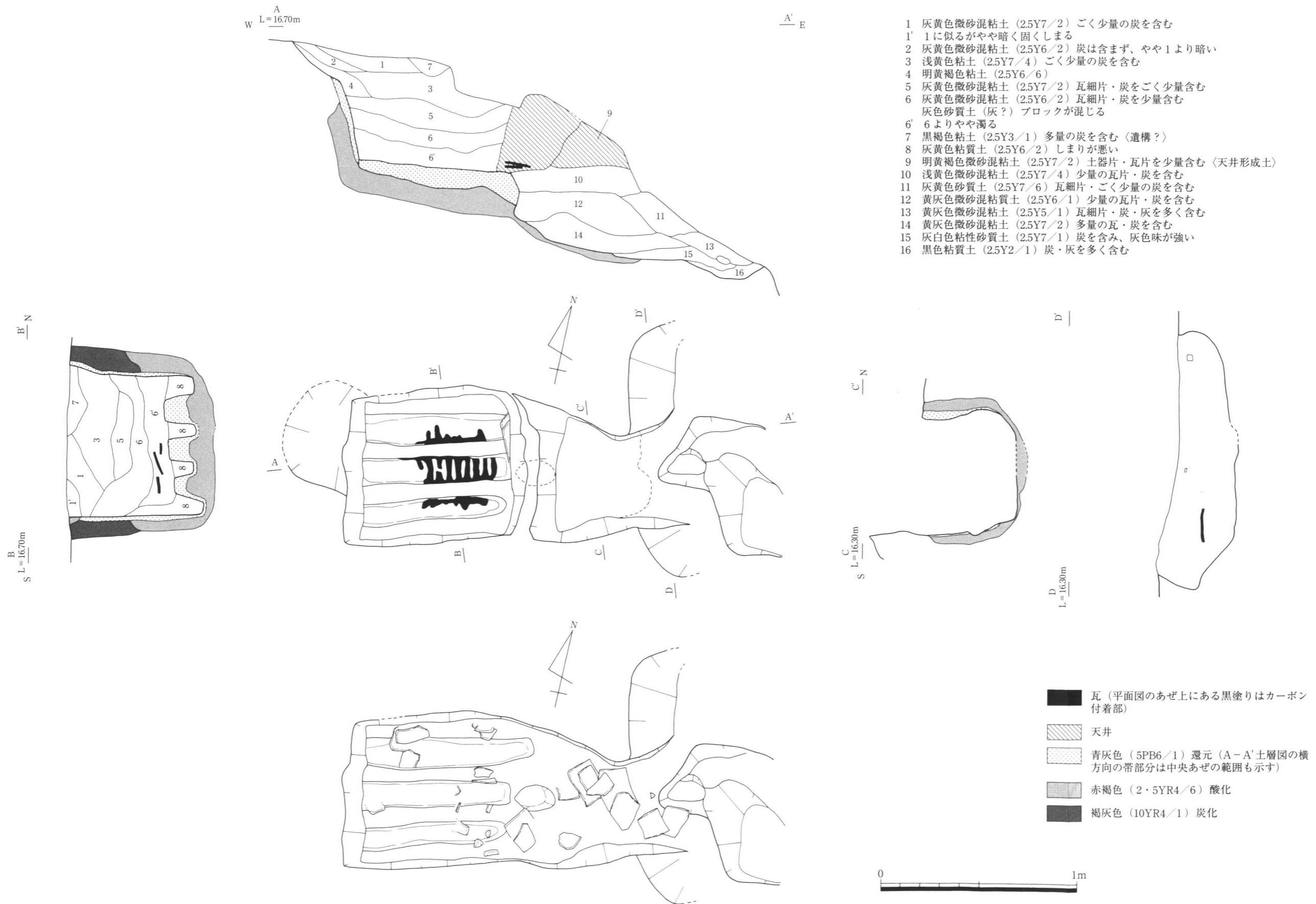
ただ、瓦を置いた際の向き、単位（例えば、凹面2枚+凸面2枚で向き合わせて1単位とか）についてはほぼ等間隔に配されること、湾曲が小さいためか、帯の形状が紡錘形であることにより把握できない。なお、瓦の窯詰めにおいては下位に平瓦を置き、その上部に丸瓦などを置くことが多い⁽⁸⁾という。

また窯詰めにおけるあぜの使用法については中央あぜ西寄りでは弧状となるものが見られ、1枚の瓦を1本のあぜに載せたと考えられる。他の部分でも帯が途中で途切れて、間にカーボンが付着していたり、1本の帯ではあるが、途中で不連続になったりするものがないことはこうした使用法を裏付ける。一般的な有牀式平窯においては瓦の窯詰めでは2本のあぜをまたがせる⁽⁹⁾のとは異なる窯詰めである。これを可能とした原因として2つが考えられる。

①天王谷の瓦は小型である（平、軒平瓦の場合、焼成後は長さ24cm前後、幅15cm前後、厚さ1.5cm、2cm。）ため、棧道を通る左右からの炎で瓦を焼成できた。

②瓦が小型であるため1本のあぜ上に置いてもバランスをとれた。（焼成前の瓦の推定幅18cmに対し、あぜの上面幅は9～14cm。部分的には瓦幅の半分しかないが、窯詰めにより相互に密着させるため固定可能。）

以上を窯詰め的前提として焼成室内の窯詰め枚数を考えてみる。削平のため天井までの高さは不明だが、検出面からあぜ上面までの高さが最大60cmを測り、本来はこれ以上あったことが想定できる。また平瓦の高さは約25cmである。天井いっぱいまで窯詰めすること、その方法は下位と同じく直立さ



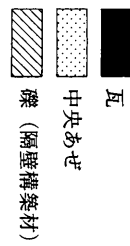
第52図 II区SF01 平・断面図及び遺物出土状況平面図 (1/20)

W L=16.70m

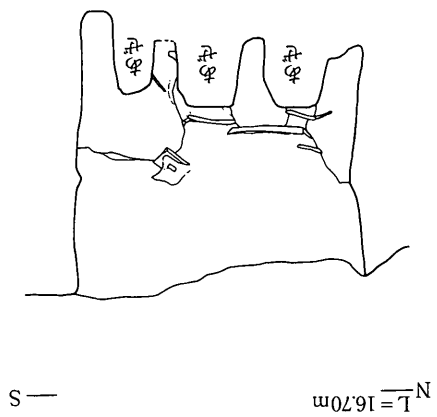
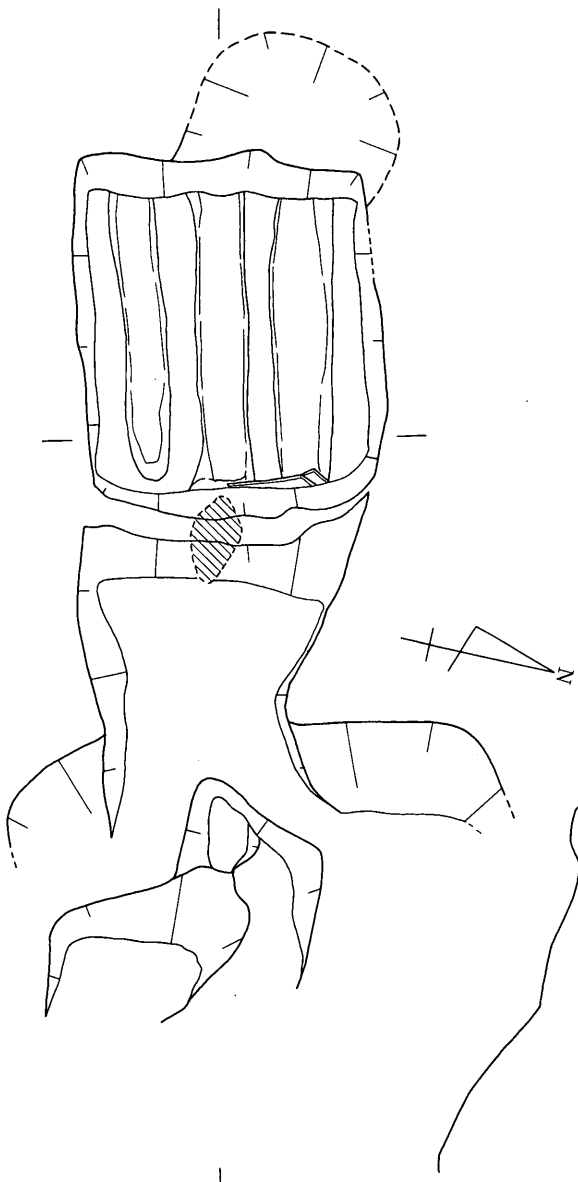
L=16.30m



- 1 暗灰黄色砂混粘土 (2.5Y7/2) 酸化層2の背面にある酸化層。固く焼けしまる
 - 2 浅黄橙色砂混粘土 (10YR8/3) 酸化して赤化。1と同じ土
 - 3 灰色粘土 (5Y6/1) 多量の瓦を含む。4と同じ。土で還元している
 - 4 浅黄橙色粘土 (10YR8/3) 瓦を含む。酸化して赤化
- ※ 1~4はいずれも隔壁も形成するための構築土でくり抜かれた地山ではない



—E



N L=16.70m

—S

第53図 II区SF01 完掘状況平面図、隔壁立・断面図 (1/20)

せることと仮定すると天井までの高さは平瓦3段分である75cmが最も近い。これは窯が築かれた斜面の傾斜から見て想定可能な数字である。次に平瓦1段分の枚数だが、中央あぜに残る痕跡が8枚分で36cmを測る。1枚の平瓦に要するスペースは瓦の厚さと瓦間の隙間を合わせて、4.5cm。これを中央あぜの長さ76cmに当てはめると17枚で、3本のあぜでは51枚となる。51枚が1段分の枚数となる。51枚×3段=153枚。この内、仮に1割が失敗品であるとすれば、153枚×0.9=約138枚。少なく見積もってもこれだけの平瓦が1回の焼成で製作できた、という計算になる。

③ 被熱状況

第54図で窯壁の被熱状況を見ると窯壁は焼成室、燃焼室を問わず基本的に還元している。細かく見ると、a. 焼成室では酸化層がほとんど見られず、還元雰囲気焼成が行われたこと、b. 焼成室奥壁側と下位で強い還元を受けている傾向、c. 燃焼室側では還元層を挟むように酸化層が広がる状況、d. 燃焼室南側壁上部では無被熱層が東へ下って広がり、天井部と考えられることなどが窺える。

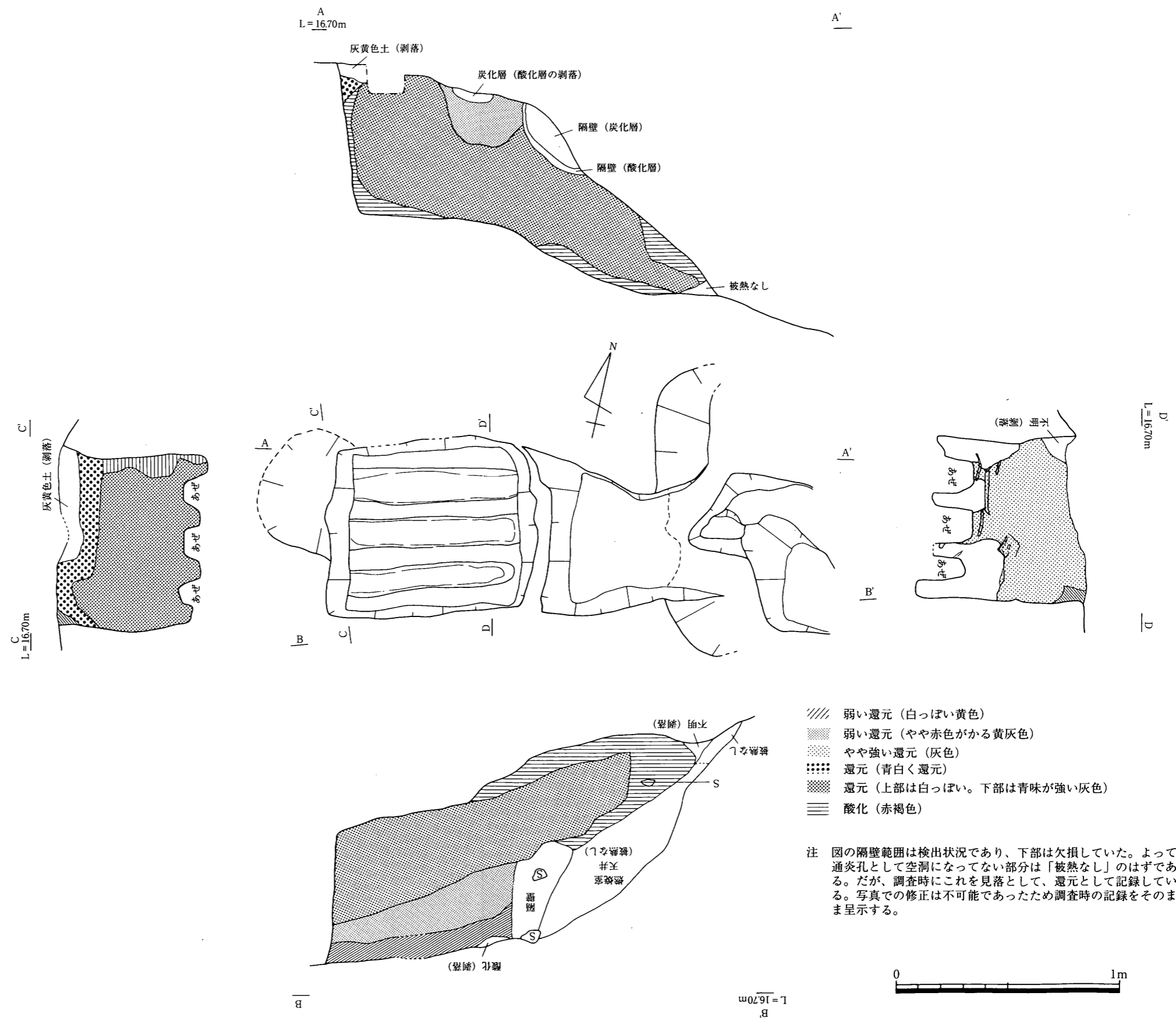
b. に関連して、煙道は遺構として確認できず、この時期の多くの瓦窯例でもそうであることから構築された天井に煙出しが設けられた⁽¹⁰⁾と考えられる。この場合、炎は煙出しがある上方へ向かうこととなり、窯壁の上位が強く被熱しそうであるが、そうになっていない。これについては焼成室の長さが1mしかないため上昇する炎より通炎孔を抜ける際に圧縮され、直進する炎の方が強い勢いであったためと推測される。焼成室全体の窯詰め方法については復元できないが、こうした状況を勘案して瓦の配置がなされたと考えられる。

c. については燃焼室床面も全体的に酸化していることと合わせ、還元焼成の行程でも焚口が完全に閉塞されていないことを示すと考えられる。

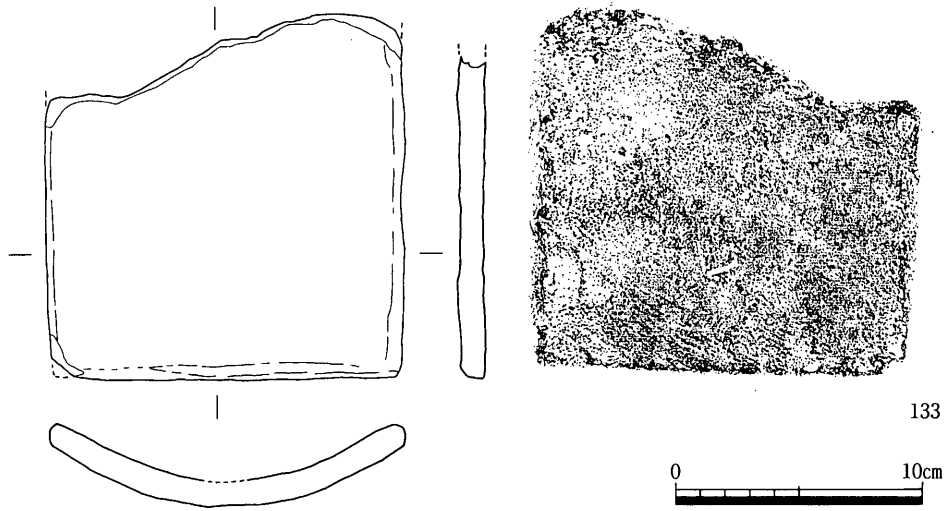
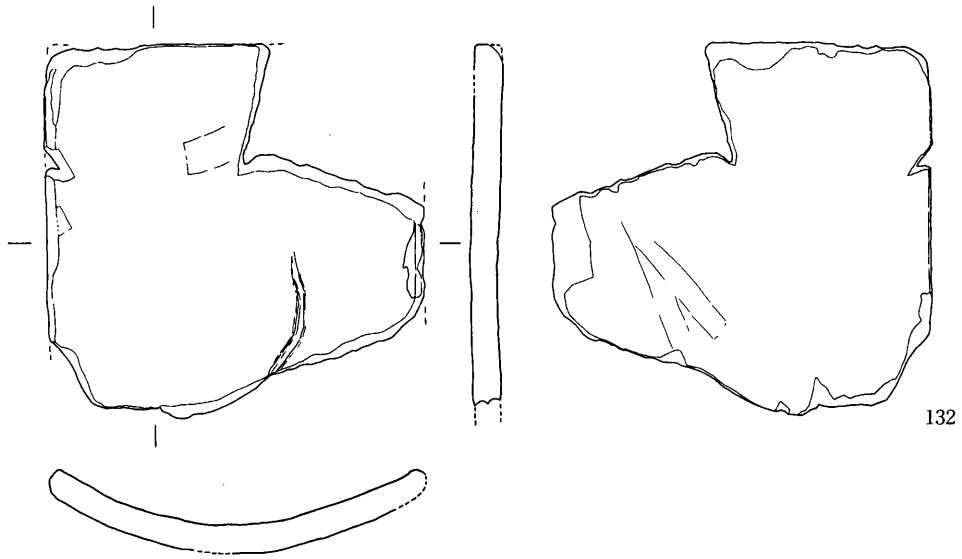
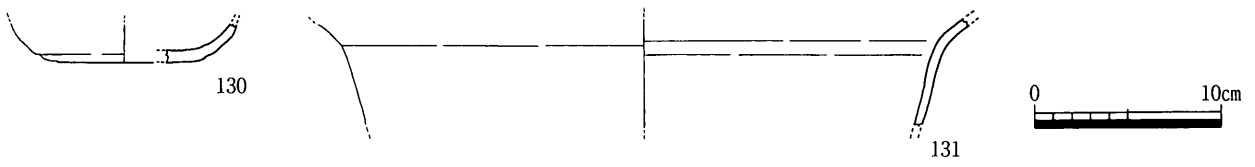
なお、窯体の断ち割りによる被熱状況の観察では還元層の裏に酸化層、炭化層がある。炭化層は土壌中の有機物が被熱を受けるものの焼成温度が低く、不完全燃焼することにより生じたものと考えられ⁽¹¹⁾、焼成室上部で見られる。

④ 出土遺物

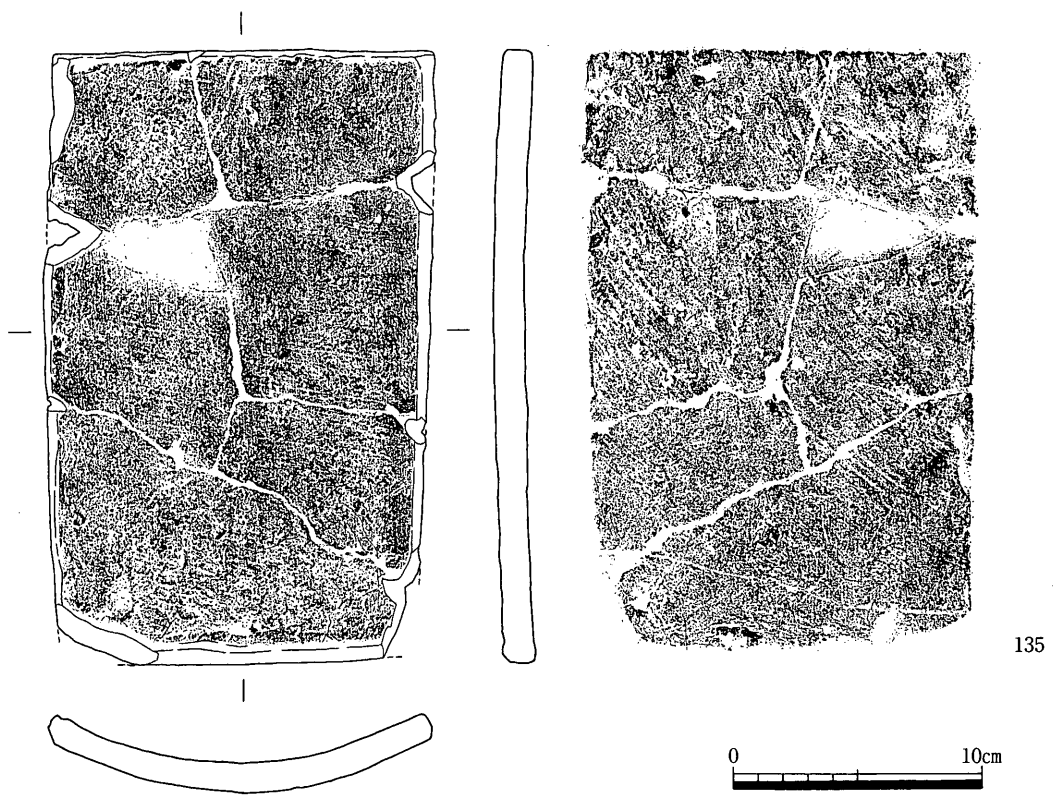
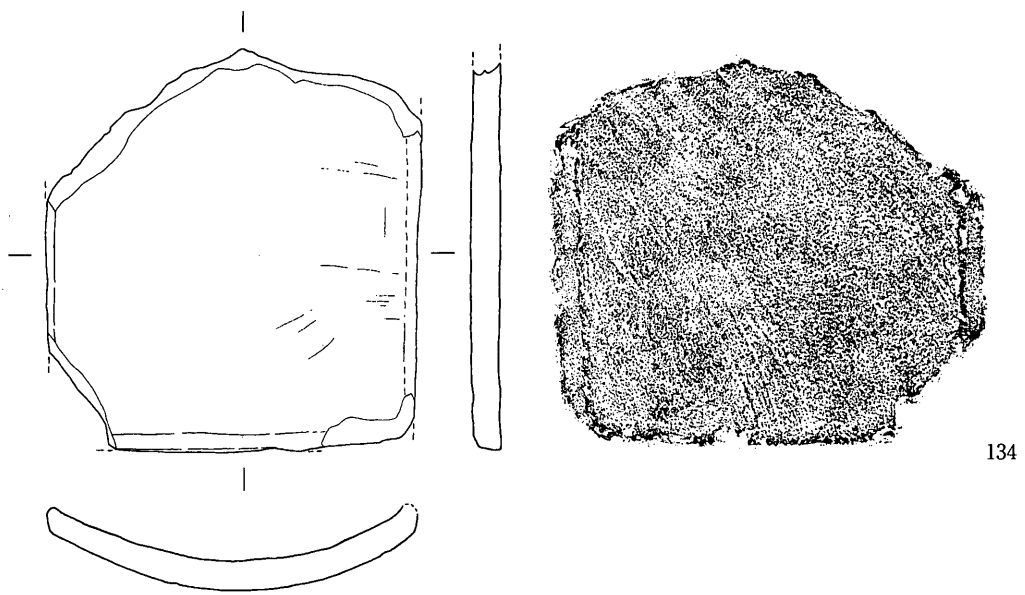
出土遺物には土師器杯(130)、鉢(131)、平瓦Ⅰ類(132~134)、Ⅱ類(135~144)、ⅡorⅢ類(145)、丸瓦Ⅰ類(146、147)がある。130は土師器の杯である。体部の外傾が強く、厚味がある。底、体部の境界には丸味を帯びる。131は密な胎土で、土師器の杯、小皿と同じものである。頸部で屈曲し、外方に延びる。平瓦(141)はSF02との接合資料であり、2基の窯の同時性を裏付ける。窯の時期は瓦より14世紀後半と考えられる。



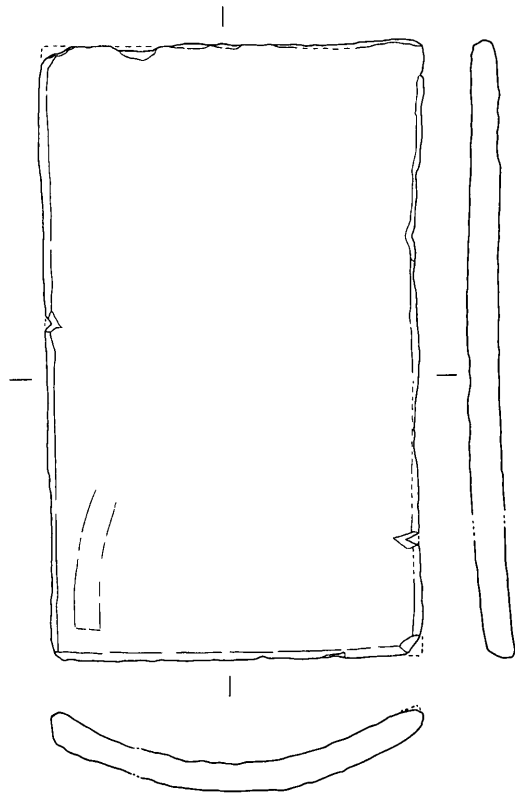
第54図 II区 SF01 窯壁被熱状況図 (1/20)



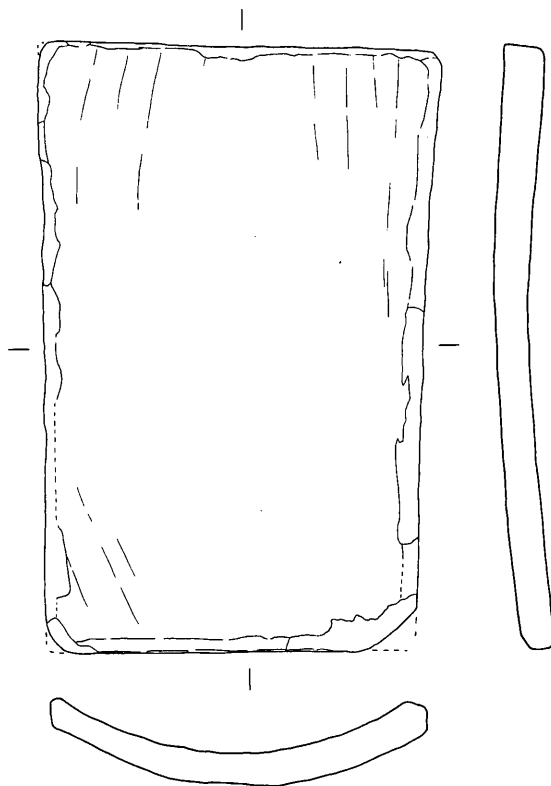
第55图 II区SF01 出土遺物1 (1/4·1/3)



第56图 II区SF01 出土遗物2 (1/3)



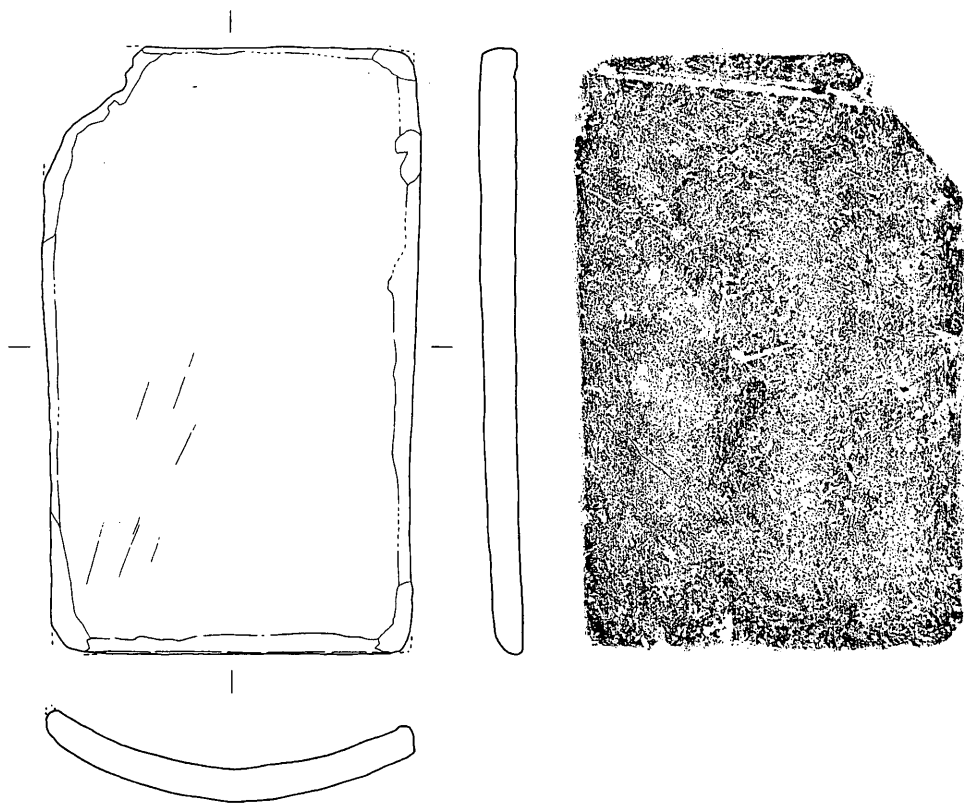
136



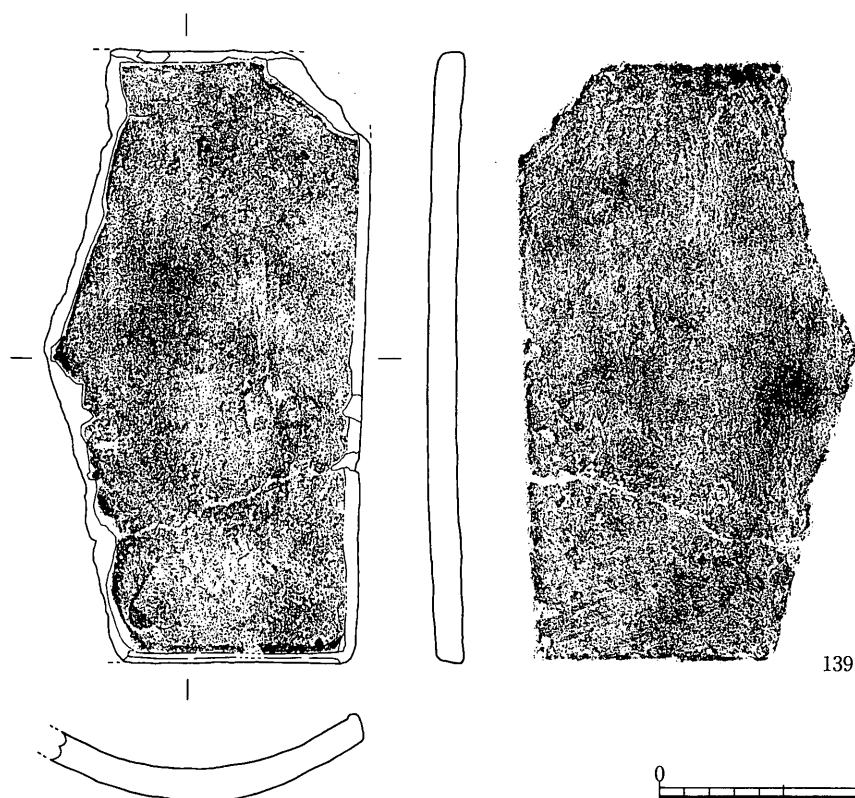
137



第57图 II区SF01 出土遗物3 (1/3)



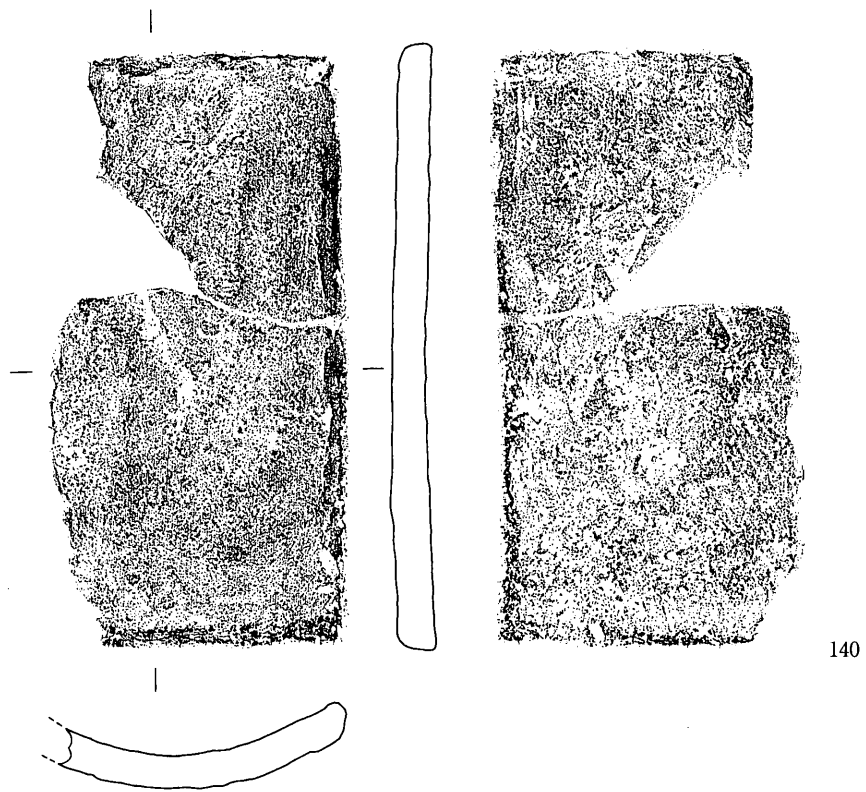
138



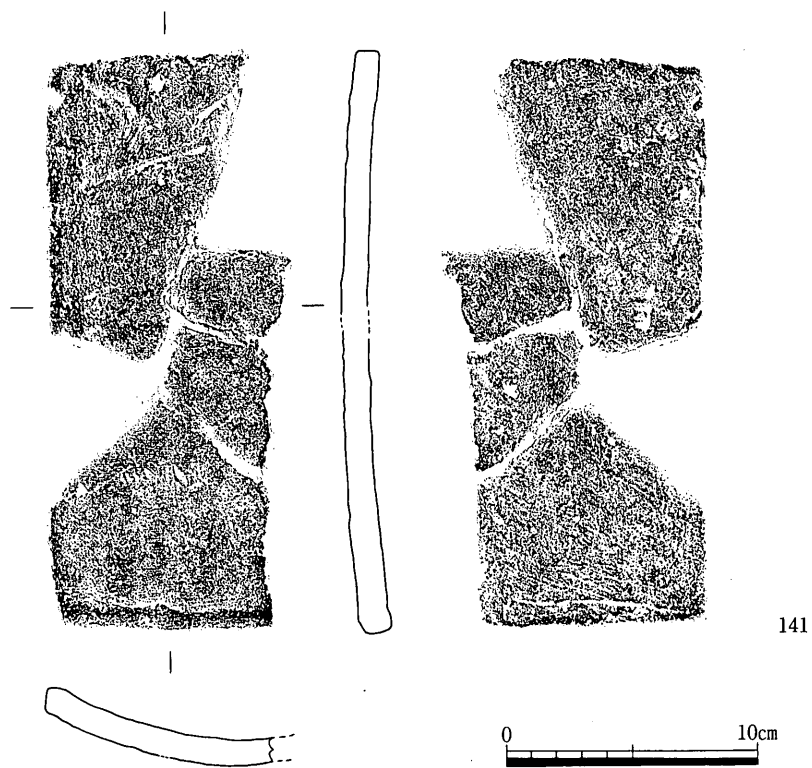
139



第58图 II区SF01 出土遗物4(1/3)

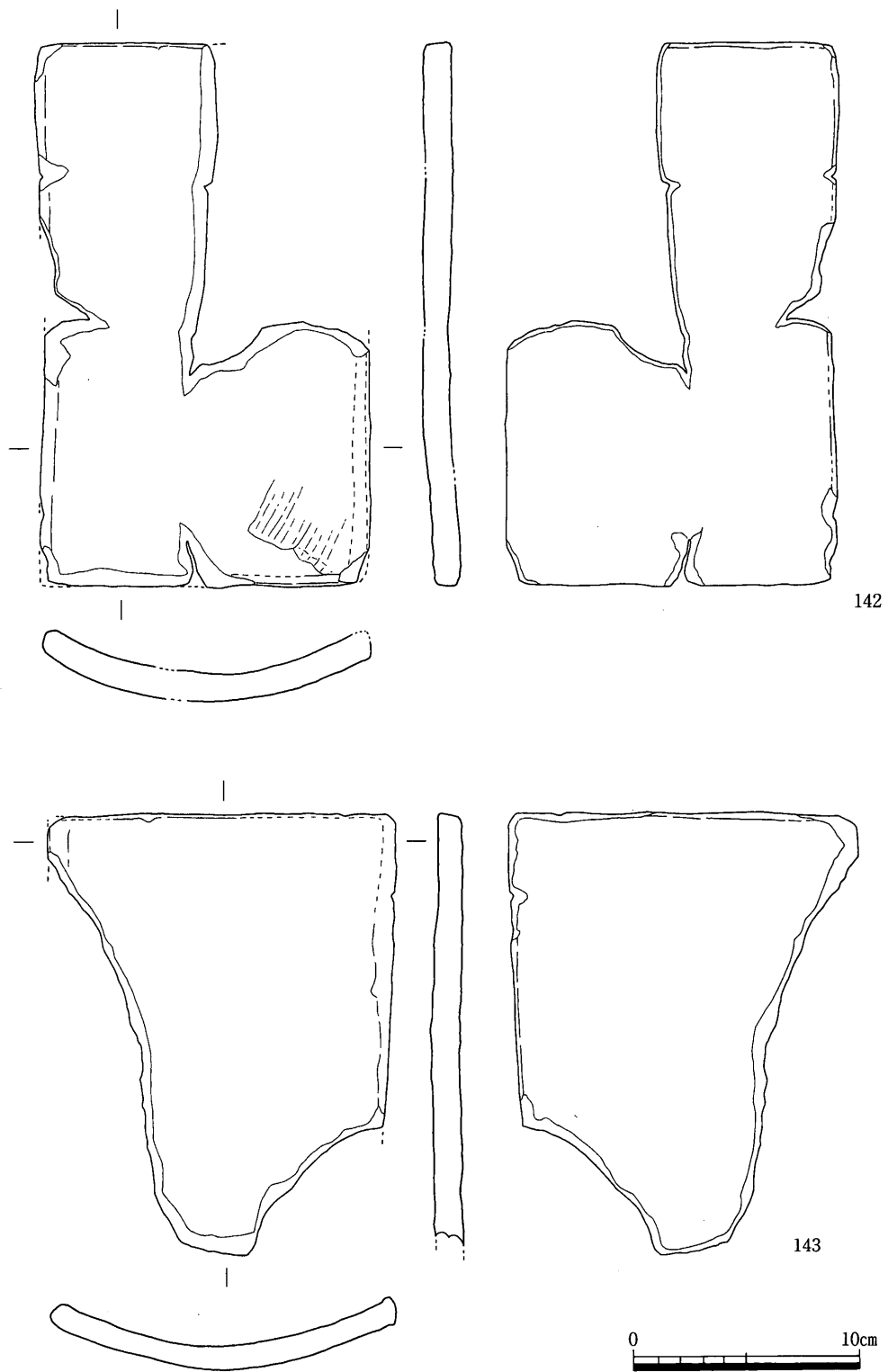


140

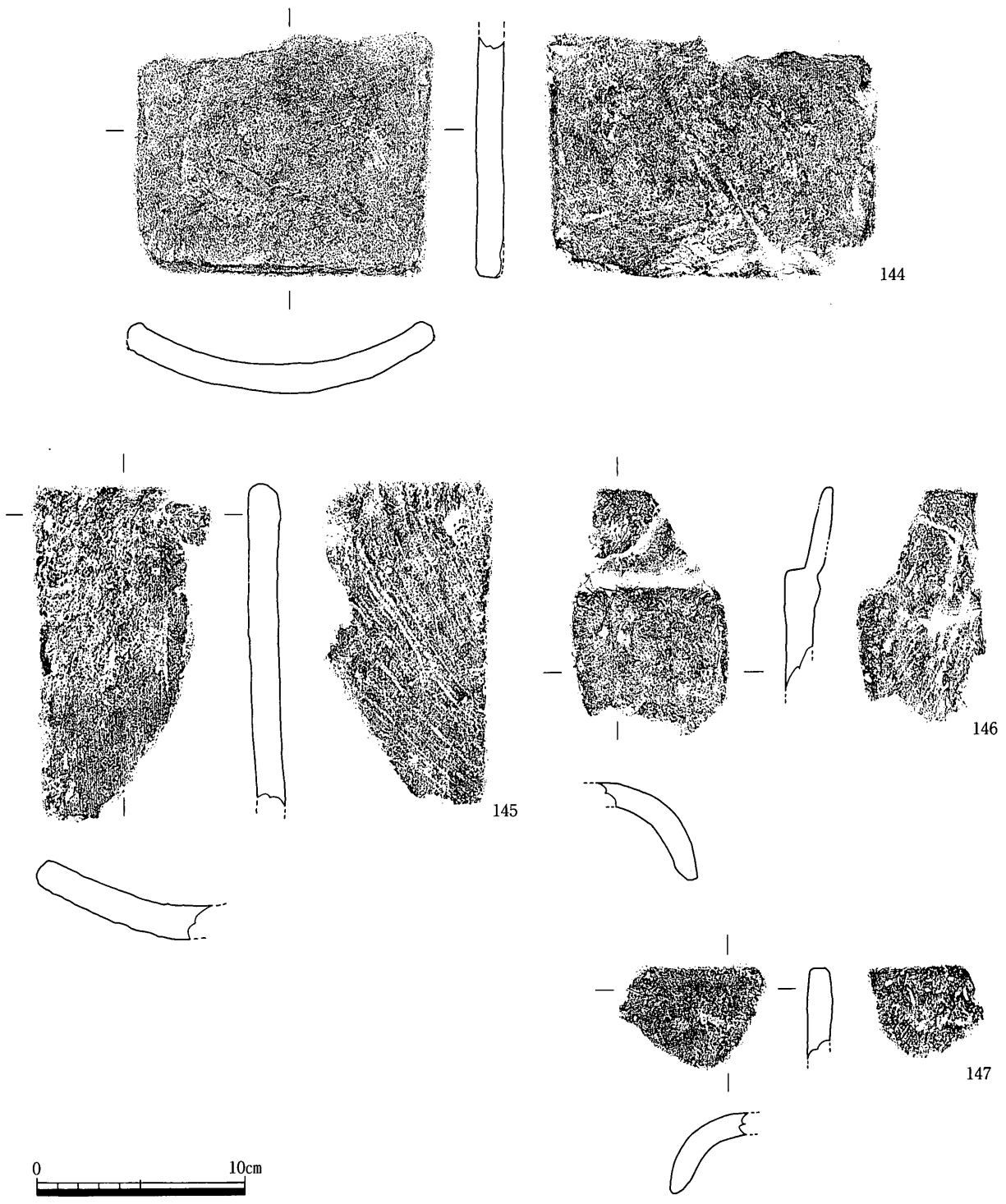


141

第59图 II区SF01 出土遺物5 (1/3)



第60图 II区SF01 出土遺物6(1/3)



第61图 II区SF01 出土遺物7 (1/3)

SF02 (第51、62～77図)

① 規模、構造

焚口付近までで推定全長1.80mを測る。

〈焼成室〉焼成室の平面形はいびつな方形であるが、土層断面で観察されるとおり、上部で窯壁が剥落しているためである。本来は下半部で見られるように整然とした方形であると考えられる。下部では東西0.80m、南北1.0mの規模を有し、窯壁は南北ではほぼ直立し、東西では上部にやや開く。後世の削平を受けているため本来の高さ、天井部の状況は不明であるが、検出面からあぜ上面までの深さは約50cmを測る。あぜは地山削りだしにより3本が作られており、上面の幅は概ね10cmで、8～13cmの幅がある。棧道からの高さは6～14cmである。あぜと棧道は燃焼室の方に傾斜しており、角度は約14°を測る。

〈隔壁、通炎孔〉隔壁は上部が概ね残存しているものの、中央部以下は消失していた。断ち割り部分の構造は下部が地山削りだしで作られ、上部は粘土貼りで構築されている。上部の構築土の内隔壁断面図1、2層(第62図)は遺物を含まないが、同レベルにある遺構面ベース土より砂の含有量が多いことや若干ばさつく土質が燃焼室天井形成土である8層と類似することからこのように判断した。

通炎孔は旧状を留めていない。この部分は燃焼室と焼成室棧道の床面とのレベル差約30cmをつなぎ、ななめに立ち上がる。

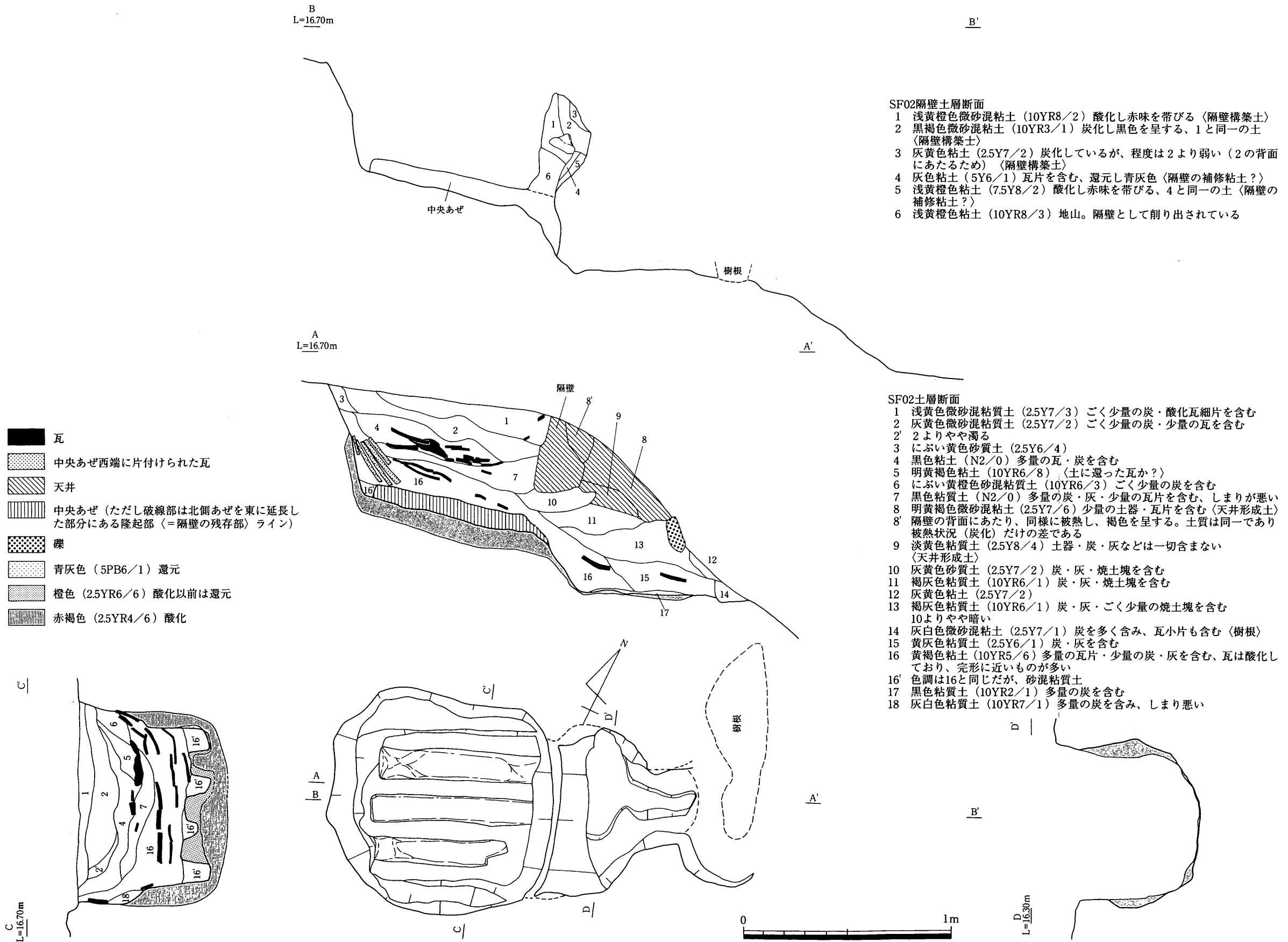
〈燃焼室〉燃焼室は床面の平面形がT字形であり、焚口付近で狭まる。規模は南北0.60m、東西は床面長で焼成室際が0.75m、焚口付近が0.30mを測る。床面は焚口に向かってごく緩やかに下る。床面にはT字形を呈する溝状の落ち込みがある。深さは2cm弱で多量の炭を含む黒色粘質土が堆積していた。炭、灰の掻き出し痕跡であろう。検出時には天井部が残存していた。天井形成土(第62図断面図8、9層)の内、8層には土器、瓦片を含み、9層は含まない。9層は付近の遺構面形成土と類似するが、天井の構築において上部の粘土だけを入れ替えることは考えにくいいため、最終作業時には全体が構築された天井であったと判断する。

〈焚口〉焚口付近は既に述べた削平だけでなく、樹根による攪乱も受けている。このため明確に焚口と判断できる部分はないが、その位置は概ね推定できる。この部分では礫が2点出土している。1点は長さ30cm、厚さ10cm程度の棒状の礫、もう1点は長さ20cm、厚さ10cm程度の垂角礫である。ともに和泉系砂岩であり、被熱はない。前者が13層、後者が15層より出土し、床面から浮いている。焚口の両脇に立てた支柱石⁽¹²⁾であった可能性もあるが、原位置を保っていないため不明である。焚口を挟んだ南部は地山が削られ、床面より高い位置に小さな平坦面が作られている。SF01では焚口前面に不整形の落ち込みが見られたが、やはり作業用の足場に関係するものかもしれない。

② 遺物出土状況

多量の瓦が焼成室床面付近(第62図断面図16層)で散乱して出土した。器種は平瓦Ⅰ類(152、153、155、156)、Ⅱ類(157～160、163、164、166、168、169、173～176)Ⅲ類(177)、丸瓦Ⅲ類(182)がある。完形品も含んでいるが、多くは赤褐色に酸化し、カーボンも部分的にしか付着していない。こうした状況から窯詰めされていたものが、焼成不良のため失敗品として放置されたと考えられる。これらの中に中央あぜの西端部上で立て並べられて出土した5枚の平瓦(第75図173～176)も含まれる。あぜから北にややずれており、西に約45°に傾いている。

概報段階ではこれらを窯詰めした原位置をほぼ保つ瓦群と捉えていたが、間に火が通るようにする



第62図 II区 SF02 平・断面図及び隔壁断面図 (1/20)

ための詰め物がなければ、窯詰め状況を示すとは考えられない⁽¹³⁾、との教示を得た。だが、このような詰め物は確認できなかった。またSF01では平瓦間を2cmずつ程度開けていたのに対し、実測図(第75図)に示すとおり密着している。よってこれらは窯詰め状況を留める資料でなく、片付けられたものと考えられる。

ただ、床面付近瓦群では丸瓦は1点しかなく、SF02全体でも丸瓦は偶数計測で21点(第25表)と平瓦の1割強しかない。このため最終操業は平瓦主体の窯詰めであった可能性が高い。またⅠ～Ⅲ類が全て焼成されている。

③ 被熱状況

窯壁は焼成室、燃烧室のどちらも赤味がかっており、還元による青灰色はほとんど見られない。焼成室上部については既に述べた窯壁の崩落により還元層の裏にある酸化層が露出していることによる。下部およびあぜについては断ち割りにより表面の赤みがかった橙色層の裏に酸化層が確認できた。よって橙色層は本来還元していたのが、酸化し、赤化したものと考えられる。この理由は瓦の焼成中にはほぼ密閉されていた窯が壊れ、焼成室に空気が入り込んだためであると考えられる。このことは、赤褐色に酸化した焼成不良瓦が焼成室のあぜ付近で多量に出土していることから裏付けられる。

燃烧室については側壁で焼成室と同じく橙色を、床面ではSF01と同様に酸化により赤褐色を呈する。

④ 窯の崩壊

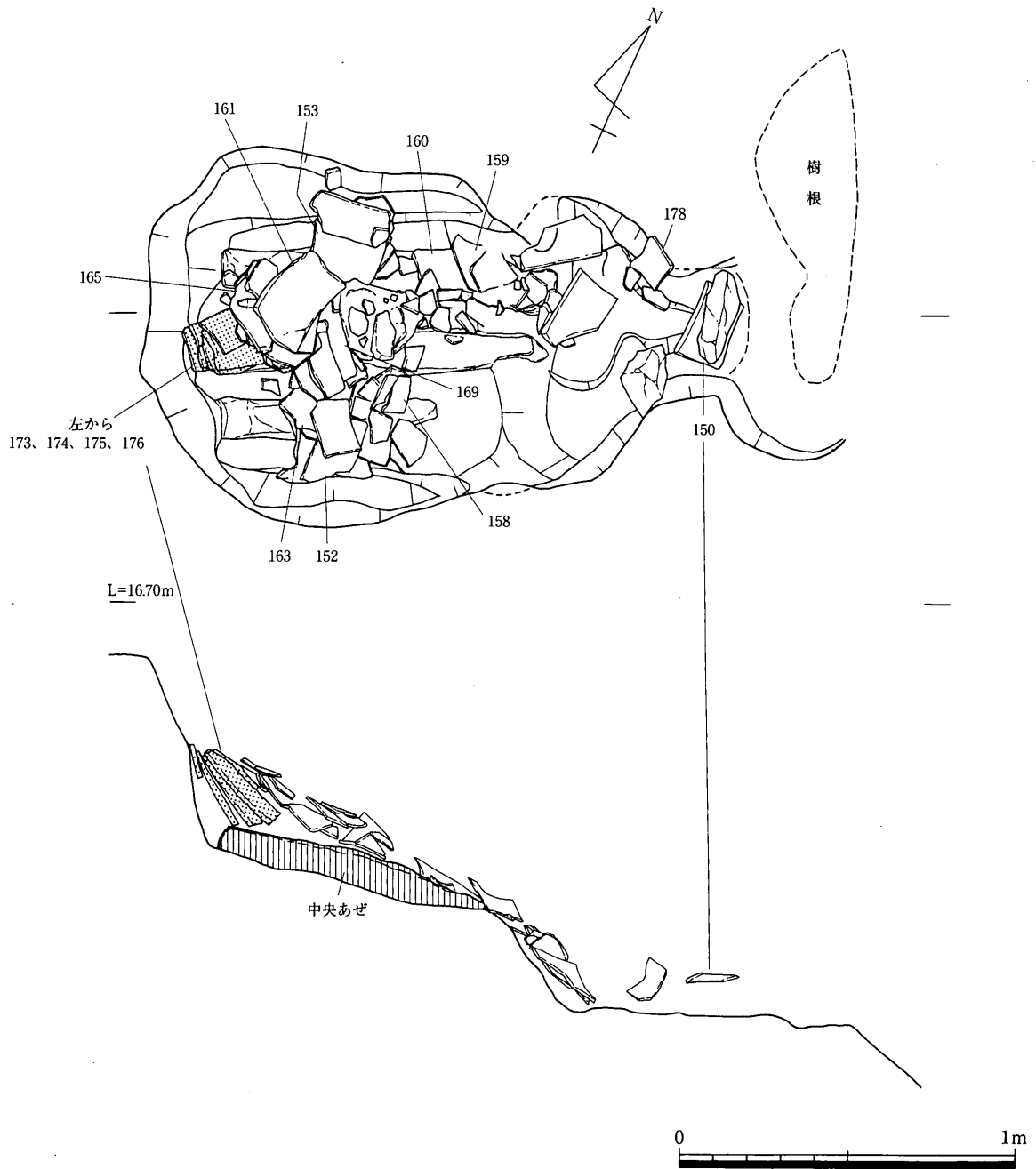
「③ 被熱状況」で操業中に窯が崩壊したことを想定した。この時期が焼成過程のいつになるかについて触れておく。

判断材料としては焼成室床面付近出土瓦の状況、土層の堆積状況がある。あぜ付近で出土した瓦については出土状況のカラー写真(図版5)で見られる通り、表面がカーボンの付着により面的に黒化している。この黒化の色調はやや灰色がかり、通常の燻し瓦のそれとは異なる。また、断面も燻化層(表面のカーボン付着面直下にある1mmほどの灰色層)がなく、カーボン付着面直下で赤褐色になっている。これについては酸化した結果表面の色がくすみ、燻化層も消滅した可能性が考えられる(あぜ付近出土瓦の約半数がこのような色調を呈し、地山に一部見られる鉄分の付着などではない)。よって瓦がいぶされていることを推定できる。

次に土層(第62図断面図)の堆積状況についてであるが、16層の黄褐色粘土(多量の酸化瓦を含む)の上位に4、7層の黒色粘質土(炭層)が堆積する。また焼成室全面に広がり、厚さはそれぞれ15cm前後、10～20cmを測る。

調査時には炭層についていぶしに伴う煤の堆積とも考えた。だがそうであれば、焼成室内に煤が充満した状態で天井が崩落したと考えられる。炭層直上にある層はSF01、02の燃烧室天井を形成する粘土と類似するが、一方ですさ、木の枝などの混入痕跡はなく、SF01焼成室内に堆積する自然堆積土とも似ている。またあぜ間に堆積する16層のような自然堆積土も存在しえない。よってこの可能性は否定される。

黄褐色粘土層については、濁っており、粘性が高い。部分的に酸化瓦片、炭ブロックを含む一方、濁りが少ない黄色で、きわめて粘度が高く、均質な部分がある。きれいな粘土の大きさは30cm×30cm×5cm程度ある。この部分については未焼成瓦が土に還ったものと考えられる。この解釈が妥当であれば、未焼成瓦を生じる程度しか被熱してないこととなり、還元焼成終了後に行われるいぶしまで至っ

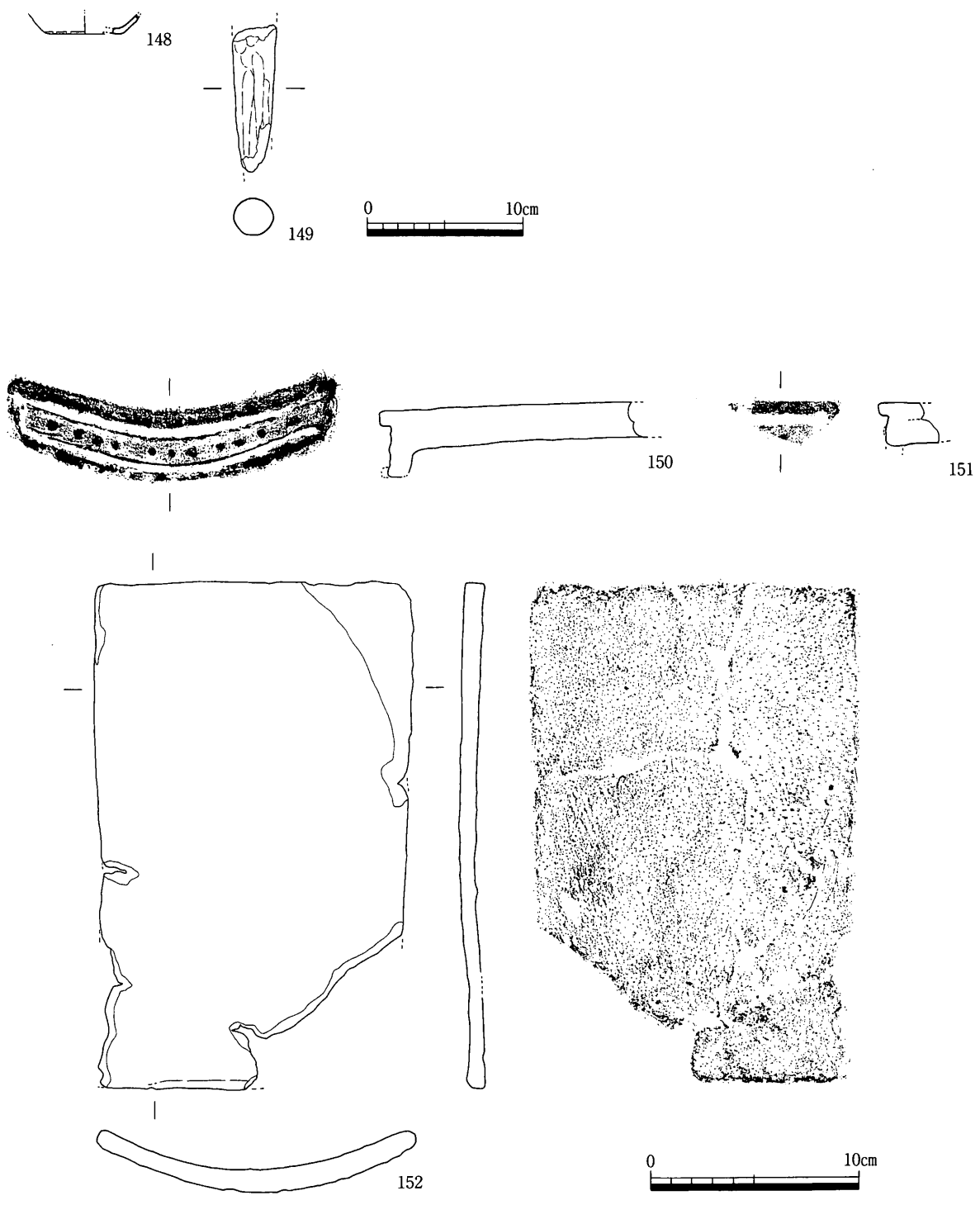


第63図 II区SF02 遺物出土状況 平面図及び床面付近立面図 (1/20)

てないとも考えられる。だが、先述した瓦に面的にカーボンが付着するという判断から何らかの事情（例えば、最終操業開始後すぐに天井部に亀裂が生じ、焼成温度が上がらない部分があったなど）により焼成不良が生じた部分もあったためと考える。以上から窯の崩壊は燻し段階であると考えられる。

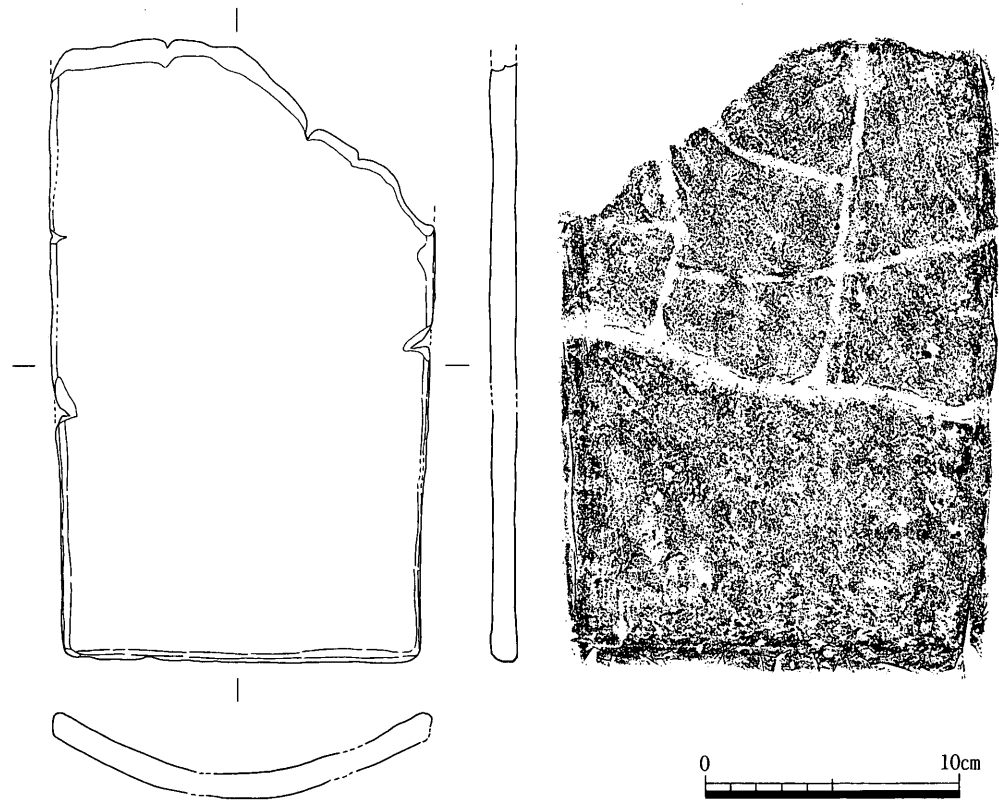
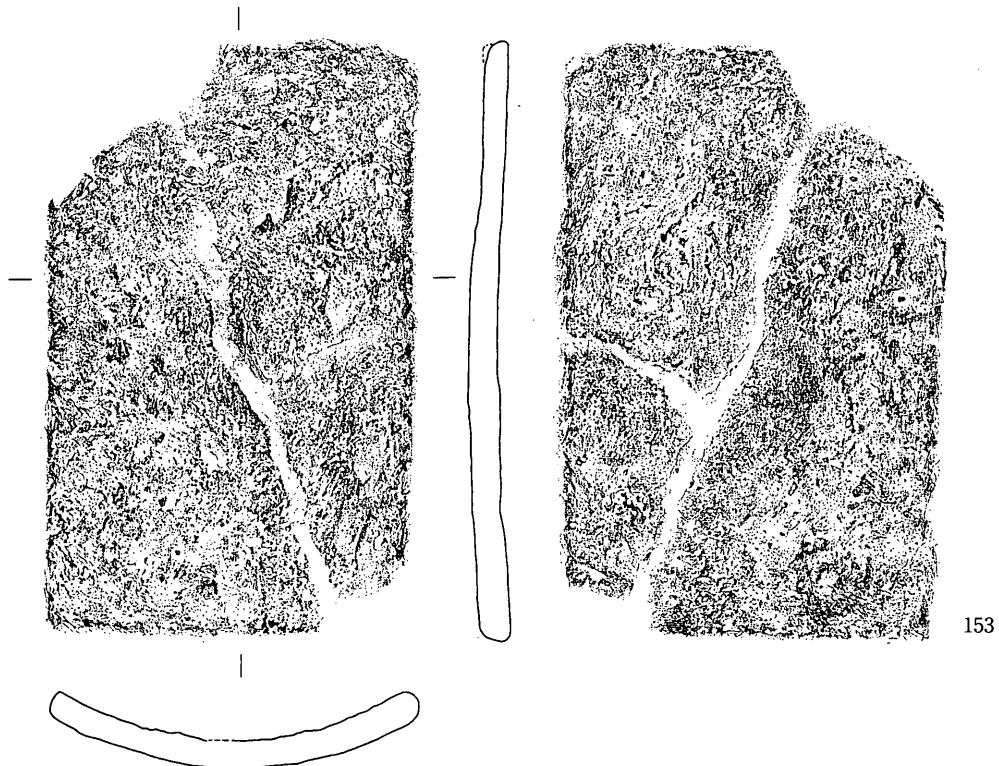
⑤ 出土遺物

土師器杯 (148)、土師質土器土釜脚 (149)、軒平瓦 I or IV類 (150、151)、平瓦 I類 (152～156)、II類 (157～176、178)、III類 (177) 丸瓦 I類 (179～181)、III類 (182)、石鏝未製品 (183) がある。148は口縁部を欠くが、外傾度が強く、やや硬質である。149は赤褐色を呈し、2次焼成を受けている。182は床面付近出土瓦群の中では唯一瓦質焼成であり、カーボンもきれいに付着している。窯の崩壊

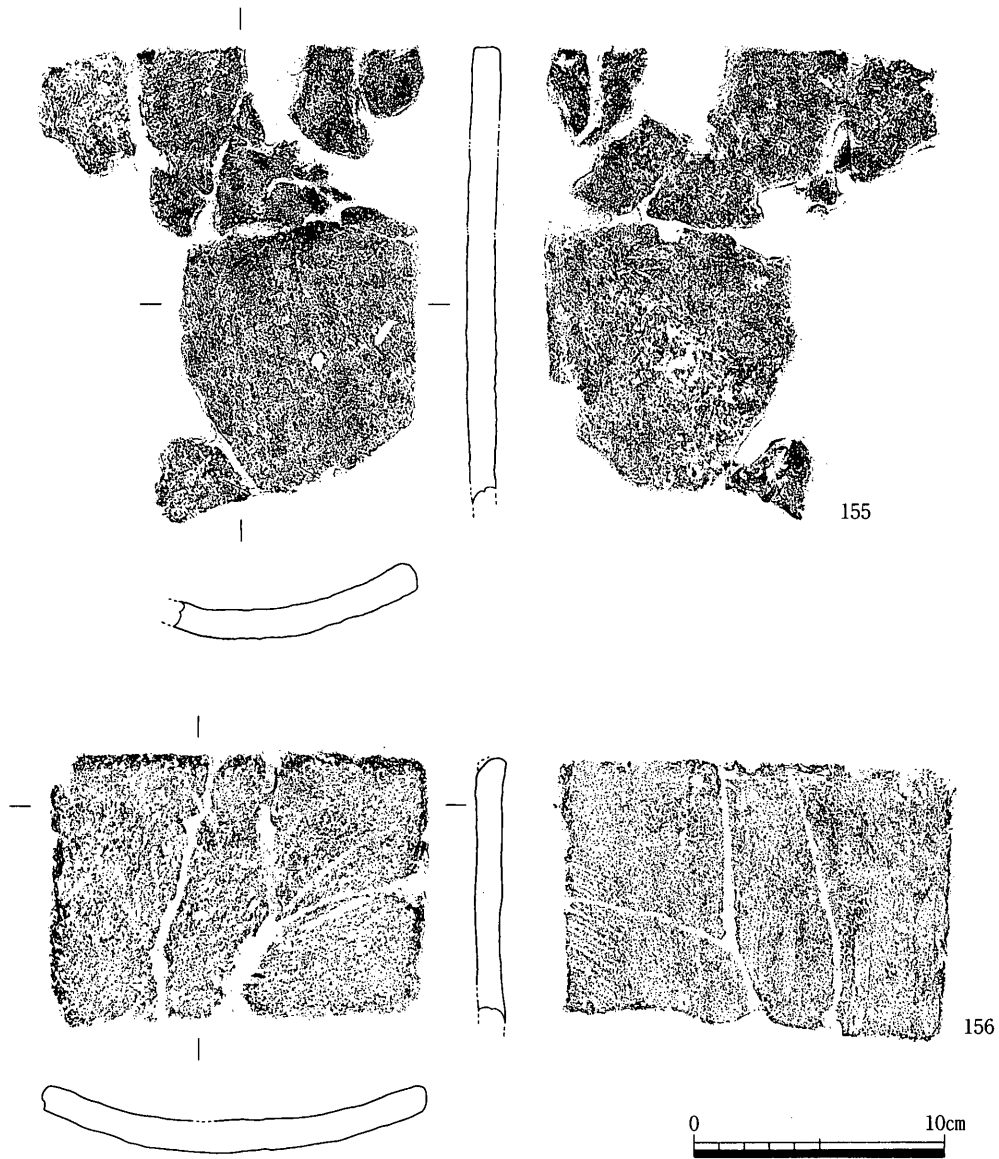


第64図 II区 SF02 出土遺物1 (1/4・1/3)

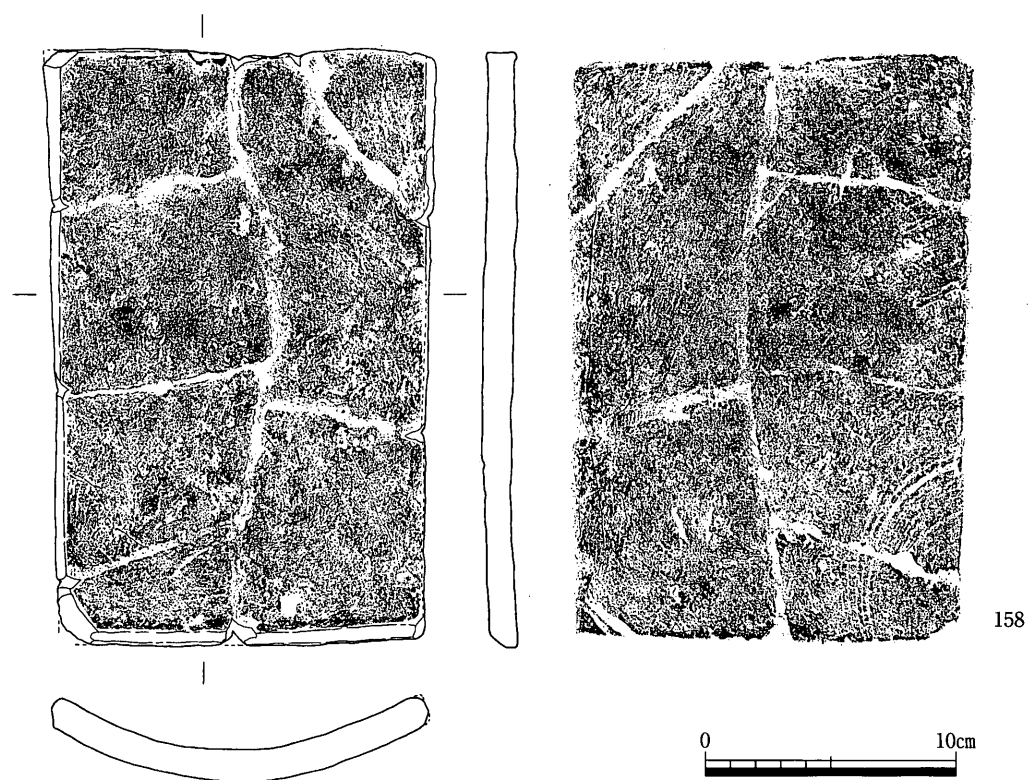
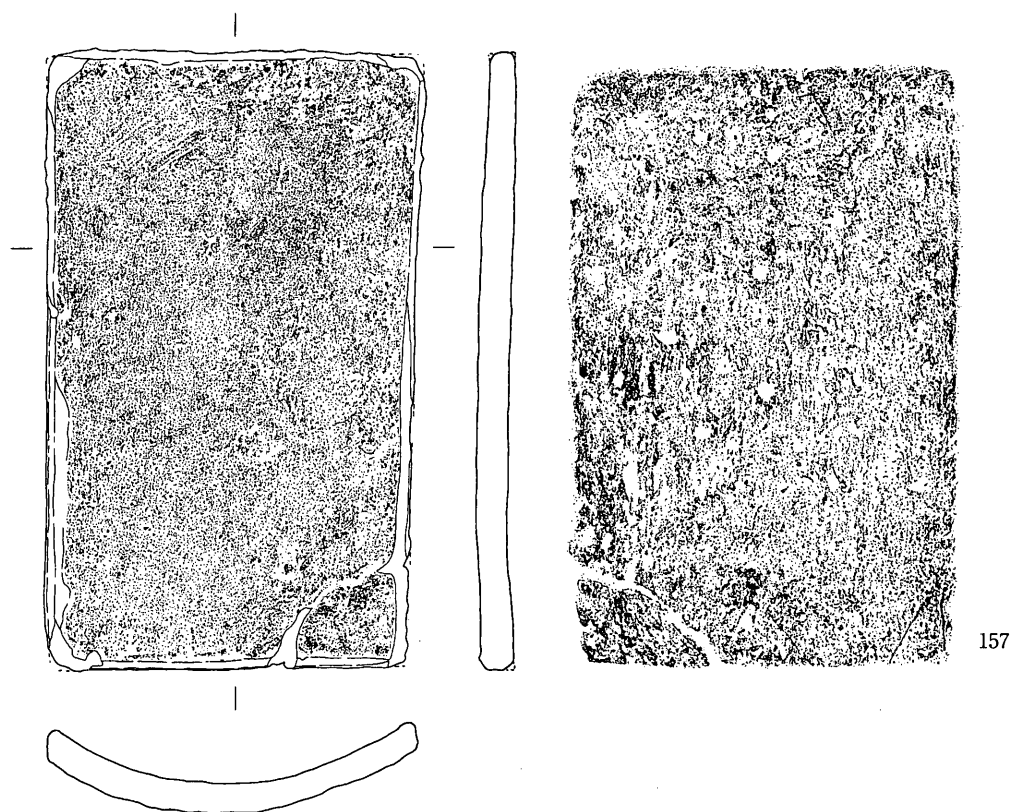
により出土瓦はほとんどが赤褐色を呈し、カーボンも変色したり、剥がれたりしている中で異質である。よって最終操業に伴わない混入遺物である可能性が高い。183は左図左側縁にわずかに調整を施す。瓦より窯の時期は14世紀後半と考えられる。



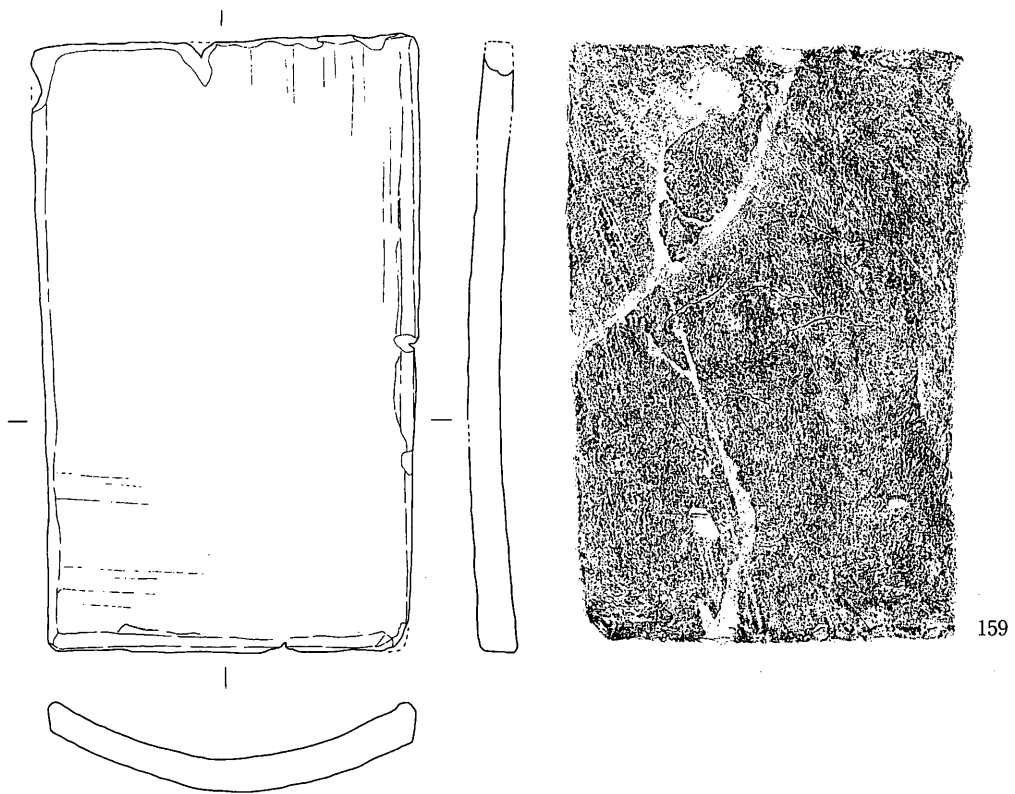
第65图 II区SF02 出土遗物2(1/3)



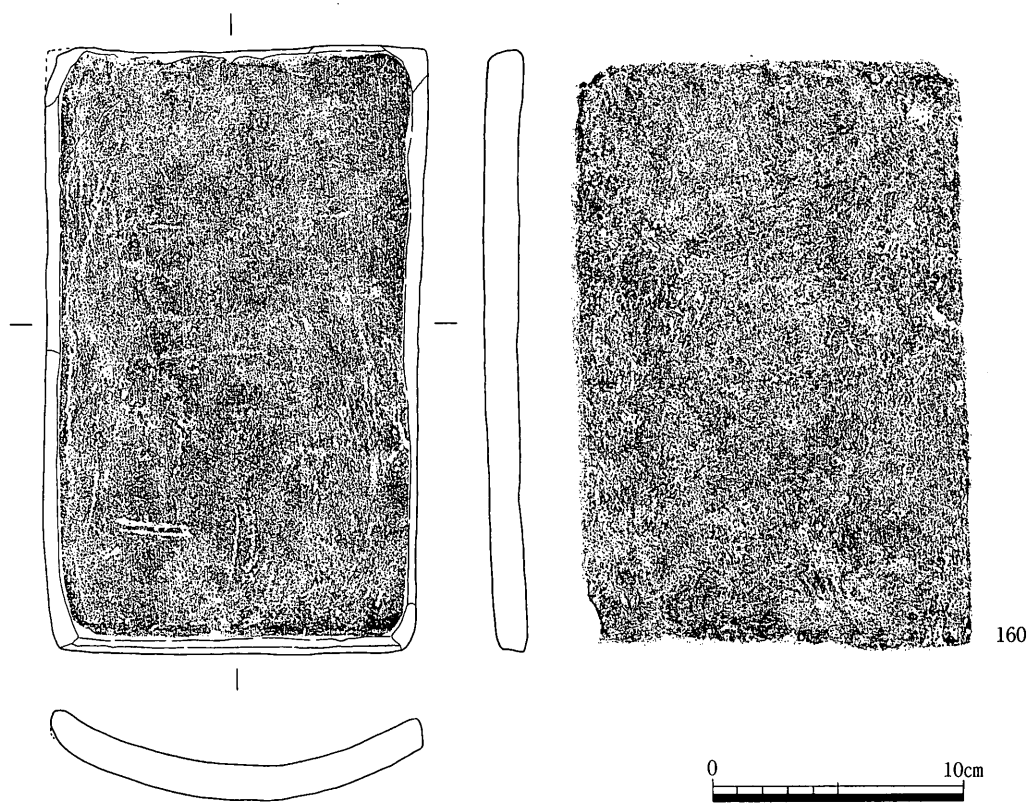
第66图 II区SF02 出土遺物3 (1/3)



第67图 II区SF02 出土遗物4(1/3)



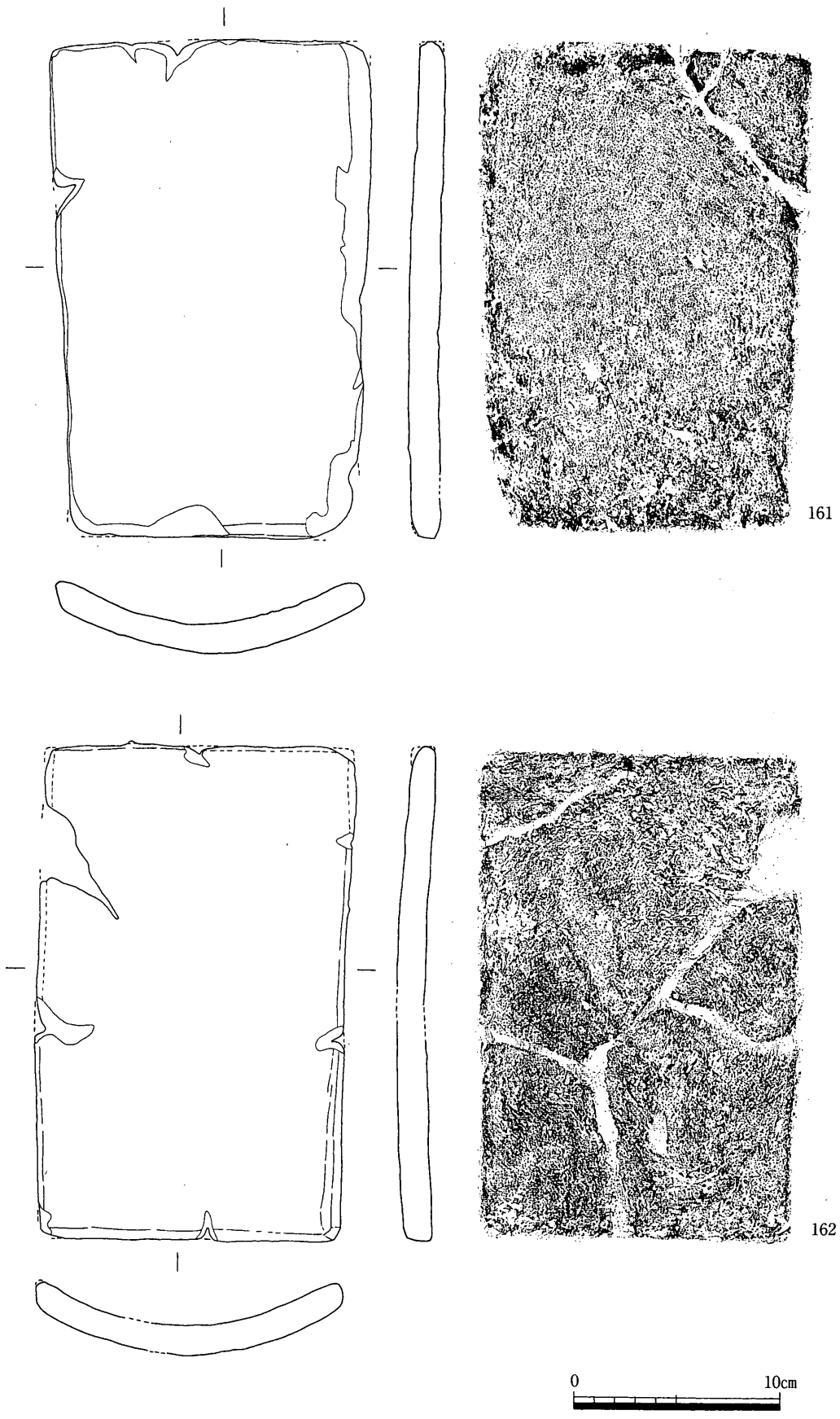
159



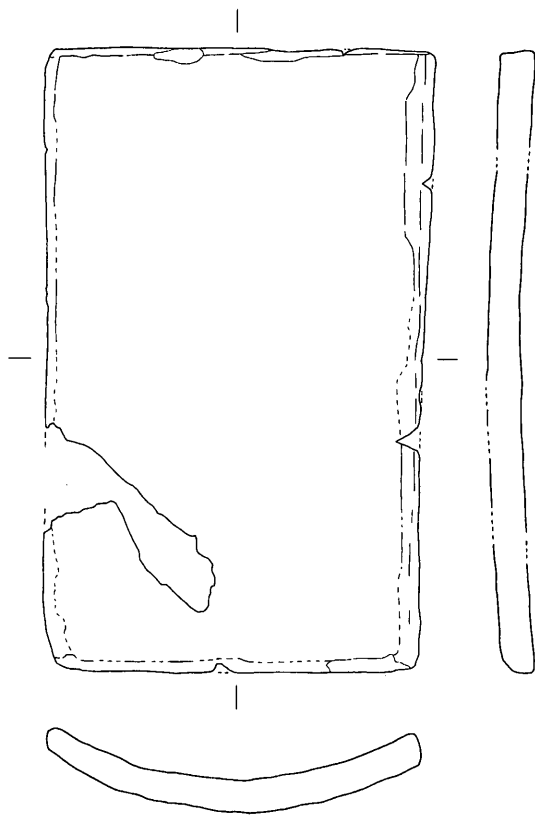
160

0 10cm

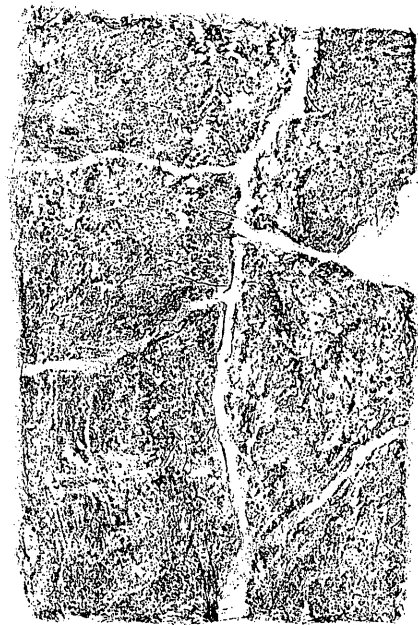
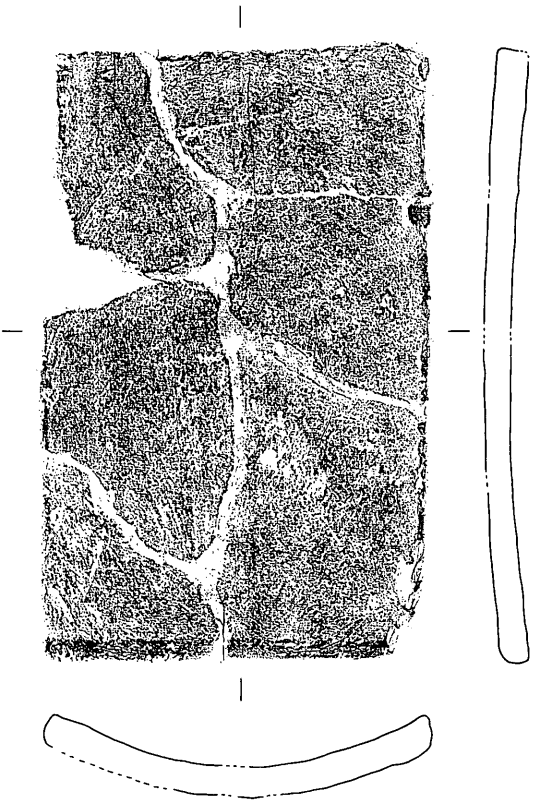
第68图 II区SF02 出土遺物5 (1/3)



第69图 II区SF02 出土遺物6 (1/3)



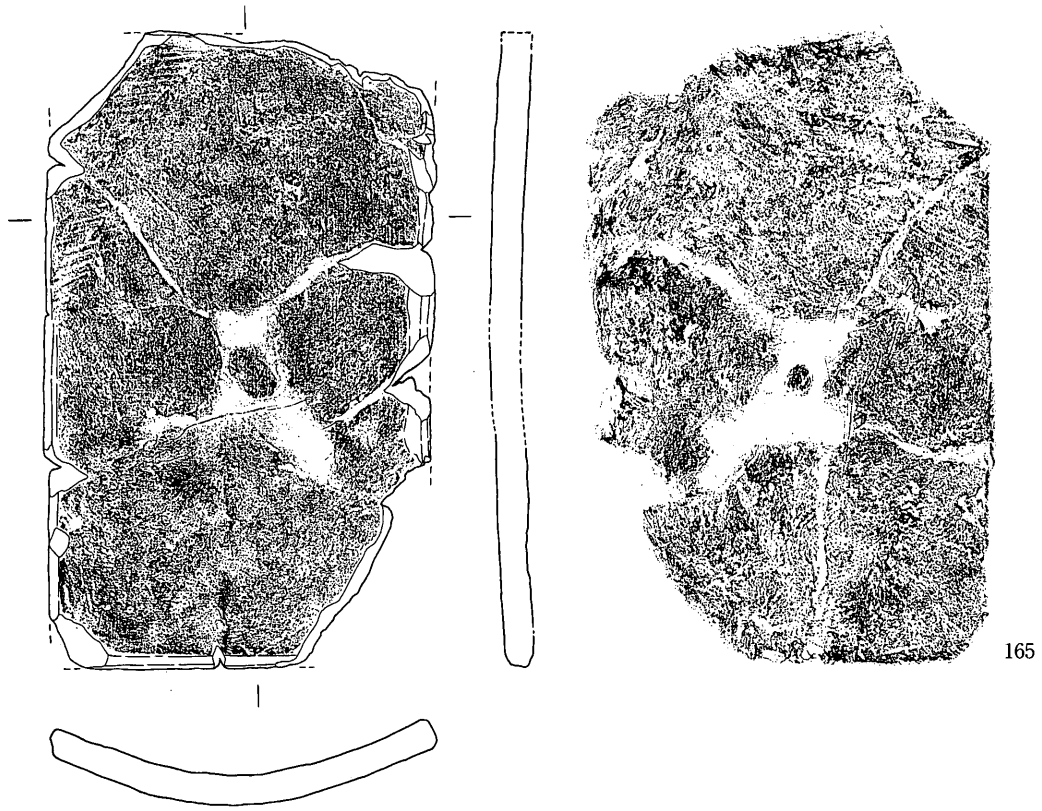
163



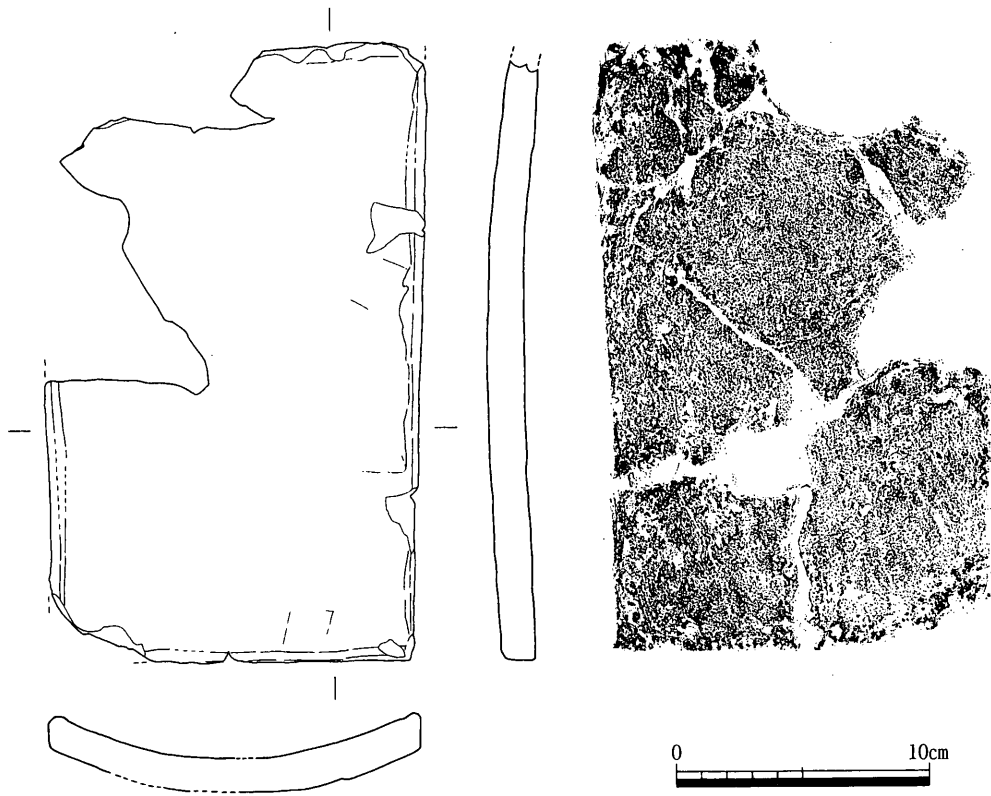
164



第70图 II区SF02 出土遺物7 (1/3)



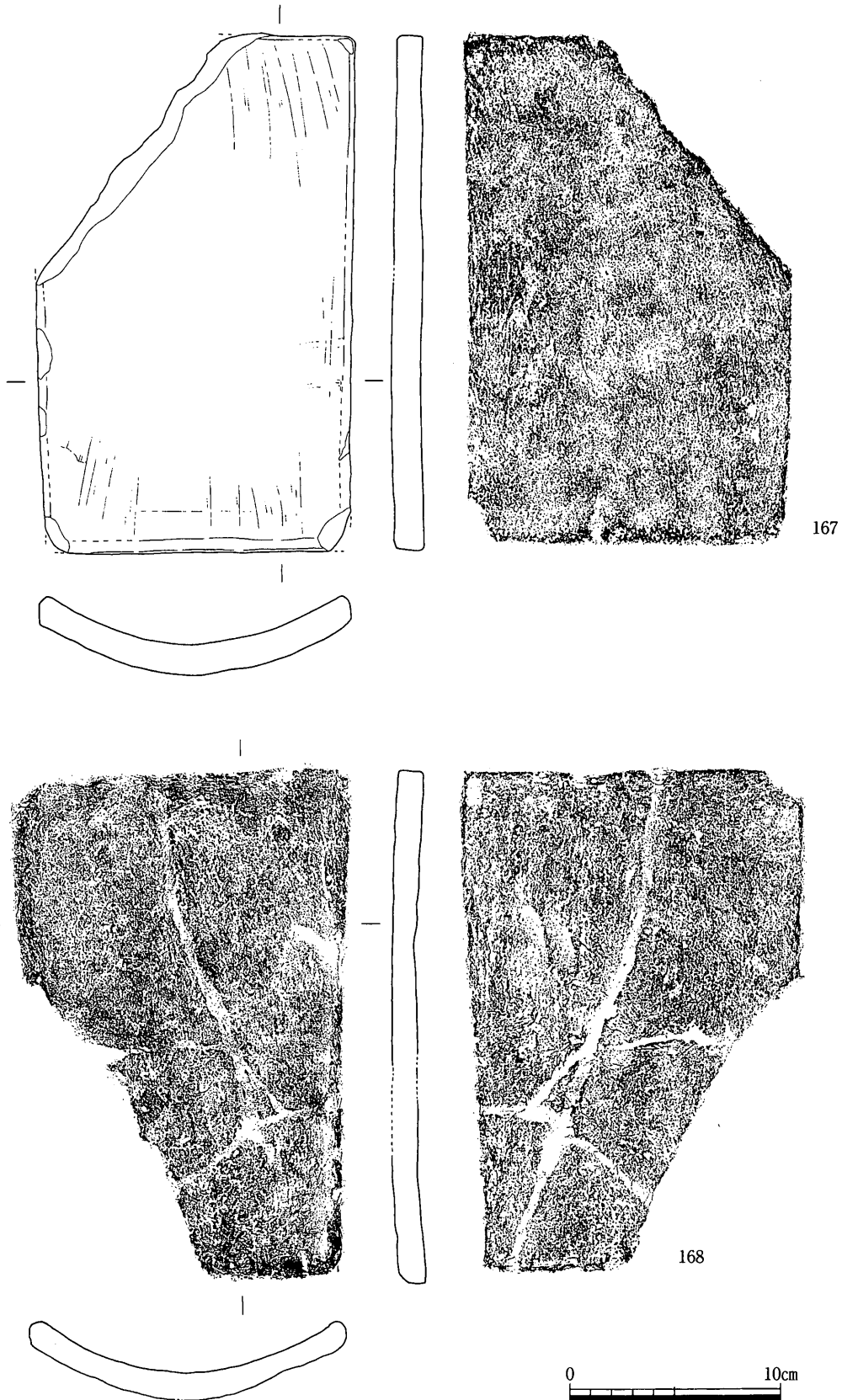
165



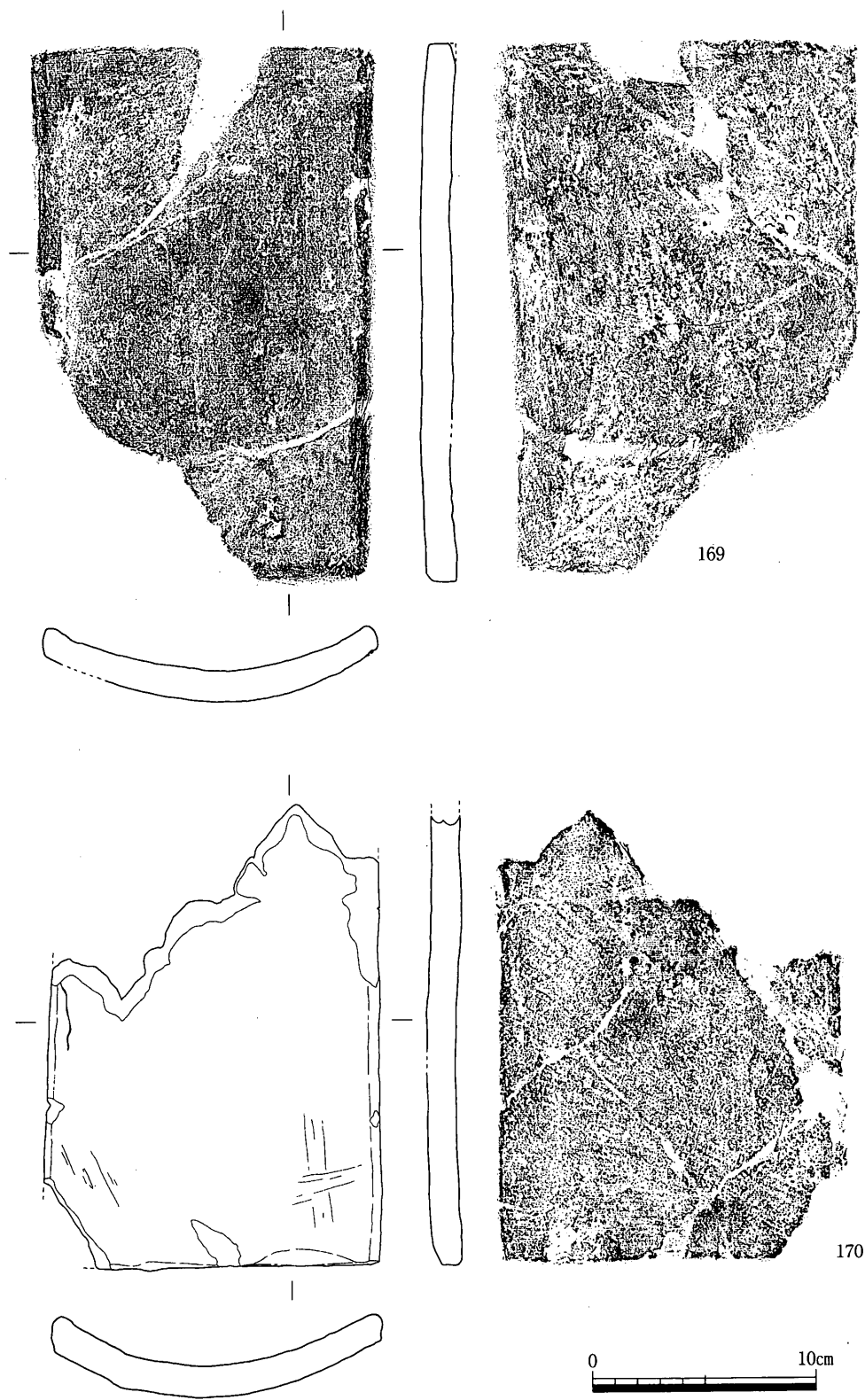
166

0 10cm

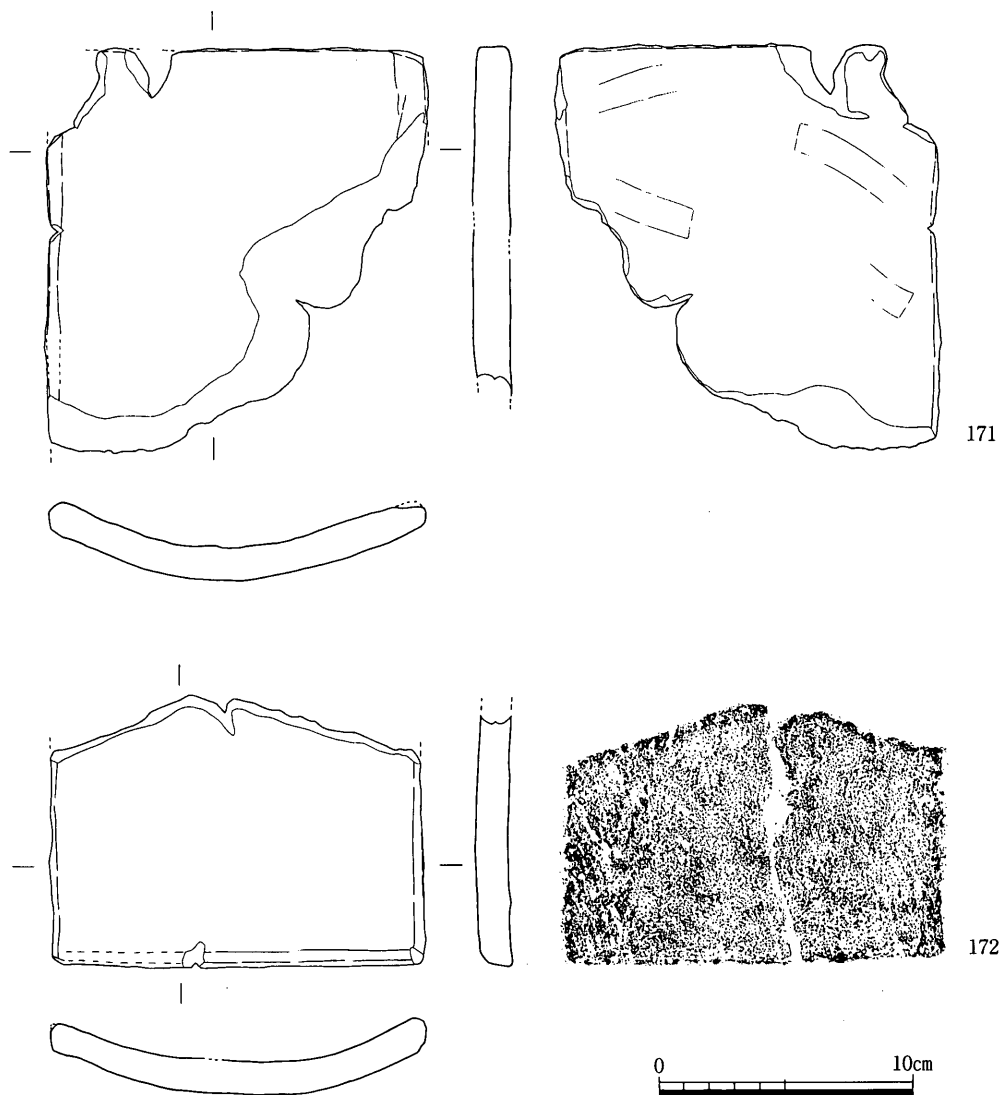
第71图 II区SF02 出土遗物8(1/3)



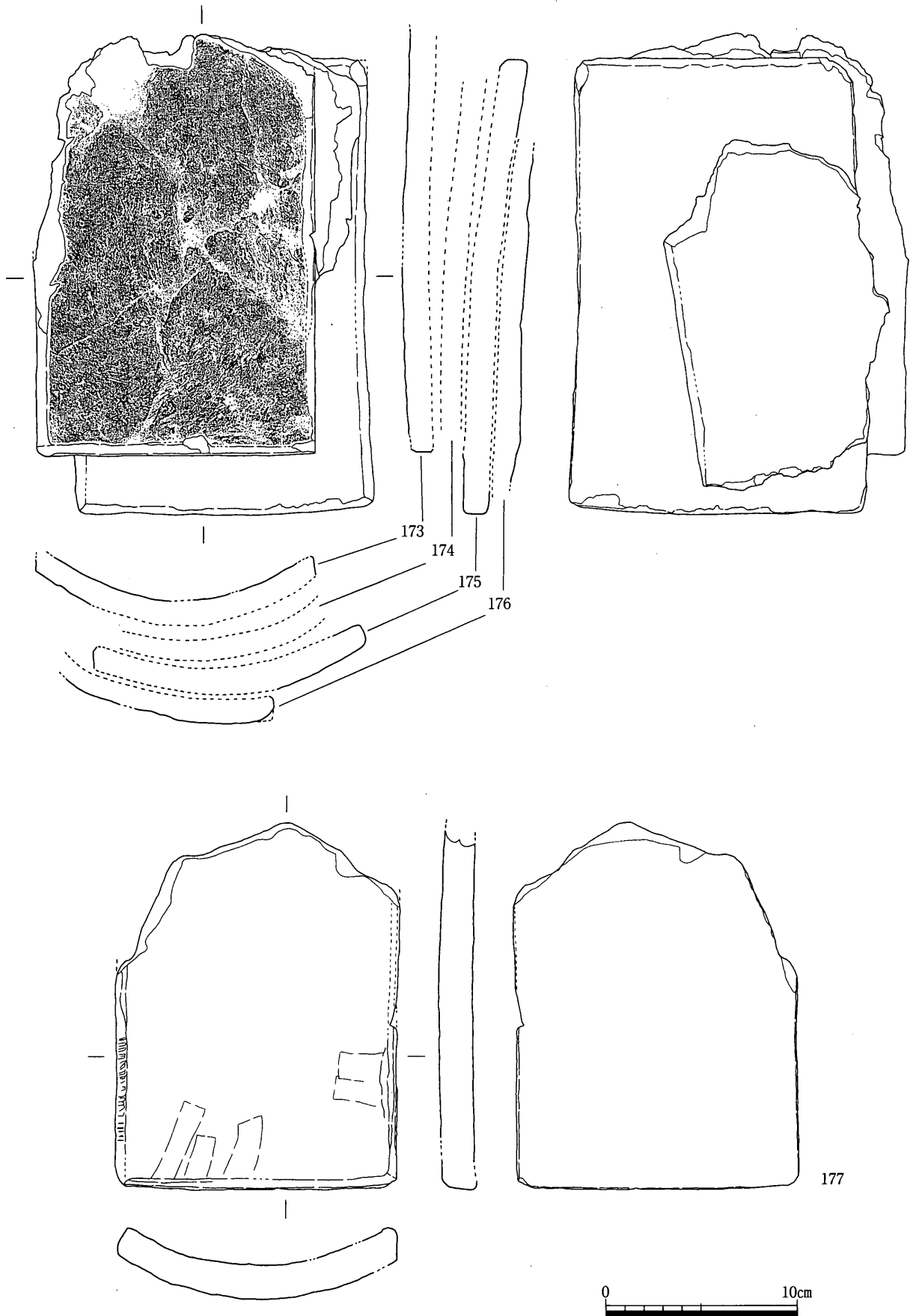
第72图 II区SF02 出土遗物9 (1/3)



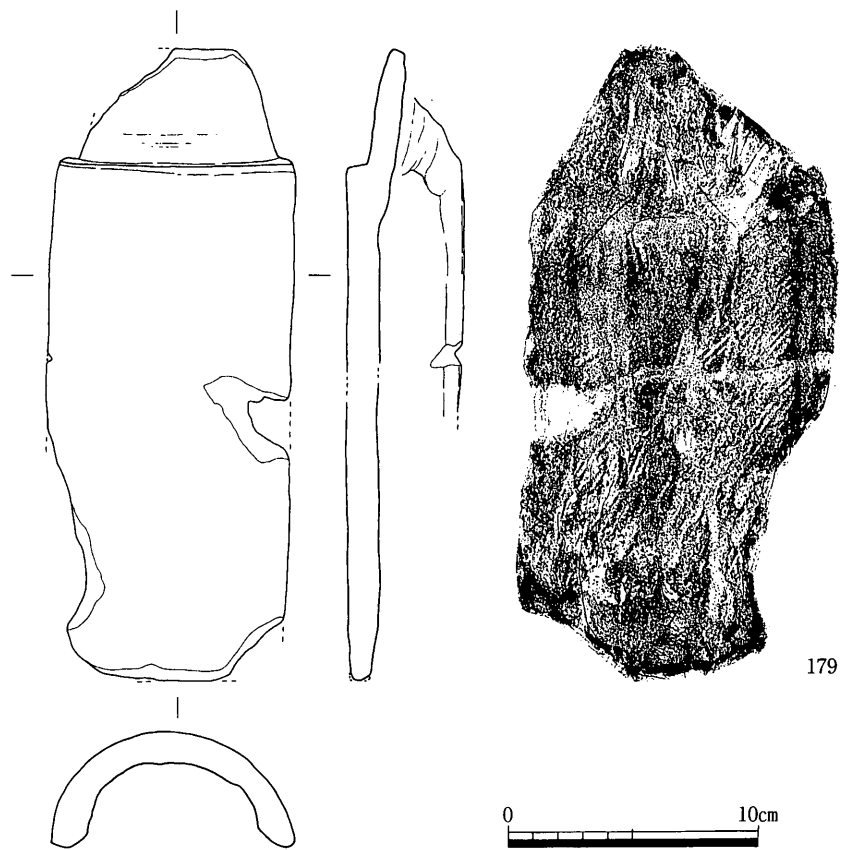
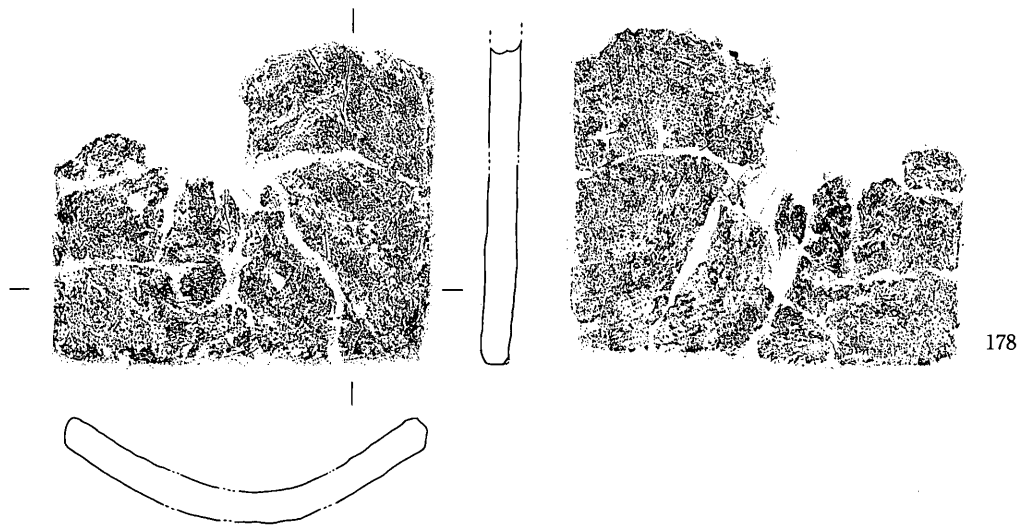
第73图 II区SF02 出土遺物10 (1/3)



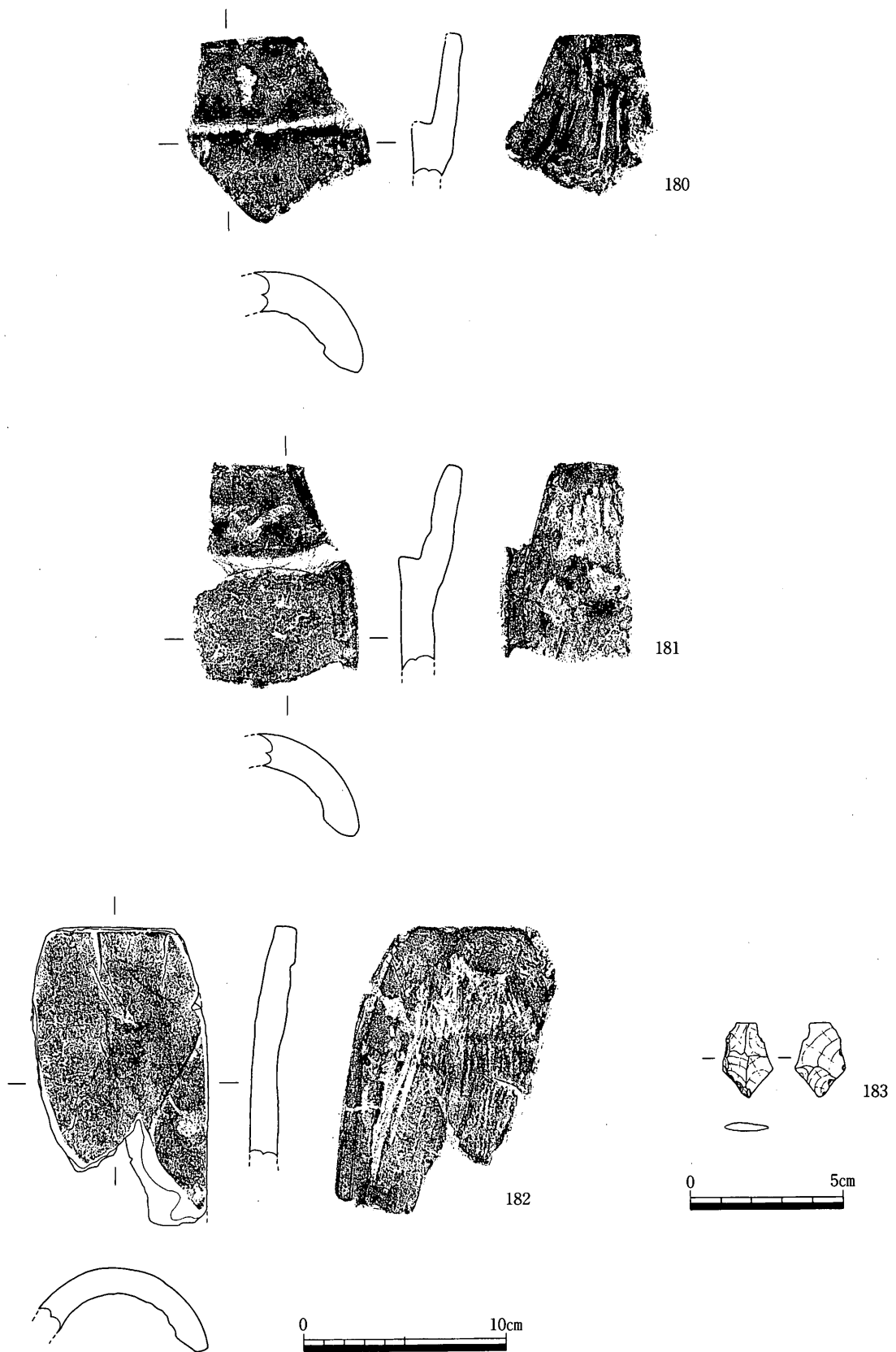
第74图 II区SF02 出土遗物11 (1/3)



第75图 II区SF02 出土遺物12 (1/3)



第76图 II区SF02 出土遺物13 (1/3)



第77图 II区SF02 出土遺物14 (1/3·1/2)

(4) 土坑

SK01 (第78図)

調査区南西部で検出した土坑である。近接してSK03、08が位置する。平面形は長方形で、断面形は壁がほぼまっすぐ落ちる。床面は東西ではほぼ平坦であるが、南北ではやや凹凸がある。南部と北部で20cm前後の礫が数点ずつ出土している。規模は長径1.05m、短径0.59m、深さ49cmを測る。主軸方向はN-81°-Eである。平・断面形、規模、検出位置からは土坑墓である可能性もあるが、人骨や副葬品などは見られない(3点の土師器杯は185が半身程度残存するのが最大)ため積極的に評価できない。遺物は土師器杯(184~186)、東播系コネ鉢がある。184は口縁部を欠き、体部中央に強いナデを施す。また内面の底、体部境が分厚い。13世紀後半から14世紀前半と考えられる。185は器壁が分厚く、器高が高い。底部をヘラ切りする。186はやや浅い皿形の器形で、口縁部が外傾気味である。13世紀前半~14世紀前半と考えられる。184、186から土坑の時期は13世紀後半~14世紀前半と考えられる。

SK02 (第79、80図)

調査区北西部で検出した土坑である。窯が築かれた丘陵が南側の谷地形にさしかかる斜面に位置する。窯からの距離は約10mを測る。平面形は東側に向かって広がる方形で、西側は調査区外にのびる。断面形はなだらかに下る浅い皿形を呈する。規模は東西2.20m以上、南北1.50m以上、深さ20cmを測る。北部から中央部にかけて瓦がまとまって出土する。出土遺物には土師器杯(187)、土師質土器土釜(188)、軒丸瓦I類(189)、丸瓦I類(190、192)、II類(191)がある。187は底部、体部の境界も薄作りで、底部をヘラ切りする。188は長い口縁部を持ち、断面三角形の鏝を張り付ける。14世紀後半と考えられる。188と瓦より土坑の時期は14世紀後半と考えられる。

SK03 (第78図)

調査区南西部で検出した土坑である。平面形は南部がやや膨らむ楕円形で、断面形は浅い皿形を呈する。規模は長径1.12m、短径0.96m、深さ20cmを測る。出土遺物はないが、埋土より中世と考えられる。

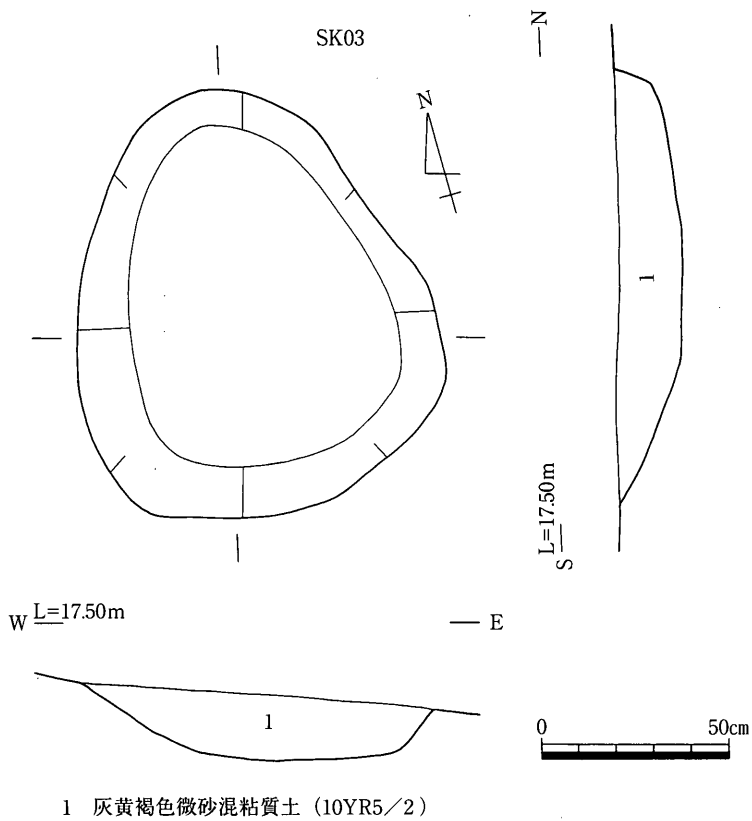
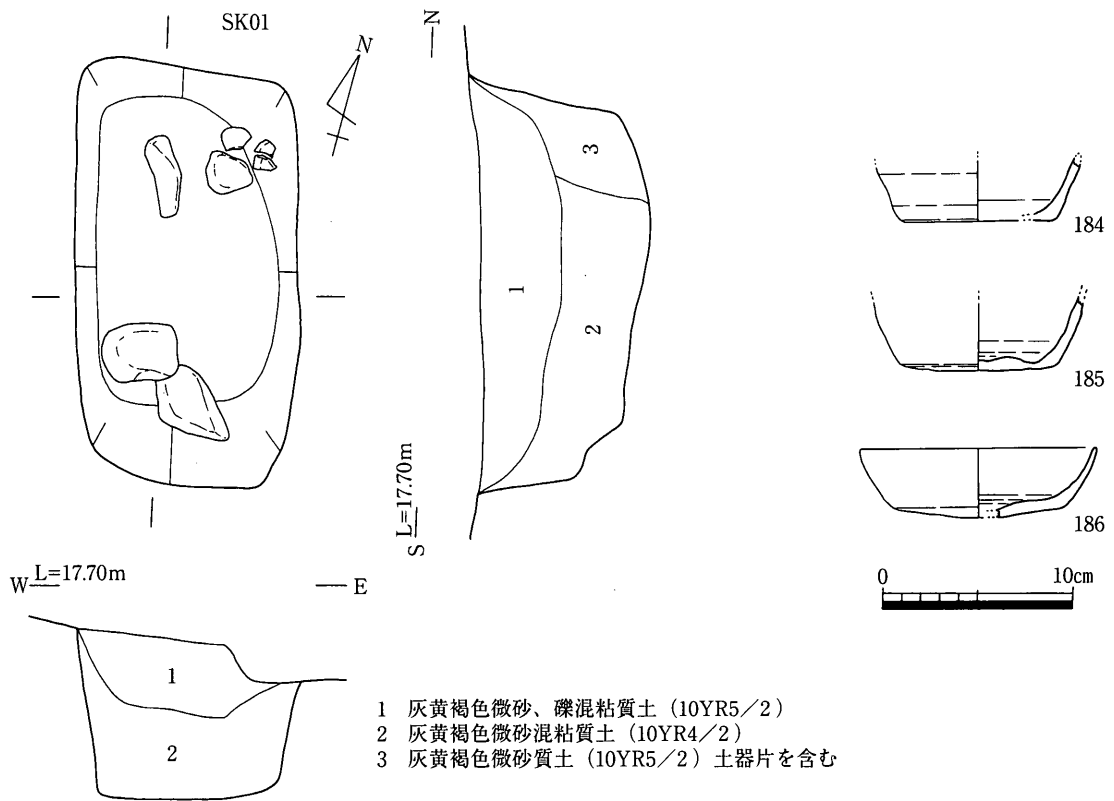
SK04 (第81~103図)

調査区中央部で検出した土坑である。「1. 土層序」で述べた小さな谷地形の延長上に位置する。平面形は細長い長方形で、南側がやや大きい。北側をSD01に切られる。断面形は浅い皿形を呈し、南東部では一段下がる。規模は長径6.50m、短径2.10m、深さ25cmを測る。主軸方向はN-19°-Wである。これは谷地形による付近の等高線とほぼ平行する。

土坑の中央では多量の瓦、礫が出土し、ごく少量の土師器も混じる。この部分の中央では瓦が密集し、北西から南東にかけて幅0.6m×2.4mの範囲にはほぼ収まる。この部分は土坑の完掘写真を見るとややへこんでいる。瓦の器種は軒平、軒丸、平、丸瓦があり、古代の平瓦もごく少量含む。ほとんどは破片であるが、完形に近いものも含む。礫は瓦集中部の南北の延長上でやはりかたまって出土する。大きさは拳大のものが多く、人頭大のものも一定量含む。全て地山内に含まれる和泉系砂岩である。

埋土は3層に区分される。遺構検出時にSK12と同一遺構と判断していたため土層図作成位置が南側に偏っている。このため全体の埋没状況を捉えられないが、1層で瓦、礫が出土している。

このように瓦、礫の出土位置は平面的に偏り、ある程度埋没した層位であるので人為的な投棄によると考えられる。窯の付近には旧河道があり、物原(「(7) 北西部包含層」、「(8) 北西部流入土」に

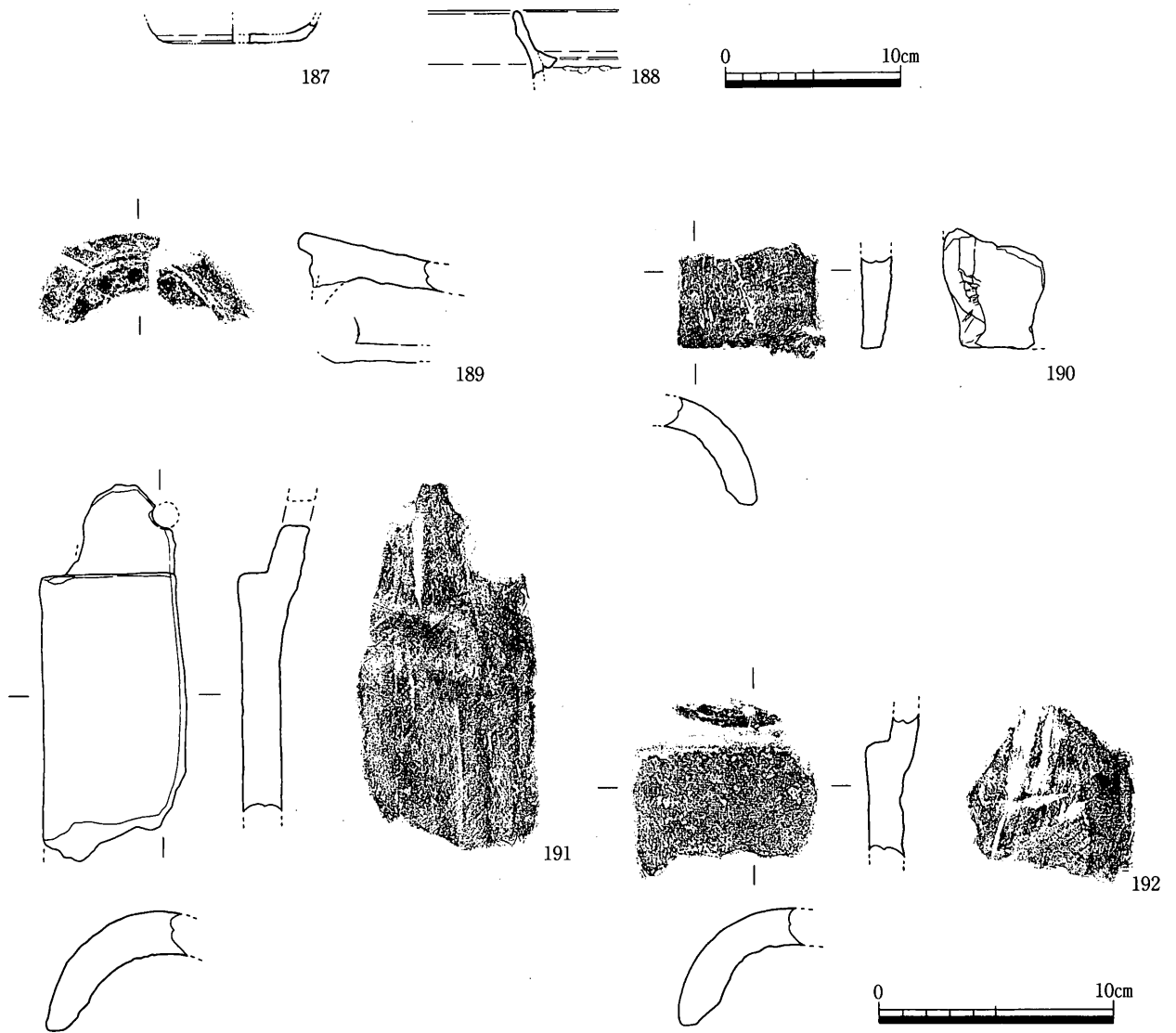


第78図 II区SK01 遺物出土状況 平・断面図 (1/20)、出土遺物 (1/4)、SK03 平・断面図 (1/20)



第79図 II区SK02 遺物出土状況 平・断面図 (1/20)

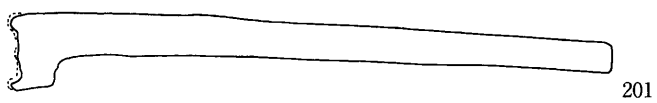
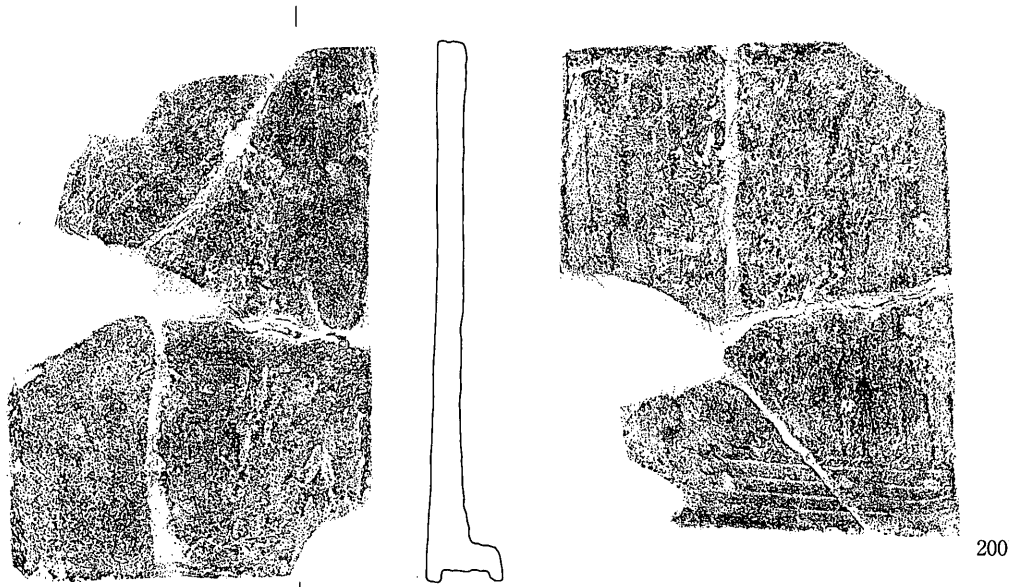
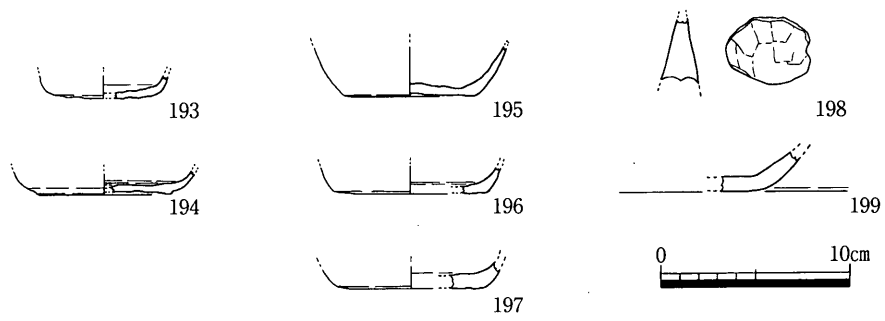
において後述。)も存在したと推定される。よって位置的に外れるSK04へ操業に伴う失敗品を多量に廃棄したとは考えにくい。1層中に地山ブロックが見られないが、土坑が不要になったため、瓦、礫を用いて埋め戻した可能性が考えられる。なお、出土瓦には焼きが悪く、カーボンが付着していない焼成不良瓦が一定量含まれること、谷地形の延長上にあることから建物に伴う溝、土坑といった機能はないと判断する。遺物は土師器小皿(193、194)、杯(195～197)、土師質土器土釜(198)、鉢?(199)、軒平瓦I類(200)、II類(201)、IV類(202～210)、I or IV類(211、212)、軒丸瓦I類(213)、平瓦I類(214～216)、II類(217～234)、丸瓦I類(235～248)、I'類(249～252)、古代平瓦(253～255)がある。193は薄作りで、口縁部は直立気味である。底部をヘラ切りする。194は体部の屈曲が強い。195、196は箱形の器形を持つがやや外反する。198は上部に格子目叩きが見られる。瓦より土坑の時期は14世紀後半と考えられる。



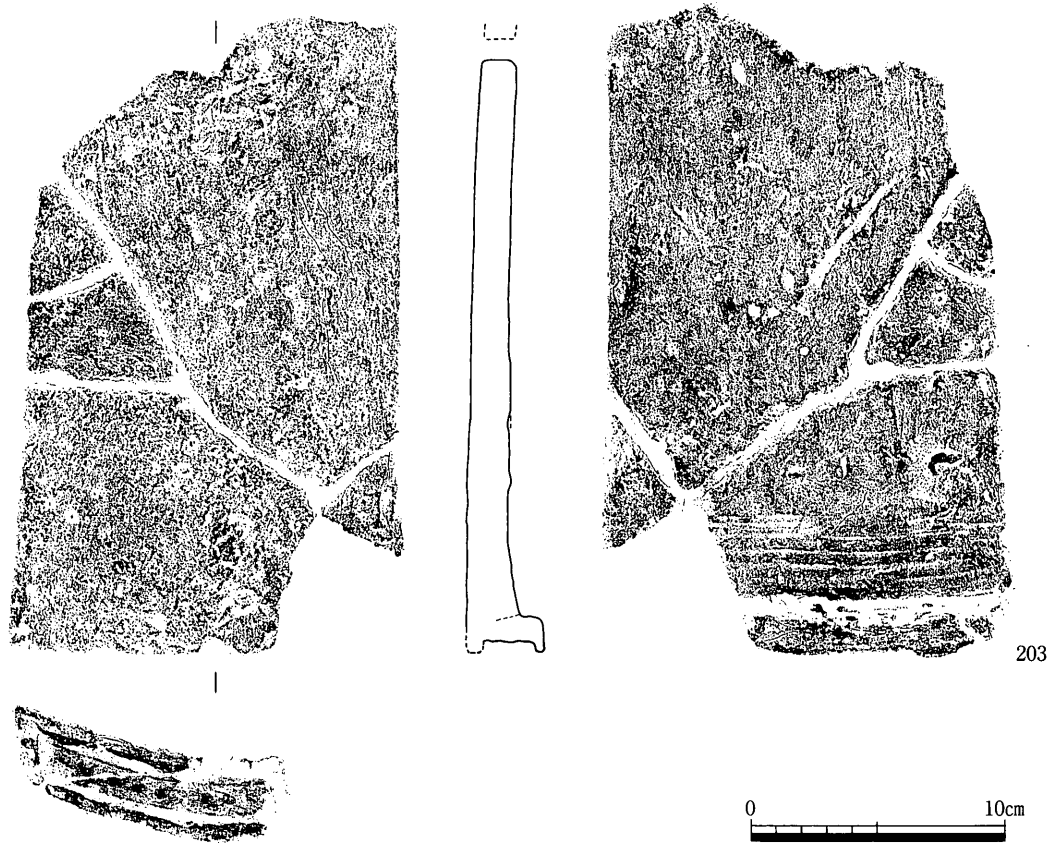
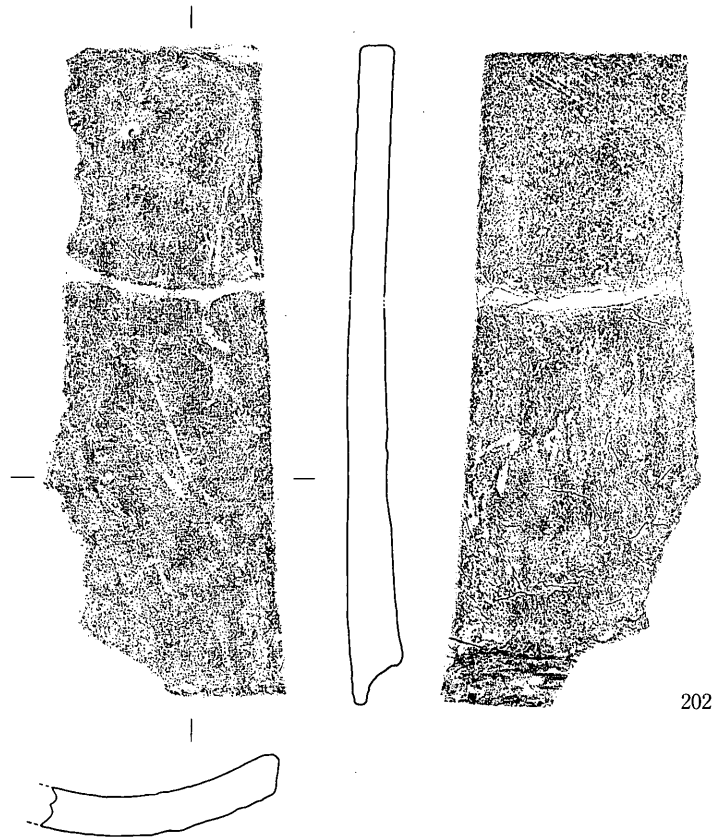
第80图 II区SK02 出土遗物 (1/4·1/3)



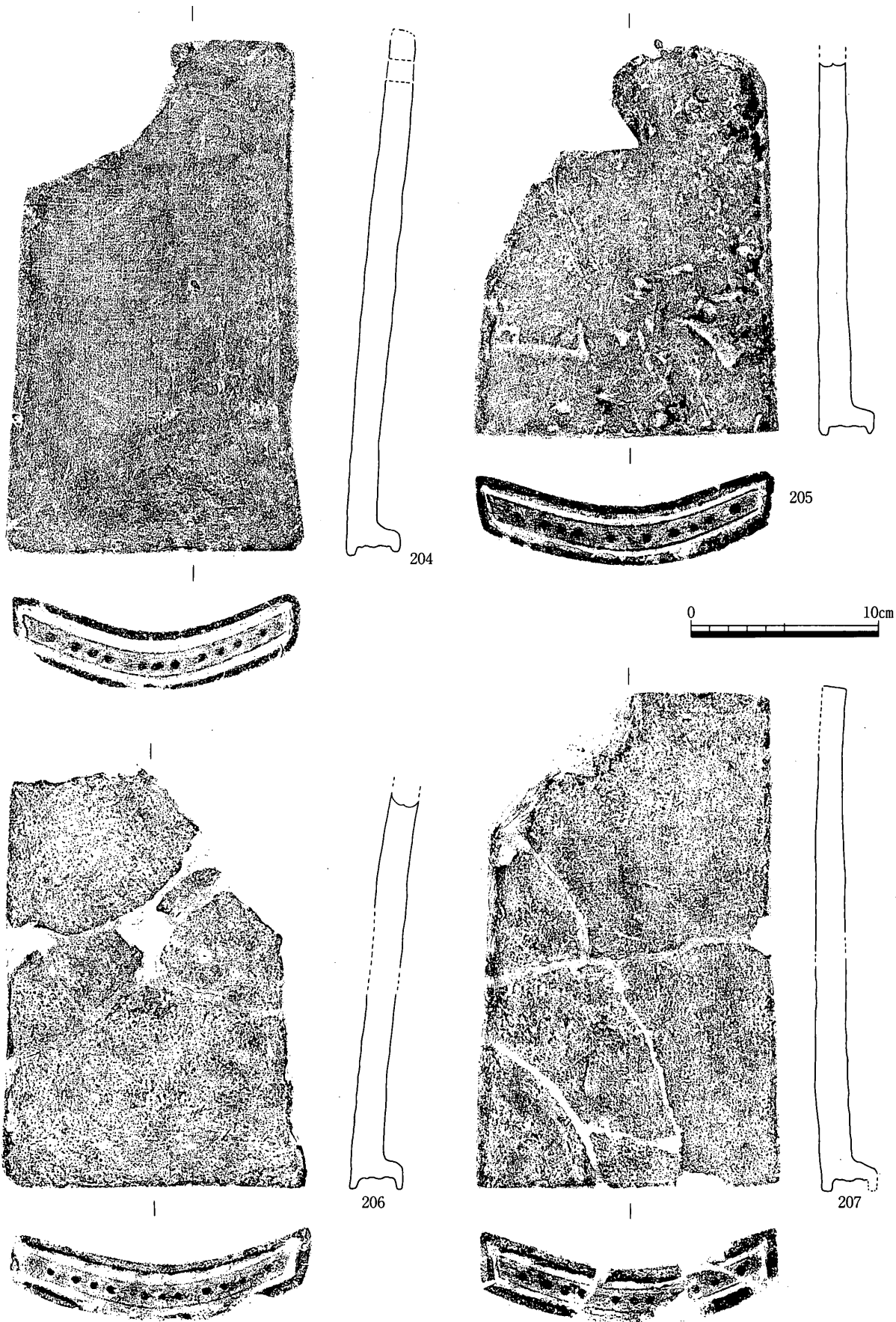
第81図 II区SK04 遺物出土状況 平・断面図 (1/40)



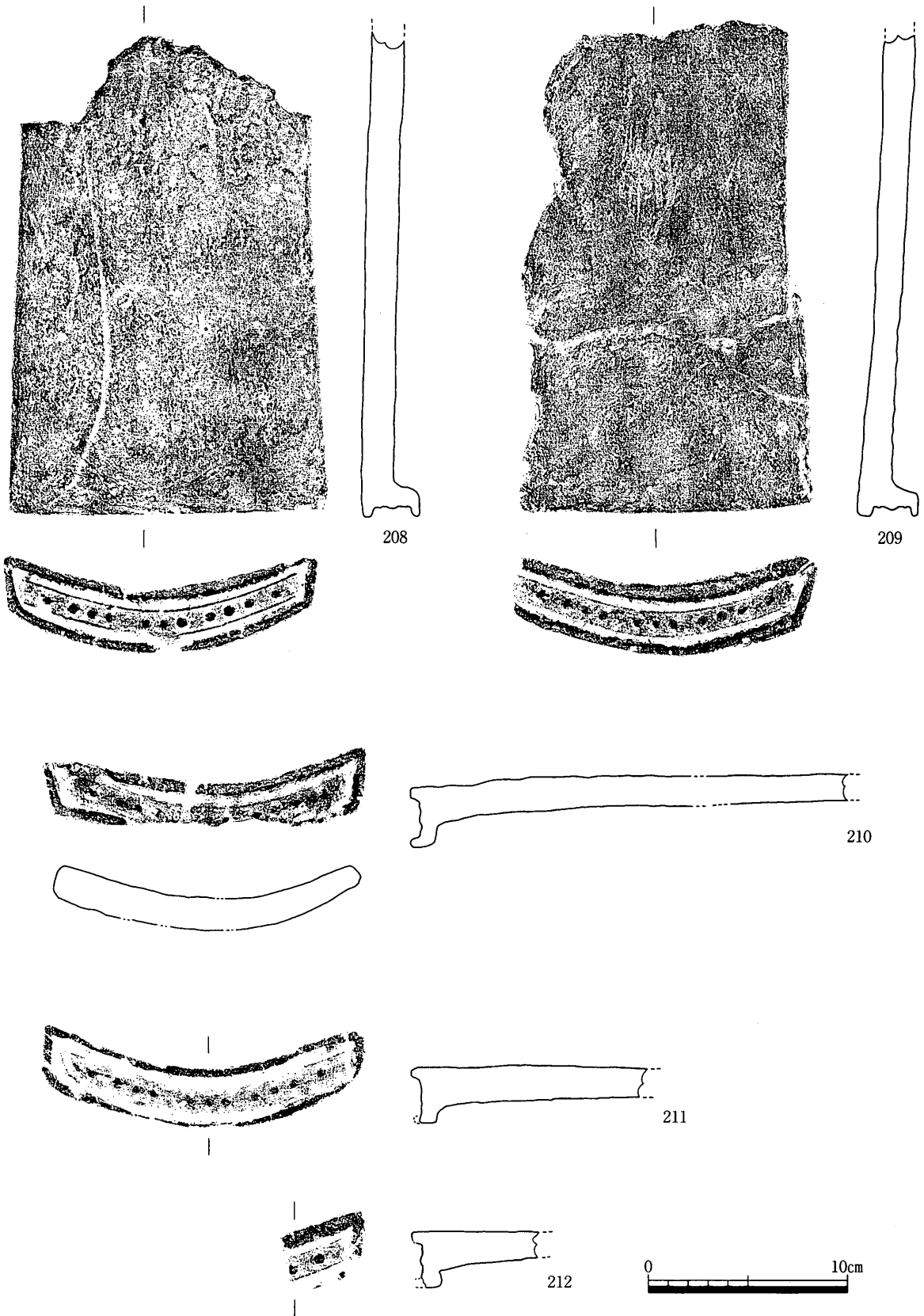
第82图 II区SK04 出土遗物1 (1/4·1/3)



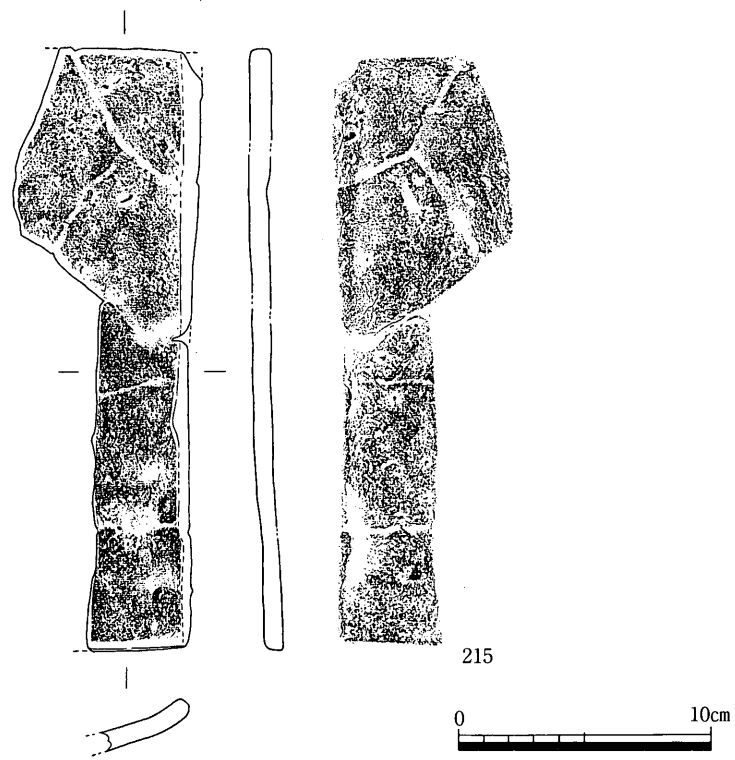
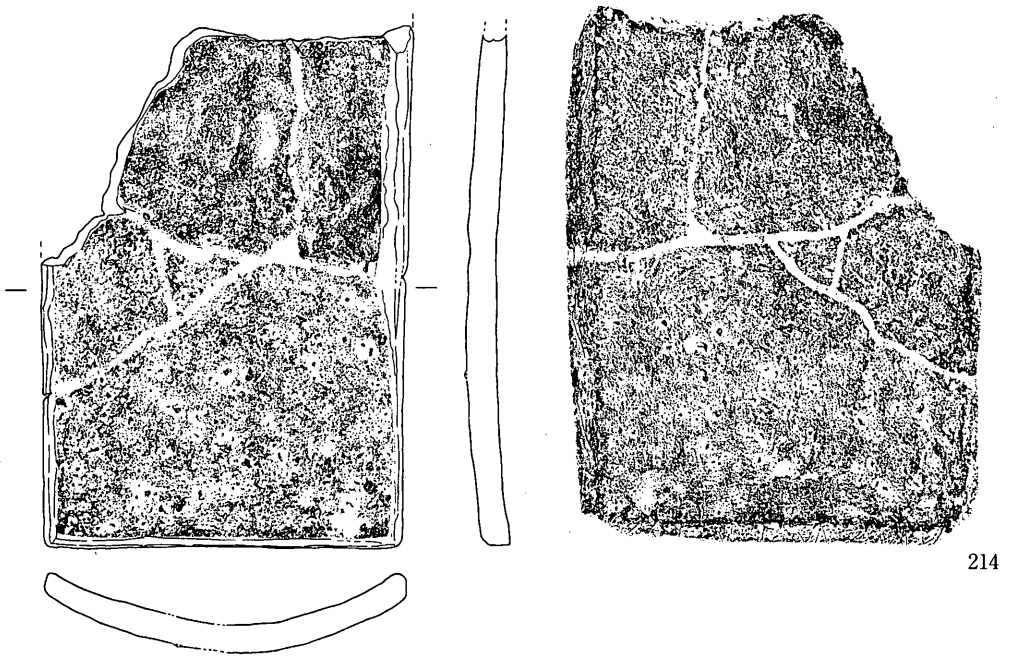
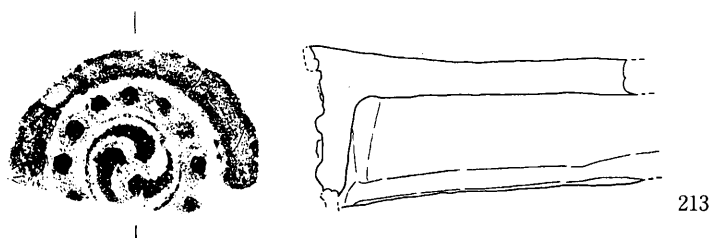
第83图 II区SK04 出土遗物2(1/3)



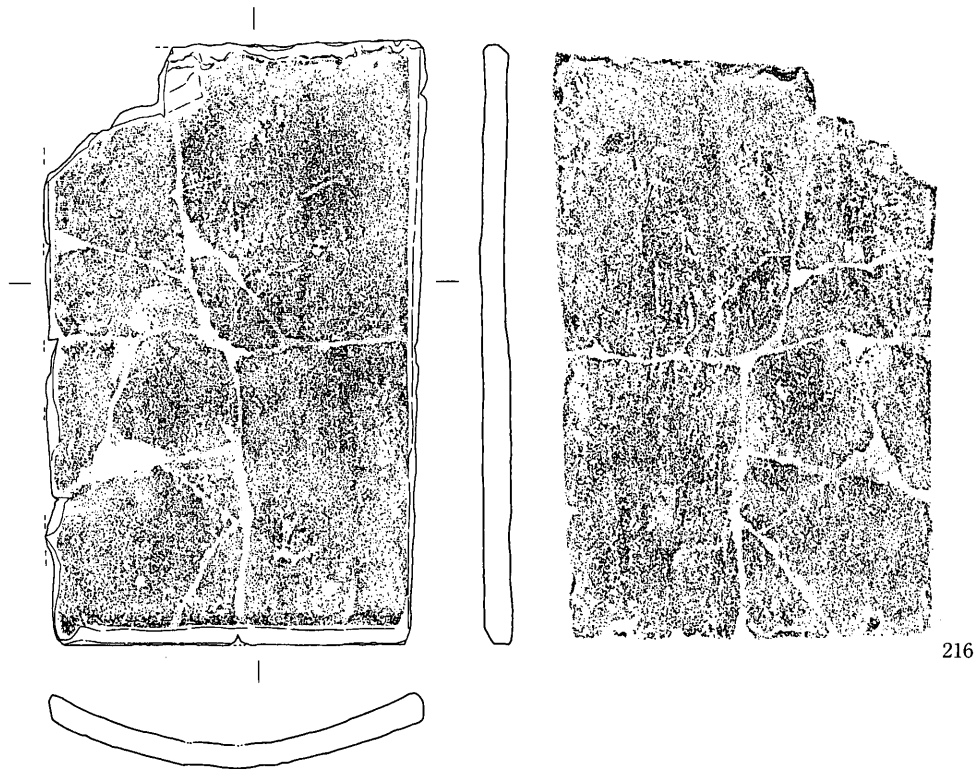
第84图 II区SK04 出土遺物3 (1/3)



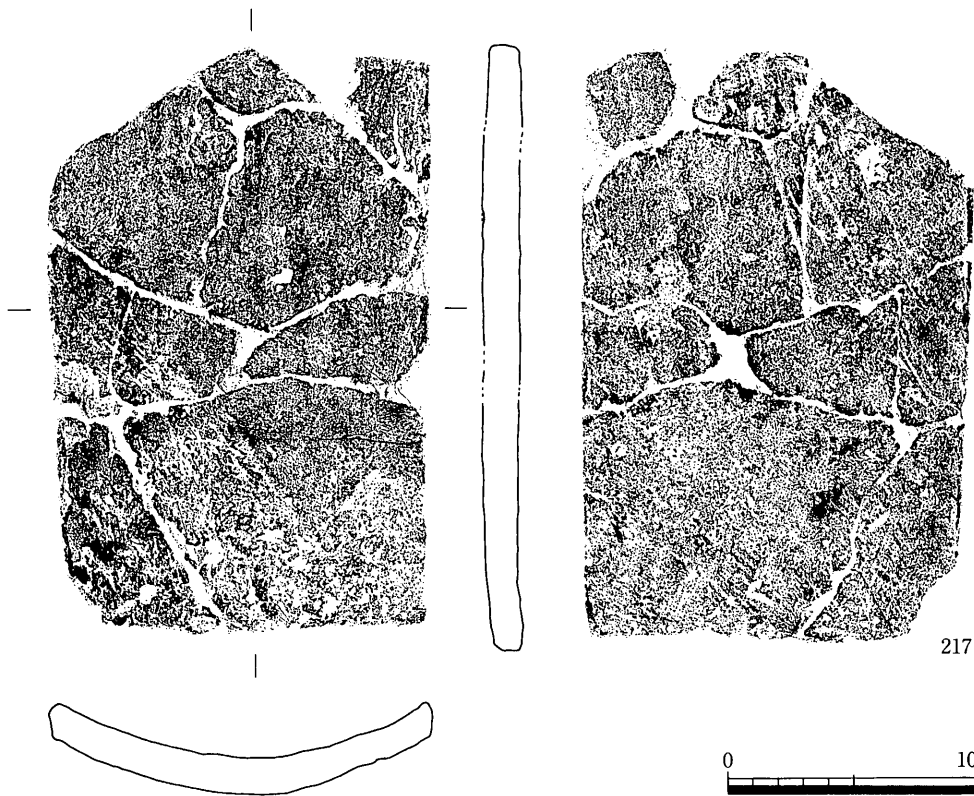
第85图 II区SK04 出土遺物4 (1/3)



第86图 II区SK04 出土遺物5 (1/3)



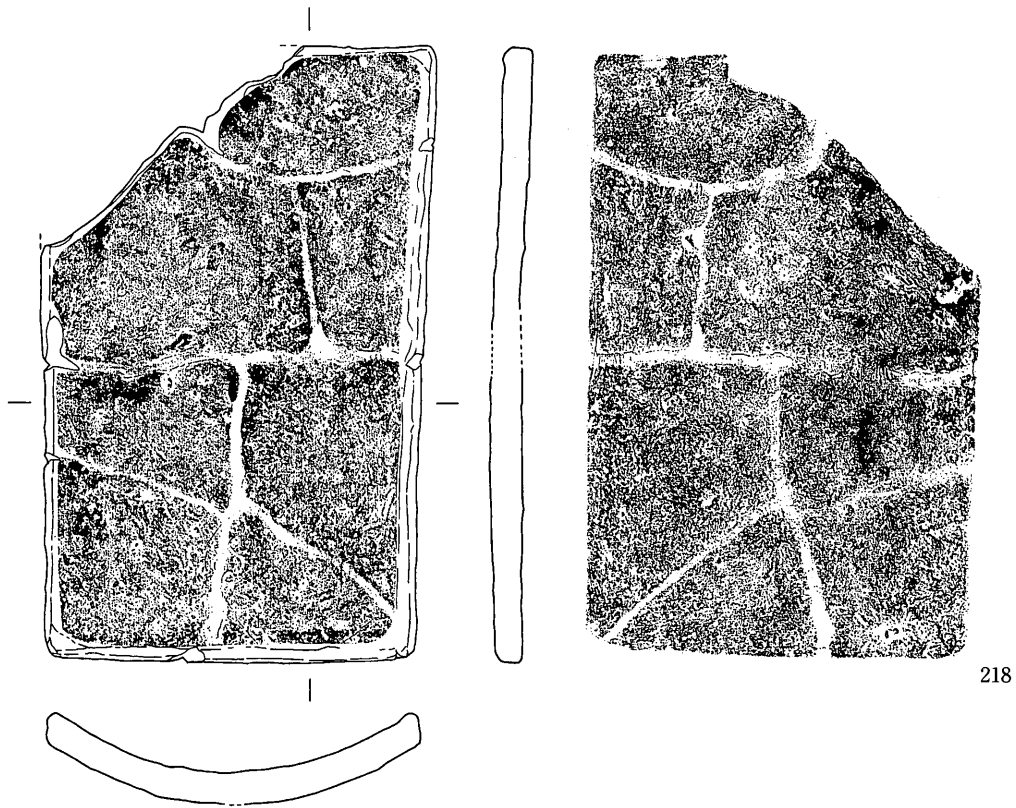
216



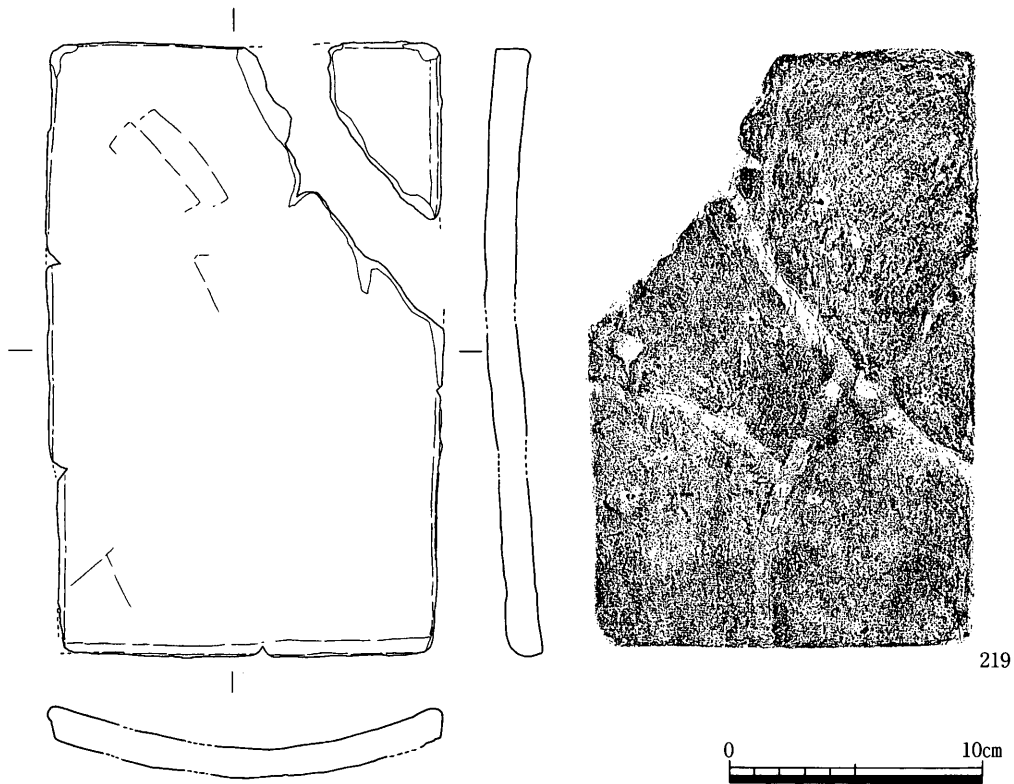
217



第87图 II区SK04 出土遺物6 (1/3)



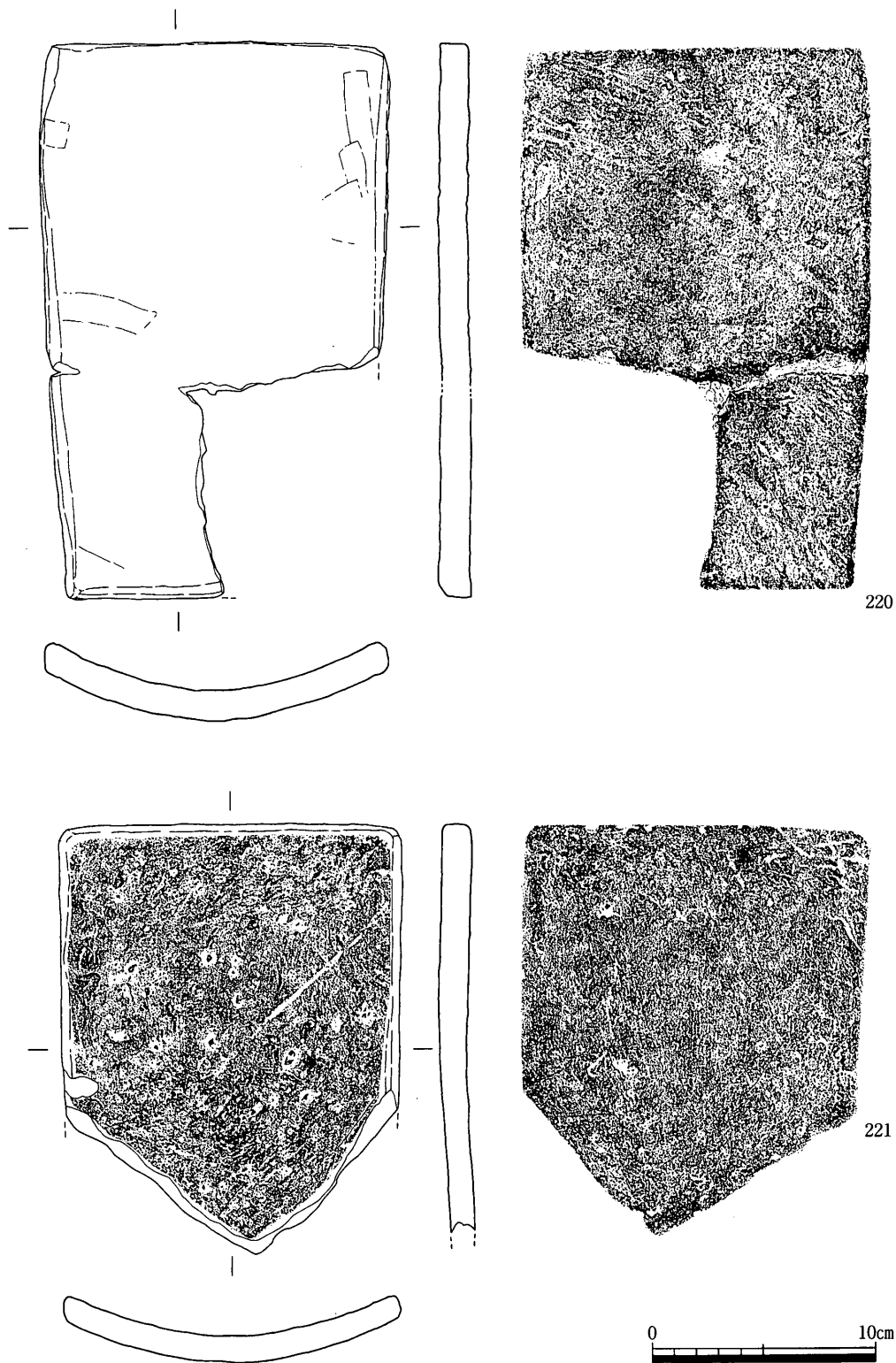
218



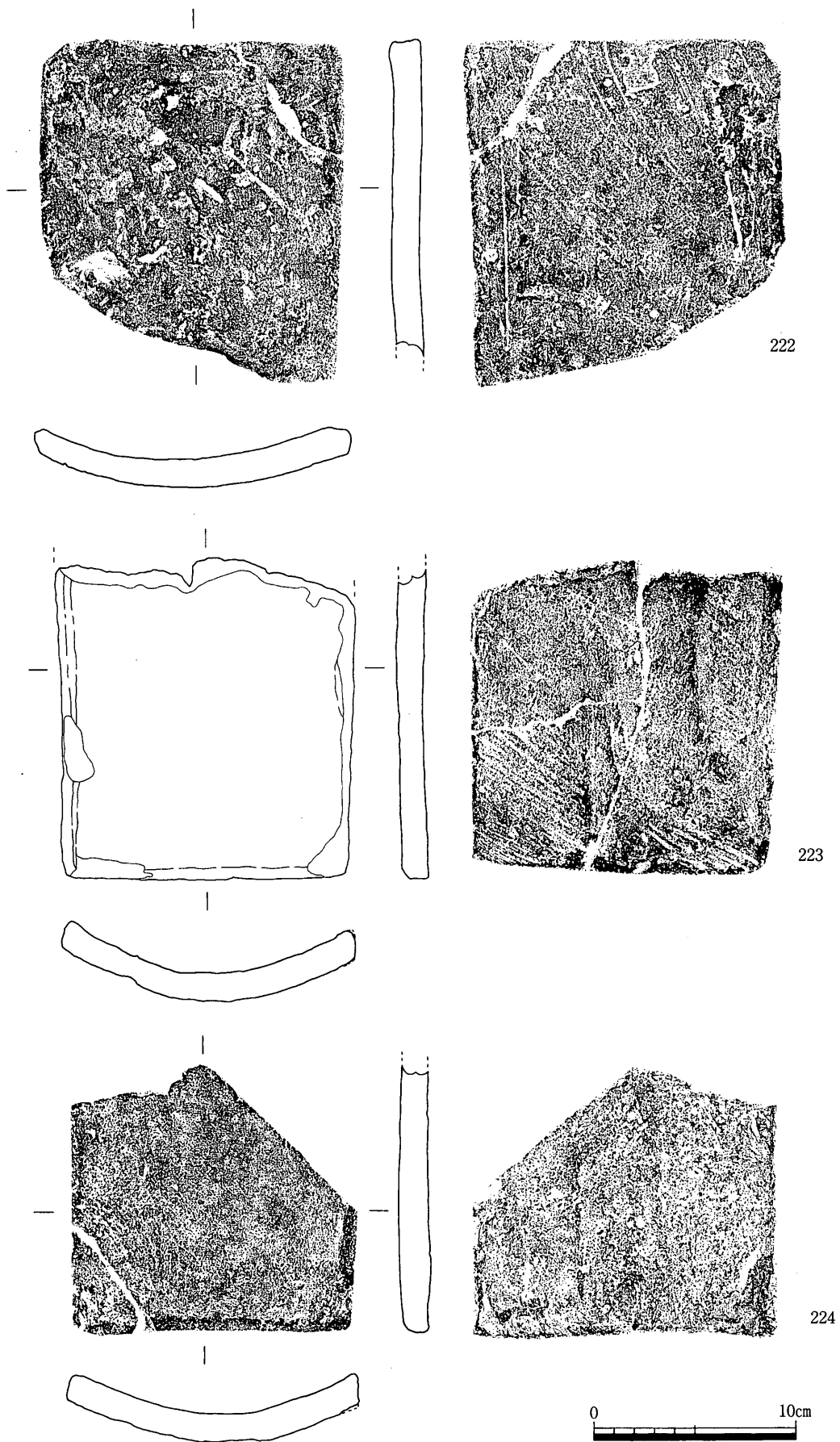
219

0 10cm

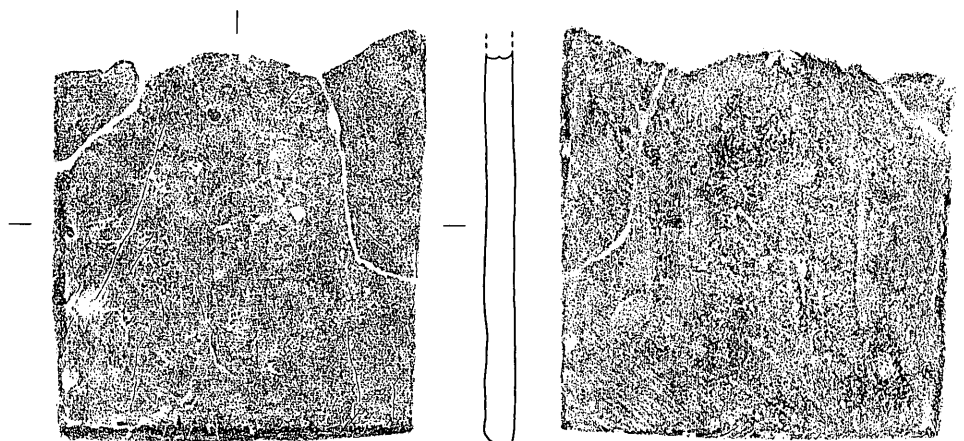
第88图 II区SK04 出土遗物7(1/3)



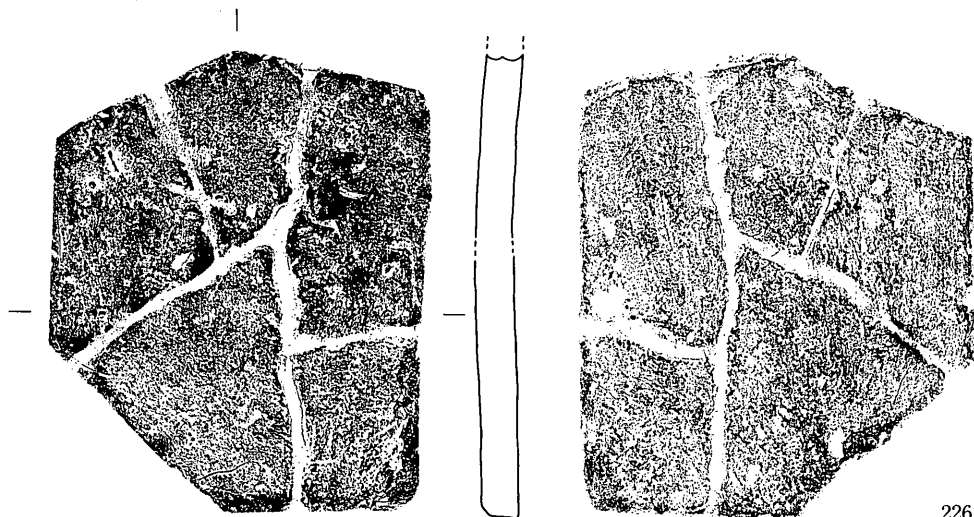
第89图 II区SK04 出土遺物8(1/3)



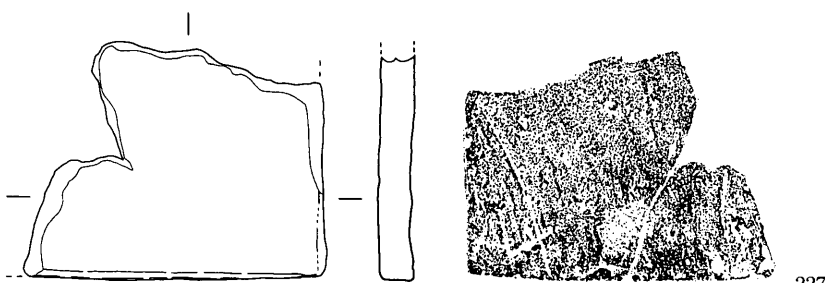
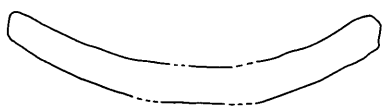
第90图 II区SK04 出土遺物9 (1/3)



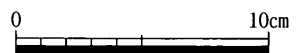
225



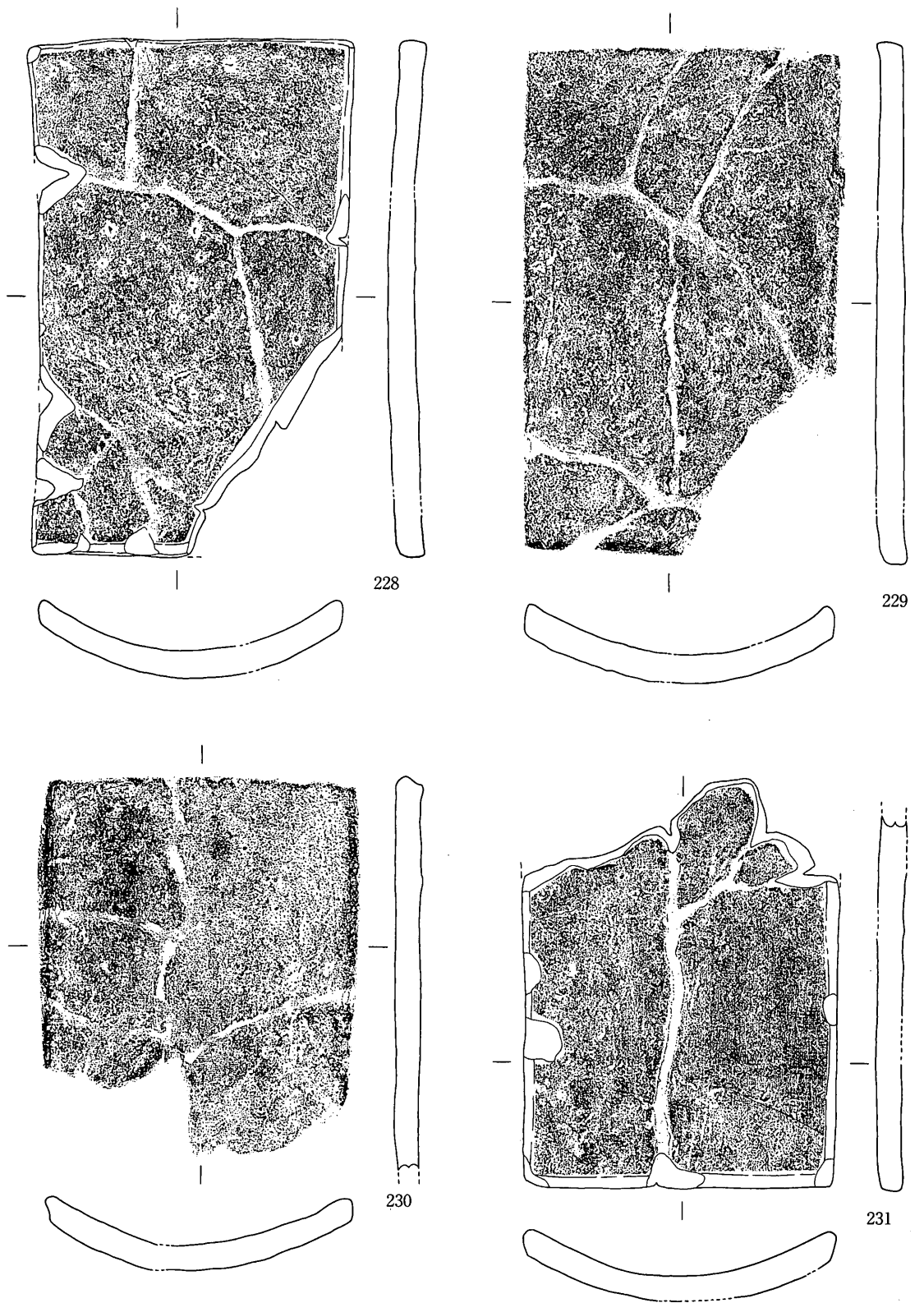
226



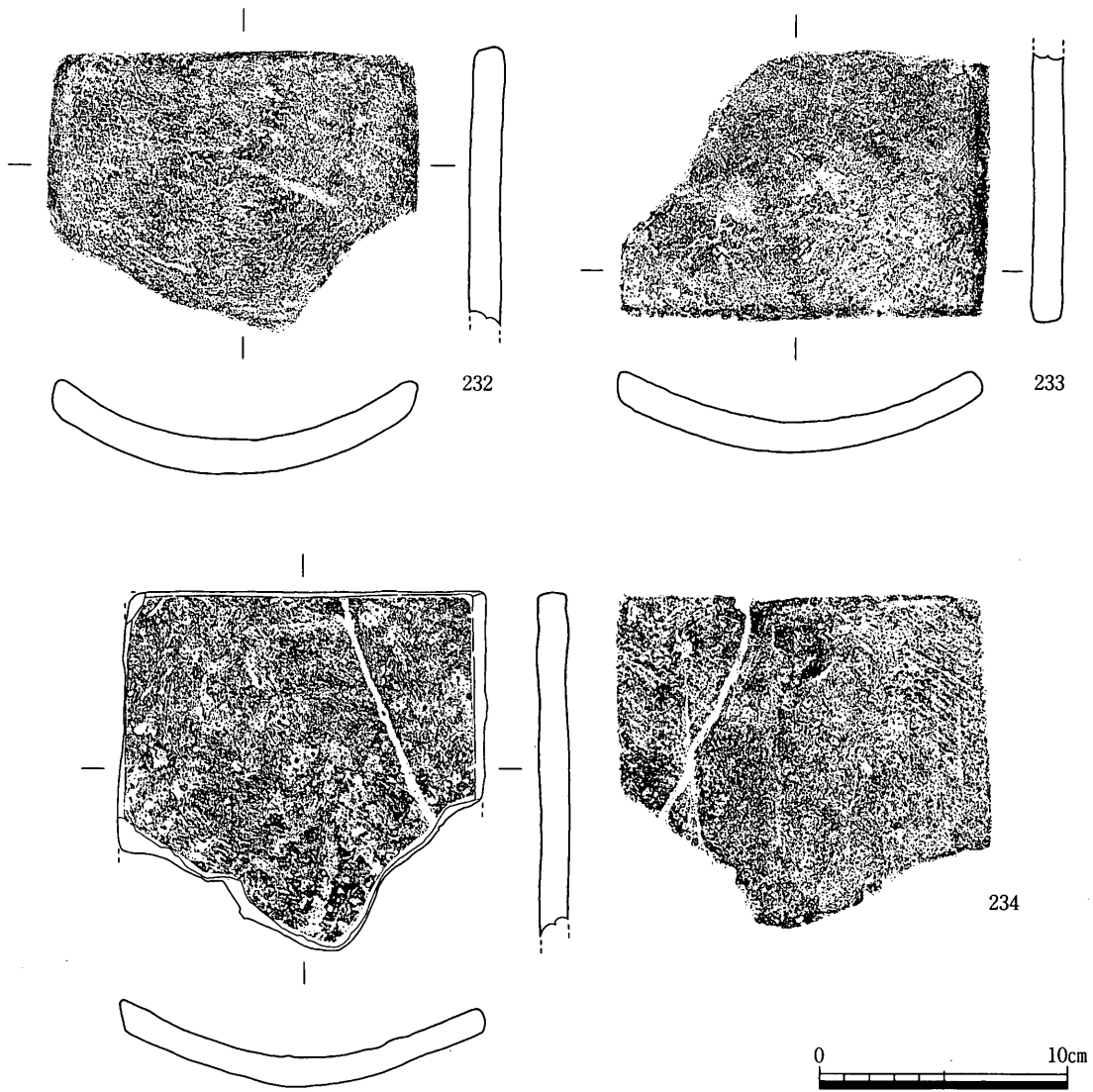
227



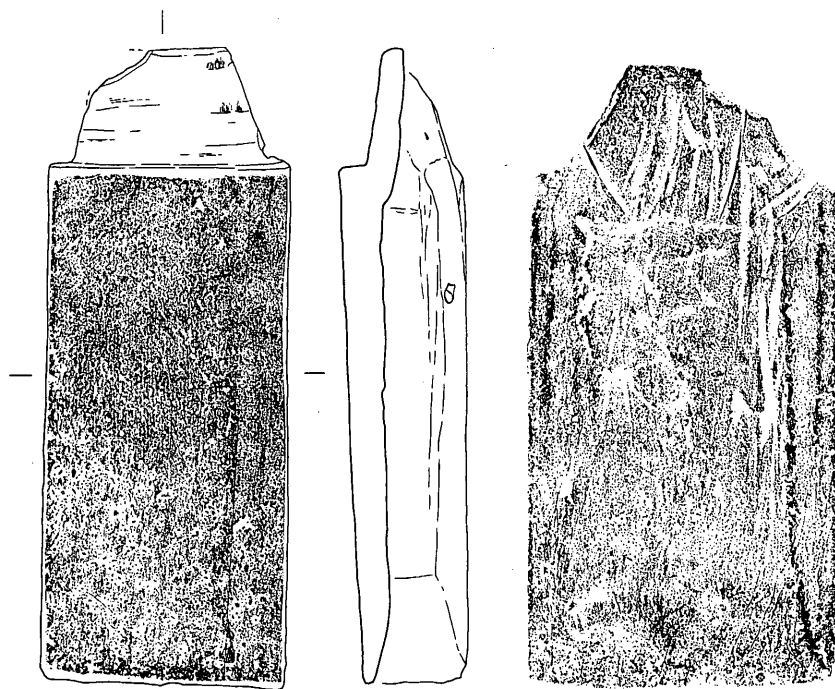
第91图 II区SK04 出土遗物10 (1/3)



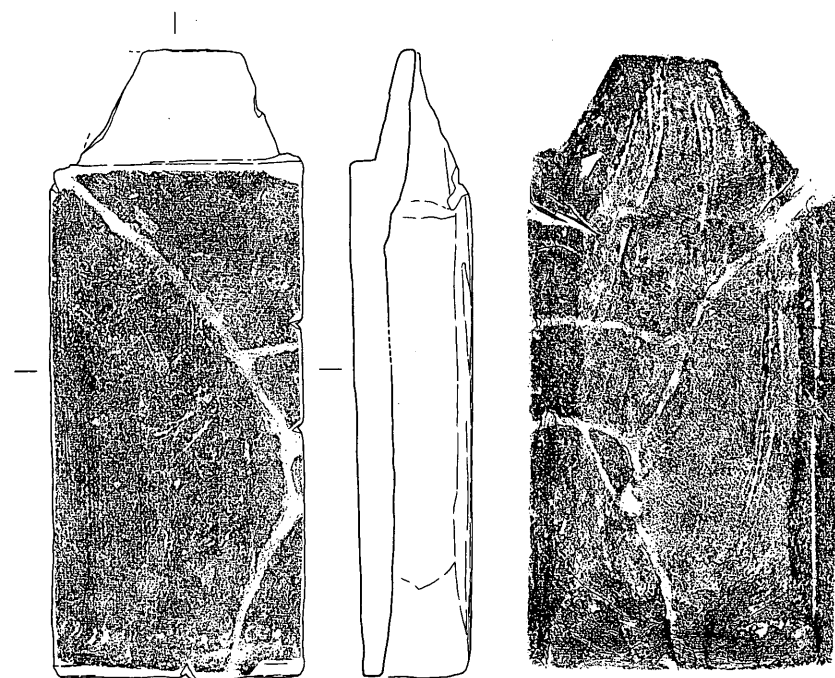
第92図 II区SK04 出土遺物11 (1/3)



第93图 II区SK04 出土遺物12 (1/3)



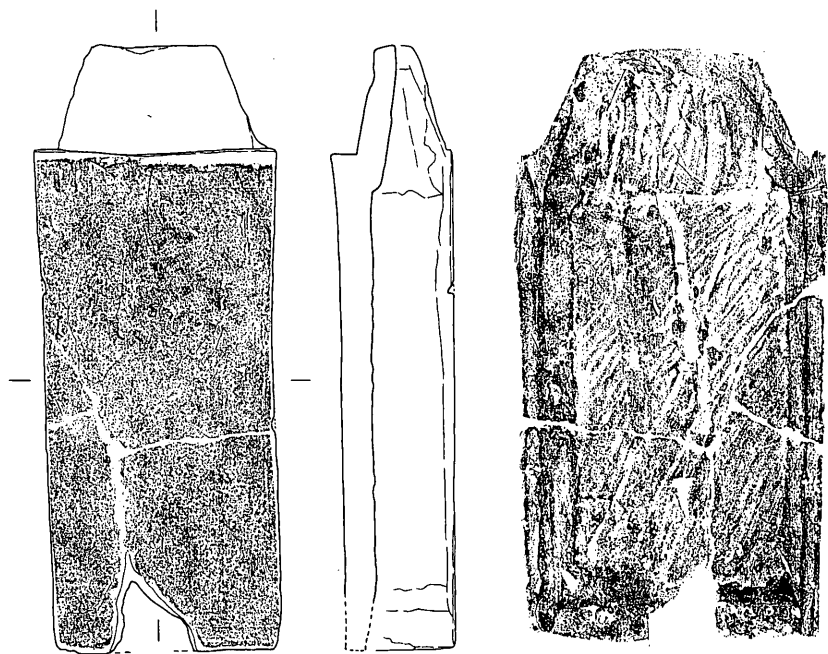
235



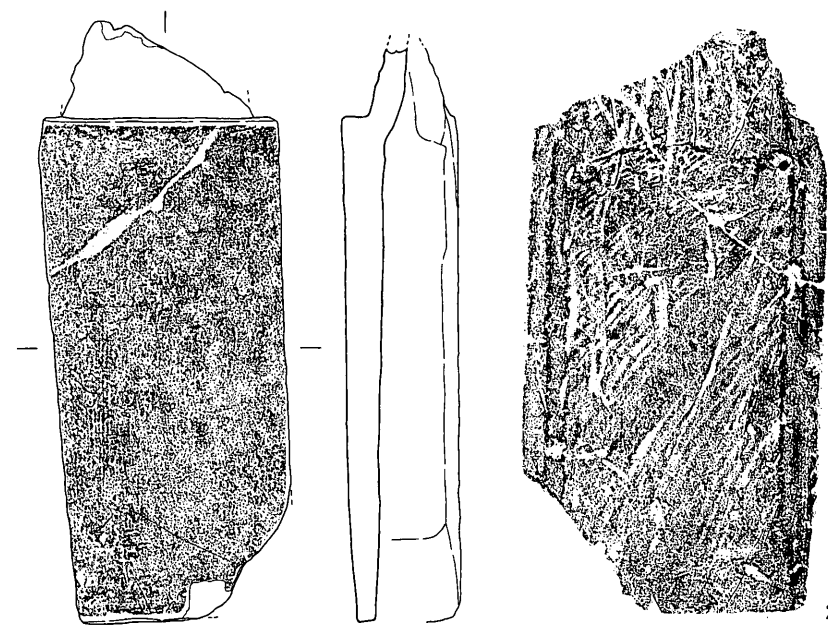
236



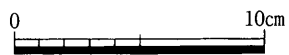
第94图 II区SK04 出土遺物13 (1/3)



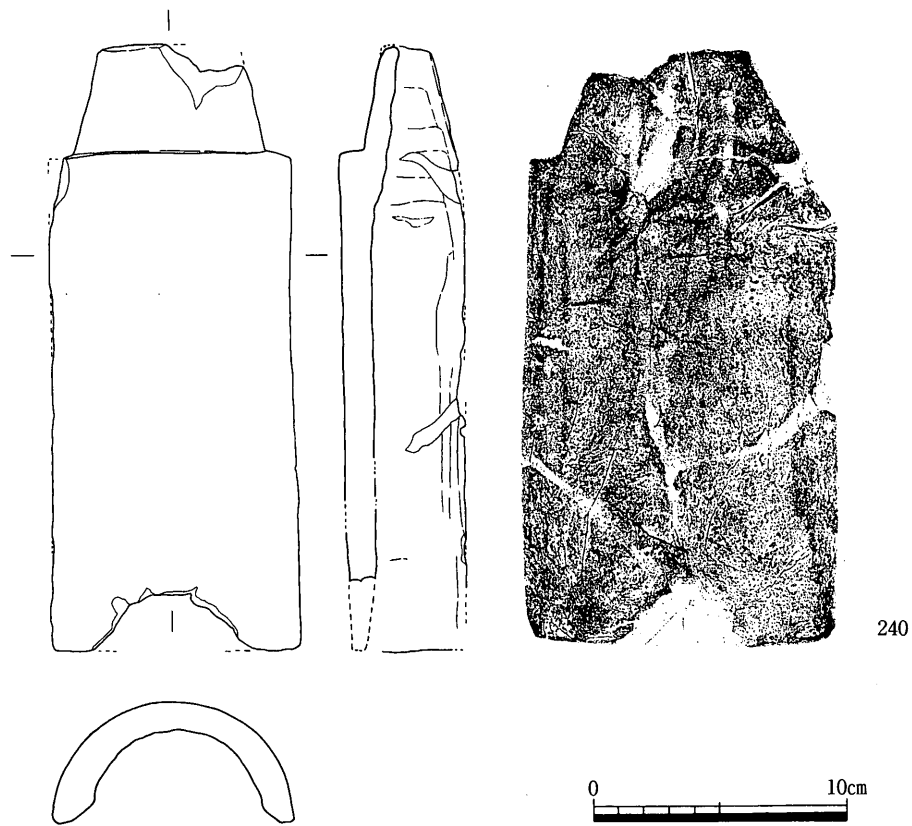
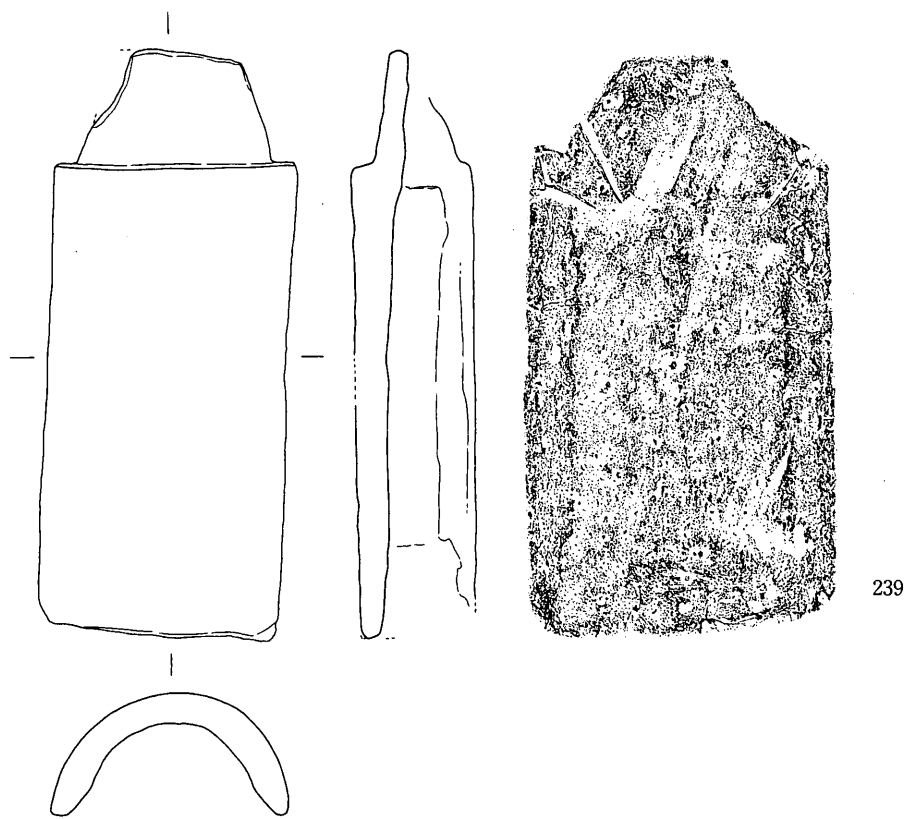
237



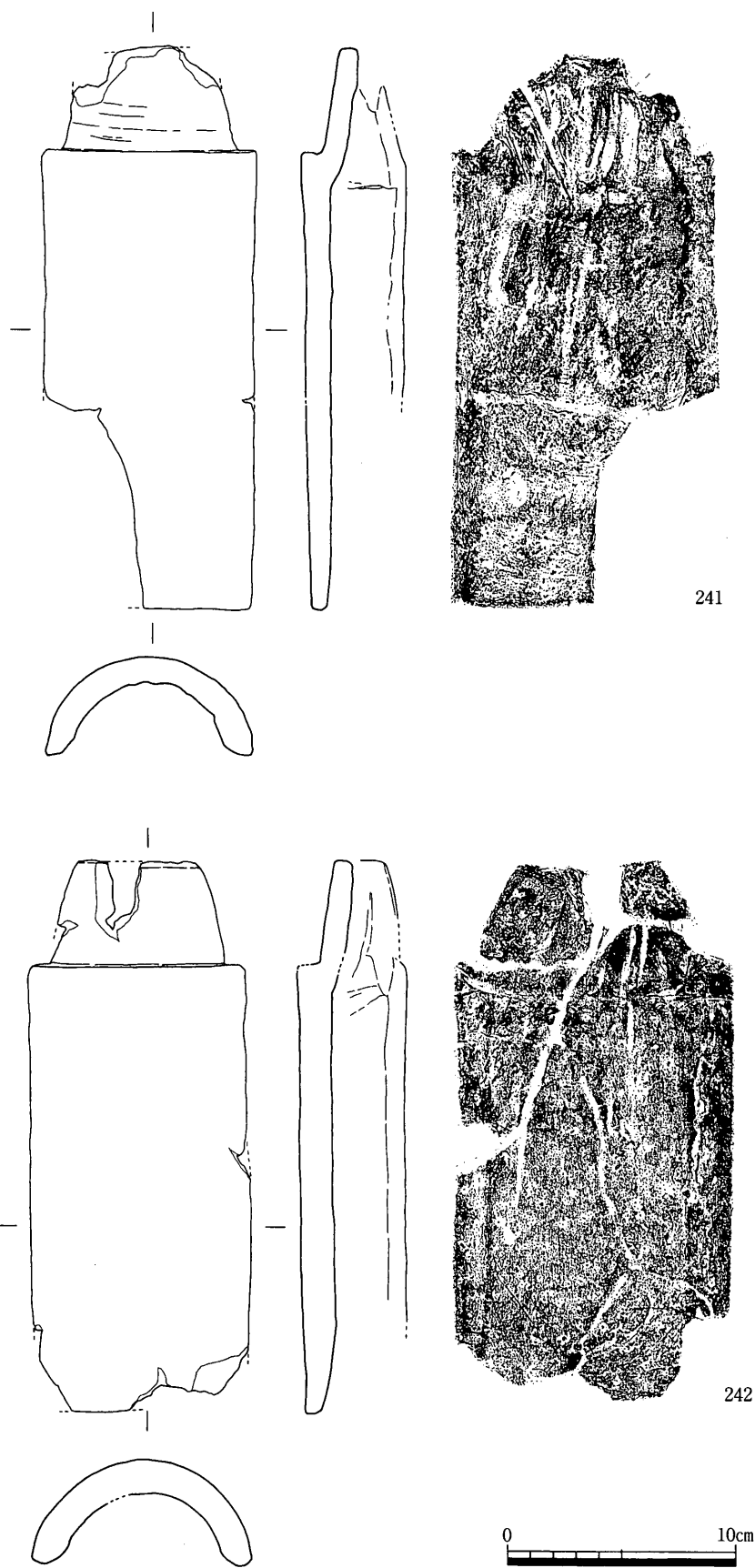
238



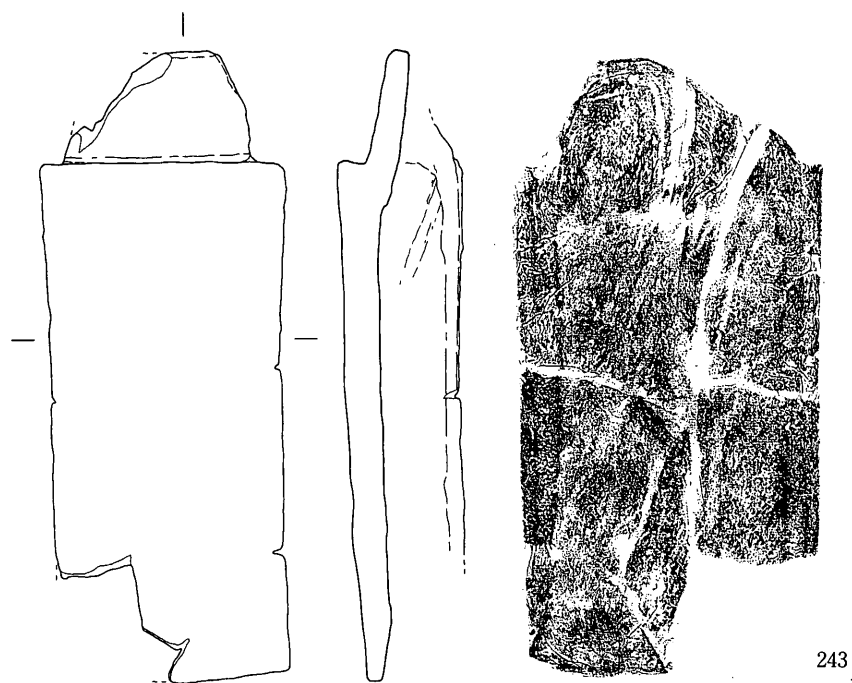
第95图 II区SK04 出土遺物14 (1/3)



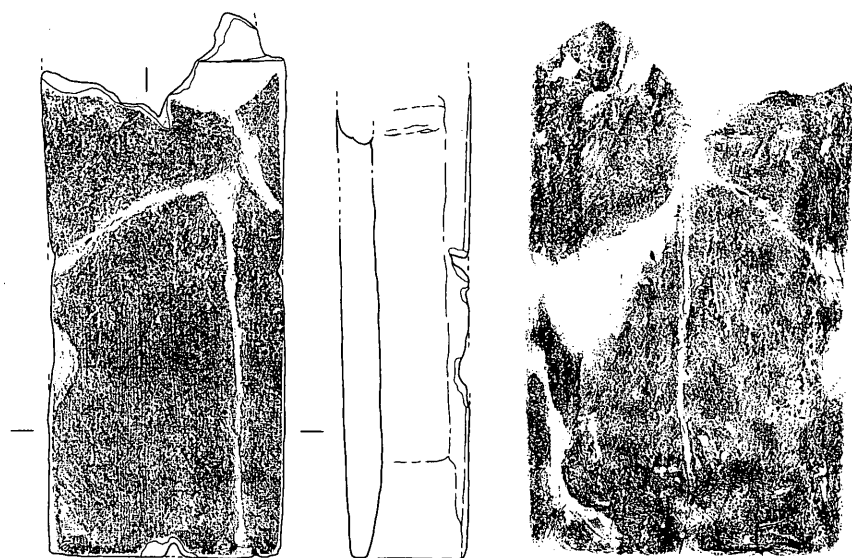
第96図 II区SK04 出土遺物15 (1/3)



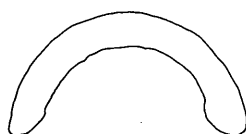
第97图 II区SK04 出土遺物16 (1/3)



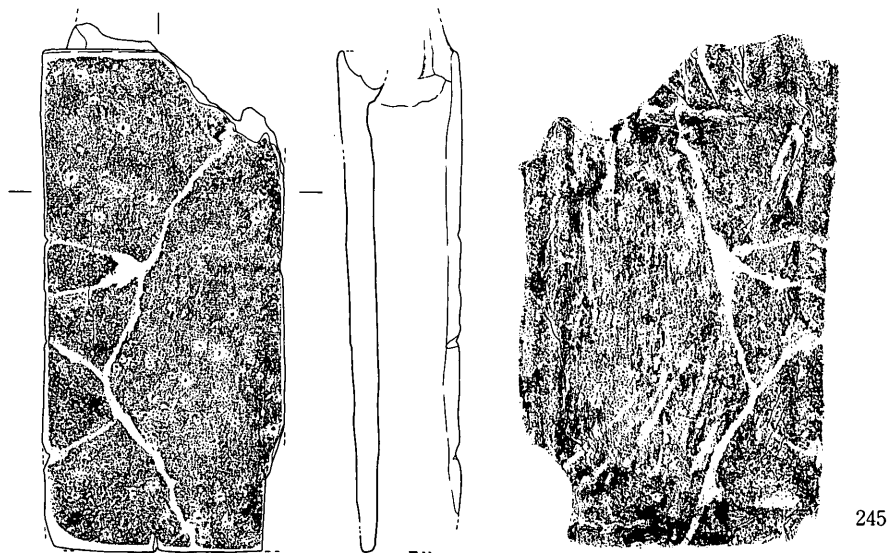
243



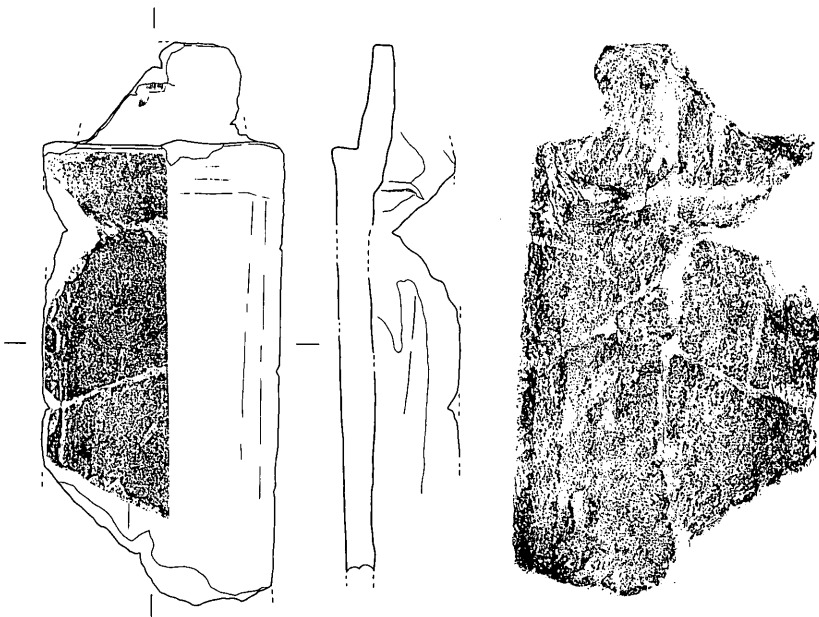
244



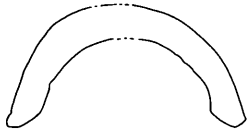
第98图 II区SK04 出土遺物17 (1/3)



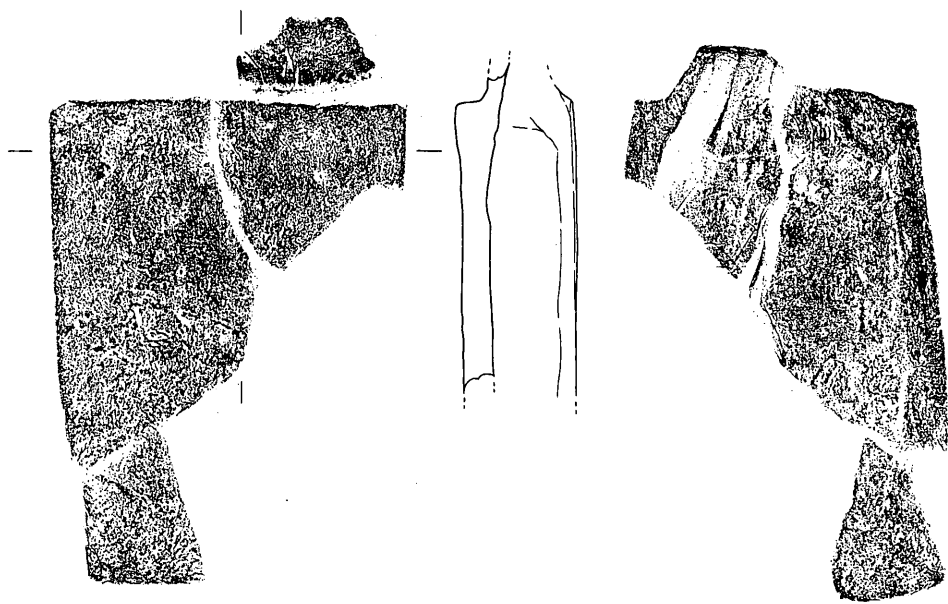
245



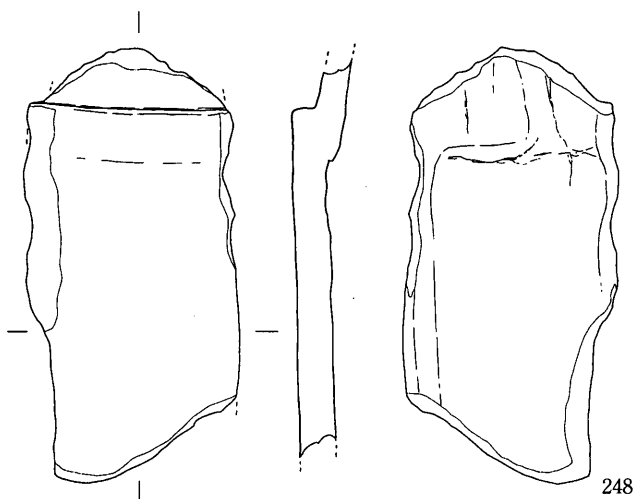
246



第99图 II区SK04 出土遺物18 (1/3)



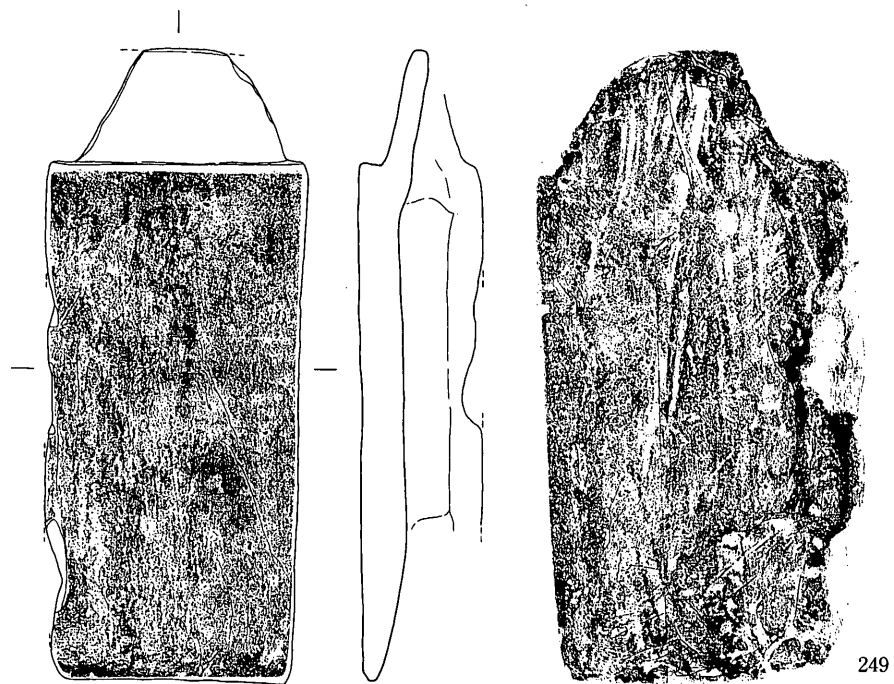
247



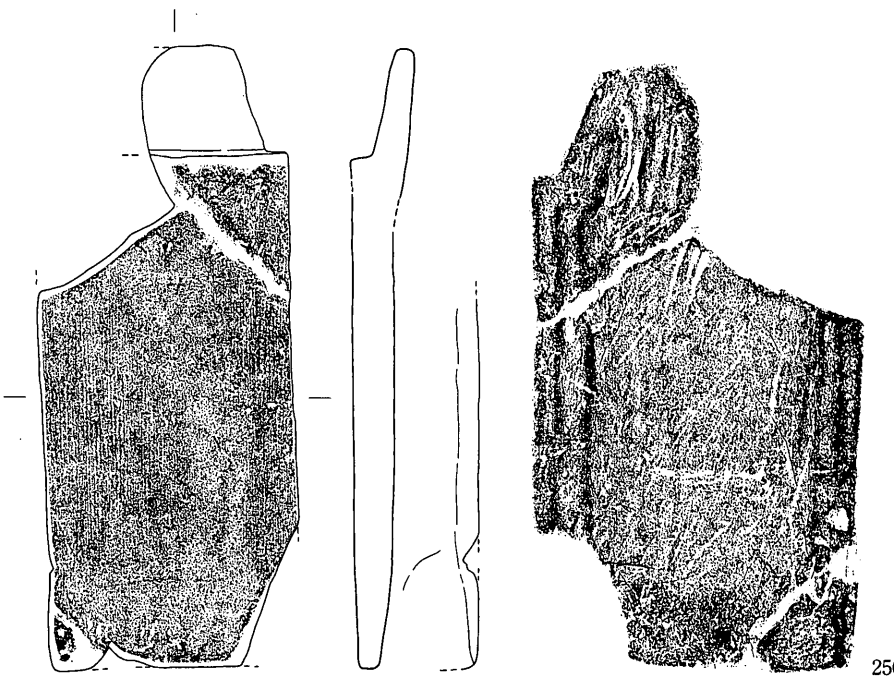
248



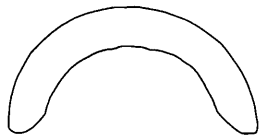
第100图 II区SK04 出土遺物19 (1/3)



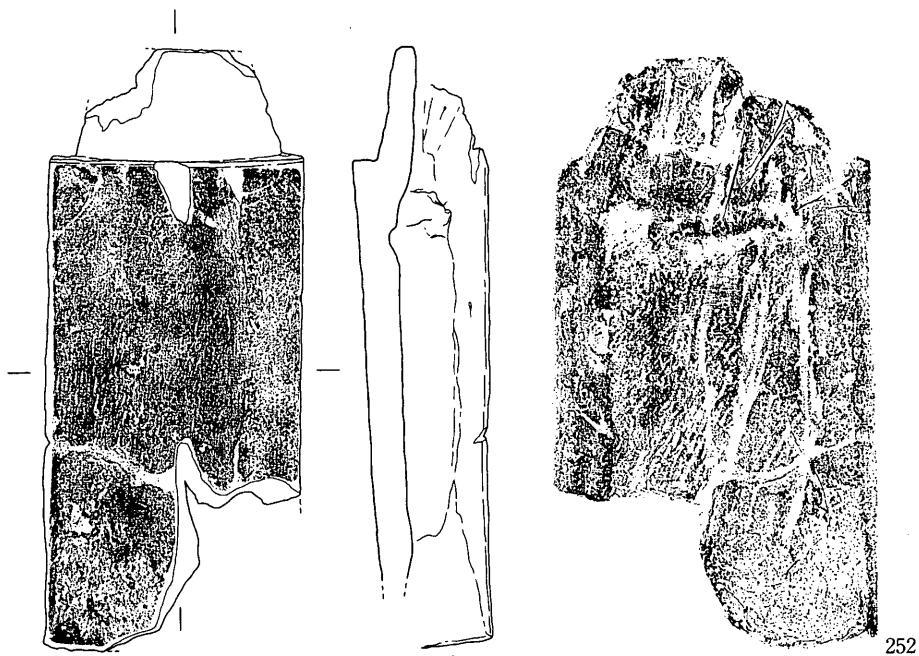
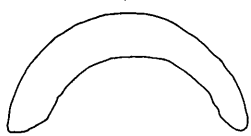
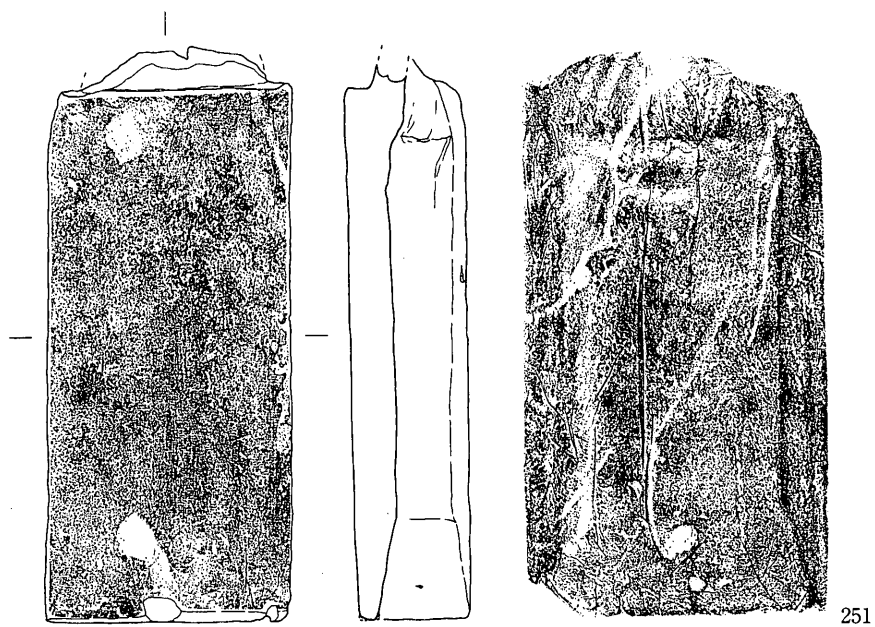
249



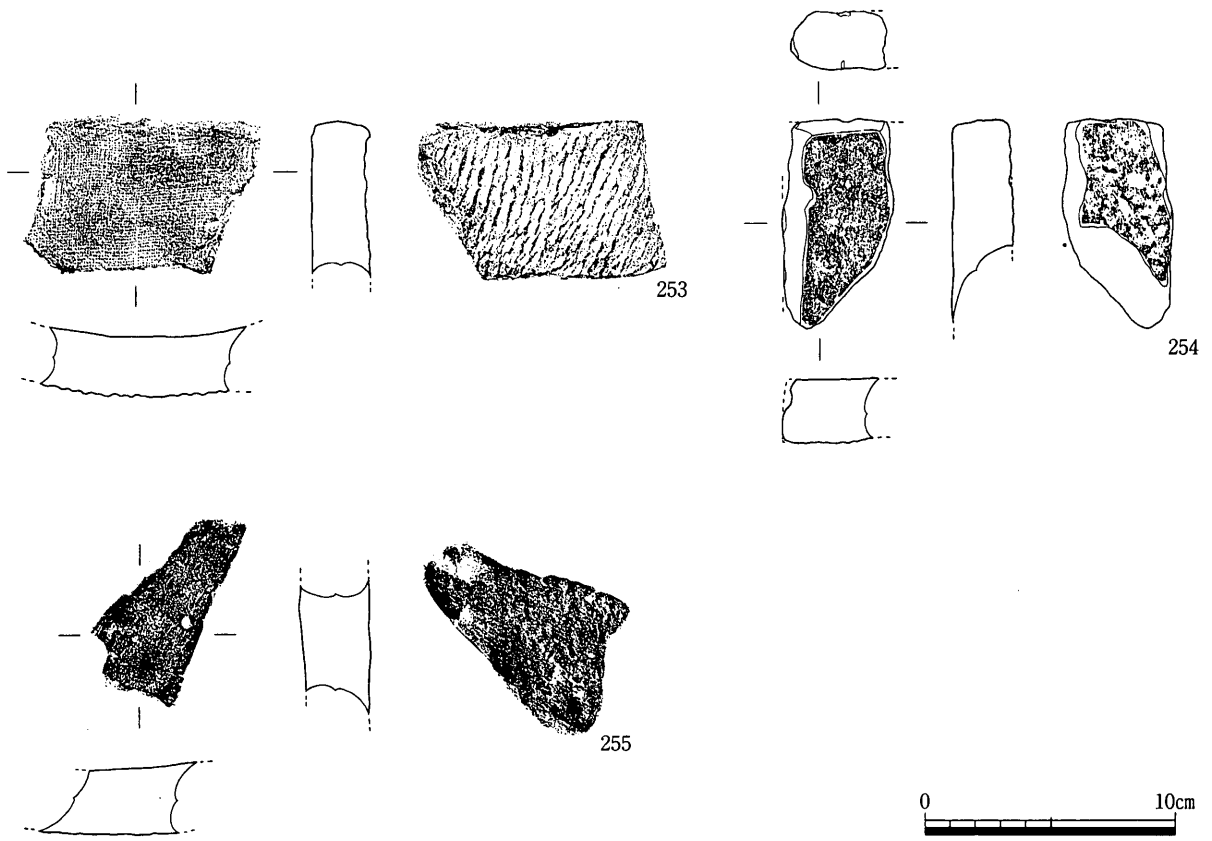
250



第101图 II区SK04 出土遗物20 (1/3)



第102图 II区SK04 出土遺物21 (1/3)



第103图 II区SK04 出土遺物22 (1/3)

SK05、06（第104～110図）

調査区北西部で検出した土坑である。窯が築かれた丘陵の斜面南部に位置する。SF02からの距離は約1mと近接する。SK05の南側に位置するSK06は機械掘削時に斜面をカットした遺構との判断が遅れたため埋土を掘り下げており、残存状況は悪い。床面レベルは約15.5mで、SK05の15.6mより一段低い。ただ、埋土が同じ灰白色砂混粘質土であり、272はSK05、06出土瓦が接合したものであることから同一の遺構であると考えられる。よって窯が位置する斜面部に対し、SK06以南の斜面が急激に西側に細くなるのは遺構が延びていた可能性を否定できない。

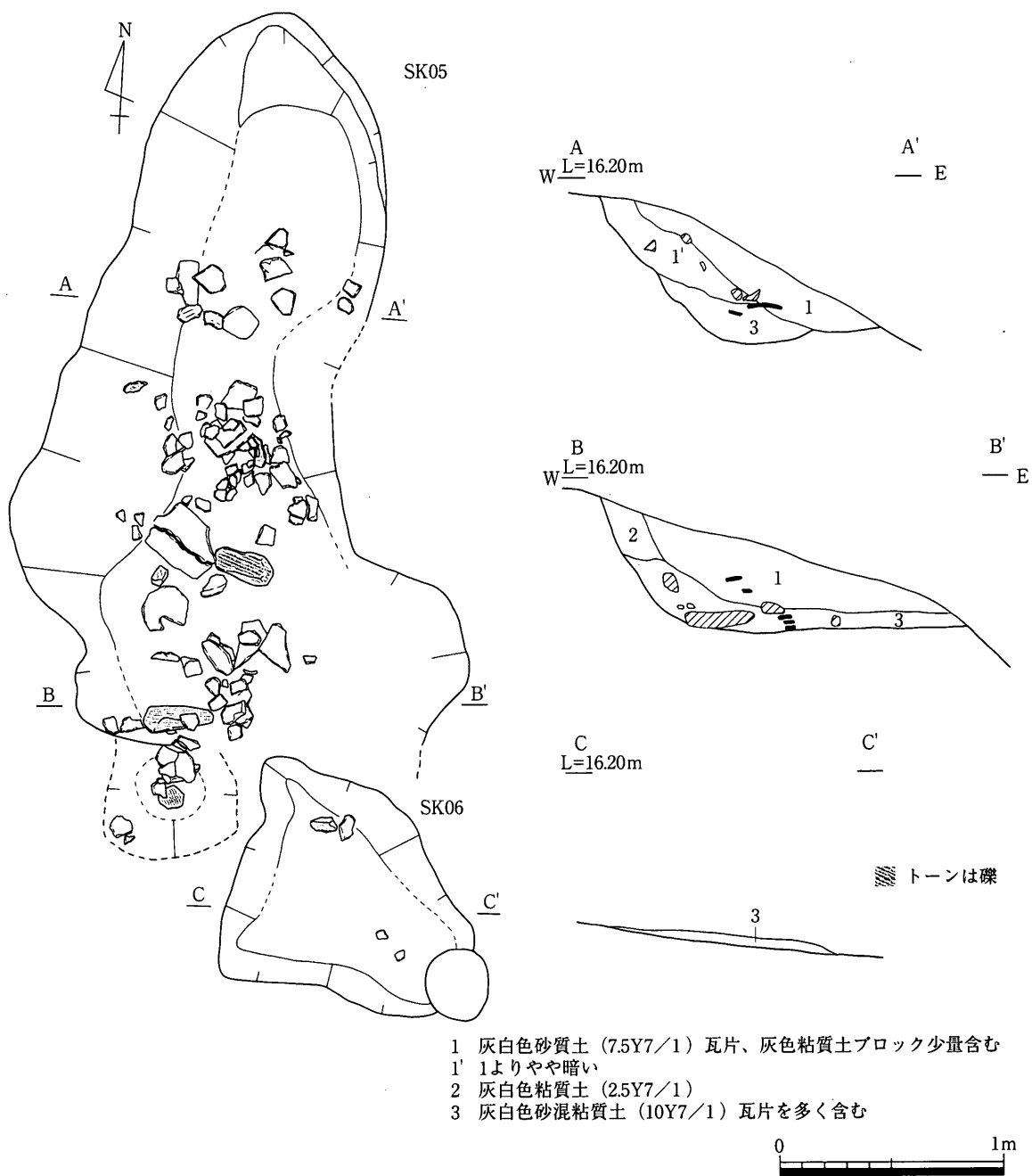
平面形は中央で膨らむいびつな楕円形である。断面形は西側で直立気味に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。細かく見るとB-B'ライン以南では東に向かって緩やかに下り、以北では中央で窪み、溝状を呈する。規模は南北4.35m、東西は最大1.65m、深さ65cmを測る。

土坑の中央では多量の瓦と少量の土師器、礫が出土した。多くの遺物は床面から少し浮いて出土している。これらには鬼瓦（274）、完形に近い雁振瓦（273）も含まれる。両者は床面から10cmほど浮いた、ほぼ同レベルで近接して出土した。また表面のカーボン付着状況、胎土が灰白色に発色していることなども類似する。礫には長さ30cm前後、厚さ、幅が10cm程度の砂岩が2点ある。土坑南側で60cmほど開けて位置し、ほぼ床面直上から出土している。被熱は見られない。付近の地山、遺構内では和泉系砂岩しか見られず、大きさ、形状が類似するため遺跡外から持ち込まれた可能性が考えられる。用途については窯に近接する遺構内からの出土であり、被熱もないことから焚口の支柱石など窯の構築材である可能性を考えておきたい。

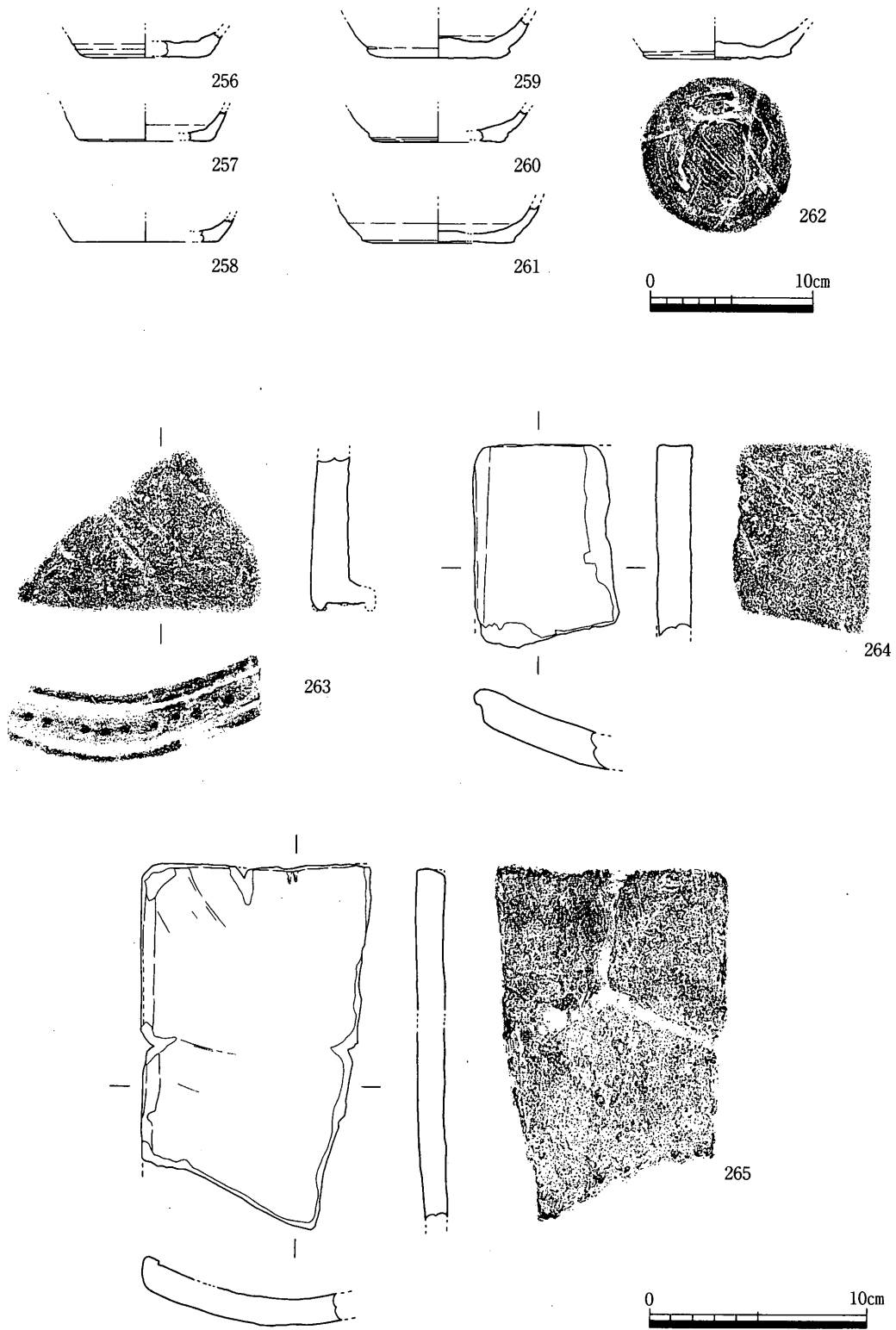
遺構の性格については窯に接して掘削された地山カット面であり、工房は東側に存在することから作業場と資材置き場を兼ねるような空間であったと推測する。

出土遺物には土師器杯（256～262）、軒平瓦Ⅰ or Ⅳ類（263）、平瓦Ⅱ類（264～267）、丸瓦Ⅰ類（268～272）、雁振瓦（273）、鬼瓦（274）、鉄釘（275）がある。土師器杯はいずれも分厚い作りである。259～262は底部と体部の境界よりわずかに上位にヘラ切りに伴うと見られる傷がある。実際に261、262は底部をヘラ切りする。273は玉縁側縁を面取りする。274は表面に平行する3条の直線をヘラがきする。裏面には固定用に2本の釘を埋め込んでいる。

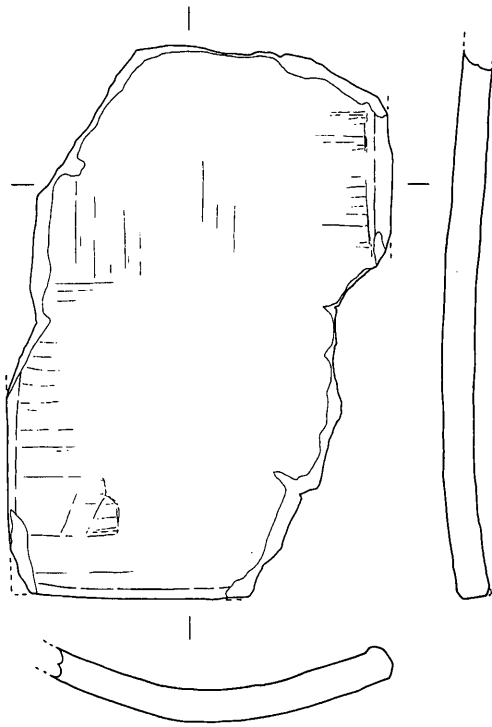
出土した土師器杯と小皿、土師質土器土釜脚には2次焼成を受け、赤化したり、硬く焼けしまったり、ひび割れが生じたりしているものが見られる。大きさは2～5cm大のものが多く、こうした資料はⅠ区の集落部にもごくわずかにあるが、Ⅱ区SF01、02、SK02、04、05、12など窯に近接し、中世瓦が出土した遺構で多く見られる。これらの出土量は少ない（量的にまとまるSK05でも1cm以上の破片総数80点に対し、2次焼成を受けたものが41点。）ものの上記の遺構中、比率的に少ないSK02でも出土土師器の約3割、多いSK05で約5割を占めるため単なる混入でなく、窯詰めの際に瓦の間に火を通すことおよび炭素を吸着させることを目的とした詰め物である可能性が高い。このことは物原が二次的な移動を受けたと推定される北西部包含層から出土した土師器でもこうした資料が多く見られることから示唆される。瓦より土坑の時期は14世紀後半と考えられる。



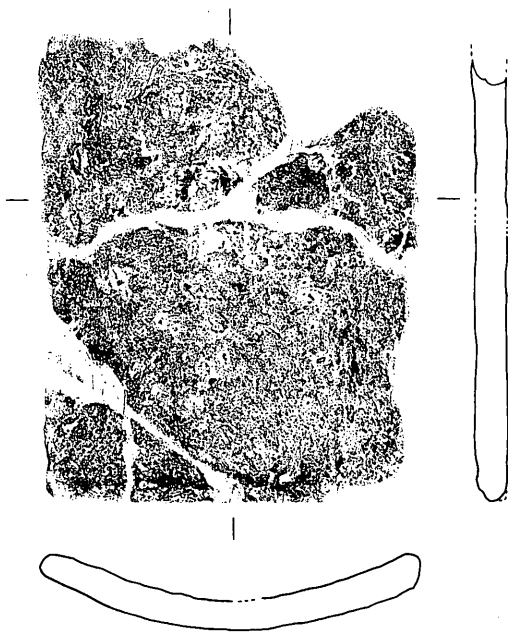
第104図 II区SK05、06 遺物出土状況 平・断面図 (1/30)



第105图 II区SK05 出土遗物1 (1/4·1/3)



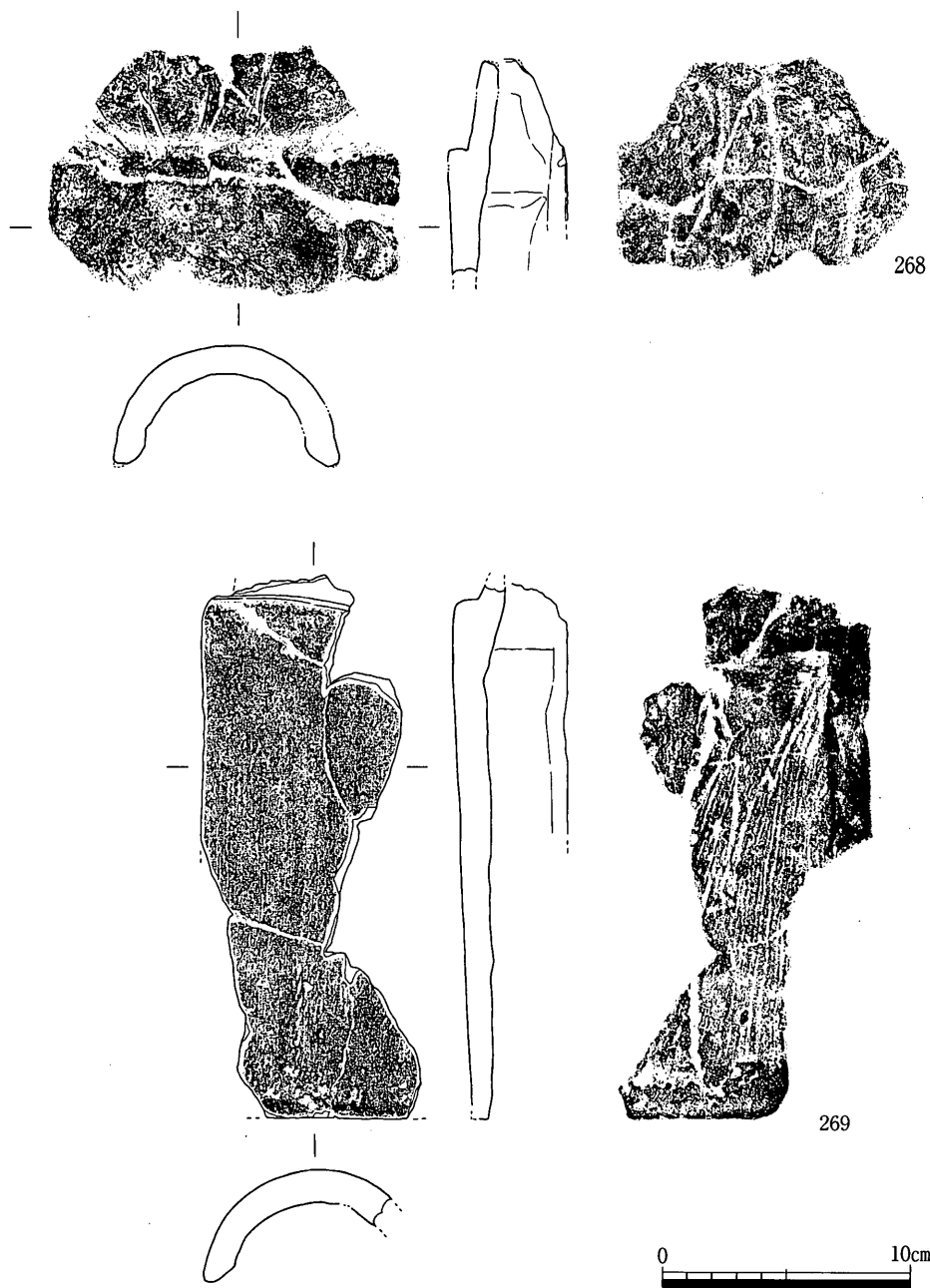
266



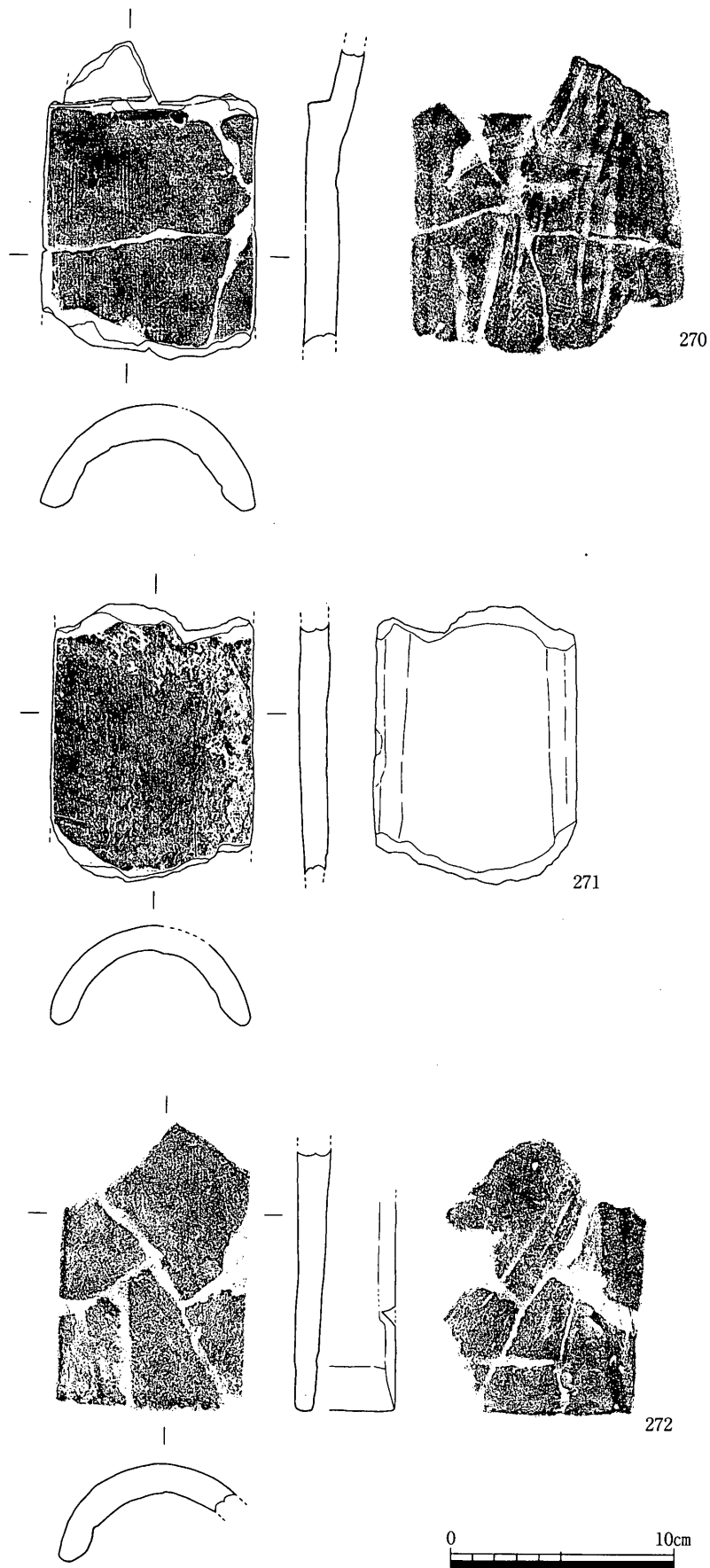
267



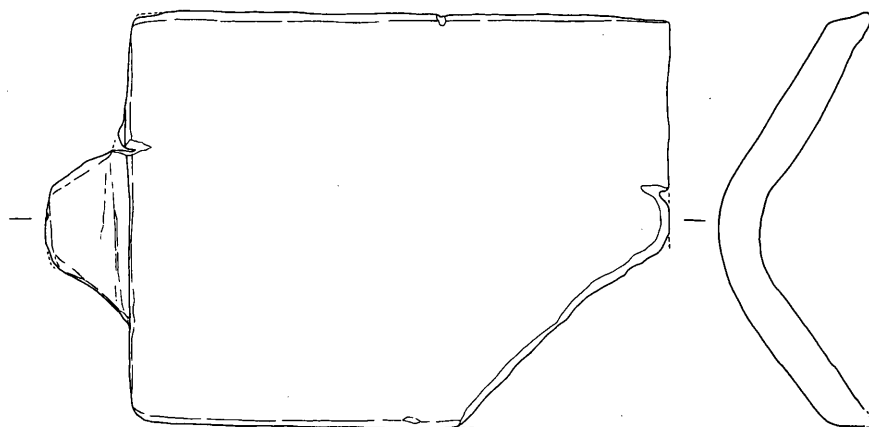
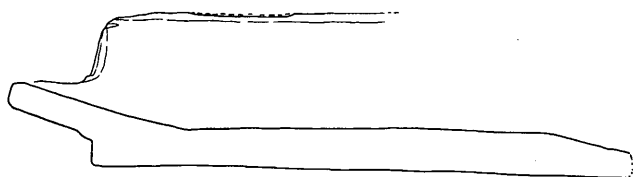
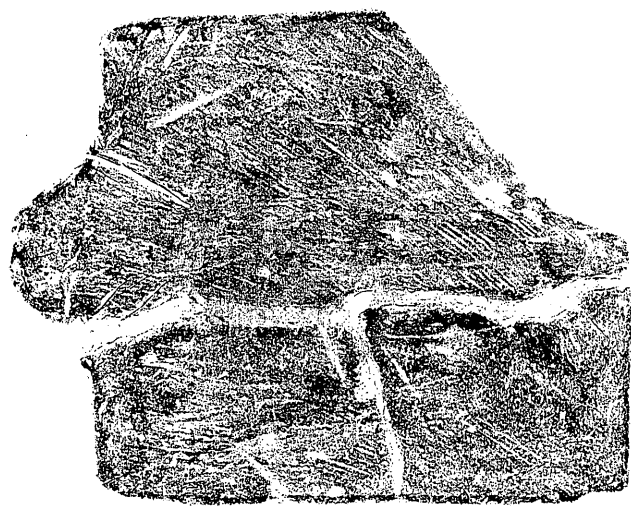
第106图 II区SK05 出土遗物2(1/3)



第107图 II区SK05 出土遺物3 (1/3)



第108図 II区SK05 出土遺物4 (1/3) (272はSK06出土)



273

第109图 II区SK05 出土遗物5(1/4)

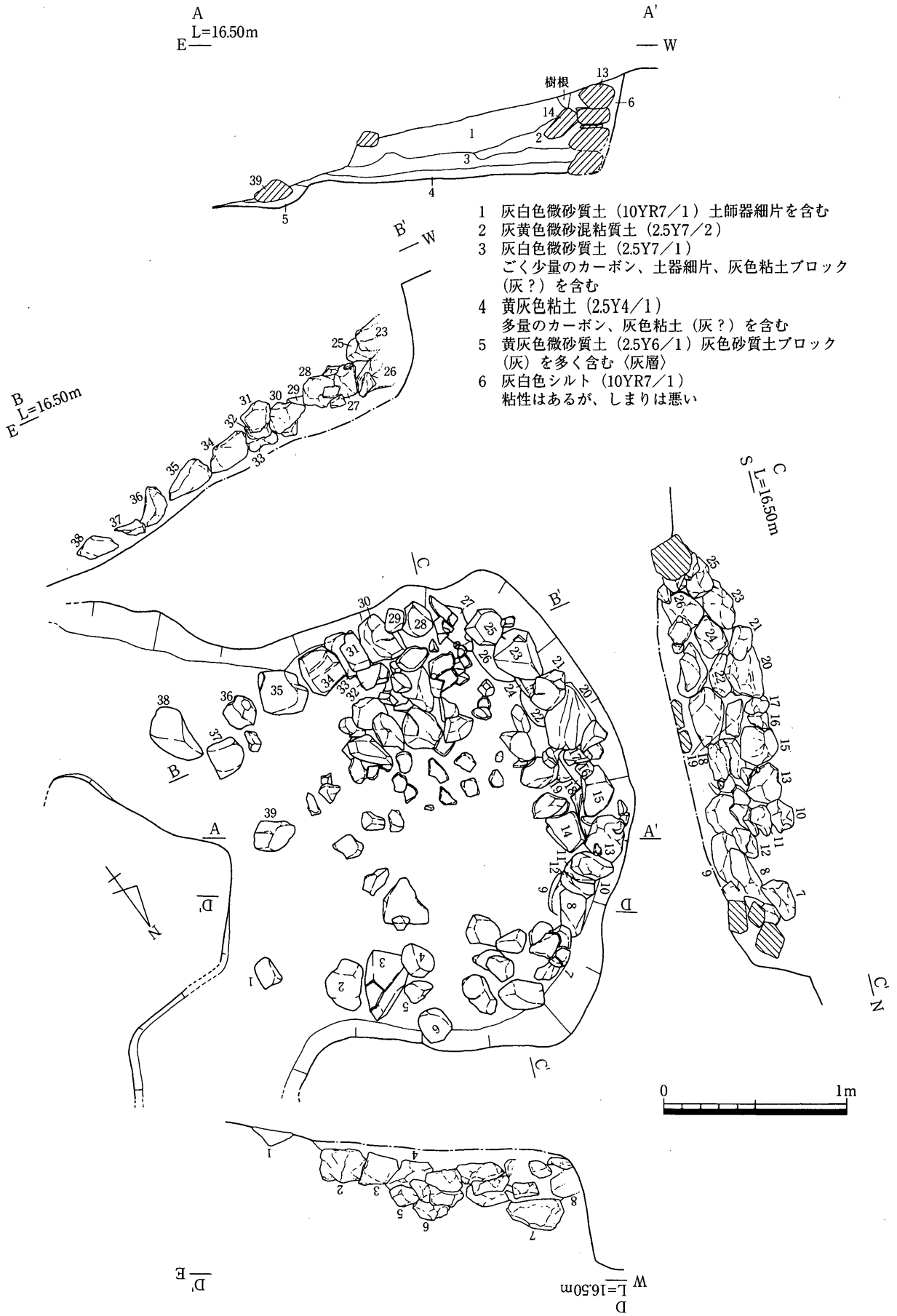


第110図 II区SK05 出土遺物6(1/3)

SK07 (第111図)

調査区北部で検出した土坑で、内部に礫を組んでいる。礫は被熱しており、底には炭を含む土層が堆積していることから焼成施設であると考えられる。SF01、02が築かれた丘陵の斜面南端部に位置する。掘り方の平面形はややいびつな方形で、西側に膨らみ、北東、南東部では溝が取り付く。方形部の断面形は壁がほぼ直立し、床面は平坦でごく緩やかに東に下る。規模は奥行2.40m、幅3.40m、深さ55cmを測る。溝部はこれより1段下がる。断面形は西側で斜面をカットするため落ちが急激だが、東側ではなだらかに上がる。規模は南北とも幅約1m、検出長は南側が1.2m、北側が2.4m、深さ10cm前後を測る。

礫組は方形部では掘り方の形状に沿って組まれている。大きさは拳大から人頭大ほどであり、大振りのものを並べ、隙間に小振りのものを詰めて構築している。奥壁では最大4段残存する。側壁では同3段あるが、概ね基底石しか残っていない。これらはいずれも弱く被熱しているが、その中で奥壁の被熱がやや強い。土層断面の観察では礫の背後に裏込めとして灰白色シルトが見られ、固定されている。溝にさしかかる南西部にある礫36(以下、SK07報文中の数字は礫の番号。)は溝の西肩にななめに貼り付けられ、37、38は溝底の平坦面に配置され、南に延びる。北側では礫が消失しているため不明瞭であるが、北側の礫組の延長上かつ溝の付け根中央にあり、底に張りつく1は37と同様土坑と溝の分岐点に配された礫であると推測される。このように捉えると土坑内の礫組は南東側ですぼまり、



第111図 II区SK07 石組み検出状況 平・断面図 (1/30)

北西側に開く形状であると言える。こうした礫組の目的は土坑壁面を保護し、ある程度長期に渡って使用するためと考えられる。

また床面南側でも東西方向に礫が2列並んでいるように見える部分がある。この礫は大きさが10cm大で、奥壁の礫組際から焚口中央に向かって延びる。床面に張り付いた状態で出土しており、原位置を保っていると考えられる。SK07は焼成施設であり、礫群の配置が溝状を呈することから除湿を目的とした排水施設であると推定されるが、仮にこの状態で焼成を行った場合、溝の間に落ち込んだ炭、灰をその都度片付ける必要があり、非効率である。また床面は全く被熱しておらず、この礫群もほとんど焼けていない。土層についても床面直上堆積土は炭の含有量が少ないこと（東西方向断面図の4層は炭の純層でなく、炭混じり黄灰色粘土、南北方向の断面では溝状の礫を覆う床面直上の土層は炭を含まない黄褐色粘土である。）を合わせて考えると操業時の床面は礫組溝の上位にあり、溝は暗渠状になっていたこと、廃絶後に操業時床面は消失し、検出した床面直上堆積土は2次堆積土である可能性が考えられる。

なお、東側にある2本の溝には炭、灰混じりの黄灰色微砂質土（5層）が堆積している。灰を掻き出した溝、ないし通路といった機能が推測される。

こうした施設の類例として福岡県直方市内ヶ磯遺跡⁽⁴⁵⁾で検出された大正、昭和期に使用された炭窯（第199、200図）がある。これは①山の斜面に築かれたもので②平面形は焚口側がすぼまる無花果形を呈する。③規模は奥行き3.4m、幅3.8mを測る。高さは約1.6mあり、④壁面には角石を12段程度積み重ねる。操業時の床面は水で練った赤土を付き固めたものであり、硬く焼きしまっていた。厚さは約10cmを測る。この下位にはまず多量の礫がある。これは更に下にある排水溝の蓋石として機能したものである。⑤蓋石の下位で焚口からヤツデ状に延びる礫敷きの排水溝が見られる。⑥焚口から外へはハの字形に石垣が広がる。南北へ約5m延び、前面が通路となっている。⑦焚口の正面奥には煙道がある。床面に接する位置に排煙口があり、窯本体の外部に設けられた土管を通して排気する。

SK07とは①～③で類似し、④は基本的に同様な構造であり、残存状況だけの差と考えられる。⑤は溝状の礫組が掘り形の床面直上で検出されたという点で類似する。排水溝であったとすればごく一部にしか見られないが、操業時の床面が消失したことに伴い失われたと理解しておきたい。⑥は西肩の高さから石垣というほど大がかりなものではない。だが、通路としての利用という点では丘陵斜面が平坦面に変換する部分をカットし、平坦面を拡大しているので、充分可能性がある。⑦の煙道についてはこのタイプの窯では火の引きを生じさせる重要な施設であるが、検出できなかった。調査時に炭窯の可能性を考慮していなかったため煙道を狙った確認は行えておらず、調査時に失われていたとは言いきれない。

遺物は土師器細片がごく少量出土している。また遺構検出時の精査で付近から平瓦の細片が出土している。土師器細片から見れば、土坑の時期は中世と判断される。窯体構築に礫組を用いる土器窯は県内で国分寺楠井遺跡SF03があるが、炭窯については確認できていないため時期的に下るかもしれない。

SK08（第112図）

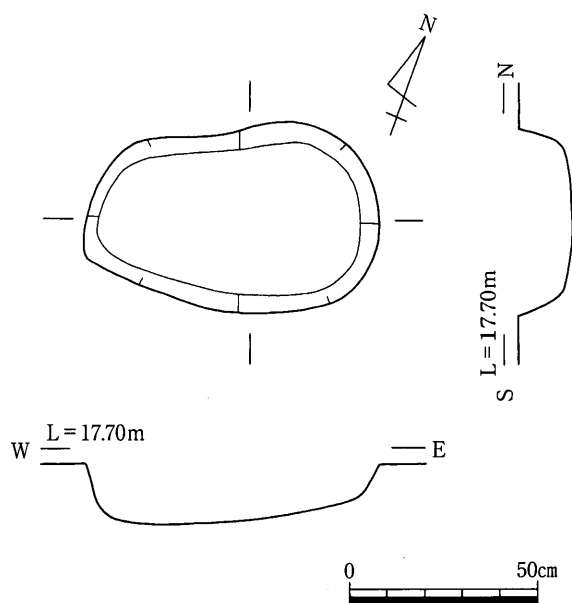
調査区南西部で検出した土坑である。北側に約1.5m離れてSK01が主軸方向をほぼ直交させて位置する。平面形は長方形で、東側がやや大きい。断面形は壁がほぼ直に落ち、床面は平坦である。西に向かって緩やかに下る。規模は長径0.77m、短径0.48m、深さ15cmを測る。主軸方向はN-70°-Eで

ある。土坑の形状、規模、SK01との配置からは土坑墓である可能性もある。だが、人骨や副葬品、棺痕跡などは見られない。出土遺物はないが埋土より中世と考えられる。

Ⅱ区 SK09～11は欠番

SK12 (第113～120図)

調査区西部中央で検出した土坑であり、東半部がⅠ区に延びる。SK04南東部に接して位置する。Ⅰ区では平面形を明確にできず、形状、規模とも不明瞭だが、平面形は東に広がるいびつな方形であると推測される。断面形は浅い皿形を呈し、地形の傾斜に沿って北側と東側を下る。規模は長径3.09m以上、短径2.40m以上、深さ30cmを測る。埋土は3層に区分される。南北土層断面では1層で瓦、



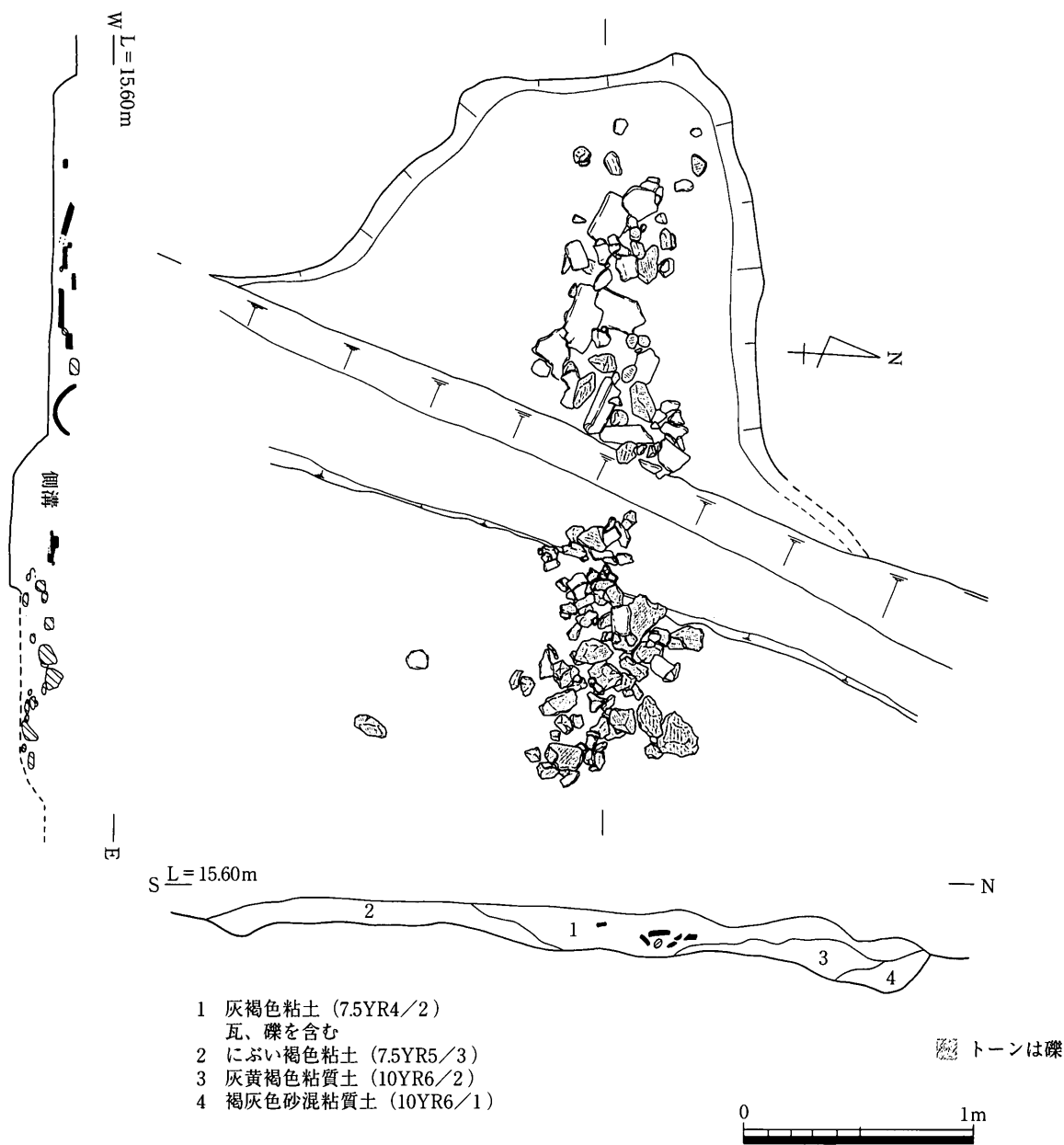
第112図 Ⅱ区 SK08 平・断面図 (1/20)

礫がかたまっている。地山ブロックは見られない。一方、東西土層断面の観察では2層から瓦、礫の出土は見られない。よってある程度埋没した後で投棄されたと考えられる。

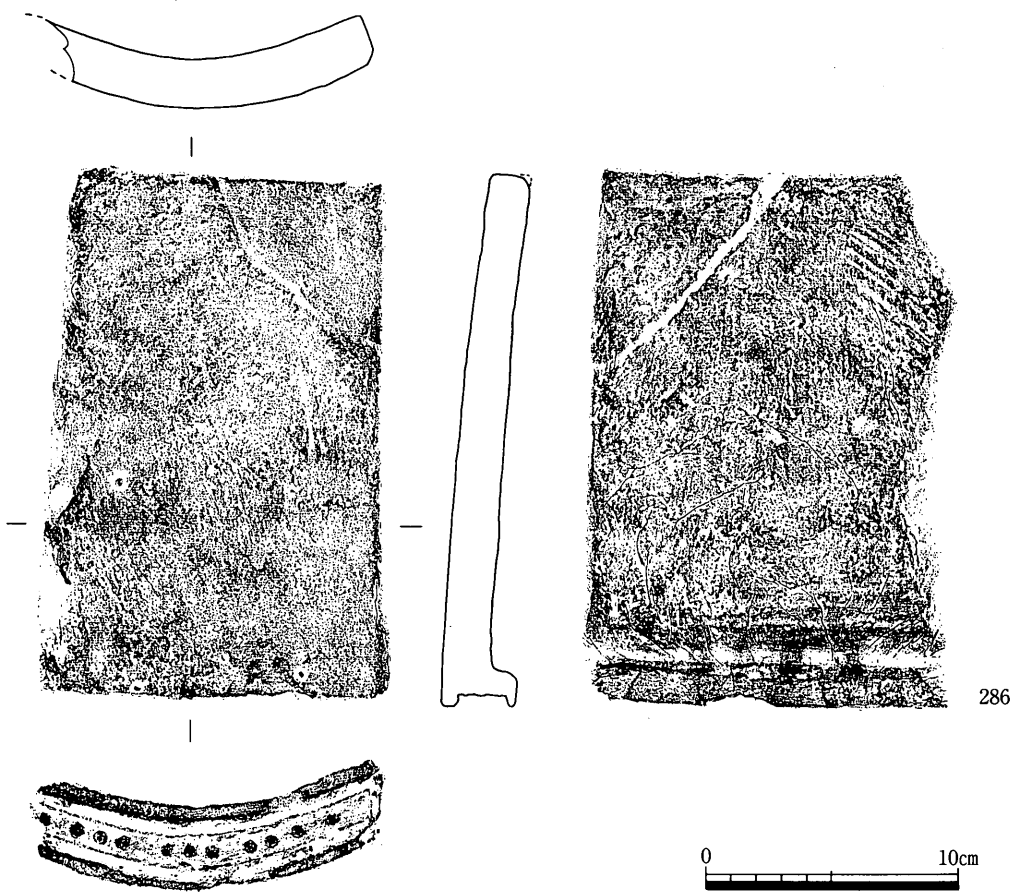
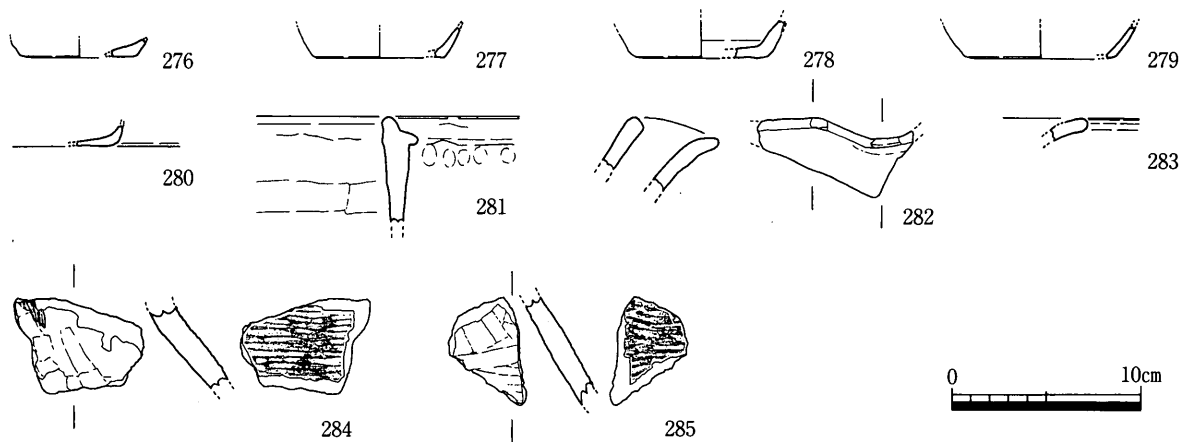
遺物は土坑中央で東西方向に広がる帯状の範囲から多量に出土した。ほとんどが瓦、礫であり、ごく少量の土師器も混じる。瓦は西側に多く見られる。器種は軒平、軒丸、平、丸瓦、雁振瓦があり、中世布目(平)瓦も1点含む。多くは破片であるが、完形に近いものもある。礫は全面に見られるが、東側に集中する。大きさは拳大のものが多い。全て和泉系砂岩である。

土坑中央に帯状に遺物が集中し、その多くが瓦、礫であること、土坑がある程度埋没した後の投棄であることは近接するSK04と類似する。また4点の瓦(206、207、216、228)が遺構間接合しており、密接な関係⁽¹⁶⁾が窺える。SK04については土坑が不要になった後、瓦、礫を用いて埋め戻した可能性を考えたが、SK12についてもある程度埋没した後で遺物の投棄が行われている。よって両者は近接した時期に機能し、廃絶後埋め戻されたと考えられる。

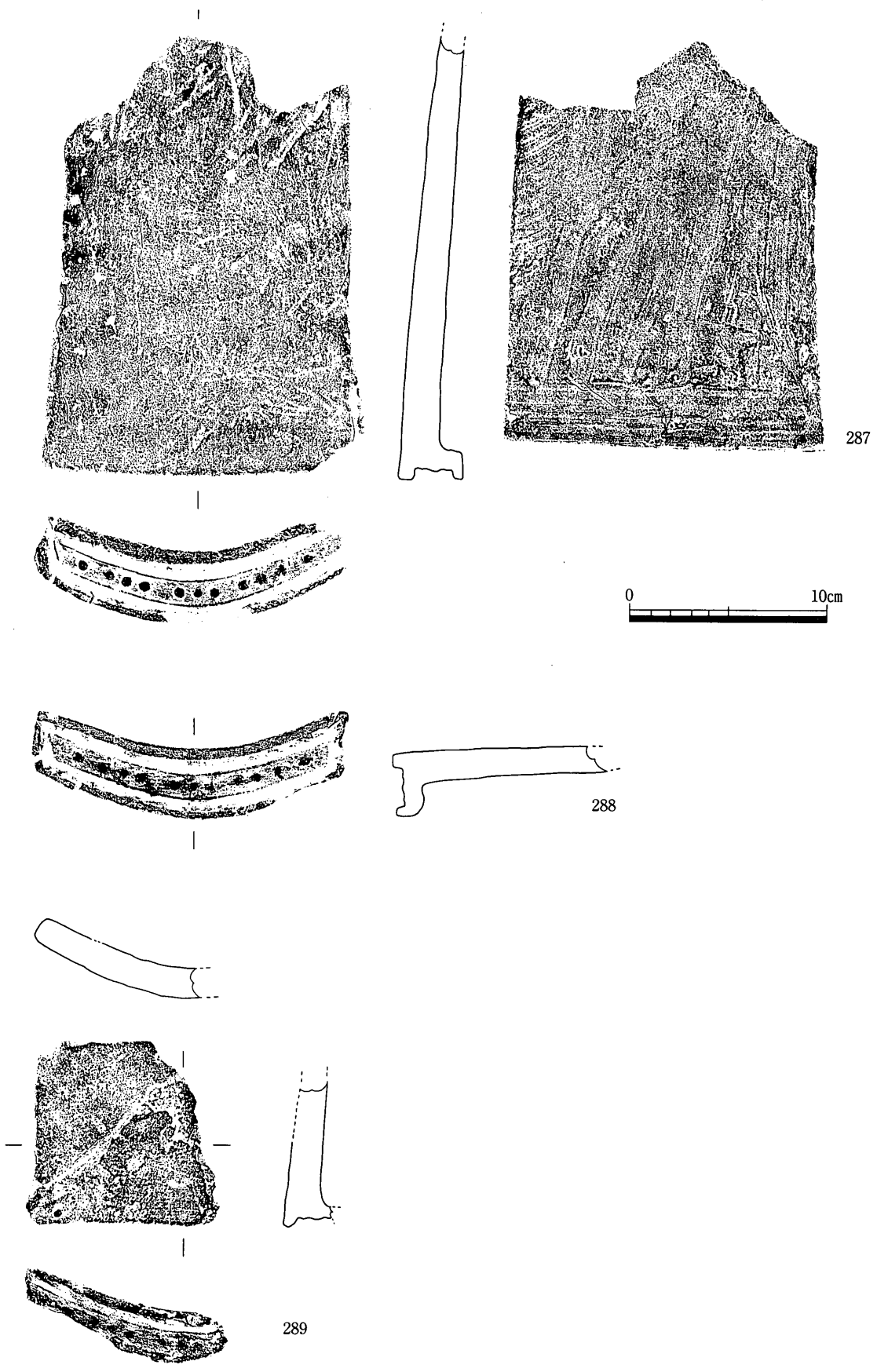
遺物は土師器小皿(276、277)、杯(278～280)、土師質土器土釜(281)、鉢(282)、土鍋(283)、湊焼甕(284、285)、軒平瓦Ⅰ類(286)、Ⅳ類(287)、ⅠorⅣ類(288、289)、軒丸瓦Ⅰ類(290～294)、平瓦Ⅱ類(295～297)、丸瓦Ⅰ類(298～302)、雁振瓦(303)、中世布目(平)瓦(304)がある。276は体部の境界が分厚い。280は底部を糸切りする。281は鐔が矮小で、口縁部もごく短い。15世紀後半から16世紀前半と考えられる。284、285は外面に平行叩き、内面に板ナデを施す。298はSK02との接合資料である。281は瓦と比べて时期的に下るが、プランを明確にできなかったⅠ区部分で遺構検出中に出土した遺物であり、遺構に伴わないと判断する。関連性が強いと考えるSK04でも15世紀代以降に下る遺物は見られないため土坑の時期は瓦より14世紀後半と考えられる。



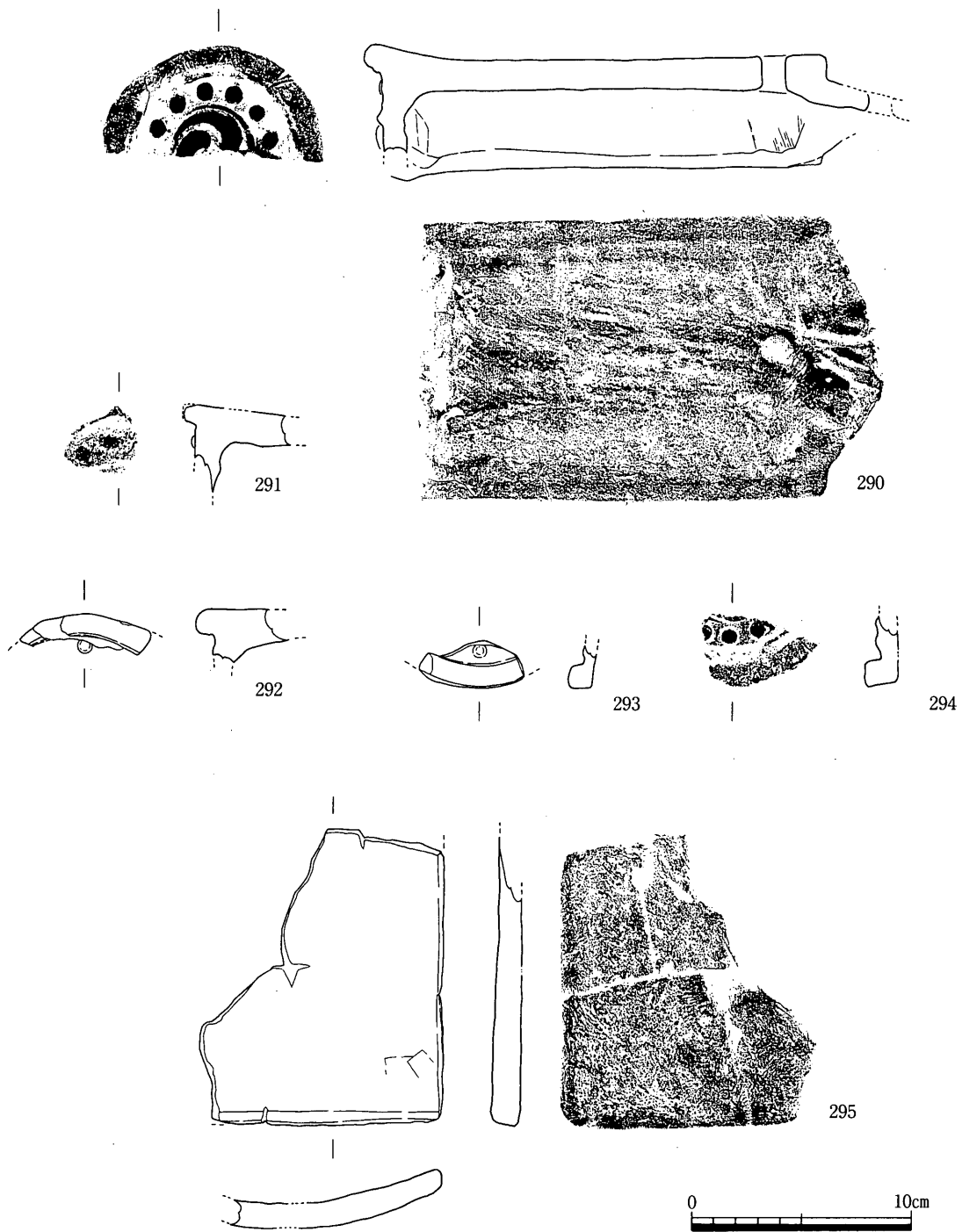
第113図 I・II区SK12 遺物出土状況 平・断面図 (1/30)



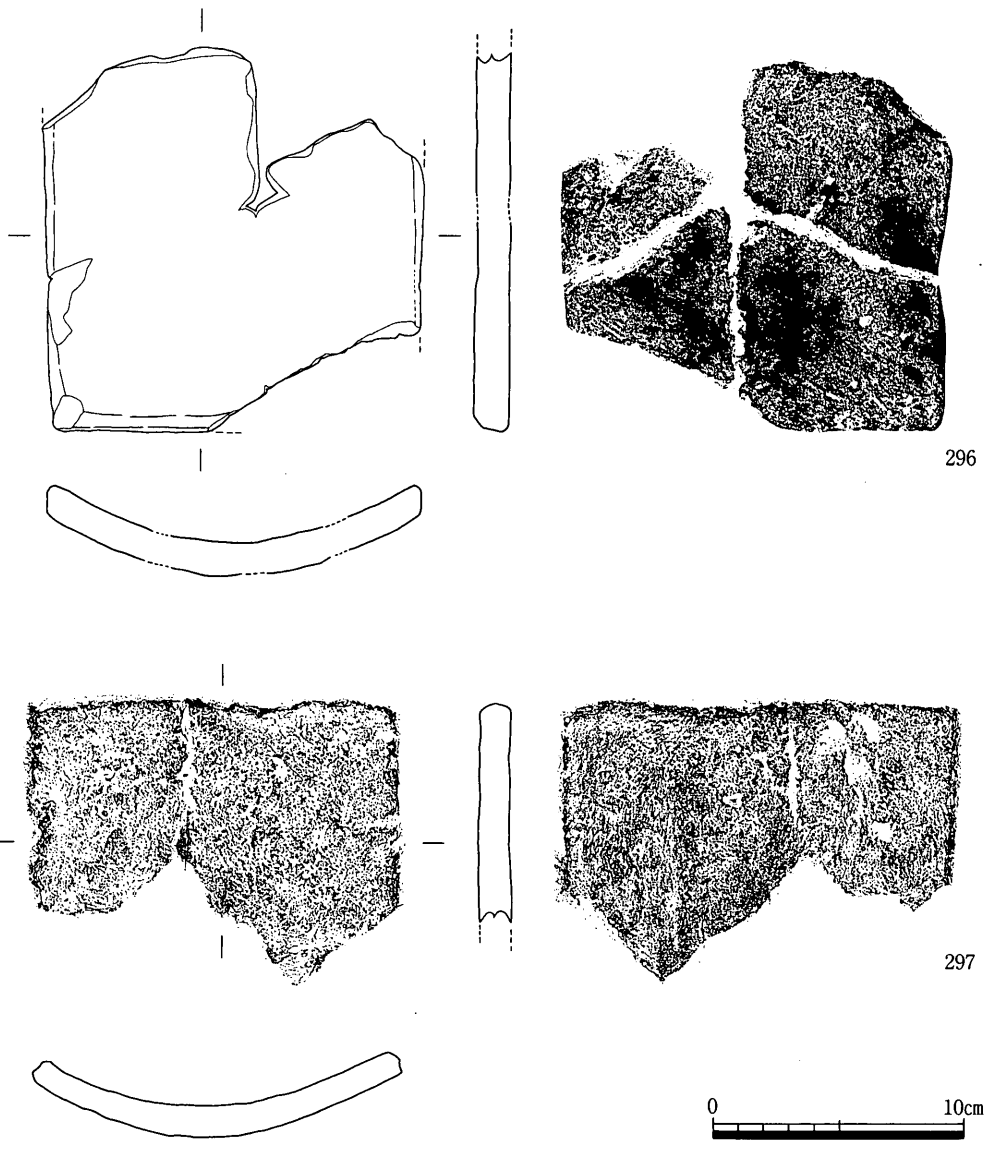
第114图 I·II区SK12 出土遗物1 (1/4·1/3)



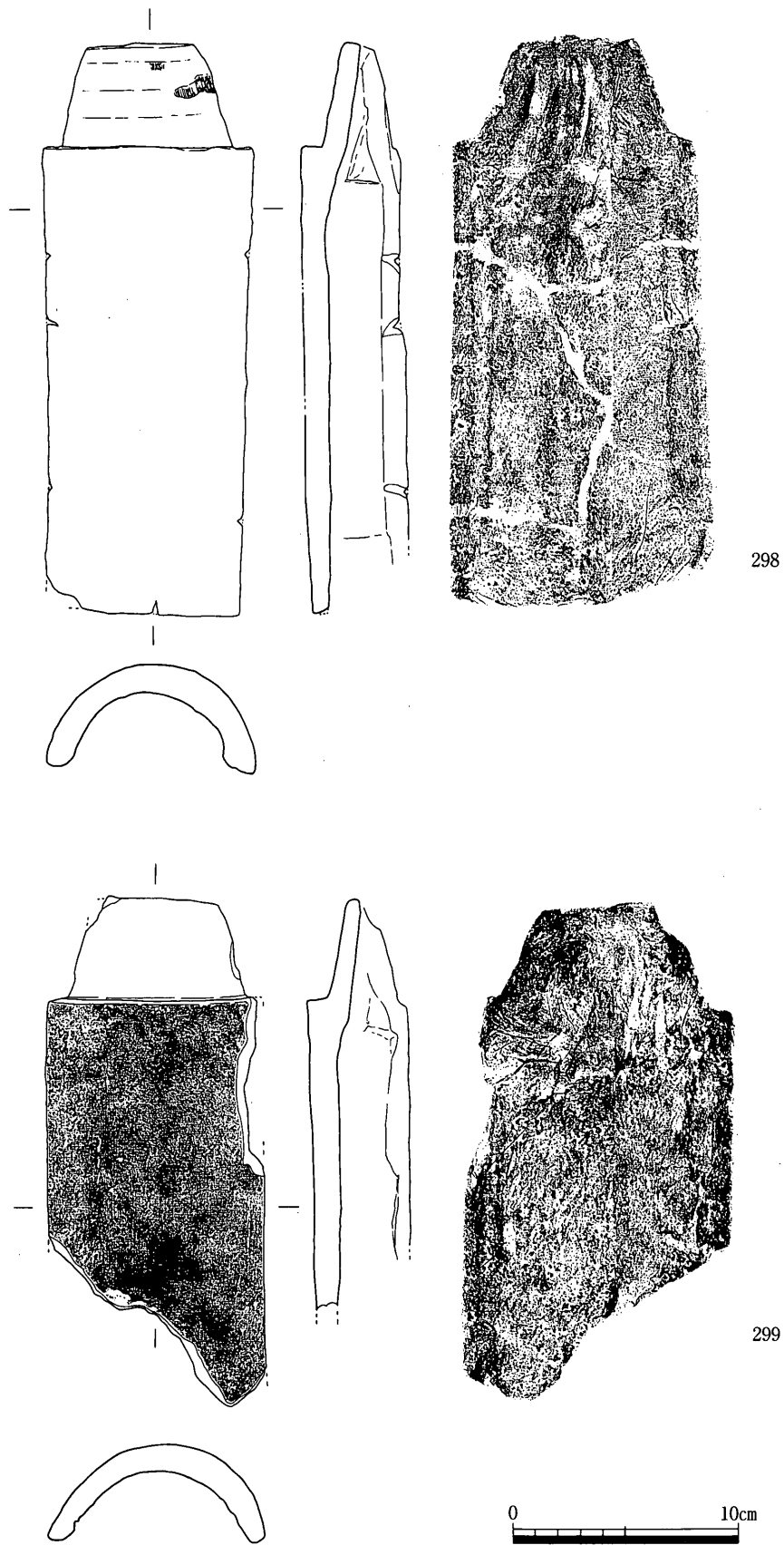
第115图 I·II区SK12 出土遺物2(1/3)



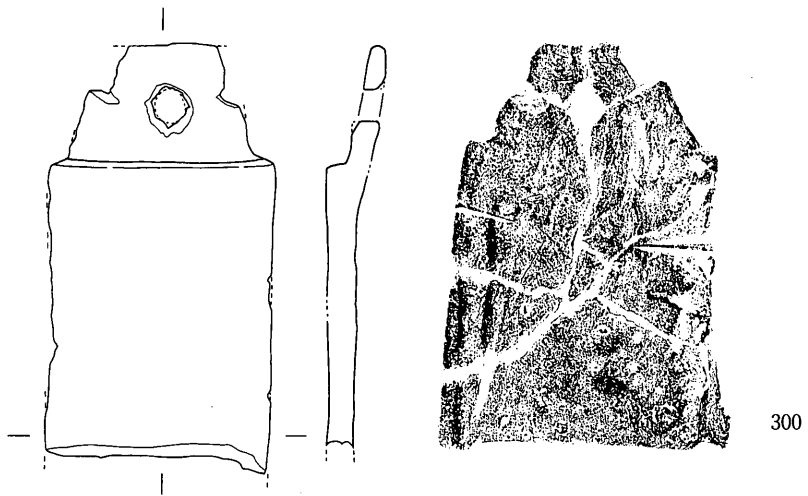
第116图 I·II区SK12 出土遺物3 (1/3)



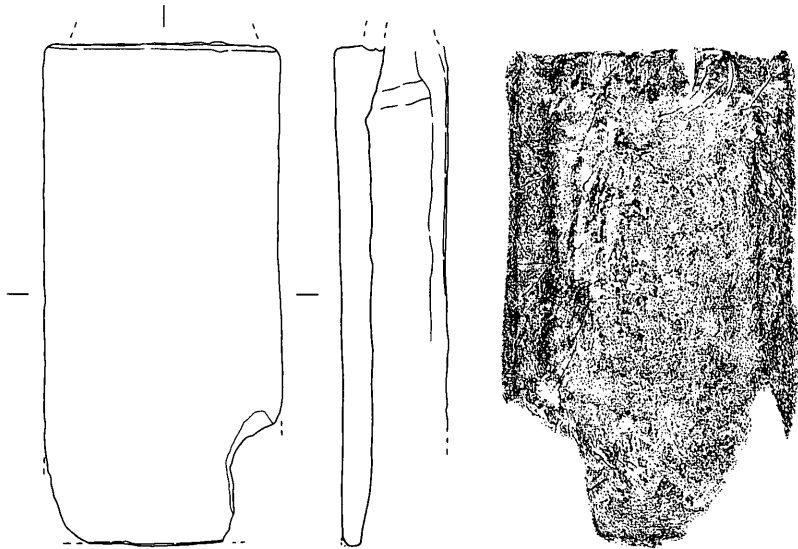
第117图 I·II区SK12 出土遗物4(1/3)



第118图 I·II区SK12 出土遗物5(1/3)



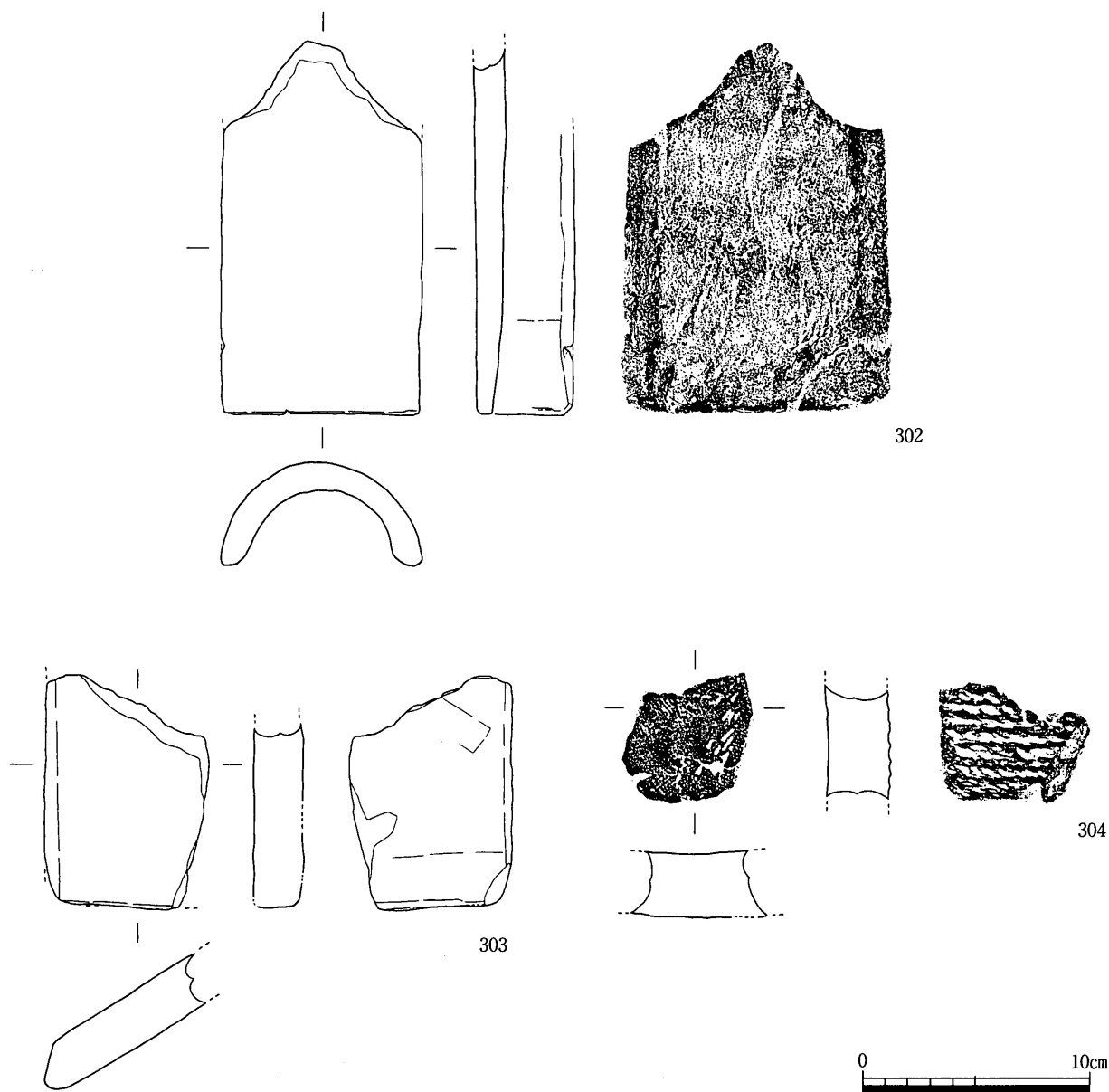
300



301



第119図 I・II区SK12 出土遺物6(1/3)

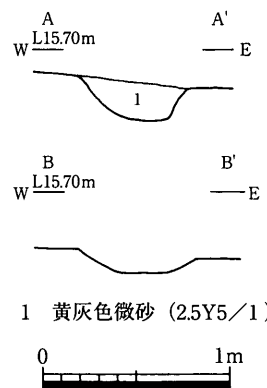


第120図 I・II区SK12 出土遺物7 (1/3)

(5) 溝

SD01 (第121図)

調査区中央で検出した溝である。SK04、SX03を切る。断面形は浅い皿状を呈する。幅0.50~0.60m、深さ12~24cmを測る。主軸方向はN-22°-Eである。出土遺物は丸瓦I類がある。SK04を切ることによる混入と考えられる。瓦と遺構の切り合いから溝の時期は14世紀後半以降と考えられる。



1 黄灰色微砂 (2.5Y5/1)

第121図 II区
SD01 断面図
(1/40)

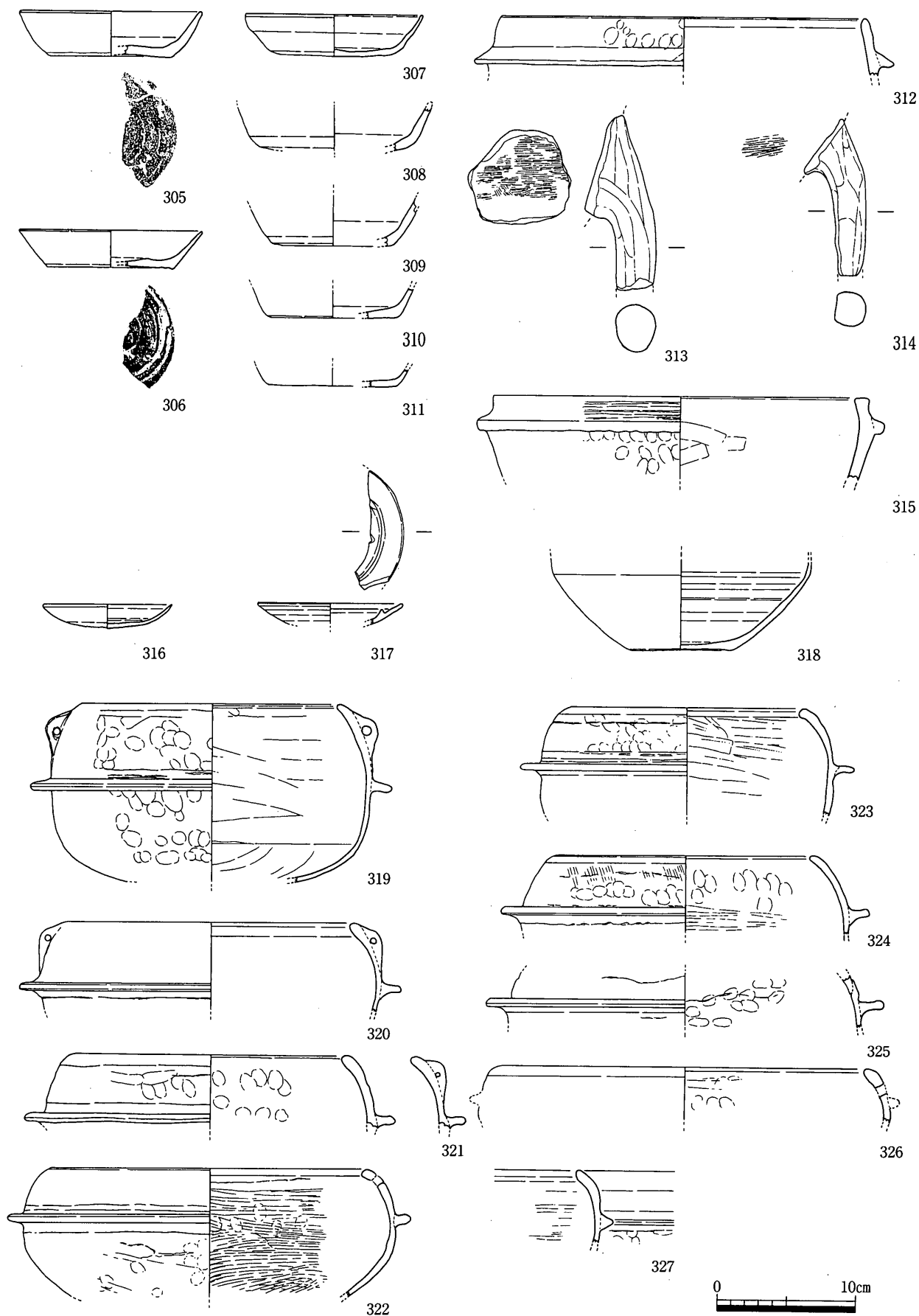
(6) 旧河道

SR01 (第41、122~131図)

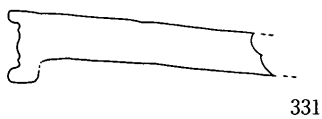
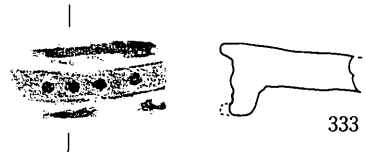
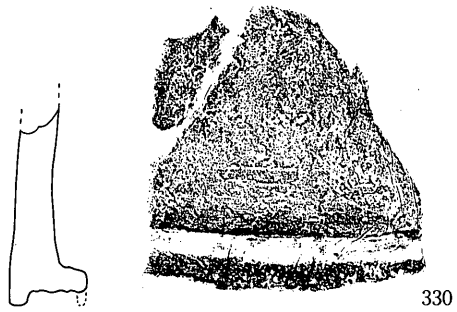
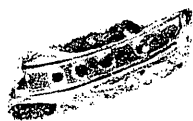
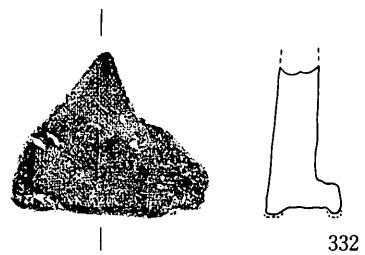
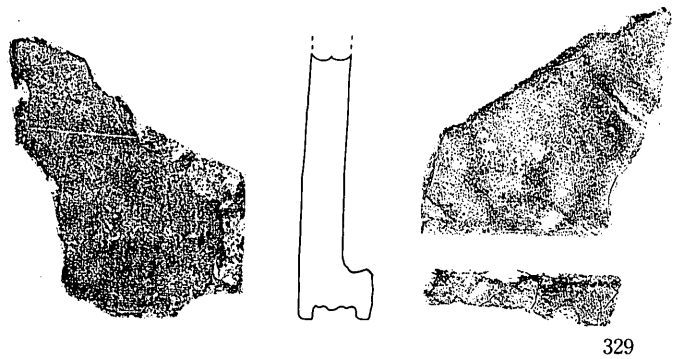
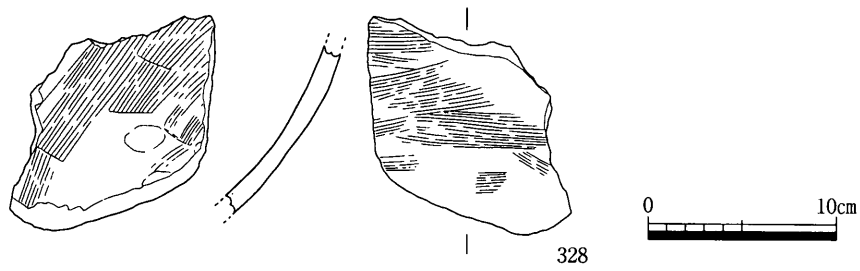
I、II区北端部で検出した旧河道である。周辺地形(第4図)から見て遺跡北東~南東部にある谷筋を南流する。調査区内では西肩のみ検出しており、大部分は調査区外に広がる。SF01から約2mと近接するII区西部で埋土は2層に大別される。上層は灰白色系砂質土であり、下層は青灰色系粘土である。28リットル入りコンテナ7箱の遺物が出土しており、多くは中世瓦である。上層では近世遺物も比較的多く含まれる。下層では中世遺物が目立つが、近世の平瓦片もごく少量混じる。これらについては詳細な時期決定はできないが下層も近世の堆積であることを示す。

一方I区はSR01断面図(第41図)で見られるとおり、II区の埋土とは異質であり、底場で中世の丸瓦I類が張り付いて出土している。よってSR01は中世~近世にかけて流水していたと考えられる。

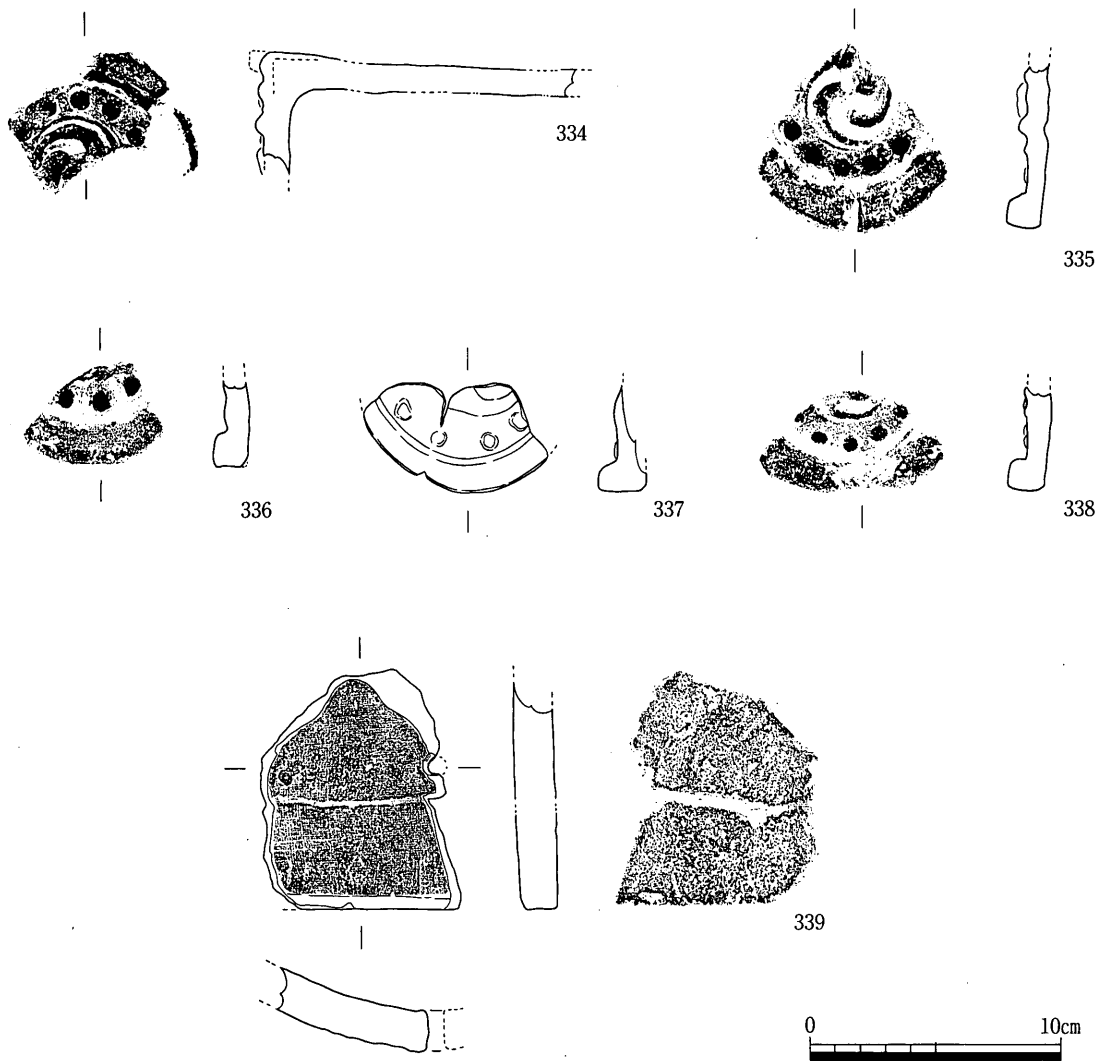
出土遺物には土師器杯(305~311)、土師質土器土釜(312~314)、瓦質土器釜(315)、備前焼灯明皿(316)、瀬戸美濃灯明皿(317)、軟質施釉陶器土瓶(318)土師質土器羽釜(319~322)、瓦質土器羽釜(323~327)、須恵器甕(328)、軒平瓦Ⅲ類(329)、I or IV類(330~333)、軒丸瓦I類(334~338)、平瓦I類、II類(339)、Ⅲ類、丸瓦I類(340~344、348)、I'類(345)、II類(346、347)、Ⅲ類、雁振瓦(349~351)、鬼瓦(352~354)、中世布目瓦、鉄釘(355、356)、近世の丸瓦(357)、平瓦(358)、古代の平瓦(359)などがある。305は分厚く、外傾気味の体部をもつ。底部はヘラ切りする。306は直線的に延びる体部を持ち、強く外傾する。308~310は箱形の器形をもつ。312は短く、三角形の鏝に対し、長い口縁部をもつ。14世紀後半と考えられる。313、314は底部との接着部に接着用の溝を刻む。315は口縁部上端が内外に拡張する。16世紀代と考えられる。316はしきりを持たない。内外面に煤が付着する。317はしきりを持つ。319、320は外耳をもつ。孔に使用痕は見られない。326、327は鏝が小さい。326は鏝に穿孔するが、使用痕は見られない。316~327は18世紀第3四半期と考えられる。350は玉縁側縁を面取りする。352は鬼面の左眉付近である。右上は破損部が丸味を帯びており角があったと推定される。353は裏面の取っ手である。354は色調と胎土の質感(密で粘性が高く、砂粒がごく少ない)が鬼瓦と酷似する。部位は不明だが、鬼面の一部と推測される。355、356は断面が四角く、扁平な鉄釘である。357は中世瓦より法量的に大きく、玉縁が短い。玉縁側縁は抉るように面取りする。358も中世瓦より分厚く、大きい。胎土は瓦質であり、砂粒を多量に含む。窯に近接するII区西部の下層より出土している。



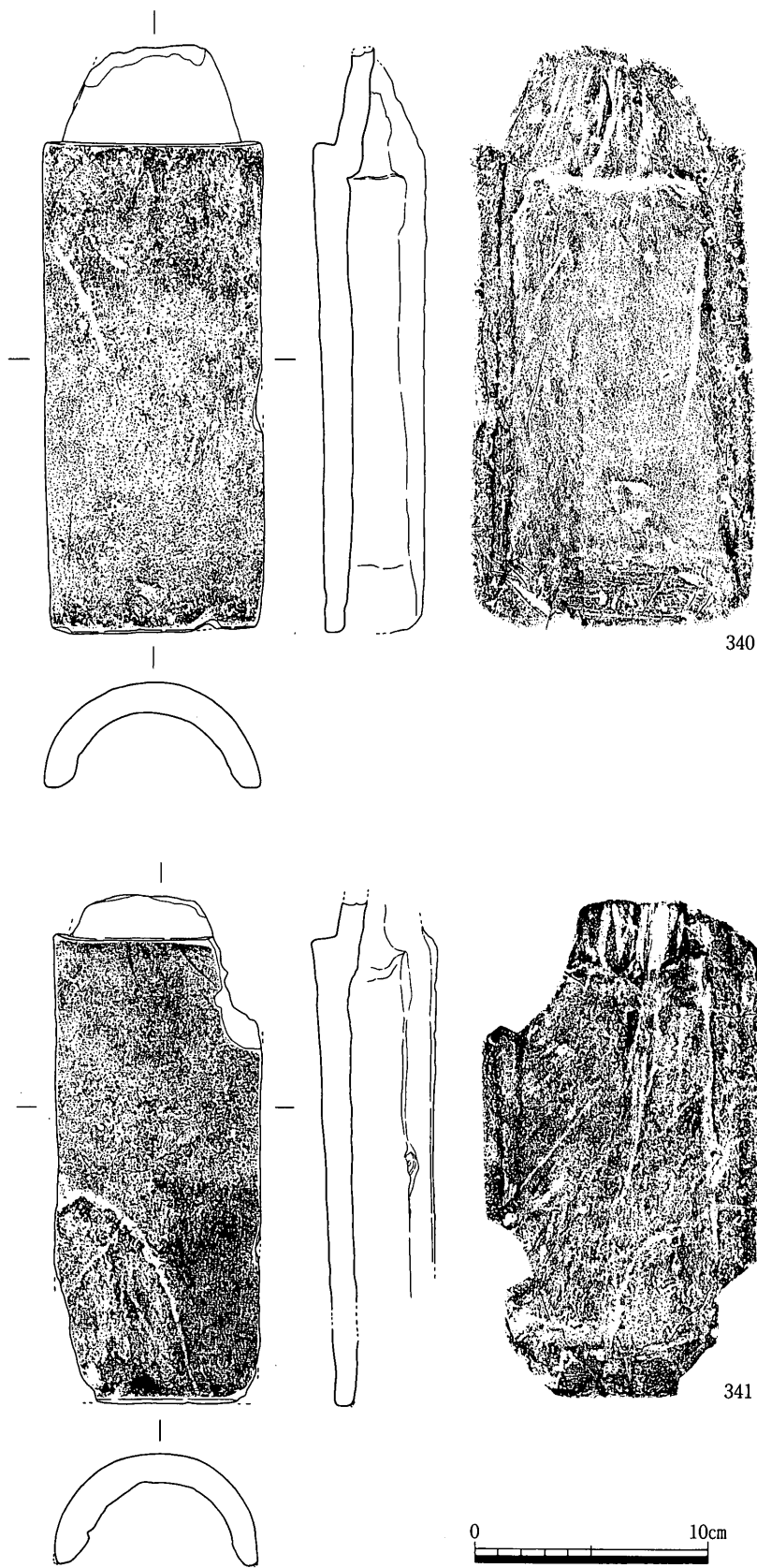
第122图 I·II区SR01 出土遗物1 (1/4)



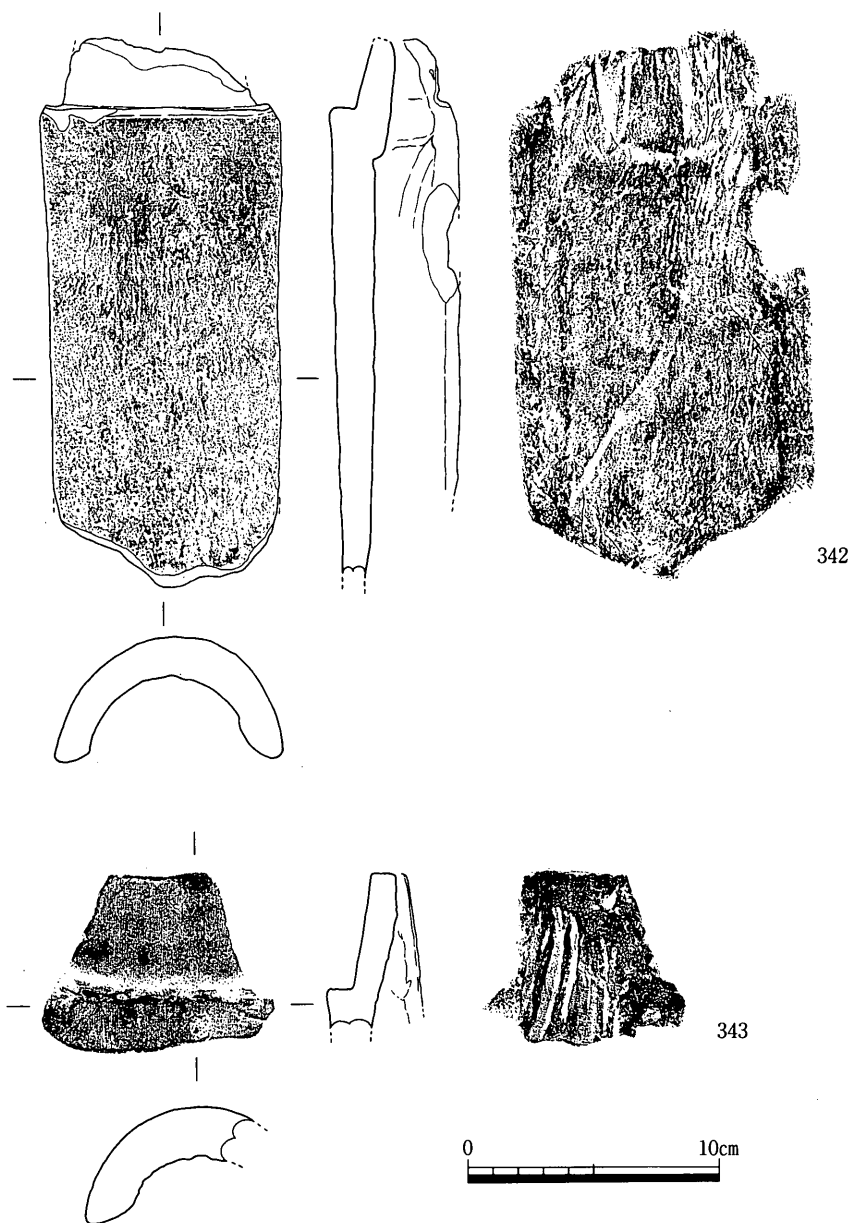
第123图 I·II区SR01 出土遺物2 (1/4·1/3)



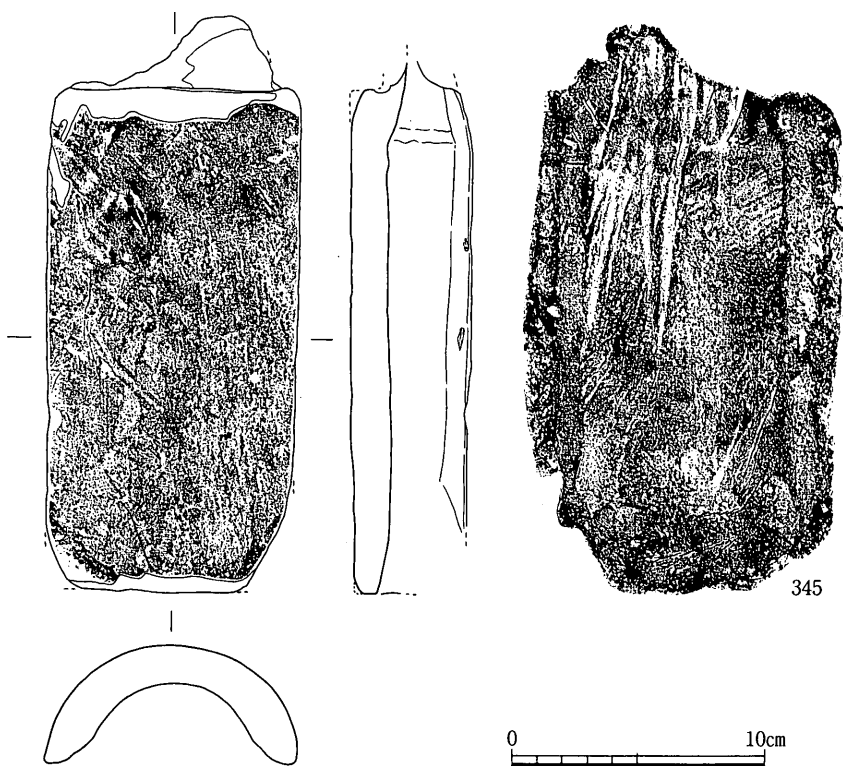
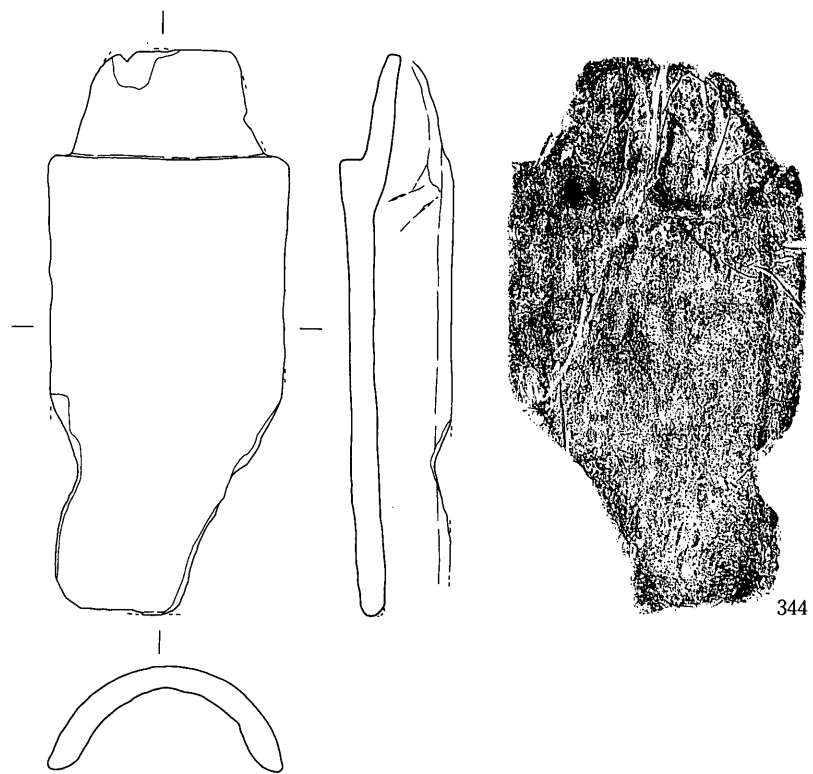
第124图 I·II区SR01 出土遺物3 (1/3)



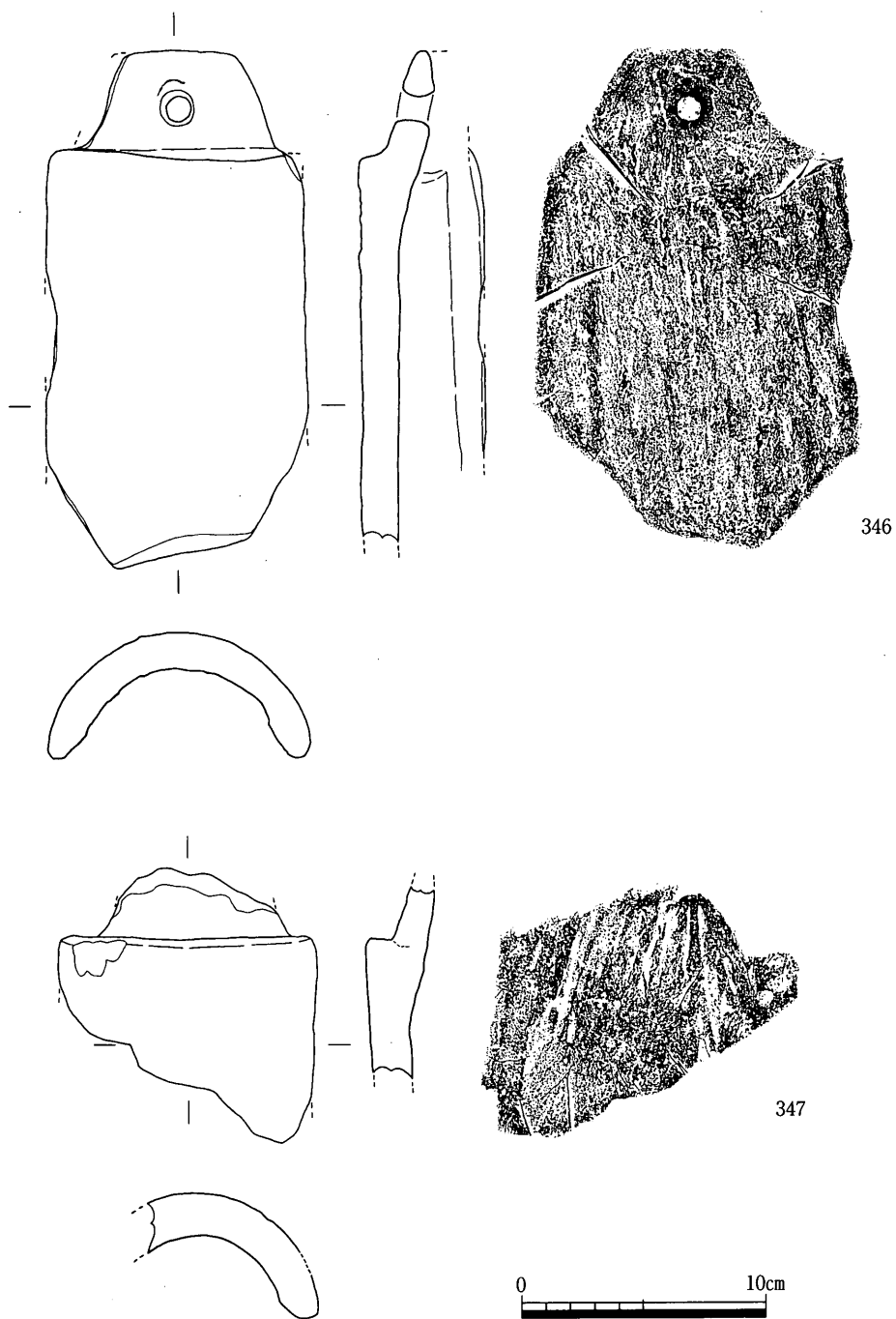
第125图 I·II区SR01 出土遗物4(1/3)



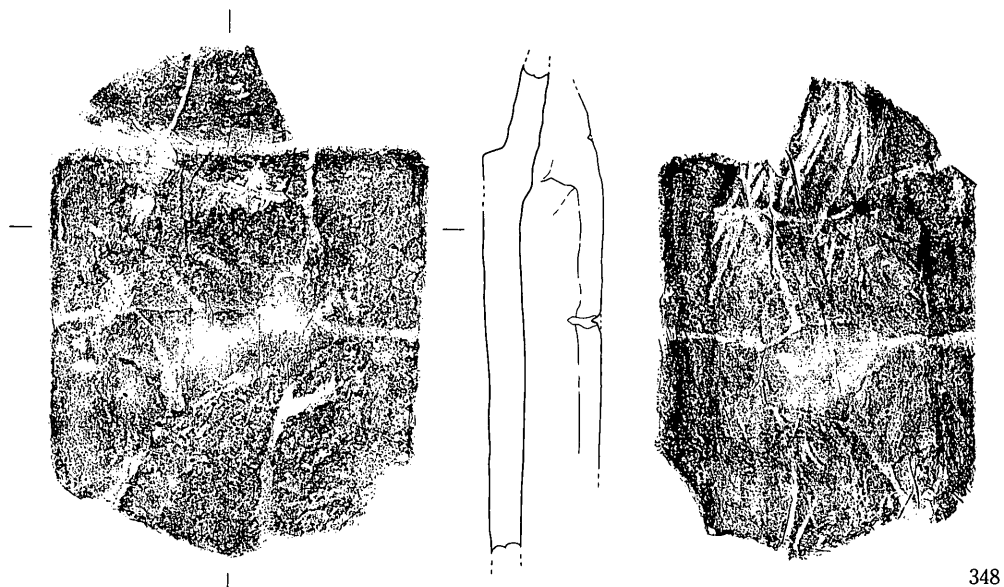
第126图 I·II区SR01 出土遺物5(1/3)



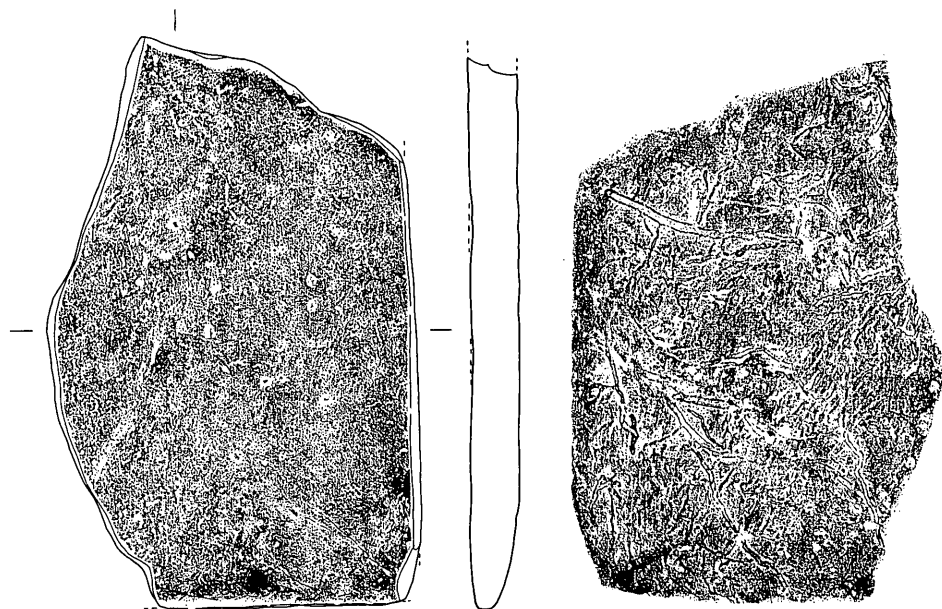
第127图 I·II区SR01 出土遺物6(1/3)



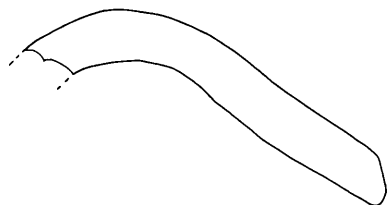
第128图 I·II区SR01 出土遺物7(1/3)



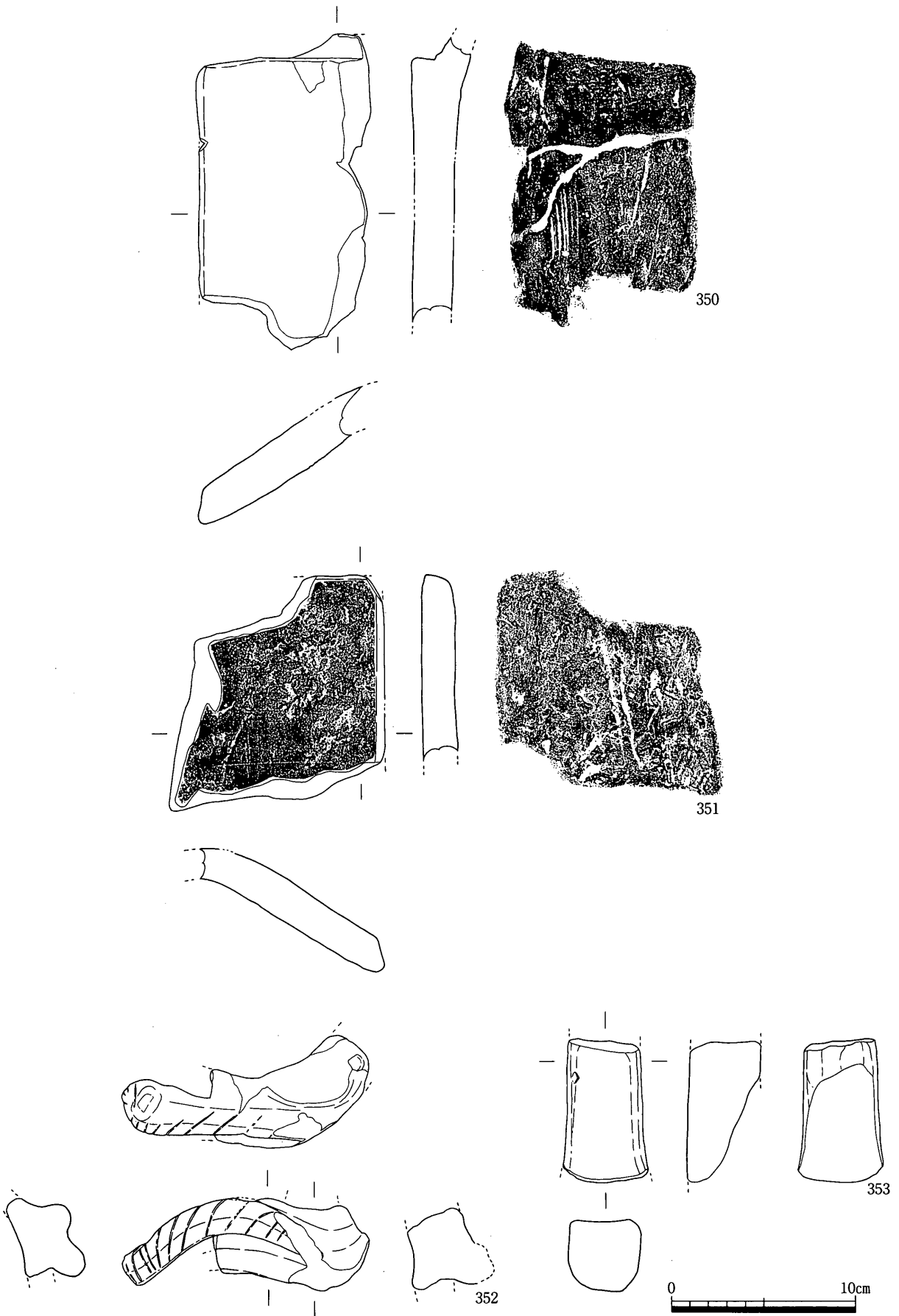
348



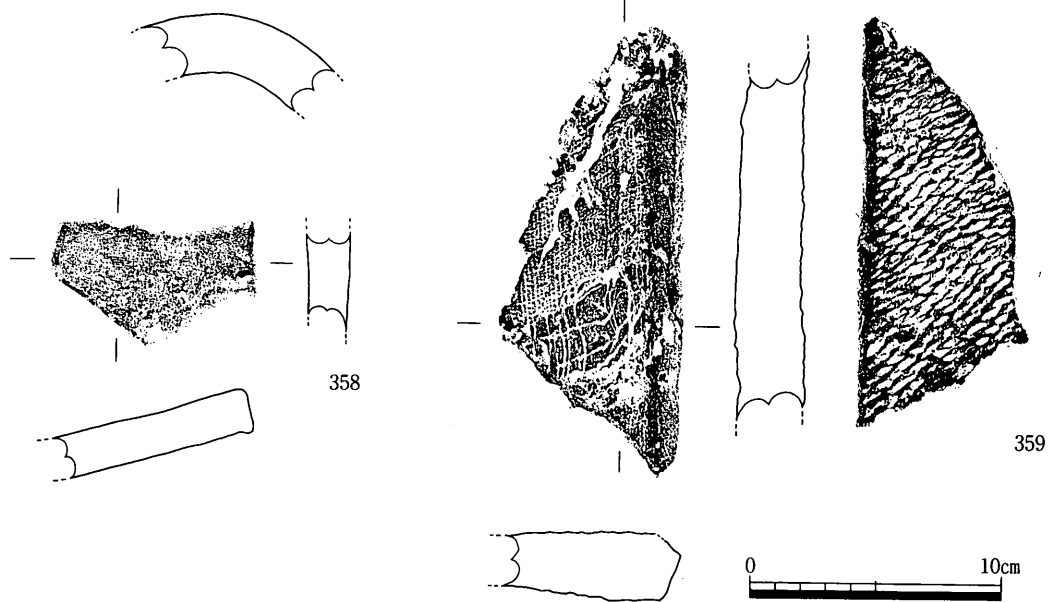
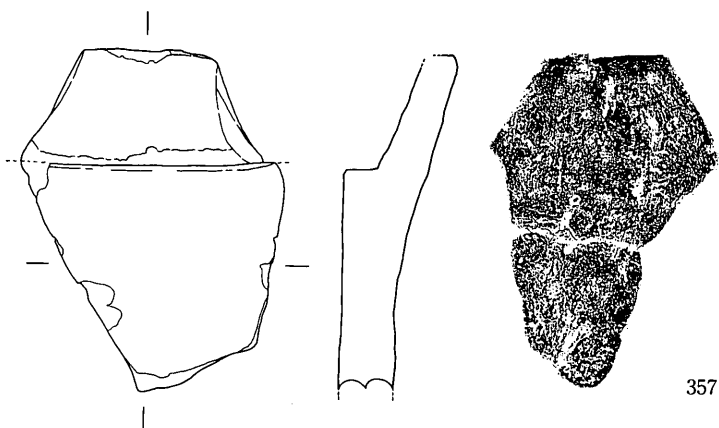
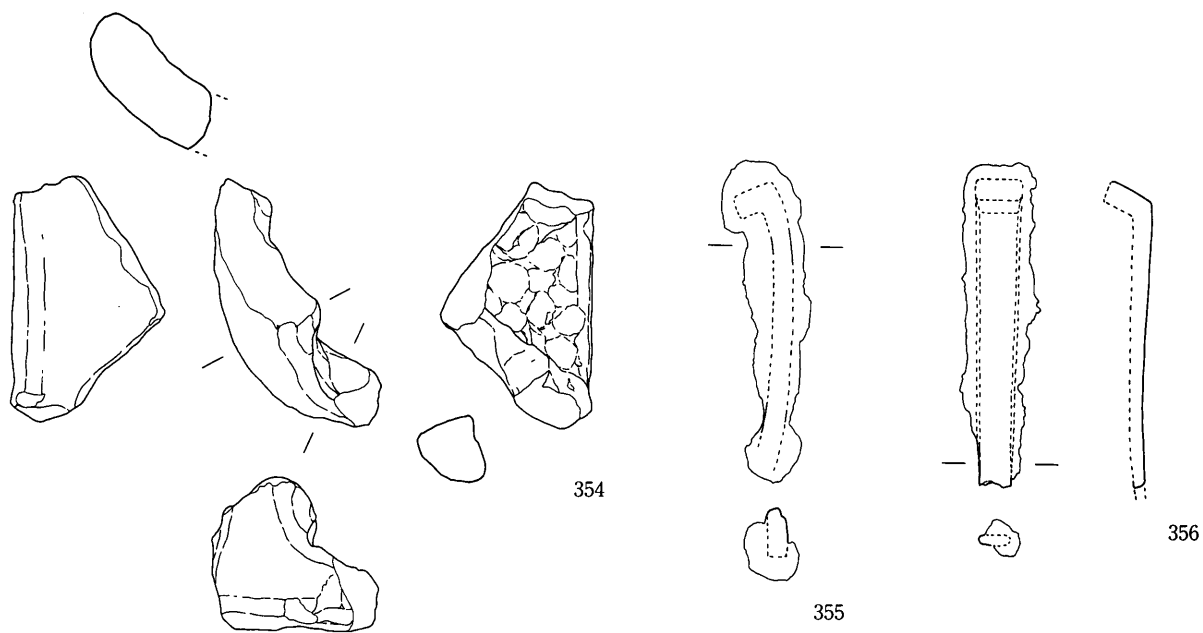
349



第129图 I·II区SR01 出土遺物8(1/3)



第130图 I·II区SR01 出土遗物9(1/3)



第131图 I·II区SR01 出土遗物10 (1/3)

(7) 北西部包含層 (第 8、132~142図)

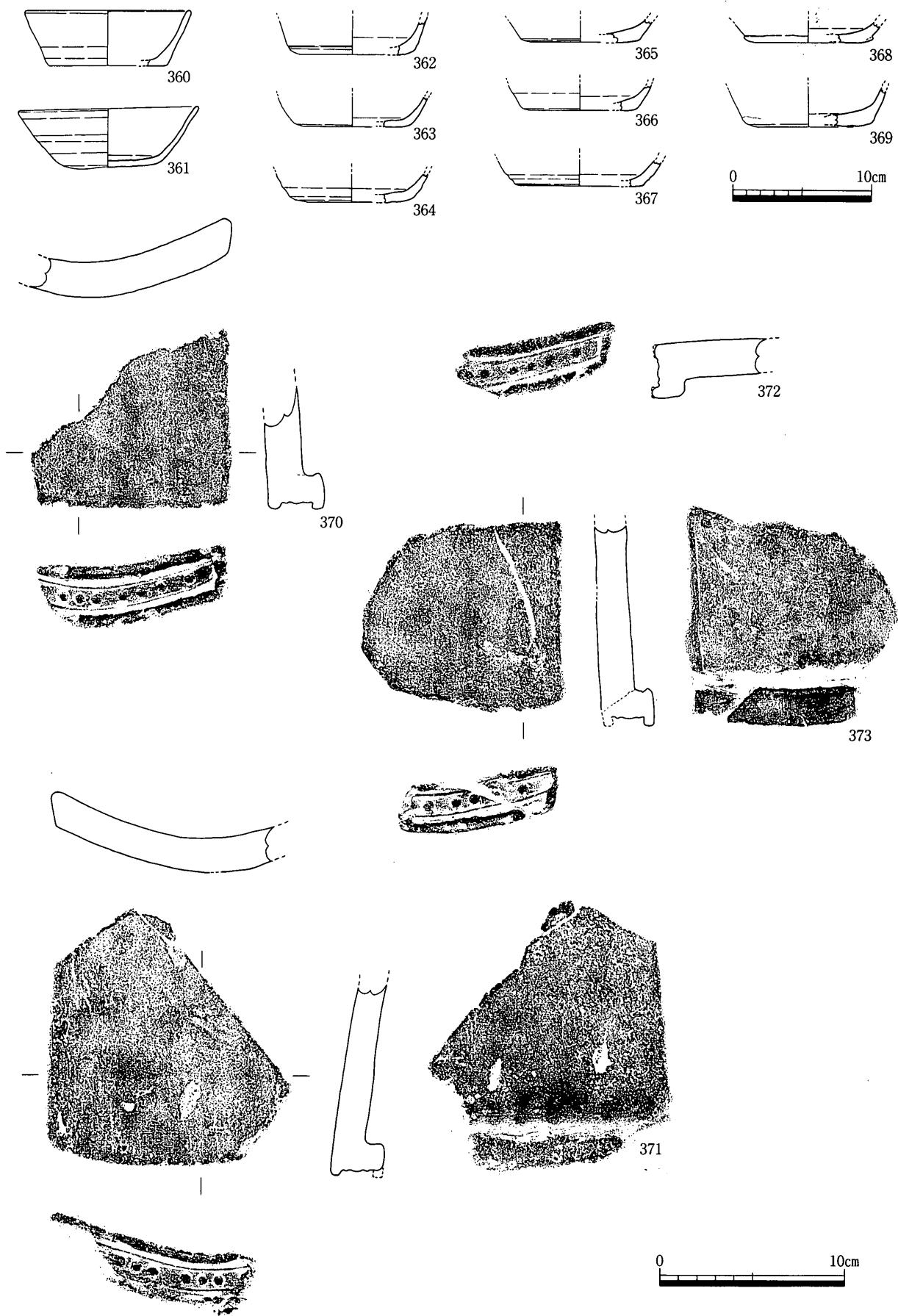
「1 土層序」で先述したとおり窯が築かれた丘陵先端部堆積土の内、上位に見られる灰黄褐色土(耕作地造成土)では多量の中世瓦などを含む部分がある。この層より下位で近世の備前焼小壺(495)が出土した土石流が検出されており、新しい時期の造成土である。だが、窯から約7mと近接した地点(付図に記載)でコンテナ5箱分の瓦を中心とした中世遺物(ごく少量の近世遺物も混じる)が径4mほどの範囲で集中して出土している。またSF01、02では隔壁を設けた窯構造から見て焼成室から瓦を取りだしたことが想定されるため付近には失敗品を廃棄した物原が形成されていたことを推測できる。以上のような状況から基本的に窯に伴う物原の遺物が後世の耕地造成に伴い、まとめて移動されたと推定し、「包含層」の名称を用いた。

遺物は土師器杯(360~369)、軒平瓦Ⅱ類(370~372、374)、Ⅲ類(373)、I or IV類(375、376)、軒丸瓦Ⅰ類(377~379)、平瓦Ⅰ類(380、383)、Ⅱ類(381、382、387)、Ⅲ類(384~386)、丸瓦Ⅰ類(388~393、395)、Ⅱ類(394、396、397)、玉縁片(398)、雁振瓦(399、400)、鬼瓦(401)、鉄釘(402)などがある。360は箱形で器高が高い。底部を糸切りする。361は薄作りで底部から体部にかけて丸味を持つ。底部をヘラ切りする。363~367は体部が外傾気味である。類似した底径をもつが、364、367ではヘラ切り、365は糸切りする。368、369は分厚い作りで、底、体部境界よりわずかに上でヘラ切りに伴う傷が観察される。これはSK05で出土した杯と同じ特徴である。401は表面に鬼面がはがれた痕跡、裏面に中空にした抉り込みが見られる。402は先端部を欠損する。

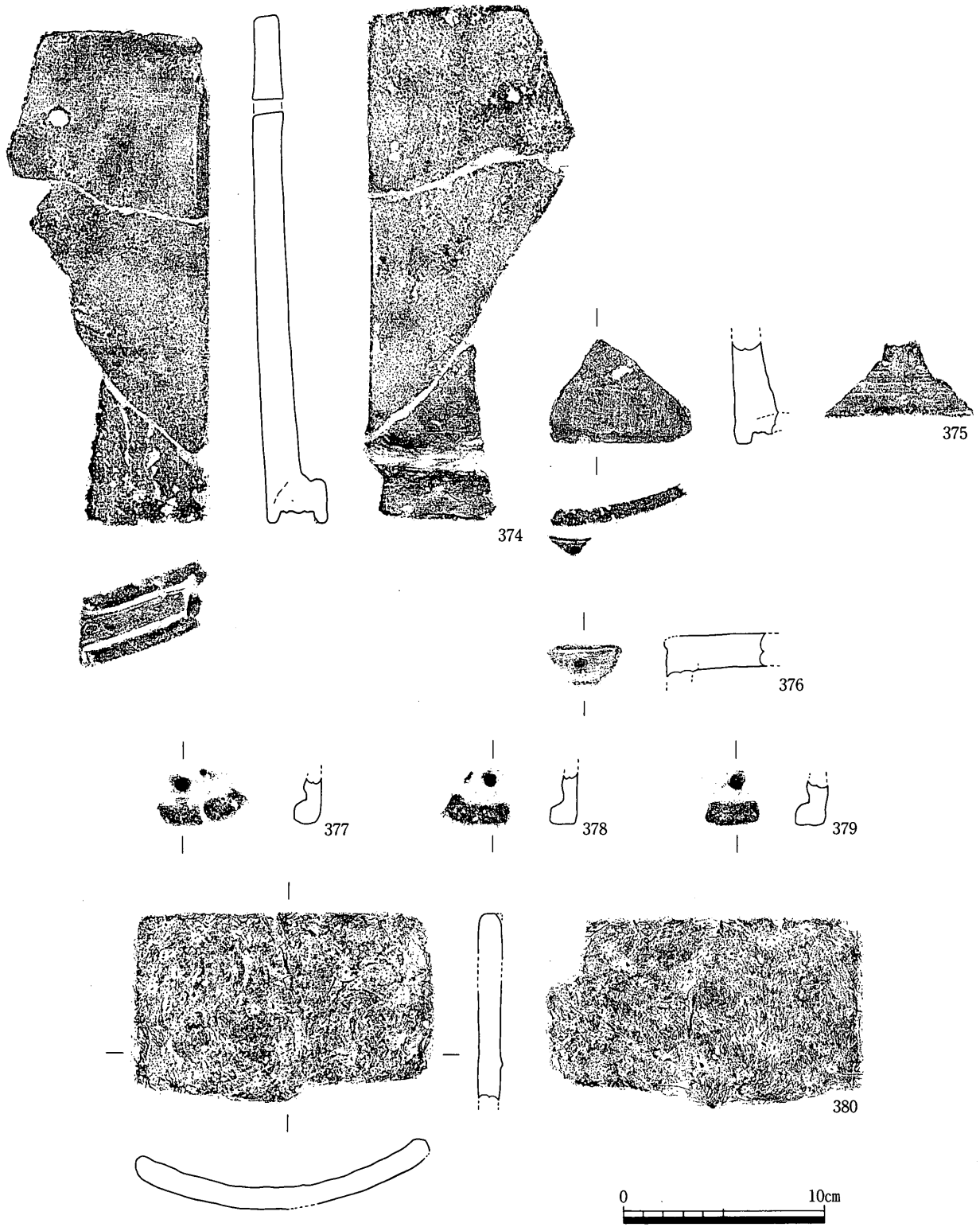
(8) 北西隅流入土 (第 8、143~158図)

窯が築かれた丘陵北端部の斜面上には黄褐色系微砂質土(第8図13~15層)、灰黄褐色粘質土(第8図16層)が堆積している。前者からは瓦を中心とする多量の中世遺物及び少量の近世遺物が出土している。この層は西側の丘陵斜面に堆積する土壤に酷似しており、この部分からの流入を推定できる。堆積時期は近世遺物の存在から近世と考えられる。また後者からも少量の中世瓦が出土している。以上の堆積土(13~16層)を一括して「北西隅流入土」として遺物を取り上げた⁽¹⁷⁾。出土位置が窯の北側に近接しているので中世遺物については北西部包含層と同様に付近に形成された物原などに由来する可能性が高い。実際にこの地点から出土した瓦は他の遺構出土瓦より完形に近く、ローリングもさほど受けていないものが多い。

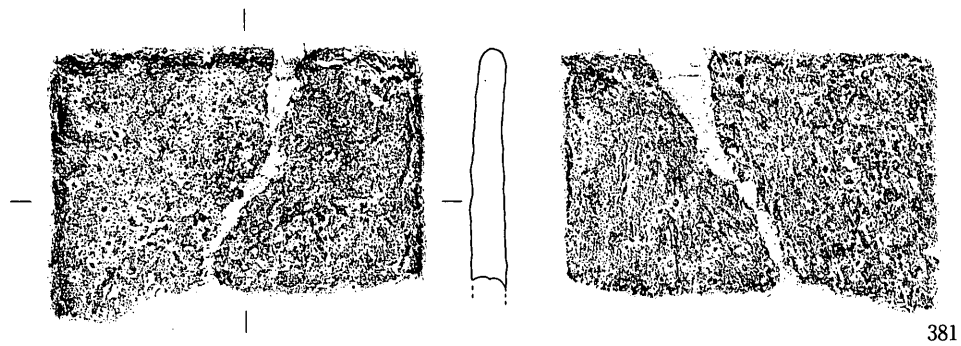
遺物は土師質土器土釜(403)、肥前系磁器筒椀(404)、軒平瓦Ⅱ類(405)、Ⅲ類(406)、I or IV類(407)、軒丸瓦Ⅰ類(409、410)、Ⅱ類(408)、平瓦Ⅰ類、Ⅱ類(411、412)、Ⅲ類(413~427)、丸瓦Ⅰ類(428~431)、Ⅱ類(432~438)、雁振瓦(439)などがある。403は罎と口縁部がほとんど一体化する。16世紀代と考えられる。404は県内では出土例が極めて少ない器形である。



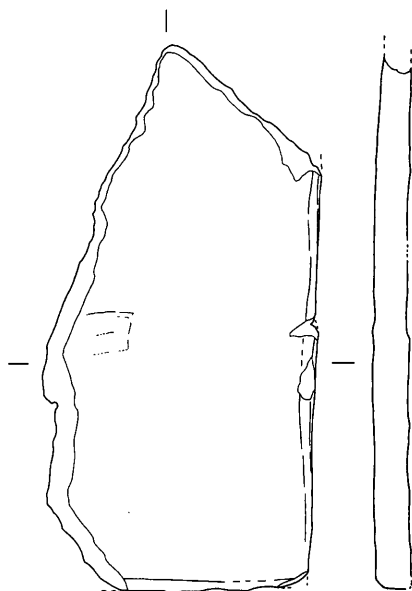
第132图 II区 北西部包含层 出土遗物1 (1/4·1/3)



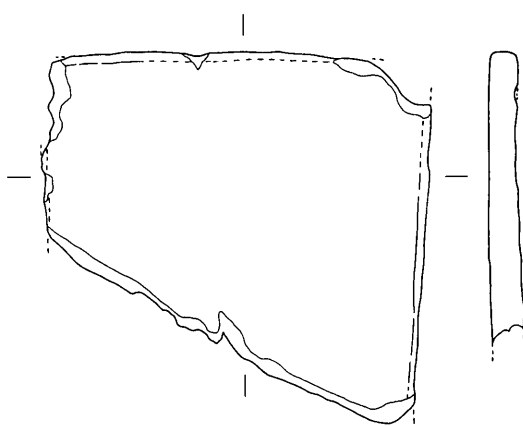
第133图 II区 西北部包含层 出土遗物 2 (1/3)



381



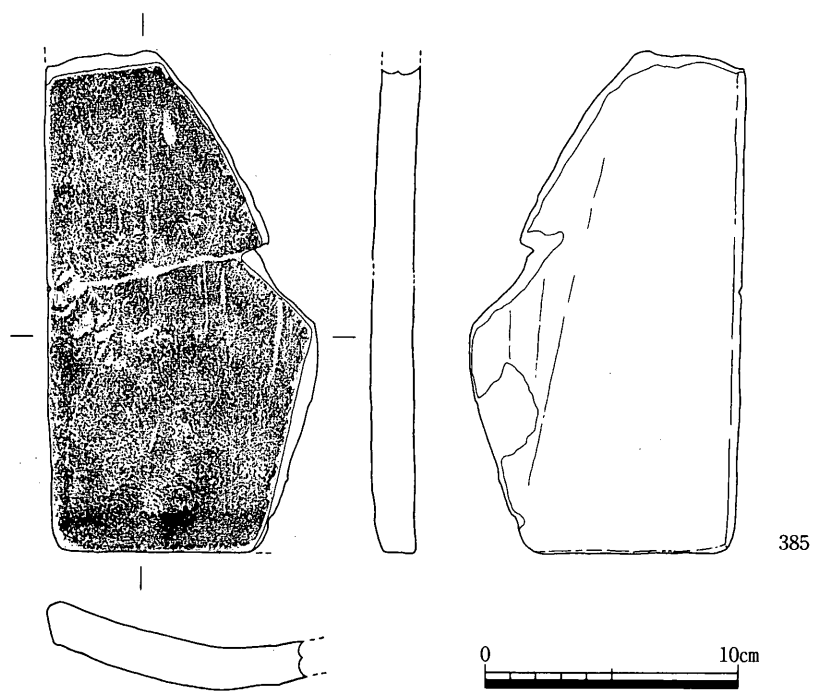
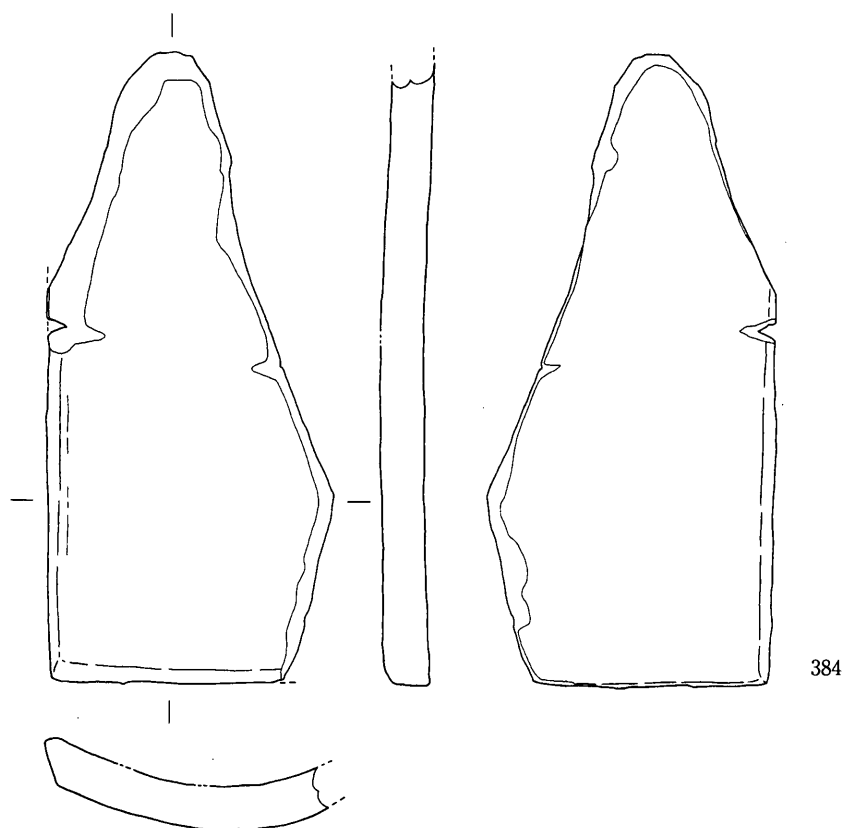
382



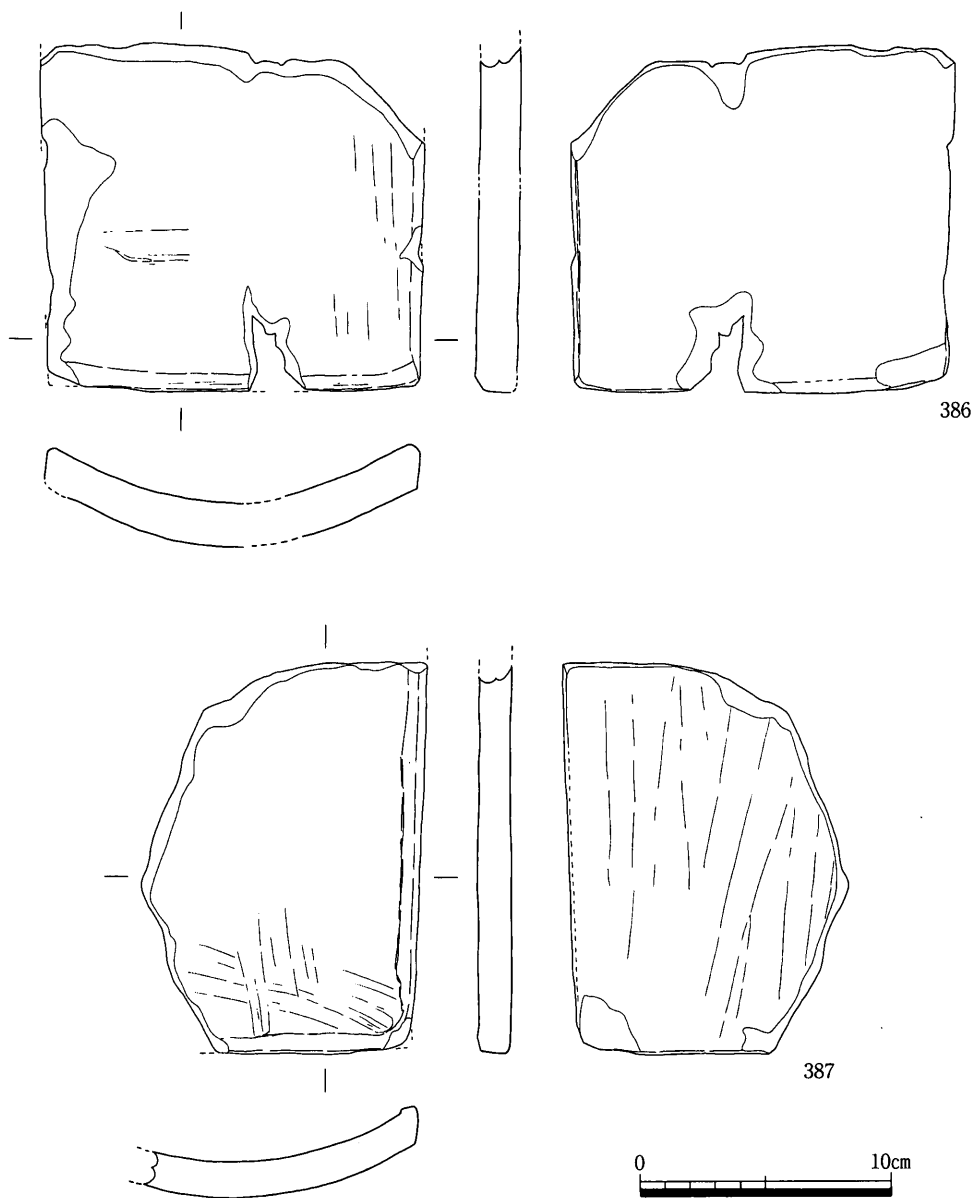
383



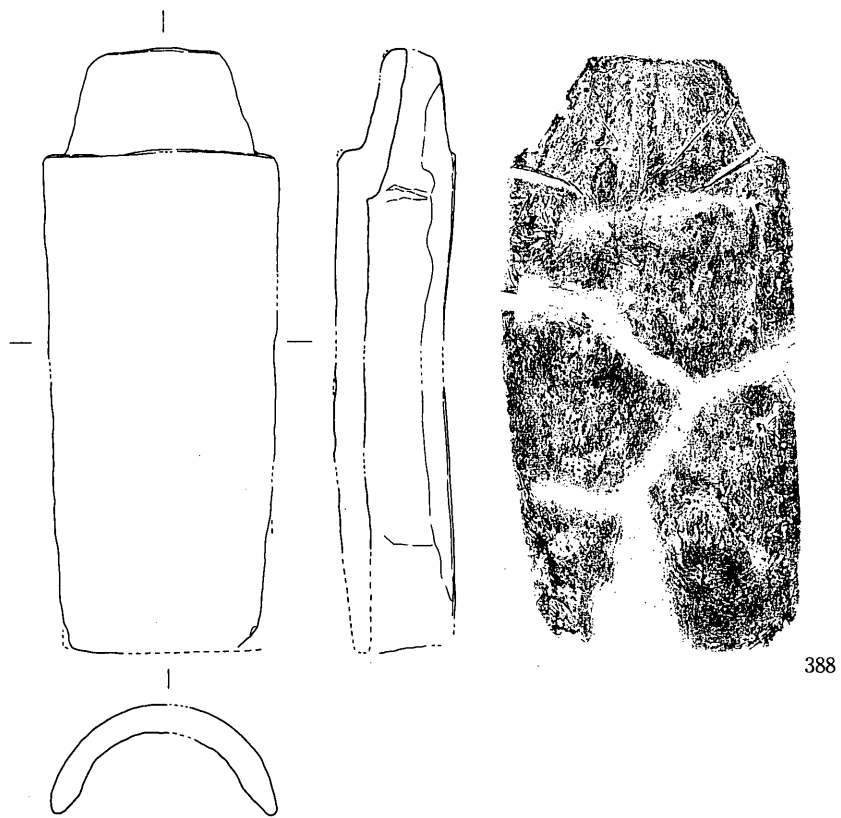
第134图 II区 北西部包含层 出土遗物3 (1/3)



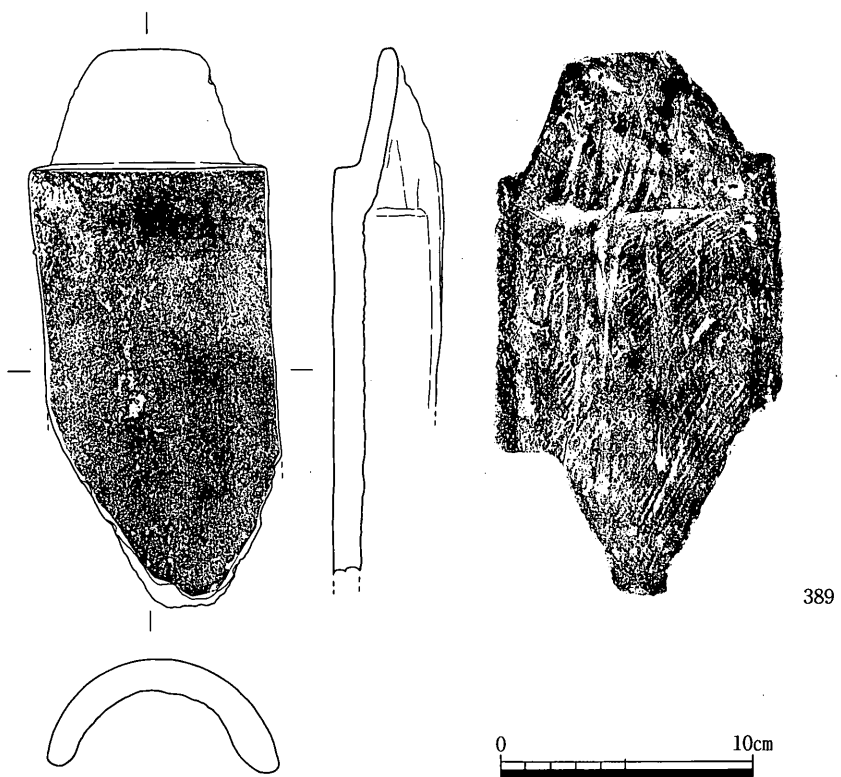
第135图 II区 北西部包含層 出土遺物4 (1/3)



第136图 II区 北西部包含層 出土遺物 5 (1/3)



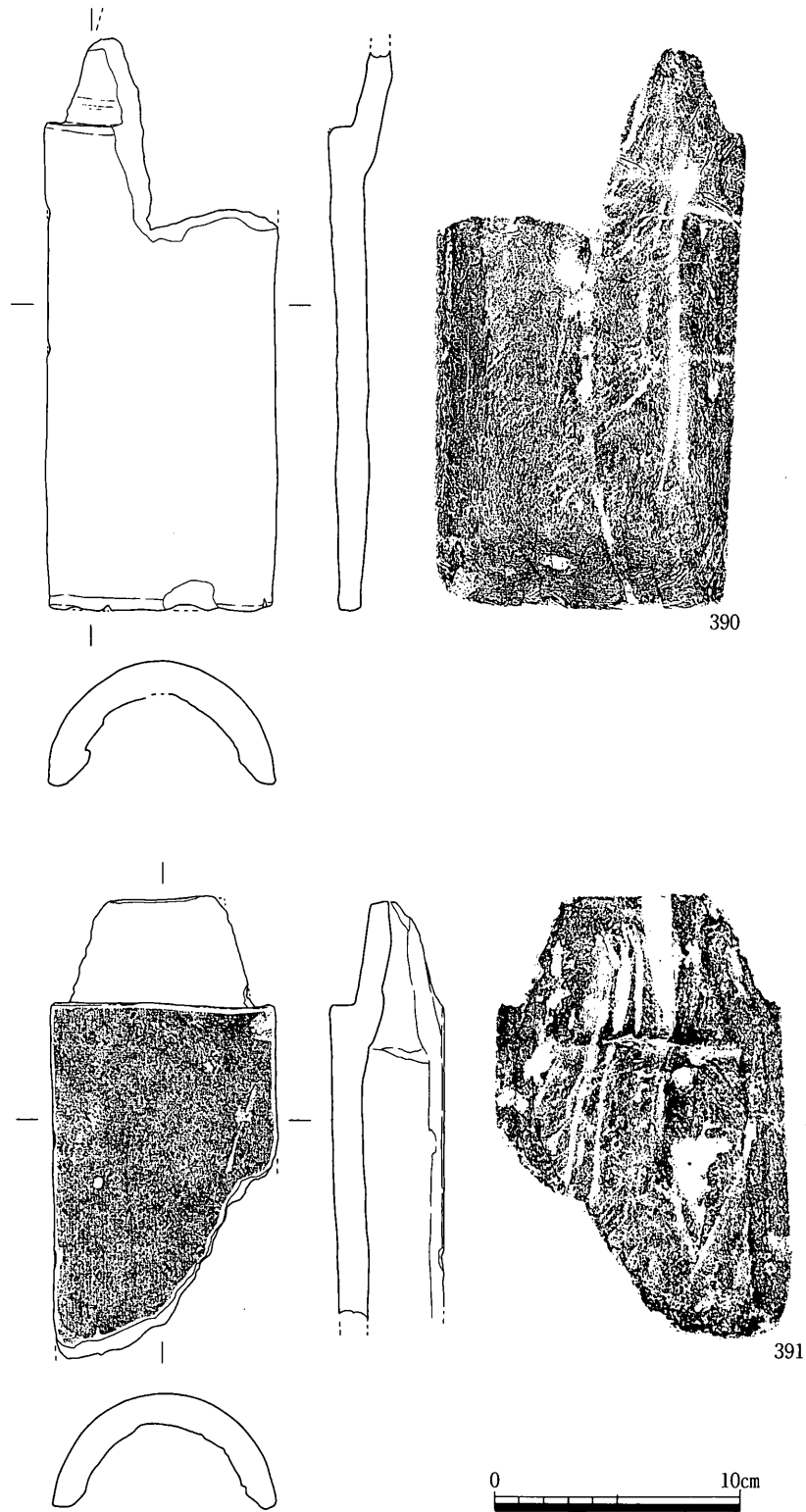
388



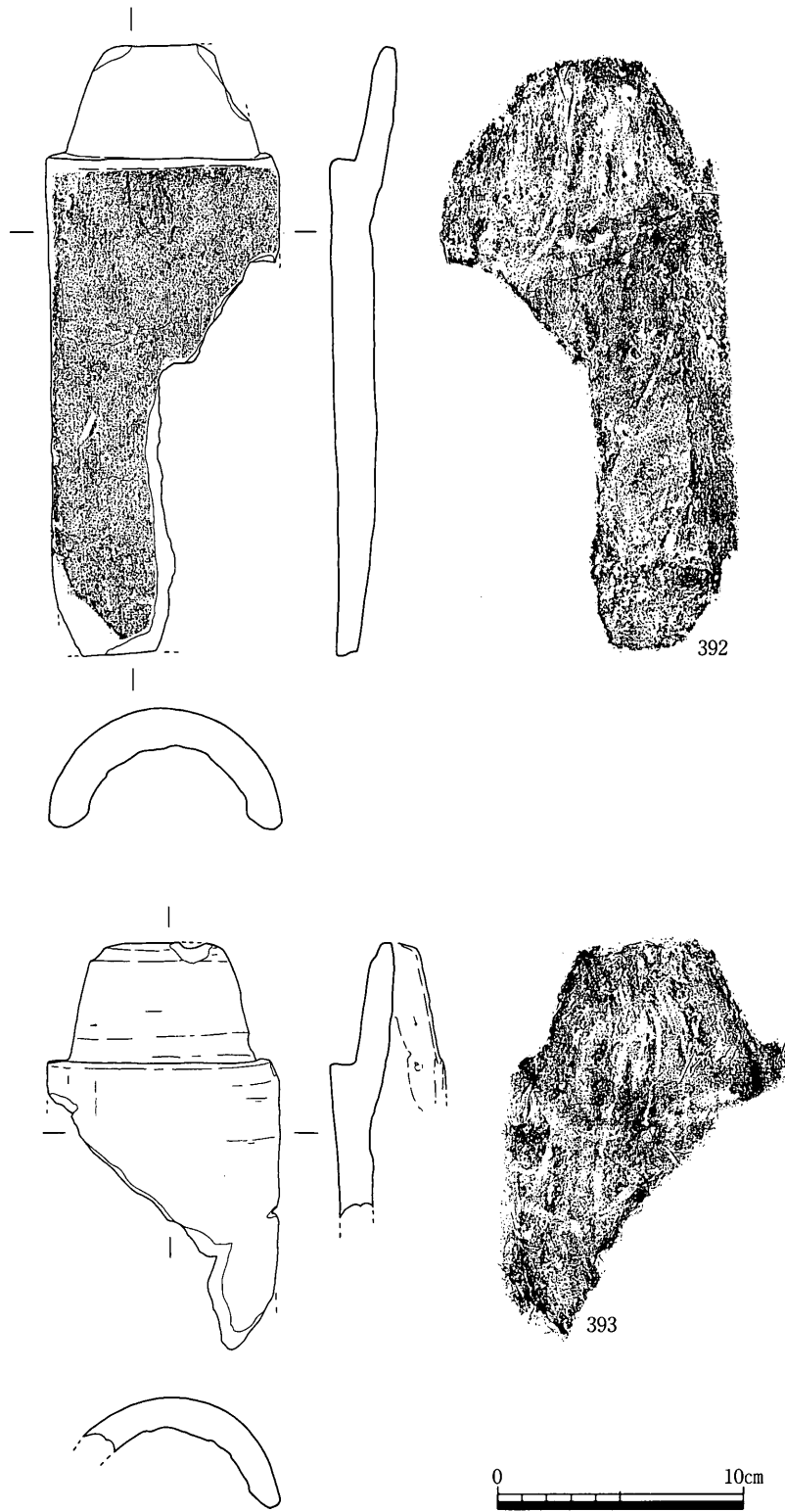
389

0 10cm

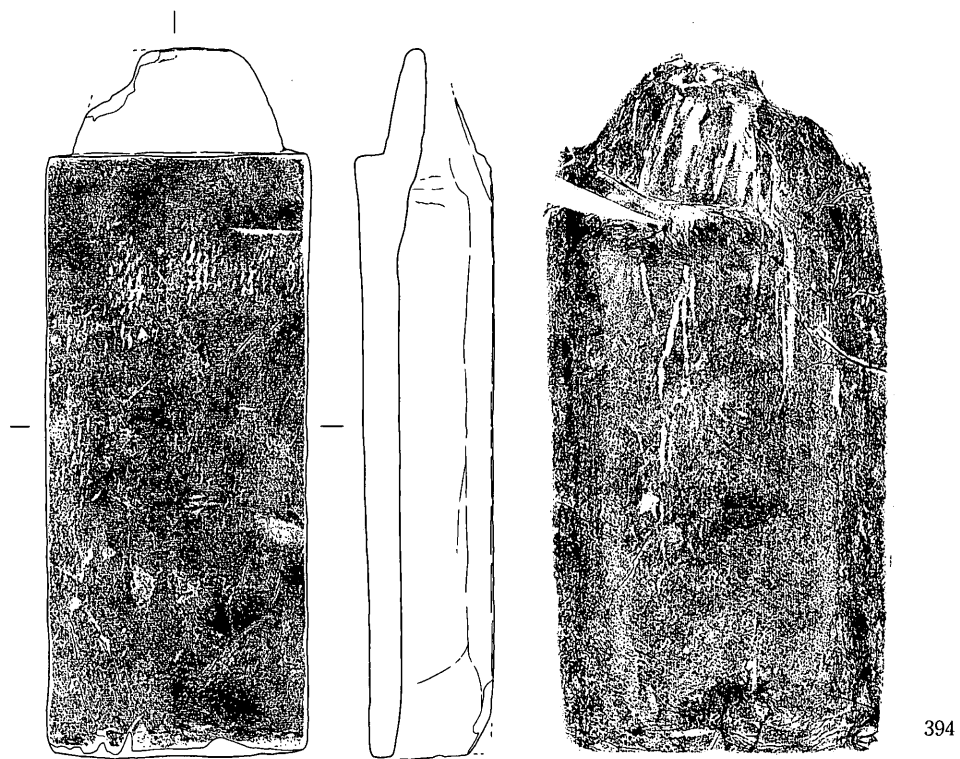
第137图 II区 北西部包含層 出土遺物6 (1/3)



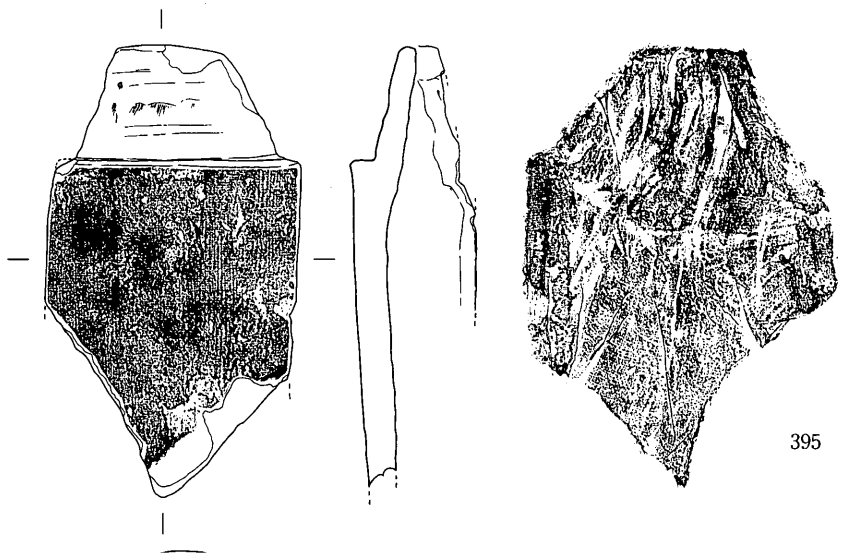
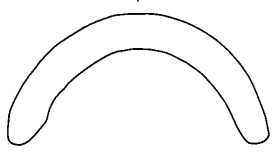
第138图 II区 北西部包含層 出土遺物7 (1/3)



第139图 II区 北西部包含层 出土遗物 8 (1/3)

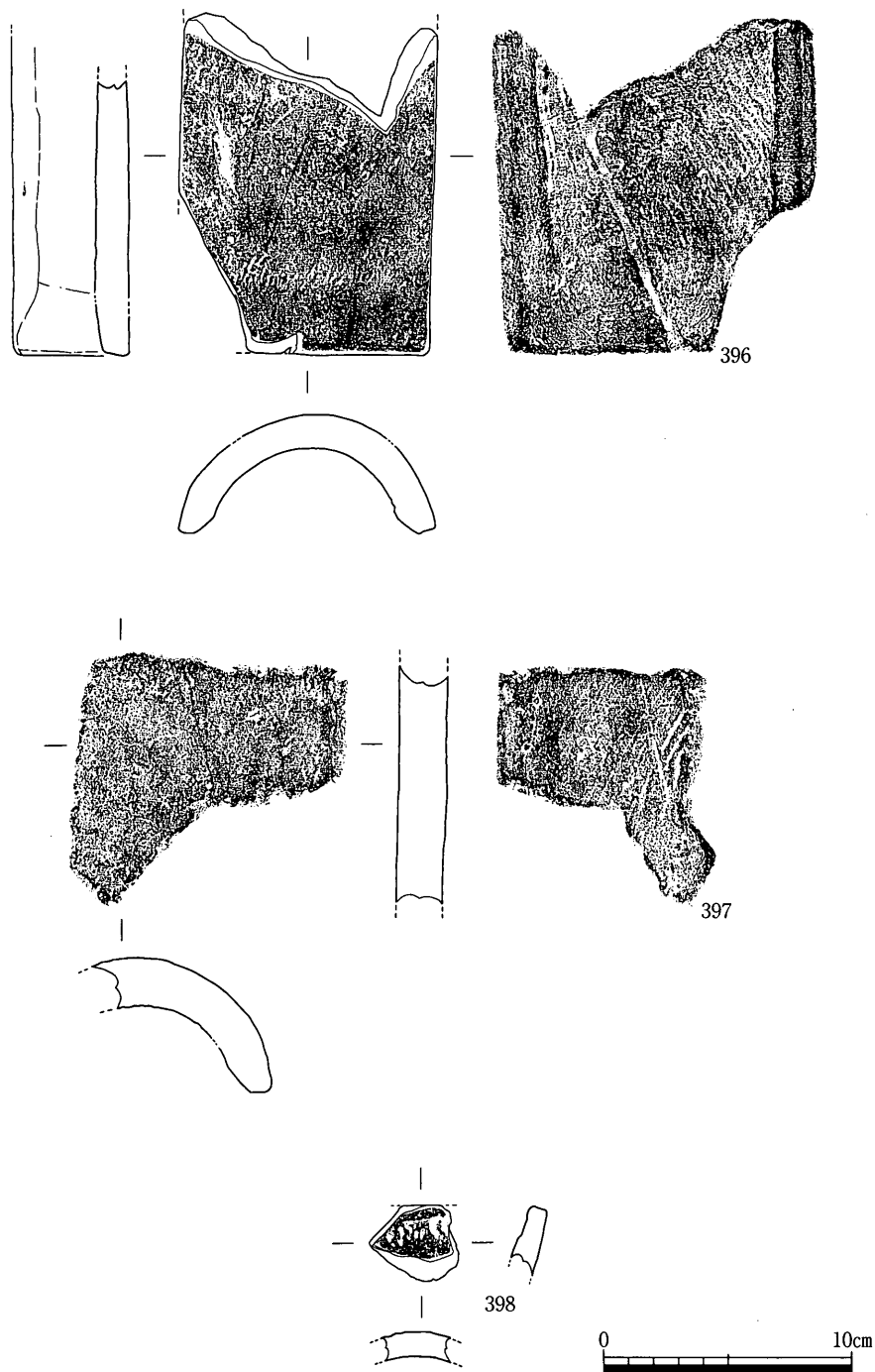


394

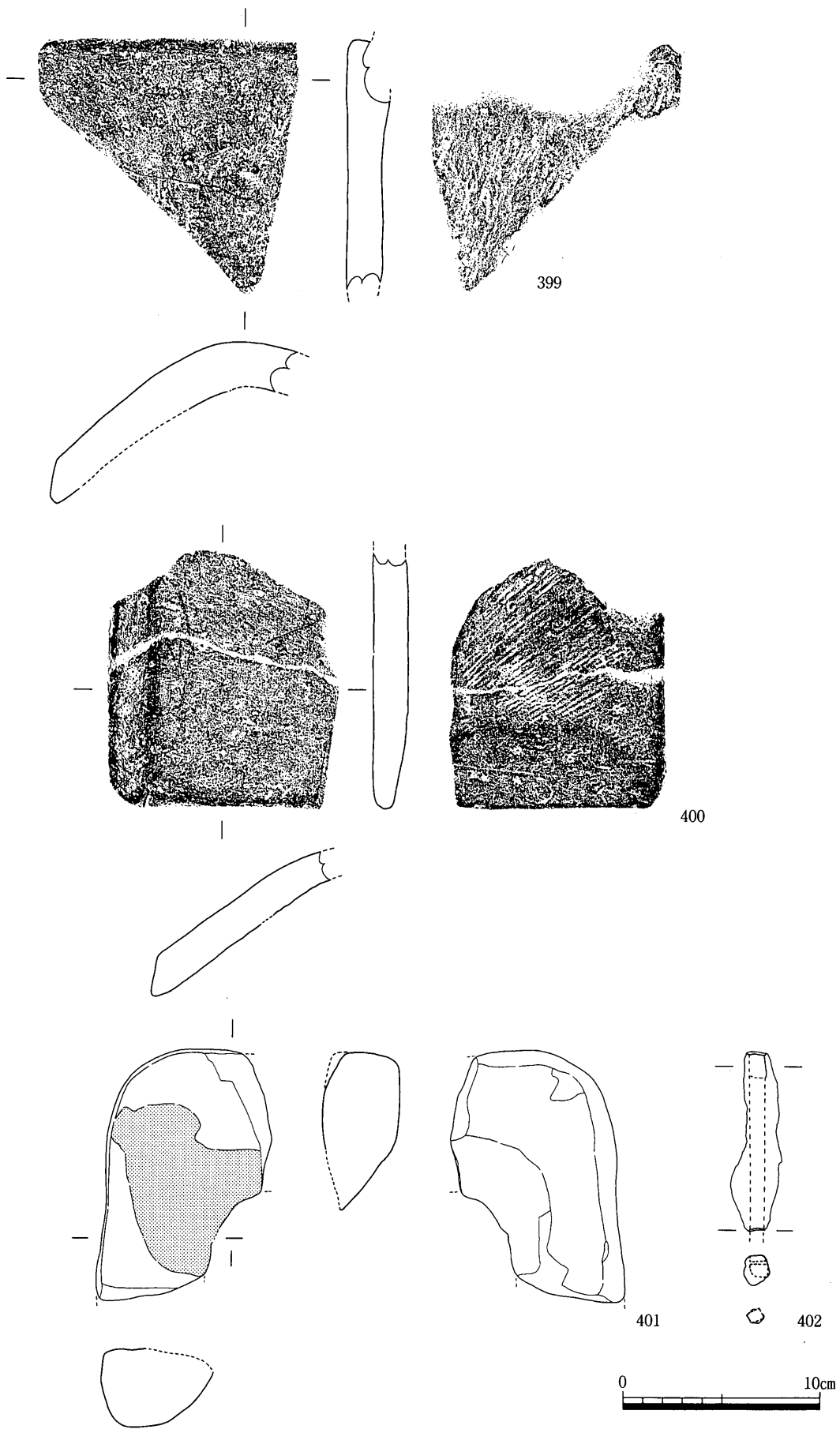


395

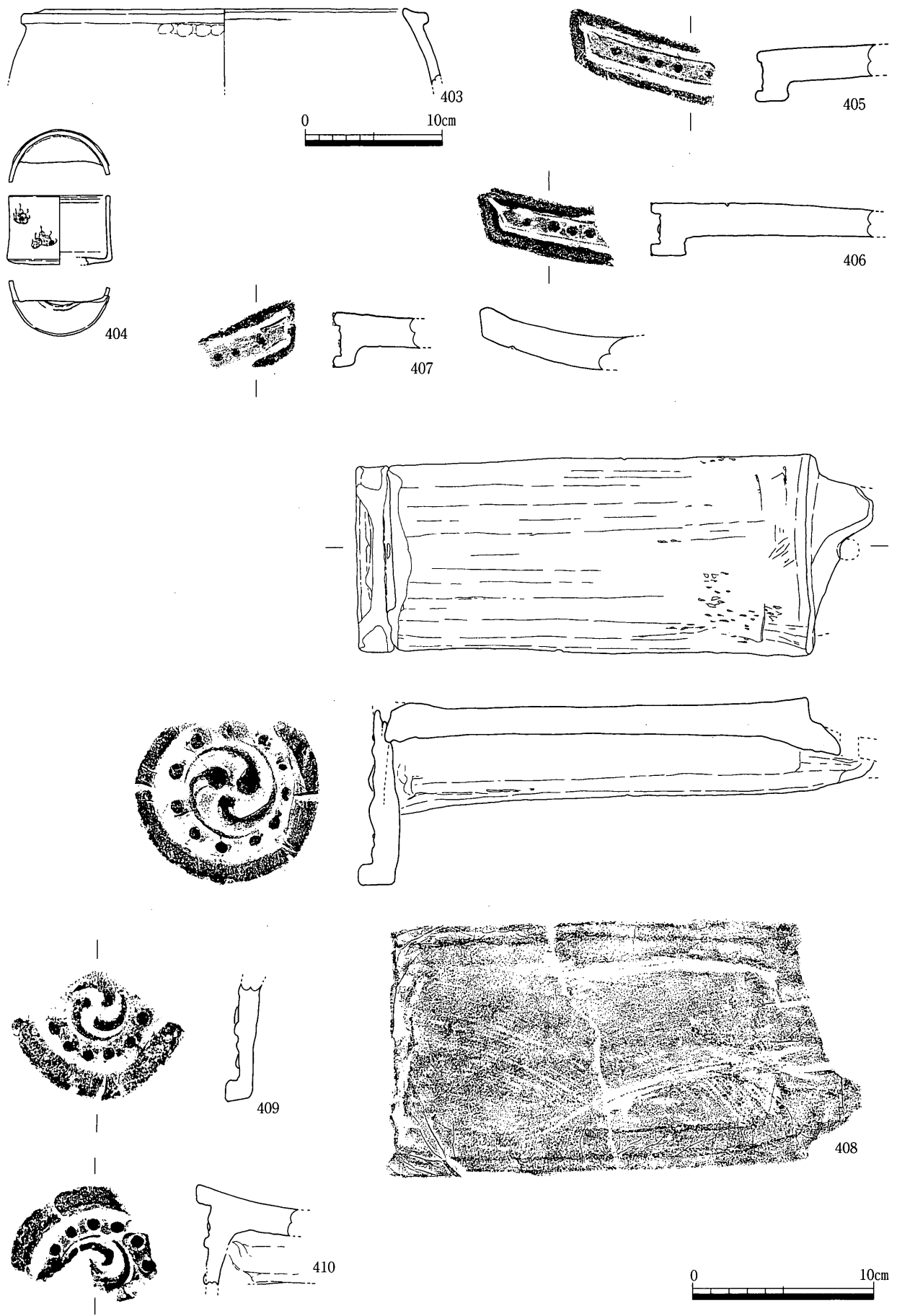
第140图 II区 北西部包含层 出土遗物9 (1/3)



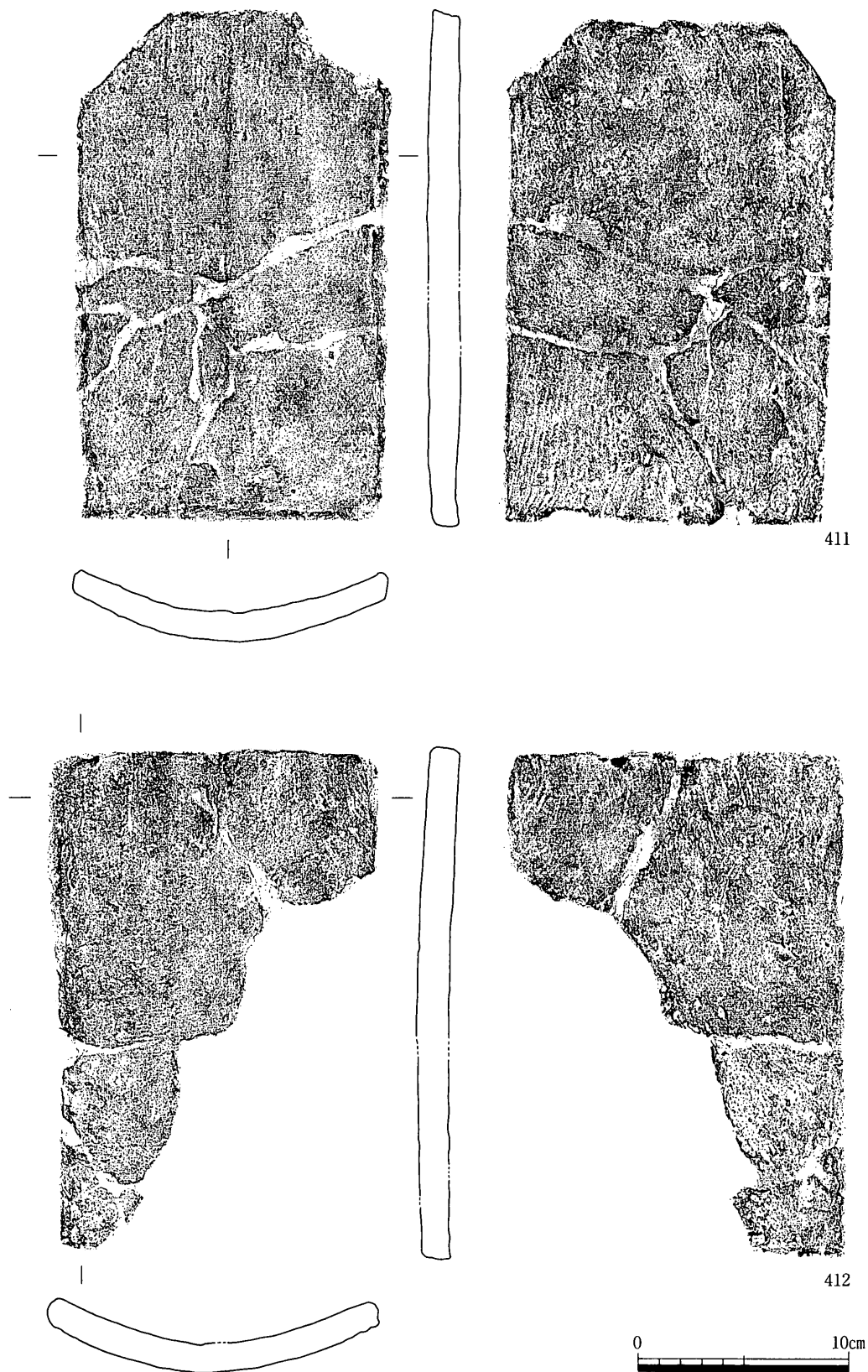
第141图 II区 北西部包含层 出土遗物10 (1/3)



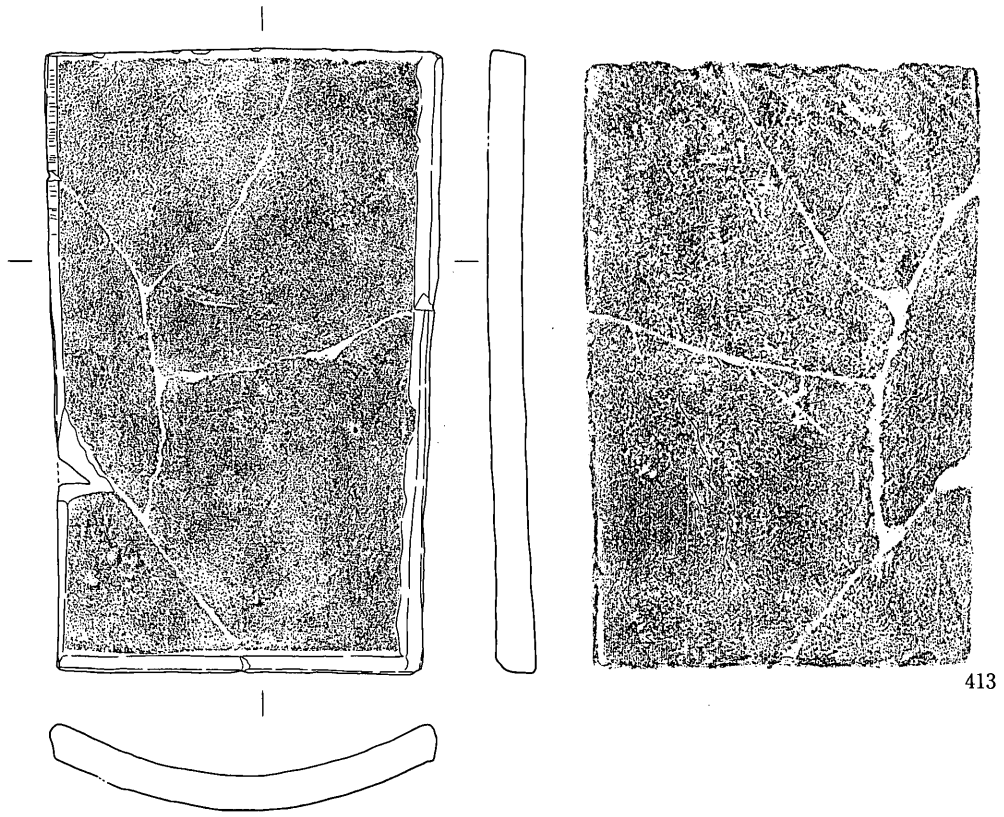
第142图 II区 北西部包含层 出土遗物11 (1/3)



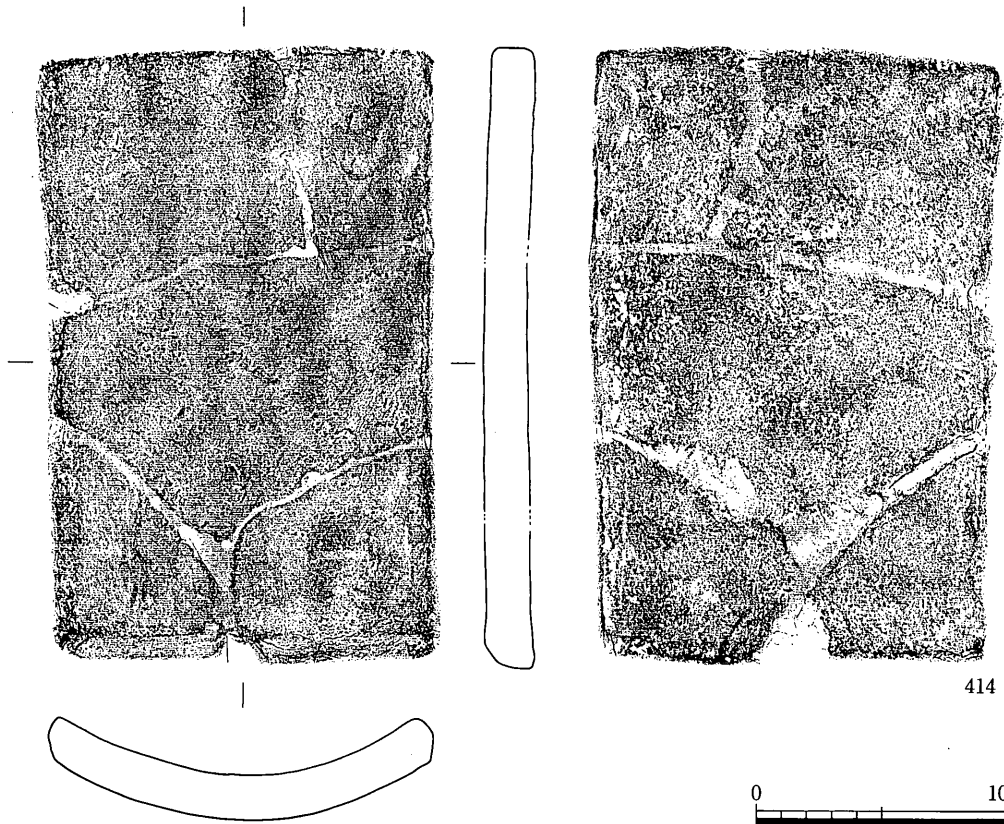
第143图 II区 北西隅流入土 出土遺物1 (1/4·1/3)



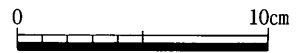
第144图 II区 北西隅流入土 出土遺物 2 (1/3)



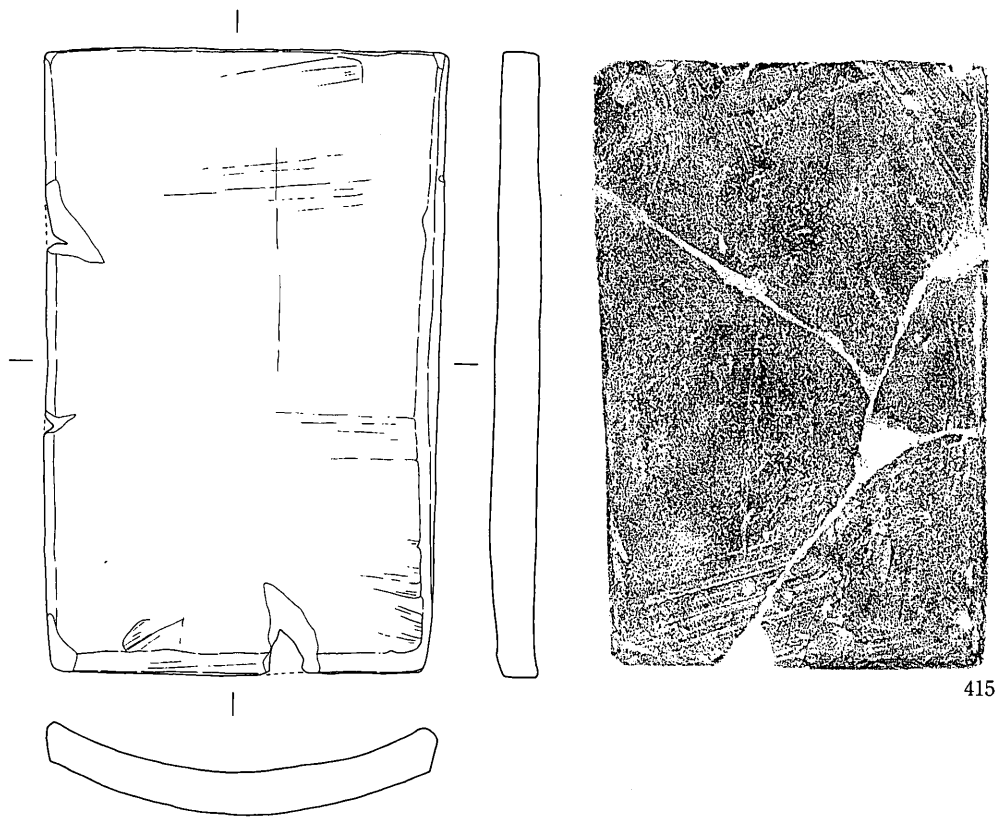
413



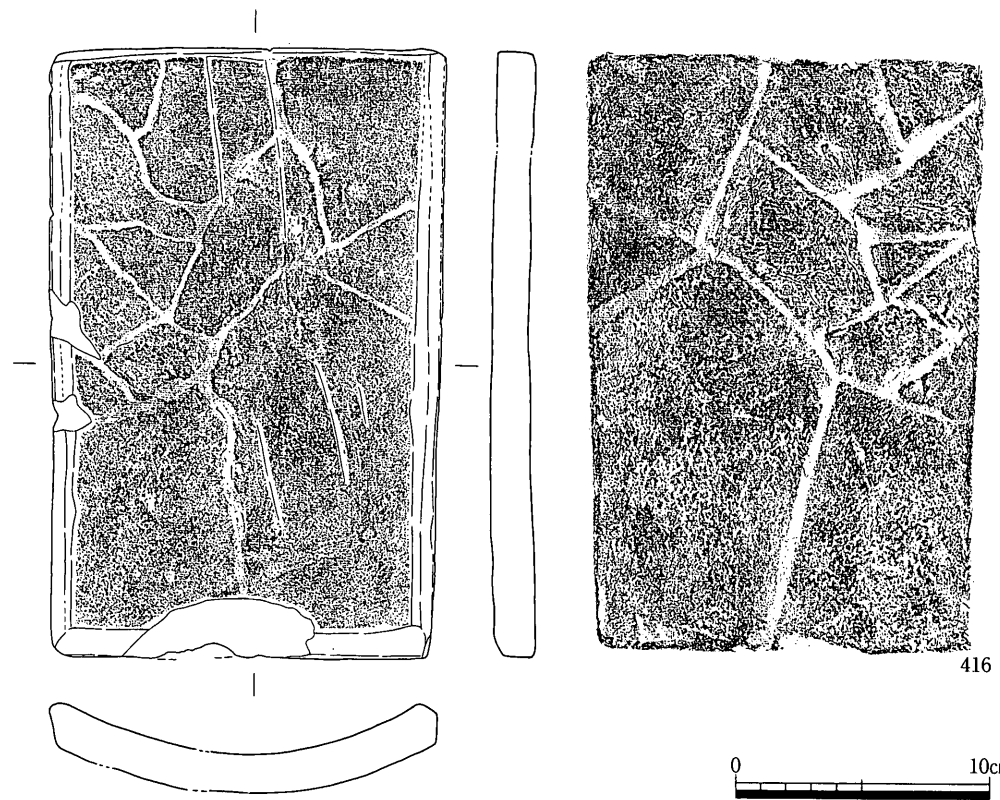
414



第145图 II区 北西隅流入土 出土遺物3 (1/3)



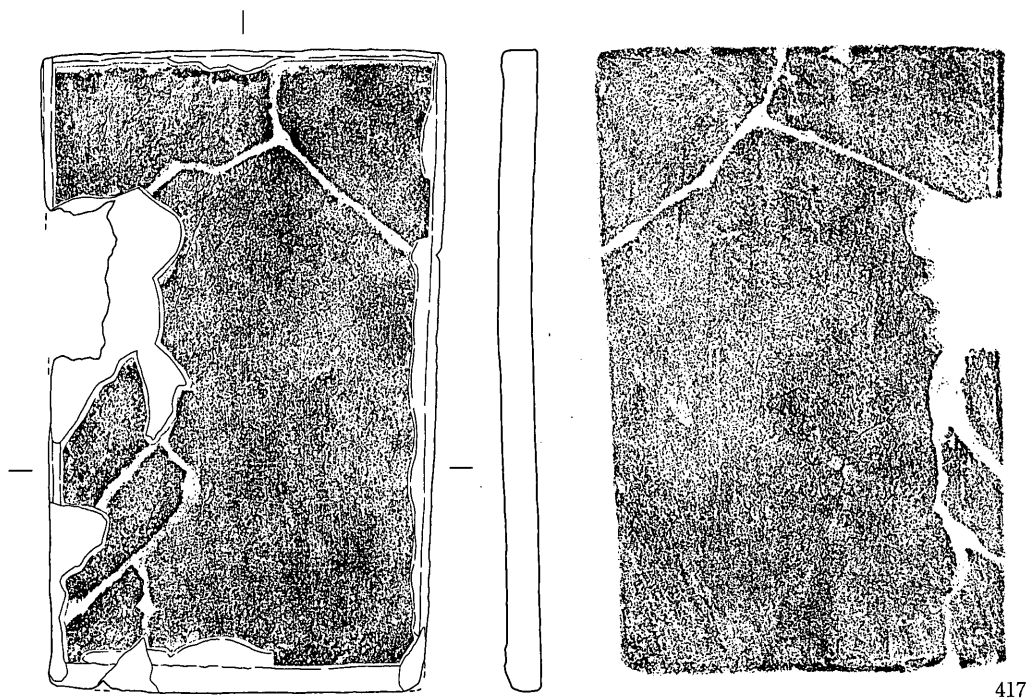
415



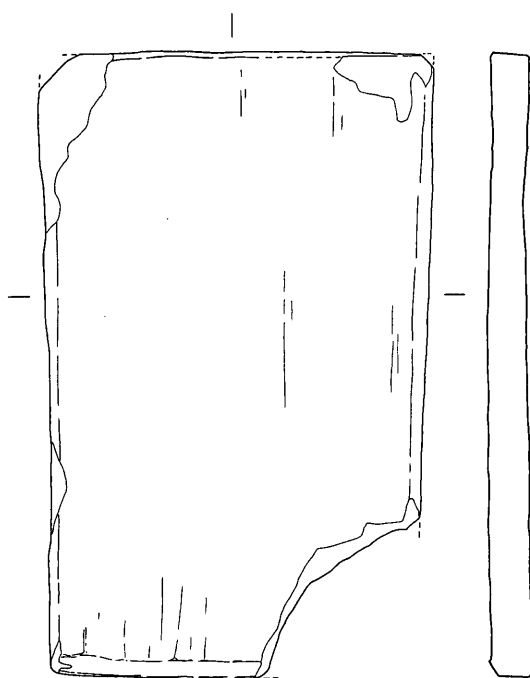
416



第146图 II区 北西隅流入土 出土遺物4 (1/3)



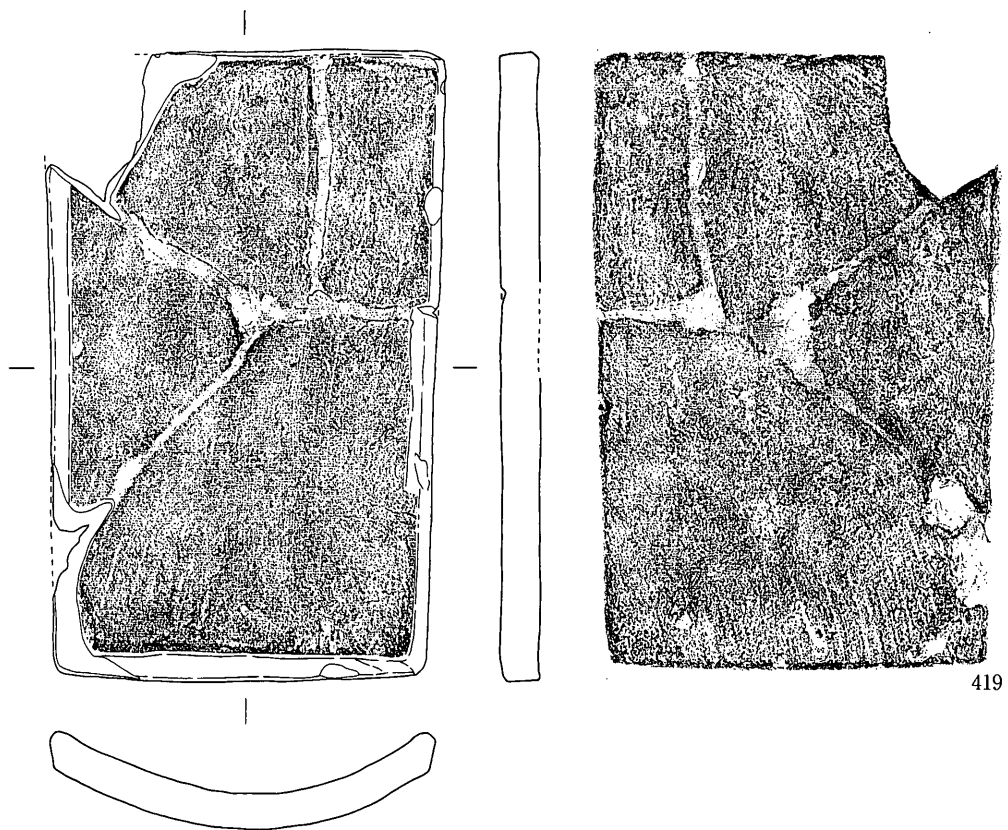
417



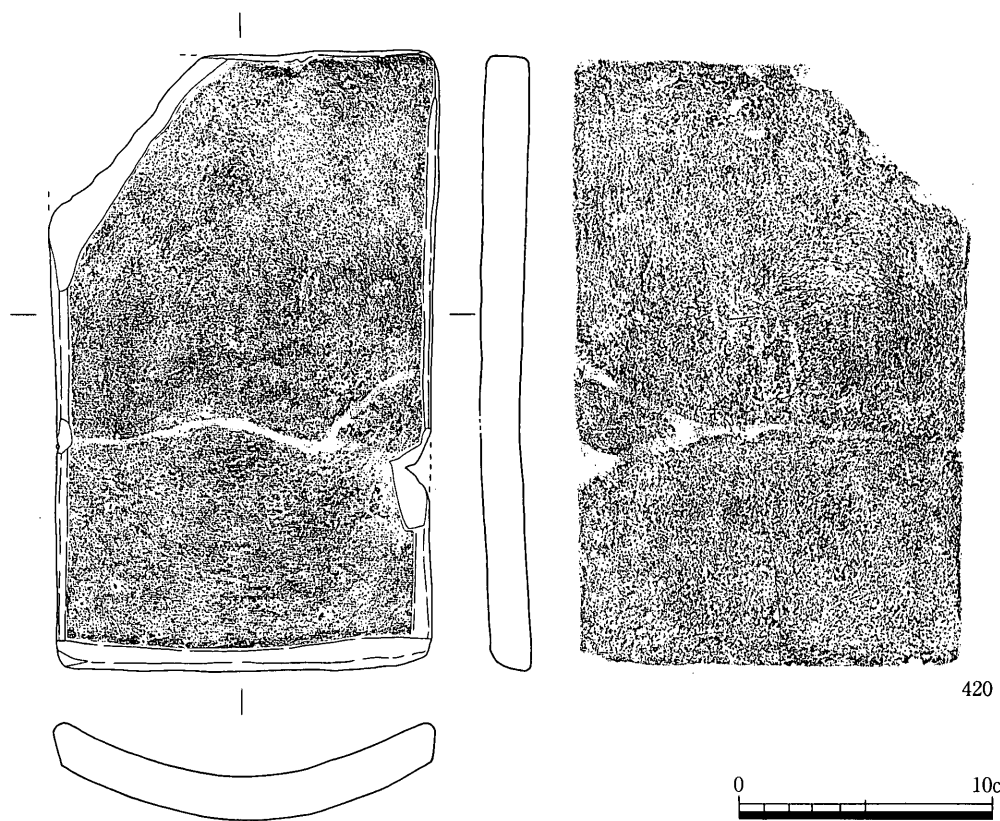
418



第147图 II区 北西隅流入土 出土遺物 5 (1/3)



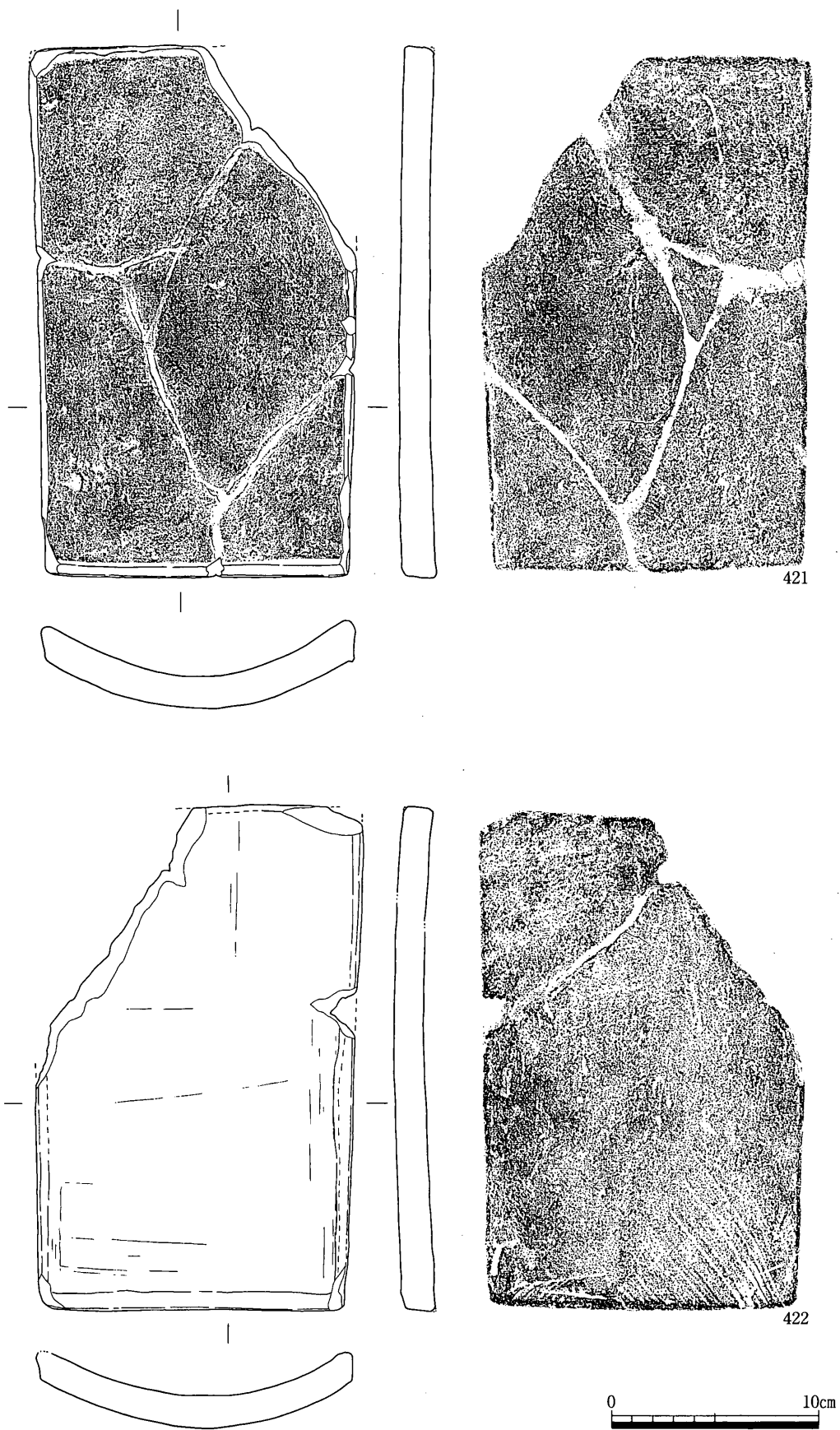
419



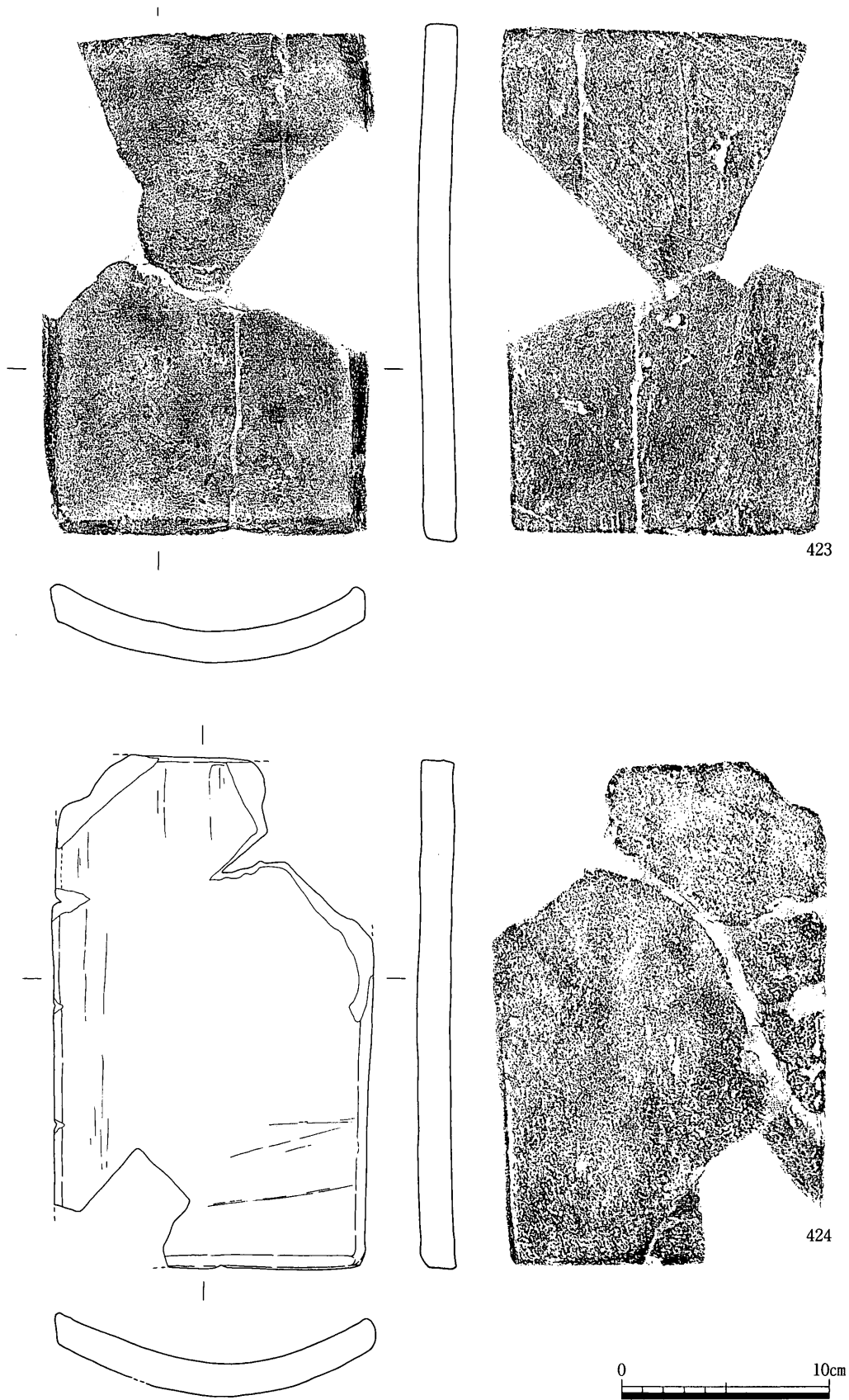
420

0 10cm

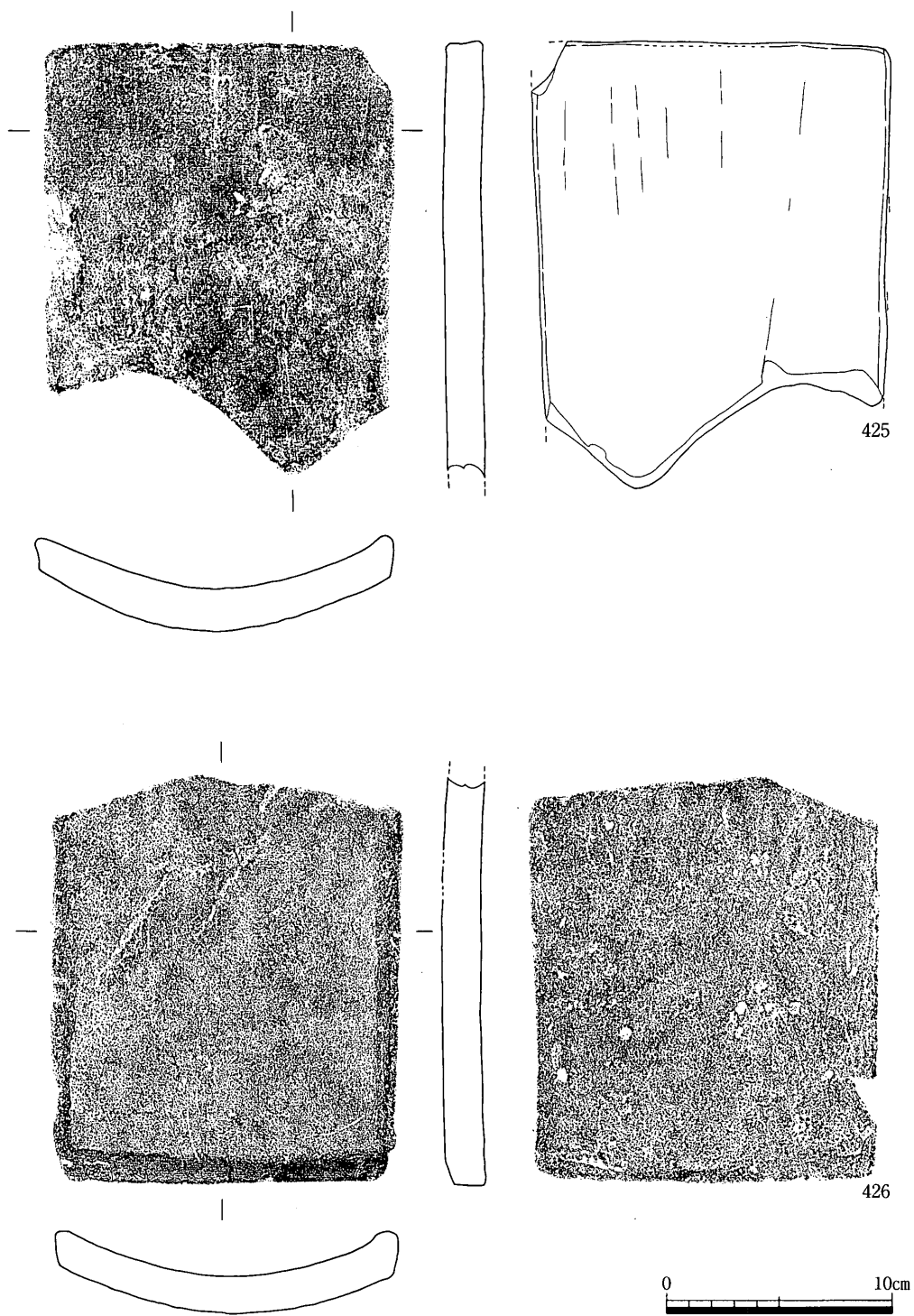
第148图 II区 北西隅流入土 出土遺物6 (1/3)



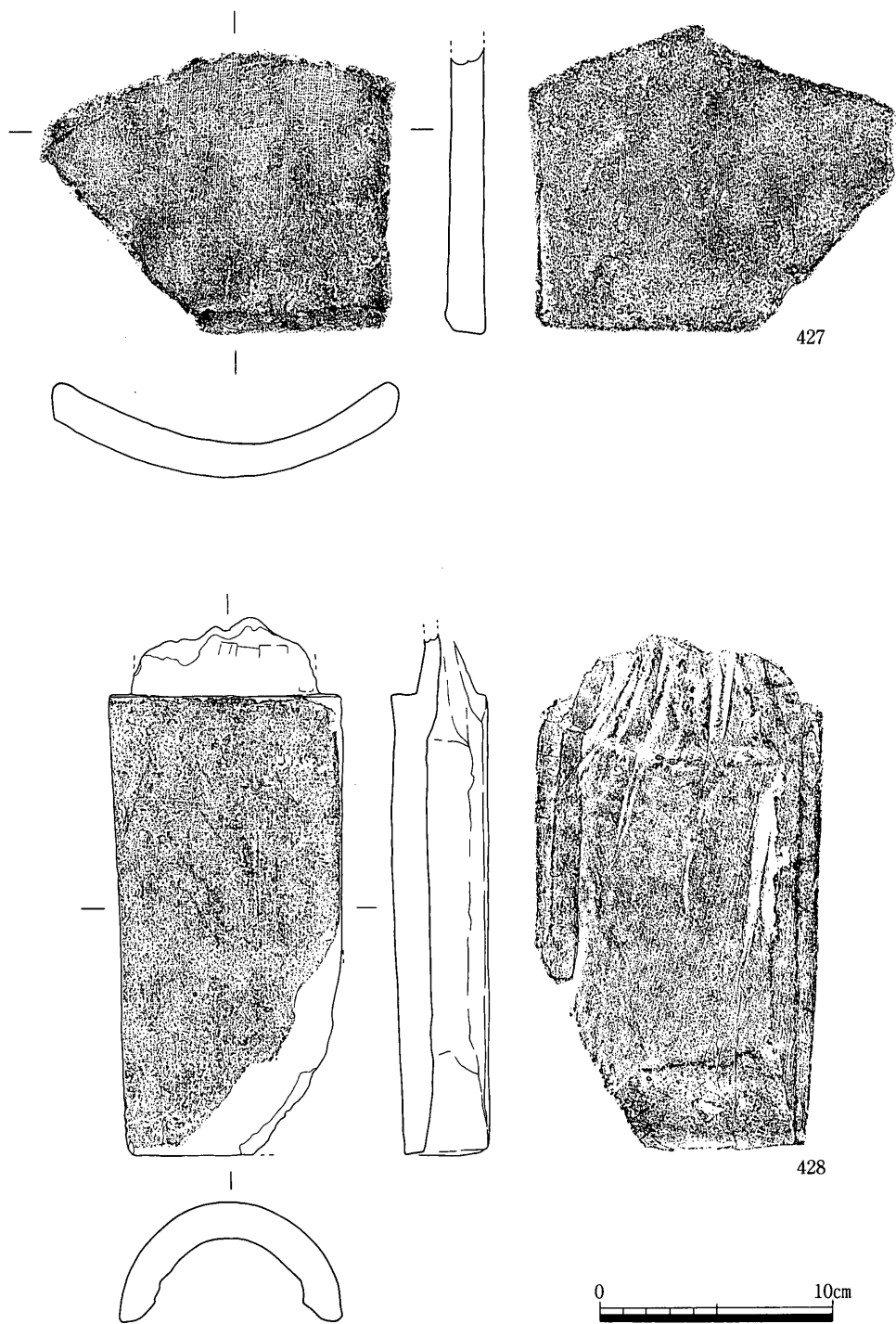
第149图 II区 北西隅流入土 出土遺物7 (1/3)



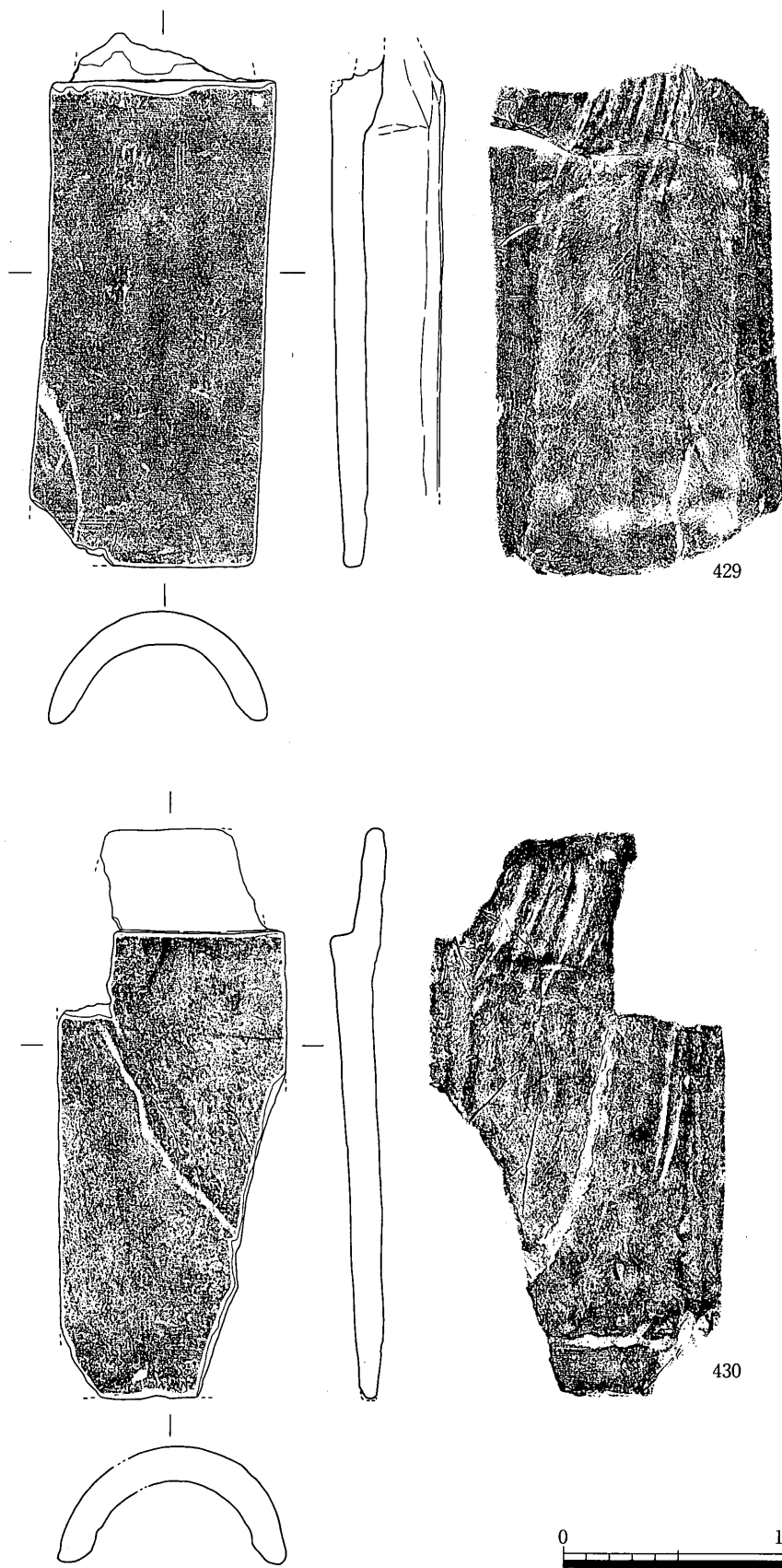
第150图 II区 北西隅流入土 出土遺物 8 (1/3)



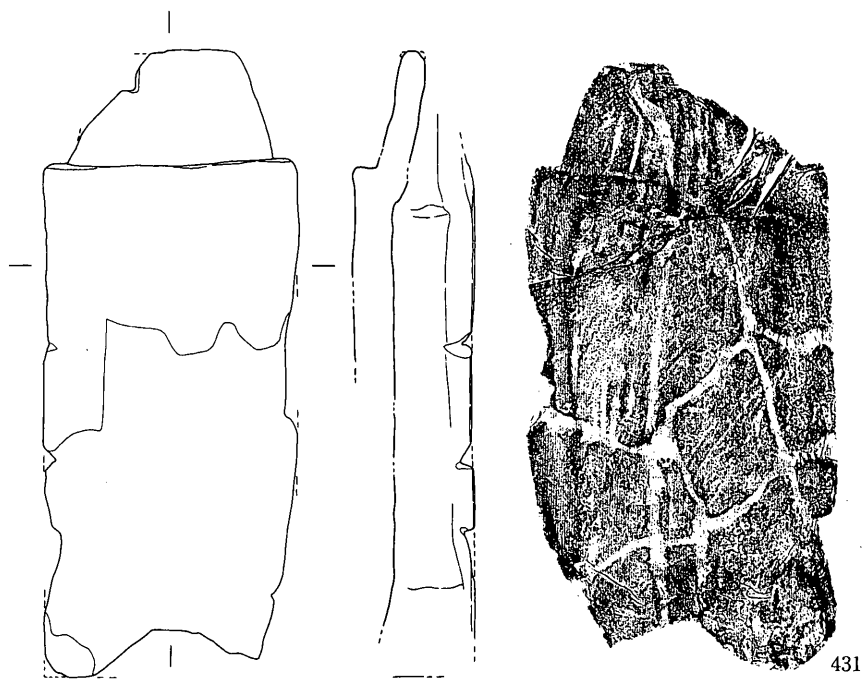
第151图 II区 北西隅流入土 出土遺物9 (1/3)



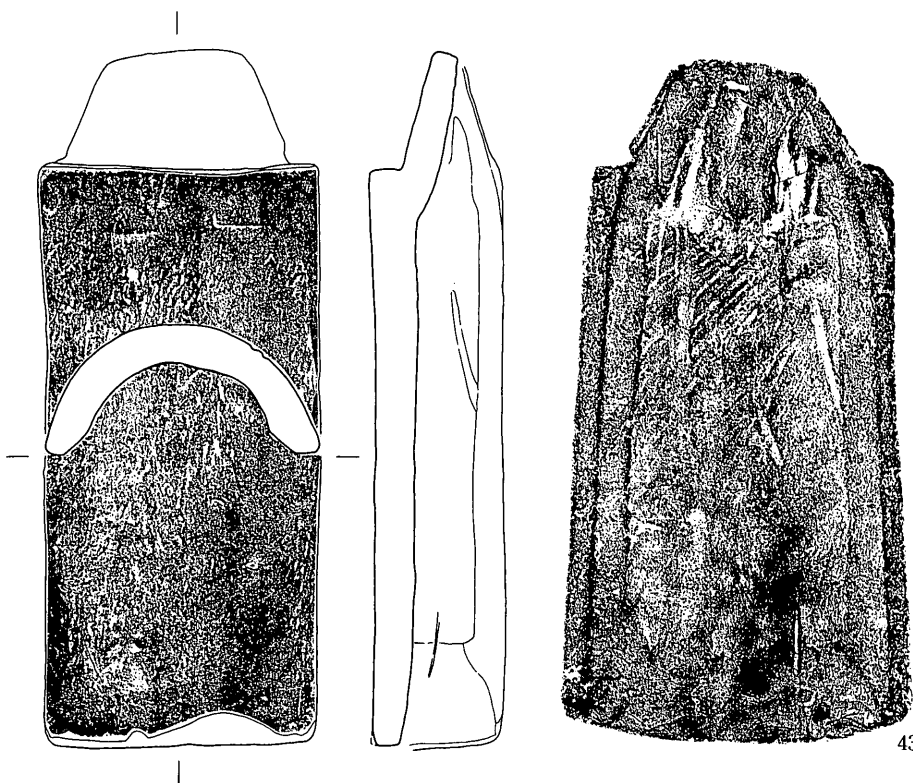
第152图 II区 北西隅流入土 出土遺物10 (1/3)



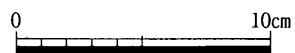
第153图 II区 北西隅流入土 出土遺物11 (1/3)



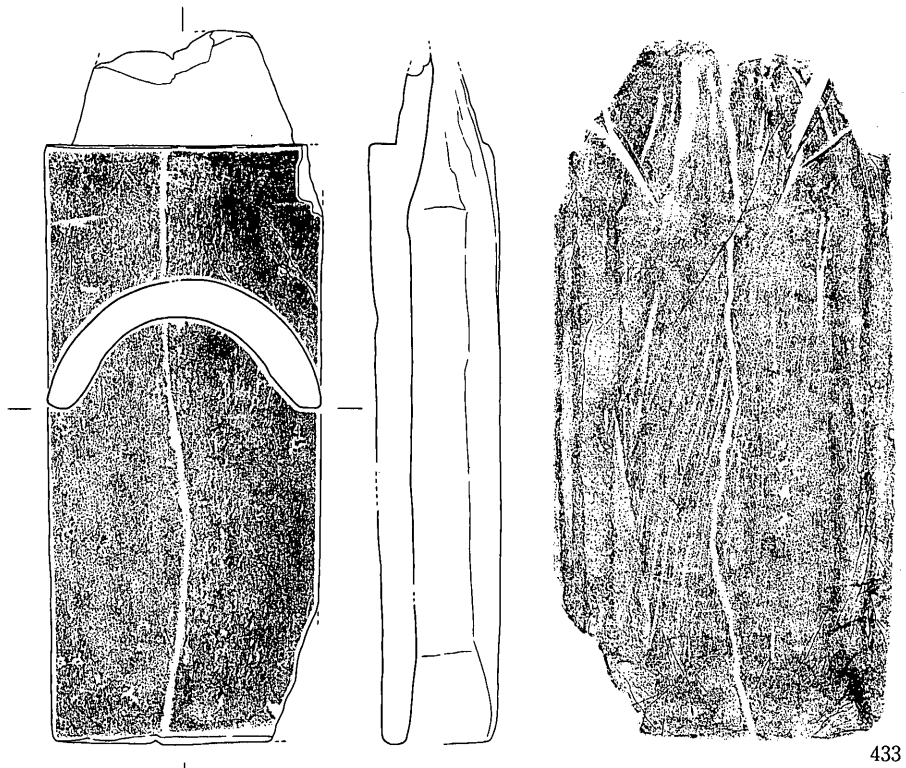
431



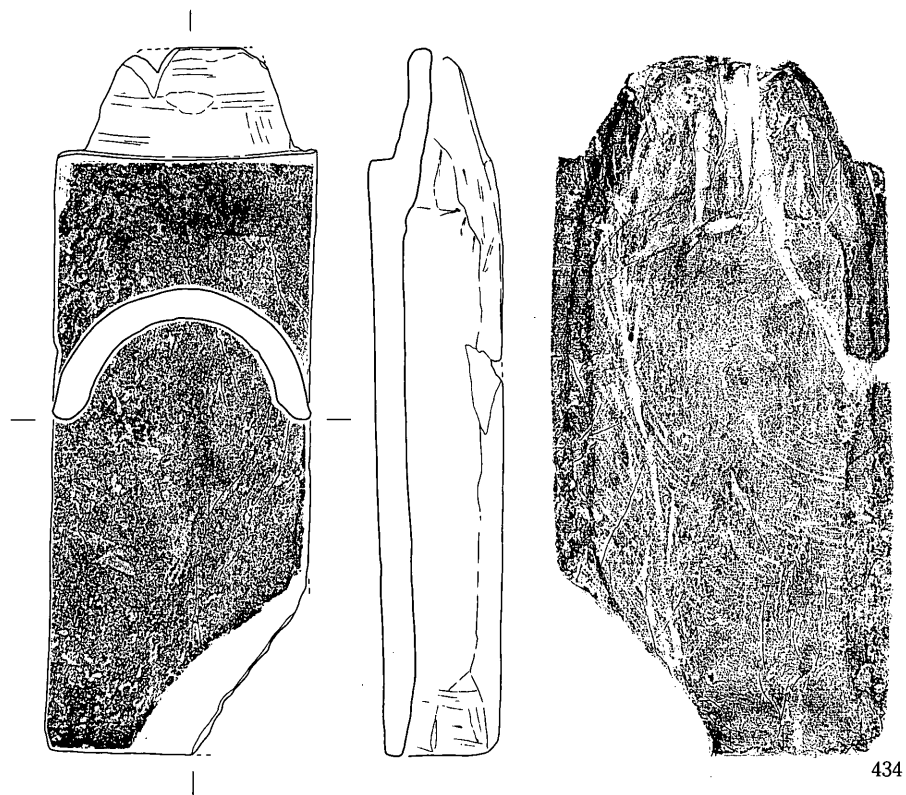
432



第154图 II区 北西隅流入土 出土遺物12 (1/3)



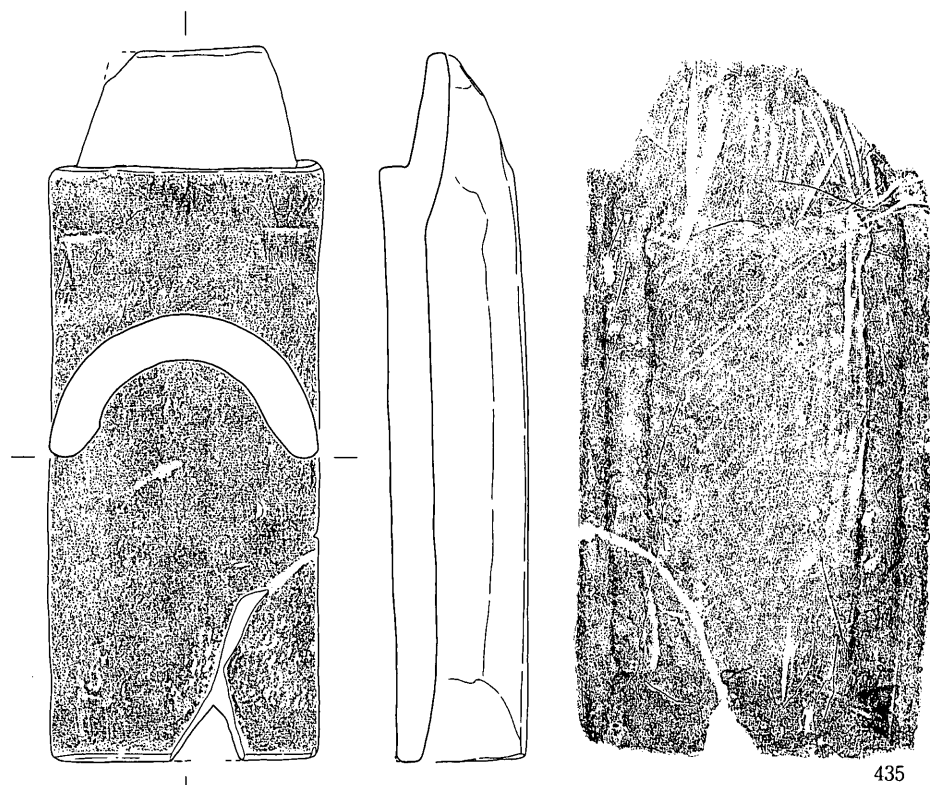
433



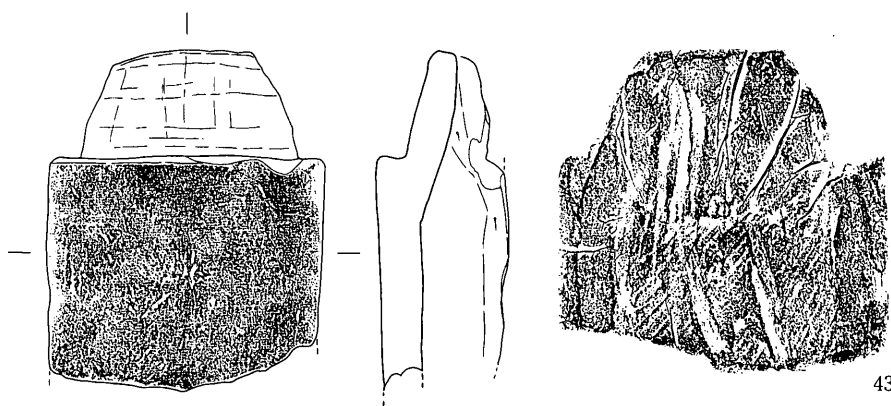
434



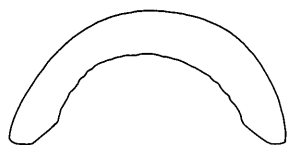
第155图 II区 北西隅流入土 出土遺物13 (1/3)



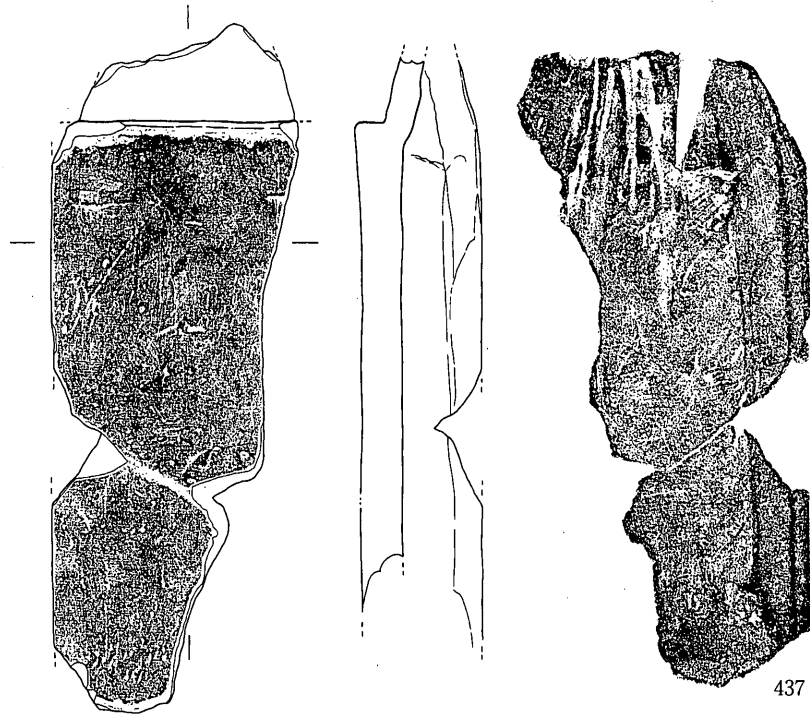
435



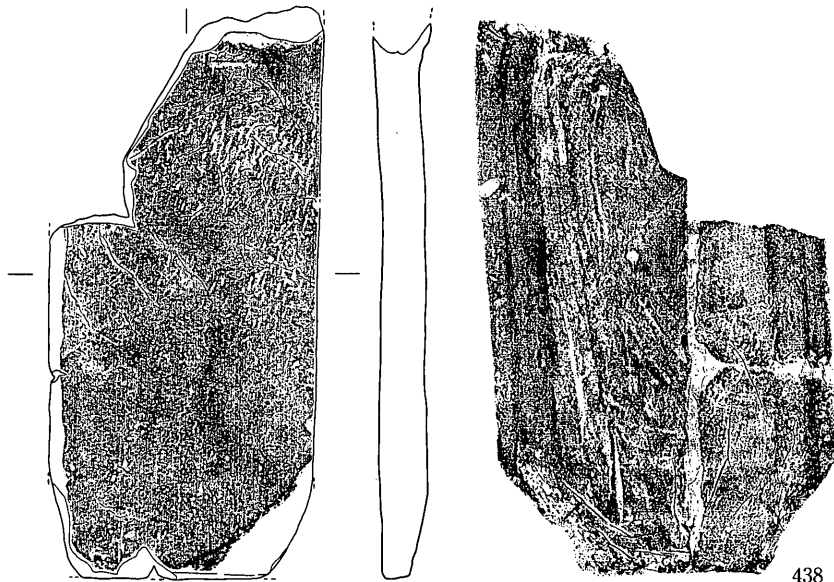
436



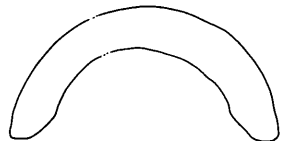
第156图 II区 北西隅流入土 出土遺物14 (1/3)



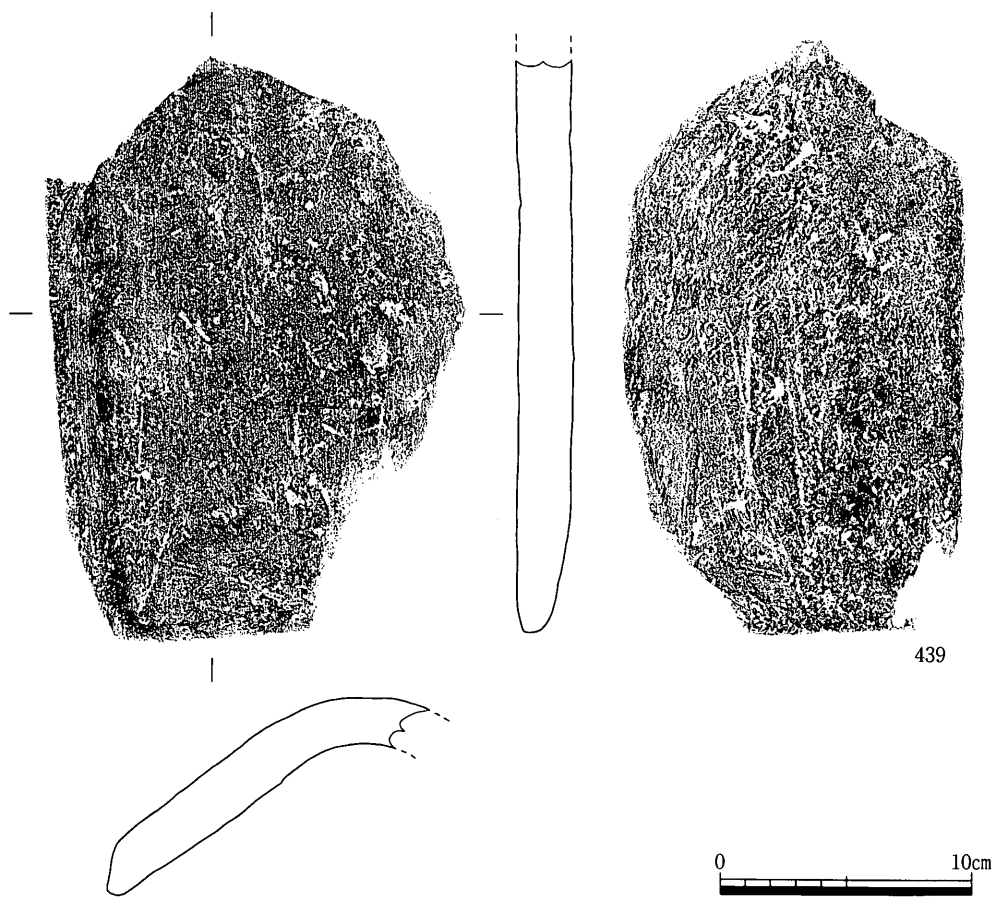
437



438



第157图 II区 北西隅流入土 出土遺物15 (1/3)

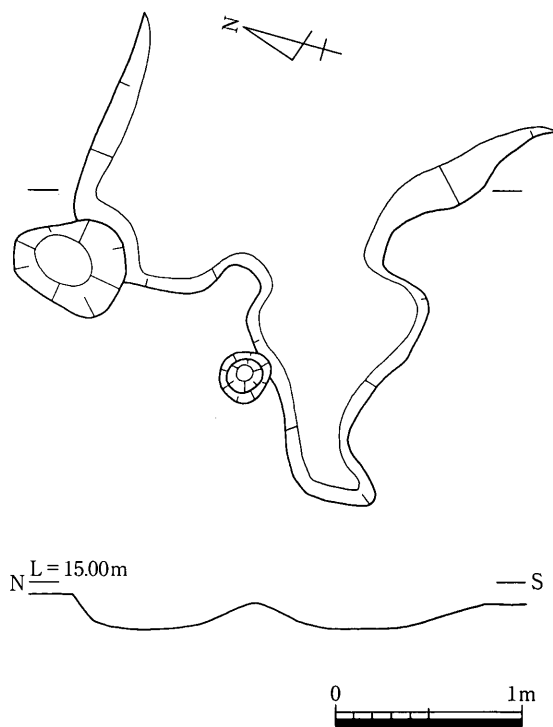


第158図 II区 北西隅流入土 出土遺物16 (1/3)

(9) 性格不明遺構

SX01 (第159図)

調査区北部で検出した性格不明遺構である。平面形は方形の土坑の西側に溝が取り付く形である。溝部がSB01に切られる。底場は中央に隆起がある。規模は土坑部が長径2.4m以上、短径2.0m以上、深さ28cmを測る。出土遺物はない。遺構の時期はSB01に切られることから14世紀後半以前と考えられる。



第159図 II区SX01 平・断面図 (1/40)

SX02 (第160~167図)

丘陵斜面中腹で検出した神社跡と考えられる平坦面である。斜面をカットし、平坦面を形成している。平坦面の規模は南北9.6m以上、東西2.4m以上を測る。南側では花崗岩盤でカットされない端部が検出された。東部は流失し、本来の状況が不明である。だが、南側の斜面の傾斜状況を見ると斜面上に盛り土し、平坦面を形成していたことが推定される。北側は調査区外に平坦面が延びる。西側は調査区内で花崗岩盤に傾斜をつけてカットしている。礎石列や雨落ち溝がある平坦面上に小さい平坦面が形成されており、この部分で建物の据え石2点、礎石と同じ石材1点が出土した。このためさらに平坦面が広がる可能性を考え、調査終了後西側に拡張したが、平坦面は途切れ、カットされた斜面が続いていた。

平坦面では20~36cmの礫が4つ直線的に並び、礎石柱列を構成する。礫は地山上に堆積する浅黄色微砂混粘質土にほぼ埋もれている。この土層は極めてかたくしまっており、整地土と考えられる。礫間の距離は南側2間では1.5m、北側1間では1.8mあり、計4.8mを測る。これより約50cm西側に雨落ち溝(SX02内SD01)と考えられる溝が平坦面の西端に礎石列と主軸方向を一致させて存在する。南北長約5m、幅約50cm、深さ約15cmを測る。礎石列南端の柱間と雨落ち溝の間のピットより銅製品(484)が折り曲げられた状態で出土している。位置的に軒先部への廃棄と考えられる。先述の通り、雨落ち溝より西側は一段高くなっており、据え石が小さな平坦面上および土坑内より1点ずつ出土した(486)。これらは香川県豊島で産出される豊島石を用いている。

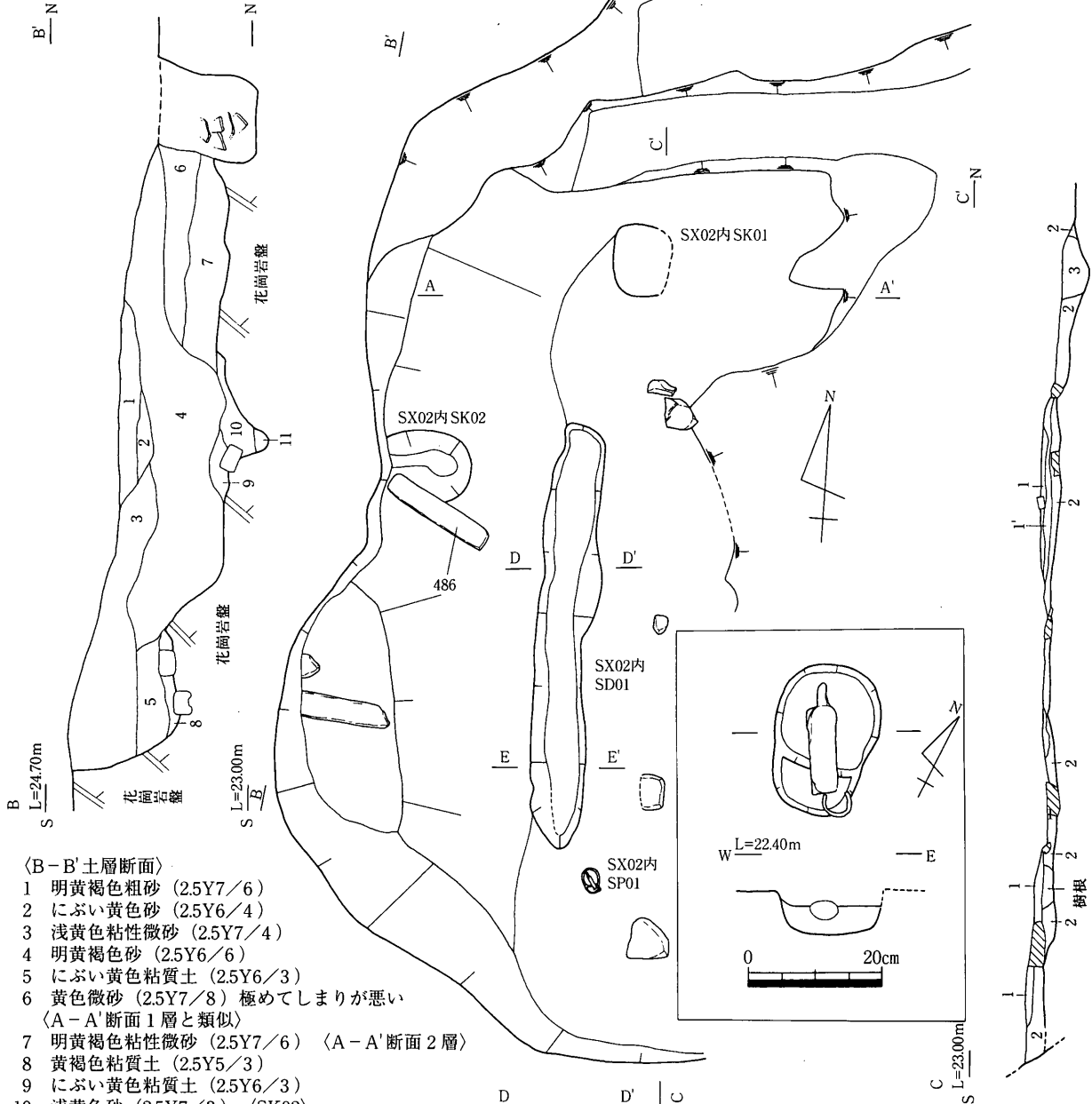
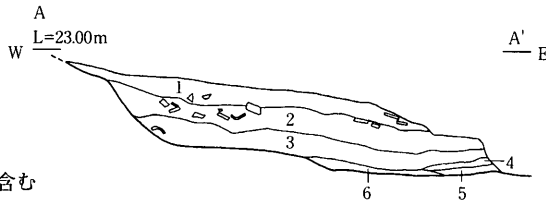
また、平坦面の北側では瓦がまとまって出土した瓦溜まりがある。出土層位はA-A'ライン2層であり、3層が瓦溜まりに対する遺構面であると考えられる。ただ、この面では他に遺構を確認できなかった。瓦溜まりの南端では2段に積み重ね、瓦の側縁を直線的に揃えている部分がある。この北側では瓦がほぼ同レベルで面的に広がっている。面を揃え、積み重ねた部分があることから判断すると建物に葺いていた瓦を除去し、廃棄したというより使用に備えて置いていたものと考えられる。これは瓦の多くで表面の炭素がきれいに残存していたことも示唆する。

出土遺物には瀬戸美濃磁器紅猪口(440)、小椀(441)、三田焼角皿(442)、肥前系磁器端反椀(443、445)、瀬戸美濃磁器端反椀(444)、磁器神酒徳利(446)、京・信楽系陶器灯明皿(447)、大谷焼灯明受け皿(448)、土師質土器把手付鉢(449)、軟質陶器行平鍋(450)、土瓶?(451)、瓦質土器羽釜(452~456)、土師質土器土瓶(457)、陶器土瓶蓋(458)、堺・明石系すり鉢(459)、土師質土器甕(460)、軒平瓦(461~468)、軒丸瓦(469~478)、丸瓦(479)、軒平瓦Ⅲ類(480)、鉄鈴(481)、鉄製錠(482)、鉄釘(483)、銅製品(484)、寛永通宝(485)などがある。441は口縁端部内外面に口錆の釉を施す。19世紀初~幕末と考えられる。442は内面に陽刻により「天」の字と文様を施す。幕末~明治と考えられる。443~445はコバルト呉須で順に草花文、樹木文、格子文を絵付けする。明治以降と考えられる。446は高台内外面ともに施釉しない。明治以降と考えられる。447は仕切りをもつ。19世紀前半から幕末と考えられる。448は底部を糸切りする。451は胎土中に金雲母を多量に含む。452、455、456は型押しによる文様が外面の鏝上方に見られる。455は松竹梅文である。456は外面にキラコが残る。453は鏝上に「ハシ」の刻印をもつ。452~455は明治から19世紀末と考えられる。457は軟質施釉陶器の模倣品である。

461~468は半裁菊花文をもち、同文である。469~478は巴文である。巴の大小はさまざまであるが、いずれも右まきである。479は玉縁が短く、側縁を面取りする。凹面にはコビキBと内叩きが見られ

〈A-A'土層断面〉

- 1 浅黄色微砂 (2.5Y7/4) 極めてしまりが悪い。多量の瓦片を含む
- 2 明黄褐色粘性微砂 (2.5Y7/6) 瓦だまりなど極めて多量の瓦片を含む
- 3 明黄褐色粘性砂粘土 (2.5Y6/6) 少量の瓦片や土器を含む。しまり悪い
- 4 浅黄色砂 (2.5Y7/4) 土器や瓦片を少量含む
- 5 明黄褐色砂粘土 (2.5Y6/6) 焼土塊や炭を含む。6層の流土か?
- 6 浅黄色微砂混粘質土 (2.5Y7/3) 極めて固くしまる〈整地土〉



〈B-B'土層断面〉

- 1 明黄褐色粗砂 (2.5Y7/6)
 - 2 にぶい黄色砂 (2.5Y6/4)
 - 3 浅黄色粘性微砂 (2.5Y7/4)
 - 4 明黄褐色砂 (2.5Y6/6)
 - 5 にぶい黄色粘質土 (2.5Y6/3)
 - 6 黄色微砂 (2.5Y7/8) 極めてしまりが悪い
- 〈A-A'断面1層と類似〉
- 7 明黄褐色粘性微砂 (2.5Y7/6) 〈A-A'断面2層〉
 - 8 黄褐色粘質土 (2.5Y5/3)
 - 9 にぶい黄色粘質土 (2.5Y6/3)
 - 10 浅黄色砂 (2.5Y7/3) 〈SK02〉
 - 11 にぶい黄色粘質土 (2.5Y6/3) 〈SK02〉

〈D-D'・E-E'土層断面〉

- 1 暗灰黄色砂質土 (2.5Y4/2) カarbon含む

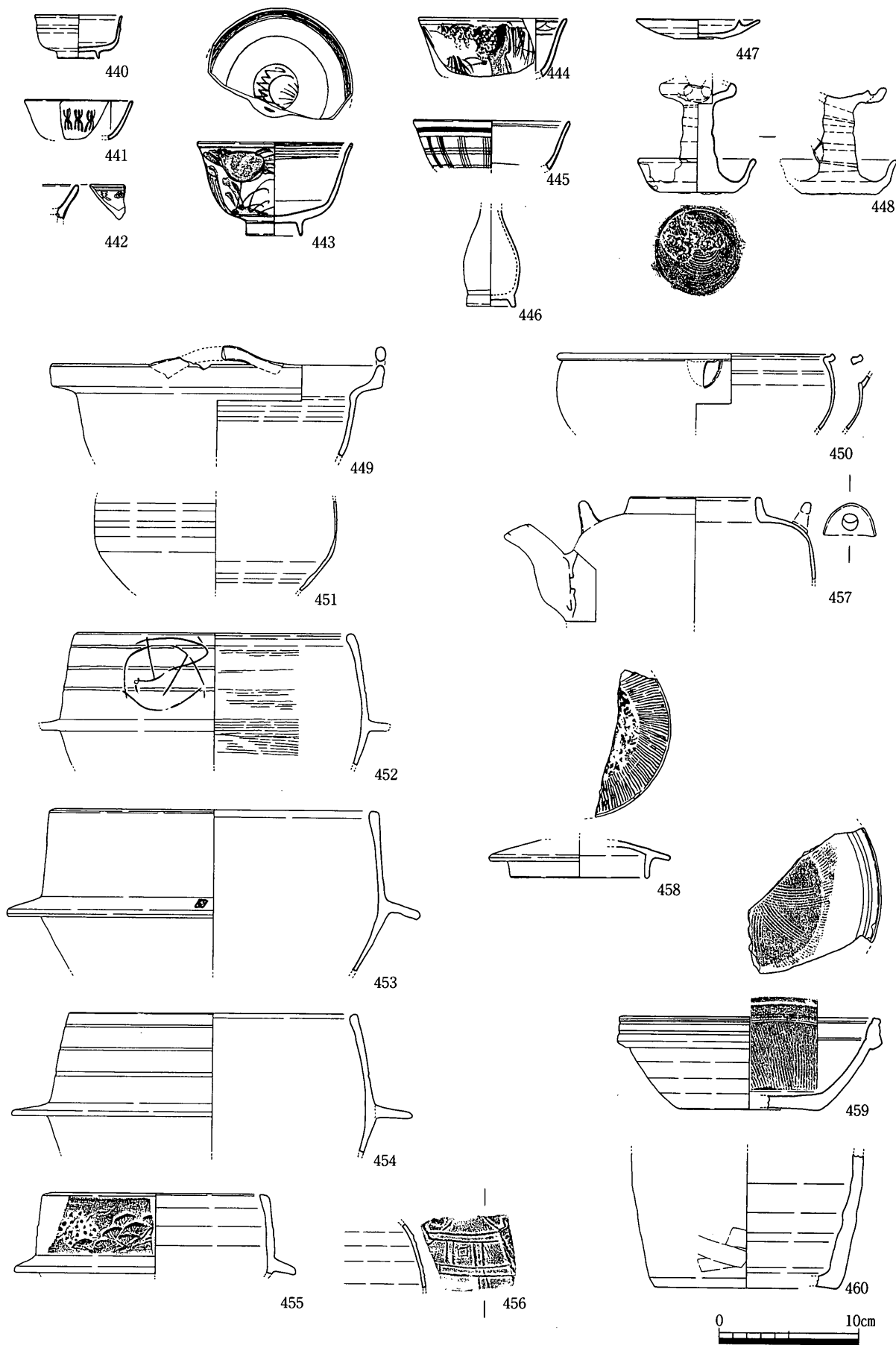
〈C-C'土層断面〉

- 1 浅黄色粘土 (2.5Y7/4) 瓦片、焼土塊、炭を含む。極めて固くしまる〈整地土〉
- 1' 1よりやや黄味が強い
- 2 浅黄色微砂混粘質土 (2.5Y7/3) 〈整地土〉〈A-A'断面6層〉
- 3 にぶい黄橙色砂質土 (10YR7/4) 〈SK01〉

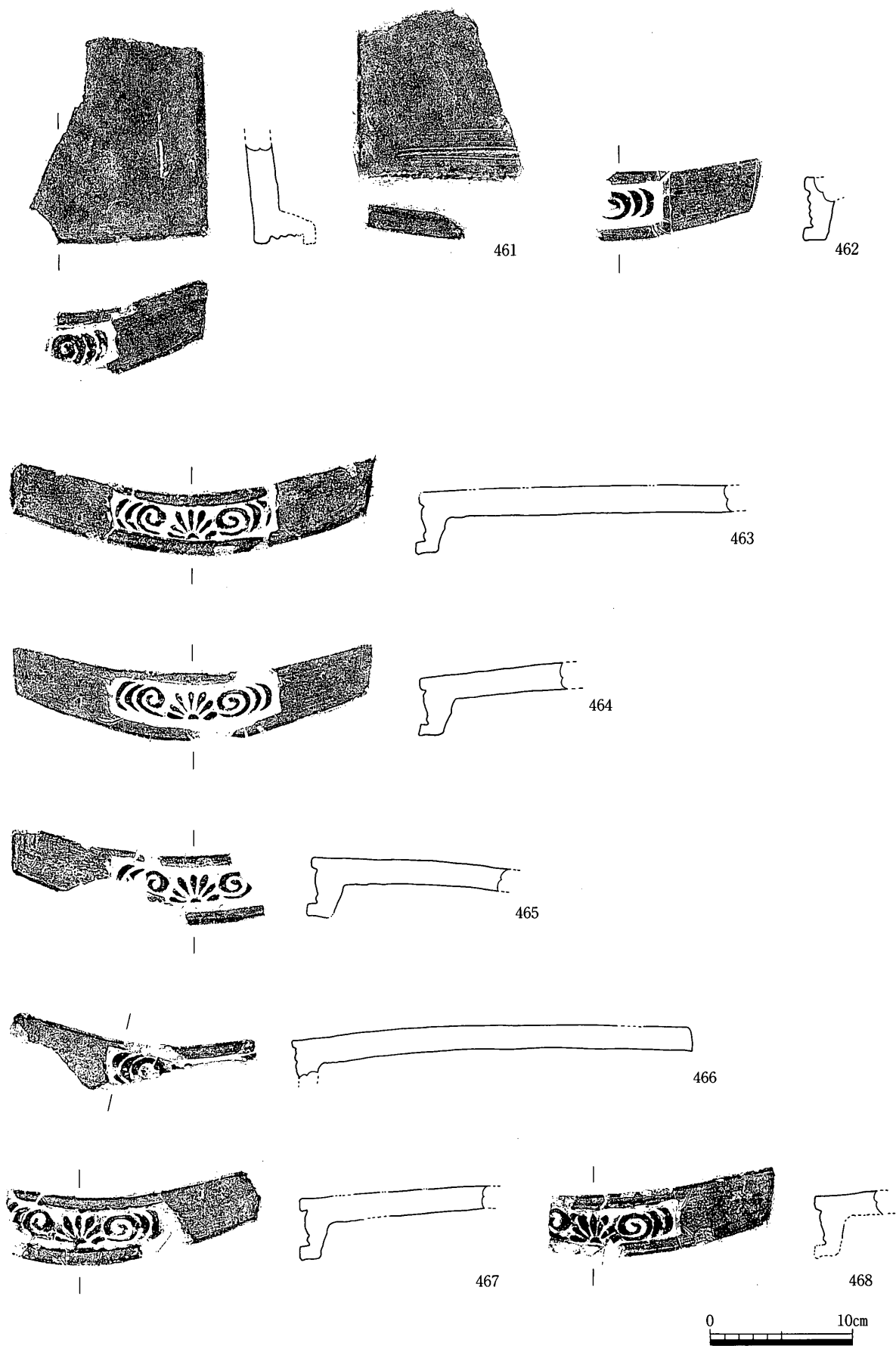
第160図 I区SX02 平・断面図 (1/60)、SX02内SP01 遺物出土状況 平・断面図 (1/10)、SX02内SD01 土層断面図 (1/20)



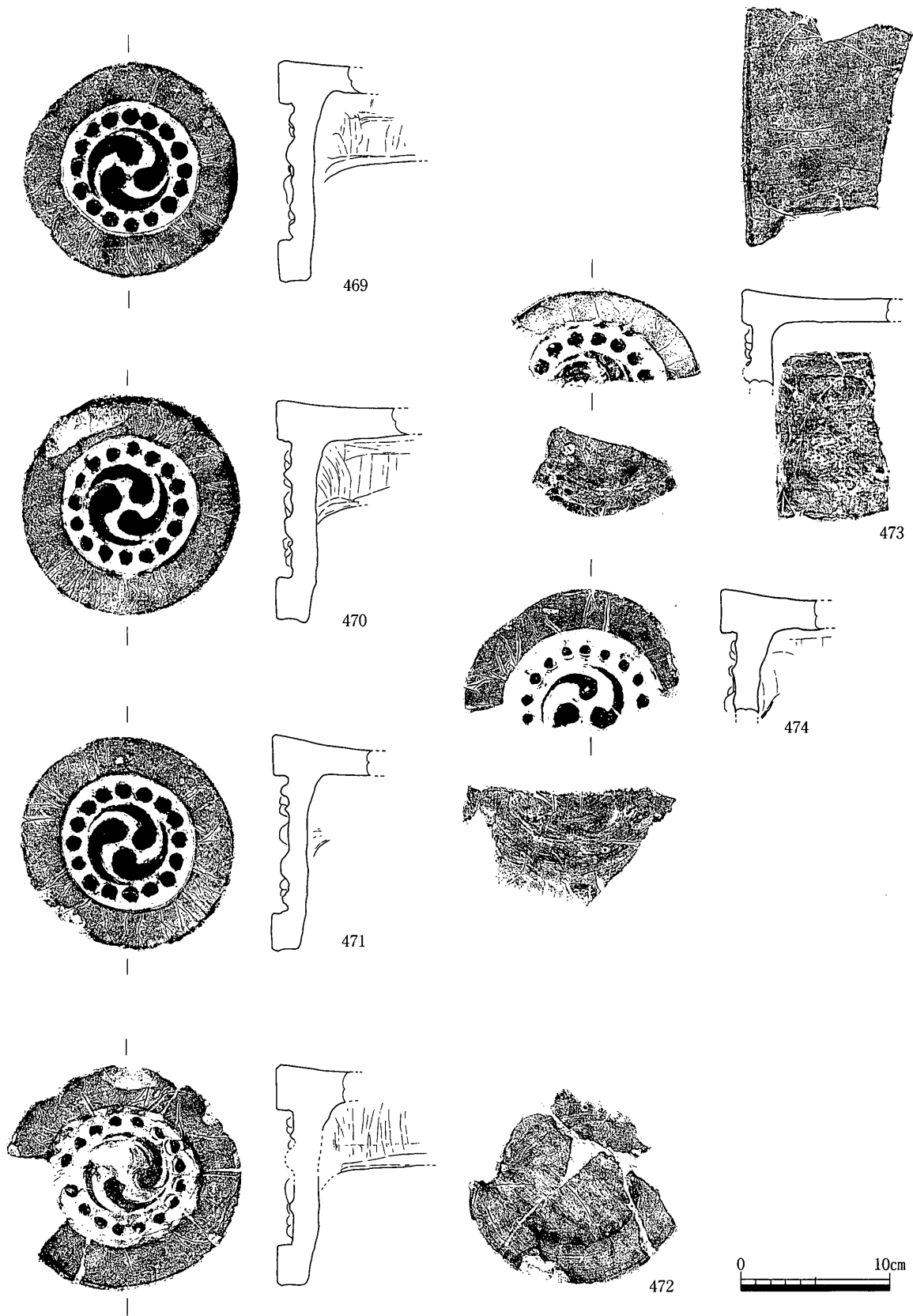
第161図 II区SX02 瓦溜まり検出状況 平・立面図 (1/30)



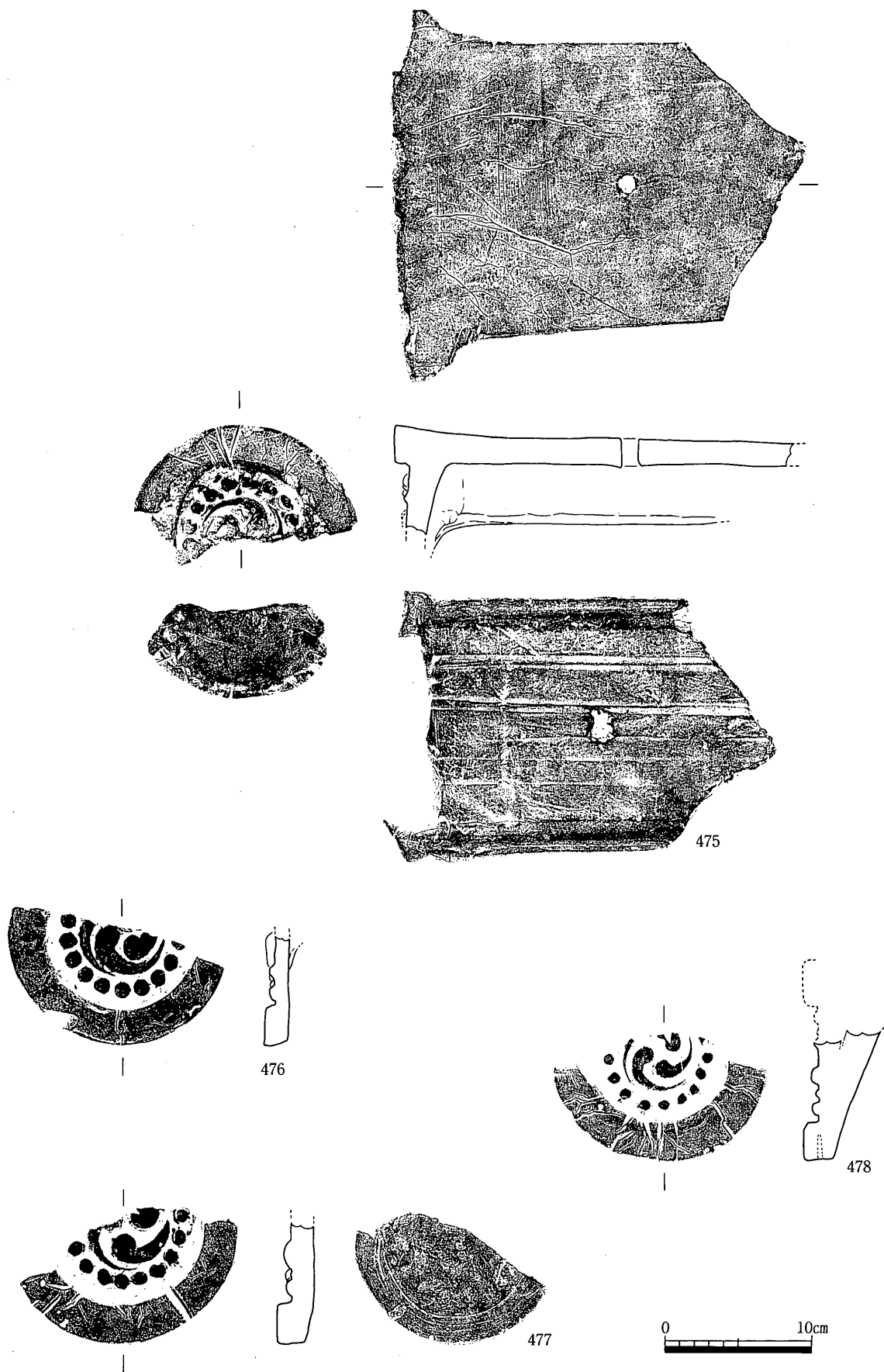
第162图 II区 SX02 出土遗物 1 (1/4)



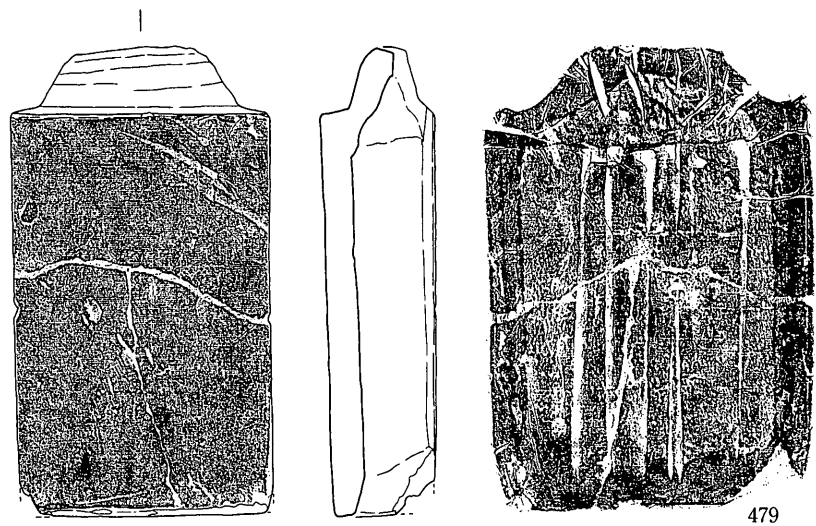
第163图 II区SX02 出土遗物2(1/4)



第164图 II区SX02 出土遗物3 (1/4)



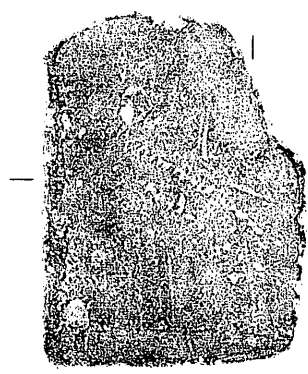
第165图 II区SX02 出土遺物4 (1/4)



479



0 10cm

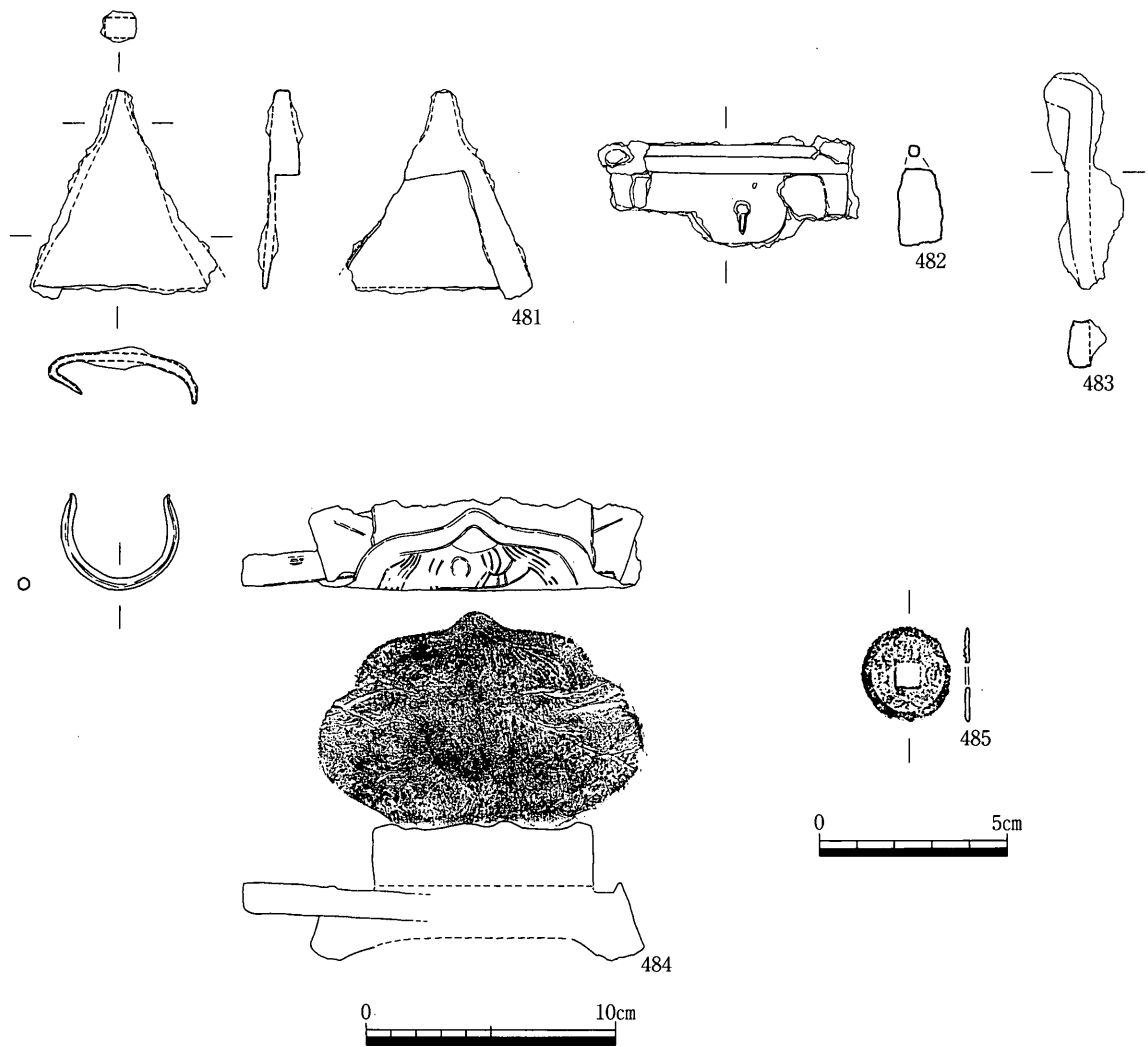


480



0 10cm

第166图 II区SX02 出土遗物5 (1/4·1/3)



第167図 II区SX02 出土遺物6 (1/3・1/2) H486は礎石、写真のみ〈図版番号71-5〉

る。481は下方約2/3が中空となっている。482は中央に鍵穴が設けられている。484は4つに折り畳まれた状態である。上部には宝珠がある。II区斜面部では近世瓦が28リットル入りコンテナで約40箱出土しているが、軒平瓦、軒丸瓦はそれぞれ20点程度ずつしかない。多くが瓦溜まりより出土した。

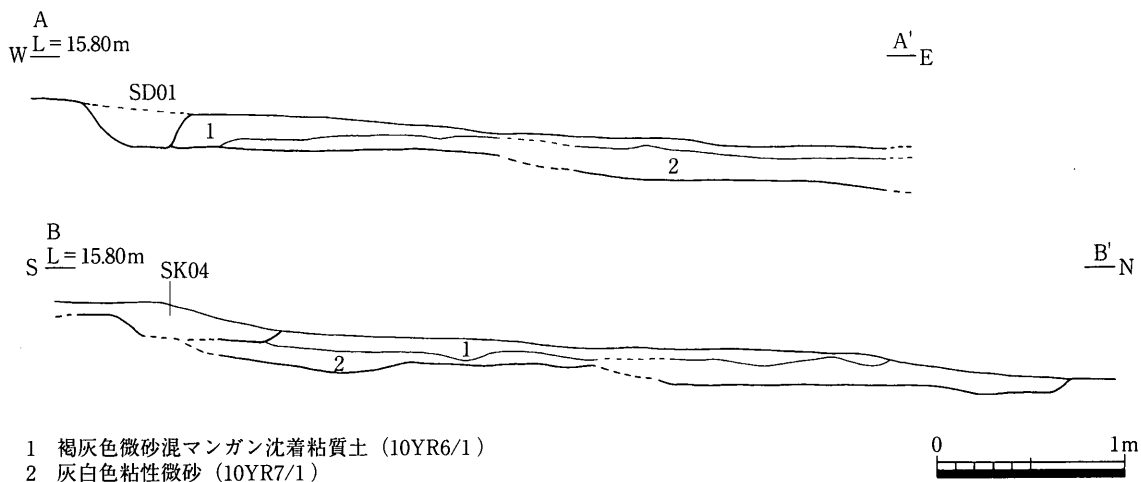
これらの遺物から平坦面と瓦溜まりの形成年代であるが、瓦溜まりに伴う遺物として441~445、447、452、454がある。これらは19世紀初頭から末までの時期幅をもつ。平坦面直上から出土した遺物では時期が判明するものはないが、瓦溜まりの出土遺物に19世紀前半の資料が一定量含まれるためこの時期に位置づけておく。

このように丘陵斜面に設けられた平坦面に瓦葺きの礎石建物が存在したこと、宝珠をもつ銅製品を使うことを確認できる。明治時代の地籍図で遺跡がある丘陵先端部に神社の鳥居が描かれていることから神社跡と考えられる。存続期間は19世紀代以降と考えられるが、下位に位置するSR01では18世紀後半に遡る備前焼、瀬戸美濃の灯明皿、土師質、瓦質の羽釜などが出土している。この時期の遺構は調査区内で見られないこと、この部分以外ではごく散発的にしか18世紀代の遺物が出土しないことから神社の初現はこの時期に遡るかもしれない。

SX03 (第168図)

調査区中央部で検出した性格不明遺構である。東側はI区に延び、北側でSK04、SD01に、南側で

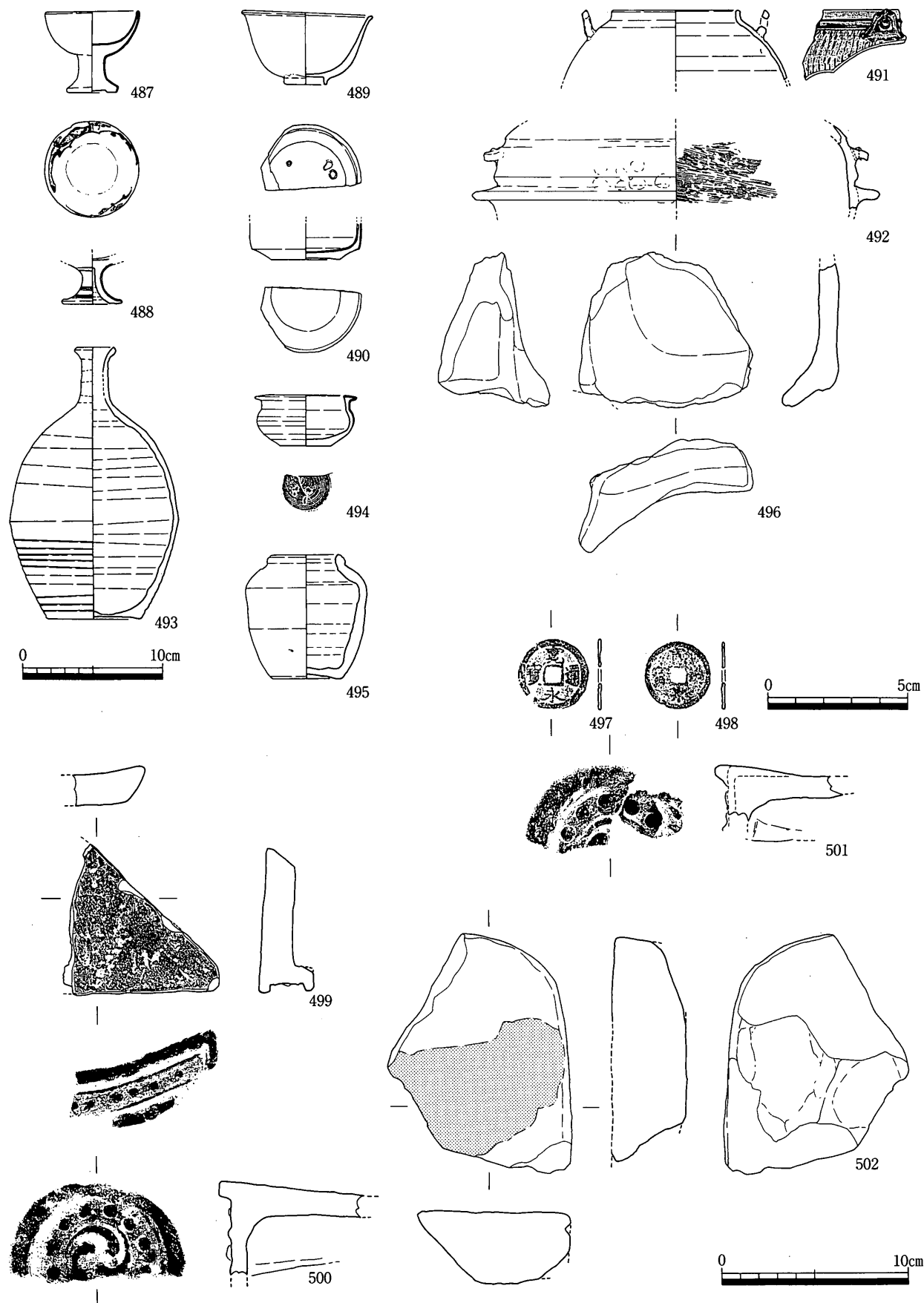
SK04、12に切られる。平面形は方形であり、断面形は浅い皿状を呈する。底場は小さい起伏があるが、北、東側に下る。規模は南北4.72m、東西3.8m以上、深さ39cmを測る。出土遺物はない。遺構の時期はSK04、12に切られることから14世紀後半以前と考えられる。



第168図 II区 SX03 断面図 (1/40)

(10) 遺構外出土遺物 (第169図)

487～502はII区の機械掘削、遺構面精査で出土した遺物である。487、488は肥前系磁器の仏飯器である。487は18世紀中葉から19世紀初頭と考えられる。489は瀬戸美濃陶器端反碗である。19世紀前半と考えられる。490は陶器の筒碗である。底部内面に重ね焼き時のピン痕跡が付着する。491は陶器の土瓶である。外面にトビガンナを施す。490、491は白鳥町谷窯跡ないし、大川町吉金窯跡の製品と考えられ、19世紀前半に位置づけられる。492は瓦質土器羽釜である。内面に細かいハケ目を施す。出土層位は窯構築面上の灰白色砂質土で位置はSF01燃焼室の焚口寄りである。よって窯跡付近では焚口が本来あった程度のレベルまでこの層が堆積しており、その時点で焚口付近が削平されていたことを示す。493は大谷焼の徳利である。494、495は備前焼の小壺である。494は底部を糸切りする。495は内部にお歯黒が付着している。調査区西壁で見られた土石流内から出土しており、これが近世以降に流下したことを示す。496は土師質の置きかまどである。497、498は寛永通宝である。499は隅瓦(軒平瓦)であり、右側を切ったあと焼成している。500、501は軒丸瓦I類である。502は鬼瓦である。401と同様に鬼面の張り付け痕跡が残る。



第169图 II区 遺構外出土遺物 (1/4·1/3·1/2)

- (註1) 山仲進「東播系中世須恵器の分類と編年試案」『神出1986』妙見山山麓遺跡調査会 1989
- (註2) 尾上実「南河内の瓦器椀」『藤沢一夫先生古稀記念論集古文化論叢』1983
- (註3) 片桐孝浩「第5章考察—古代から中世にかけての土器様相—」『中小河川大東川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 川津元結木遺跡』香川県教育委員会他 1992
- (註4) 上田秀夫「14～16世紀の青磁椀の分類について」『貿易陶磁研究No. 2』日本貿易陶磁研究会 1982
- (註5) 県内の中世集落（高松市空港跡地遺跡、豊中町延命遺跡、大内町金毘羅山遺跡、引田町辻田石垣遺跡など）を見ると、1 mを切る柱穴間距離を持つ柱列は庇と判断される。
- (註6) 本章「1 土層序」で記載したとおり、この部分は灰白色系砂質土が堆積しており、ある程度削平を受けている。〔SF01燃焼室検出面より数cm上位でもこの土層が堆積し、近世の土師質土器羽釜（492）が出土している。〕ただ、〈焚口〉で後述するとおり、燃焼室床面においてある部分から被熱が途切れるのでこの付近を焚口と考えることができる。
- (註7)、(註8)、(註10)、(註11)、(註13) 藤原学氏のご教示による。
- (註9) 千葉県南田3号窯跡（平安時代）など一般的に見られる。南田3号窯については以下の文献に記載がある。
『佛教芸術増大号 特集古代寺院の生産遺跡』148号 毎日新聞社
「国分寺台調査の概要」『南向原—上総国分寺台遺跡調査報告』1976
- (註12) 県内では平安時代の事例となるが、高松市片山池2号窯跡、三豊郡高瀬町二宮神社2号窯跡、法連寺瓦窯などで支柱石を用いた焚口がある。
- (註14) 排水溝の清掃は継続的な使用を前提として述べているが、その根拠は上述した礫組の目的が長期使用にあるとしたことである。
- (註15) 『内ヶ磯窯跡2』福岡県教育委員会 2002
県内の近代炭窯については次の文献に詳しい。六車功「大川郡における炭窯と習俗について」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第1号 1984
- (註16) 具体的には同じ廃棄単位〈物原など〉の近接した位置から近接した時期に土坑へ投棄された可能性を示すということである。場所、時期が近くなければ4点の接合資料は得られないであろう。
- (註17) 16層は中世段階での堆積が想定され、遺物は区分して取り上げるべきであったが調査時に行えていない。

第4章 自然科学的分析

第1節 天王谷遺跡出土瓦の胎土分析

1. 試料

分析試料は、(財)香川県埋蔵文化財調査センターで採取された天王谷遺跡瓦試料30点、辻田石垣遺跡瓦試料3点、川北遺跡粘土試料3点、馬宿川下流域和泉系砂岩3点、天王谷遺跡の瓦中の砂岩礫2点および川北遺跡粘土試料を電気炉で焼結させたもの3点の胎土分析である。これらは以下の手続きを経て胎土分析に供された。

2. 分析方法

2-1. 胎土分析

(1) 試料処理前状況写真

試料採取にあたっては事前に試料処理前状況写真を撮影した(添付写真帖参照)。

(2) 試料の採取

瓦分析試料は、試料のもつ考古学的価値を損なわないように配慮して慎重に位置決めされた箇所を、ダイヤモンドカッターおよびタガネで適宜切削し採取した。結果的に得られた各試料片重量は4.0~16.9g程度である。また和泉系砂岩(馬宿川下流域で採取)や粘土(川北遺跡)試料は無作為に試料の一部を20~30g程度切り取り測定に供した。

(3) 前処理

資料片は50℃で一昼夜乾燥し、秤量後鉢で1つずつ丁寧に粉碎した。次に21ビーカー中で適宜水替えをしながら水洗し、さらに300mlパイレックスビーカーに移し超音波洗浄を行った。この際、中性のヘキサメタリン酸ナトリウム溶液を微量加え、懸濁がなくなるまで洗浄液の交換を繰り返した。ついで、篩別時汚染を防ぐため使い捨てのフルイ用メッシュ・クロスを用い3段階の篩別(120、250メッシュ)を行った。こうして得られた120-250(1/81/16mm)250メッシュ(1/16mm)以下の2つの粒径試料を、比重分別処理を加えることなく屈折率 $nd=1.54$ の光硬化系封入剤を用いて顕微鏡観察用薄片を作成した。

(4) 重鉍物分析

火山灰分析などで、通常分析対象とする120~250メッシュ粒径(1/8~1/16mm)篩別試料で検鏡を行った。

検鏡作業は、主要鉍物であるカンラン石(Ol)・斜方輝石(Opx)・単斜輝石(Cpx)・褐色普通角閃石(BHb)・緑色角閃石(GHb)・不透明(鉄)鉍物(Opq)・カミングトン閃隻(Cum)・黒雲母(Bt)・ジルコン(Zr)・アパタイト(Ap)を鏡下で識別し、ポイント・カウンターを用いて無作為に200固体を計算してその量比を百分率で示した。なおこの作業は封入薄片1枚(封入粒子2,000~4,000個)を対象に行い、試料により重鉍物含有の少ないものは結果的に総数200個に満たないものがある。また重鉍物分析は、一般に重液処理により重鉍物を濃集してなされることが多いが、重液処理操作の過程で風化や付着物のため生じる比重変化や粒径の違いが組成成分に与える影響を考え、重液処理を行っていない。

(5) 重鉍物軽鉍物含有比測定（火山ガラス鉍物組成分析）

火山ガラス・軽鉍物・重鉍物・岩片・その他（主として焼結粒子）の量比の違いが試料ごとに認められるか否かを検討する目的で分析する。このうちその他（主として焼結土粒子）としたものは、高温での焼結により、胎土中で粘土を膠結材として多くの微細粒子が集合し塊状となった粒子をさす。作業要領は基本的に前述の重鉍物分析と同じで、1薄片中の各粒子を無作為に200個まで計数した。なお対象粒子は120～250メッシュ（1/8～1/16mm）粒径試料である。

2-2. 粘土試料の焼成（結）実験

川北遺跡で採取された3点の焼結用粘土試料No. 1. 2. 3を対象に、焼成（結）実験と胎土分析を行った。この分析の目的は焼結前後における胎土分析結果を比較することにある。

まず①焼成前の粘土を対象に、前述の2-1の要領で胎土分析を行う。②次に電気炉で800℃、5時間の焼成を行う。③焼成後の粘土試料を胎土分析し、④最後に他の胎土分析結果と合わせ①と③の分析結果を比較した。

なお粘土試料の焼成には、Yamato製電子制御 Muffle Furnance FP21型（温度範囲室温～1,150℃、温度設定精度±2℃。巻末参照）を用いた。焼成は、事前に炉内温度800℃に設定した炉内の磁製ルツボに粘土試料を投入し、5時間加熱後室温で放冷し、前述の胎土分析の要領で行った。

2-3. 火山ガラスの屈折率測定

本測定は当初より計画されたものではない。しかし結果的にはすべての瓦および粘土試料に火山ガラスが検出され、かつ川北遺跡出土3点には、主にアカホヤ（K-Ah）テフラ起源の火山ガラスが多く含まれると判断された。そのため、火山ガラスの屈折率測定を行うことにより、瓦試料相互の対比や川北遺跡出土粘土とその関係を明確にすることを目指した。以下に屈折率測定について簡単に述べる。

前処理により調整された120-250mesh（1/8～1/16mm）粒径試料を対象に、温度変化型屈折率測定装置（RIMS）を用いた火山ガラスの屈折率を測定した。測定に際しては、通常1試料あたり30個の火山ガラスを測定するが、今回のように火山ガラス含有の低い試料ではそれ以下となる場合もある。

温度変化型屈折率測定装置は火山ガラスと浸液の屈折率が合致した温度を測定することにより、各浸液ごとに決められた浸液温度と屈折率の換算式から火山ガラスの屈折率を計算して求める方法である。

具体的な測定データは巻末にデータシートとしてまとめられ、（註、本稿では掲載していない。）以下に述べるように表示されている。まず最上位に試料名（SeriesおよびSampleName）が表示され、次に測定者名、次に測定者名、Materialは測定対象鉍物名、Immersion Oilは測定に使用した浸液の種類を示す。カッコ内の式は浸液温度tから浸液の屈折率を算出するのに用いたものです。

測定された屈折率値は最終的にTotalの項にまとめられる。Count, min, max, range, mean, st. dev, skewnessはそれぞれ屈折率の測定個数、最小値、最大値、範囲m平均値、標準偏差そして歪度である。屈折率のhistogramの図は縦方向に屈折率を0.01きざみで表示し、横方向にその屈折率をもつ火山ガラスの個数が表現される。* 1つが1個の火山ガラス片の測定結果を示す。

3. 分析結果と考察

以下に各分析結果について述べ、考察を加える。

3-1. 土器の胎土分析

今回の分析結果の詳細は、巻末の測定データ一覧表の中に示されている。しかしデータ間での比較要素が多いため、分析データだけをみていたのでは分析値間の相互関係を把握することは困難と思われる。そこで、重鉱物分析および全鉱物組成分析含有率（火山ガラス・鉱物組成分析）結果を三角ダイアグラム（図1）上にプロットし表示した。この際、三角ダイアグラムを作成するにあたり、各分析結果の3つの端成分として次に述べる要素を設定した。

まず重鉱物分析では、黒雲母（Bt）・不透明（鉄）鉱物とジルコンの和（Opq+Zr）、緑色角閃石と斜方輝石および単斜輝石の和（GHb+Opx+Cpx）を3つの端成分とし、それぞれ頂点・左下・右下を100%として図示した。その理由は、以下の3点である。まず①Btは主として花崗岩の起源の可能性が高い要素とみなすことができること。②Opq+Zrはともに比重が非常に大きく風化にも強く粘土中に残りやすい鉱物であること。さらにこれらは水簸の過程で沈降しやすく排除されやすい要素であること。最後に③その他の成分として一括したGHb+Opx+Cpxは一般にテフラ（火山灰）起源の可能性をもつことからがあり、特徴的な端成分設定のより有効と判断したからである。

一方、全鉱物含有率分析（火山ガラス・鉱物組成分析）結果の表示は、以下のようにした。まず三角ダイアグラムの3成分として頂点に重鉱物+火山ガラスを、左下に焼結土粒子、右下に軽鉱物をそれぞれ100%になるようにプロットした。その理由は、粘土鉱物を主とし非結晶～微結晶の集合体である焼結土粒子は瓦材料の主成分であること、軽鉱物はそれぞれに次ぐ主成分粒子であること、最後に重鉱物+火山ガラスは一般に含有量がともに少ないが、特にテフラ（火山灰）などの火砕物質の副成分粒子とみなされると判断したからである。なお軽鉱物はさらにカリ長石・斜長石・石英等に細分されるが、今回の分析データの表示においては一括して取り扱った。

なお、同一形態あるいは同時期試料として一括される各分析点数が数点以下と少ないため、分析結果に対し多くはコメントできないが、測定データのプロット位置や連結線の傾きなどから、以下に指摘する諸試料郡が識別される。

①天王谷遺跡平瓦Ⅰ・Ⅱ類、丸瓦Ⅰ類（No. 1～11）。図1。

このグループの属する試料は、重鉱物として不透明（鉄）鉱物に富み緑色角閃石やジルコンを少量含む。

②天王谷遺跡軒平瓦Ⅱ・Ⅲ、軒丸瓦Ⅰ類（No. 12～21）。図2。

このグループに属する試料は前述の①のグループと比較して不透明（鉄）鉱物が減る一方で角閃石に富む特徴がある。

③天王谷遺跡鬼瓦・雁振瓦・平瓦（古代）、布目（平）瓦、辻田石垣遺跡平・軒平瓦、図3。

このグループに属する試料を一括するには問題があるかもしれないが、その多くは前述の①、②いずれのグループにも属さない。ただしその中であって平瓦（古代）のNo. 27・30の2試料は①グループによく似るが、一方No. 28・31の2試料は②グループに似るというように、古代として一括された試料の特性にばらつきのあることが伺われる。

④川北遺跡出土粘土。図5。

自然堆積にある粘土試料の分析値は他の瓦試料のものと比較して明瞭な差が認められる。しかし

800℃、5時間焼成後の試料胎土分析値は著しく変化する。近似した分析結果を、今回分析した瓦試料中に探すと、②のグループに属するものに似た傾向が認められる。しかしながら、含まれる火山ガラス（ATおよびK-Ah起源と推定される）の含有量や両ガラスの含有比から検討すると、②グループに属する瓦資料中の火山ガラス含有量は川北遺跡出土の焼成試料より多く、逆にK-Ahガラスの含有比が低いことが認められた。これらの結果から、川北遺跡出土粘土を使用したと明確に言える瓦試料は、今回の分析試料にはない。強いてあげるならば、天王谷遺跡軒丸瓦（遺物番号29）がデータの近似性が高いと指摘できる。

⑤馬宿川下流域（和泉系砂岩）。図6。

このグループに属する比較資料の馬宿下流域礫3点と天王谷遺跡瓦中の礫のみを削りだしたものの2点（平瓦Ⅰ類、遺物番号139と軒平瓦Ⅱ類、遺物番号43）はいずれも同様の分析結果を示し、今回の他のいずれの試料に対しても明瞭に識別される。特徴としては火山ガラスをまったく含まず、軽鉱物は石英が多く、重鉱物は黒雲母を主として含むことがあげられる。

⑥和泉系砂岩を含む瓦試料（11点）の近似性についての検討。

和泉砂岩を含む瓦試料（共通）性を検討するため図4を描いたが、11点の測定データ間にはまとまりはあまり認められない。また含有される火山ガラス（AT、K-Ah）の重さや含有比も試料ごとにかなり差があり、1つのまとまりを指摘することは困難と判断される。

3-2. 粘土試料の焼成（結）実験

焼成の前で3試料とも同様の明瞭な差が生じた。傾向としては焼成前は火山ガラス・軽鉱物・重鉱物含有が多く、その他（土粒子）が少ないのに対し、焼成後は火山ガラス・軽鉱物。重鉱物が減り、特に黒雲母（Bt）が消滅する特徴がある。逆にその他（焼結土粒子）が大幅に増加することが指摘される。また焼成前には火山ガラスにヒビ割れは認められず、色付ガラスや褐色普通角閃石（BHb）が稀であったのに対し、焼成後はヒビ割れや着色の認められる火山ガラスが急増し、ガラス片中の30～40%程度にも及ぶようになった。さらに焼成前には普通角閃石は3試料とも大部分緑色（GHb）であったものが、焼成後は観察されるものは褐色のみとなる大きな変化が見られた。これは角閃石の高温酸化による変色と解釈される。

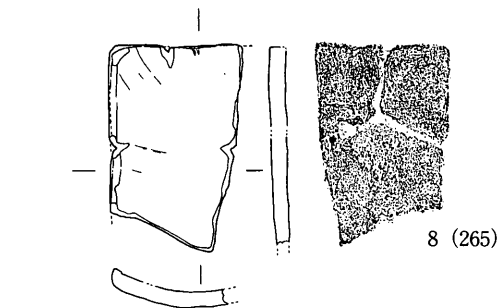
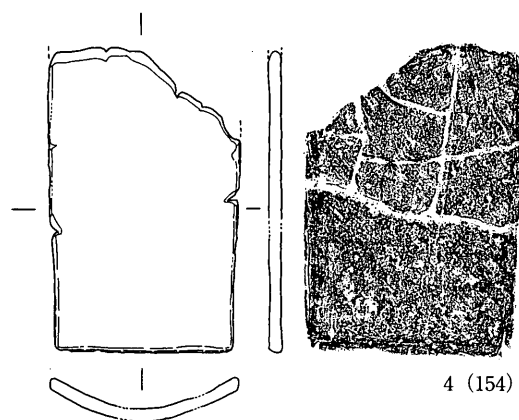
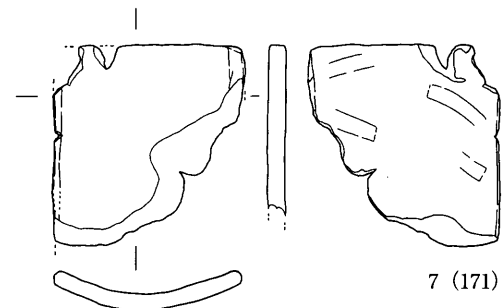
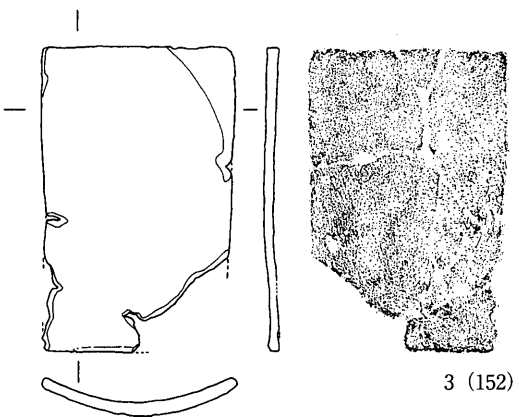
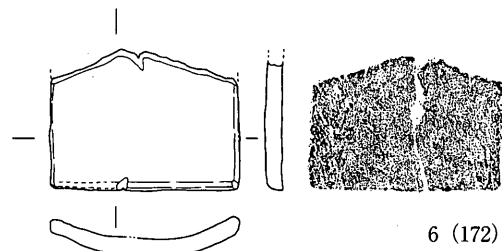
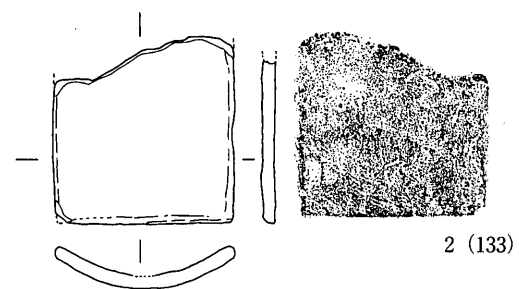
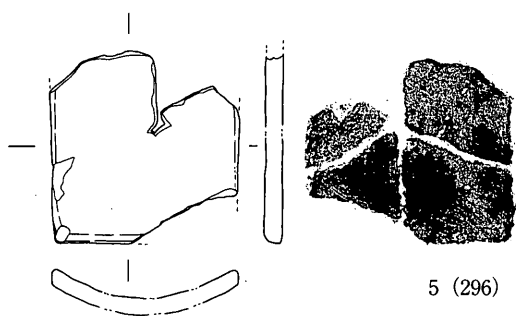
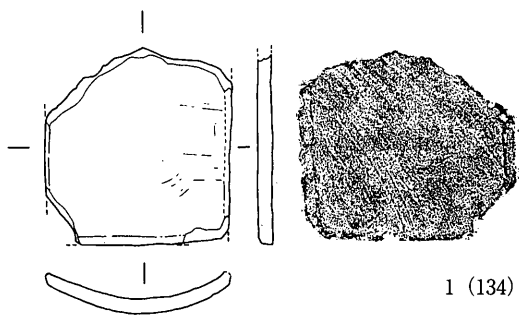
焼成前粘土に含まれる火山ガラスの屈折率測定と水和層の観察から、3試料とも含有ガラスは大部分鬼界アカホヤ（K-Ah）起源と判断され、その他ATテフラガラスの2種類が混合しているものと考えられる。これらの火山ガラスが含まれることは、川北遺跡出土粘土試料の特徴となる。ちなみに天王谷・迹田石垣遺跡中の瓦中のAT、K-Ah含有率比が焼成後の川北遺跡出土粘土に似るものはなく、近似性は全体に低いものと判断される。

第6表 分析試料一覽表(1)

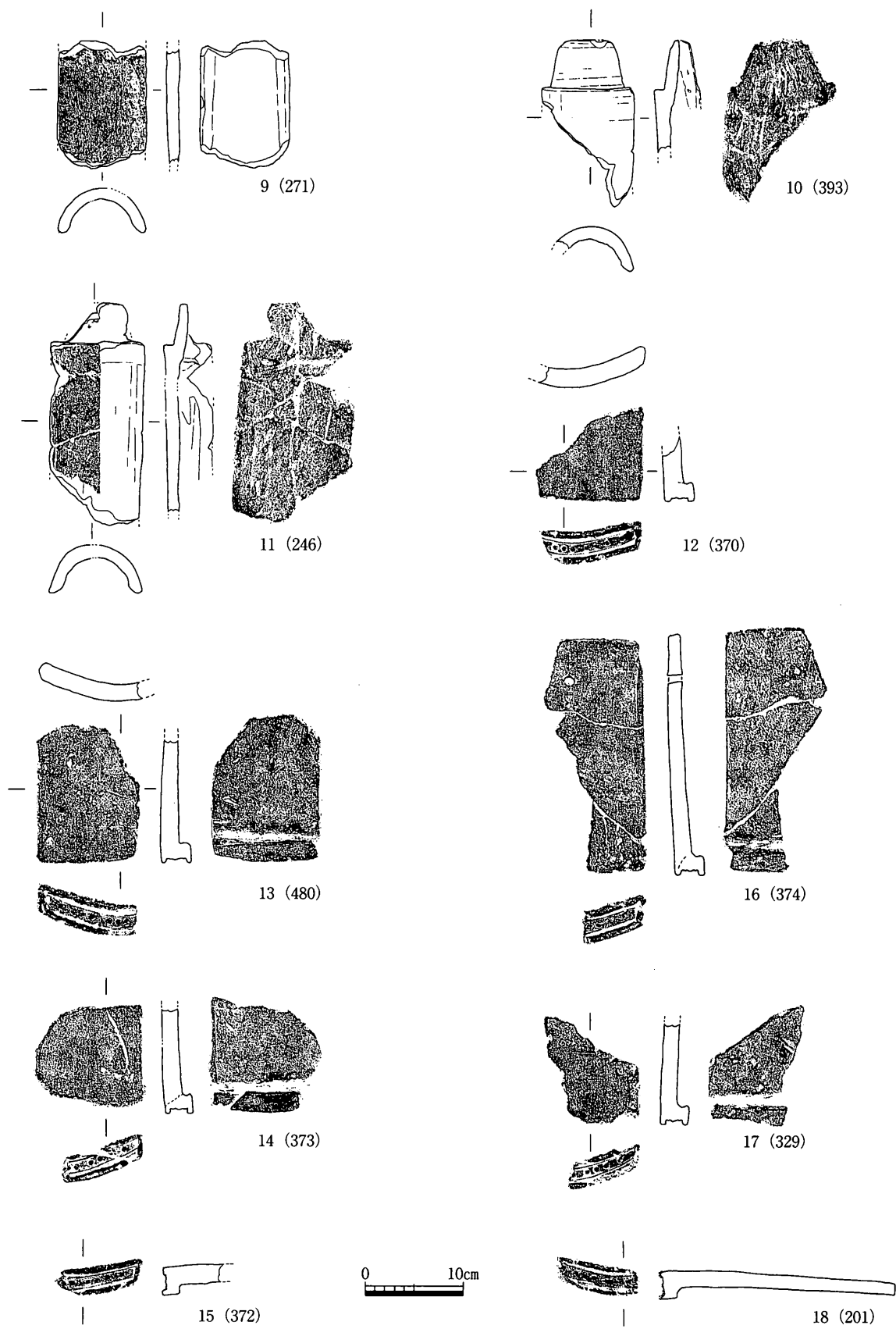
通番	遺跡名	試料名	試料採取地点	報文番号	備考
1	天王谷遺跡	平瓦Ⅰ類	Ⅱ区SF01	134	和泉系砂岩含有
2	天王谷遺跡	平瓦Ⅰ類	Ⅱ区SF01	133	和泉系砂岩含有
3	天王谷遺跡	平瓦Ⅰ類	Ⅱ区SF02	152	—
4	天王谷遺跡	平瓦Ⅰ類	Ⅱ区SF02	154	和泉系砂岩含有
5	天王谷遺跡	平瓦Ⅱ類	Ⅱ区SK12	296	—
6	天王谷遺跡	平瓦Ⅱ類	Ⅱ区SF02	172	—
7	天王谷遺跡	平瓦Ⅱ類	Ⅱ区SF02	171	和泉系砂岩含有
8	天王谷遺跡	平瓦Ⅱ類	Ⅱ区SK05	265	和泉系砂岩含有
9	天王谷遺跡	丸瓦Ⅰ類	Ⅱ区SK05	271	和泉系砂岩含有
10	天王谷遺跡	丸瓦Ⅰ類	Ⅱ区北西部包含層	393	—
11	天王谷遺跡	丸瓦Ⅰ類	Ⅱ区SK04-①	246	和泉系砂岩含有
12	天王谷遺跡	軒平瓦Ⅱ類	Ⅱ区北西部包含層	370	—
13	天王谷遺跡	軒平瓦Ⅲ類	Ⅱ区SX02ガリカケ	480	—
14	天王谷遺跡	軒平瓦Ⅲ類	Ⅱ区北西部包含層	373	—
15	天王谷遺跡	軒平瓦Ⅱ類	Ⅱ区北西部包含層	372	—
16	天王谷遺跡	軒平瓦Ⅱ類	Ⅱ区北西部包含層	374	和泉系砂岩含有
17	天王谷遺跡	軒平瓦Ⅲ類	Ⅱ区SR01	329	—
18	天王谷遺跡	軒平瓦Ⅱ類	Ⅱ区SK04	201	和泉系砂岩含有
19	天王谷遺跡	軒平瓦Ⅰ類	Ⅱ区SK12	292	—
20	天王谷遺跡	軒平瓦Ⅰ類	Ⅱ区上面精査	500	—
21	天王谷遺跡	軒平瓦Ⅰ類	Ⅱ区北西隅流入土	410	—
22	天王谷遺跡	鬼瓦	Ⅱ区SR01	353	—
23	天王谷遺跡	鬼瓦	Ⅱ区西壁側溝掘り	502	—
24	天王谷遺跡	雁振瓦	Ⅱ区SK12	303	—
25	天王谷遺跡	雁振瓦	Ⅱ区SR01	350	—
26	天王谷遺跡	雁振瓦	Ⅱ区SR01	351	—
27	天王谷遺跡	平瓦(古代)	Ⅰ区SD03	59	—
28	天王谷遺跡	布目(平)瓦	Ⅱ区SK12	304	和泉系砂岩含有
29	天王谷遺跡	平瓦(古代)	Ⅱ区SK04	255	—
30	天王谷遺跡	平瓦(古代)	Ⅱ区SR01	359	—

第7表 分析試料一覧表(2)

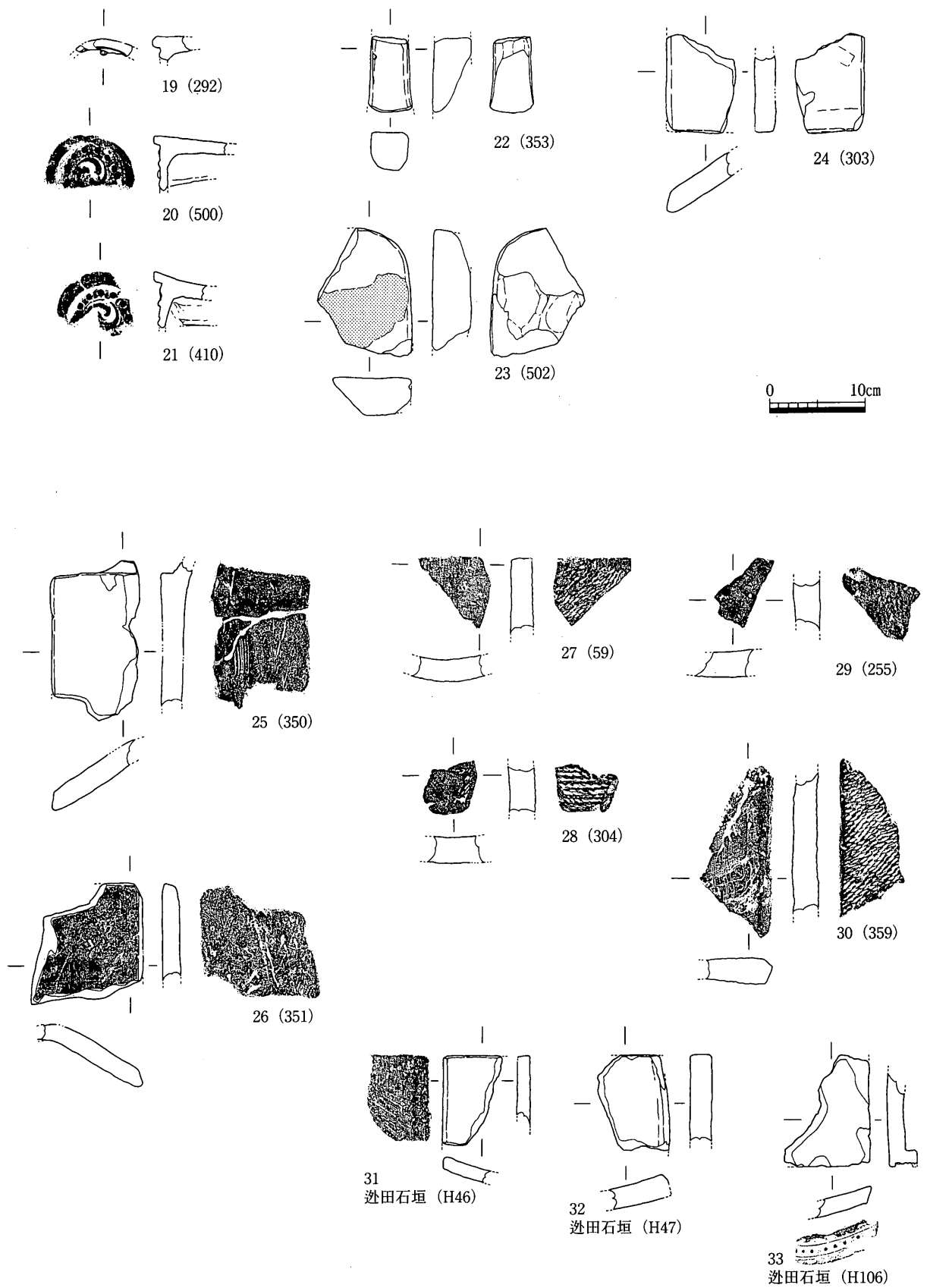
通番	遺跡名	試料名	試料採取地点	報文番号	備考
31	迹田石垣遺跡	平瓦Ⅱ類	I区SX01	H46	—
32	迹田石垣遺跡	平瓦	I区SX01	H47	—
33	迹田石垣遺跡	軒平瓦Ⅲ類	I区包含層	H146	和泉系砂岩含有
34	川北遺跡	粘土	—	—	微砂含まない
35	川北遺跡	粘土	—	—	微砂含む
36	川北遺跡	粘土	—	—	微砂含む
37	馬宿川下流域	礫(和泉系砂岩)	—	—	—
38	馬宿川下流域	礫(和泉系砂岩)	—	—	—
39	馬宿川下流域	礫(和泉系砂岩)	—	—	—
40	天王谷遺跡	瓦中の礫(平瓦Ⅰ類)	Ⅱ区SF02	154	和泉系砂岩
41	天王谷遺跡	瓦中の礫(軒平瓦Ⅱ類)	Ⅱ区SK04	201	和泉系砂岩
42	川北遺跡	粘土No.1(焼結処理)	—	—	電気炉800℃ 5hr焼結
43	川北遺跡	粘土No.2(焼結処理)	—	—	
44	川北遺跡	粘土No.3(焼結処理)	—	—	



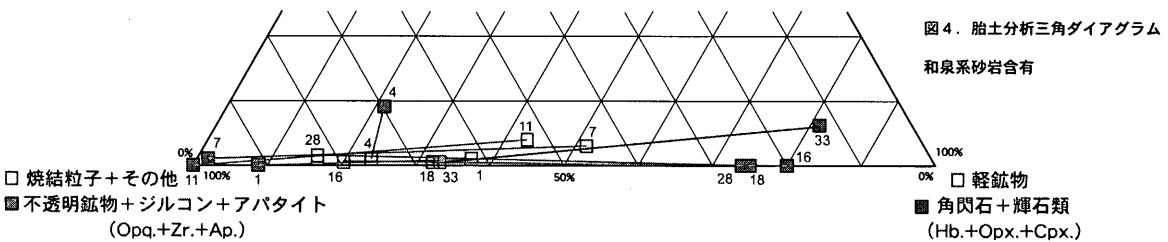
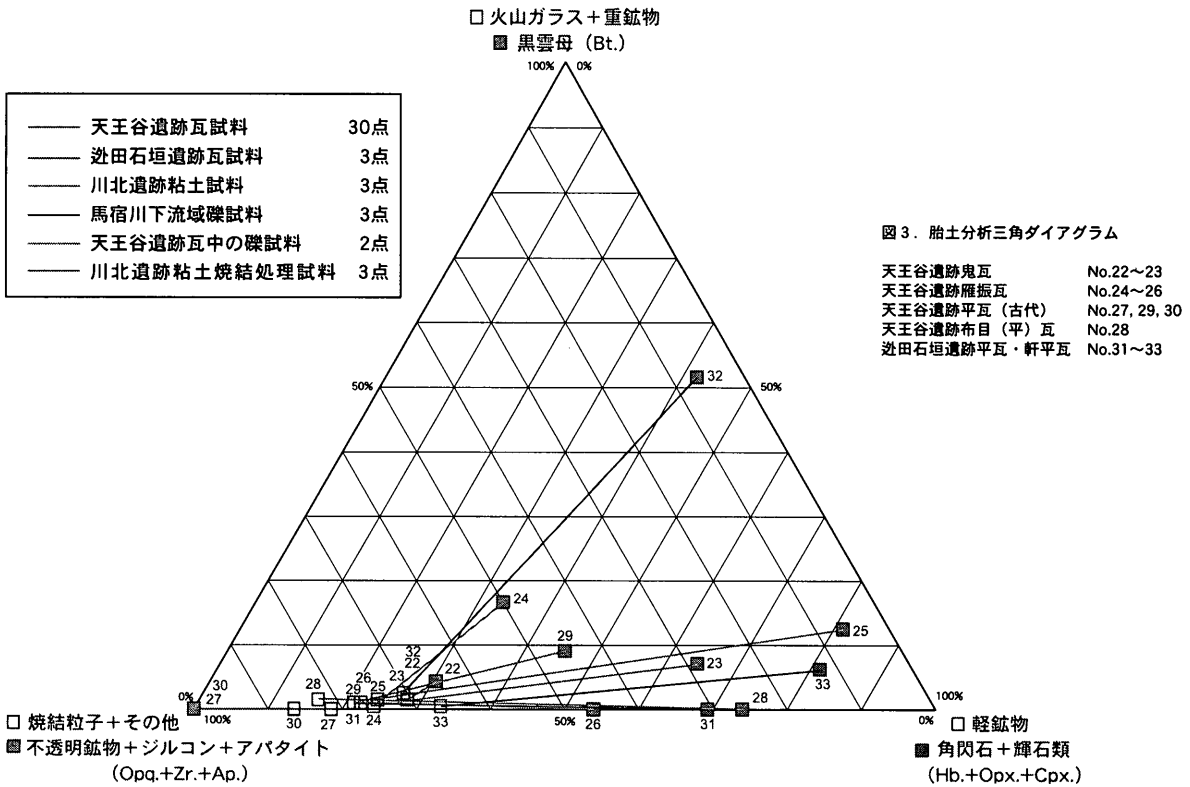
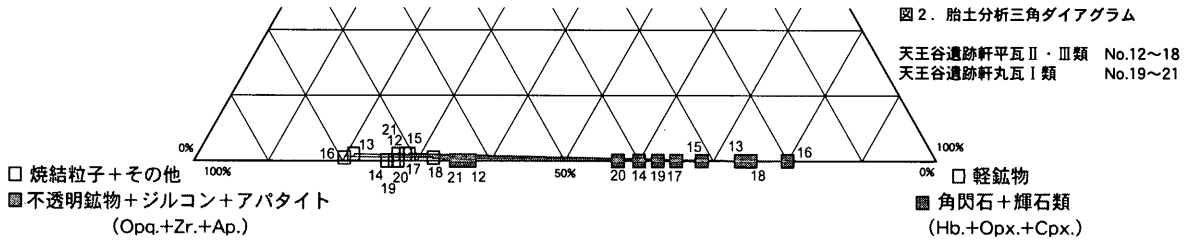
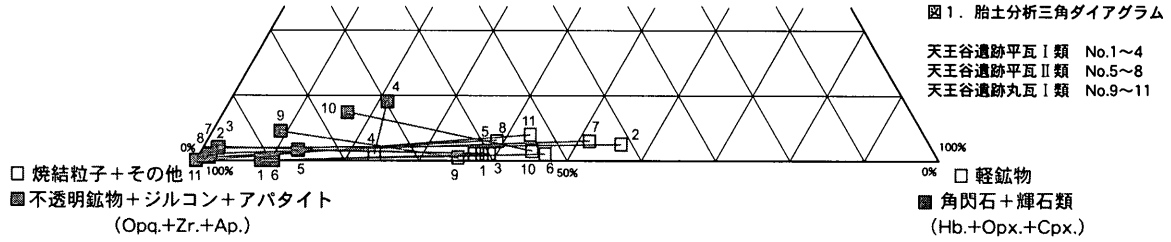
第170図 胎土分析遺物 1 (1/6)

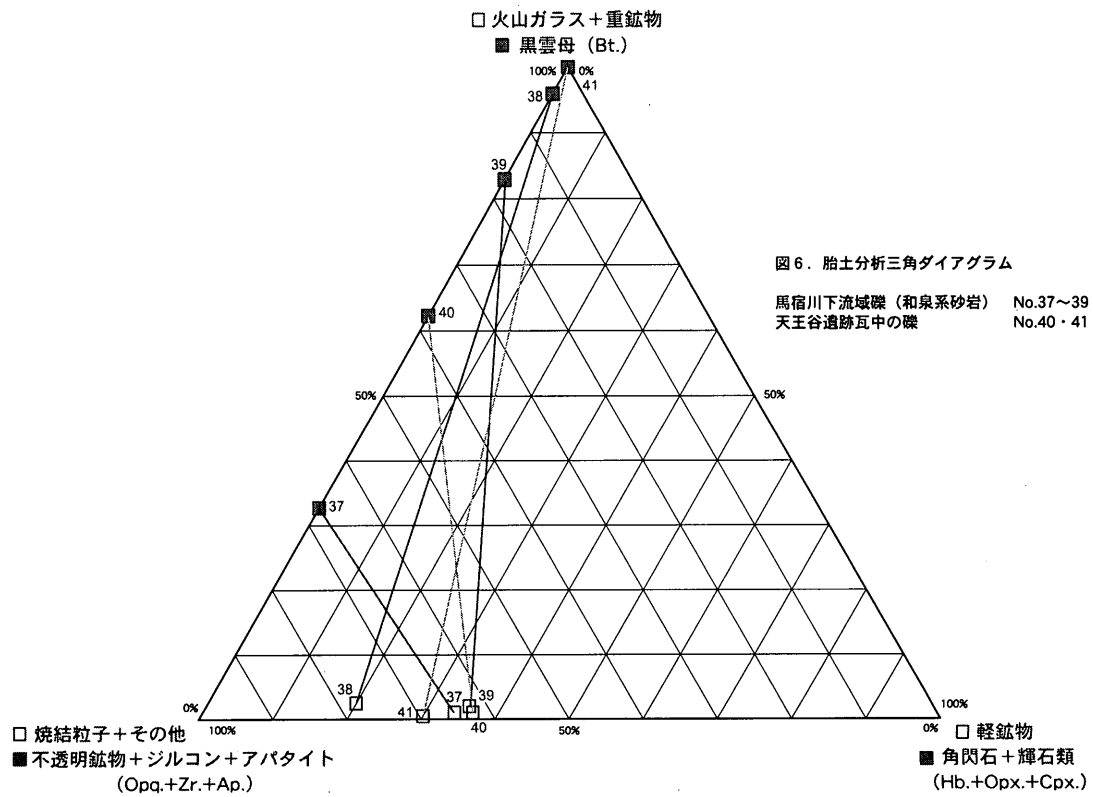
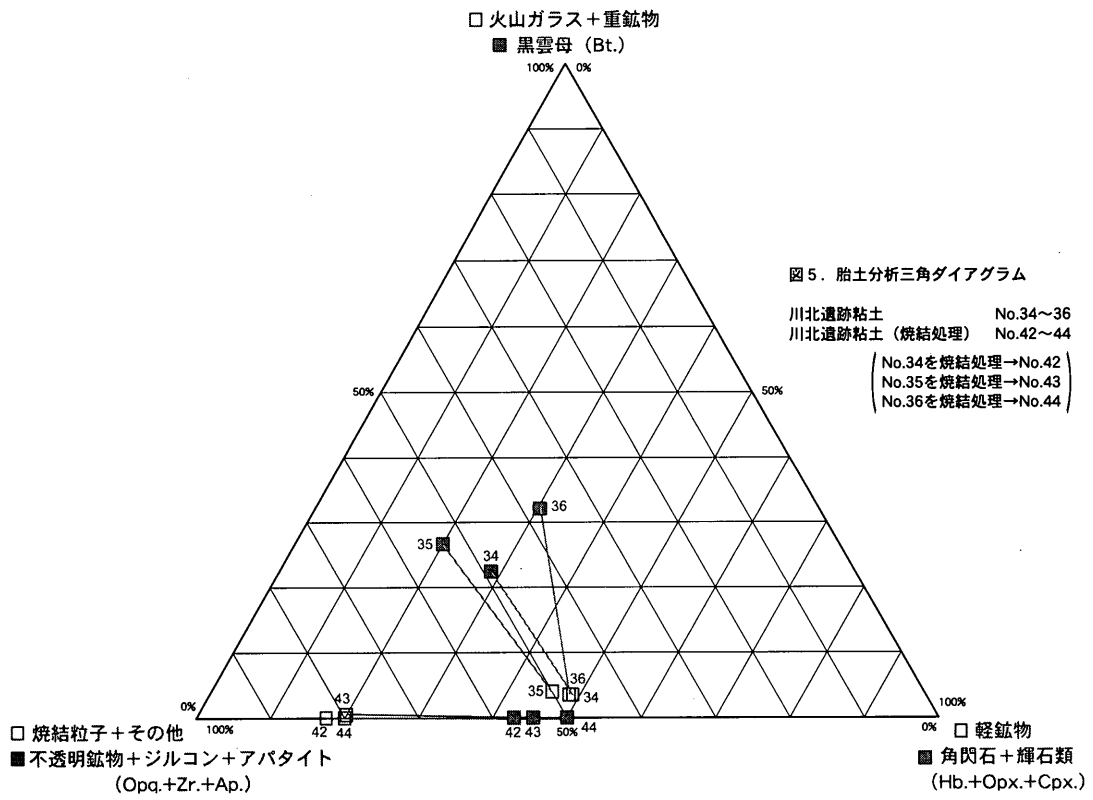


第171图 胎土分析遺物 2 (1/6)



第172図 胎土分析遺物 3 (1/6)





第8表 鉱物組成表(1)

No.	試料名	全鉱物分析				重鉱物分析				全鉱物分析%				重鉱物分析%			
		火山 ガラス + 重鉱物	岩片 + 土粒子	軽鉱物	合計	黒雲母	不透明 鉱物 + ジルコン + アバタ イト	角閃石 + 輝石類	合計	火山 ガラス + 重鉱物	岩片 + 土粒子	軽鉱物	合計	黒雲母	不透明 鉱物 + ジルコン + アバタ イト	角閃石 + 輝石類	合計
1	天王谷遺跡、 平瓦Ⅰ類、134	2	124	74	200	0	73	7	80	1%	62%	37%	100%	0%	91%	9%	100%
2	天王谷遺跡、 平瓦Ⅰ類、133	5	83	112	200	1	50	1	52	3%	42%	56%	100%	2%	96%	2%	100%
3	天王谷遺跡、 平瓦Ⅰ類、152	2	120	78	200	1	47	1	49	1%	60%	39%	100%	2%	96%	2%	100%
4	天王谷遺跡、 平瓦Ⅰ類、154	2	151	47	200	3	23	7	33	1%	76%	24%	100%	9%	70%	21%	100%
5	天王谷遺跡、 平瓦Ⅱ類、296	2	122	76	200	1	53	8	62	1%	61%	38%	100%	2%	85%	13%	100%
6	天王谷遺跡、 平瓦Ⅱ類、172	2	105	93	200	0	52	6	58	1%	53%	47%	100%	0%	90%	10%	100%
7	天王谷遺跡、 平瓦Ⅱ類、171	6	91	103	200	2	195	3	200	3%	46%	52%	100%	1%	98%	2%	100%
8	天王谷遺跡、 平瓦Ⅱ類、265	6	116	78	200	1	196	3	200	3%	58%	39%	100%	1%	98%	2%	100%
9	天王谷遺跡、 丸瓦Ⅰ類、271	1	129	70	200	2	38	4	44	1%	65%	35%	100%	5%	86%	9%	100%
10	天王谷遺跡、 丸瓦Ⅰ類、393	3	108	89	200	4	41	9	54	2%	54%	45%	100%	7%	76%	17%	100%
11	天王谷遺跡、 丸瓦Ⅰ類、246	8	106	86	200	0	200	0	200	4%	53%	43%	100%	0%	100%	0%	100%
12	天王谷遺跡、 軒平瓦Ⅱ類、370	2	144	54	200	0	22	13	35	1%	72%	27%	100%	0%	63%	37%	100%
13	天王谷遺跡、 軒平瓦Ⅲ類、480	2	156	42	200	0	5	14	19	1%	78%	21%	100%	0%	26%	74%	100%
14	天王谷遺跡、 軒平瓦Ⅲ類、373	0	148	52	200	0	4	6	10	0%	74%	26%	100%	0%	40%	60%	100%
15	天王谷遺跡、 軒平瓦Ⅱ類、372	2	141	57	200	0	6	13	19	1%	71%	29%	100%	0%	32%	68%	100%
16	天王谷遺跡、 軒平瓦Ⅱ類、374	1	159	40	200	0	3	12	15	1%	80%	20%	100%	0%	20%	80%	100%
17	天王谷遺跡、 軒平瓦Ⅲ類、329	2	142	56	200	0	7	13	20	1%	71%	28%	100%	0%	35%	65%	100%
18	天王谷遺跡、 軒平瓦Ⅱ類、201	1	135	64	200	0	1	3	4	1%	68%	32%	100%	0%	25%	75%	100%
19	天王谷遺跡、 軒丸瓦Ⅰ類、292	0	146	54	200	0	6	10	16	0%	73%	27%	100%	0%	38%	63%	100%
20	天王谷遺跡、 軒丸瓦Ⅰ類、500	0	145	55	200	0	3	4	7	0%	73%	28%	100%	0%	43%	57%	100%
21	天王谷遺跡、 軒丸瓦Ⅰ類、410	2	144	54	200	0	11	6	17	1%	72%	27%	100%	0%	65%	35%	100%
22	天王谷遺跡、 鬼瓦、353	3	141	56	200	1	15	7	23	2%	71%	28%	100%	4%	65%	30%	100%

第9表 鉱物組成表(2)

No.	試料名	全鉱物分析				重鉱物分析				全鉱物分析%				重鉱物分析%			
		火山ガラス + 重鉱物	岩片 + 土粒子	軽鉱物	合計	黒雲母	不透明 鉱物 + ジルコン + アバタ イト	角閃石 + 輝石類	合計	火山 ガラス + 重鉱物	岩片 + 土粒子	軽鉱物	合計	黒雲母	不透明 鉱物 + ジルコン + アバタ イト	角閃石 + 輝石類	合計
23	天王谷遺跡、 鬼瓦、502	1	144	55	200	1	4	9	14	1%	72%	28%	100%	7%	29%	64%	100%
24	天王谷遺跡、 雁振瓦、303	1	151	48	200	1	3	2	6	1%	76%	24%	100%	17%	50%	33%	100%
25	天王谷遺跡、 雁振瓦、350	3	149	48	200	2	1	13	16	2%	75%	24%	100%	13%	6%	81%	100%
26	天王谷遺跡、 雁振瓦、351	2	154	44	200	0	6	7	13	1%	77%	22%	100%	0%	46%	54%	100%
27	天王谷遺跡、 平瓦(古代)、59	0	163	37	200	0	2	0	2	0%	82%	19%	100%	0%	100%	0%	100%
28	天王谷遺跡、 布目(平)瓦、304	3	165	32	200	0	6	17	23	2%	83%	16%	100%	0%	26%	74%	100%
29	天王谷遺跡、 平瓦(古代)、255	2	156	42	200	1	5	5	11	1%	78%	21%	100%	9%	45%	45%	100%
30	天王谷遺跡、 平瓦(古代)、359	0	173	27	200	0	4	0	4	0%	87%	14%	100%	0%	100%	0%	100%
31	辻田石垣遺跡、 平瓦、H46	2	156	42	200	0	4	9	13	1%	78%	21%	100%	0%	31%	69%	100%
32	辻田石垣遺跡、 平瓦、H47	5	141	54	200	64	8	52	124	3%	71%	27%	100%	52%	6%	42%	100%
33	辻田石垣遺跡、 軒平瓦、H106	1	133	66	200	1	2	13	16	1%	67%	33%	100%	6%	13%	81%	100%
34	川北遺跡、 粘土No.1	7	95	98	200	11	24	14	49	4%	48%	49%	100%	22%	49%	29%	100%
35	川北遺跡、 粘土No.2	8	100	92	200	12	24	9	45	4%	50%	46%	100%	27%	53%	20%	100%
36	川北遺跡、 粘土No.3	7	96	97	200	18	21	17	56	4%	48%	49%	100%	32%	38%	30%	100%
37	馬宿川下流域、 礫(和泉系砂岩)	2	130	68	200	18	37	0	55	1%	65%	34%	100%	33%	67%	0%	100%
38	馬宿川下流域、 礫(和泉系砂岩)	5	155	40	200	118	5	0	123	3%	78%	20%	100%	96%	4%	0%	100%
39	馬宿川下流域、 礫(和泉系砂岩)	4	125	71	200	97	20	0	117	2%	63%	36%	100%	83%	17%	0%	100%
40	天王谷遺跡、 瓦中の礫、154	2	125	73	200	33	20	0	53	1%	63%	37%	100%	62%	38%	0%	100%
41	天王谷遺跡、 瓦中の礫、201	1	139	60	200	27	0	0	27	1%	70%	30%	100%	100%	0%	0%	100%
42	川北遺跡、 粘土No.1(焼結処理)	0	165	35	200	0	4	3	7	0%	83%	18%	100%	0%	57%	43%	100%
43	川北遺跡、 粘土No.2(焼結処理)	0	160	40	200	0	6	5	11	0%	80%	20%	100%	0%	55%	45%	100%
44	川北遺跡、 粘土No.3(焼結処理)	0	162	38	200	0	3	3	6	0%	81%	19%	100%	0%	50%	50%	100%

第10表 全鉱物組成分析結果一覧表(1)

No.	試料名	粒子含有数(%) ※(1)						備考
		火山ガラス	軽鉱物	重鉱物	岩片	その他	合計	
1	天王谷遺跡 平瓦I類、134 II区SF01	1	74	1	—	124	200	火山gl:珪長質pm≒bw型。31ヶ/薄片。色付、亀の甲gl含む。 軽鉱物:Kf、Qz、pl 重鉱物:Opx、Ghb、Zr 岩片: その他:赤褐色焼結土粒子。
		0.5	37.0	0.5	0.0	62.0	100.0	
2	天王谷遺跡 平瓦I類、133 II区SF01	4	112	1	—	83	200	火山gl:珪長質bw>pm型。74ヶ/薄片。 大部分が淡黄褐色に変色。 軽鉱物:Kf、Qz、pl 重鉱物:Opx、Ghb、Bt 岩片: その他:赤褐色焼結土粒子。Po含む。
		2.0	56.0	0.5	0.0	41.5	100.0	
3	天王谷遺跡 平瓦I類、152 II区SF02	0+	78	2	—	120	200	火山gl:珪長質bw>pm型。21ヶ/薄片。 約70%が淡黄褐色に変色。 軽鉱物:Kf、Qz、pl 重鉱物:Opx、Ghb、Bt 岩片: その他:赤褐色焼結土粒子。Po含む。
		tr	39.0	1.0	0.0	60.0	100.0	
4	天王谷遺跡 平瓦I類、154 II区SF02	1	47	1	—	151	200	火山gl:珪長質bw>pm型。44ヶ/薄片。変色gl少量。 軽鉱物:Kf、Qz、pl 重鉱物:Opx、Ghb、Bt 岩片: その他:黄土色焼結土粒子。Po含む。
		0.5	23.5	0.5	0.0	75.5	100.0	
5	天王谷遺跡 平瓦II類、296 II区SK12	1	76	1	—	122	200	火山gl:珪長質bw>pm型。27ヶ/薄片。変色gl少量。 軽鉱物:Kf、Qz、pl 重鉱物:Opx、Ghb、Zr、Bt 岩片: その他:黄褐色焼結土粒子。Po含む。
		0.5	38.0	0.5	0.0	61.0	100.0	
6	天王谷遺跡 平瓦II類、172 II区SF02	1	93	1	—	105	200	火山gl:珪長質bw型主。48ヶ/薄片。約75%が淡褐色に変色。 軽鉱物:Kf、Qz、pl 重鉱物:Opx、Ghb、Opx、Cpx、Zr 岩片: その他:赤褐色焼結土粒子。
		0.5	46.5	0.5	0.0	52.5	100.0	
7	天王谷遺跡 平瓦II類、171 II区SF02	0+	103	6	—	91	200	火山gl:珪長質bw>pm型。23ヶ/薄片。 約50%が淡褐~褐色gl。 軽鉱物:Kf、Qz、pl 重鉱物:Opx主。Bhb、Bt含む。 岩片: その他:赤褐色焼結土粒子。
		tr	51.5	3.0	0.0	45.5	100.0	
8	天王谷遺跡 平瓦II類、265 II区SK05	1	78	5	—	116	200	火山gl:珪長質bw>pm型。44ヶ/薄片。色付glは10-20%。 軽鉱物:Kf、Qz、pl 重鉱物:Opx主。Bhb、Zr、Bt含む。 岩片: その他:赤褐色焼結土粒子。
		0.5	39.0	2.5	0.0	58.0	100.0	
9	天王谷遺跡 丸瓦I類、271 II区SK05	0+	70	1	—	129	200	火山gl:珪長質bw>pm型。17ヶ/薄片。大部分のglは無色。 軽鉱物:Kf、Qz、pl 重鉱物:Opx、Ghb、Opx、Bt 岩片: その他:黄褐色焼結土粒子。Po含む。
		tr	35.0	0.5	0.0	64.5	100.0	
10	天王谷遺跡 丸瓦I類、393 II区北西部包含層	2	89	1	—	108	200	火山gl:珪長質bw>pm型。49ヶ/薄片。色付glは5%程度。 軽鉱物:Kf、Qz、pl 重鉱物:Opx、Ghb、Bt、Bhb、Zr 岩片: その他:黄褐色焼結土粒子。Po含む。
		1.0	44.5	0.5	0.0	54.0	100.0	

注:※(1) 上段:計測粒子数、下段:%、+は微量含むことを示す。

なお測定には、#120~250粒径の粒子を対象としています。

備考中の説明:bw:バブル・ウォール(扁平)、pm:パミス(軽石)、

Qz:石英、Kf:カリ長石、pl:斜長石、Cal:カルセドニー(玉髄)、

β-Qz:ベータ石英(高温石英)、Po:プラント・オパール、

鉱物の名称は重鉱物組成の表記と同じ。

第11表 全鉱物組成分析結果一覧表(2)

No.	試料名	粒子含有数 (%) ※(1)						備考
		火山ガラス	軽鉱物	重鉱物	岩片	その他	合計	
11	天王谷遺跡 丸瓦Ⅰ類、246 Ⅱ区SK04-①	0+	86	8	—	106	200	火山gl:珪長質bw型主。16ヶ/薄片。 軽鉱物:Kf、Qz、pl 重鉱物:Opq主。Zr少量。 岩片: その他:赤褐色焼結土粒子。
		tr	43.0	4.0	0.0	53.0	100.0	
12	天王谷遺跡 軒平瓦Ⅱ類、370 Ⅱ区北西部包含層	1	54	1	—	144	200	火山gl:珪長質bm>≒pw型。29ヶ/薄片。 軽鉱物:Qz、Kf、pl 重鉱物:Opq、GHb、Zr 岩片: その他:淡黄灰色焼結土粒子。Po含む。
		0.5	27.0	0.5	0.0	72.0	100.0	
13	天王谷遺跡 軒平瓦Ⅲ類、480 Ⅱ区SX02 ガリカケ	0+	42	2	—	158	202	火山gl:珪長質bw型主。10ヶ/薄片。 軽鉱物:Qz、Kf、pl 重鉱物:GHb、Zr、Opq、Opq 岩片: その他:灰白色焼結土粒子。Po含む。
		tr	20.8	1.0	0.0	78.2	100.0	
14	天王谷遺跡 軒平瓦Ⅲ類、373 Ⅱ区北西部包含層	0+	52	0+	—	148	200	火山gl:珪長質厚めbw型主。16ヶ/薄片。 軽鉱物:Kf、Qz、pl 重鉱物:微量のGHb、Zr、Opq 岩片: その他:灰白色焼結土粒子。Po含む。
		tr	26.0	tr	0.0	74.0	100.0	
15	天王谷遺跡 軒平瓦Ⅱ類、372 Ⅱ区北西部包含層	1	57	1	—	141	200	火山gl:珪長質やや厚めbw型。21ヶ/薄片。 軽鉱物:Kf、Qz、pl 重鉱物:GHb、Opq、Zr 岩片: その他:灰白色焼結土粒子。Po含む。
		0.5	28.5	0.5	0.0	70.5	100.0	
16	天王谷遺跡 軒平瓦Ⅱ類、374 Ⅱ区北西部包含層	1	40	0+	—	159	200	火山gl:珪長質bw型主。21ヶ/薄片。 軽鉱物:Qz、Kf、pl 重鉱物:GHb、Opq、Zr 岩片: その他:灰白色焼結土粒子。Po含む。
		0.5	20.0	tr	0.0	79.5	100.0	
17	天王谷遺跡 軒平瓦Ⅲ類、329 Ⅱ区SR01	1	56	1	—	142	200	火山gl:珪長質厚めbw型主。28ヶ/薄片。 軽鉱物:Qz、Kf、pl 重鉱物:GHb、Zr、Opq 岩片: その他:灰白色焼結土粒子。Po含む。
		0.5	28.0	0.5	0.0	71.0	100.0	
18	天王谷遺跡 軒平瓦Ⅱ類、201 Ⅱ区SK04	1	64	0+	—	135	200	火山gl:珪長質bw型主。29ヶ/薄片。淡褐色glは30%。 軽鉱物:Qz、Kf、pl 重鉱物:微量のBHb、Zr 岩片: その他:灰白色焼結土粒子。Po含む。
		0.5	32.0	tr	0.0	67.5	100.0	
19	天王谷遺跡 軒丸瓦Ⅰ類、292 Ⅱ区SK12	0+	54	0+	—	146	200	火山gl:珪長質bw型主。21ヶ/薄片。 軽鉱物:Qz、Kf、pl 重鉱物:GHb、Opq、Zr、BHb 岩片: その他:黄灰白色焼結土粒子。Po含む。
		tr	27.0	tr	0.0	73.0	100.0	
20	天王谷遺跡 軒丸瓦Ⅰ類、500 Ⅱ区上面精査	0+	55	0+	—	145	200	火山gl:珪長質bw>pm型。18ヶ/薄片。 軽鉱物:Qz、Kf、pl 重鉱物:BHb、Opq、GHb 岩片: その他:黄灰色焼結土粒子。Po含む。
		tr	27.5	tr	0.0	72.5	100.0	

注:※(1) 上段:計測粒子数、下段:%、+は微量含むことを示す。
 なお測定には、#120~250粒径の粒子を対象としています。
 備考中の説明:bw:バブル・ウォール(扁平)、pm:パミス(軽石)、
 Qz:石英、Kf:カリ長石、pl:斜長石、Cal:カルセドニー(玉髓)、
 β-Qz:ベータ石英(高温石英)、Po:プラント・オパール、
 鉱物の名称は重鉱物組成の表記と同じ。

第12表 全鉱物組成分析結果一覧表(3)

No.	試料名	粒子含有数 (%) ※(1)						備考
		火山ガラス	軽鉱物	重鉱物	岩片	その他	合計	
21	天王谷遺跡 軒丸瓦 I 類、410 II 区北西隅流入土	1	54	1	—	144	200	火山 gl: 珪長質 bw 型主。19ヶ／薄片。 軽鉱物: Kf、Qz、pl 重鉱物: Opq、GHb、Zr 岩片: その他: 褐灰色焼結土粒子。Po 含む
		0.5	27.0	0.5	0.0	72.0	100.0	
22	天王谷遺跡 鬼瓦、353 II 区 SR01	2	56	1	—	141	200	火山 gl: 珪長質 bw 型主。77ヶ／薄片。 軽鉱物: Qz、Kf、pl 重鉱物: Opq、GHb、Zr、BHB、Bt 岩片: その他: 黄灰色焼結土粒子。Po 含む。
		0.5	28.0	0.5	0.0	70.5	100.0	
23	天王谷遺跡 鬼瓦、502 II 区西壁側溝掘り	1	55	0+	—	144	200	火山 gl: 珪長質 bw 型。37ヶ／薄片。 軽鉱物: Qz、Kf、pl 重鉱物: GHb、Opq、Bt 岩片: その他: 黄褐色焼結土粒子。Po 含む。
		0.5	27.5	tr	0.0	72.0	100.0	
24	天王谷遺跡 雁振瓦、303 II 区 SK12	1	48	0+	—	151	200	火山 gl: 珪長質やや厚め bw 型主。27ヶ／薄片 軽鉱物: Qz、Kf、pl 重鉱物: GHb、Opq、Zr、Bt 岩片: その他: 黄褐色焼結土粒子。Po 含む。
		0.5	24.0	tr	0.0	75.5	100.0	
25	天王谷遺跡 雁振瓦、350 II 区 SR01	2	48	1	—	149	200	火山 gl: 珪長質 bw 型。46ヶ／薄片。 軽鉱物: Kf、Qz、pl 重鉱物: GHb、BHB、Zr、Bt 岩片: その他: 黄灰色焼結土粒子。Po 含む。
		1.0	24.0	0.5	0.0	74.5	100.0	
26	天王谷遺跡 雁振瓦、351 II 区 SR01	1	44	1	—	154	200	火山 gl: 珪長質 bw 型主。33ヶ／薄片。 軽鉱物: Qz、Kf、pl 重鉱物: GHb、Opq、Zr 岩片: その他: 褐色焼結土粒子。
		0.5	22.0	0.5	0.0	77.0	100.0	
27	天王谷遺跡 平瓦 (古代)、59 I 区 SD03	0+	37	0+	—	163	200	火山 gl: 珪長質厚い bw 型。7ヶ／薄片。 軽鉱物: Qz、Kf、pl 重鉱物: 微量の Opq、Zr 岩片: その他: 灰色焼結土粒子。
		tr	18.5	tr	0.0	81.5	100.0	
28	天王谷遺跡 布目 (平) 瓦、 304 I 区 SK12	2	32	1	—	165	200	火山 gl: 珪長質 bm>pw 型。39ヶ／薄片。 軽鉱物: Qz、Kf 重鉱物: BHB、Zr、Ox、GHb 岩片: その他: 褐色焼結土粒子。Po 含む。
		1.0	16.0	0.5	0.0	82.5	100.0	
29	天王谷遺跡 平瓦 (古代)、255 II 区 SK04	2	42	0+	—	156	200	火山 gl: 珪長質 bw 型。40ヶ／薄片。 軽鉱物: Qz、Kf 重鉱物: BHB、Opq、Zr、Bt 岩片: その他: 淡褐色焼結土粒子。Po 含む。
		1.0	21.0	tr	0.0	78.0	100.0	
30	天王谷遺跡 平瓦 (古代)、359 II 区 SR01	0+	27	0+	—	179	206	火山 gl: 珪長質ブロック状 gl。5ヶ／薄片。 軽鉱物: Qz、Kf 重鉱物: 微量の Zr、Opq 岩片: その他: 灰色焼結土粒子。Po 赤色のもの多く含む。
		tr	13.1	tr	0.0	86.9	100.0	

注: ※(1) 上段: 計測粒子数、 下段: %, +は微量含むことを示す。
 なお測定には、#120~250粒径の粒子を対象としています。
 備考中の説明: bw: バブル・ウォール (扁平)、pm: バミス (軽石)、
 Qz: 石英、Kf: カリ長石、pl: 斜長石、Cal: カルセドニー (玉髄)、
 β-Qz: ベータ石英 (高温石英)、Po: プラント・オパール、
 鉱物の名称は重鉱物組成の表記と同じ。

第13表 全鉱物組成分析結果一覧表(4)

No.	試料名	粒子含有数 (%) ※(1)						備考
		火山ガラス	軽鉱物	重鉱物	岩片	その他	合計	
31	辻田石垣遺跡 平瓦、H46 I区SX01	2	42	0+	—	156	200	火山gl：珪長質bw型主。53ヶ／薄片。ヒビワレ多し。 軽鉱物：Kf、Qz、pl 重鉱物：BHb、Zr、GHb 岩片： その他：褐色焼結土粒子。Po含む。
		1.0	21.0	tr	0.0	78.0	100.0	
32	辻田石垣遺跡 平瓦、H47 I区SX01	0+	54	5	—	141	200	火山gl：珪長質bw型。14ヶ／薄片。 軽鉱物：Kf、Qz、pl 重鉱物：Bt、GHb、Opq、主。Zr少量。 岩片： その他：暗灰～黒色焼結土粒子。Po含む。
		tr	27.0	2.5	0.0	70.5	100.0	
33	辻田石垣遺跡 軒平瓦、H106 I区包含層	1	66	0+	—	138	205	火山gl：珪長質厚めbw型主。20ヶ／薄片。 軽鉱物：Qz、Kf、pl 重鉱物：Bt、GHb、Opq主。Zr少量。 岩片： その他：灰色焼結土粒子。Po含む。
		0.5	32.2	tr	0.0	67.3	100.0	
34	川北遺跡 粘土 No. 1	5	98	2	—	95	200	火山gl：珪長質bw、pw型。118ヶ／薄片。K-Ahgl含むか。 軽鉱物：Qz、Kf、pl 重鉱物：Opq、GHb、Zr、Opx 岩片： その他：風化粒子。Po微量。Cal含むか。
		2.5	49.0	1.0	0.0	47.5	100.0	
35	川北遺跡 粘土 No. 2	6	92	2	—	100	200	火山gl：珪長質bw型。133ヶ／薄片。K-Ahgl含むか。 軽鉱物：Qz、Kf、pl 重鉱物：Opq、GHb、Zr、Opx 岩片： その他：風化粒子。Po微量。Cal含むか。
		3.0	46.0	1.0	0.0	50.0	100.0	
36	川北遺跡 粘土 No. 3	5	97	2	—	96	200	火山gl：珪長質bw、pm型。111ヶ／薄片。K-Ahgl含むか。 軽鉱物：Qz、Kf、pl 重鉱物：Opq、Bt、GHb、Opx、Zr 岩片： その他：風化粒子。Po微量。Cal含むか。
		2.5	48.5	1.0	0.0	48.0	100.0	
37	馬宿下流域 礫 No. 1	—	68	2	—	130	200	火山gl：まったく含まれず。 軽鉱物：Qz主。Kf、pl少量。 重鉱物：Opq、Bt、Zr、Ap 岩片： その他：風化粒子。
		0.0	34.0	1.0	0.0	65.0	100.0	
38	馬宿下流域 礫 No. 2	—	40	5	—	155	200	火山gl：まったく含まれず。 軽鉱物：Qz主。Kf、pl少量。 重鉱物：Bt主。Zr、Opq少量。 岩片： その他：風化粒子。
		0.0	20.0	2.5	0.0	77.5	100.0	
39	馬宿下流域 礫 No. 3	—	71	4	—	125	200	火山gl：まったく含まれず。 軽鉱物：Qz主。Kf、pl少量。 重鉱物：Bt、Opq、Zr 岩片： その他：風化粒子。
		0.0	35.5	2.0	0.0	62.5	100.0	
40	4' 天王谷遺跡 平瓦I類、154 II区SF02	—	73	2	—	125	200	火山gl：まったく含まれず。 軽鉱物：Qz主。Kf、pl少量。 重鉱物：Bt、Opq、Zr 岩片： その他：風化粒子。
		0.0	36.5	1.0	0.0	62.5	100.0	

注：※(1) 上段：計測粒子数、下段：%、+は微量含むことを示す。
 なお測定には、#120～250粒径の粒子を対象としています。
 備考中の説明：bw：バブル・ウォール（扁平）、pm：パミス（軽石）、
 Qz：石英、Kf：カリ長石、pl：斜長石、Cal：カルセドニー（玉髓）、
 β-Qz：ベータ石英（高温石英）、Po：プラント・オパール、
 鉱物の名称は重鉱物組成の表記と同じ。

第14表 全鉱物組成分析結果一覧表(5)

No.	試料名	粒子含有数 (%) ※(1)						備考
		火山ガラス	軽鉱物	重鉱物	岩片	その他	合計	
41	18天王谷遺跡 軒平瓦Ⅱ、201 Ⅱ区SK04	—	60	1	—	139	200	火山gl：まったく含まれず。 軽鉱物：Qz主。Kf、pl含む。 重鉱物：Bt（熱による変質含む） 岩片： その他：風化粒子。
		0.0	30.0	0.5	0.0	69.5	100.0	
42	34' 川北遺跡 粘土（800℃ 5 hr 焼結用） No. 1	0+	35	0+	—	165	200	火山gl：珩長質bw型gl微量。濃い着色gl含む。18ヶ／薄片。 軽鉱物：Qz、Kf、pl 重鉱物：微量のBHb、Opq、Zr、Btは分解し残らず。 岩片： その他：焼結土粒子。Po。
		tr	17.5	tr	0.0	82.5	100.0	
43	35' 川北遺跡 粘土（800℃ 5 hr 焼結用） No. 2	0+	40	0+	—	160	200	火山gl：珩長質bw型gl微量。濃い着色gl含む。18ヶ／薄片。 軽鉱物：Qz、Kf、pl 重鉱物：微量のBHb、Opq、Zr、Opx 岩片： その他：焼結土粒子。Po。
		tr	20.0	tr	0.0	80.0	100.0	
44	36' 川北遺跡 粘土（800℃ 5 hr 焼結用） No. 3	0+	38	0+	—	162	200	火山gl：珩長質bw型gl微量。濃い着色gl含む。20ヶ／薄片。 軽鉱物：Qz、Kf、pl 重鉱物：微量のBHb、Opq、Zr 岩片： その他：焼結土粒子。Po。
		tr	19.0	tr	0.0	81.0	100.0	

注：※(1) 上段：計測粒子数、 下段：%、+は微量含むことを示す。
 なお測定には、#120~250粒径の粒子を対象としています。
 備考中の説明：bw：バブル・ウォール（扁平）、pm：パミス（軽石）、
 Qz：石英、Kf：カリ長石、pl：斜長石、Cal：カルセドニー（玉髄）、
 β-Qz：ベータ石英（高温石英）、Po：プラント・オパール、
 鉱物の名称は重鉱物組成の表記と同じ。

第15表 重鉱物組成分析結果一覧表(1)

No.	試料名	粒子含有数 (%) ※(1)											備考
		Pyroxene			Amphibole		Opq	Cum	Zr	Bi	Ap	total	
		Ol	Opx	Cpx	BHo	GHo							
1	天王谷遺跡 平瓦I類、134 II区SF01	—	—	—	—	7	71	—	2	—	—	80	
		0.0	0.0	0.0	0.0	8.8	88.8	0.0	2.5	0.0	0.0	100.0	
2	天王谷遺跡 平瓦I類、133 II区SF01	—	—	—	1	—	50	—	—	1	—	52	
		0.0	0.0	0.0	1.9	0.0	96.2	0.0	0.0	1.9	0.0	100.0	
3	天王谷遺跡 平瓦I類、152 II区SF02	—	—	—	1	—	47	—	1	—	—	49	
		0.0	0.0	0.0	2.0	0.0	95.9	0.0	2.0	0.0	0.0	100.0	
4	天王谷遺跡 平瓦I類、154 II区SF02	—	—	—	—	7	23	—	—	3	—	33	
		0.0	0.0	0.0	0.0	21.2	69.7	0.0	0.0	9.1	0.0	100.0	
5	天王谷遺跡 平瓦II類、296 SK12	—	—	—	—	8	52	—	1	1	—	62	
		0.0	0.0	0.0	0.0	12.9	83.9	0.0	1.6	1.6	0.0	100.0	
6	天王谷遺跡 平瓦II類、172 II区SF02	—	1	1	—	4	51	—	1	—	—	58	
		0.0	1.7	1.7	0.0	6.9	87.9	0.0	1.7	0.0	0.0	100.0	
7	天王谷遺跡 平瓦II類、171 II区SF02	—	—	—	3	—	195	—	—	2	—	200	
		0.0	0.0	0.0	1.5	0.0	97.5	0.0	0.0	1.0	0.0	100.0	
8	天王谷遺跡 平瓦II類、265 II区SK05	—	—	—	3	—	195	—	1	1	—	200	
		0.0	0.0	0.0	1.5	0.0	97.5	0.0	0.5	0.5	0.0	100.0	
9	天王谷遺跡 丸瓦I類、271 II区SK05	—	1	—	—	3	38	—	—	2	—	44	
		0.0	2.3	0.0	0.0	6.8	86.4	0.0	0.0	4.5	0.0	100.0	
10	天王谷遺跡 丸瓦I類、393 II区北西部包含層	—	—	—	3	6	39	—	2	4	—	54	
		0.0	0.0	0.0	5.6	11.1	72.2	0.0	3.7	7.4	0.0	100.0	

注： ※(1) 上段：計測粒子数、下段：%
 なお各鉱物とその略称は以下のように対応します。
 Ol：カンラン石、Opx：斜方輝石、Cpx：単斜輝石、BHo：褐色普通角閃石、
 GHo：緑色普通角閃石、Opq：不透明（鉄）鉱物、Id：イディングサイト、Zr：ジルコン、
 Bi：黒雲母、Ap：アパタイト、Gar：ザクロ石、VG：火山ガラス、
 Zoisite：ユウレン石、Cum：カミングトン閃石、Epidote：緑レン石

第16表 重鉱物組成分析結果一覧表(2)

No.	試料名	粒子含有数 (%) ※(1)										備考	
		Pyroxene			Amphibole		Opq	Cum	Zr	Bi	Ap		total
		Ol	Opx	Cpx	BHo	GHo							
11	天王谷遺跡 丸瓦Ⅰ類、246 Ⅱ区SK04-①	—	—	—	—	—	198	—	2	—	—	200	
		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	99.0	0.0	1.0	0.0	0.0	100.0	
12	天王谷遺跡 軒平瓦Ⅱ類、370 Ⅱ区北西部包含層	—	—	—	—	13	17	—	5	—	—	35	
		0.0	0.0	0.0	0.0	37.1	48.6	0.0	14.3	0.0	0.0	100.0	
13	天王谷遺跡 軒平瓦Ⅲ類、480 Ⅱ区SX02 ガリカケ	—	1	—	—	13	2	—	3	—	—	19	
		0.0	5.3	0.0	0.0	68.4	10.5	0.0	15.8	0.0	0.0	100.0	
14	天王谷遺跡 軒平瓦Ⅲ類、373 Ⅱ区北西部包含層	—	—	—	—	6	1	—	3	—	—	10	
		0.0	0.0	0.0	0.0	60.0	10.0	0.0	30.0	0.0	0.0	100.0	
15	天王谷遺跡 軒平瓦Ⅱ類、372 Ⅱ区北西部包含層	—	—	—	—	13	3	—	3	—	—	19	
		0.0	0.0	0.0	0.0	68.4	15.8	0.0	15.8	0.0	0.0	100.0	
16	天王谷遺跡 軒平瓦Ⅱ類、374 Ⅱ区北西部包含層	—	—	—	—	12	2	—	1	—	—	15	
		0.0	0.0	0.0	0.0	80.0	13.3	0.0	6.7	0.0	0.0	100.0	
17	天王谷遺跡 軒平瓦Ⅲ類、329 Ⅱ区SR01	—	—	—	—	—	13	3	—	4	—	20	
		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	65.0	15.0	0.0	20.0	0.0	100.0	
18	天王谷遺跡 軒平瓦Ⅱ類、201 Ⅱ区SK04	—	—	—	3	—	—	—	1	—	—	4	
		0.0	0.0	0.0	75.0	0.0	0.0	0.0	25.0	0.0	0.0	100.0	
19	天王谷遺跡 軒丸瓦Ⅰ類、292 Ⅱ区SK12	—	—	—	1	9	3	—	3	—	—	16	
		0.0	0.0	0.0	6.3	56.3	18.8	0.0	18.8	0.0	0.0	100.0	
20	天王谷遺跡 軒丸瓦Ⅰ類、500 Ⅱ区上面精査	—	—	—	3	1	3	—	—	—	—	7	
		0.0	0.0	0.0	42.9	14.3	42.9	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	

注： ※(1) 上段：計測粒子数、下段：%
 なお各鉱物とその略称は以下のように対応します。
 Ol：カンラン石、Opx：斜方輝石、Cpx：単斜輝石、BHo：褐色普通角閃石、
 GHo：緑色普通角閃石、Opq：不透明（鉄）鉱物、Id：イデイングサイト、Zr：ジルコン、
 Bi：黒雲母、Ap：アパタイト、Gar：ザクロ石、VG：火山ガラス、
 Zoisite：ユウレン石、Cum：カミングトン閃石、Epidote：緑レン石

第17表 重鉱物組成分析結果一覽表(3)

No.	試料名	粒子含有数 (%) ※(1)											備考
		Ol	Pyroxene		Amphibole		Opq	Cum	Zr	Bi	Ap	total	
			Opx	Cpx	BHo	GHo							
21	天王谷遺跡 軒丸瓦Ⅰ類、410 Ⅱ区北西隅流入土	—	—	—	—	6	10	—	1	—	—	17	
		0.0	0.0	0.0	0.0	35.3	58.8	0.0	5.9	0.0	0.0	100.0	
22	天王谷遺跡 鬼瓦、353 Ⅱ区SR01	—	—	—	1	6	10	—	5	1	—	23	
		0.0	0.0	0.0	4.3	26.1	43.5	0.0	21.7	4.3	0.0	100.0	
23	天王谷遺跡 鬼瓦、502 Ⅱ区西壁側溝掘り	—	—	—	—	9	4	—	—	1	—	14	
		0.0	0.0	0.0	0.0	64.3	28.6	0.0	0.0	7.1	0.0	100.0	
24	天王谷遺跡 雁振瓦、303 Ⅱ区SK12	—	—	—	—	7	23	—	—	3	—	33	
		0.0	0.0	0.0	0.0	21.2	69.7	0.0	0.0	9.1	0.0	100.0	
25	天王谷遺跡 雁振瓦、350 Ⅱ区SR01	—	—	—	—	2	2	—	1	1	—	6	
		0.0	0.0	0.0	0.0	33.3	33.3	0.0	16.7	16.7	0.0	100.0	
26	天王谷遺跡 雁振瓦、351 Ⅱ区SR01	—	—	—	—	7	5	—	1	—	—	13	
		0.0	0.0	0.0	0.0	53.8	38.5	0.0	7.7	0.0	0.0	100.0	
27	天王谷遺跡 平瓦(古代)、59 Ⅰ区SD03	—	—	—	—	—	1	—	1	—	—	2	
		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	50.0	0.0	50.0	0.0	0.0	100.0	
28	天王谷遺跡 布目(平)瓦、 304 Ⅰ区SK12	—	1	—	15	1	—	—	6	—	—	23	
		0.0	4.3	0.0	65.2	4.3	0.0	0.0	26.1	0.0	0.0	100.0	
29	天王谷遺跡 平瓦(古代)、255 Ⅱ区SK04	—	—	—	5	—	3	—	2	1	—	11	
		0.0	0.0	0.0	45.5	0.0	27.3	0.0	18.2	9.1	0.0	100.0	
30	天王谷遺跡 平瓦(古代)、359 Ⅱ区SR01	—	—	—	—	—	1	—	3	—	—	4	
		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	25.0	0.0	75.0	0.0	0.0	100.0	

注： ※(1) 上段：計測粒子数、下段：%

なお各鉱物とその略称は以下のように対応します。

Ol：カンラン石、Opx：斜方輝石、Cpx：単斜輝石、BHo：褐色普通角閃石、
GHo：緑色普通角閃石、Opq：不透明(鉄)鉱物、Id：イデイングサイト、Zr：ジルコン、
Bi：黒雲母、Ap：アバタイト、Gar：ザクロ石、VG：火山ガラス、
Zoisite：ユウレン石、Cum：カミングトン閃石、Epidote：緑レン石

第18表 重鉱物組成分析結果一覧表(4)

No.	試料名	粒子含有数 (%) ※(1)											備考
		Ol	Pyroxene		Amphibole		Opq	Cum	Zr	Bi	Ap	total	
			Opx	Cpx	BHo	GHo							
31	遼田石垣遺跡 平瓦、H46 I区SX01	—	—	—	8	1	—	—	4	—	—	13	
		0.0	0.0	0.0	61.5	7.7	0.0	0.0	30.8	0.0	0.0	100.0	
32	遼田石垣遺跡 平瓦、H47 I区SX01	—	—	—	—	7	52	—	1	64	—	124	
		0.0	0.0	0.0	0.0	5.6	41.9	0.0	0.8	51.6	0.0	100.0	
33	遼田石垣遺跡 軒平瓦、H106 I区包含層	—	—	—	—	13	1	—	1	1	—	16	
		0.0	0.0	0.0	0.0	81.3	6.3	0.0	6.3	6.3	0.0	100.0	
34	川北遺跡 粘土 No. 1	—	2	—	—	12	20	—	4	11	—	49	
		0.0	4.1	0.0	0.0	24.5	40.8	0.0	8.2	22.4	0.0	100.0	
35	川北遺跡 粘土 No. 2	—	3	—	—	6	23	—	1	12	—	45	
		0.0	6.7	0.0	0.0	13.3	51.1	0.0	2.2	26.7	0.0	100.0	
36	川北遺跡 粘土 No. 3	—	1	—	—	16	20	—	1	18	—	56	
		0.0	1.8	0.0	0.0	28.6	35.7	0.0	1.8	32.1	0.0	100.0	
37	馬宿下流域 礫 No. 1	—	—	—	—	—	34	—	2	18	1	55	
		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	61.8	0.0	3.6	32.7	1.8	100.0	
38	馬宿下流域 礫 No. 2	—	—	—	—	—	2	—	3	118	—	123	
		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.6	0.0	2.4	95.9	0.0	100.0	
39	馬宿下流域 礫 No. 3	—	—	—	—	—	13	—	7	97	—	117	
		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	11.1	0.0	6.0	82.9	0.0	100.0	
40	4' 天王谷遺跡 平瓦I類、154 II区SF02	—	—	—	—	—	18	—	2	33	—	53	Btは赤褐色化し分解進む
		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	34.0	0.0	3.8	62.3	0.0	100.0	

注： ※(1) 上段：計測粒子数、下段：%
 なお各鉱物とその略称は以下のように対応します。
 Ol：カンラン石、Opx：斜方輝石、Cpx：単斜輝石、BHo：褐色普通角閃石、
 GHo：緑色普通角閃石、Opq：不透明（鉄）鉱物、Id：イデイングサイト、Zr：ジルコン、
 Bi：黒雲母、Ap：アパタイト、Gar：ザクロ石、VG：火山ガラス、
 Zoisite：ユウレン石、Cum：カミングトン閃石、Epidote：緑レン石

第19表 重鉱物組成分析結果一覧表(5)

No.	試料名	粒子含有数 (%) ※(1)											備考
		Pyroxene			Amphibole		Opq	Cum	Zr	Bi	Ap	total	
		Ol	Opx	Cpx	BHo	GHo							
41	18天王谷遺跡 軒平瓦Ⅱ、201 Ⅱ区SK04	—	—	—	—	—	—	—	—	27	—	27	Btは暗緑～暗緑褐色化し、分解進む。
		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	
42	34' 川北遺跡 粘土 (800℃ 5 hr 焼結用) No. 1	—	—	—	3	—	3	—	1	—	—	7	Btは熱分解しまったく検出されない。 またGHbも観察されない。
					tr		tr		tr			tr	
43	35' 川北遺跡 粘土 (800℃ 5 hr 焼結用) No. 2	—	1	—	4	—	3	—	3	—	—	11	Btは熱分解しまったく検出されない。 またGHbも観察されない。
			tr		tr		tr		tr			tr	
44	36' 川北遺跡 粘土 (800℃ 5 hr 焼結用) No. 3	—	—	—	3	—	2	—	1	—	—	6	Btは熱分解しまったく検出されない。 またGHbも観察されない。
					tr		tr		tr			tr	

注： ※(1) 上段：計測粒子数、下段：%
 なお各鉱物とその略称は以下のように対応します。
 Ol：カンラン石、Opx：斜方輝石、Cpx：単斜輝石、BHo：褐色普通角閃石、
 GHo：緑色普通角閃石、Opq：不透明（鉄）鉱物、Id：イディングサイト、Zr：ジルコン、
 Bi：黒雲母、Ap：アバタイト、Gar：ザクロ石、VG：火山ガラス、
 Zoisite：ユウレン石、Cum：カミングトン閃石、Epidote：緑レン石

番号	遺跡名	試料名	報文 番号	火 山 ガラス 含有率 (%)	AT、K-Ahガラス含有率			A T ガラス	K-Ah ガラス	ガラス 総 数	焼結粒子 の 色 調	備 考
					0%	50%	100%					
1	天王谷遺跡	平瓦Ⅰ類	134	1	AT	K-Ah		2	3	5	赤褐色	和泉系砂岩含有
2	天王谷遺跡	平瓦Ⅰ類	133	4				1	3	4	赤褐色	和泉系砂岩含有
3	天王谷遺跡	平瓦Ⅰ類	152	0+				0	3	3	赤褐色	—
4	天王谷遺跡	平瓦Ⅰ類	154	1				4	3	7	黄土色	和泉系砂岩含有
5	天王谷遺跡	平瓦Ⅱ類	296	1				4	8	12	黄褐色	—
6	天王谷遺跡	平瓦Ⅱ類	172	1				0	12	12	赤褐色	—
7	天王谷遺跡	平瓦Ⅱ類	171	0+				1	2	3	赤褐色	和泉系砂岩含有
8	天王谷遺跡	平瓦Ⅱ類	265	1				8	12	20	赤褐色	和泉系砂岩含有
9	天王谷遺跡	丸瓦Ⅰ類	271	0+				5	4	9	黄褐色	和泉系砂岩含有
10	天王谷遺跡	丸瓦Ⅰ類	393	2				10	6	16	黄褐色	—
11	天王谷遺跡	丸瓦Ⅰ類	246	0+				0	2	2	赤褐色	和泉系砂岩含有
12	天王谷遺跡	軒平瓦Ⅱ類	370	1				5	1	6	淡黄灰色	—
13	天王谷遺跡	軒平瓦Ⅲ類	480	0+				2	0	2	灰白色	—
14	天王谷遺跡	軒平瓦Ⅲ類	373	0+				2	2	4	灰白色	—
15	天王谷遺跡	軒平瓦Ⅱ類	372	1				2	1	3	灰白色	—
16	天王谷遺跡	軒平瓦Ⅱ類	374	1				4	0	4	灰白色	和泉系砂岩含有
17	天王谷遺跡	軒平瓦Ⅲ類	329	1				4	1	5	灰白色	—
18	天王谷遺跡	軒平瓦Ⅱ類	201	1				5	2	7	灰白色	和泉系砂岩含有
19	天王谷遺跡	軒丸瓦Ⅰ類	292	0+				2	7	9	黄灰白色	—
20	天王谷遺跡	軒丸瓦Ⅰ類	500	0+				5	4	9	黄灰色	—
21	天王谷遺跡	軒丸瓦Ⅰ類	410	1				9	6	15	褐灰色	—
22	天王谷遺跡	鬼瓦	353	2				7	2	9	黄灰色	—
23	天王谷遺跡	鬼瓦	502	1				5	5	10	黄褐灰色	—
24	天王谷遺跡	雁振瓦	303	1				2	5	7	黄褐灰色	—
25	天王谷遺跡	雁振瓦	350	2				2	3	5	黄灰色	—
26	天王谷遺跡	雁振瓦	351	1				8	3	11	褐灰色	—
27	天王谷遺跡	平瓦(古代)	59	0+				1	0	1	灰色	—
28	天王谷遺跡	布目(平)瓦	304	2				6	2	8	褐色	和泉系砂岩含有
29	天王谷遺跡	平瓦(古代)	255	2				5	0	5	淡褐色	—
30	天王谷遺跡	平瓦(古代)	359	0+				0	1	1	灰色	—
31	迹田石垣遺跡	平瓦	H46	2				7	4	11	褐色	—
32	迹田石垣遺跡	平瓦	H47	0+				3	1	4	暗灰~黒色	—
33	迹田石垣遺跡	軒平瓦	H106	1				4	0	4	灰色	和泉系砂岩含有
34	川北遺跡	粘土No.1	—	5				2	10	12	—	微砂含まない
35	川北遺跡	粘土No.2	—	6				2	11	13	—	微砂含む
36	川北遺跡	粘土No.3	—	5				1	10	11	—	微砂含む
37	馬宿川下流域	礫 (和泉系砂岩)	—	0				—	—	—	—	—
38	馬宿川下流域	礫 (和泉系砂岩)	—	0				—	—	—	—	—
39	馬宿川下流域	礫 (和泉系砂岩)	—	0				—	—	—	—	—
40	天王谷遺跡	瓦中の礫	154	0				—	—	—	—	和泉系砂岩含有
41	天王谷遺跡	瓦中の礫	201	0				—	—	—	—	和泉系砂岩含有
42	川北遺跡	粘土No.1 (焼結処理)	—	0+				—	—	—	—	電気炉で800℃.5hr焼結
43	川北遺跡	粘土No.2 (焼結処理)	—	0+				—	—	—	—	電気炉で800℃.6hr焼結
44	川北遺跡	粘土No.3 (焼結処理)	—	0+				—	—	—	—	電気炉で800℃.7hr焼結

第20表 火山ガラスの屈折率測定結果一覧表(1)

No.	報告名	1) 屈折率範囲		2) 屈折率 平均値	3) 測定 個体数 (個)	4) 屈折率 最頻値	5) 火山 ガラス 形態	6) 備考
		最小	最大					
1	天王谷遺跡 平瓦Ⅰ類、134 Ⅱ区SF01	1.4990 1.5083	1.4993 1.5093	1.4992 1.5067	2 3	—	H H	含有：VR 水和層：1-2 μ m
2	天王谷遺跡 平瓦Ⅰ類、133 Ⅱ区SF01	1.4989 1.5081	1.4989 1.5097	1.4989 1.5091	1 3	—	H H	含有：VR 水和層：1-2 μ m
3	天王谷遺跡 平瓦Ⅰ類、152 Ⅱ区SF02	1.5071	1.5090	1.5087	3	—	H	含有：VVR 水和層：1-2 μ m
4	天王谷遺跡 平瓦Ⅰ類、154 Ⅱ区SF02	1.4976 1.5079	1.4996 1.5094	1.4987 1.5088	4 3	—	H H	含有：VR 水和層：1-2 μ m
5	天王谷遺跡 平瓦Ⅱ類、296 SK12	1.4973 1.5051	1.4992 1.5096	1.4984 1.5079	4 8	—	H H	含有：VR 水和層：1-2 μ m
6	天王谷遺跡 平瓦Ⅱ類、172 Ⅱ区SF02	1.5083	1.5109	1.5095	12	—	H	含有：VR 水和層：1-2 μ m
7	天王谷遺跡 平瓦Ⅱ類、171 Ⅱ区SF02	1.4991 1.5083	1.4991 1.5090	1.4991 1.5086	1 2	—	H H	含有：VVR 水和層：1-2 μ m
8	天王谷遺跡 平瓦Ⅱ類、265 Ⅱ区SK05	1.4980 1.5077	1.5001 1.5102	1.4992 1.5089	8 12	—	H H	含有：VR 水和層：1-2 μ m
9	天王谷遺跡 丸瓦Ⅰ類、271 Ⅱ区SK05	1.4974 1.5078	1.5004 1.5091	1.4990 1.5086	5 4	—	H H	含有：VVR 水和層：1-2 μ m
10	天王谷遺跡 丸瓦Ⅰ類、393 Ⅱ区北西部包含層	1.4975 1.5081	1.4995 1.5096	1.4987 1.5087	10 6	—	H H	含有：VR 水和層：1-2 μ m

- ※ 1) 屈折率範囲：個体ごとの屈折率測定値を小数点第4位まで表示。ヒストグラム上で完全に分離され異なるグループとみなされるものは、グループごとに表示。未水和部の測定値には下線を付す。
- 2) 屈折率平均値：同一グループに属するとみなした場合の平均屈折率値、下線は未水和部の値。
- 3) 測定個体数：測定対象とした固体数。
- 4) 屈折率最頻値：ヒストグラム中で最頻値を判断し、四捨五入により小数第3位まで表示。
- 5) 火山ガラス形態：吉川(1976)に準拠し、H：扁平型、C：中間型、T：多孔質型に分けS定性的に示す。いずれにも属さないものをIt：不規則型とし、鉱物表面に付着するものを「付着」として表示。
- 6) 備考：火山ガラスの含有、水和の程度を定性的に示す。また試料固有の特徴について記載。火山ガラスの含有は、VA($\geq 95\%$)、A($\geq 60\%$)、C($\geq 10\%$)、R($\geq 5\%$)、VR($\geq 1\%$)、VVR($< 1\%$)、N(0%)の7段階に分類し表示する。

第21表 火山ガラスの屈折率測定結果一覧表(2)

No.	報告名	1) 屈折率範囲		2) 屈折率 平均値	3) 測定 個体数 (個)	4) 屈折率 最頻値	5) 火山 ガラス 形態	6) 備考
		最小	最大					
11	天王谷遺跡 丸瓦Ⅰ類、246 Ⅱ区SK04-①	1.5081	1.5102	1.5091	2	—	H	含有：VVR 水和層：1-2 μ m
12	天王谷遺跡 軒平瓦Ⅱ類、370 Ⅱ区北西部包含層	1.4988 1.5102	1.5001 1.5102	1.4992 1.5102	5 1	—	H H	含有：VR 水和層：1-2 μ m
13	天王谷遺跡 軒平瓦Ⅲ類、480 Ⅱ区SX02ガリカケ	1.4990	1.5001	1.4996	2	—	H	含有：VVR 水和層：1-2 μ m
14	天王谷遺跡 軒平瓦Ⅲ類、373 Ⅱ区北西部包含層	1.4996 1.5079	1.4999 1.5092	1.4998 1.5086	2 2	—	H H	含有：VVR 水和層：1-2 μ m
15	天王谷遺跡 軒平瓦Ⅱ類、372 Ⅱ区北西部包含層	1.5006 1.5090	1.5008 1.5090	1.5007 1.5090	2 1	—	H H	含有：VR 水和層：1-2 μ m
16	天王谷遺跡 軒平瓦Ⅱ類、374 Ⅱ区北西部包含層	1.4994	1.5000	1.4996	4	—	H	含有：VR 水和層：1-2 μ m
17	天王谷遺跡 軒平瓦Ⅲ類、329 Ⅱ区SR01	1.4983 1.5110	1.4996 1.5110	1.4991 1.5110	4 1	—	H H	含有：VR 水和層：1-2 μ m
18	天王谷遺跡 軒平瓦Ⅱ類、201 Ⅱ区SK04	1.4990 1.5090	1.4999 1.5110	1.4994 1.5096	5 2	—	H H	含有：VR 水和層：1-2 μ m
19	天王谷遺跡 軒丸瓦Ⅰ類、292 Ⅱ区SK12	1.4993 1.5086	1.4999 1.5104	1.4996 1.5096	2 7	—	H H	含有：VVR 水和層：1-2 μ m
20	天王谷遺跡 軒丸瓦Ⅰ類、500 Ⅱ区上面精査	1.4992 1.5093	1.5004 1.5096	1.4998 1.5095	5 4	—	H H	含有：VR 水和層：1-2 μ m

- ※ 1) 屈折率範囲：個体ごとの屈折率測定値を小数点第4位まで表示。ヒストグラム上で完全に分離され異なるグループとみなされるものは、グループごとに表示。未水和部の測定値には下線を付す。
- 2) 屈折率平均値：同一グループに属するとみなした場合の平均屈折率値、下線は未水和部の値。
- 3) 測定個体数：測定対象とした個体数。
- 4) 屈折率最頻値：ヒストグラム中で最頻値を判断し、四捨五入により小数第3位まで表示。
- 5) 火山ガラス形態：吉川(1976)に準拠し、H：扁平型、C：中間型、T：多孔質型に分けS定性的に示す。いずれにも属さないものをIt：不規則型とし、鉱物表面に付着するものを「付着」として表示。
- 6) 備考：火山ガラスの含有、水和の程度を定性的に示す。また試料固有の特徴について記載。火山ガラスの含有は、VA($\geq 95\%$)、A($\geq 60\%$)、C($\geq 10\%$)、R($\geq 5\%$)、VR($\geq 1\%$)、VVR($< 1\%$)、N(0%)の7段階に分類し表示する。

第22表 火山ガラスの屈折率測定結果一覧表(3)

No.	報告名	1) 屈折率範囲		2) 屈折率 平均値	3) 測定 個体数 (個)	4) 屈折率 最頻値	5) 火山 ガラス 形態	6) 備考
		最小	最大					
21	天王谷遺跡 軒丸瓦 I 類、410 II 区北西隅流入土	1.4980 1.5083	1.5002 1.5097	1.4989 1.5090	9 6	—	H H	含有：VR 水和層：1-2 μ m
22	天王谷遺跡 鬼瓦、353 II 区 SR01	1.4990 1.5085	1.5002 1.5091	1.4995 1.5088	7 2	—	H H	含有：VR 水和層：1-2 μ m
23	天王谷遺跡 鬼瓦、502 II 区西壁側溝掘り	1.4977 1.5082	1.5004 1.5098	1.4990 1.5090	5 5	—	H H	含有：VR 水和層：1-2 μ m
24	天王谷遺跡 雁振瓦、303 II 区 SK12	1.4983 1.5090	1.4993 1.5105	1.4988 1.5096	2 5	—	H H	含有：VR 水和層：1-2 μ m
25	天王谷遺跡 雁振瓦、350 II 区 SR01	1.4994 1.5077	1.5000 1.5092	1.4997 1.5086	2 3	—	H H	含有：VR 水和層：1-2 μ m
26	天王谷遺跡 雁振瓦、351 II 区 SR01	1.4985 1.5084	1.4999 1.5093	1.4992 1.5089	8 3	—	H H	含有：VR 水和層：1-2 μ m
27	天王谷遺跡 平瓦(古代)、59 I 区 SD03	1.4991	1.4991	1.4991	1	—	H	含有：VVR 水和層：1-2 μ m
28	天王谷遺跡 布目(平)瓦、304 I 区 SK12	1.4998 1.5087	1.5007 1.5096	1.4999 1.5091	6 2	—	H H	含有：VR 水和層：1-2 μ m
29	天王谷遺跡 平瓦(古代)、255 II 区 SK04	1.4976	1.4997	1.4989	5	—	H	含有：VR 水和層：1-2 μ m
30	天王谷遺跡 平瓦(古代)、359 II 区 SR01	1.5097	1.5097	1.5097	1	—	H	含有：VVR 水和層：1-2 μ m

- ※ 1) 屈折率範囲：個体ごとの屈折率測定値を小数点第 4 位まで表示。ヒストグラム上で完全に分離され異なるグループとみなされるものは、グループごとに表示。未水和部の測定値には下線を付す。
- 2) 屈折率平均値：同一グループに属するとみなした場合の平均屈折率値、下線は未水和部の値。
- 3) 測定個体数：測定対象とした個体数。
- 4) 屈折率最頻値：ヒストグラム中で最頻値を判断し、四捨五入により小数第 3 位まで表示。
- 5) 火山ガラス形態：吉川 (1976) に準拠し、H：扁平型、C：中間型、T：多孔質型に分け S 定性的に示す。いずれにも属さないものを It：不規則型とし、鉱物表面に付着するものを「付着」として表示。
- 6) 備考：火山ガラスの含有、水和の程度を定性的に示す。また試料固有の特徴について記載。火山ガラスの含有は、VA($\geq 95\%$)、A($\geq 60\%$)、C($\geq 10\%$)、R($\geq 5\%$)、VR($\geq 1\%$)、VVR($< 1\%$)、N(0%) の 7 段階に分類し表示する。

第23表 火山ガラスの屈折率測定結果一覧表(4)

No.	報告名	1) 屈折率範囲		2) 屈折率 平均値	3) 測定 個体数 (個)	4) 屈折率 最頻値	5) 火山 ガラス 形態	6) 備考
		最 小	最 大					
31	辻田石垣遺跡 平瓦、H46 I区SX01	1.4982	1.5003	1.4994	7	—	H H	含有：VR 水和層：1-2 μ m
		1.5073	1.5101	1.5088	4			
32	辻田石垣遺跡 平瓦、H47 I区SX01	1.4977	1.5004	1.4991	3	—	H H	含有：VVR 水和層：1-2 μ m
		1.5095	1.5095	1.5095	1			
33	辻田石垣遺跡 軒平瓦、H106 I区包含層	14981	14993	14989	4	—	H	含有：VR 水和層：1-2 μ m
34	川北遺跡 粘土 No. 1	1.4996	1.4999	1.4998	2	—	H H	含有：VR 水和層：1-2 μ m
		1.5097	1.5116	1.5109	10			
35	川北遺跡 粘土 No. 2	1.4991	1.5018	1.5005	2	—	H H	含有：VR 水和層：4-5 μ m が主
		1.5090	1.5115	1.5105	11			
36	川北遺跡 粘土 No. 3	1.4993	1.4993	1.4993	1	—	H	含有：VR 水和層：4-5 μ m が主
		1.5102	1.5119	1.5109	10			
37	馬宿下流域 礫 No. 1							測定対象より除く
38	馬宿下流域 礫 No. 2							測定対象より除く
39	馬宿下流域 礫 No. 3							測定対象より除く
40	4' 天王谷遺跡 平瓦 I類、154 II区SF02							測定対象より除く

- ※ 1) 屈折率範囲：個体ごとの屈折率測定値を小数点第4位まで表示。ヒストグラム上で完全に分離され異なるグループとみなされるものは、グループごとに表示。未水和部の測定値には下線を付す。
- 2) 屈折率平均値：同一グループに属するとみなした場合の平均屈折率値、下線は未水和部の値。
- 3) 測定個体数：測定対象とした固体数。
- 4) 屈折率最頻値：ヒストグラム中で最頻値を判断し、四捨五入により小数第3位まで表示。
- 5) 火山ガラス形態：吉川(1976)に準拠し、H：扁平型、C：中間型、T：多孔質型に分けS定性的に示す。いずれにも属さないものをIt：不規則型とし、鉱物表面に付着するものを「付着」として表示。
- 6) 備考：火山ガラスの含有、水和の程度を定性的に示す。また試料固有の特徴について記載。火山ガラスの含有は、VA($\geq 95\%$)、A($\geq 60\%$)、C($\geq 10\%$)、R($\geq 5\%$)、VR($\geq 1\%$)、VVR($< 1\%$)、N(0%)の7段階に分類し表示する。

第24表 火山ガラスの屈折率測定結果一覧表(5)

No.	報告名	1) 屈折率範囲		2) 屈折率 平均値	3) 測定 個体数 (個)	4) 屈折率 最頻値	5) 火山 ガラス 形態	6) 備考
		最小	最大					
41	18天王谷遺跡 軒平瓦Ⅱ、201 Ⅱ区SK04							測定対象より除く
42	34' 川北遺跡 粘土 (800℃ 5 hr 焼結用) NO. 1							測定対象より除く
43	35' 川北遺跡 粘土 (800℃ 5 hr 焼結用) No. 2							測定対象より除く
44	36' 川北遺跡 粘土 (800℃ 5 hr 焼結用) NO. 3							測定対象より除く

※ 1) 屈折率範囲：個体ごとの屈折率測定値を小数点第4位まで表示。ヒストグラム上で完全に分離され異なるグループとみなされるものは、グループごとに表示。未水和部の測定値には下線を付す。
 2) 屈折率平均値：同一グループに属するとみなした場合の平均屈折率値、下線は未水和部の値。
 3) 測定個体数：測定対象とした個体数。
 4) 屈折率最頻値：ヒストグラム中で最頻値を判断し、四捨五入により小数第3位まで表示。
 5) 火山ガラス形態：吉川(1976)に準拠し、H：扁平型、C：中間型、T：多孔質型に分けS定性的に示す。いずれにも属さないものをIt：不規則型とし、鉱物表面に付着するものを「付着」として表示。
 6) 備考：火山ガラスの含有、水和の程度を定性的に示す。また試料固有の特徴について記載。火山ガラスの含有は、VA(≥95%)、A(≥60%)、C(≥10%)、R(≥5%)、VR(≥1%)、VVR(<1%)、N(0%)の7段階に分類し表示する。

4. 胎土分析に対するコメント

今回の分析では下記の諸点について明らかにすることを目的とした。

- ①瓦の器種ごとに、また瓦の時期（古代、中世間で。中世でも軒平瓦Ⅱ類とⅢ類は時期差がある。）ごとに胎土に差があるか。
- ②辻田石垣遺跡（引田町所在）から出土した瓦と天王谷遺跡の出土瓦を比べて、胎土に差があるか。
- ③天王谷遺跡に近接する川北遺跡は同時期の集落であり、当時の遺構面より30cmほど下位で良質な粘土が採取される。天王谷遺跡の瓦はこれを用いたといえるか。
- ④瓦に含有される砂粒は肉眼観察では和泉系砂岩と判断される。これは妥当な判断であるか。

すでに分析者により報告されているが、以下ではこれについてコメントを行う。

①についてまず瓦の器種であるが、分析を行った平瓦Ⅰ・Ⅱ類、丸瓦Ⅰ類と軒平瓦Ⅱ・Ⅲ類、軒丸瓦Ⅰ類は胎土が異なるといえる。「第2節. 出土瓦の検討」で後述するが、これらは肉眼観察でも異なるタイプとしたものである。ただ、これは大まかな傾向であり、平瓦Ⅰ類は全て胎土①類しか使用しないといた厳密な対応関係は指摘できない。とはいえ、軒瓦は全て同タイプの胎土を持つためある程度平、丸瓦と胎土の使い分けを意識していたことが窺える。その他の鬼瓦、雁振瓦、中世布目瓦については資料数が少なく、数値がバラつくため比較できない。

時期については古代と中世の瓦では三角ダイヤグラムでのドットの位置に差があり肉眼観察でも胎土は異なる。よってあえて類似性を見出す必要性はないと考える。また軒平瓦Ⅱ・Ⅲ類では相互にドットが近接し、肉眼観察でも胎土に差はない。

②については試料18（天王谷 軒平瓦Ⅲ類）と33（辻田 軒平瓦Ⅲ類）が三角ダイヤグラムでのドットの位置が近接する。これらを同グループと考へても「矛盾はない。」とのコメントを分析者より得た。考古学的な所見では両者は同じタイプに分類できる軒平瓦であり、胎土も酷似しているため今回の成果はこれを補強したといえる。

③については今回の試料は異なる粘土であったようである。ただ、堆積粘土の成分は地点ごとに異質であるため川北遺跡付近の粘土が使用された可能性は残る。今後も比較が必要であろう。

④については相互の成分は類似するものと分析された。これは天王谷遺跡で製作された瓦を消費地で抽出する際、指標の1つにすることを目的として設定したものである。

第5章 まとめ

第1節 東讃地域の土師器の変遷

1. はじめに

香川県最東部に位置する引田、白鳥、大内町（東部3町）においては四国横断自動車道建設などに伴い中世遺跡の調査が行われ、資料の蓄積が進んでいる。ここでは、遺構の時期決定を行い、遺跡の集落変遷および瓦窯操業期の集落状況を把握するため東部3町の中世土師器についてその変遷を論じる。

ここで取りあげるのは供膳具である杯、小皿に限定する。方法としては杯をⅠ～ⅩⅢ類、小皿をⅠ～Ⅷ類に型式分類⁽¹⁸⁾したのに基づき、各町の資料を紹介し、共伴土器や型式のセット関係から各型式の時期幅を推定する。本遺跡の遺構の時期はこれに基づき、事実報告において述べた。なお型式間で系譜関係を推定したものは同じ類型に区分し、ギリシャ数字の後にa、bをつけた。

2. 杯、小皿の型式分類

〔杯〕

杯Ⅰ～ⅩⅠ類は底部をヘラ切り、ⅩⅡ、ⅩⅢ類は糸切りする。

杯Ⅰ～Ⅴ類は体部が直線的に外方に延び、強く外傾する。

杯Ⅰ類 やや深手の杯。口径13.0～14.0cm、器高3.5～4.0cm。

杯Ⅱ類 浅い皿状の杯。口径12.5～14.0cm、器高3cm前後。

杯Ⅲ類 外傾度が強い杯。口径11.5～12.5cm、器高3.5～4.0cm。

杯Ⅳ類 Ⅲ類に類似するが、これより傾きが弱く浅手の杯。口径10.5～12.0cm、器高3.0～3.5cm。器壁が薄い。

杯Ⅴ類 小型の杯。口径約9.0～10.0cm、器高1.5～2.0cm。器高が低く、器壁が薄い。外傾度には強弱がある。

杯Ⅵ～Ⅷ類は直線的な体部が弱く外傾する。

杯Ⅵ類 浅い皿状の杯。

Ⅵa類 口径14.0～15.0cm、器高約3.0～3.5cm。

Ⅵb類 口径12.0～13.0cm、器高約3.0～3.5cm。

杯Ⅶ類 Ⅵ類に類似するが、これより深手の杯。口径11.5～13.0cm、器高3.5～4.0cm。器高が高い。

杯Ⅷ類 Ⅶ類に類似するが、これより小型の杯。

Ⅷa類 口径約11cm、器高約3cm。器壁と内面の体、底部境が厚い。

Ⅷb類 口径10.0～12.0cm、器高3.0～3.5cm。器壁と内面の体、底部境が薄い。

Ⅷ'類 口径約9cm、器高約2.5cm。小型である。

杯Ⅸ～ⅩⅠ類は直立気味の体部が弱く内湾する。

杯Ⅸ類 体部の直立度が強く、浅手の杯。口径11.0～12.0cm、器高3.0～4.0cm。

杯 X 類 深手の杯。口径12.5～13.0cm、器高4.0～4.5cm。

杯 X I 類 深手の杯。口径約11.0～12.0cm、器高3.5～4.0cm。器壁が厚い。

杯 X II、X III 類は直線的な体部が弱く外傾する。

杯 X II 類 X III 類より浅手の杯。

X II a 類 口径11.5～12.0cm、器高約3.5～4.0cm。

X II b 類 口径12.0～12.5cm、器高3.0～3.5cm。X II a 類より体部の外傾度が強い。

杯 X III 類 深手の杯。

X III a 類 口径11.0～12.0cm、器高4.0～4.5cm。

X III b 類 口径11.0～12.0cm、器高4.0～4.5cm。X III a 類より体部の外傾度が強い。

[小皿]

小皿 I～III 類が底部をヘラ切り、IV～VII 類が糸切りする。VIII 類は不明である。

小皿 I、II 類は口縁部が強く外傾する。

小皿 I 類 口縁部が短い小皿。口径9.0～10.0cm。

小皿 II 類 口縁部が長めの小皿。口径約7.0～8.0cm。

小皿 III 類 口縁部が短く、直立気味の小皿。口径約6.0～7.0cm。器壁は薄い。

小皿 IV 類 口縁部が強く外傾し、長めの小皿。形態、法量的には II 類に類似する。口径7.0～8.0cm。

小皿 V 類 口縁部が短く、直立気味の小皿。形態、法量的には III 類に類似する。口径約8.0cm。

小皿 VI 類 口縁部が短く、ほぼ直立する小皿。口径約8.0cm。器壁は厚い。

小皿 VII 類 口縁部が極めて短く、ほぼ直立する小皿。口径約7.0cm。器壁は厚い。

小皿 VIII 類 口縁部が強く外傾し、長い小皿。形態的には杯 V 類に類似する。口径約7.5cm。器壁は薄い。

3. 資料紹介

以下では各町の資料について時期を追って遺構ごとに順に紹介する。なお、天王谷遺跡についても概要を記しており、調査区名から記載している。

〈引田町〉

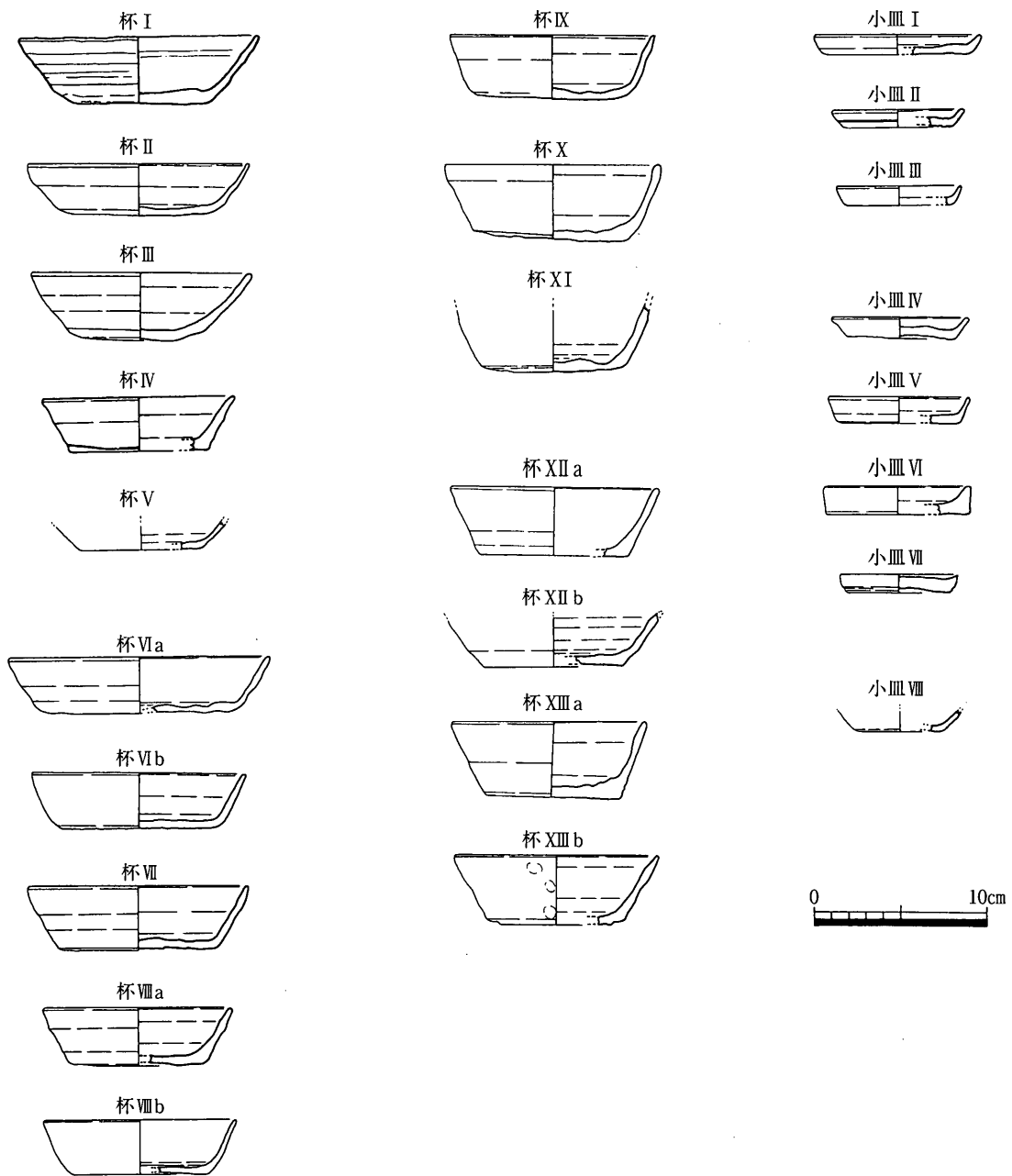
鹿庭遺跡 B 区 SX01⁽²⁰⁾ 礫が多く出土した性格不明遺構内で杯 IX 類が13世紀後半～14世紀前半に位置づけられる土師質土器土釜と共に床面付近から出土している。

I 区 SD06 溝から杯 VI b、VII、VIII a、IX 類、小皿 II 類が出土している。これらの出土状況は出土レベル、位置にばらつきがあり一括廃棄でないが、小規模であるためこれに準じるものと判断する。

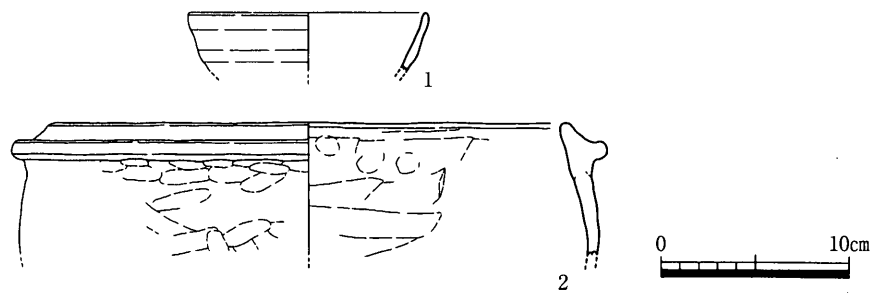
II 区 SK01 土坑から杯 VI b、VIII a、X I 類が出土している。これらの出土状況は墓への副葬品でなければ一括性があると判断できないものであるが、小規模であるためこれに準じるものとする。

I 区 SB15-SP375 柱穴から14世紀前半の東播系コネ鉢と共に杯 X II a 類、小皿 I 類が出土している。

I 区 SP154 柱穴から杯 V 類、小皿 III 類が出土している。



第173图 土師器杯・小皿分類图 (1/4)



第174图 鹿庭遺跡B区SX01 出土遺物 (引田町) (1/4)

I区SK10 土坑の2層で杯Ⅸ類が14世紀後半の平瓦片に隣接して出土している。

I区SB06-SP260 柱穴から杯Ⅸ類、小皿Ⅳ類が出土している。

II区SK04 14世紀後半の瓦を多量に廃棄した土坑から杯Ⅷb類、小皿Ⅲ類が出土している（瓦は2次的な集積である可能性があり、そうであればある程度の時期幅をもつ）。

II区SK12 SK04に隣接し、同様に14世紀後半の瓦を多量に廃棄した土坑から杯Ⅴ類が出土している。ごく少量の小片2点（277、279）であり、混入かもしれない。

I区SK11 土坑から15世紀前半の土師質土器土釜と共に杯ⅩⅡb、ⅩⅢb類、小皿Ⅳ類、Ⅶ類が出土している。

〈白鳥町〉

成重遺跡D3区第1遺構面SP33⁽²¹⁾ 柱穴内で土師器杯10点などが横方向に重ねられた状態で出土している。地鎮遺構と考えられ、一括性は高い。杯はいずれもⅠ類である。

善門池西遺跡Ⅷ区SX01⁽²²⁾ 溝状を呈する遺構であり、陶磁器片、焼けた壁土と共に土師器が出土している。焼失した家屋の壁土と土器、陶磁器を一括廃棄したとされている。

出土した杯はⅥb、Ⅷb、Ⅷ'、Ⅸ類、小皿はⅧ類がある。詳細は概報に譲るが、共伴する陶磁器は青磁碗・盤、白磁、中国産天目茶碗、古瀬戸緑釉小皿・平碗・おろし皿・筒形香炉・灰釉天目茶碗・鉄釉天目茶碗・直縁大皿・灰釉四耳壺・瓶子、丹波焼壺、備前焼壺・すり鉢などがある。黄瀬戸が藤沢編年⁽²³⁾で14世紀後半に位置づけられる。これは備前焼の年代観とも矛盾しない。

善門池西遺跡Ⅷ区SP03 柱穴内で土師器杯、小皿4枚が口縁部を下向きに上下に重ねられた状態で出土している。建物を復元できないため地鎮遺構とされており、一括性は高い。出土した杯はⅥb、Ⅷ'類、小皿はⅧ類である。

谷遺跡Ⅱ区第1遺構面SP01⁽²⁴⁾ 柱穴内で土師器杯3枚が口縁部を上向きに上下に重ねられた状態で出土している。洪武通宝を伴い、地鎮遺構と考えられるため一括性は高い。出土した杯はⅩ類である。

〈大内町〉

坪井遺跡SX07⁽²⁵⁾ 遺構の底面からやや浮いたレベルで土師器杯5点が口縁部を上に向けた状態で出土した。これらは下位に3点が並び、その上に2点が重ねられている。人為的な配置が想定されており、一括性は高い。出土した杯はⅡ、Ⅵb類である。

三殿出口遺跡Ⅰ-④区SK04⁽²⁶⁾ 土坑上面で土師器杯6枚が重ねられた状態で出土している。地鎮遺構の可能性が指摘されており、一括性は高い。出土した杯はいずれもⅦ類である。

坪井遺跡SD99 溝の底面からやや浮いたレベルで土師器杯2点が口縁部を上位に向けて並んだ状態で出土した。人為的な設置が想定されており、一括性は高い。出土した杯はⅢ類である。

金毘羅山遺跡Ⅱ区SB02-SP075⁽²⁷⁾ 柱穴から杯Ⅵb、Ⅷb、Ⅸ類、小皿Ⅲ類が出土している。瓦器皿が共伴する。

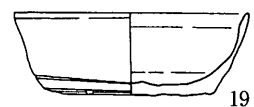
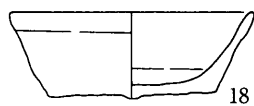
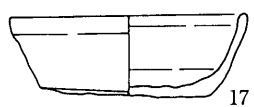
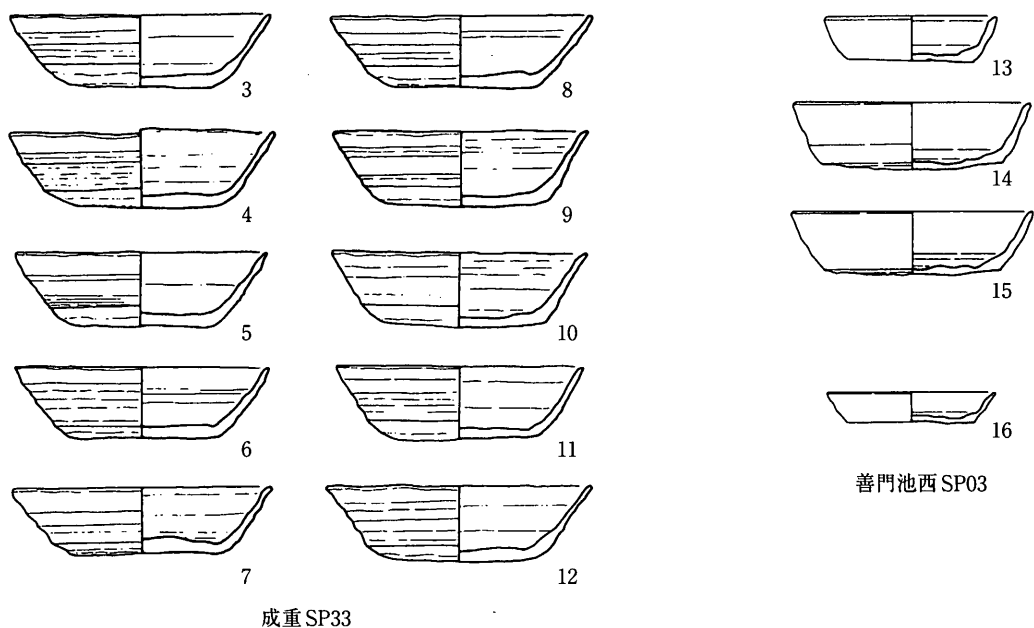
金毘羅山遺跡Ⅱ区SK05 土坑から杯Ⅲ、Ⅷb類、小皿Ⅲ類が出土している。

金毘羅山遺跡Ⅱ区SK06 土坑から14世紀前半の備前焼甕と共に杯Ⅳ類、小皿Ⅲ類が出土している。

金毘羅山遺跡Ⅱ区SB02-SP070 柱穴から小皿Ⅱ、Ⅲ類が出土している。

金毘羅山遺跡Ⅱ区SB05-SP062 柱穴から小皿Ⅱ、Ⅲ類が出土している。

金毘羅山遺跡Ⅱ区SX11 不整形な遺構であり、多量の完形に近い土師器の杯、小皿が炭、焼土と共に床面から浮いた状態で出土している。一括廃棄したと考えられる。出土した杯はⅣ、Ⅵb、Ⅷb、Ⅸ類、

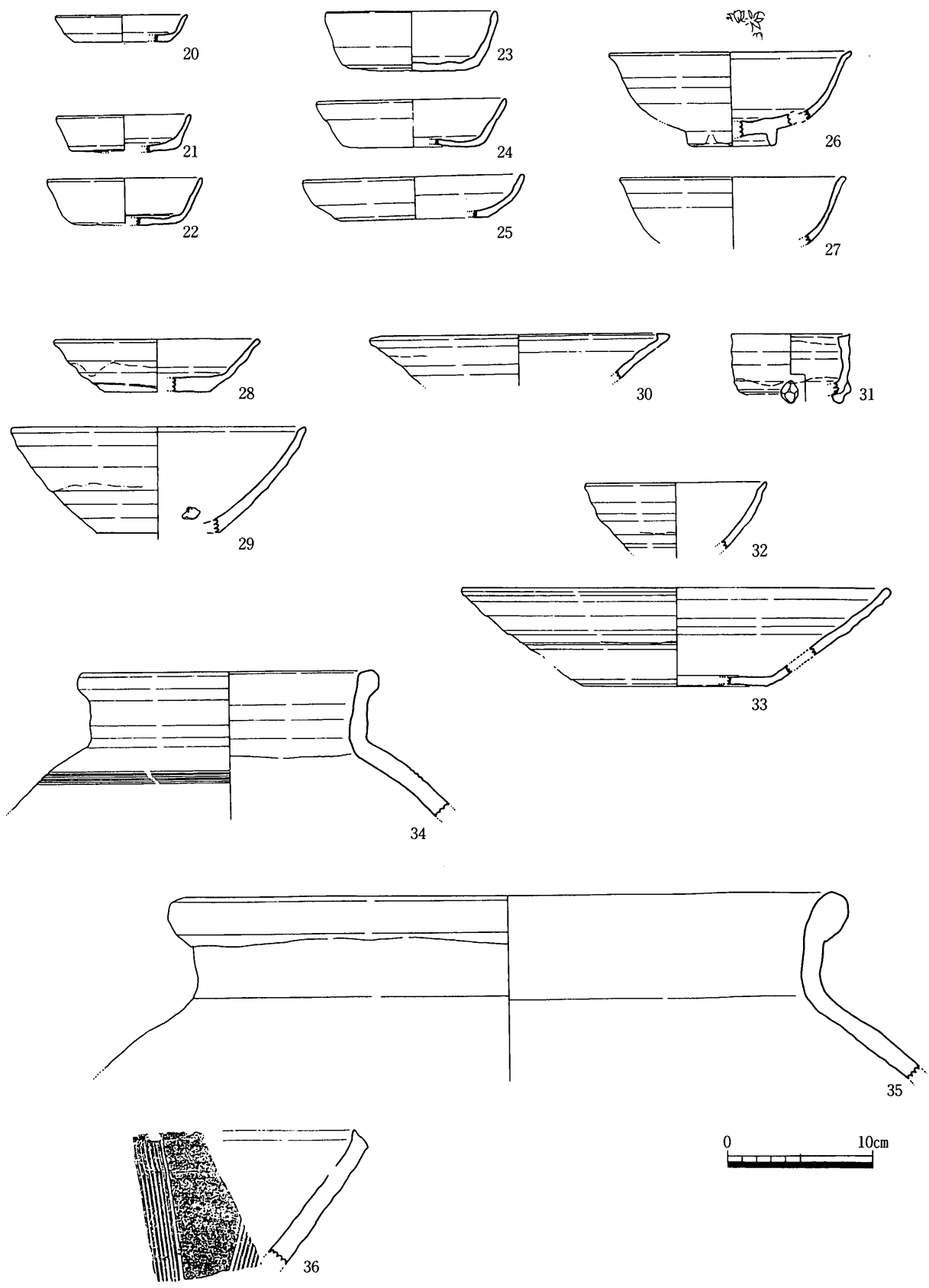


谷 SP01

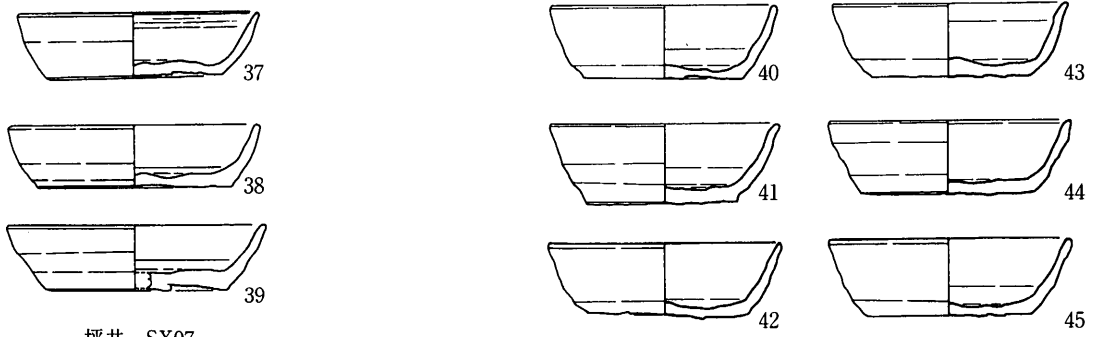
3~12 成重遺跡D3区第1遺構面SP33
 13~16 善門池西遺跡Ⅷ区SP03
 17~19 谷遺跡Ⅱ区SP01



第175図 成重・善門池西・谷遺跡 出土遺物 (白鳥町〔1〕) (1/4)

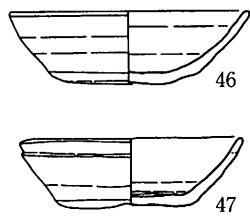


第176図 善門池西遺跡Ⅷ区 SX01 出土遺物 (白鳥町〔2〕) (1/4)

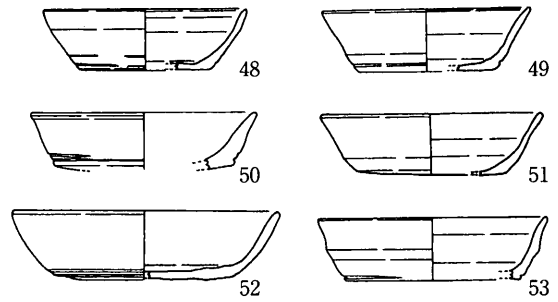


坪井 SX07

三殿出口 SK04



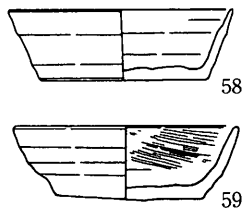
坪井 SD99



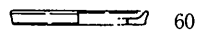
金毘羅山 SP075



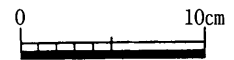
金毘羅山 SP070



金毘羅山 SK05



- 37~39 坪井遺跡 III区SK07
- 40~45 三殿出口遺跡 I-④西区SK04
- 46~47 坪井遺跡 II区SD99
- 48~55 金毘羅山遺跡 II区SB02-SP075
- 56~57 金毘羅山遺跡 II区SB02-SP070
- 58~60 金毘羅山遺跡 II区SK05



第177図 坪井・三殿出口・金毘羅山遺跡 出土遺物 (大内町〔1〕) (1/4)

小皿はⅡ、Ⅲ類がある。14世紀後半の土師質土器土釜を伴う。

4. 類型の時期比定

共伴土器から判断できる時期ごとに存在する型式を列挙すると以下ようになる。

13世紀後半～14世紀前半：杯Ⅸ類

14世紀前半：杯Ⅳ、Ⅴ、Ⅵb、Ⅷb、Ⅸ、XⅡa類、小皿Ⅰ、Ⅲ類
Ⅵb、Ⅶ、Ⅷa、Ⅷb、Ⅸ、

14世紀後半：杯Ⅳ、Ⅴ、Ⅵb、Ⅷb、Ⅷ'、Ⅸ、小皿Ⅱ、Ⅲ、Ⅷ類

15世紀前半：杯XⅡb、XⅢb類、小皿Ⅶ類

これらは混入した可能性があるものを一部含むが、各型式の時期幅をある程度反映している。これも踏まえて主要な型式の時期幅を押さえていく。

法量的に大きいものが古く位置づけられる傾向があるため、まず口径が12.5cm以上あるものについて述べる。該当するのは杯Ⅰ、Ⅱ、Ⅵa類である。杯Ⅰ類は高松平野以西を扱った佐藤編年の杯DⅡ-3類（12世紀後半～13世紀前半）に類似する。杯Ⅱ類は天王谷遺跡ではⅠ区SP499、Ⅱ区SR01などで出土している。引田町に隣接する徳島県上坂町の神宮寺遺跡⁽²⁸⁾に類例がある。A調査区のSO1001の物原で出土した杯は底部を糸切りし、法量は14cm台とやや大振りであるが、形態は類似する。12世紀後半の瓦器椀が共伴する。杯Ⅵa類は天王谷遺跡ではⅠ区SP284、Ⅱ区SR01などで出土している。板野町の古城遺跡⁽²⁹⁾に類例がある。C地点のSK1057で出土した杯は底部を糸切りするが、法量、器形とも類似する。12世紀後半の瓦器椀が共伴している。これらは他地域資料との類似性から12世紀後半～13世紀前半と考えられる。

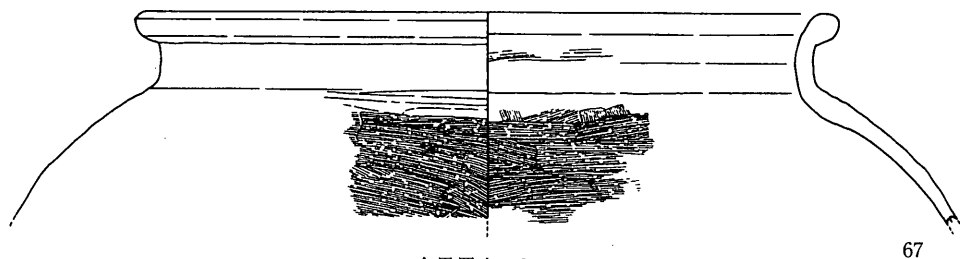
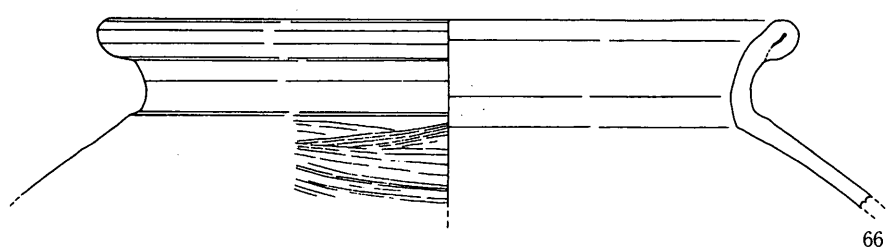
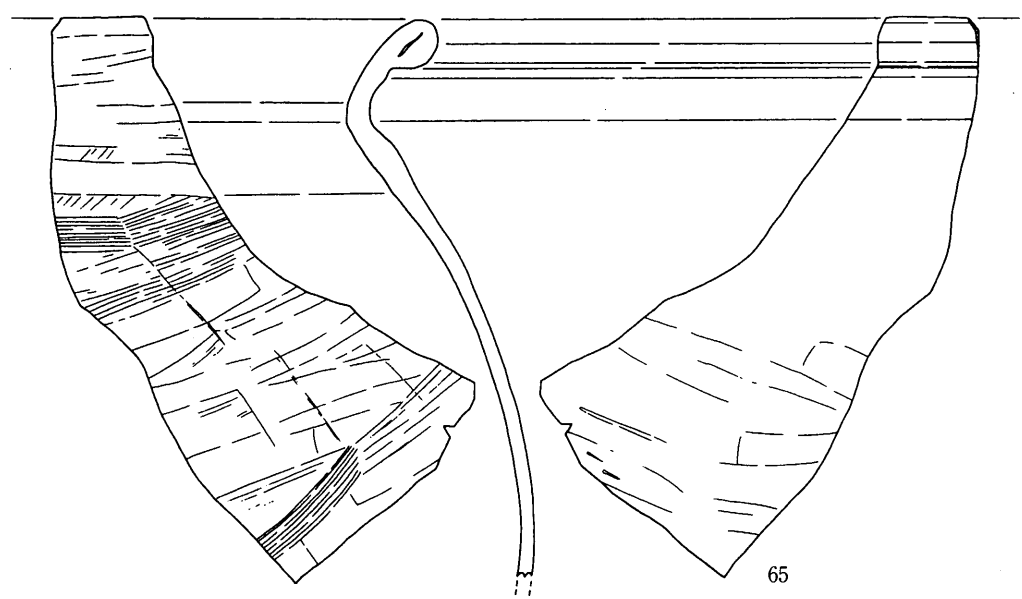
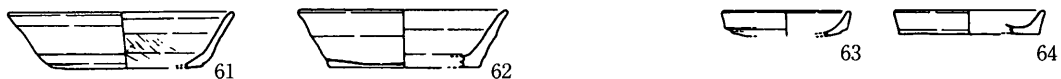
次に口径13cm以下と小振りのものについて述べる。Ⅵa類と形態的に類似するが、小型化するのがⅥb類である。坪井遺跡SX07でⅡ類と共伴するのが初現で、14世紀後半の善門池西遺跡SX01、金毘羅山遺跡SX11でも見られる。ただ、後者では組成に占める割合はごく少数となっており、時期幅は13世紀前半～14世紀前半ごろと考えられる。

Ⅷa類、Ⅷb類は法量、体部の傾きに差はないが、a類では器壁の厚さ、また体、底部境の内面が丸味を帯び、お厚いことに違いがある。14世紀後半の善門池西遺跡SX01、金毘羅山遺跡SX11などでb類しかないこと、後者では薄作りのものが一定量見られ、薄作りになることが型式変化の方向と考えられるため時期差と考えたい。時期幅はⅧa類が13世紀後半～14世紀前半、Ⅷb類が14世紀代と考えられる。

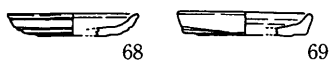
Ⅶ類はⅥb類よりやや深い、これに類似すること、天王谷遺跡Ⅰ区SD06でⅧa類と共伴することから13世紀後半から14世紀前半と考えられる。

Ⅸ類は13世紀後半～14世紀前半の鹿庭遺跡SX01で出土しているのが東部3町での初現である。だが、佐藤編年杯DⅢ-2類としてこの型式が設定されており、出土した高松市前田東・中村遺跡⁽³⁰⁾のSX04は13世紀後半とされている。よってこの時期に出現したと考えられる。また14世紀後半の善門池西遺跡SX01、金毘羅山遺跡SX11でも見られる。ただ、Ⅵb類と同様に後者ではごく少数となっており、時期幅は13世紀後半～14世紀前半ごろと考えられる。

V類は天王谷遺跡Ⅰ区SP154で出土しているものが佐藤編年杯D2-8類（14世紀前半）と類似する。また14世紀後半の天王谷遺跡Ⅱ区SK12でも出土している。後者は混入の可能性もあるが、一応時期幅を14世紀代としておく。

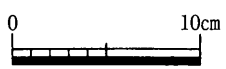


金毘羅山 SK06

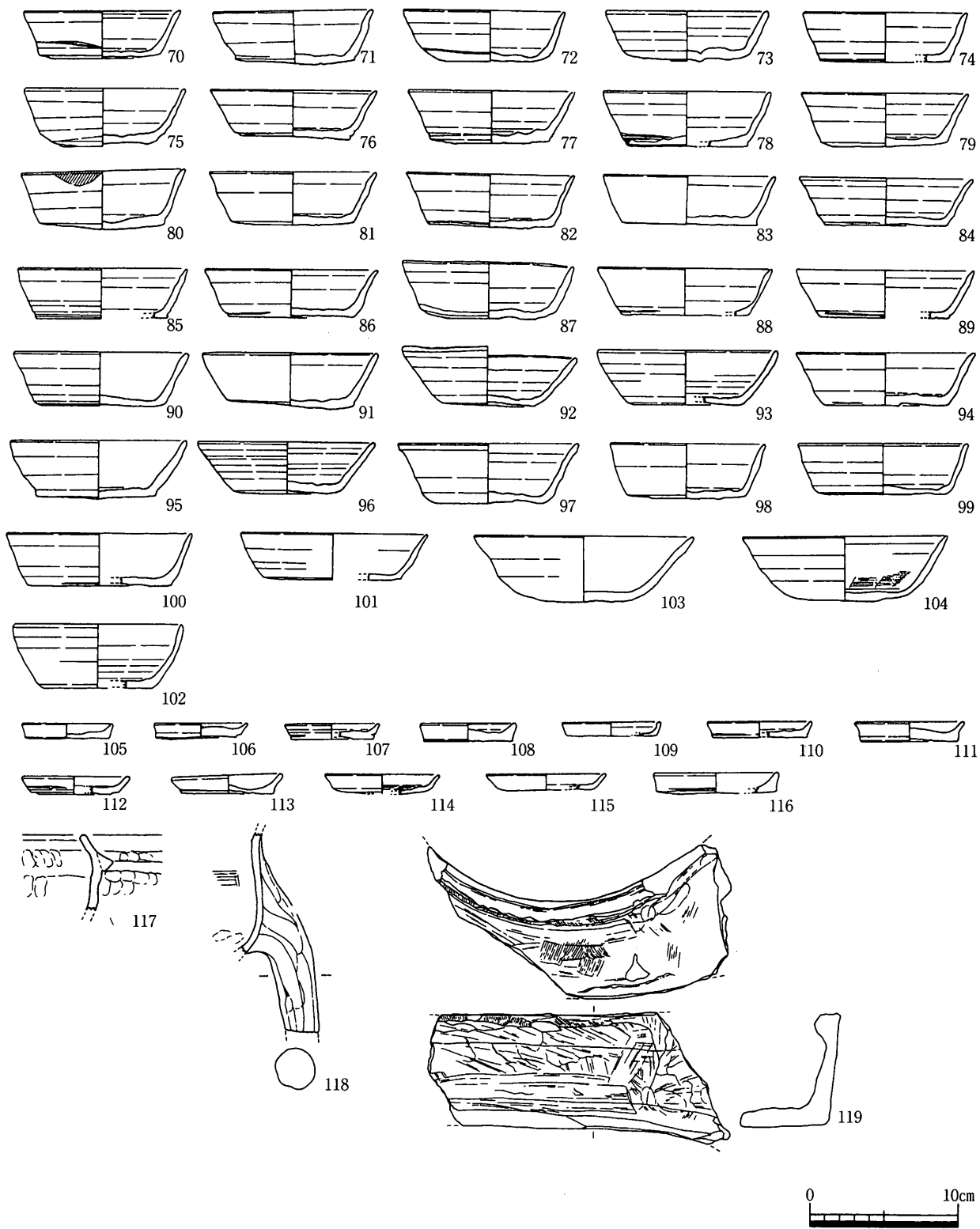


金毘羅山 SP062

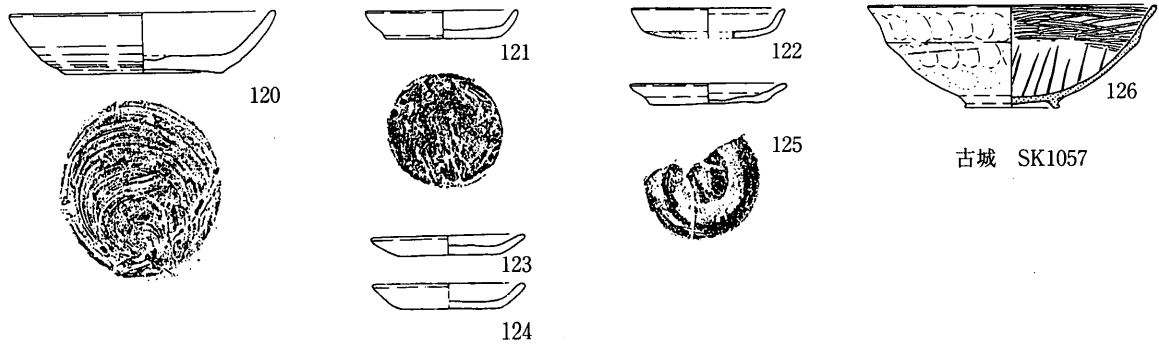
61~67 金毘羅山遺跡 II区SK06
68~69 金毘羅山遺跡 II区SB05-SP062



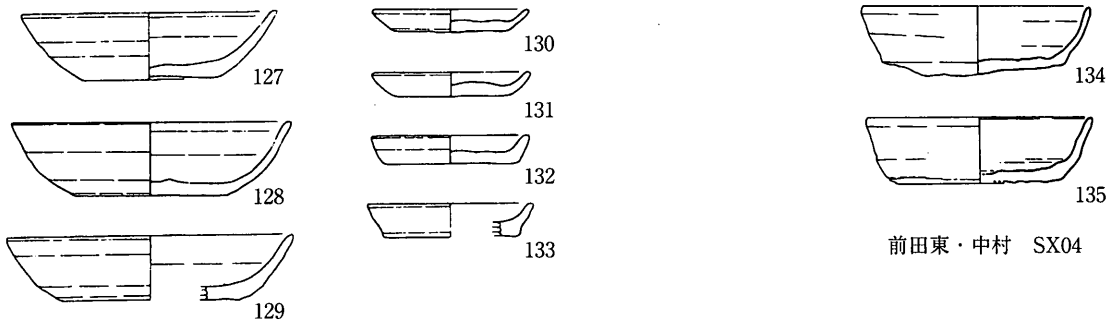
第178図 金毘羅山遺跡 出土遺物 (大内町〔2〕) (1/4)



第179図 金毘羅山遺跡Ⅱ区SX11 出土遺物（大内町〔3〕）（1/4）



古城 SK1057



神宮寺 SŌ1001

前田東・中村 SX04

- 120~126 古城遺跡 SK1057 (徳島県板野町)
 127~133 神宮寺遺跡 SŌ1001 (徳島県上板町)
 134~135 前田東・中村遺跡 SX04 (香川県高松市)



第180図 古城・神宮寺・前田東・中村遺跡 出土遺物 (1/4)

X II a (I区SP486などで出土)、X II b類とX III a、X III b類は法量に差はないが、共にb類では体部の傾きが強くなる。出土点数がごくわずかであるためX III a類が14世紀前半、X II a、b類が15世紀前半に存在するとのみ言え、時期幅については不明である。

小皿I類は出土遺構が限定されるため14世紀前半に存在するとしか言えない。II類は天王谷遺跡I区SD06で見られるので13世紀後半～14世紀前半が初現である。14世紀後半の金毘羅山遺跡SX11でも出土している。下限は明確でないが、13世紀後半～14世紀後半と考えておく。III類は14世紀後半の天王谷遺跡II区SK04などで出土しているが、上、下限は不明である。IV、V類はそれぞれII、III類と法量、形態が酷似する。よって同じ時期幅と考えておきたい。

VII類は口縁部の立ち上がりがほとんど消滅しており、法量からIVないしV類の後出的な形態であると推定できる。よって出土遺構(I区SK11)の時期と同じ15世紀前半と考えられる。下限は不明である。

以上から土師器の変化の方向性をまとめると杯は12世紀後半～13世紀前半に14cm台と大形で浅い皿状を呈するものが主体となっていた状況が13世紀後半～14世紀代にかけて小型化、薄作り化すると同時に形態、法量にバリエーションが増加したことが推定できる。小皿は杯以上に不明な点が多いが、15世紀代には口縁部が矮小化するものが見られる。こうした方向性は佐藤氏が高松平野以西で指摘した傾向と類似する。

5. 最後に

資料集成を行い編年を試みたが、果たせなかった。また各型式の時期幅を押さえるという作業も出現、消滅期について充分検証できていないものが多い。よって後述する天王谷遺跡の集落変遷についても非常に大まかにしか捉えられていない。このように今後に残る課題は多いが、現在も東部3町の遺跡は報告書作製が進行している。天王谷遺跡だけでなく当地域の遺跡を評価するためこれらも踏まえ、改めて編年を論じたい。

(註18) 高松平野以西の中世土器を佐藤氏が編年する際、行った方法に倣った⁽¹⁹⁾。資料数が少ないこともあるが、異なる町においても各類型で基本的な形態、法量に大きな差は見られない。このため地域差を捨象して型式設定している。

(註19) 佐藤竜馬「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 空港跡地遺跡Ⅳ』(財)香川県埋蔵文化財調査センター他 2000

(註20) 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第四十四冊 辻田石垣遺跡 辻田谷川下池遺跡 鹿庭遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センター他 2002

(註21) 「成重遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成10年度』(財)香川県埋蔵文化財調査センター他 1999

(註22) 「善門池西遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成11年度』(財)香川県埋蔵文化財調査センター他 2000

(註23) 藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅲ—古瀬戸前期様式の編年—」『(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要第3号』 1995

(註24) 「谷遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成11年度』(財)香川県埋蔵文化財調査センター他 2000

(註25) 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第四十冊 坪井遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センター他 2002

(註26) 「三股出口遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成11年度』(財)香川県埋蔵文化財調査センター他 2000

(註27) 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第三十六冊 金毘羅山遺跡 塔の山南遺跡 庵の谷遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センター他 2000

(註28) 『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書11 神宮寺遺跡』徳島県埋蔵文化財センター他 1994

(註29) 『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書8 古城遺跡』徳島県埋蔵文化財センター他 1994

参考文献

久保脇美朗「吉野川中下流域における中世前半期の土師器供膳具について」『論集 徳島の考古学』徳島考古学論集刊行会 2002

第2節 出土瓦の検討

1. 瓦の器種と類型

出土した中世瓦は28リットル入りコンテナにして約50箱あり、2基の窯があるⅡ区北部に集中(第25表)している。完形に近いものも一部含むが、多くはかなり破損している。瓦類は軒平瓦、軒丸瓦、平瓦、丸瓦、布目(平)瓦、雁振瓦、鬼瓦などの器種に分けられる。いずれも小型瓦であり、最も大きい雁振瓦が全長30cm強を測るが軒瓦、平、丸瓦は長さ25cm前後である。燻化瓦なので基本的に外面は黒灰色を呈し、断面は灰白色～黄橙色である。だが、酸化気味で断面がやや赤褐色を呈するものも多く見られる。胎土は粘土の粗密、砂粒の含有量により4種類に区分できる。以下、器種別に述べる。

〈軒平瓦〉

出土した軒平瓦は40点ある。瓦当は上下幅1.8cm程度、左右幅約16cmとほぼ同じで、文様はいずれも連珠文である。珠文の大きさ、珠文相互の、また圏線との間隔、配置が基本的に変わらず同文である。珠文の大きさは径約5mmだが、中央右側の珠文帯では径約7mmと大振りのものがⅣ類で2点(204、208)ある。また圏線の左下交差部が磨耗していないものではいずれも上下方向の圏線は交差部で止まるが、左右方向の圏線が外区へ突き出している。範傷については瓦当面が磨耗しているものが多いため同範関係を想定することはできなかつた。胎土は全てタイプ①の緻密でネットリしており、砂粒を少量含む、である。

なお、中央右側の珠文帯でやや大振りの珠文をもつものが見られることは2つの可能性を示す。1つは小振りの珠文を持つ瓦に同範瓦を含むが、焼成条件の差異などにより偶然この部分だけ大きく残ったという可能性。もう1つは異範という可能性である。同範関係を想定できなかつたこともあり、どちらが妥当であるかは不明である。分類は法量的には全長、顎の長さ、製作技術では顎後縁の面取り有無により4種類に区分できる。

〈軒平瓦Ⅰ類〉全長は20.5cmを測り、顎の下端幅は1.5cmである。瓦当成型法は不明であり、顎後縁に面取りを施さない。凸面にタテケズリを行った後、顎部瓦当裏面には幅約3cmに渡ってヨコナデを施す。顎と平瓦部がなす角度は直角に近い。凹面の布目痕はほとんどナデ消す。

〈軒平瓦Ⅱ類〉全長は約24cmを測り、顎の下端幅は2cmである。瓦当成型法は瓦当張り付けであり、顎後縁に面取りを施さない。凸面にタテケズリを行った後、顎部瓦当裏面にヨコナデを施す。顎と平瓦部がなす角度は直角に近い。凹面の布目痕はほとんどナデ消す。

〈軒平瓦Ⅲ類〉全長は完存するものがないため不明である。顎の下端幅は2cmを測る。瓦当成型法は瓦当張り付けであり、顎後縁に面取りを施す。凸面にタテケズリを行った後、顎部瓦当裏面にヨコナデを施す。顎と平瓦部がなす角度は直角に近い。凹面の布目痕はほとんどナデ消す。

〈軒平瓦Ⅳ類〉全長は25.5～27.0cmを測り、顎の長さは1.5cmである。瓦当成型法は瓦当張り付けであり、

顎後縁に面取りを施さない。凸面にタテケズリを行った後、顎部瓦当裏面にヨコナデを施す、幅約3cm程度のものがある。顎と平瓦部がなす角度は直角に近い。凹面の布目痕は磨耗していないものではほとんど残存する。

以上のように各類は瓦当文様、瓦当幅以外の形態、製作技術でも類似する。

《軒丸瓦》

出土した軒丸瓦は27点ある。瓦当は径約9cmと10.8cmの2種類がある。出土点数がごくわずかであるが、文様はいずれも内区に三つ巴文（右まわり）を、外区に連珠文を配する。巴の頭は互いにつかない。範傷については瓦当面が摩耗しているものが多く、不明である。

軒丸瓦は瓦当径、丸瓦部の長さにより2種類に区分できる。玉縁は良好に残存する個体がないため側縁の面取り有無については不明である。

〈軒丸瓦Ⅰ類〉瓦当径は約9cm、丸瓦部の長さは玉縁を一部欠くが、最も残りの良い290で23.2cmを測る。丸瓦部の製作技術は丸瓦Ⅰ類と同じである。胎土は軒平瓦と同じタイプ①の緻密でネットリしており、砂粒を少量含む、以外にタイプ②の粗くざらついた感じで、砂粒を多く含む、がある。335、409、500は同範である可能性が高い。

〈軒丸瓦Ⅱ類〉該当するのは408しかない。瓦当径は10.8cm、丸瓦部の長さは玉縁を一部欠くが、28cmを測る。丸瓦部の製作技術は丸瓦Ⅱ類と同じである。胎土はタイプ①の緻密でネットリしており、砂粒を少量含む、である。

《平瓦》

平瓦はいずれも長さ約24cm、広端幅約15cm、狭端幅約14cmとほぼ同じであるが、厚さは0.8～2.0cmと幅がある。凸面で糸切り、板ナデが見られ、凹面ではⅡ、Ⅲ類で布目痕がナデ消されず残存するものがある。両側縁と狭端面は全面をケズる。胎土はタイプ②の粗くざらついた感じで、砂粒を多く含む、とタイプ③の密で、砂粒を少量含む、がある。

厚さ、狭端面の面取り幅と胎土によって3種類に細分できる。

〈平瓦Ⅰ類〉厚さ0.8～1.2cm、狭端面のケズリ幅は約3mmである。胎土はタイプ②の粗くざらついた感じで、砂粒を多量に含む、である。

〈平瓦Ⅱ類〉厚さ1.2～1.6cm、狭端面のケズリ幅は約4～7mmである。胎土はタイプ②の粗くざらついた感じで、砂粒を多量に含む、タイプ③の密で砂粒を少量含む、の2種類がある。

〈平瓦Ⅲ類〉厚さ1.6～2.0cm、狭端面のケズリ幅は約7～12mmである。胎土はいずれもタイプ①の緻密でネットリしており、砂粒を少量含む、である。

《丸瓦》

丸瓦は玉縁の有無、全長、胴部長、胴部径、厚さと胎土により3種類に細分できる。いずれも凸面は縄目引き後板ナデし、凹面は糸切り後模骨に巻き付けて製作している。このため布目痕が明瞭に残るものが多い。両側縁、胴部下端はケズる。玉縁はほとんどが持ち、側縁を面取りするものがある。また玉縁を持たないものもごく少量ある。

〈丸瓦Ⅰ類〉玉縁を持ち、全長23.0～25.3cm、胴部長19.1～20.6cm、胴部径8.3～9.7cm、厚さ1.0～1.6cmを測る。玉縁の面取りは左右どちらにも見られ、胴部にまでは及ばない。片方だけと両方ケズるものがある。胎土はタイプ②の粗くざらついた感じで、砂粒を多量に含む、タイプ③の密で砂粒を少量含む、の2種類がある。Ⅰ'類はⅠ類より厚みがあり、側縁の面取り幅が約1.5cmと広いものである。

〈丸瓦Ⅱ類〉玉縁を持ち、全長27.2～27.8cm、胴部長22.3～23.7cm、胴部径9.6～10.6cm、厚さ1.4～2.0cmを測る。玉縁の面取りは左右両方に施すものが多いが、片側だけのものもある。やはり胴部にまでは及ばない。胎土はいずれもタイプ①の緻密でネットリしており、砂粒を少量含む、である。

〈丸瓦Ⅲ類〉玉縁を持たないものである。完存する個体がないため全長、胴部長は不明である。最も残りがよい182では胴部径は推定9.0cm、厚さ1.5cmを測る。先端部を左側だけ面取りする。胎土はタイプ②の粗くざらついた感じで、砂粒を多量に含む、である。法量、胎土はⅠ類に類似する。

《布目（平）瓦》

出土した布目瓦は8点ある。いずれもごく一部分であり、本来の法量、形状は不明である。外面に粗い縄目叩きが、内面に布目が残存する。色調は軒平瓦などに見られる灰白色で、胎土はいずれもタイプ①の緻密でネットリしており、砂粒を少量含む、である。

《雁振瓦》

出土した雁振瓦は10点ある。ほぼ完存する273では全長32.9cm、幅21.9cm、厚さ2.3cmを測る。凸面は板ナデを施す。凹面は糸切り痕、布目痕が見られる。玉縁は小振りで、左側縁に面取りを施す。（右は破損により不明）横断面に反りはない。色調軒平瓦などに見られる灰白色で、胎土はいずれもタイプ①の緻密でネットリしており、砂粒を少量含む、である。

《鬼瓦》

出土した鬼瓦は6点ある。いずれもごく一部であるため地板から鬼面が突出するタイプで、下端に削り込みを入れていたという以上は不明である。色調は灰白色であり、胎土はいずれも緻密でネットリしている。軒平瓦などに見られる胎土と類似するが、色調がさらに白味を帯び、胎土がきめ細かい。（タイプ④）

2. 瓦の属性、遺構内の共伴状況から見た製作期間

上記で瓦の器種ごとに類型設定を行った。次に各類型にどの程度時期差があるのかを検討する。瓦の属性については小型の瓦であること、軒瓦の瓦当文様がほぼ全て同文であること、各器種の類型は法量の一部に幅があるが、形態、製作技術で類似するものが多く、設定しうる類型が少ないこと（また丸瓦と軒丸瓦では丸瓦部が同じ）、異器種間でも多く同タイプの胎土が用いられることを述べた。これらのこと、特に軒瓦が各類型で相互に酷似することは大きな時期差がないことを示す。

続いて遺構内での共伴関係についても確認する（第25表）。Ⅱ区SF02では平瓦Ⅰ～Ⅲ類が最終操業時の窯詰め資料として共伴する。だが、これ以外の遺構出土資料は瓦窯という性格上、物原などにある程度の期間集積された遺物が2次的に廃棄された可能性を否定しきれない。こうした問題は残るが、遺構規模、共伴土器の時期、遺物出土状況などからその危険が低いと考える遺構を取り上げる。SF02では最終操業に伴わないが、焼成室床面直上堆積土より丸瓦Ⅲ類が、焼成室、燃焼室埋土より軒平瓦ⅠorⅣ類が1点ずつ出土している。Ⅱ区SK02では軒丸瓦Ⅰ類、平瓦Ⅰ、Ⅱ類、丸瓦Ⅰ、Ⅱ類が出土している。Ⅱ区SK05では平瓦Ⅰ～Ⅲ類、丸瓦Ⅰ、Ⅲ類、雁振瓦、鬼瓦が出土する。雁振瓦、鬼瓦については床面付近で出土位置も近接している。このようにごく少数の資料であり、時期的変化を反映しやすい軒瓦をほとんど含んでいないためもあるがこれらに時期差を示す排他的な器種のセットは見出せない。また「瓦の組み合わせ」で後述する通りその組み合わせは極めて限定的である。以上の瓦の属性、遺構内の共伴状況、瓦の組み合わせより瓦の製作期間は比較的短期間であったと考えられる。

第25表 出土瓦器種組成表

遺構名	軒平瓦					軒丸瓦		平瓦		丸瓦			中世布目瓦	雁振瓦	鬼瓦	不明	中世瓦合計	古代布目瓦
	I	II	III	IV	I or IV	I	II	I	II or III	I	II	III						
I区SB03									(1)								(1)	
I区SB13										1							1	
I区SK02																1	1	9
I区SK05										(1)							(1)	2
I区SK07																	0	
I区SK08								(4)	(3)								(7)	1
I区SK10									(1)								(1)	
I区SK11									2(2)								2(2)	
I区SK13									(1)								(1)	
I区SK14					3			(8)	(7)	(7)						1	4(2)	8
I区SK15								1		(1)							1(1)	
I区SD01								(1)		(1)							(2)	1
I区SD03																	0	1
I区SX01								1(3)	(6)								1(9)	
I区SP088									1								1	
I区SP095										(1)	(1)						(2)	
I区SP133																	1	
I区SP164										(1)							(1)	
I区SP230										(1)							(1)	
I区SP356								(1)									(1)	
I区SP501																	0	1
I区遺構外						3		7(4)	6(7)	7(6)			1	2		3	29(7)	12
II区SB03								(1)			(1)						(2)	
II区SA01								(1)									(1)	
II区SF01								12	60	15							87	
II区SF02					2			59	119	19		2					201	
II区SK02						1		9	8	8	2						28	
II区SK04	1	1	1	9	1	1		37	64	74							189	3
II区SK05					1			11	21	21		1		1	1		57	
I・II区SK12	1			1	2	5		9	16	36			1	1			72	
II区SD01										(1)							(1)	
I・II区SR01			1		4	6		87	102	118	13.5	2	6	3	3	1	346.5	7
II区北西部包含層					2	3		42	141.5	73.5	6.5			2	1		276.5	
II区北西隅流入土		4	1		1	2	1	13	204	44	61			1			329	
II区SX02		1	1		1			8	28	12	4						54	
II区SP090			1					1									1	
II区SP094						1		(2)									(2)	
II区遺構外					1	4		32	56	43	5				1	1	143	1
類型小計	3	5	6	10	16	26	1	329	828.5	471.5	92	5	8	10	6	8	1825	47
器種合計	40					27		1157.5		568.5			8	10	6	8	1825	47

- ①軒平瓦、軒丸瓦は瓦当数平瓦、丸瓦は隅数鬼瓦、雁振瓦、中世布目(平)瓦、不明、古代布目瓦は破片数を計測。
 ②非実測平瓦の破片数計測においてII、III類は明確に区分できないものが多いため一括する。(厚さが境界付近で微妙、胎土も酷似し、割れ口も磨耗しているため判断がつかないものが多い)
 ③丸瓦I'類はII類に含む。(厚さ、胎土で酷似し、判断できないものが多い)
 ④()は出土瓦数が少ない遺構で、破片数を計上したものの。
 ⑤表中の0.5はSR01と北西隅流入土のどちらから出土したか不明な瓦が計16点あり、これらを2分してそれぞれの器種に加算したため。

3. 瓦の組み合わせ

これまでの検討で器種内の類型は数種類ずつあり、これらの時期幅は小さいこと、同時併存するものが多いことを確認できた。これを受けて各種類の瓦の組み合わせであるが、平瓦および軒平瓦の全類型はいずれも幅約15cmを測り、相互に全ての組み合わせが可能である。丸瓦、軒丸瓦は胴部径、玉縁径の大小からⅠ類同士、Ⅱ類同士が組み合う。

4. 製作時期

以下は鬼瓦以外については奈良文化財研究所の山崎信二氏、鬼瓦については榑瓦宇工業所の小林章男氏のご教示による。両氏からのご教示については“ ”をつけている。なお、以下の内容について事実誤認があれば、執筆者の責任である。軒平瓦については“瓦当の連珠文が大振りであることから13世紀前半でも違和感はない。一方、顎後縁を面取りしている（註 天王谷遺跡軒平瓦Ⅲ類）ものがある。これは14世紀後半以降に見られる特徴である。”先に「瓦の属性、遺構内の共伴状況と製作期間」で述べたとおり、軒平瓦でもⅢ類とその他の類型は同文であり、法量、形態、製作技術で類似し、胎土は同タイプである。このため時期差があるとしてもさほど大きいとは考えられない。

軒丸瓦については“瓦当の巴文から14世紀末頃に位置づけられる。”また丸瓦については玉縁側縁に面取りするものが一定量含まれる。この範囲が“胴部上端にまで及ぶものは15世紀に入って出現するが、玉縁だけに見られるので15世紀代までは下らない。香川県でも1401年に建立された三豊郡仁尾町の常德寺円通殿の軒丸瓦では胴部にまで達する面取りが行われている。”

鬼瓦については“畿内の年代観で言えば、脚部の跳ね返りが上に反るのは室町時代以降、形態的には桃山期のものと類似する。調整については裏面に板目が残存し、ナデ消されていないが、これは鎌倉時代によく見られる。これらから形態的に溯っても15世紀初頭ごろであると考えが、四国はずいぶん様相が異なるため躊躇する部分がある。”

以上をまとめると軒平瓦から14世紀後半、軒丸瓦から14世紀末、丸瓦から15世紀代までは下らない、となる。あくまでも全国的な編年から見た時期比定であるため本来は県内の瓦編年や土師器編年によりこれを検証すべきである。だが、前者は行えておらず、後者は先述の通り不十分なものである。現時点では窯に近接するⅡ区SK02で14世紀後半に位置づけられる土師質土器土釜が軒丸、平、丸瓦と共伴し、いずれもあまりローリングを受けていないこと、Ⅰ区SK11で15世紀前半の土師質土器土釜が強く磨滅した平瓦片4点と共伴することをもってこの時期比定を適用できると判断する。

なお、後述するが窯の操業期間は比較的短いと判断するので14世紀後半でも末に近い頃と考える。鬼瓦については出土遺構であるSK05で軒平瓦Ⅰ or Ⅳ類、丸瓦Ⅰ、Ⅲ類と共伴すること、遺跡全体でも丸瓦の玉縁を面取りするものに胴部まで及ぶものがないことからこの時期に属すると考える。

5. 瓦の供給先について

天王谷遺跡の中世瓦がどこに供給されたかについては不明である。これは遺跡内の緩斜面は概ね調査対象地となっているものの瓦の集中出土地点は窯付近に限定され、瓦を使用したことが想定できる建物を確認できなかったこと、県内の中世瓦を集成できていないことによる。（ただ、引田町内では周知の中世〔段階で存在した〕寺院、中世瓦の表採資料はない。）これに関連して上原氏が平安時代後期以降の瓦生産と供給先の関係について県内の状況をまとめている⁽³¹⁾。後でも触れるが中世期にはⅡ区SF01、

02のような小型窯は近傍に位置する社寺への供給を目的としたものが多いようである。

なお、天王谷遺跡の瓦が持ち込まれた遺跡として辻田石垣遺跡がある。遺跡は引田町引田に所在し、天王谷遺跡からは約2km南側に位置する。12世紀後半～16世紀代にかけて営まれた集落跡であり、20棟の掘立柱建物、土坑墓などを検出している。寺院関係の遺構は確認できず、瓦も出土点数が3点であるためこれを用いた施設の存在は想定できない。

このうち天王谷遺跡で製作された瓦は2点ある。I区包含層出土の軒平瓦1点（胎土分析試料番号33）、I区SX02出土の平瓦1点（同試料番号31）である。33は瓦当成型法が不明であるが、連珠文をもち、顎後縁を面取りする。中央右側の珠文帯は小振りであり、天王谷遺跡の軒平瓦Ⅲ類に該当する。範傷は中央珠文帯の右側で見られるが、天王谷遺跡出土軒平瓦で合致するものはない。

31は厚さ1.4cmを測る。凸面は糸切り、板ナデする。胎土は密で砂粒を少量含む。天王谷遺跡の平瓦Ⅱ類に該当する。

（註31）上原真人「平安京周辺の平安時代後期瓦の様相—生産地認定法と在地消費をめぐって—」『第4回摂河和泉古代寺院研究会フォーラム 中世寺院の幕開け—11、12世紀の寺院の考古学的研究—』2001

参考文献

山崎信二『中世瓦の研究』2000

第3節. 遺構の変遷（第181図）

1. はじめに

天王谷遺跡では中世及び近世後半から近代にかけての遺構、遺物を多く確認した。ここでは中世期の遺構変遷を瓦窯が形成された14世紀後半を中心に検討する。目的は内部に窯が形成されたという点で特殊な集落がその建物構成や規模、構造などでどのような特徴をもつかを明らかにすることである。以下ではI期：12世紀後半～13世紀代、II期：14世紀代、III期：15世紀～16世紀に区分して記述する。

また、説明の都合上、検出した掘立柱建物を床面積で4つに区分した。

極小型：～10㎡（11基） 小型：10～20㎡（10基） 中型：20～30㎡（2基） 大型：40㎡以上（1基）このように大部分の建物は極小、小型に含まれ、大型のものは1棟しか見られない。

なお、検出した遺構（特に掘立柱建物）は時期決定できる出土遺物がなく、さほど切り合わないものも多い。このため瓦が出土した14世紀後半の遺構は比較的多く時期比定できたが、それ以外の時期の遺構は限定できないものが多数あることをお断りしておく。

2. 遺構の変遷

I期（12世紀後半～13世紀代）

この時期に属する遺構はI区SB10、SD07がある。以後、集落域の中心となる場所に遺構が形成されている。SB10は小型の総柱建物であり、これを倉庫と考えれば、伴う居住用建物が存在した可能性がある。I、II区SR01からはこの時期の遺物も出土しており、すでに流下していたと考えられる。

中世II期（14世紀）

14世紀前半に限定できる遺構としてI区SB15が、14世紀代の遺構としてI区SB06、09がある。他に

この時期までに形成された遺構にはⅠ区SB02、07、Ⅰ区SD06、Ⅱ区SK01がある。Ⅰ区SD06ではコンテナ半箱程度とその他の遺構と比べややまとまった量の遺物が土師器を中心に出土しており、この時期には集落が形成されていたと考えられる。またⅡ区SK01はこれに伴う土坑墓の可能性もある。

14世紀後半の遺構群は大きく3つに分けられる。①2基の瓦窯（Ⅱ区SF01、02）を中心とし、これに近接する工房、作業ヤード（Ⅱ区SB01、Ⅱ区SK05・06）、土坑（Ⅱ区SK02）、物原（北西部包含層、北西隅流入土）からなる北部の瓦製作域、②南部に展開する掘立柱建物群を中心とする集落域、③両者の間に位置する土坑群（Ⅰ区SK05、Ⅱ区SK04、Ⅰ、Ⅱ区SK12）である。①では各遺構が相互に結びつき、一連の操業活動（製作、保管、焼成、選別と廃棄）が行われたと考えられる。③は性格が不明であるが、先述の通りSK04、12は有機的な関係にあったことが推定され、規模、形態からもSK05とは異なる性格をもつかもしれない。

②は柱穴の空白部（Ⅰ区SK08、13付近）を境に西、東の2つの建物群に区分できる。この時期に限定できるのは西群でⅠ区SB03、Ⅰ区SK10、15、Ⅰ区SD01が、東群でⅠ区SB13があるのみで詳細に集落の様相を論じられない。指摘できるのは西群でⅠ区SD01とⅠ区SB01、02、19には切り合いがあるのでこれらの建物はこの時期に比定できないこと、Ⅰ区SB04とSB06は相互に近接しすぎるため同時並存でないことである。ただ、SD01は小規模な溝であり、短期間での埋没が想定されるため相互の重複から判断して1棟は窯と同時併存していたと考えることは可能である。このことと柱穴の分布状況から見て西群では最大でも3棟の建物しか存在しなかったことは想定できる。

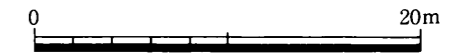
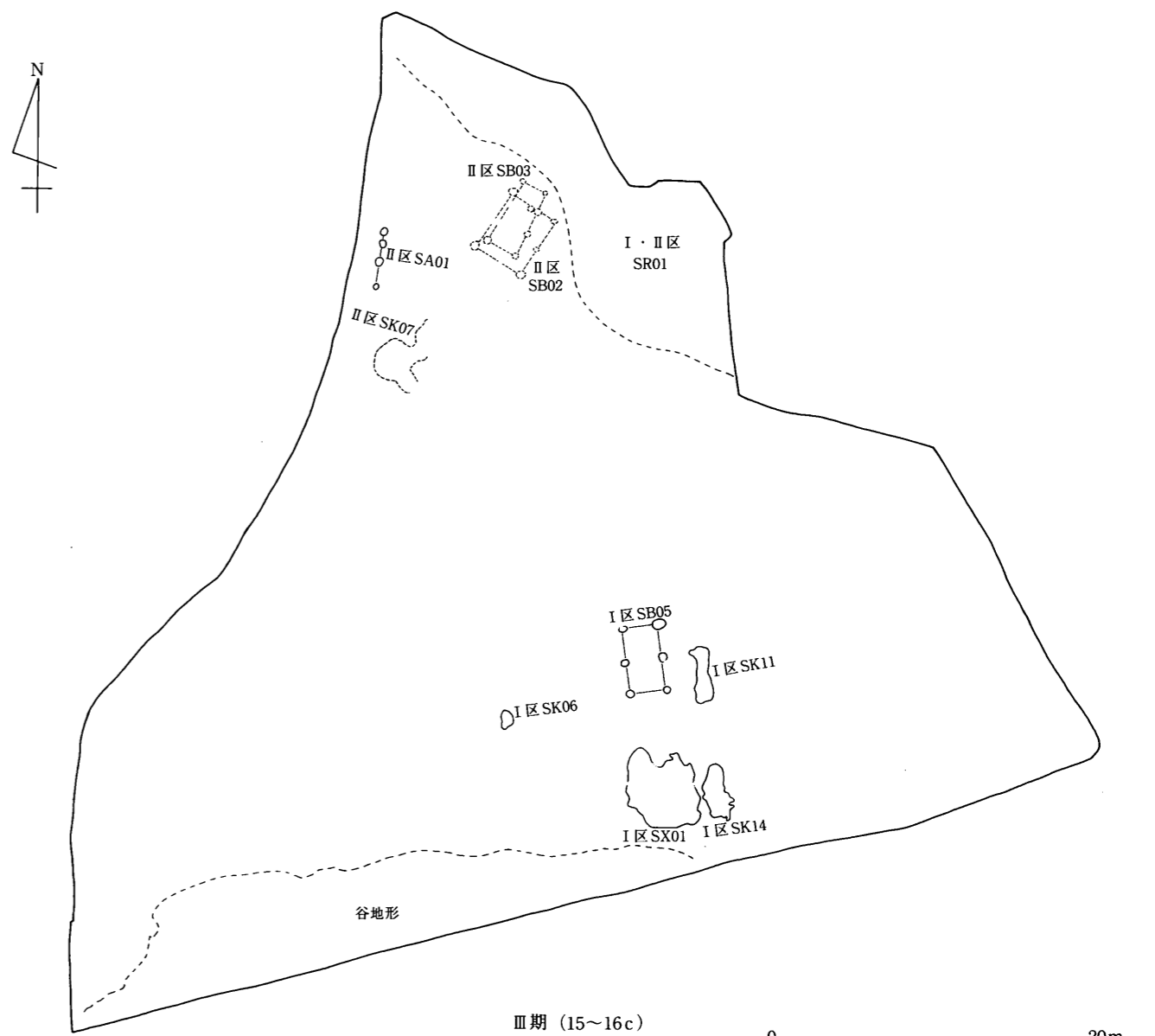
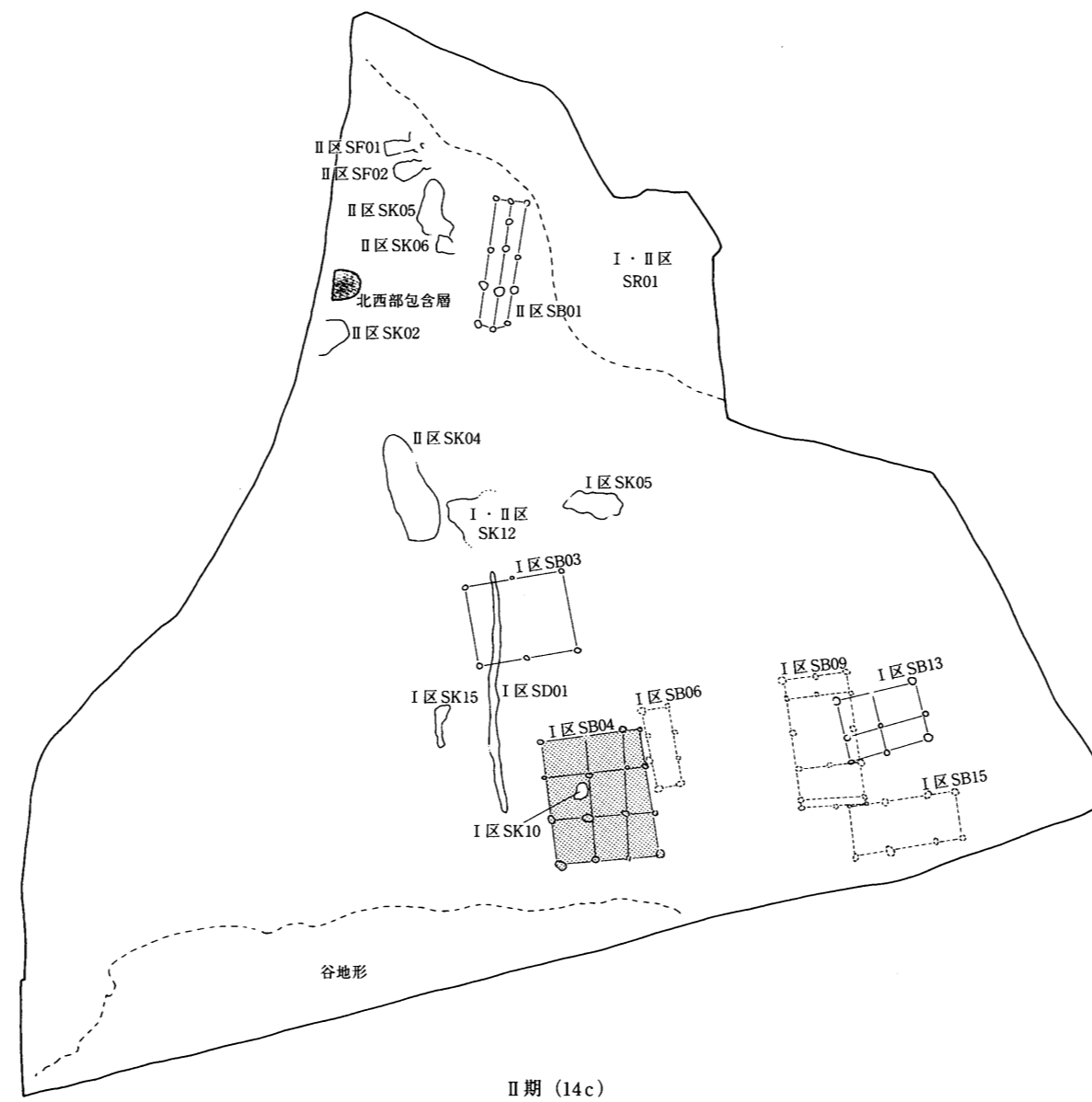
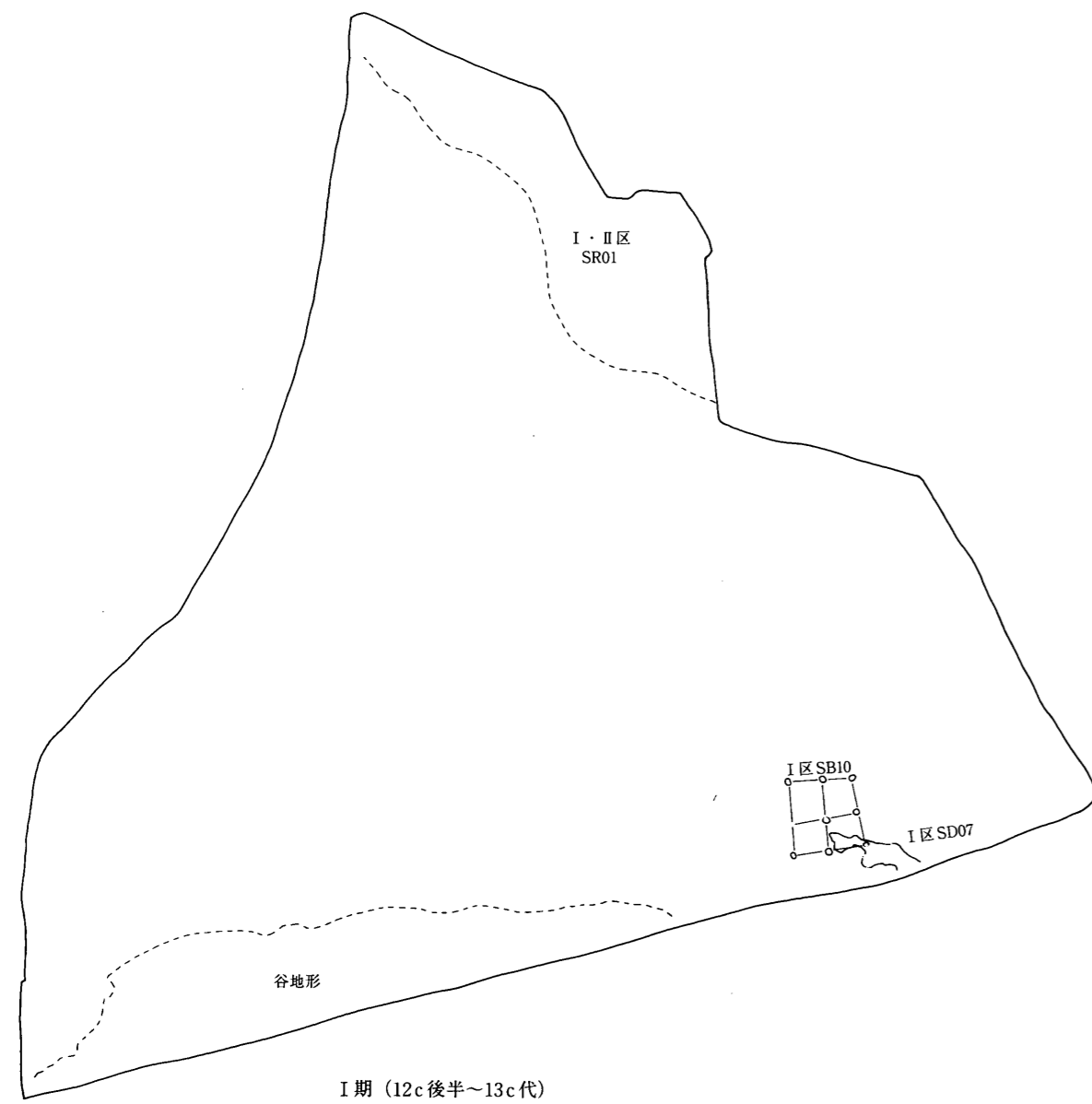
なお、SB04は遺跡内で唯一の大型建物で、総柱の床張建物であることから主屋と想定できる。ただ、県内では高松市空港跡地遺跡⁽³²⁾、東山崎・水田遺跡⁽³³⁾、西打遺跡⁽³⁴⁾など集落規模が大きい遺跡では同程度の建物が多く検出されている。また、一般集落である引田町辻田石垣遺跡⁽³⁵⁾でも同様な規模、構造をもつ建物があるため通常の主屋と考えられる。この主屋を当該期に比定できるなら最大数で主屋1棟に2棟の中、極小型建物が伴う構成となり、そうでないなら3棟の中、極小型の側柱建物からなる建物群となる。

東群についてはⅠ区SB10、15がこの時期に属さず、その他もⅠ区SB13と重複するため同時併存しうるとすればⅠ区SB12、20だけである。よって3棟の建物からなり、小型の総柱建物に2棟の極小型建物が伴うという構成が最大である。なお、西群のさらに西側に時期限定できない建物（Ⅱ区SB04）がある。これが当該期に比定できるとしても最大7棟となり、構成建物の規模だけでなく、集落規模としても小さい。

Ⅲ期（15世紀～16世紀）

この時期に属する遺構はⅠ区SB05、SK06、11、14、SX01、Ⅱ区SA01がある。15世紀前半にはⅠ区SK11、15世紀後半～16世紀前半にはⅠ区SK06がある。16世紀代には小型の側柱建物であるSB05がある。同じく16世紀代のSK06、SX01が近接して位置する。Ⅲ期と判断できる遺物は少ないが時期比定できない建物が多いため集落は継続していると考えられる。

「2. 出土瓦の検討」で先述した通り窯の操業時期については14世紀後半でも末に近い時期を推定している。また、Ⅱ区SB02、03はⅡ区SB01（工房）より時期的に下り、Ⅱ区SK07（炭窯）に伴うと考えている。この推測が妥当であれば、当該期にⅡ区SB02、03、SK07が位置づけられることとなる。



第181図 天王谷遺跡遺構変遷図 (1/400)

3. 最後に

ここでは瓦窯操業期（14世紀後半）の集落状況に焦点を当て、集落変遷について検討した。その結果当該期の集落構成建物は最大7棟しか復元できず、小規模であったこと、仮に主屋（I区SB04）があったとしても県内だけでなく、町内で比較しても通常の規模、構造であることを指摘した。遺物はコンテナ10箱程度の中世土器が出土しているが、土師器が大半となり輸入陶磁は出土総点数で10片もない。この内時期的にはずれるものの注目すべきものとして青白磁の瓶（13世紀後半～14世紀前半のI区SD06より出土）がある。仮に本稿での時期比定が誤りで、この希少品が14世紀後半に属するとしても上記の遺構、遺物の状況からは窯を有すること以外、特殊な集落とは判断しがたい。

よって問題となるのは一般的な集落に窯が伴う状況がどのような事情を反映するかである。これには2つの切り口がある。1つは他の瓦窯や瓦窯を伴う集落例と比較を行い、生産目的や生産形態を検討することである。

2つめは1と関係するが、瓦の供給先を確認することである。集落と近接する位置にあっても供給先が寺院であるのか、村のお堂などか、によって集落（居住者）と窯（瓦工人）の関係は第三者を挟んだ間接的なものか、直接的なものか、と全く異質なものになるためである。このような観点から次節では瓦の生産形態と集落の関係について論じる。

(註32)『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 空港跡地遺跡Ⅳ』(助香川県埋蔵文化財調査センター他 2000)

(註33)『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 東山崎・水田遺跡』(助香川県埋蔵文化財調査センター他 1992)

(註34)『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 西打遺跡Ⅰ』(助香川県埋蔵文化財調査センター他 2000)

『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊 西打遺跡Ⅱ』(助香川県埋蔵文化財調査センター他 2002)

(註35)『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第四十四冊 迺田石垣遺跡 迺田谷川下池遺跡 鹿庭遺跡』(助香川県埋蔵文化財調査センター他 2002)

第4節. 瓦の生産形態と集落

1. はじめに

ここでは天王谷遺跡の瓦生産と集落の関係について検討する。問題となるのは遺跡内で窯と同時期の集落が近接している状況が両者のどのような関係に基づき、どのような瓦生産を反映しているかである。検討方法としてまず県下の平安後期から中世の瓦窯を集成する。そしてこれらの生産形態、また集落との関係について中世期の全国的な動向も踏まえながら論じる。これを基に天王谷遺跡の状況について考察したい。

2. 遺跡紹介

管見に触れたのは県下の瓦窯跡は以下の11例である。

片山池1号窯跡⁽³⁶⁾ (高松市西春日町)

浄願寺山南東斜面に位置する。隣接する東の山裾には坂田廃寺がある。付近では他に数基の窯が存在するとされるが、検出されたのは1基のみである。半地下式有牀式平窯であり、焼成室は平面形が方形で、規模は幅、奥行きともに約1.6mを測る。残存高は1.2mだが、本来は約1.9mの高さがあったとされる。あぜは丸瓦を心材とし、5本ある。燃焼室は平面形が半円形で、規模は直径約2mを測る。燃焼室、焼成室ともに3回以上の補修痕跡が見られる。平安時代後～末期までの操業が想定されている。灰原?より出土した均整唐草文軒平瓦が坂田廃寺の資料と同範とされ、瓦を供給したことが想定されている。如意林寺窯跡⁽³⁷⁾ (綾歌郡国分寺町)

如意林寺公園整備事業の工事中に2基の瓦窯が隣接して発見され、調査が行われた。窯は焼成室上部が削平を受けているが、共に推定全長4.2m、焼成室の推定長2.5m、2.8mを測る。またどちらも2条のあぜをもつ。近接した配置、類似した規模、構造より同時操業と考えられる。

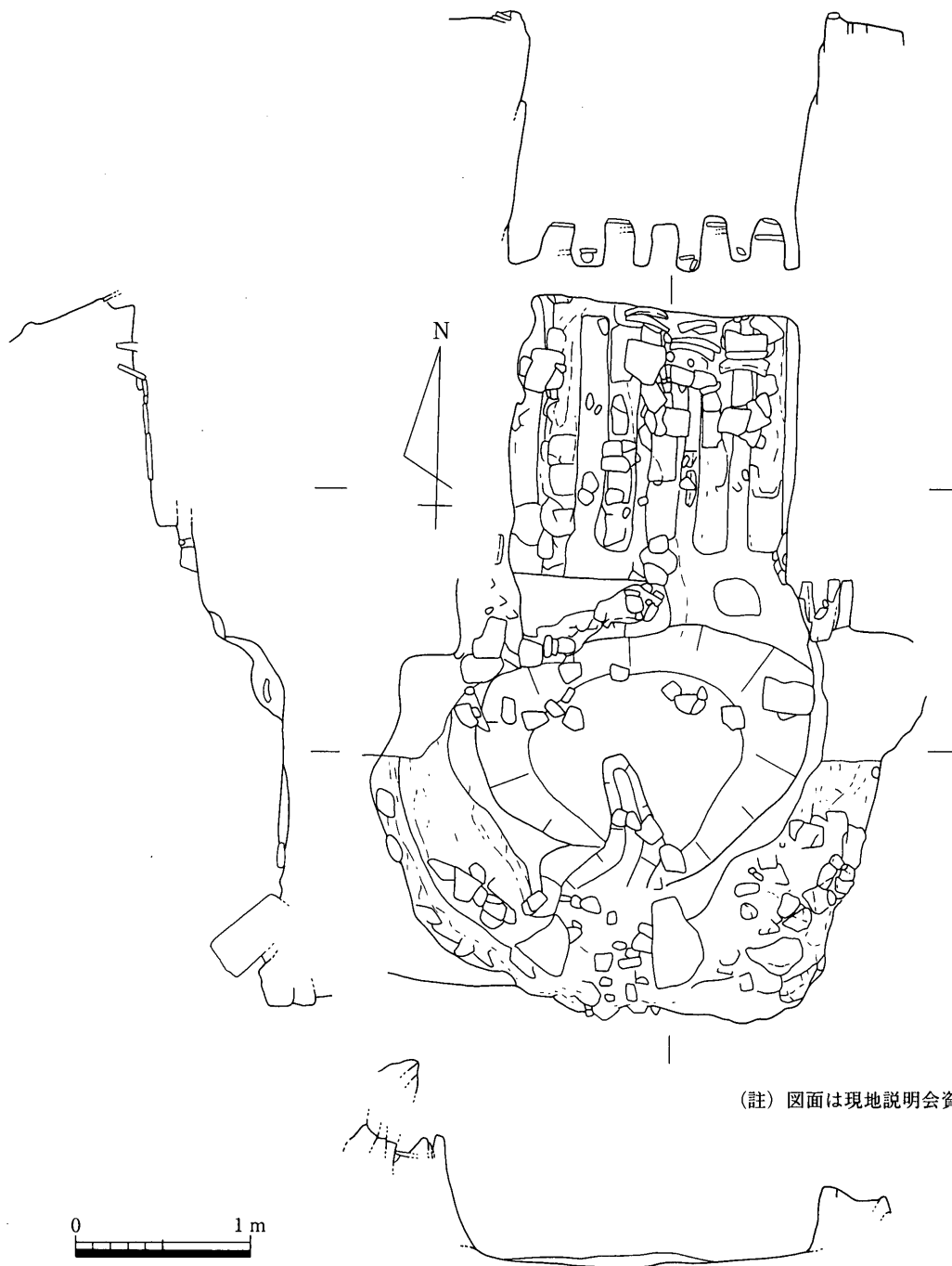
窯からは平瓦、丸瓦、黒色土器碗、土師器碗が出土し、付近からは軒瓦が採取されている(複弁八葉蓮華文軒丸瓦、単弁八葉蓮華文軒丸瓦、均正唐草文軒平瓦)。これらの遺物より操業時期は12世紀前半～後半とされている。

付近に位置する国分寺でこれらの瓦が見られないこと、技術的影響を受けた綾南町十瓶山窯跡群から平安京へ瓦を搬出した時期とややずれることから、如意林寺建立に際し設置された寺専用の窯であったことが推測されている。

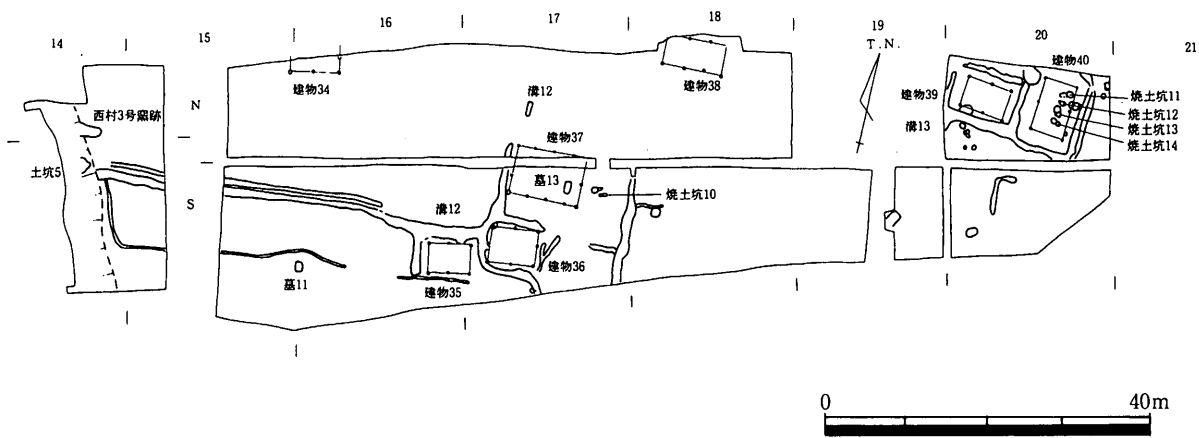
西村遺跡⁽³⁸⁾ (綾歌郡綾南町)

概要は(註57)で述べている。山原地区に位置する3号窯は半地下式有牀式平窯である。焼成室は平面形がややいびつな方形で、規模は奥行き1.6m、幅1.2mを測る。検出面であぜ上面が見えるほど残りは悪い。あぜは3本ある。表面は小さいブロック状に割れている。燃焼室は平面形がいびつな方形で、焚口側は失われている。燃焼室、焼成室ともに補修痕跡は見られない。窯体内からは平瓦、黒色土器碗などが出土している。操業時期は黒色土器碗より11世紀末～12世紀前半と考えられる。

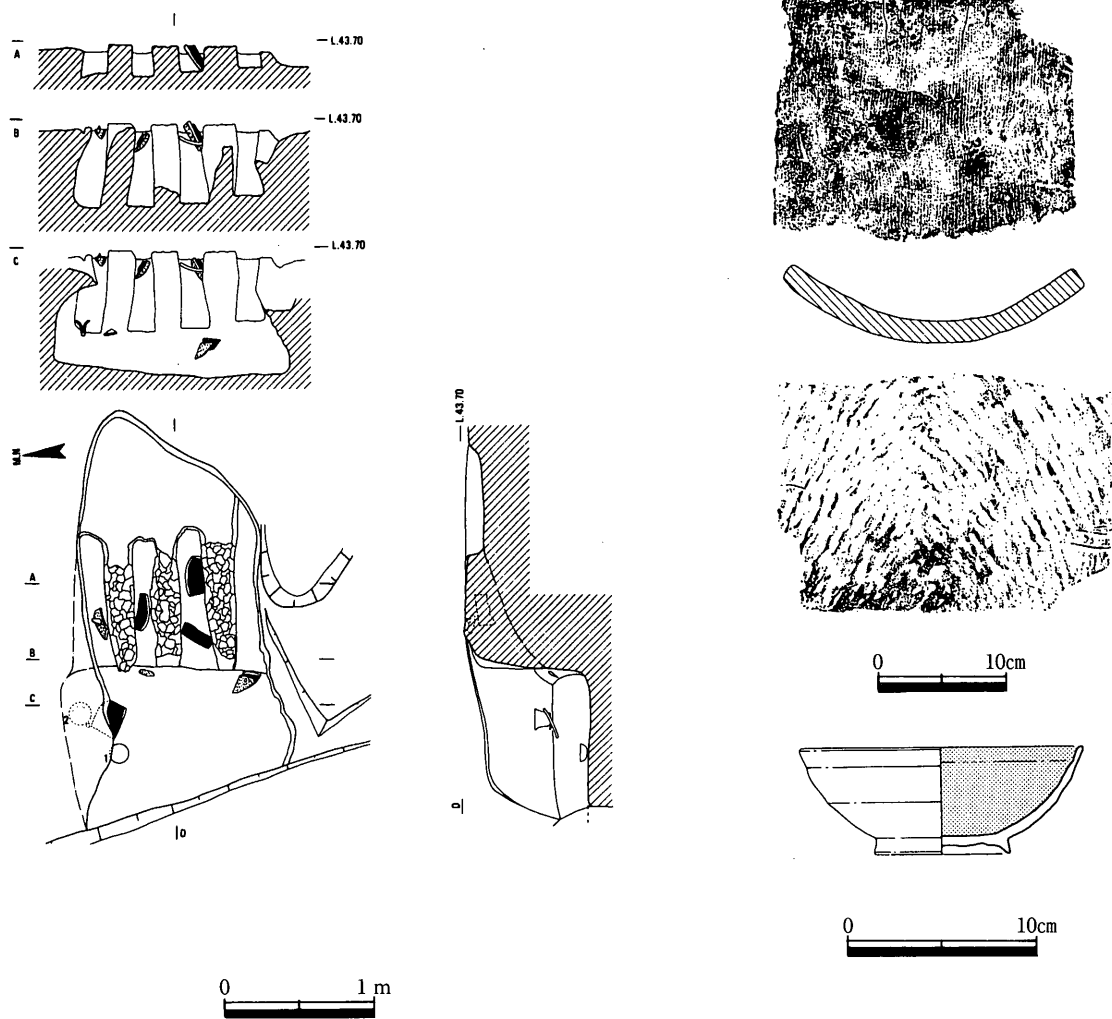
地区内では掘立柱建物群、土器窯、土坑、墓などからなる集落も検出されているが、12世紀末以降であり、3号窯とは時期差がある。ある程度の量が伴うのは11世紀中葉～13世紀中葉にかけて掘削された粘土採掘坑群である。



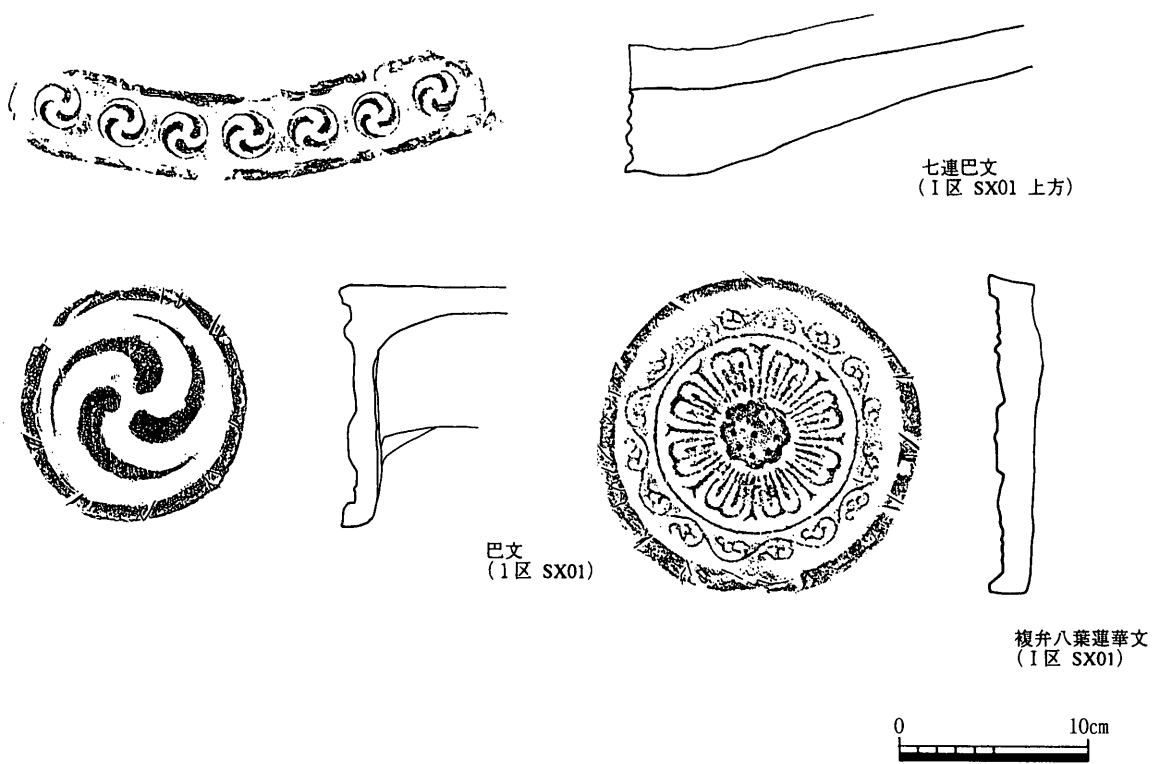
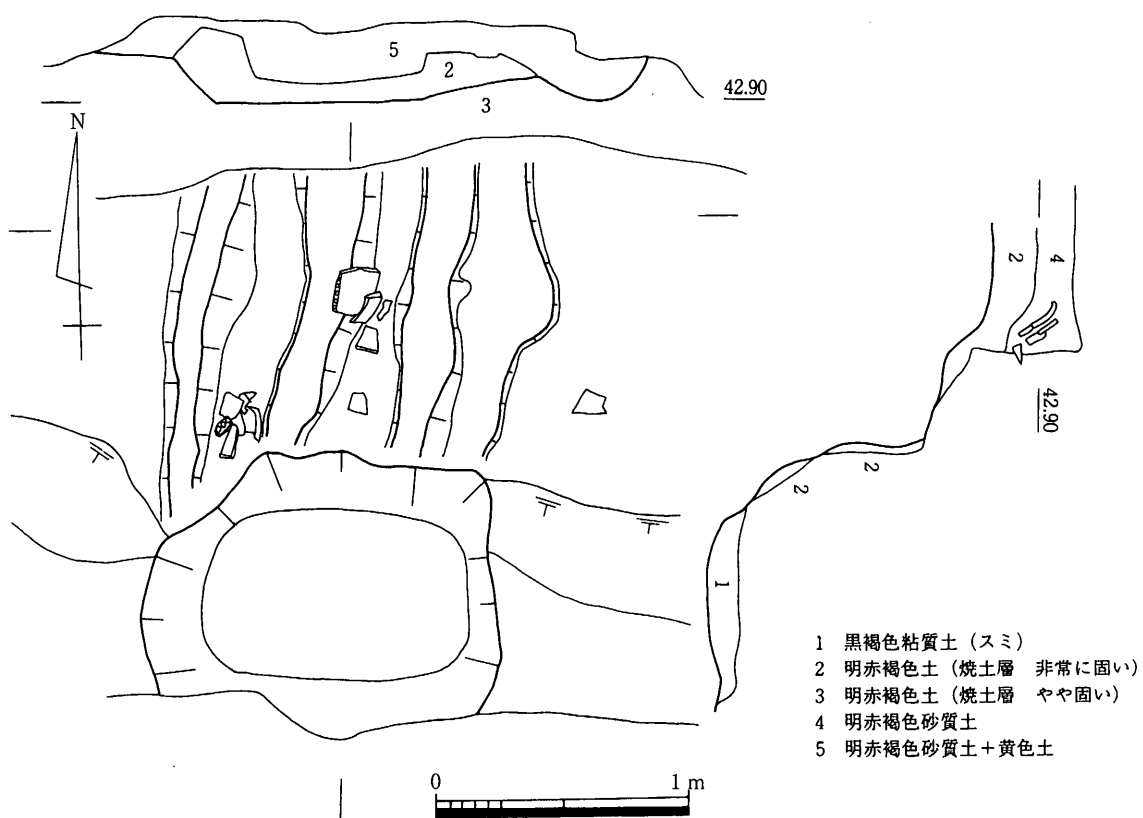
第182図 片山池瓦窯跡 平・断面図 (1/40)



第183図 西村遺跡 山原地区遺構 配置図 (1/900)



第184図 西村遺跡 第3号窯跡 平・断面図 (1/50)、出土遺物 (1/6・1/4)



第185図 丸山窯跡 I区 SF01 平・断面図 (1/30)、I区 SX01 出土遺物 (1/4)

丸山窯跡⁽³⁹⁾ (綾歌郡綾南町)

西村遺跡と同じく、十瓶山窯跡群に位置する。検出されているのは1基の半地下式有牀式平窯である。焼成室の上部は調査対象地外に延びる。検出長は奥行き1.3m以上、幅1.5mを測る。あぜは2本あるが、表面は傷みが激しく、ブロック状に割れている。燃烧室は大部分が後世の削平により消滅し、長さ0.7m以上を測る。燃烧室、焼成室ともに補修痕跡は見られない。操業時期は12世紀後半とされている。出土瓦には七連巴文軒平瓦、巴文軒丸瓦、複弁八葉蓮華文軒丸瓦があり、一部は平安宮内裏、六波羅密寺などで同文瓦が存在することが指摘されている。

国分台瓦窯⁽⁴⁰⁾ (坂出市五色台)

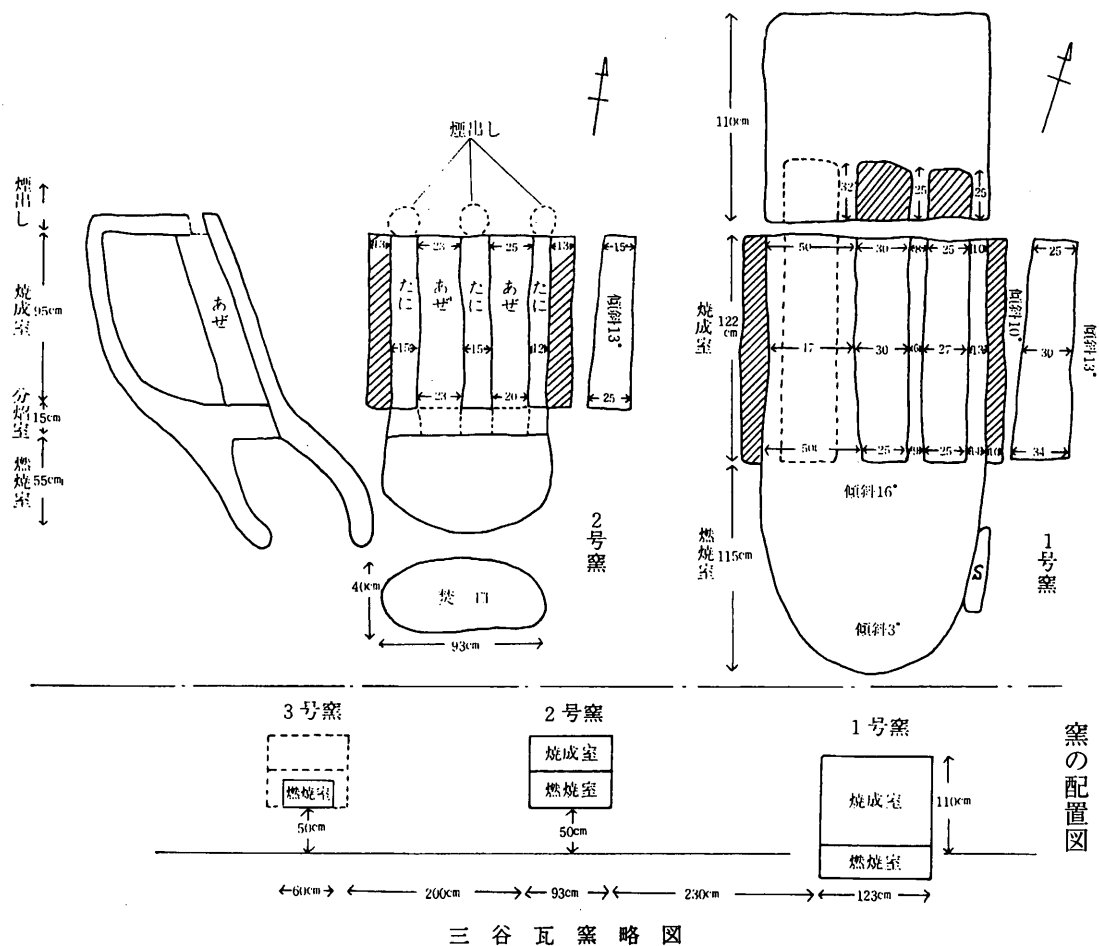
昭和29年に坂出市の吉井氏により五色台赤峰の南部山頂付近で発掘された1基の瓦窯である。平安時代後期の軒平瓦、軒丸瓦が出土しているが、詳細は不明である。

聖通寺瓦窯⁽⁴¹⁾ (綾歌郡宇多津町)

寺の境内最奥部の傾斜面に築かれた1基の瓦窯である。雨水による遺構の損傷が著しかったために現状では盛り土し、保存されている。表面観察では穴窯であることが推測されている。また鎌倉時代頃の瓦が採取されている。ただ、発掘調査が行われていないため不明瞭な部分が多い。

三谷寺窯跡⁽⁴²⁾ (綾歌郡飯山町)

寺に近接した位置に3基の半地下式有牀式平窯が存在する。瓦は寺への供給が推測されている。平安時代後期の軒平瓦が右側の窯のあぜを構築するため使用されている。



第186図 三谷瓦窯 平・断面図

大麻瓦窯⁽⁴³⁾ (善通寺市大麻町)

神社の近くにある百合山を昭和22年頃開墾中に発見された1基の半地下式有牀式登窯である。焼成室は平面形が長方形で、規模は2.30m×1.40mを測る。あぜは粘土と瓦を混ぜて構築しており、5本ある。焼成室は失われている。平安時代後期の軒平、軒丸瓦が採取されている。

佐伯八幡山瓦窯⁽⁴⁴⁾ (善通寺市善通寺町)

善通寺の裏の丘陵に半地下式有牀式平窯4基がある。2基ずつが並んで構築されている。このうち7号窯は全長約2m、焼成室は奥行き1m、幅80cm～1mを測る。あぜは2本ある。鎌倉、室町時代の軒瓦などが出土している。

大水上神社瓦窯跡⁽⁴⁵⁾ (三豊郡高瀬町)

大水上神社の境内に2基の瓦窯がある。相互の距離は約10mで西側が1号窯、東側が2号窯である。現状では他に窯跡、灰原は確認されていない。1号窯は半地下式有牀式登窯である。焼成室は平面形が卵形であり、規模は径約1.5mを測る。あぜは5本持ち、葉脈状に広がる。燃焼室は平面形が台形状であり、長さ約1mを測る。出土瓦は軒平、軒丸、平瓦がある。

2号窯は半地下式有牀式平窯である。焼成室は平面形が方形であり、規模は奥行き、幅とも約1mを測る。あぜは3本持つ。燃焼室は平面形が台形状であり、長さ約1mを測る。軒平、軒丸瓦などが出土している。出土遺物より操業時期は2基とも12世紀後半～末とされている。瓦の供給先としては『四國讃岐二宮社領目録』(1198)に記載があり、神社付近に存在したことが想定される「清澄寺」か「神宮寺」であるとされている。なお、次に述べる法蓮寺は大水上神社から北へ300mの地点にあり、このどちらかに該当するとされている。

法蓮寺瓦窯⁽⁴⁶⁾ (三豊郡高瀬町)

寺の裏庭に4基の半地下式有牀式平窯がある。西から第1～4号窯と呼ばれている。1、2号と3、4号はともに1.5m弱の距離を開けて2基が並列している。それぞれは約20m離れており、2基一組の操業が推定されている。焼成室の平面形は4基とも方形であり、規模は奥行き約1.1～1.5m、幅0.87～1.0mを測る。あぜはいずれも3本持つ。出土瓦は軒瓦以外に鬼瓦も含む。巴文軒丸瓦の外区に珠文の有無が見られること、窯構造では4号窯がやや古い形態を持つことから時期幅が大きく、12世紀後半に継続的な操業が行われたことが推定されている。

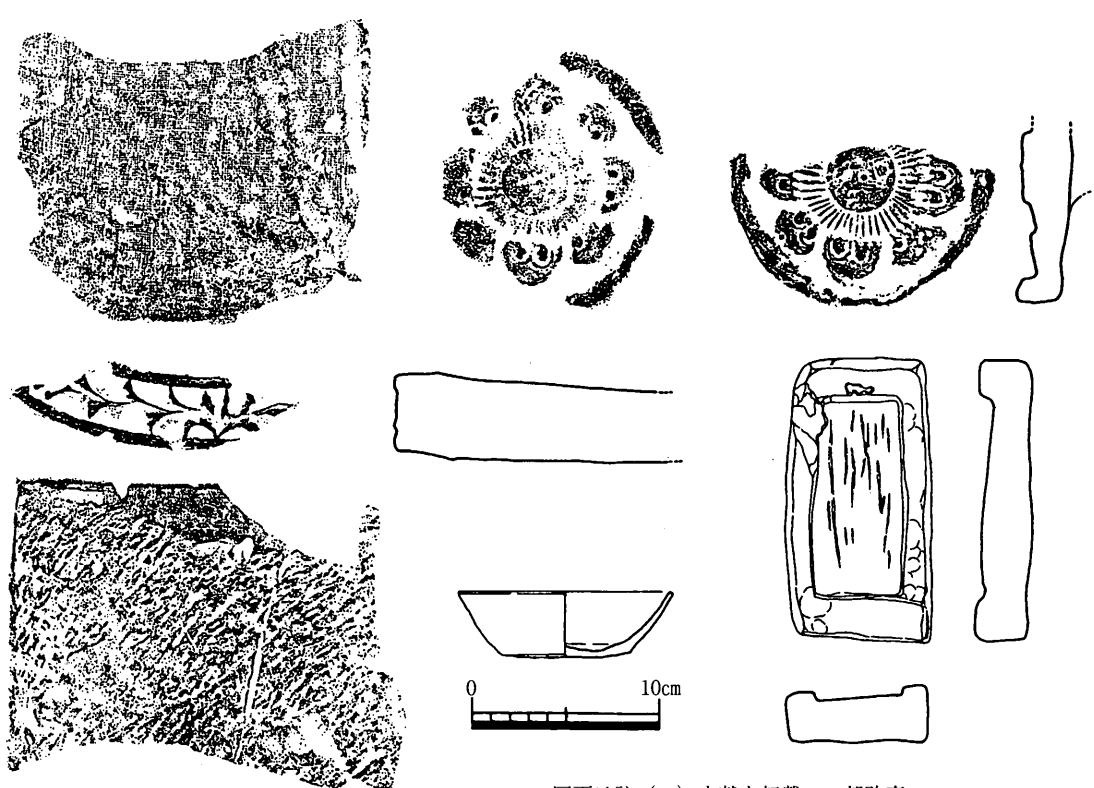
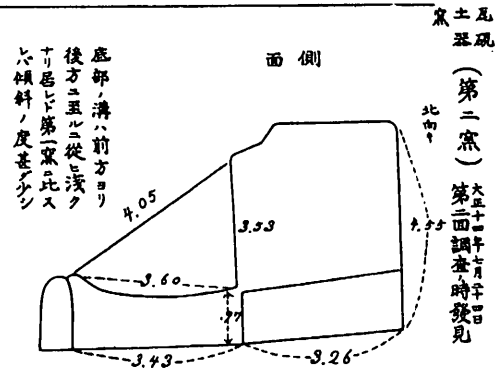
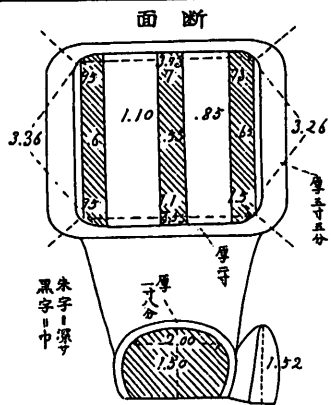
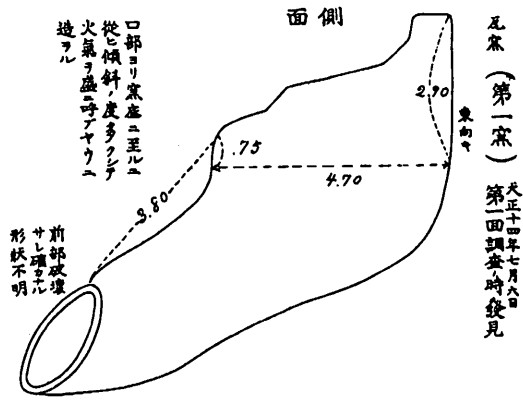
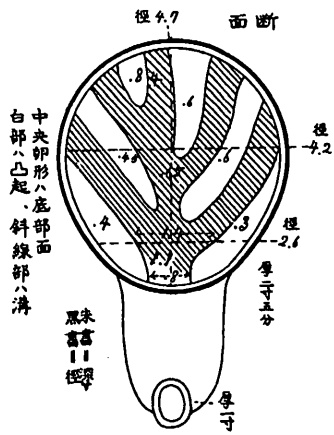
3. 天王谷遺跡における瓦生産形態

以上の事例⁽⁴⁷⁾より古代以来の窯業地帯として存続し、平安時代後期に平安京へも瓦を供給していた十瓶山窯跡群に属する西村遺跡、丸山窯跡の瓦窯以外はほとんどが寺院の隣接地に営まれることが窺える。また、焼成室の規模が1～2mの小型窯が多いことが見て取れる。ただし、瓦窯に近接して同時期の集落を調査した事例がないため両者の関係は不明である。

こうした状況は上原氏が概ね指摘しているが、このうち「11、12世紀代の寺社隣接型瓦窯は（讃岐系瓦屋の母体となった）十瓶山古窯群から出張製作を示す、臨時操業の瓦窯である⁽⁴⁹⁾」としている。（註）（ ）は執筆者による。出張製作とは所属組織以外の建物に供給する瓦を瓦工が現地に赴き、製作することで、窯も「出張先の寺社境内や隣接地に設ける。」とされる。

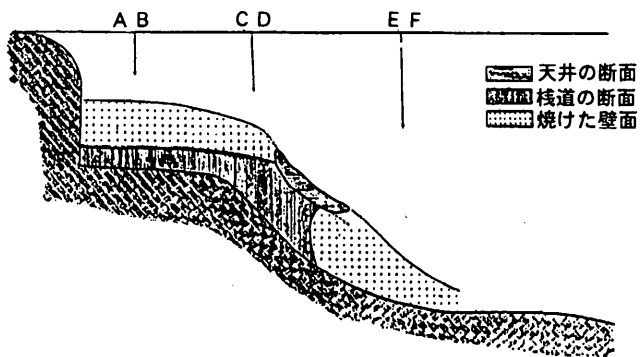
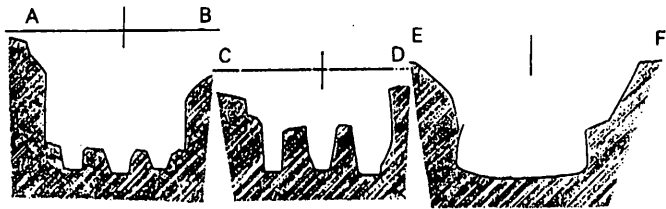
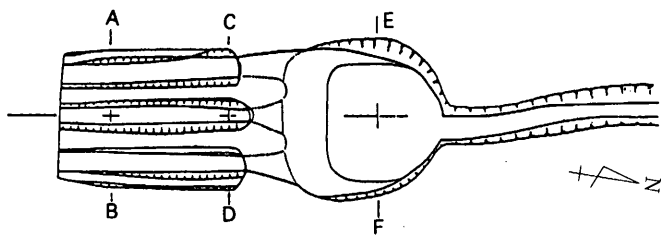
中世期の瓦生産形態については①多くの工人が恒常的に瓦の需要があった大寺院に所属した、②地方では国衙やその系譜を引く政治都市とその周辺を拠点としたとされる。ただ、工人たちの活動の場は所

大水上神社境内窯略圖 (三分二) 記入寸法、尺單位

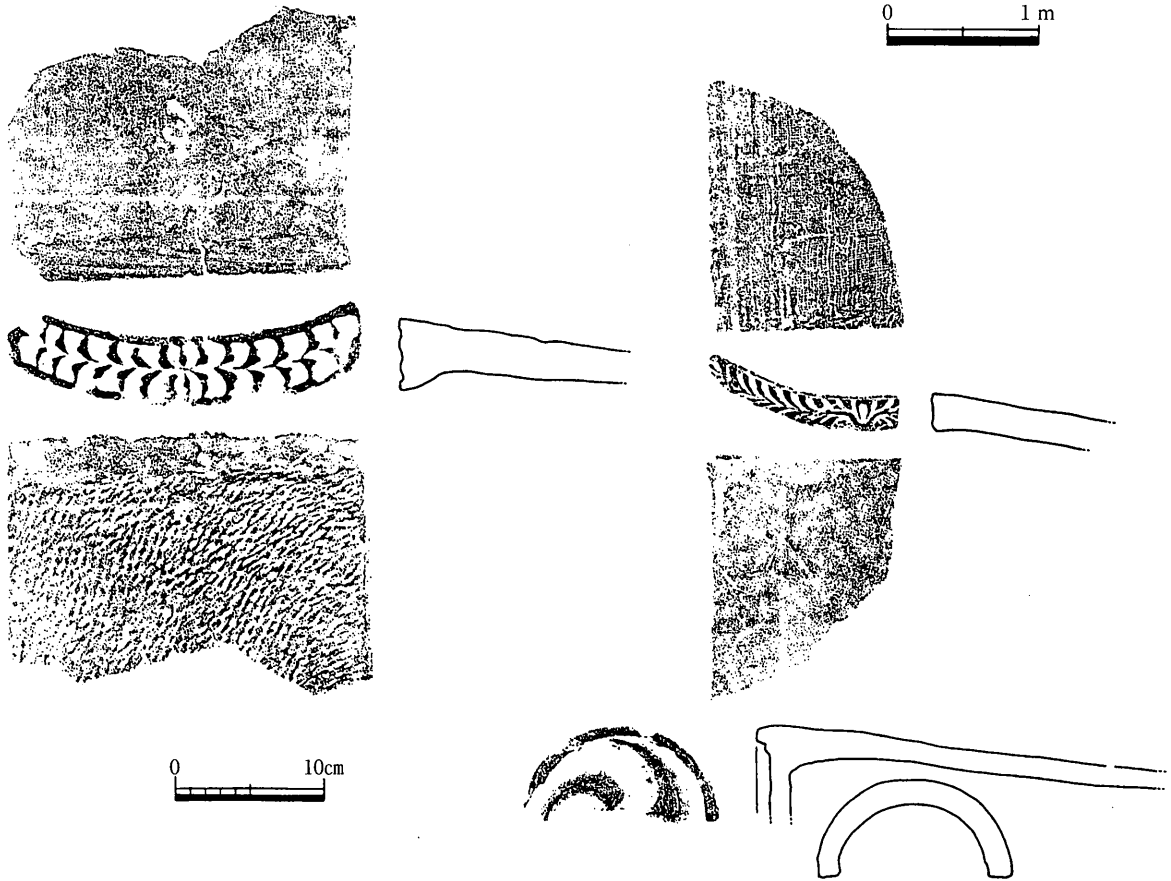


※図面は註(45)文献を転載、一部改変。

第187図 大水上神社瓦窯跡 平・断面図、出土遺物 (1/4)



※図面は註(46)文献を転載



第188図 法蓮寺窯跡 平・断面図(1/50)、出土遺物(1/5)

属先に限定されなかったことも合わせて指摘されており、具体的には鎌倉時代に南都寺院に所属した瓦工が各地で出張製作を行った例⁽⁵⁰⁾や和泉の工人が関東方面などへ出張した例⁽⁵¹⁾が挙げられる。こうした製作形態は出先で大型窯の構築に大きな労力を費やすことはできない状況にも対応し、この時期に小型窯が増加する一因として捉えられている⁽⁵²⁾。上原氏が述べた寺社隣接型でも操業期間が押さえられる窯には比較的長期に及ぶもの（片山池1号窯跡、如意林寺窯跡、法蓮寺瓦窯）もあり、全てを「臨時操業」とはできない。だが、出張製作という形態が寺院に近接する位置で短期間行なわれ、窯の小型化とも関連することは中世期の瓦生産の一形態として注目できる。

ここで天王谷遺跡の状況であるが、同時期の集落から離れた位置に2基の瓦窯がある。これらは焼成室が約1mと小型である。隔壁はSF01、02とも補修しているが、他の壁面に補修痕跡はなく、床面も張り替えしていない。また、窯壁やあぜの表面で長期使用に伴うガラス化（高知県奥谷南遺跡⁽⁵³⁾）、アゼ表面のブロック状のひび割れ（西村遺跡3号窯、丸山瓦窯）はない。こうした窯の状況は操業期間が比較的短いことを示している。これは先に「瓦の属性、遺構内での共伴状況」から考察した瓦の製作期間についての所見と一致する。また、瓦当文様は軒平瓦が同文のみ、軒丸瓦も大小の三巴文が合わせて2種類と極めて限定的であるのは受注者の要請に応じた結果、すなわち供給先が特定されることによると考えられる。なお瓦の組合せが軒平、平瓦間では全て可能、軒丸、丸瓦でも2種類のみと限られることも同じ脈絡で捉えることができる。以上のような状況は臨時操業の出張製作という形態と整合的である。

また瓦は土器と異なり、非日常的にしか需要はない。引田町内では発掘調査がほとんど行われていないことも考慮しなければならないが、中世寺院は未確認であり、中世瓦も天王谷、辻田石垣遺跡以外では出土していない。このため遺跡に継続的な生産を目的として瓦窯を築いたとは考えがたい。よって供給先の寺社、工人の派遣元は不明であるものの出張製作が行われたと考える⁽⁵⁴⁾。

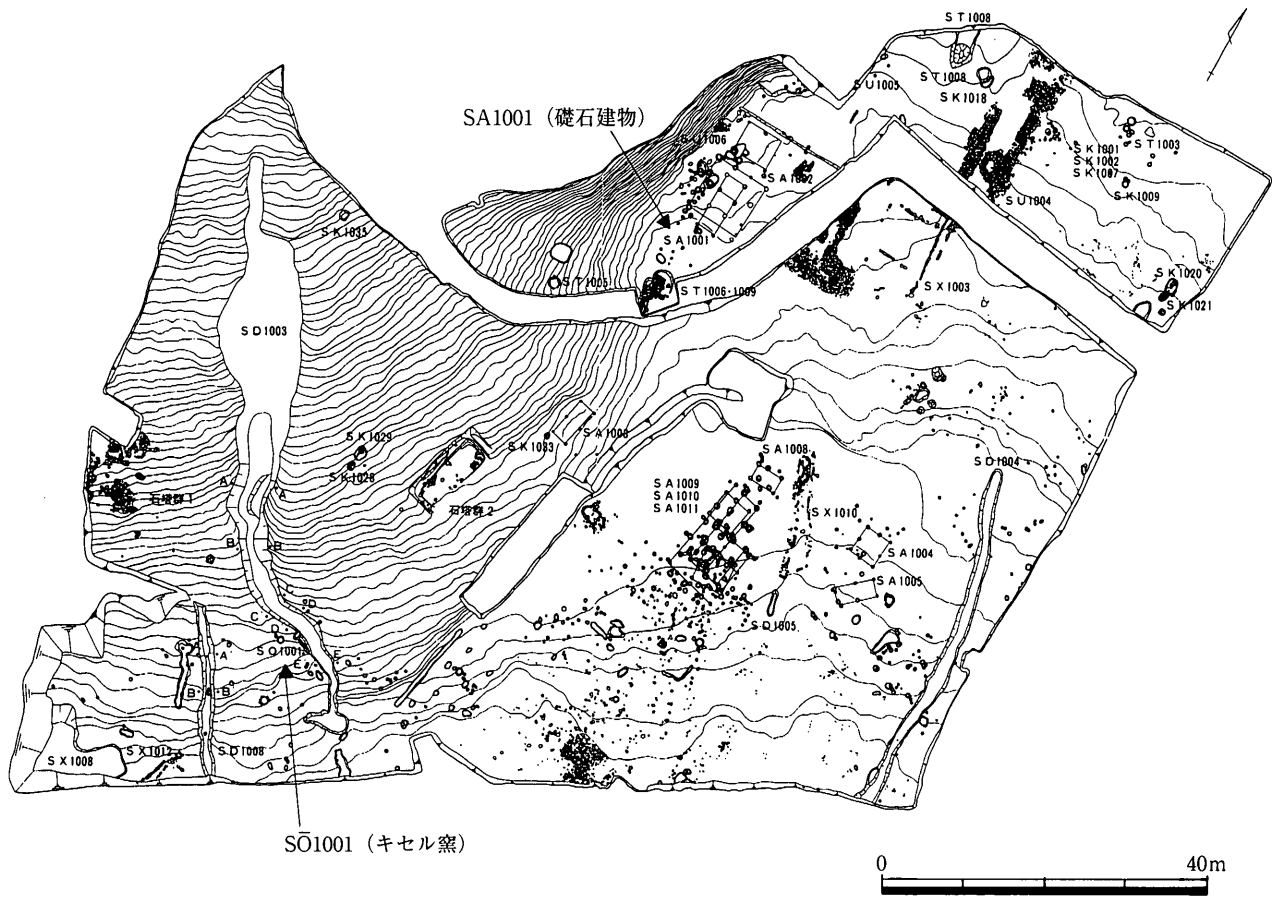
以上を踏まえて瓦窯を伴う集落の性格であるが、窯が形成された時期の集落状況は遺構変遷の中で述べた通りである。建物群の基数、構成、主屋の規模、出土遺物の内容、輸入陶磁器の量などは県内では通常見られるレベルにあり⁽⁵⁵⁾、町内でいえば、辻田石垣遺跡と同様である。よって瓦窯が築かれている以外は一般集落の様相を呈する。だが、出張製作が行われた集落という判断から付近に寺社が営まれており、これと何らかの形で関連が強い集落と考える（例えば村のお堂など）。

最後に瓦の出張製作を考えるうえで参考となる事例を紹介する。

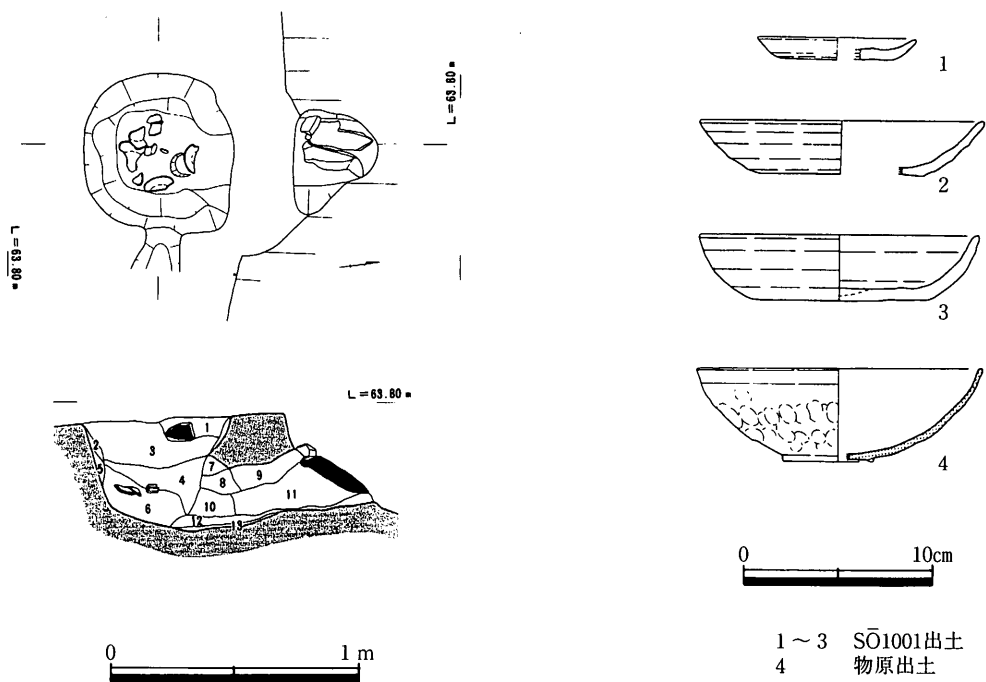
神宮寺遺跡⁽⁵⁶⁾（徳島県板野郡上板町）

遺跡東部に阿讃山脈の一峰である大山から南に延びる丘陵斜面が、西部に宮ヶ谷川、山ノ神谷川によって形成された扇状地がある。四国縦貫自動車道建設に伴い、約15,000㎡の調査が行われている。遺跡は礎石建物（堂）、掘立柱建物群、石塔墓群から構成される小規模な中世寺院跡であり、13～16世紀代まで存続したと考えられている。

生産遺構としてキセル窯、鍛冶関連遺構がある。キセル窯はA区にあり、土師器の小皿、杯、碗などを焼成している。時期は物原より出土した瓦器碗より13世紀前半とされている。鍛冶関連遺構はB区の礎石建物が形成された基壇状の敷地面下層で検出され、埋土には鉄釘、鉄滓、多量の炭化物が見られる。また鍛冶関連遺物は遺跡全体で2,355点出土し、出土地点も集中するという。鉄釘、鉄滓が多く存在することから鉄釘や工具などの小規模な鍛冶が行われたと推定されている。こうした状況を報告者は寺院建築、敷地造成を含め、寺院の付近で土器製作、鍛冶などを行う各種工人の集合体が造営に当たったと考えている。



第189図 神宮寺遺跡 中央部 (A~D、F、J、L、M区) 遺構配置図 (1/900)



第190図 SO1001 平・断面図 (1/30) 出土遺物、物原出土遺物 (1/4)

瓦は製作、使用されていない（出土した瓦は平、丸瓦に限定され、総量でも20点しかない。また出土地点も調査地内に散在するため礎石建物も瓦葺きであったとは考えにくい。）ものの、寺院に隣接する窯で瓦の出張製作が行われた場合もこれと類似した形態をとったことが推定される。また瓦の製作工人もこうした集合体の構成員として組織された場合もあったと考えられる。

(註36) 「片山池瓦窯跡」『香川県埋蔵文化財調査年報 平成6年度』香川県教育委員会 1995

(註37) 未報告であるが、調査担当者の松本氏のご好意により概要を掲載した。

(註38) 『国道32号綾南バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 西村遺跡Ⅱ』(財)香川県教育委員会 1981

佐藤竜馬「西村遺跡の再検討」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅳ』(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1996

(註39) 『水道局第3投棄場整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 丸山窯跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センター他 1997

(註40、43、44) 安藤文良「讃岐古瓦図録」『文化財協会報特別号8』香川県文化財保護協会 1967

(註41) 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第十四冊 川津中塚遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センター他 1994

(註42) 『飯山町史』1988

(註45、46) 片桐孝浩「大水上神社所蔵古瓦について」『香川考古』香川考古刊行会 1999

(註47) 以上の事例以外に西村遺跡1、2号窯跡（登窯）、ますえ畑瓦窯（焼成室規模が4m以上ある大型の半地下式有床式登窯）も当該期に属するが、取り上げていない。これらは十瓶山窯跡群に属し、平安京でも同範瓦が確認されており、規模に差があるため寺社に隣接する臨時操業の小型窯とは性格に差があると考えたためである。

(註48) 上原真人「平安京周辺の平安時代後期瓦の様相—生産地認定法と在地消費をめぐって—」『第4回摂河和泉古代寺院研究会フォーラム 中世寺院の幕開け—11、12世紀の寺院の考古学的研究—』2001

(註49、50) 上原真人「奈良番匠が作った瓦—中世出張製作の一例—」『堅田直先生古希記念論文集』真陽社 1997

(註51) 山崎信二『中世瓦の研究』2000

(註52) 藤原学『平成9年度特別展 達磨窯—瓦匠のわざ400年』吹田市立博物館 1997

(註53) 執筆者はあぜを実見しておらず写真よりガラス化と判断した。だが、調査担当者の松村氏からは「ガラス化してない。」とのコメントを得ている。『四国横断自動車道（南国～伊野）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 奥谷南遺跡Ⅱ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2000

(註54) 工房の検討で触れる平井遺跡では小規模な瓦器椀窯1基が同時期の集落域から外れた場所で検出されている。工房も伴い、自家消費を目的としたとされる。こうした遺構の配置状況は天王谷遺跡と差がないため瓦工人が居住した集落である可能性も検討した。だが、県内の平安時代後期から中世にかけての小型瓦窯の様相、町内での瓦の需要、窯の操業期間、瓦の製作期間、瓦当文様の限定性なども合わせて見ると、居住でなく出張製作であると考えられる。

(註55) 森格也「瀬戸内地方の中世集落の展開—讃岐を中心として—」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅰ』(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1993

(註56) 『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書11 神宮寺遺跡』徳島県埋蔵文化財センター他 1994

第5節 瓦製作と工房

1. はじめに

ここでは窯付近で検出した掘立柱建物（Ⅱ区SB01～03）の性格を工房としてよいか、考察する。SB01～03について概略を述べると、集落域から外れ、窯と近接した位置で検出された建物群である。相互に重複するので各時期に単独で存在する。主軸方向はSB01と02、03で異なる。時期は出土遺物からSB03が14世紀後半（以降）に位置づけられる。こうした配置、時期、単独で存在することは窯に伴う工房であることを示しているように見える。そうであれば、連続か、断続かは不明ながら工房の建て替えということになる。

だが、ここまでの検討により窯の操業期間はそれほど長期に及んだとは考えられず、工房の建て替えはなかった可能性が高い。以下ではこうした状況も考慮に入れ、これらの建物を中世の小型窯に近接する掘立柱建物と比較する⁽⁵⁷⁾。

2. 事例紹介

《瓦》

南ノ庄田瓦窯跡⁽⁵⁹⁾（京都府京都市左京区）

遺跡は岩倉盆地北部に面する丘陵斜面に位置する。市道拡幅工事に伴い、250㎡が調査されている。遺跡付近は平安時代に瓦と多様な土器類の生産地となっており、平安京近郊において核となる窯業地帯とされている。遺跡では調査対象地外の2基を含め、3基の瓦窯が存在したが、この2基は既に失われ、残る1基と掘立柱建物2棟などが検出されている。ただ、西側が崖面、南東側も大きく攪乱を受けており、遺存状況は悪い。また、これに伴う集落は確認されていない。

窯は斜面に築かれており、北に開口する半地下式有牀式平窯である。崖面に露出して検出され、焚口から西奥壁にかけては失われている。焼成室、燃焼室共に上方から地山を掘り抜き、瓦とスサ入り粘土で壁面を構築する。操業中に改修を受けているが、その前後で規模に大きな差はなく、焼成室は奥行、奥壁幅とも約120cm、最大残存高88cmを測る。出土した軒瓦のほとんどが12世紀中葉から13世紀初頭に位置づけられることからこの時期に比定される。

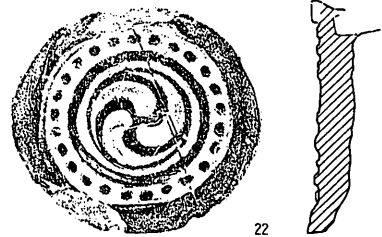
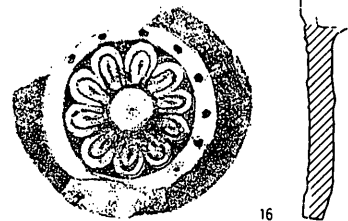
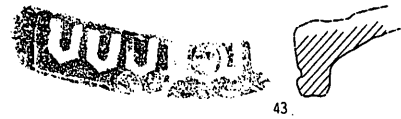
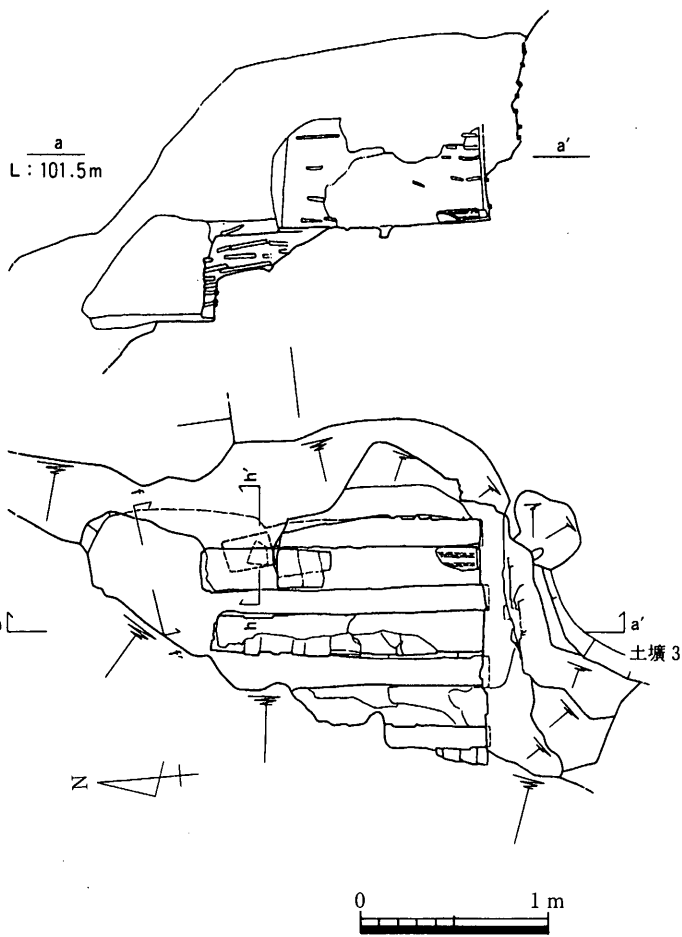
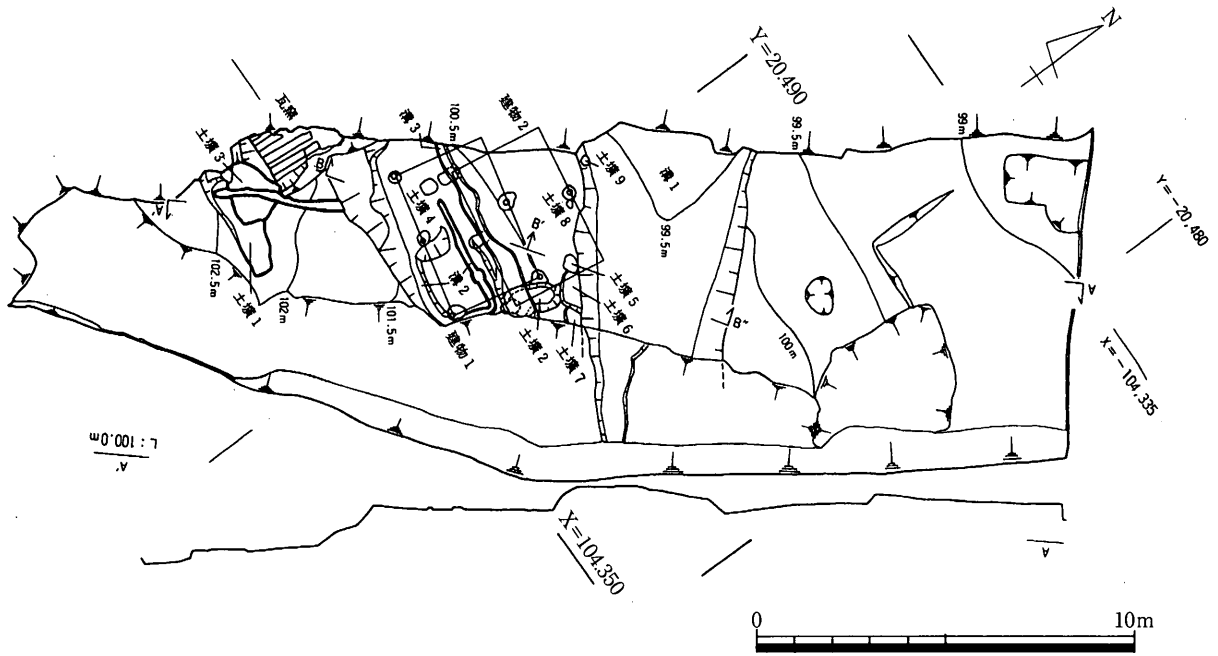
掘立柱建物は瓦窯前面を削り、形成された平坦面上で検出されている。焚口方向に位置し、窯から約3mと近接して2棟が存在する。共に側柱建物であり、重複する。建物1は北西隅柱穴を、建物2は北西隅、北東隅柱穴を崖や溝により失われる。両者の西側が崖面であるため桁行が延びる可能性も指摘されているが、梁間1間×桁行2間に復元されている。規模は梁間約2.6m×桁行約3.9m（床面積約10㎡）と類似する。主軸方向もほぼ一致し、窯とは直交する。柱穴から土師器、白色土器が出土していることから12世紀後半以降とされている。検出位置、出土遺物から報告者が述べるとおり1基ずつ窯に伴うと考えられる。

当該期のその他の遺構には溝1、2と数基の土坑がある。溝1の出土遺物は12世紀後半～13世紀初頭が中心となるが、建物2の柱穴を切っており、窯との関係は不明である。

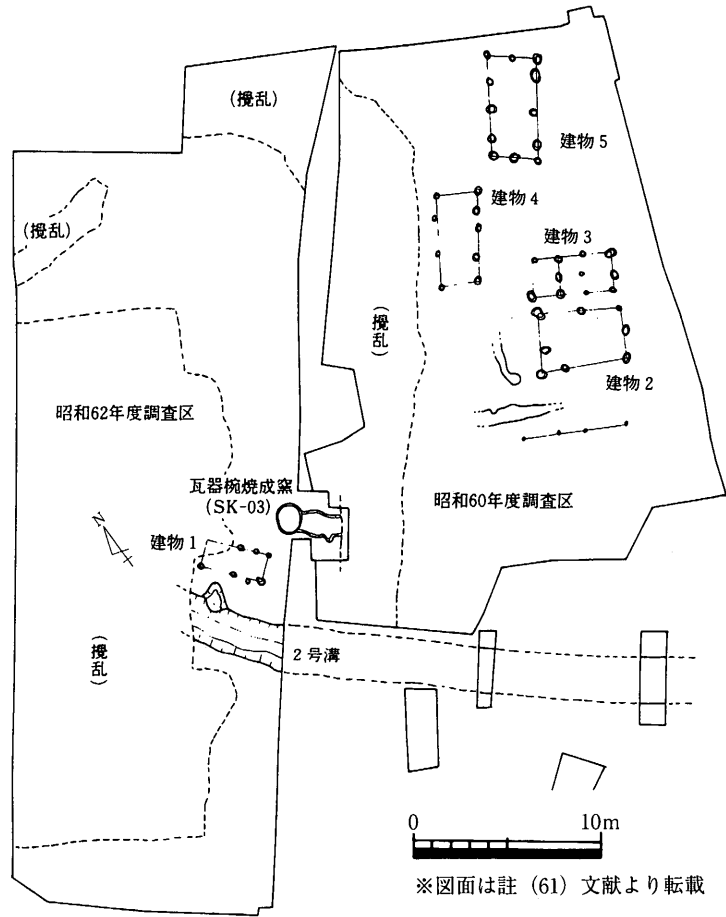
《土器》

小部遺跡⁽⁶⁰⁾（大分県宇佐市）

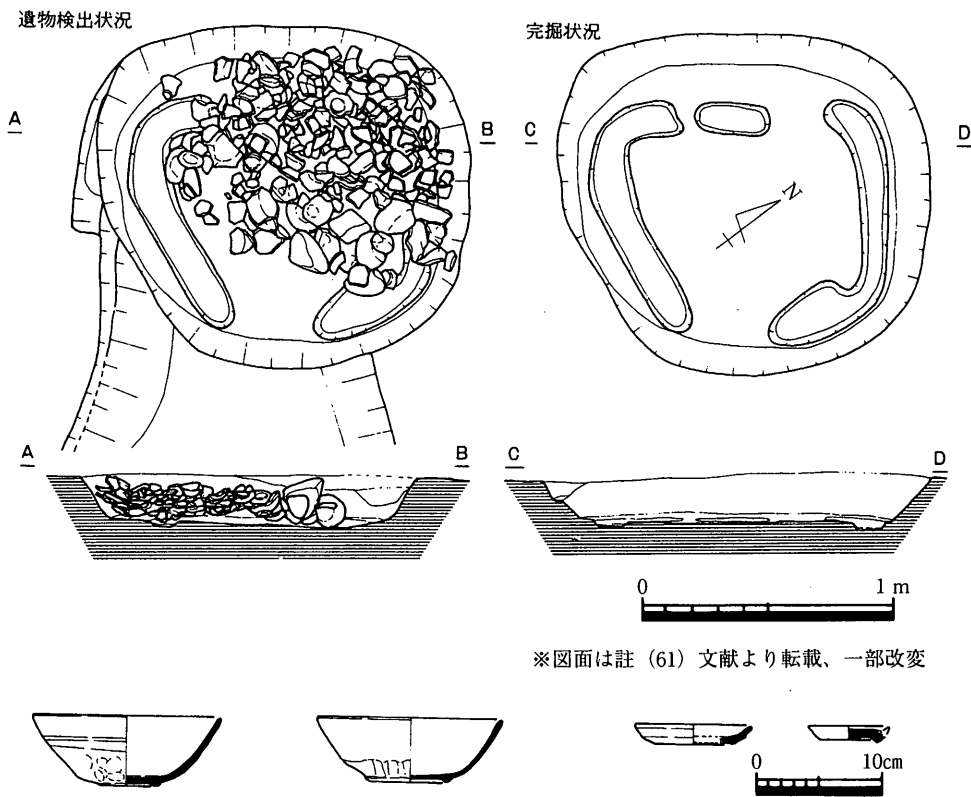
遺跡は約1,600㎡が調査されている。報告書を見ることができていないが、森隆氏が中世の土器窯に



第191図 南ノ庄田瓦窯跡 遺構配置図 (1/200)、瓦窯 平・立面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)



第192図 小部遺跡 瓦器焼窯、周辺遺構図 (1/400)



第193図 小部遺跡 瓦器焼窯 平・断面図 (1/30)、出土遺物 (1/6)

ついて論じる中で伴う可能性がある中世遺構を抽出しており、これに依拠して以下を述べる。

瓦器椀窯 1 基、近接して掘立柱建物 1 棟（建物 1）とやや離れて掘立柱建物 4 棟（建物 2～5）、溝、柵列などが検出されている。掘立柱建物 4 棟の南側には主軸方向を揃える小規模な溝や柵列があり、建物群の境界を示すと考えられる。これらは窯に近接する集落を構成する遺構と判断できる。

窯（SK-03）は 2 号溝に近接して検出されている。平面形がややいびつな隅丸方形を呈し、径約 1.5 m を測る。窯詰めされていたと考えられる遺物が床面直上より多数出土しているが、これらの大半が中央より南東側に偏って出土しているため空白となった北西部に焚口が設けられたと推定されている。時期は出土した瓦器碗から 13 世紀末～14 世紀前半とされる。

建物 1 は焚口の反対側に位置する側柱建物である。規模は梁間 1 間×桁行 3 間（1.5m×3.3m。床面積 4.95㎡）であり、焚口から距離は約 1.5m を測る。

平井遺跡⁽⁶²⁾（大阪府堺市）

遺跡は石津川右岸の段丘状に位置する。近畿道と歌山線の道路工事に伴い、30,000㎡弱が調査されている。報告書を見ることができていないが、上記の森氏の論考に基づき、以下を述べる。遺跡では A、B、D の 3 地区において 12 世紀末～13 世紀初頭にかけての建物群が検出されている。このうち A 西地区建物群と B 地区建物群の間で瓦器椀窯 1 基と近接して掘立柱建物 1 棟（9-OB）が検出されている。

窯は平面形が楕円形を呈し、南北 1.4m、東西 1.15m を測る。床面での炭化物の堆積状況から西側が焚口と推定されている。窯出しされなかったと報告される瓦器碗から時期は 13 世紀前半とされる。

掘立柱建物（9-OB）は焚口の北西側に位置する側柱建物である。規模は梁間 2 間×桁行 2 間（4.0m×4.5m。床面積 18.0㎡）であり、焚口からの距離約 2 m を測る。

A 西地区の建物は 3 棟復元されているが、相互に近接する 2 棟（1-OB、2-OB）は小、中規模の建物のセットになっている。B 地区の建物は 5 棟復元されている。出土遺物から 2 時期あるとされており、1 時期 2、3 棟からなる建物群であると考えられる。これらの建物の中には 9-OB と同程度の床面積である側柱建物（2-OB、8-OB）を含む。

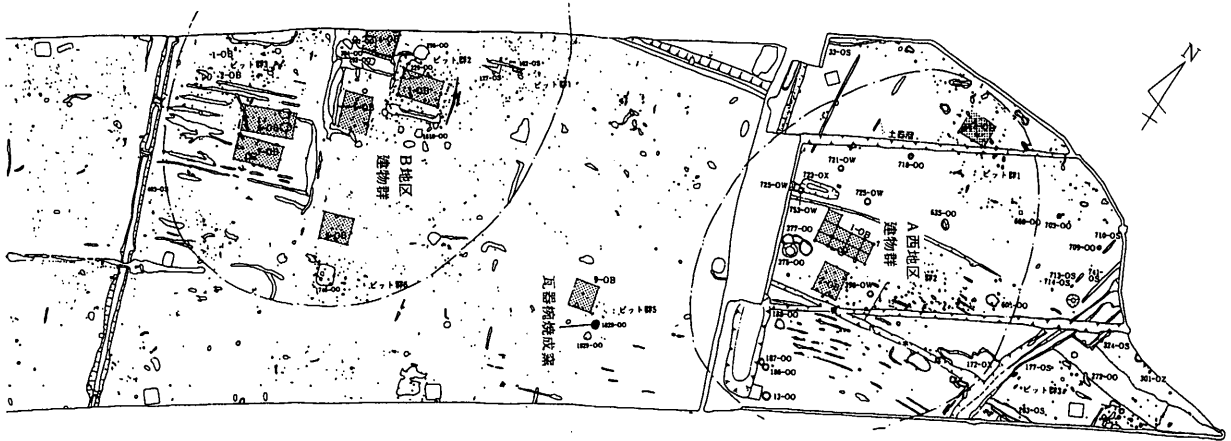
錦織遺跡⁽⁶³⁾（滋賀県大津市錦織）

遺跡は琵琶湖西南部に位置する。個人住宅建設に伴い、極めて狭い範囲の調査が複数地点で行われている。遺跡は大津宮推定地であり、報告書ではこれに関する報告が中心となり、他の時期の遺構、遺物については触れられていないものがある。だが、森氏が中世の土器窯について論じる中で伴う可能性がある中世遺構を抽出しており、これに依拠して以下を述べる。

隣接する 53-2、58-1 地点では土師器皿の焼成窯 1 基、2 基の掘立柱建物、大きな落ち込み 1 ヶ所、土坑が検出されている。付近の調査も行われているが小規模であり、これに伴う集落は明確でない。

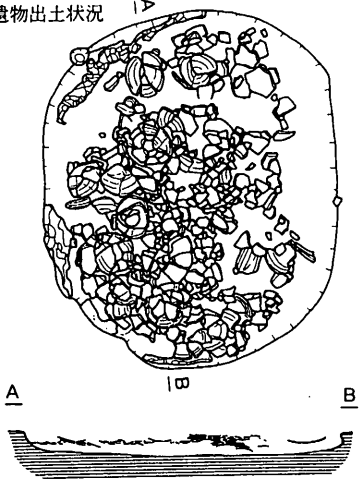
窯（SX-01 焼土坑）は平面形が卵形を呈し、東西 1.5m、南北 1.2m を測る。西側では一段深い掘り込みがなされる。規模、形態が類似する近世の土師器焼成窯でも下方に一段掘り込んだ焚口が設けられることからこの部分が焚口であると推定されている。時期は埋土、周辺から出土した土師器皿から 13 世紀中葉とされる。

掘立柱建物は焚口の南西側に位置し、2 棟が東西に並ぶ。共に側柱建物であり、主軸方向は窯と平行ないし直交する。東側の建物 1 は梁間 2 間×桁行 4 間（3.0m×6.75m。床面積 20.25㎡）であり、焚口から 6 m を測る。建物 2 は梁間 2 間×桁行 3 間（4.5m×6.0m。床面積 27.0㎡）であり、焚口から 13m を測る。窯のすぐ西側にある落ち込みは 13 世紀中頃から 14 世紀代の土器類が出土し、森氏の指摘通り窯

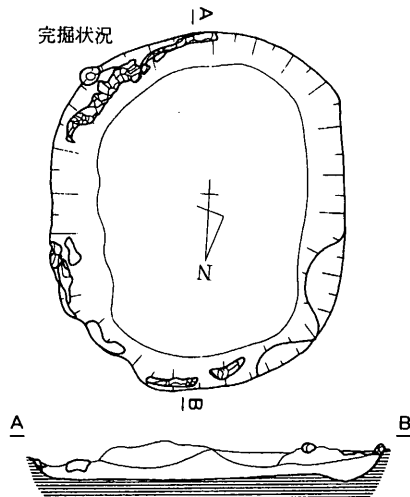


※図面は註(61)文献より転載

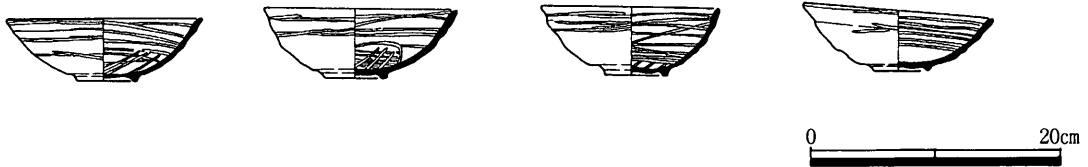
遺物出土状況



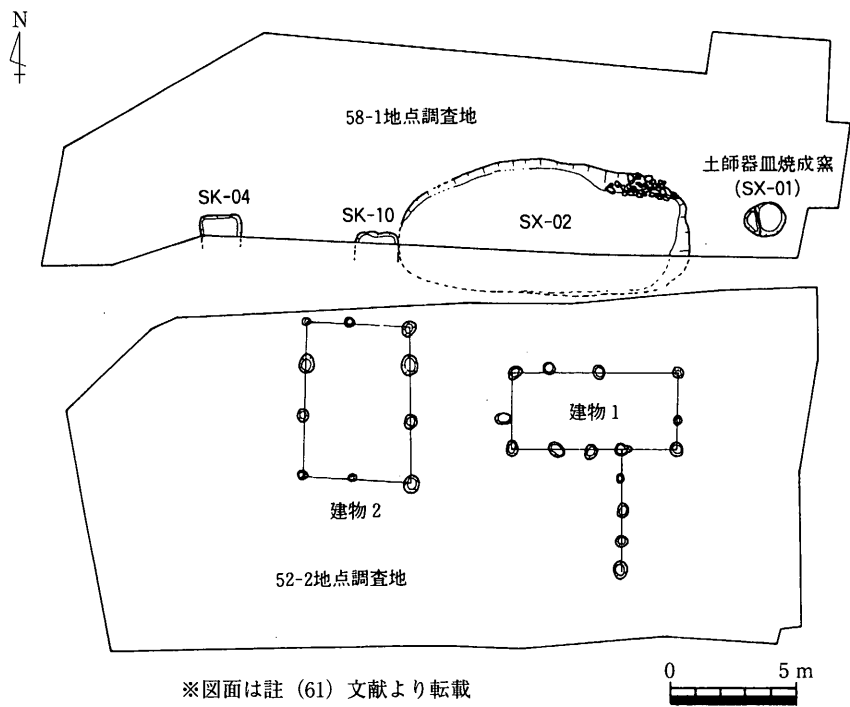
完掘状況



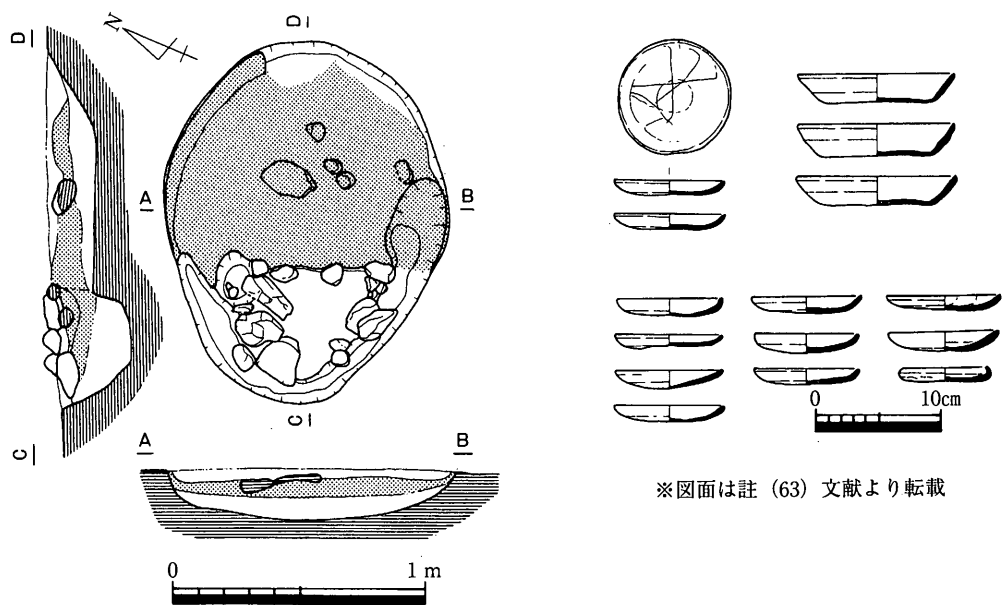
出土遺物実測図



第194図 平井遺跡 遺構配置図 (1/1250)、瓦器椀窯 平・断面図 (1/30)、出土遺物 (1/6)



第195図 錦織遺跡 土師器窯、周辺遺構図 (1/300)



第196図 錦織遺跡 土師器窯 (1/30)、出土遺物 (1/6)

と関連することが推定される。建物1はこれと同主軸と推測され、北側桁行から3m以上と一定の距離を開ける。建物2もこれと近接する。このような窯、落ち込みとの近接した配置から窯に伴うと考えられる。

国分寺楠井遺跡⁽⁶⁴⁾ (香川県綾歌郡国分寺町)

国分寺楠井遺跡は堂山西麓の斜面に位置する。四国横断自動車道建設に伴い、4,400㎡の調査が行われている。

遺跡では窯3基(1～3号窯跡)、土器溜まり3ヶ所、掘立柱建物2棟などが検出されている。報告者は遺跡が谷部に接した緩斜面、北側尾根斜面に位置するため、一般集落の立地とは異質であると指摘している。地形図を見るとSB01は周囲を斜面に囲まれた15m四方程度の緩斜面にあり、SB02も斜面に位置するためこの指摘は妥当と考える。

窯の操業時期に伴う建物については3号窯跡とSB01が14世紀中葉～後葉、1号窯跡とSB02が14世紀末葉～15世紀前葉、2号窯跡が15世紀中葉から16世紀前半とされており、継続した操業が行われている。焼成遺物は土師質土器土釜、土鍋、甕、すり鉢などである。

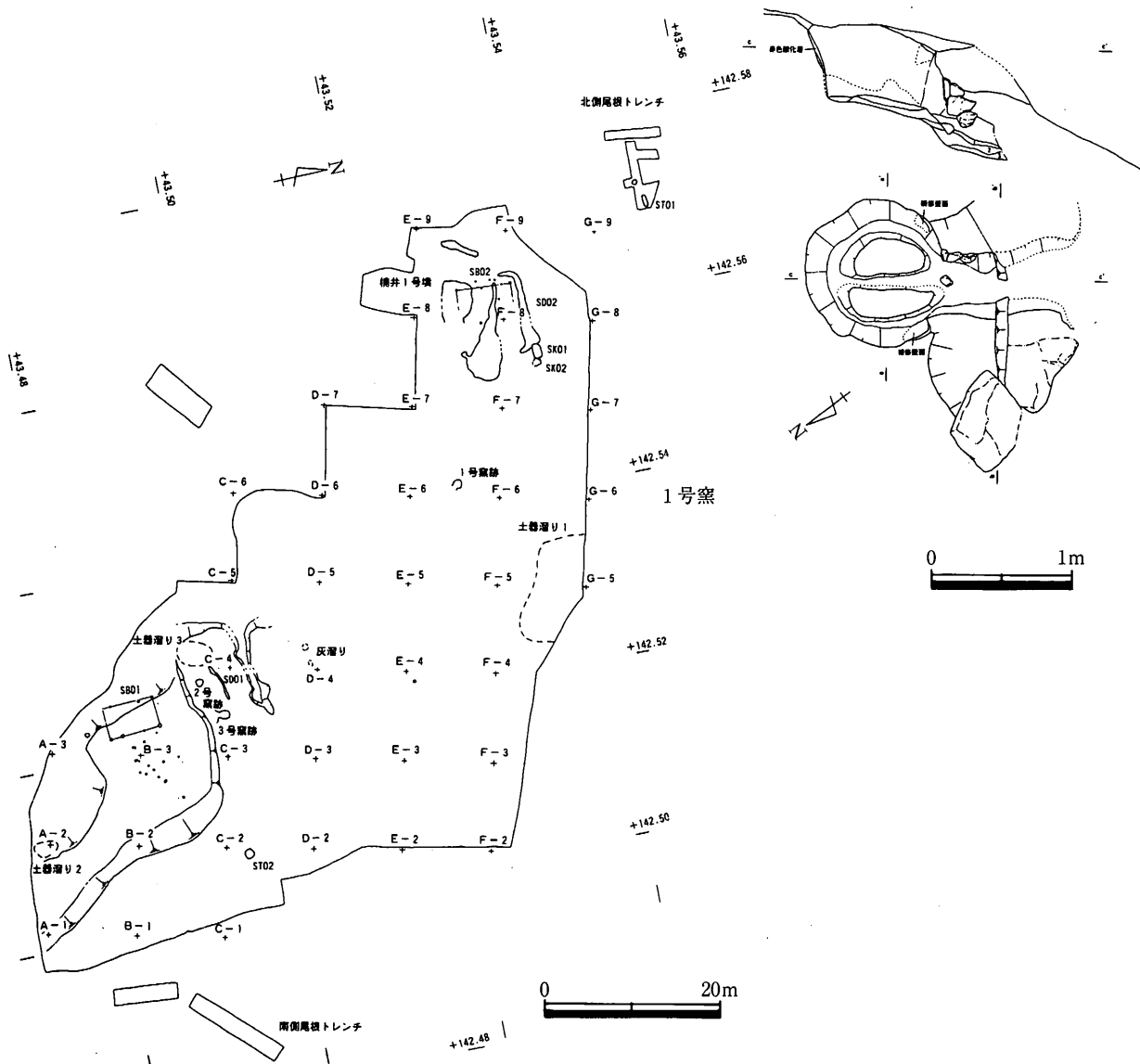
1号窯跡は平面形が円形でキセル窯に近い構造である。規模は全長1.92m、焼成部約1mを測る。焚口は西側である。2、3号窯跡は谷筋からやや離れ、せり出した斜面に構築されている。2号窯跡は平面形が不整形で、規模は径約1mを測る。窯体は掘り方内に角礫を半円形に巡らせて粘土を張り付けて構築しているが、西側では礫が途切れ、窯壁に接して並べられている。この部分が焚口であり、窯壁に接する礫は閉塞材として使用されたことが推定されている。3号窯跡は前庭部と灰原が2号窯跡の整地層下で検出されたためこれより先行する。平面形が不整形で全長1.38m、焼成部長1.10mを測る。焚口は西側である。

SB01は3号窯跡の焚口側に近接する。焚口からの距離約7mを測る。建物の南側に柱穴群があり、建て替えられたことが推測されている。主軸方向は窯とほぼ平行し、梁間1間×桁行3間(3.44m×5.80m。床面積19.95㎡)の側柱建物である。北辺の柱穴の内、西側の2基は確認されていない。他の柱穴は間隔が不均等で、底場レベルもばらつくことから短期間の仮設的な建物であったことが推定されている。

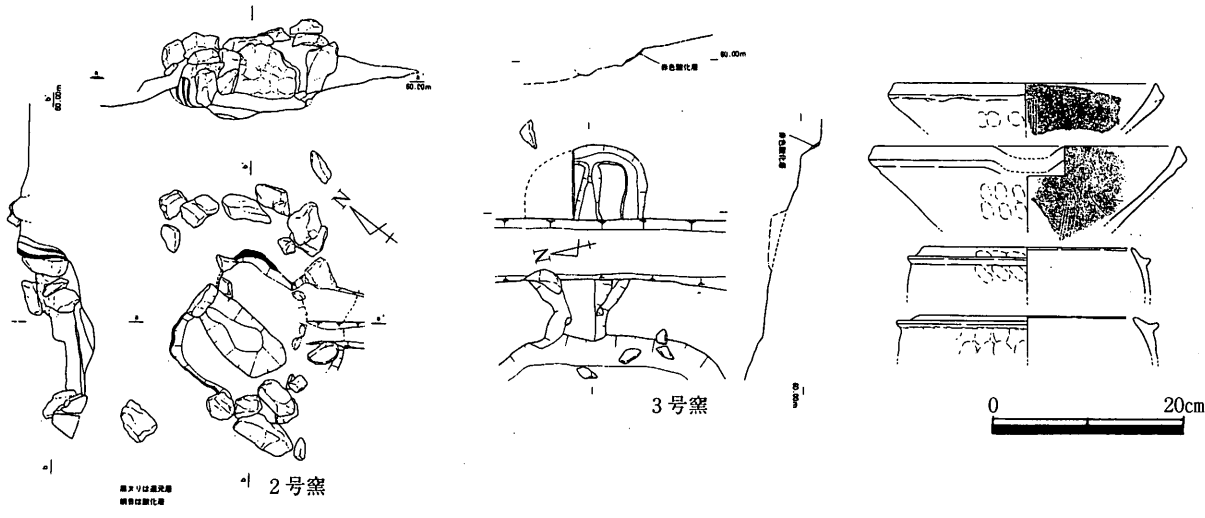
SB02は柱穴列が2間分あるのみである。だが、東側に隣接して主軸がほぼ一致するSD02があり、これを雨落ち溝と見なせば、梁間6.2m×桁行6m強、床面積約37㎡の建物であった可能性もあるとされる。SB02と1号窯跡の主軸方向は共に付近の等高線に一致し、相互には異なる。SB02の位置は2号窯跡より標高的に上位にあるため焼成室側に近接し、焼成室からの距離約15mを測る。

以上の事例から以下のような点を指摘できる。

- a. 集落域から外れた場所に窯と近接する建物がある。(調査面積に制約がある錦織遺跡では集落域との関係は不明だが、平井遺跡で窯は2つの建物群の間に位置し、一定距離を開ける。小部遺跡では集落域の外れにある溝に近接して窯が検出されている。南ノ庄田遺跡、楠井遺跡は立地的に集落域から離れていることが想定できる。)
- b. 1基の窯に対し、同時併存と考えられる近接建物の数は1～2棟である。
- c. 建物の規模は概ね10～20㎡と小型であり、構造も側柱建物である。楠井遺跡ではSB01について柱穴間距離の不均等、底場レベルのばらつきが指摘され、短期間使用された仮設的な建物であったと



国分寺楠井遺跡遺構配置図 (1/800)



第197図 国分寺楠井遺跡遺構配置図 (1/800)、1~3号窯跡 平・断面図 (1/50)、出土遺物 (1/8)

考えられている。

d. 建物は窯の焚口方向に位置するものが多いが、焚口の前でなく、左右にずらした位置に設けられる。距離は2～17mと近接する。事例紹介では取り上げなかったが、岡山県赤磐郡山陽町三蔵畑遺跡⁽⁶⁵⁾でも焚口側に工房跡と考えられる柱穴群があり、焚口からの距離は約8mを測る。これは窯付近での作業（窯詰め、まきをくべる、製品選別など）に支障がないように配慮した配置と考えられる。

e. 建物の建て替えは楠井遺跡のSB02で柱穴の分布状況から推測されているが、その他では明確でない。これらのうち、aより集落を構成する建物でないこと、dより窯を意識した配置状況を窺え、相互の結びつきが強いことを想定できる。よってこれらは工房であると考えられる。またその他の共通点として小規模で、簡易な構造であること、基数も多くて2棟程度であることが見て取れる。なお、錦織遺跡のように窯に伴う別遺構との配置を意識したと見られる例もある。

3. II区SB01～03の機能

以上を踏まえてII区SB01～03についてであるが、a～eの5点は3基の建物のいずれにも概ね該当し、全てが工房の可能性を持つ。よって遺跡の状況に即し、各建物について検討する。

まずSB02、03であるが、どちらも南西部が丘陵に近接し、斜面までの平坦面の距離は現状で1.5mと間隔が狭い。これは窯付近での作業（焼成、未焼成瓦の移動など）に際し、建物の西側は利用できなかった可能性を示唆し、工房として利用する上でデメリットになったと考えられる。ただし、II区SR01の当該期のプランを明確にできないため東側の空間で十分に作業を行えた可能性は残る。だが、主軸方向、検出位置が類似するSB02、03は建て替えられた可能性が高いのに対し、前述の通り窯の存続期間は短いと推定されるので工房でないと考えたい。

この場合、集落域から外れた位置に存在する建物の機能が問題となる。これについては、炭焼き窯と考えられるII区SK07と関連づけて捉えることが可能である。SK07からSB02、03は北に8mと近接して位置する。また通路の可能性を持つ溝がSB02、03の方へ延び、主軸方向が一致する。よって性格は炭焼きの材料や製品を保管していた小屋などが考えられる。

次にSB01であるが、主軸方向が西側の丘陵に規制され、平行している。丘陵とは約3.5mと一定の間隔を開けている。この理由は窯付近での往来をSB01西側でも行うためであると推測される。このことは細長い建物プランとも関連して捉えられる。東西方向の空間は丘陵とSR01に制約されるため梁間は極端に短い。一方で一定の床面積を確保するため桁行は他の建物よりかなり長くなっている。このように窯付近との往来を考慮した建物形態をもつことは相対的にSB02、03より窯を意識した建物であると判断し、SB01は窯に伴う工房であると考えられる。

建物構造は総柱で、梁間の柱間距離が狭く、桁行が広い北側では東柱（SP77）が追加される。このような状況から床張りで荷重を支える作りであると考えられる。よって機能は焼成、未焼成を問わず瓦を仮置きするなど使用されたと推測される。このように考えれば床はSR01に近接することにより生じる地面の湿気を遮断する役割も果たしたのかもしれない。南ノ庄田瓦窯跡に伴う工房は側柱建物であるが、こうした差は何らかの機能差を示すのであろう。

以上の検討からII区SB01は窯に伴う工房であると考えられる。機能は瓦の保管を中心とした可能性が考えられる。II区SB02、03については工房でなく、炭焼き窯（II区SK07）に伴う建物であると推測される。

(註57) 瓦製作に伴う工房について考察するのでこうした事例を中心に検討を行うべきであるが、管見に触れず土器窯に伴うものを中心として論じている。よって瓦と土器という異なる生産物を製作する窯と工房、これらを伴う集落を同列に扱うことについて少し説明しておく。

両者の比較は基本的な生産工程（粘土採取からモノの製作、焼成、搬出）に差がないという点では問題ないと思える。だが、工房の機能は粘土、製作物、製作道具、燃料の保管や製品の製作など多岐に渡るため主な使用目的により形態、規模、構造に差が生じる可能性がある。また比較の齟齬を小さくするため規模が類似する小型窯を検出した遺跡を検討材料としたが、生産規模や工人数、製作物の法量や一度に窯詰めされる量、使用燃料の量などに応じて差が生じる。こうした点で単純な比較は難しいものの工房の配置は窯付近での作業を考慮して設定されていることが予測され、この点では概ね類似すると考えられる。よって配置に注目した検討を行った。

なお、本稿では西村遺跡を取りあげていない。遺跡は古代～中世にかけて須恵器・瓦・土器を生産した十瓶山窯跡群に所在する。中世期には19基の土器窯の存在が想定され、それらは同時期の集落を構成する掘立柱建物群および粘土採掘坑と近接して検出されている。こうした状況は「中型程度の居住用建物1基、工房を含む小型建物1、2基、窯1～数基、墓がセットになった単位が遺跡内の各地区に存在し、数単位が1ヶ所の粘土採掘坑を共有する。これらは広範な同職村落である⁽⁵⁸⁾。」と捉えられている。

だが、ここで目的とした工房の指標、特徴を抽出するための検討では工房と居住用の小型建物が判別できなかった。窯場という性格、今回取りあげた諸遺跡の状況から見て小型建物に工房を含むという佐藤氏の指摘は妥当であると思えるが、両者の形態、規模、構造には差がなく、工房に伴う粘土溜まりや未焼成品の廃棄遺構なども見られない。また居住用建物と窯が近接するため本稿で重視した配置から抽出することもできない。以上の理由からここでは検討対象として扱わなかった。

(註58) (註38) に同じ

(註59) 『南ノ庄田瓦窯跡』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1998

(註60) 宇佐市教育委員会『宇佐地区遺跡群発掘調査概報』1988

宇佐市教育委員会『宇佐地区遺跡群発掘調査概報』1992

森隆「中世土器の焼成窯」『中近世土器の基礎研究X』日本中世土器研究会 1994

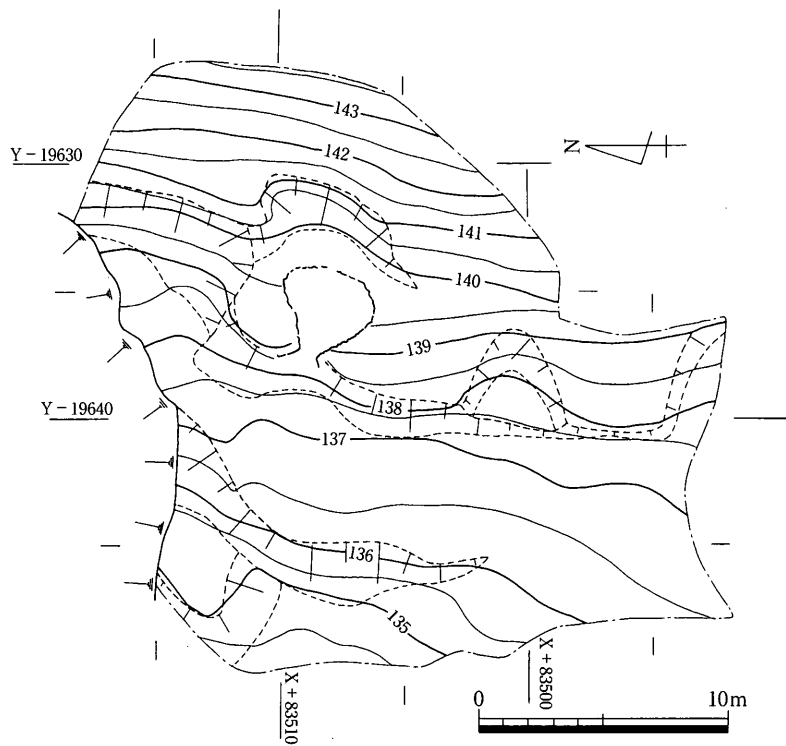
(註61) 森隆「中世土器の焼成窯」『中近世土器の基礎研究X』日本中世土器研究会 1994

(註62) 『平井遺跡』大阪府教育委員会他 1988、(註61) に同じ。

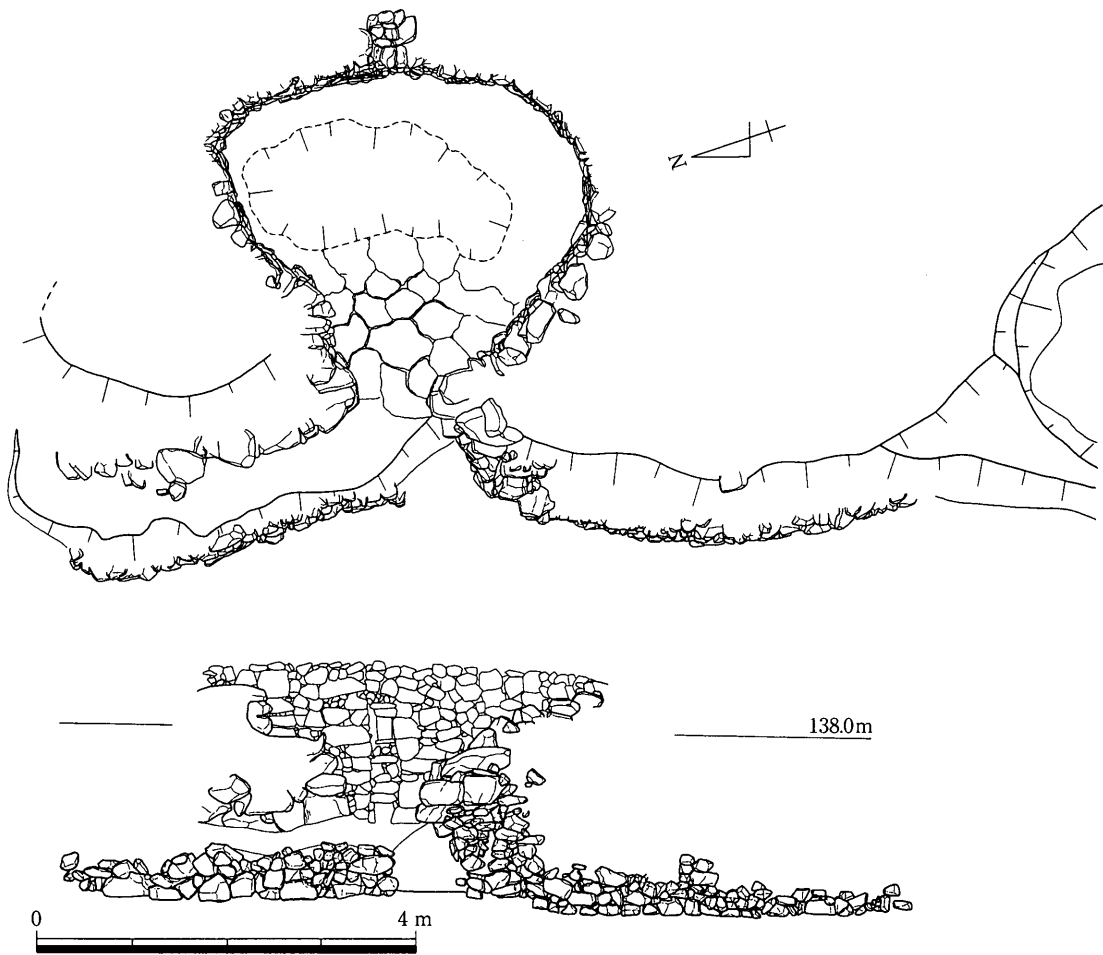
(註63) 『錦織遺跡』滋賀県教育委員会他 1992、(註61) に同じ。

(註64) 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第十八冊 国分寺楠井遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1995

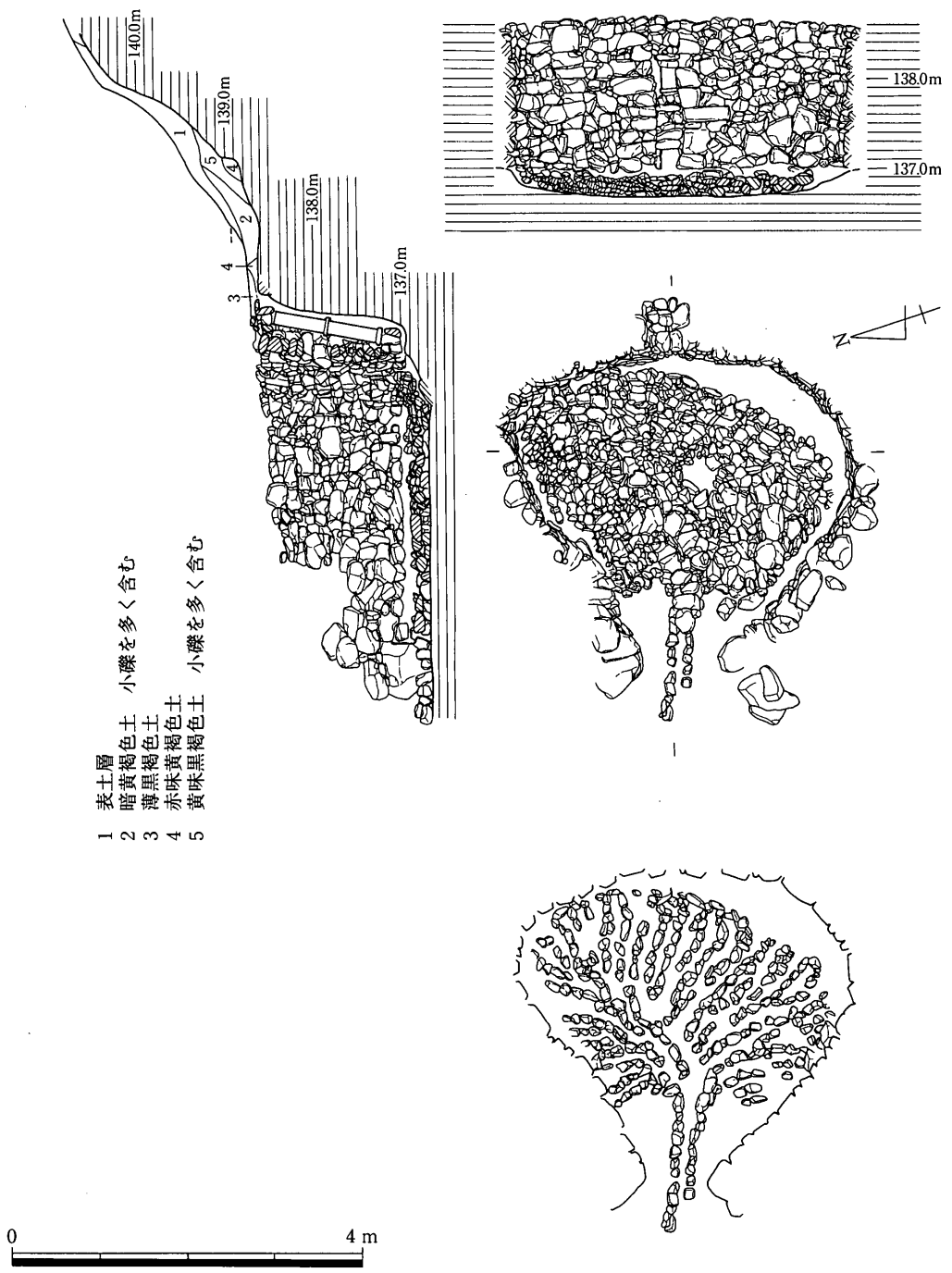
(註65) 『岩田古墳群』山陽町教育委員会 1976



第198図 内ヶ磯遺跡 炭窯付近 コンター図 (1/300)



第199図 内ヶ磯遺跡 炭窯平・立面図1 (1/80)



第200図 内ヶ磯遺跡 炭窯平・立面図2 (1/80)

第26表 遺構番号変更一覧表

	堀立柱建物 (SB)		柱穴 (SP)		土坑 (SK)		溝状遺構 (SD)		(SX)		(攪乱)	
	新	旧	新	旧	新	旧	新	旧	新	旧	新	旧
I 区	SB01	SB01	SP701	SP314	SK02	凹地11	SD06	凹地02	SX01	凹地01	攪乱	SD06
	SB02		SP702		SK03	凹地08	SD07	凹地06	SX02	凹地07		
	SB03		SP703	SK05	SK05	凹地09						
	SB04		SP704		SK07	凹地10						
	SB05		SP705		SK11	凹地04						
	SB06	SB07			SK13	凹地03						
	SB07				SK14	凹地13						
	SB08				SK15	SX01						
	SB09											
	SB10											
	SB11											
	SB12											
	SB13											
	SB14											
	SB15											
	SB16											
	SB17											
	SB18											
	SB19	SB02										
	SB20											
II 区	堀立柱建物 (SB)		(SA)		(SX)							
	新	旧	新	旧	新	旧						
	SB01		SA01		SX02	神社跡、斜面平坦面、斜面、斜面部						
	SB02				SX03	凹地1						
	SB03				北西隅流入土	平地部北西隅山の斜面流入土						
SB04				北西部包含層	平地部北西部包含層(山すそ部)、平地部北西部瓦溜り							

旧遺構名がなく、新遺構名があるものは、整理作業時に新規に命名したものである。

遺物觀察表

観文 番号	表測 番号	補図 番号	図版 番号	出土位置	層位	器種	口径	器高	底径	外面	内面	胎土	焼成	色調	残存量	備考
1	449	10		I区SB03- SP005		土師器 杯	-	-	7.0	摩減・底部糸 切り	摩減	密 2mm以下の長石ごく 少、1mm以下の赤色粒子 少	普通(やや軟)	(内)黄橙10YR8/6 (外)浅黄 橙7.5YR8/6、灰N6/	底部完存	
2	436	12		I区SB05- SP155		土師器 碗	-	-	-	摩減	摩減	密 1mm以下の長石ごく 少、1mm以下の赤色粒子 ごく少	普通(やや軟)	にぶい黄橙10YR7/2	底部1/8	
3	434	12		I区SB05- SP072		須恵器 碗	-	-	-	回転ナデ	板ナデ	やや粗 1mm以下の石英、 長石 少	良好	灰白5Y7/1	破片	非西村産
4	432	12		I区SB05- SP020		土師器 小皿	-	-	-	摩減	摩減	密 0.3mm以下の白色砂粒 ごく少	普通	(内)灰5Y4/1、灰白5Y8/1 (外)オリープ黒5Y3/1、灰白 5Y8/1	口縁部破 片	
5	440	13	32	I区SB06- SP260		土師器 小皿	7.2	1.2	5.7	摩減・底部糸 切り	回転ナデ	密 0.5mm以下の砂粒ごく 少	普通(やや軟)	(内)灰白10YR8/2 (外)灰白 10YR8/2、灰白2.5Y8/1	底部2/8	
6	441	13	31	I区SB06- SP260		土師器 小皿	7.7	1.05	6.15	回転ナデ・底部 糸切り	摩減	密 2mm以下の石英ごく 少	普通	灰白2.5Y8/2	4/8	
7	438	13	32	I区SB06- SP199		土師器 小皿	-	-	-	摩減	摩減	粗 3mm以下の石英、長石 普通	良好	(内)にぶい黄褐10YR5/3 (外)浅黄橙7.5YR8/4	底部破片	
8	439	13	32	I区SB06- SP260		土師器 杯	11.6	-	-	摩減	摩減	密 1mm以下の赤色粒子、 灰色粒子 ごく少	普通(やや軟)	灰白2.5Y8/2	口縁部 1/8	
9	437	13	32	I区SB06- SP045		土師質土器 土鍋	-	-	-	横ナデ・指押さ え後ナデ	ハケ目後ナデ・ ハケ目	やや粗 2mm以下の石英、 長石 多	普通	(内)にぶい橙5YR6/4、にぶ い黄橙10YR6/3 (外)にぶ い褐7.5YR5/4	破片	
10	470	14	31	I区SB07- SP238		土師器 小皿	7.2	1.35	6.1	摩減・底部糸切 り	摩減	密 3mm以下の石英、長石 少、2mm以下の赤色粒子 少	普通	灰白2.5Y8/1	底部完存	
11	464	14	31	I区SB07- SP165		土師器 杯	12.3	3.15	7.3	回転ナデ・底部 へう切り	回転ナデ	やや粗 5mm以下の石英、 長石 普通	普通	灰白10YR8/2	6/8	
12	485	16		I区SB09- SP378		土師器 杯	-	2.3	6.0	ナデ	ナデ	密 0.5mm以下の長石ごく 少、1mm以下の赤色粒子 ごく少	良好	にぶい黄橙10YR7/3	1/8	
13	444	17		I区SB10- SP284		土師器 杯	14.2	3.6	9.8	回転ナデ	回転ナデ	密 1mm以下の石英、長石 普通	普通	(内)浅黄橙10YR8/3 (外)灰 黄2.5Y7/2	1/8	
14	443	20		I区SB13- SP269		土師器 杯	-	-	7.0	摩減・底部糸切 り	摩減	密 3mm以下の赤色粒子 少	普通	灰白2.5Y8/2	底部3/8	
16	476	22		I区SB15- SP375		土師器 小皿	9.5	1.1	8.0	摩減	摩減	密 1mm以下の長石ごく 少、赤色粒子 ごく少	普通	(内)黄灰2.5Y6/1 (外)灰黄 2.5Y6/2	1/8	
17	475	22	32	I区SB15- SP375		土師器 杯	11.0	4.3	7.6	回転ナデ・底部 糸切り	回転ナデ	密 2mm以下の石英ごく 少、1mm以下の赤色粒子 ごく少	普通	(内)灰白10YR8/2、淡黄橙 2.5YR7/4、赤橙10R6/6 (外)灰白10YR8/2、赤橙 10R6/6	6/8	
18	477	22	32	I区SB15- SP375		東播系コネ鉢	-	-	-	回転ナデ・横ナ デ	回転ナデ・横ナ デ	やや粗 1mm以下の石英、 長石 ごく少、0.5mm以下 の褐色粒子 ごく少	やや不良	(内)灰白2.5Y8/1 (外)灰白 2.5Y8/1、黄灰2.5Y4/1	破片	
19	478	22	32	I区SB15- SP375		東播系コネ鉢	31.9	-	-	指押さえ後指ナ デ	ナデ	やや粗 3.5mm以下の石 英、長石 少、1mm以下の 黒色粒子 少	良好	(内)灰白5Y7/1 (外)灰白 5Y8/1、灰N6/、灰N5/	口縁部 1/8弱	

第27表 土器観察表(1)

報文 番号	実測 番号	採 番号	図版 番号	出土位置	層位	器種	口径	器高	底径	外面	内面	胎土	焼成	色調	残存量	備考
20	483	23		I 区SB16- SP379		土師器 小皿	7.4	1.0	6.0	ナテ・底部へラ 切り後ナテ	ナテ	密 0.1mm以下の長石、赤 色粒子 ごく少	普通	(内)橙5YR7/8 (外)淡橙 5YR8/4、灰白2.5Y8/2、灰 白N7/	2/8	内面に黒い固形物 付着
21	486	23		I 区SB16- SP420		土師器 小皿	7.5	1.3	4.6	摩擦・底部へ ラ切り	摩擦	密 0.5mm以下の石英、長 石 ごく少、1mm以下の赤 色粒子 ごく少	普通	(内)浅黄橙7.5YR8/3 (外) 橙5YR7/6	1/8	
22	479	23		I 区SB16- SP359		東播系コネ鉢	-	-	16.6	指押さえ後ナ テ・底部ナテ	ナテ	やや粗 1mm以下の石英、 長石 普通	良好	灰白5Y7/1	1/8	
23	429	23	31	I 区SB16- SP345		須恵器 甕	-	-	-	格子目タタキ	板ナテ・当て具 痕	やや粗 0.1~3.5mmの砂粒 を含む	良好	灰N6/	体部破片	
24	407	25		I 区SK05		土師器 杯	-	-	7.4	回転ナテ・底部 回転糸切り	回転ナテ	やや粗 0.2mm以下の長石 ごく少	やや不良	(内)浅黄橙10YR8/3、淡橙 5YR8/4 (外)浅黄橙 10YR8/4、淡橙5YR8/3	底部1/8	
27	362	28		I 区SK06		土師器 杯	-	-	9.1	摩擦	摩擦	密 0.1~1mmの砂粒を含 む	普通(やや軟)	浅黄橙10YR8/4	底部2/8	
28	363	28		I 区SK06		土師質土器 土釜	-	-	-	横ナテ・指押さ え後横ナテ	剥落	粗 3mm以下の石英、長石 多	普通	(内)にぶい黄橙10YR7/3 (外)にぶい黄橙10YR7/2、 灰黄褐10YR5/2	破片	
29	364	28		I 区SK06		土師質土器 土鍋	-	-	-	ハケ目	ハケ目	やや粗 2.5mm以下の石 英、長石 普通	普通	浅黄橙10YR8/3	口縁部破 片	
30	408	28		I 区SK07		土師器 小皿	7.6	1.2	6.4	摩擦	摩擦	密 2mm以下の赤色粒子 ごく少、2mm以下の灰色粒 子 ごく少	普通(やや軟)	灰白10YR8/2	2/8	
31	368	28		I 区SK09		土師器 小皿	-	-	-	摩擦	摩擦	密 0.1mm以下の長石、こ く少、0.5mm以下の赤色粒 子 ごく少	普通(やや軟)	(内)浅黄橙7.5YR8/3 (外) 浅黄橙10YR8/3、灰5Y6/1	底部小片	
32	365	29	33	I 区SK08		土師質土器 土釜	-	-	-	横ナテ・板ナテ 後指押さえ	横ナテ・板ナテ	粗 2mm以下の石英、長石 普通	普通	(内)浅黄橙10YR8/4 (外)に ぶい黄橙10YR7/4、にぶい 黄橙10YR6/3	破片	
33	367	29		I 区SK08		土師質土器 土鍋	-	-	-	横ナテ・指押さ え後横ナテ	板ナテ	粗 2mm以下の石英、長石 普通	普通	(内)灰白10YR8/2 (外)浅黄 橙10YR8/3、にぶい黄褐 10YR4/3	破片	
35	369	30	34	I 区SK10		土師器 杯	11.8	3.6	7.7	摩擦・底部回 転へラ切り	摩擦	やや粗 3mm以下の石英、 長石 普通、0.5mm以下の 黒色粒子 少	普通	(内)にぶい橙7.5YR6/4、に ぶい褐7.5YR5/3 (外)にぶ い橙7.5YR7/4、橙5YR7/6	5/8	
36	370	30	33	I 区SK10		東播系 コネ鉢	27.8	3.1	-	指押さえ・ナテ・ 自然釉	ナテ	やや粗 1mm以下の長石 普通、1mm以下の褐色粒 子 ごく少	普通	(内)灰N6/ (外)灰N6/、暗 灰N3/	口縁部破 片	
38	406	31	34	I 区SK11		土師器 小皿	6.9	1.2	5.6	ナテ・底部糸 切り	ナテ	密 1mm以下の石英、長 石、赤色・褐色粒子 ごく 少	普通	浅黄橙10YR8/3	6/8	
39	397	31		I 区SK11		土師器 小皿	-	0.9	5.8	ナテ・底部糸 切り	摩擦	やや粗 0.1mm以下の白色 粒子 ごく少	普通	灰白2.5Y8/2	底部5/8	
40	399	31		I 区SK11		土師器 杯	-	-	8.0	回転ナテ・底部 糸切り	回転ナテ	密 2mm以下の砂粒 ごく 少、1mm以下の赤色粒子 少	普通	浅黄橙10YR8/3	2/8	

第27表 土器観察表(2)

報文 番号	実測 番号	挿図 番号	挿図 番号	出土位置	層位	器種	口径	器高	底径	外面	内面	胎土	焼成	色調	残存量	備考
41	400	31		I 区SK11		土師器 杯	11.9	5.0	6.5	指押さえ・ナデ・ 底部糸切り	回転ナデ	密 0.5mm以下の長石 ごく 少 1mm以下の赤色粒子 ごく少	普通	にぶい黄橙10YR7/2	1/8	
42	401	31		I 区SK11		土師器 土釜	-	-	-	指押さえ後ナ デ・ナデ	板ナデ後ナデ	粗 3mm以下の長石、石英 多、1mm以下の赤色粒子 ごく少	普通	(内)灰黄褐10YR5/2 (外)黒 褐10YR3/1	破片	外面スス付着
43	398	31		I 区SK11		土師器 鉢	22.0	-	-	摩滅	摩滅	密 0.5mm以下の長石 ごく 少、1mm以下の赤色粒子 ごく少	普通(やや軟)	浅黄橙10YR8/3	口縁部 1/8	
48	411	33	34	I 区SK14		土師器 小皿	6.9	1.1	5.7	ナデ・底部糸 切り	ナデ	やや粗 0.5mm以下の長石 ごく少	普通	浅黄橙7.5YR8/4	6/8	
49	415	33	34	I 区SK14		和泉系 瓦器 碗	13.8	4.5	5.1	ナデ・指押さえ	ナデ	やや粗 2mm以下の石英、 長石 多	良好	(内)灰5Y6/1 (外)オリーブ 黒7.5Y3/1	2/8	
50	414	33		I 区SK14		土師質土器 土釜	-	-	-	ナデ・指押さえ 後ナデ	板ナデ・指押さ え	粗 2mm以下の石英 多	良好	にぶい黄褐10YR5/3	破片	
51	413	33		I 区SK14		土師器 甕	-	-	-	摩滅	摩滅	やや粗 3mm以下の石英、 長石 多	普通	にぶい黄橙10YR6/4	破片	
53	377	34		I 区SK15		和泉系 瓦器 碗	14.2	-	-	指押さえ	へら磨き	やや粗 1.5mm以下の石 英、長石 ごく少	良好	(内)灰N5/ (外)暗灰N3/ 白5Y7/1	口縁部 1/8	
56	372	35		I 区SD01		土師器 碗	-	-	6.2	摩滅	摩滅	密 1mm以下の長石 ごく 少、0.5mm以下の赤色粒子 ごく少	普通(やや軟)	灰褐5YR6/2	高台1/8	貼り付け高台
57	373	37		I 区SD03		土師器 小皿	-	-	-	摩滅	摩滅	密 0.5mm以下の石英、長 石 ごく少	普通	にぶい黄橙10YR7/4	底部破片	
58	374	37		I 区SD03		和泉系 瓦器 碗	13.8	3.8	-	指押さえ(摩滅)	板ナデ・摩滅	密 1mm以下の石英、長石 ごく少	普通	(内)灰N4/ (外)灰N5/、灰 白5Y7/1	口縁部 1/8	
60	396	38		I 区SD06		土師器 小皿	6.6	1.0	5.8	回転ナデ・底部 へら切り	回転ナデ	密 0.1mm以下の長石 ごく 少、1mm以下の黒色粒子 ごく少、0.5mm以下の赤色 粒子 ごく少	良好	浅黄橙7.5YR8/6	1/8	
61	391	38	35	I 区SD06		土師器 杯	10.8	3.3	5.0	回転ナデ・底部 へら切り	回転ナデ	密 0.5mm以下の石英、長 石、黒色粒子、赤色粒子 ごく少	普通(やや軟)	(内)灰白10YR8/2 (外)灰白 10YR8/2、灰白N7/	底部4/8	
62	394	38	35	I 区SD06		土師質土器 杯	11.8	3.6	8.2	回転ナデ・底部 へら切り	回転ナデ	密 2mm以下の石英、長石 普通、雲母 ごく少	普通	灰白10YR8/2	口縁部 2/8	
63	393	38	34	I 区SD06		土師器 杯	12.6	3.6	8.9	回転ナデ・底部 へら切り	摩滅	やや粗 3mm以下の石英、 長石 少	普通	灰白10YR8/2	3/8	
64	395	38	34	I 区SD06		土師器 杯	11.8	2.9	7.6	摩滅・底部へ ら切り	回転ナデ	密 2mm以下の石英、長石 少、1mm以下の赤色粒子 ごく少	普通	にぶい黄橙10YR7/3	3/8	
65	392	38	34	I 区SD06		青白磁器 瓶	-	-	-	施軸片彫り	施軸	精良	良好	(内)(外)釉 明緑灰10G7/1 (胎)灰白N8/	破片	
66	390	39		I 区SX01		土師器 小皿	8.1	1.1	6.2	横ナデ・底部 回転へら切り	横ナデ	密 1mm以下の石英、長石 少、2mm以下の赤色粒子 少	普通	灰白10YR8/2	1/8	

第27表 土器観察表(3)

編文 番号	類別 番号	挿圖 番号	図版 番号	出土位置	層位	器種	口径	器高	底径	外面	内面	胎土	焼成	色調	残存量	備考
67	388	39		I区SX01		土師器 小皿	-	-	-	横ナデ	横ナデ	密 1mm以下の石英、長石 少	良好	にぶい橙7.5YR7/4	底部1/8	
68	389	39	37	I区SX01		須恵器 椀	13.0	4.5	4.5	指押さえ後回転 ナデ後ナデ	板ナデ	やや粗 1.5mm以下の石 英、長石 ごく少	普通	灰白5Y7/1	底部2/8	非西村産
69	383	39		I区SX01		土師質土器 土釜	22.2	-	-	横ナデ・指押さ え	板ナデ	粗 2mm以下の石英、長石 多	普通	褐7.5YR4/3	口縁部破 片	外面にスス付着
70	384	39		I区SX01		土師質土器 土釜	-	-	-	横ナデ・指押さ え	板ナデ	粗 3mm以下の石英、長石 多、1mm以下の赤色粒子 少	普通	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部破 片	
71	385	39		I区SX01		土師質土器 茶釜	12.0	3.3	-	回転ナデ・菊花 紋スタンプ	回転ナデ	粗 3mm以下の石英、長石 多、0.5mm以下の赤色粒子 ごく少	普通	(内)明赤褐5YR5/6 (外)灰 黄褐10YR5/2	口縁部 1/8	
72	386	39		I区SX01		土師質土器 把手付鍋	-	-	-	指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	やや粗 3mm以下の石英、 長石 普通、4mm以下の赤 色粒子 ごく少	普通	(内)明赤褐5YR5/6 (外)灰 N4/	破片	
73	387	39	37	I区SX01		亀山甕	-	-	-	格子目タタキ	板ナデ	やや粗 1mm以下の石英、 長石 少	普通	灰N6/	体部破片	
74	459	42	35	I区SP128		土師器 杯	12.3	3.3	7.4	磨滅・底部糸 切り	磨滅	密 2mm以下の長石 ごく 少、1mm以下の赤色・褐色 粒子 ごく少	普通(やや軟)	灰白10YR8/2	6/8	
75	431	42	36	I区SP486		土師器 杯	11.3	3.8	7.5	磨滅・底部糸 切り	磨滅	密 7mm以下の石英 ごく 少、5mm以下の赤色粒子 少	普通(やや軟)	浅黄橙7.5YR8/4、灰黄褐 10YR5/2	6/8	
76	448	43	35	I区SP004		瓦器 椀	-	-	4.7	回転ナデ	ナデ	やや粗 0.5mm以下の長石 ごく少	普通	(内)灰N4/ (外)灰N4/、灰 白5Y8/1	底部1/8	貼り付け高台
78	451	43		I区SP036		須恵器 椀	-	-	6.2	回転ナデ・ナデ	回転ナデ	密 0.2mm以下の長石 ごく 少	良好	(内)灰N5/ (外)灰N6/、灰 白5Y8/1	底部1/8	貼り付け高台
79	433	43		I区SP057		土師質土器 土鍋	-	-	-	ナデ	ハケ目・ナデ	密 2mm以下の石英、長石 普通	普通	(内)黄灰2.5Y4/1 (外)にぶ い黄橙10YR7/2	破片	
82	456	43		I区SP093		土師器 小皿	7.4	1.0	5.8	回転ナデ後ナ デ・底部へラ 切り	回転ナデ	密 1mm以下の石英、長石 ごく少、0.5mm以下の赤色 粒子 ごく少	普通	(内)浅黄橙7.5YR8/6 (外) 橙5YR7/6、灰白10YR7/1	口縁部 3/8	453と接合
83	426	43		I区SP099		土師器 小皿	7.2	1.3	5.8	磨滅・底部糸 切り・板目痕	磨滅	やや粗 1mm以下の長石 ごく少、2mm以下の赤色粒 子 ごく少	普通	(内)灰白2.5Y8/2 (外)灰白 2.5Y8/2、橙7.5YR7/6	1/8	
84	427	43		I区SP101		土師器 小皿	-	-	6.9	磨滅	磨滅	やや粗 2.5mm以下の赤 色、褐色粒子 ごく少	普通(やや軟)	浅黄橙7.5YR8/4	底部1/8	
85	428	43		I区SP101		土師器 小皿	-	-	8.4	回転ナデ・底部 へラ切り	回転ナデ後ナ デ	粗 1mm以下の石英、長石 少、0.5mm以下の赤色粒子 ごく少	良好	浅黄橙7.5YR8/4	底部2/8	
86	458	43		I区SP115		土師器 杯	11.0	3.1	7.8	ナデ・底部へラ 切り後ナデ	ナデ	やや粗 1mm以下の石英、 長石 普通、0.5mm以下の 赤色粒子 ごく少	不良	(内)橙2.5YR6/6、にぶい黄 橙10YR7/3、灰黄褐 10YR5/2 (外)浅黄橙 7.5YR8/4、灰黄褐10YR5/2	2/8	

第27表 土器観察表(4)

観文 番号	実測 番号	挿図 番号	挿図 版 番号	出土位置	層位	器種	口径	器高	底径	外面	内面	胎土	焼成	色調	残存量	備考
88	462	43		I区SP154		土師器 小皿	6.4	1.2	4.4	摩滅・底部へ ラ切り	回転ナデ	やや粗 1mm以下の石英 こく少、2mm以下の赤色、 黒色粒子 こく少	良好	灰白10YR8/2	1/8	
89	460	43	35	I区SP154		土師器 小皿	7.0	1.4	5.9	回転ナデ・底部 へラ切り	回転ナデ	密 5mm以下の赤色粒子 こく少	普通	灰白10YR8/2	底部3/8	
90	461	43		I区SP154		土師器 杯	-	-	6.6	回転ナデ・底部 へラ切り	回転ナデ	密 0.5mm以下の長石 少、0.5mm以下の赤色粒子 こく少	普通	褐灰10YR4/1	1/8	
91	465	43		I区SP169		土師器 小皿	8.1	1.1	6.0	ナデ	ナデ	密 2mm以下の石英、長石 こく少	普通	灰白2.5Y8/2	底部1/8	
92	467	43		I区SP179		土師器 小皿	-	-	5.4	摩滅・底部へ ラ切り	摩滅	密 1mm以下の赤色、褐 色、黒色粒子 こく少	普通(やや軟)	(内)浅黄橙10YR8/4、灰白 2.5Y8/1 (外)灰白2.5Y8/1	底部完存	
94	468	43		I区SP230		土師器 杯	11.0	3.5	7.4	回転ナデ・底部 へラ切り	回転ナデ	密 1mm以下の赤色粒子 こく少	普通	浅黄橙10YR8/3	1/8	
95	469	43		I区SP237		土師器 小皿	-	-	6.0	回転ナデ・底部 へラ切り	回転ナデ	密 0.5mm以下の赤色粒子 こく少	普通(やや軟)	浅黄橙7.5YR8/4	底部1/8	
96	445	43		I区SP280		土師器 椀	-	-	-	横ナデ・ナデ	指押さえ後ナデ	やや粗 0.5mm以下の長石 こく少、0.5mm以下の赤色 粒子 こく少	普通(やや軟)	灰白2.5Y8/1	破片	
97	471	43		I区SP282		土師器 杯	-	-	7.2	摩滅・底部 糸 切り	回転ナデ	密 1mm以下の赤色粒子 こく少	普通	(内)灰黄褐10YR6/2 (外)灰 黄褐10YR6/2、褐灰 10YR4/1	底部2/8	
98	446	43		I区SP315		土師器 小皿	8.2	1.6	8.0	回転ナデ・底部 糸切り	回転ナデ	密 1mm以下の長石 こく 少、0.5mm以下の赤色粒子 少	良好	灰白2.5Y8/1	1/8	
99	473	43		I区SP333		土師質土器 土釜	-	-	-	横ナデ・指押さ え後ナデ・ナデ	ナデ	粗 2mm以下の石英、長石 多、0.5mm以下の赤色粒子 少	良好	(内)灰黄褐10YR6/2 (外)に ぶい橙7.5YR6/4	破片	錆部下にスス付着
100	474	43		I区SP333		土師質土器 土釜	-	-	-	横ナデ・指押さ え後横ナデ・ナ デ	ナデ・板ナデ	やや粗 3mm以下の石英、 長石 多	普通	にぶい黄橙10YR6/4	破片	錆部下にスス付着
101	480	43		I区SP353		土師器 小皿	-	-	5.2	摩滅	摩滅	やや粗 2mm以下の石英、 長石、赤色粒子 こく少	普通	(内)浅黄橙10YR8/3 (外)橙 7.5YR7/6	1/8	
102	481	43		I区SP356		土師質土器 土釜	20.4	-	-	横ナデ・指押さ え後ナデ	ナデ	やや粗 3mm以下の石英、 長石 多、0.3mm以下の赤 色粒子 こく少	普通	(内)にぶい黄橙10YR7/3、 褐灰10YR4/1 (外)にぶい 黄橙10YR7/4、褐灰 10YR4/1	口縁1/8	
103	484	43		I区SP382		弥生土器 甕	-	-	-	摩滅	摩滅	粗 4mm以下の石英、長石 多	普通	(内)灰黄2.5Y7/2 (外)灰黄 褐10YR4/2	口縁部破 片	
104	482	43		I区SP382		土師器 杯	8.6	-	-	ナデ・底部 板 目痕	ナデ	密 1mm以下の石英、長石 こく少	普通	(内)にぶい黄橙10YR7/2、 灰黄褐10YR6/2 (外)にぶ い黄橙10YR7/2	2/8	
105	487	44		I区SP425		土師質土器 土釜	-	-	-	横ナデ・指押さ え	横ナデ	粗 2mm以下の石英、長石 普通	普通	暗灰N3/	1/8	

第27表 土器観察表(5)

報文 番号	実測 番号	挿図 番号	図版 番号	出土位置	層位	器種	口径	器高	底径	外面	内面	胎土	焼成	色調	残存量	備考
106	435	44		I区SP426		土師器 小皿	8.0	1.5	6.5	回転ナデ・底部 糸切り	回転ナデ	密 1mm以下の赤色、褐色 粒子 ごく少	普通	浅黄橙10YR8/3	底部1/8	
107	442	44	35	I区SP437		土師質土器 スリ鉢	32.0	-	-	ナデ・指押さえ	ナデ後卸目	粗 5mm以下の石英、長石 多	普通	(内)橙7.5YR7/6 (外)にぶい 黄橙10YR7/4	口縁部破 片	内面卸目11条
108	488	44		I区SP440		土師器 小皿	7.4	1.1	4.8	摩滅	回転ナデ	密 0.5mm以下の長石、赤 色粒子 ごく少	普通	(内)橙5YR7/6 (外)橙 7.5YR7/6	口縁部 3/8	
109	447	44	36	I区SP456		土師器 杯	12.8	3.3	9.5	摩滅・底部 ラ切り	回転ナデ	やや粗 1mm以下の石英、 長石 普通、赤色粒子 少 く	普通	橙7.5YR7/6	1/8	底部内面にもへう 切り、板目痕
110	490	44	35	I区SP458		東播系コネ鉢	-	-	-	横ナデ	横ナデ	やや粗 1mm以下の長石 少、1mm以下の黒色粒子 多(稀に2cmの小石)	普通	(内)灰N5/ (外)N6/、暗灰 N3/	口縁部破 片	
111	489	44	35	I区SP469		土師器 杯	12.8	3.6	7.5	摩滅・底部 糸切り	摩滅	密 0.3mm以下の長石 少、2mm以下の赤色粒子 普通、5mm以下の褐色粒 子 ごく少	普通	(内)灰白10YR8/1 (外)灰白 10YR8/2、褐灰10YR6/1	2/8	
112	430	44		I区SP482		土師器 小皿	7.2	1.1	6.0	横ナデ	横ナデ	密 0.5mm以下の砂粒 少 く	普通	浅黄橙10YR8/3	1/8	
113	491	44		I区SP499		土師器 杯	12.3	3.3	7.8	摩滅	摩滅	密 2mm以下の石英、長石 ごく少、0.3mm以下の赤色 粒子 ごく少	普通	灰白2.5Y8/2	1/8	
115	422	45		機械掘削・方 リカケ		土師器 小皿	7.7	1.2	6.0	回転ナデ・底部 糸切り	回転ナデ・ナデ	密 1.5mm以下の赤色、黒 色粒子 ごく少	普通	(内)淡橙5YR8/4、灰白 10YR7/1 (外)にぶい橙 5YR7/4	底部2/8	
116	423	45		機械掘削・方 リカケ		土師器 杯	9.8	4.7	7.4	ナデ・底部 糸切り	ナデ	やや粗 0.2mm以下の白色 粒子 少、0.5mm以下の赤 色粒子 少	良好	(内)灰白2.5Y8/1 (外)灰白 2.5Y8/1、浅黄橙10YR8/3	1/8	
117	421	45		機械掘削・方 リカケ		土師器 杯	15.5	3.2	11.0	摩滅・底部 ラ切り	摩滅	やや粗 3mm以下の石英、 長石 普通、1mm以下の以 下の赤色粒子 ごく少	良好	(内)橙5YR7/6、灰黄 2.5Y7/2 (外)橙5YR7/6、灰 白2.5Y8/2	1/8	
118	420	45	37	機械掘削・方 リカケ		土師質土器 土釜	23.0	-	-	ナデ・指押さえ 後ナデ・板ナデ・ 格子目タタキ	指押さえ	粗 5mm以下の石英、長石 多	良好	(内)橙5YR6/6 (外)橙 7.5YR7/6、灰褐7.5YR5/2	2/8	外面スス付着
119	419	45		機械掘削・方 リカケ		土師質土器 土釜	-	-	-	ナデ・指押さえ	ナデ・指押さえ	粗 4mm以下の石英、長石 多	不良	(内)灰白2.5Y8/2、にぶい黄 橙10YR6/4 (外)灰白 10YR8/2、灰黄褐10YR5/2	破片	
120	417	45		機械掘削・方 リカケ		土師質土器 土釜	-	-	-	ナデ・指押さえ	ナデ	粗 2mm以下の石英、長石 多、0.5mm以下の赤色粒子 ごく少	普通	(内)にぶい黄橙10YR7/4 (外)にぶい黄橙10YR6/3、 褐灰10YR4/1	1/8	I区SK08実測番 号365と同一個体 か?
121	418	45		機械掘削・方 リカケ		土師質土器 土鍋	-	-	-	摩滅	摩滅	(内)にぶい褐7.5YR5/3、褐 灰10YR4/1 (外)灰褐 7.5YR4/2	普通		口縁部破 片	スス付着
122	425	45		機械掘削・方 リカケ		土師質土器 土鍋	-	-	-	指押さえ後横ナ デ	横ナデ	粗 4.5mm以下の石英、長 石 多	普通	(内)橙5YR6/6 (外)橙 5YR6/6、褐灰10YR5/1	口縁部破 片	スス付着

第27表 土器観察表(6)

報文 番号	表測 番号	挿図 番号	図版 番号	出土位置	層位	器種	口径	器高	底径	外面	内面	胎土	焼成	色調	残存量	備考
123	416	45	37	機械掘削・力 リカケ		青磁 碗	-	-	-	施釉・編蓮井文	施釉	精良	良好	(内)外)釉 緑灰10GY7/1 (胎)灰白N8/	破片	
124	424	45	37	機械掘削・力 リカケ		土師器 不明	-	-	-	摩滅	摩滅	密	普通(やや軟)	灰白2.5Y8/2	-	
125	463	45		機械掘削・力 リカケ		陶器 不明	-	-	-	回転へら削り・ 片彫り・施釉	片彫り・施釉	精良	良好	(内)外)釉 オリーブ灰 10Y6/2 (胎)灰白N8/	破片	
128	301	49		II区SB04		土師質土器 土釜	-	-	-	横ナデ・指押さ え・ナデ	板ナデ	粗 多	良好	暗灰黄2.5Y5/2	破片	粘土の接合痕あ り。頸部下にスス 付着
129	303	50		II区SA01		土師質土器 土釜	-	-	-	指押さえ(摩滅)	摩滅・横ナデ・ 板ナデ	粗 多	不良	(内)灰白10YR8/2 (外)にぶ い黄橙10YR7/3	破片	
130	110	55		II区SF01		土師器 杯	-	2.0	8.0	摩滅	摩滅	やや粗 長石 普通、2mm以下の赤 色粒子 ごく少	良好	浅黄橙10YR8/3	底部1/8	
131	109	55	40	II区SF01		土師器 鉢	-	-	-	摩滅	摩滅	密 4mm以下の石英、長石 ごく少、8mm以下の赤色粒 子 ごく少	普通(やや軟)	灰白2.5Y8/2、浅黄橙 7.5YR8/3	頸部1/8	
148	149	64		II区SF02	1~3 層	土師器 小皿	-	-	4.8	横ナデ・底部摩 滅	横ナデ	やや粗 0.5mm以下の長石 少	普通	(内)灰褐7.5YR5/2 (外)に ぶい黄7.5YR6/4	1/8	
149	154	64	40	II区SF02	焼成室 北西付 近	土師質土器 土釜 脚部	-	-	-	指ナデ指押さえ 摩滅	-	粗 3mm以下の石英、長石 普通、1cm以下の赤色粒 子 ごく少	普通	橙7.5YR6/6	脚部破片	窯体内での二次的 な被熱により内外 面とも赤化
184	298	78		II区SK01		土師器 杯	-	-	7.9	摩滅	摩滅	密 0.5mm以下の長石、赤 色粒子 ごく少	普通(やや軟)	浅黄橙10YR8/3	底部1/8	
185	300	78	44	II区SK01		土師器 杯	-	-	4.5	底部 へら切り (摩滅)	ナデ	密 1mm以下の石英、ごく 少、0.5mm以下の黒色粒 子 ごく少	普通	(内)浅黄橙10YR8/4 (外)灰 白2.5Y8/2	底部3/8	
186	299	78	44	II区SK01		土師器 杯	12.2	3.6	9.1	摩滅	摩滅	2mm以下の石英、長石 ごく少、1mm以下の赤色粒 子 ごく少、1cm弱の砂岩 稀	普通	浅黄10YR8/3	2/8	
187	158	80		II区SK02		土師器 杯	-	-	8.0	摩滅・底部 へ ら切り	剥落	密 2mm以下の石英、長石 ごく少、0.5mm以下の赤色 粒子 ごく少	普通	(内)橙7.5YR6/6 (外)橙 7.5YR7/6、浅黄橙10YR8/3	底部3/8	
188	161	80	43	II区SK02		土師質土器 土釜	-	-	-	横ナデ・横ナデ 後指押さえ	摩滅	粗 2mm以下の石英、長石 多	普通	(内)灰白2.5Y8/2、灰黄 2.5Y6/2 (外)黄灰2.5Y5/1	破片	
193	30	82		II区SK04		土師器 小皿	-	-	5.2	横ナデ・底部 へら切り後ナデ	横ナデ	密 0.5mm以下の白色、赤 色粒子 ごく少	普通	灰白10YR8/2	底部4/8	
194	32	82		II区SK04		土師器 小皿	-	-	7.0	回転ナデ・底部 へら切り	回転ナデ	密 3mm以下の長石 少、 0.5mm以下の赤色粒子 ぐ く少	普通	浅黄橙7.5YR8/6	底部2/8	
195	33	82		II区SK04		土師器 杯	-	2.6	7.0	摩滅	摩滅	密 1mm以下の長石 ごく 少、2mm以下の赤色粒 子 少	普通	灰白10YR8/2	底部完存	
196	39	82		II区SK04		土師器 杯	-	-	8.0	摩滅	摩滅	密 1mm以下の赤色粒子 少	普通	橙5YR7/6	底部2/8	

第27表 土器観察表(7)

観文 番号	表測 番号	挿図 番号	図版 番号	出土位置	層位	器種	口径	器高	底径	外面	内面	胎土	焼成	色調	残存量	備考
197	40	82		II区SK04		土師器 杯	-	-	6.6	摩減	摩減	密 0.3mm以下の白色粒子 ごく少	普通	橙5YR7/6	底部2/8	
198	75	82		II区SK04		土師質土器 土釜 脚部	-	-	-	ナテ・格子目タ タキ	ナテ	粗 2mm以下の石英、ごく 少、1mm以下の黑色粒子 ごく少	普通	灰白2.5Y8/1	破片	
199	34	82		II区SK04		土師質土器 鉢	-	-	-	摩減	摩減	やや粗 3.5mm以下の石 英、長石 多、3mm以上の 赤色粒子 ごく少	普通(やや軟)	灰白2.5Y8/2	底部小片	
256	179	105		II区SK05		土師器 杯	-	-	8.0	摩減	回転ナテ(摩減)	密 2mm以下の石英、長 石、赤色粒子 少	普通	浅黄橙10YR8/3	底部4/8	
257	164	105		II区SK05		土師器 杯	-	-	8.2	摩減	摩減	密 2mm以下の石英、長 石、赤色粒子 少	普通	灰黄2.5Y7/2	底部2/8	
258	165	105		II区SK05		土師器 杯	-	1.4	9.0	摩減	摩減	やや粗 2mm以下の石英、 長石 普通、0.5mm以下の 赤色粒子 ごく少	良好	(内)灰黄2.5Y7/2 (外)淡黄 2.5Y8/3	底部1/8	
259	181	105		II区SK05		土師器 杯	-	-	7.8	摩減	摩減	やや粗 3mm以下の石英、 長石 少、1mm以下の赤色 粒子 少	普通	(内)灰黄2.5Y7/2 (外)灰白 2.5Y8/2	底部2/8	
260	180	105		II区SK05		土師器 杯	-	1.9	8.0	摩減	摩減	粗 3mm以下の石英、長石 少、2mm以下の赤色粒子 少	普通	浅黄橙10YR8/4	底部1/8	
261	177	105		II区SK05		土師器 杯	-	-	(9.4)	摩減、底部へ ラ切り	摩減	やや粗 1~3mmの石英、 長石 普通、2mm以下の赤 色粒子 少	普通	(内)灰黄2.5Y7/2、明黄褐 10YR7/6 (外)灰白2.5Y8/2	底部2/8	ややゆがみあり
262	168	105	50	II区SK05		土師器 杯	-	-	9.1	摩減、底部へ ラ切り後板目痕	摩減	密 3mm以下の石英、長石 普通、2mm以下の赤色粒 子 普通	普通	浅黄橙10YR8/3	底部完存	
276	24	114		I区・II区 SK12		土師器 小皿	-	0.9	6.2	摩減	摩減	密 0.5mm以下の長石、 少、1mm以下の赤色粒子 ごく少	良好	灰白10YR8/2	底部2/8	
277	13	114		I区・II区 SK12		土師器 小皿	-	-	6.7	摩減	摩減	密 2mm以下の石英、長石 ごく少	普通	(内)浅黄橙10YR8/4 (外)浅 黄橙10YR8/4、橙5YR7/6	底部1/8	
278	23	114		I区・II区 SK12		土師器 杯	-	-	6.0	剥落、摩減	摩減	密 3mm以下の石英、長石 ごく少、0.5mm以下の赤色 粒子 ごく少	普通	(内)浅黄橙10YR8/3 (外)灰 白10YR8/2、浅黄橙 7.5YR8/3	底部2/8	
279	7	114		I区・II区 SK12		土師器 杯	-	1.7	8.0	摩減	摩減	密 0.5mm以下の長石、 少、0.2mm以下の赤色粒子 ごく少	普通	浅黄橙7.5YR8/3、橙 5YR7/6	2/8	
280	3	114		I区・II区 SK12		土師器 杯	-	-	-	摩減、底部糸 切り	摩減	密 0.1mm以下の白色粒子 ごく少	普通	浅黄橙7.5YR8/6	底部2/8	
281	27	114	51	I区・II区 SK12		土師質土器 土釜	-	-	-	指押さえ	板ナテ	やや粗 2mm以下の石英、 長石 多	不良	浅黄橙10YR8/3	破片	
282	26	114		I区・II区 SK12		土師質土器 鉢	-	-	-	摩減	摩減	密 0.5mm以下の赤色粒子 ごく少、1mm以下の黑色粒 子 ごく少	普通(やや軟)	灰白2.5Y8/2	破片	

第27表 土器観察表(8)

報告 番号	実測 番号	挿図 番号	図版 番号	出土位置	層位	器種	口径	器高	底径	外面	内面	胎土	焼成	色調	残存量	備考
283	15	114	51	I区・II区 SK12		土師質土器 土鍋	-	-	-	横ナテ	剥離	粗 2mm以下の石英、長石 普通	良好	(内)にぶい黄橙10YR6/3 (外)灰黄褐10YR5/2	破片	外面スス付着
284	8	114	51	I区・II区 SK12		浅焼甕	-	-	-	平行タタキ	板ナテ	やや粗 3mm以下の石英、 長石 少、1mm以下の黒色 粒子 普通	良好	(内)灰N5/ (外)灰白N7/	破片	
285	9	114		I区・II区 SK12		浅焼甕	-	-	-	平行タタキ	板ナテ	密 1mm以下の石英、長石 少	良好	灰N6/	破片	
305	251	122	55	I区・II区 SR01		土師器 杯	12.8	3.2	8.6	摩滅・底部へ ラ切り	摩滅	やや粗 2mm以下の石英、 長石、赤色粒子 少	普通	浅黄橙7.5YR8/3	3/8	
306	288	122		I区・II区 SR01		土師器 杯	13.1	2.6	9.0	底部へラ切り・ 摩滅	摩滅	密 3mm以下の石英、長石 多	普通	浅黄2.5Y7/3	底部2/8	
307	286	122	55	I区・II区 SR01		土師器 杯	12.7	2.9	8.1	摩滅・底部へ ラ切り	摩滅	密 3mm以下の石英、長 石、赤色粒子 少	普通	にぶい黄橙10YR7/2	6/8	
308	240	122		I区・II区 SR01		土師器 杯	(14.1)	(3.6)	10.4	摩滅	横ナテ・ナテ	密 3mm以下の石英、長石 普通	良好	浅黄橙7.5YR8/3	底部1/8	
309	239	122		I区・II区 SR01		土師器 杯	-	-	8.9	剥落・摩滅	摩滅	やや粗 3mm以下の石英、 長石 普通、1mm以下の赤 色粒子 ごく少	普通	浅黄橙7.5YR8/3	底部1/8	
310	268	122		I区・II区 SR01		土師器 杯	-	2.1	9.0	ナテ	ナテ	やや粗 2mm以下の石英、 長石 普通、1mm以下の赤 色粒子 ごく少	普通	淡黄2.5Y8/3	底部2/8	
311	283	122		I区・II区 SR01		土師器 杯	-	1.3	9.2	摩滅	摩滅	やや粗 3mm以下の石英、 長石 少、1mm以下の赤色 粒子 ごく少	普通	灰白2.5Y8/2	底部2/8	
312	287	122		I区・II区 SR01		土師質土器 土釜	26.0	-	-	指押さえ後回転 ナテ後ナテ	回転ナテ後ナ テ	やや粗 4mm以下の石英 多	やや不良	黒2.5Y2/1	口縁部 1/8弱	
313	275	122		I区・II区 SR01		土師質土器 土釜脚部	-	-	-	指ナテ	ハケ目	粗 2mm以下の石英、長石 普通	普通	灰白2.5Y8/1	6/8	
314	276	122		I区・II区 SR01		土師質土器 土釜脚部	-	-	-	指押さえ・ナテ	-	粗 3mm以下の石英、長石 多、1mm以下の赤色粒子 少	良好	浅黄2.5Y7/3	破片	底部との接合部に 接着痕
315	380	122	55	I区・II区 SR01		瓦質土器 釜	25.9	-	-	横ナテ後ハケ 目・指押さえ	板ナテ	やや粗 3.5mm以下の石 英、長石 多	普通	(内)灰白2.5Y8/2、灰N4/ (外)灰白2.5Y8/1、黄灰 2.5Y6/1、暗灰N3/	口縁部 1/8	
316	274	122		I区・II区 SR01		備前焼 灯明 皿	9.2	1.7	3.6	回転へラ削り	回転ナテ	密 1mm以下の長石 ごく 少	普通	褐灰5YR4/1	完存	内外面にススが薄 く付着
317	291	122		I区・II区 SR01		瀬戸美濃 灯 明皿	10.4	-	-	回転ナテ・回転 へラ削り	回転ナテ	密 0.5mm以下の長石 ごく 少	良好	赤褐10R4/4	口縁部 2/8	
318	265	122		I区・II区 SR01		軟質陶器 土 瓶	-	-	7.1	回転ナテ	回転ナテ	密 1mm以下の長石 ごく 少	良好	橙5YR6/8	底部2/8	軟質陶器・施釉・ 外面にスス付着
319	263	122	55	I区・II区 SR01		土師質土器 羽釜	18.0	(12.7)	-	指押さえ後ナ テ・指押さえ後 横ナテ・ナテ	板ナテ後ナテ	粗 0.5~2mm以下の長石 少	良好	(内)灰N6/ (外)灰白 2.5Y7/1	口縁部 4/8	鋸部下にスス付着
320	264	122		I区・II区 SR01		土師質土器 羽釜	20.5	-	-	摩滅・横ナテ	板ナテ・摩滅	やや粗 1mm以下の石英、 長石 褐色粒子 普通	普通(瓦質)	(内)にぶい黄2.5Y6/3 (外) 黄灰2.5Y5/1	口縁部 1/8	鋸部下にスス付着

第27表 土器観察表(9)

報文 番号	実測 番号	挿図 番号	図版 番号	出土位置	層位	器種	口径	器高	底径	外面	内面	胎土	焼成	色調	残存量	備考
321	292	122		I区・II区 SR01		土師質土器 羽釜	19.4	-	-	横ナテ・指押さ え後板ナテ	指押さえ	やや粗 1mm以下の長石 少、2mm以下の赤色粒子 ごく少	やや不良	灰5Y4/1	口縁部 2/8	鋤部下にスス付着
322	267	122		I区・II区 SR01		土師質土器 羽釜	22.8	-	-	横ナテ・指押さ え後板ナテ	横ナテ・ハケ目	やや粗 2mm以下の長石 ごく少、0.5mm以下の黒色 粒子 ごく少	やや不良	(内)灰5Y4/1 (外)灰黄 2.5Y6/2	口縁部 1/8	口縁部下に穿孔あ り・鋤部下にスス 付着
323	293	122		I区・II区 SR01		瓦質土器 羽 釜	16.8	-	-	横ナテ・指押さ え後板ナテ	板ナテ	やや粗 1mm以下の長石 少	良好(瓦質)	(内)灰白5Y7/1 (外)灰N5/ 1/8	口縁部 1/8	鋤部下にスス付着
324	266	122		I区・II区 SR01		瓦質土器 羽 釜	18.4	-	-	横ナテ後ハケ目 後指押さえ	指押さえ・ハケ 目	やや粗 2mm以下の石英、 長石 普通	普通	灰5Y6/1	口縁部 1/8	鋤部下にスス付着
325	277	122		I区・II区 SR01		瓦質土器 羽 釜	-	-	-	横ナテ	ナテ後指押さえ	やや粗 1mm以下の長石 ごく少	良好	(内)灰N4/ (外)暗灰N3/ 破片	破片	鋤部下にスス付着
326	241	122		I区・II区 SR01		瓦質土器 羽 釜	26.4	-	-	横ナテ	指押さえ後横 ナテ	やや粗 1mm以下の長石 ごく少、0.5mm以下の黒色 粒子 ごく少	普通	灰N6/ 破片	口縁部破 片	鋤と口縁部下に穿 孔あり
327	242	122		I区・II区 SR01		瓦質土器 羽 釜	-	-	-	横ナテ・指押さ え後ナテ	横ナテ・ハケ目 後ナテ	やや粗 1mm以下の石英、 長石 ごく少	良好	灰N5/ 破片	破片	鋤部下にスス付着
328	294	123		I区・II区 SR01		須恵器 甕	-	-	-	ハケ目後ナテ	指押さえ・ハケ 目・ナテ	やや粗 1mm以下の長石 普通、1mm以下の黒色粒 子 ごく少	良好	灰N5/ 破片	破片	
360	236	132		II区北西部 包含層		土師器 杯	11.8	3.8	8.6	横ナテ・底部 糸切り	横ナテ	やや粗 3mm以下の石英、 長石 少	普通	褐7.5YR4/6	口縁部 1/8	
361	194	132	58	II区北西部 包含層		土師器 杯	12.9	4.0	6.8	回転ナテ・底部 へう切り後ナテ	回転ナテ後ナ テ	密 3mm以下の石英、長 石 ごく少、0.5mm以下の 黒色粒子 ごく少	良好	(内)灰N5/、灰白2.5Y8/2 (外)灰N6/、灰白2.5Y8/2	7/8	内外面とも口縁部 下位で幅1~2cm 程度 帯状に黄橙 色を呈する。この 部分以外は全面に カーボンが付着 し、黒灰色を呈す る。
362	196	132		II区北西部 包含層		土師器 杯	-	-	7.6	摩滅	摩滅	やや粗 2mm以下の石英、 長石 少、1mm以下の赤色 粒子 少	普通	(内)灰黄褐10YR6/2 (外)橙 7.5YR6/6	破片	
363	237	132		II区北西部 包含層		土師器 杯	-	2.1	8.2	摩滅	摩滅	密 5mm以下の石英、長石 普通、2mm以下の赤色粒 子 ごく少	普通	浅黄橙10YR8/3	底部2/8	
364	215	132		II区北西部 包含層		土師器 杯	-	-	8.2	摩滅・底部 う切り	摩滅	やや粗 3mm以下の石英、 長石 多、1mm以下の赤色 粒子 少	普通	灰白2.5Y8/2	底部3/8	
365	198	132		II区北西部 包含層		土師器 杯	-	1.6	8.2	摩滅・底部 糸 切り	摩滅	粗 7mm以下の石英、長石 普通、1mm以下の赤色粒 子 ごく少	普通	灰黄褐10YR5/2	底部2/8	
366	234	132		II区北西部 包含層		土師器 杯	-	-	8.2	摩滅	摩滅	密 2mm以下の石英、長 石 少、赤色粒子 少	普通	灰白10YR8/2	底部2/8	
367	214	132		II区北西部 包含層		土師器 杯	-	-	9.4	摩滅・底部 う切り	摩滅	密 1mm以下の石英、長 石、赤色粒子 少	普通	灰白10YR8/2	底部2/8	

第27表 土器観察表(10)